



大南小言集

第三卷

大南北全集

第三巻

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

大南北全集 第三巻

東京 春陽堂刊行

大南北全集　第三巻目次

挿繪目次

挿繪解説

■巻頭を飾つた色刷り木版の濃艶な錦繪は、「心謎解色絲」三幕目、大通寺墓所の場で、お房が蘇生した所である。この頃は初代豊國の筆致未だ墮落せぬ時代であるから、場面は艶ながら一種の氣品がある。味ひが深い。

■「戻橋脊御攝」の中へ入れた錦繪は、三建目の返し、古御所の場、だんまりの舞臺面である。幸四郎の物凄い盗賊、半四郎の美しい蜘蛛の精、團十郎の凜々しい殿様、これ等は化政度のだんまりに現はれる人物の標本で、姿や色彩の配合が歌舞伎劇技巧の極致を盡してある。この場のだんまりは非常に有名なものであつた。「だんまり史」を書けば、特筆さるべき傑作であつた。

■「心謎解色絲」の中へは、コロタイプ版で三種の錦繪を挿入しておいた。いづれも原畫は二枚續きである。一つは左七小絲の濡れ場、一つは返しの雪降り場、この錦繪なぞは實に色彩が面白い。今一つは三幕目の墓所で、巻頭の木版と同じ場面である。筆者は何れも初世豊國である。

■「勝相撲浮名花觸」の中へは、初世豊國の筆として、柳橋の場と、割り下水の場との錦繪二種を收めた。最近本郷座でこの狂言を復活上演する際には、これ等の錦繪が何れも役に立つたのである。

■同じ狂言の中に、見馴れぬ錦繪が一種ある事に氣づかれるであらう。これは珍らしい大阪の錦繪で、長谷川貞信といふ畫師が描いた三枚續きである。天保九年八月大阪中座で、この狂言を上演した時に出來たもので、繪としては悪いが、珍らしいから入れて置く事にした。

■この外、以上の三脚本初演當時の繪番附を全部凸版にとつて、解説の中に入れて置いた。本巻には錦繪が豫定よりも多くなつたので、番附は本文へ共刷りにする事とした。


岩井半四郎


坂東三津五郎
岩井半四郎
豊国画



解說及年表

戻橋脊御攝



以下十二頁迄「戻橋脊御攝」初演繪番附

この狂言は、文化十年十一月、市村座に上演された顔見世狂言で、南北が五十九歳の時の作である。顔見世狂言の事は、第一巻の解說に詳述したから云はないが、南北の筆に油が乘つて、大活躍を始めた頃の作であるから、全篇にその活氣が溢れ切つてゐる。丁度この時、江戸人が江戸役者根生ひの家筋と崇めた市川家七世の團十郎が、初めて座頭になつたので、その事は狂言の中でも盛んに謳つてはあるが、何といつても江戸文化の頂上期、江戸芝居の爛熟時代で、役

者の改名とか名題昇進とかには狂はしいばかりに謳歌後援する頃であつたから、この興行は非常な大入りをしめてゐたところ、十一月二十九日に高砂町からの出火で、中村座と共に市村座も焼けてしまつた。江戸三座のうち、木挽町の森田座は、離れてゐるので殘つたが、丁度同座でも、その年の顔見世には、「御贔屓繋馬」といふ名題で、市村座と同じく「前太平記」の世界の狂言をしてゐたし、その上、市村座から、尾上松緑、關三十郎、市川團之助等の役者も掛持ち出勤してゐた關係さへあつたので、市村座焼失後は、同座の役者は全部森田座に加入し、狂言は「戻橋脊御攝」の重要部分を殘してこれに「御贔屓繋馬」の一部を加へ、「戻橋閏顔鏡」といふ名題に改めて、翌閏十一月七日から興行したところ（この年は閏があつたので、十一月は二度重なつた）これ又非常な大入りであつた。

三建目には、顔見世狂言の吉例に依つて「暫」



が附いてゐる。岩窟の舞臺で、ウケを酒呑童子の姿にしたのは珍らしいとて、大いに受けた。七世市川團十郎は碓井貞光でお家の荒事を演じ、初座頭の貫目を見せた。團十郎この時僅かに二十三歳であつた。四建目、栗の木村の場は、斯種の狂言には珍らしくない、前後と離れた挿話的の一幕であるが、面白いのは、この幕が當時の稗史小說と關係のある事である。幕中、茶屋娘お浦が、護摩の灰に見込まれた



二の瀬の源六から二百兩預かつて、その證據に笄を渡すといふ筋は、同じ文化度に發行された曲亭馬琴作の讀本、「靑砥藤綱摸稜案」で、木曾のお六が貝屋善吉から金を預かつて、代りに櫛を渡すといふ趣向を明らかに借りたものである。また、道具替つて、畚渡しの場、畚で谷へ下りた源六と御厨七郎が爭ふのは、矢張り當時發行された馬琴の小說「四天王剿盜異錄」から思ひ附いた趣向である。戲曲と小說との間に、双方相犯さないといふ不文律が嚴しかつた當時

の江戸文藝界としては、斯ういふ事實は特異の部に屬するのである。

二番目の世話場は「羅生門河岸切り見世の場」といふので、場所は京都の體になつてはゐるが、勿論當時の私娼窟をソツクリ描寫で行つた場面である。顔見世狂言には好んで、この「切り見世」の場が使はれるのは、當時の民衆に受けたからであらう。この中に三日月お仙といふ役がある。これは四世岩井半四郎が始めた型で、有名な役であるが、この狂言では大して活動してゐない。本來なれば大役なのであるが、この時は五世岩井半四郎の子岩井粂三郎が勤めたので役を輕くしてある。さうして、五世半四郎のお綱が粂三郎に、舞臺で三日月お仙の役柄を教へるやうな趣向にしてある。三日月お仙は、岩井家の大切なお家藝なのである。又、團十郎の演じてゐる海老ざこの十といふ役名も度々現はれ、いなせな魚賣りの姿が、市川家特有の一種の型になつてゐたのであ



る。
大切り淨瑠璃としては、半四郎の「山姥」の所作事が附いてゐる。「山姥」の所作事は、寶暦十二年七月市村座上演「織殿軒漏月」を最初として、顔見世狂言には折々演じられ、その度毎に臺本も書き替へられるのであるが、この狂言の「親子連枝鶯」は、近松の「嫗山姥」から、しやべりの趣向を取つて入れ



てあるが面白く、その曲調こそ傳はつてゐないが、現時流行する「市川山姥」と、同一文句が多くある所から見ても、詞曲とも今日の「山姥」の土臺となつた淨瑠璃である事は疑ひもない。殊に山賤が二人出るのは、この曲に限つた趣向で、珍らしい。

「山姥」の前に、頼光と花園姫の、色模様の淨瑠璃を附けてあるが、これは當時の慣習で、「山姥」の前には、必ず斯うした色つぽい場面を添へたものである。「山姥」ばかりを演じないで

六

斯ういふ前曲を添へるのが例だつたのである。なぜさうしたかといふと、「山姥」の所作は配合上、どうしても一日の狂言の大切りに持つて來なければならないが、その場面と扮裝とが、打出し前としては稍色彩の華美を缺くので、その前に派手な場面を一つ附けて變り目を引立たせ、同時に山姥の役者にも美しい役を演じさせて、扮裝の變化に多分の興味を持たせたのである。

役割は左の通りであつた。

髭黒大臣（尾上松緑）又次娘お浦、園生の前實ハ能勢判官娘三崎（二ヤク市川團之助）常俊息女鶴の前、又次娘お栗實ハ鶴の前、池田息女花園姫（三ヤク松本よね三）大江郡領政平（中村歌藏）栗の木又次（澤村金平）伊豫太郎有信、醫者張臂道庵、馬士胴六實ハ瀧夜叉（三ヤク澤村四郎五郎）猪熊入道雷雲、切り見せ女郎お蝶（二ヤク市川栗藏）快童丸（岩井松之助）築島左少辨長連、見世物師善好、路地番喜之助（三ヤク坂東善次）加藤豐後次郎忠正、尊國君實ハ





秦正文、賤の女白梅（三ヤク坂東鶴十郎）物部平太有國、貸し物屋金助（二ヤク嵐新平）丹波太郎鬼住（大谷門三）多田滿仲、武藏五郎興世（二ヤク市川門三郎）東條五郎景道、飛脚よい助（二ヤク桐島儀右衛門）侍女關屋（山下萬作）平常陸介正盛、山鯨の權助（二クャ松本小次郎）河内守賴信、賤の女紅梅（二ヤク吾妻藤藏）御厨七郎俊連、大宅太郎光任（二ヤク關三十郎）賴信弟美女丸實ハ保昌娘小式部、切り見世女郎三日月お仙實ハ純友娘九重姫（二ヤク岩井粂三郎）野伏りつゞれの次郎實ハ藤原保輔、茨木屋鬼の七五郎實ハ伊賀壽太郎、山賤鐵藏實ハ鬼同丸（三ヤク松本幸四郎）田舍娘お岩實ハ將門娘七綾姫、鬼七女房お綱實ハ侍女苫屋、賴光侍女此糸、足柄山の山姥（四ヤク岩井半四郎）碓井荒太郎貞光、二の瀬源六近忠、煙草賣り洒むしのお芳、三田源太廣綱實ハ將軍太郎良門、肴賣り海老ざこの十實ハ渡邊源次綱、源攝津守賴光、山賤斧右衛門實ハ三田仕（七ヤク市川團十郎）

『心謎解色絲』（こゝろのなぞとけたいろいと）

この狂言は、文化七年一月、市村座

に上演された世話狂言で、新春だけに一番目は「春榮松曾我(はるのさかえときはぎそが)」といふ名題の曾我狂言で、二番目へこの狂言が、仕組まれたのである。そして「本町絲屋娘」の書替へ狂言である。書替へ狂言に就いては、別項の「南北の書替へ狂言」に詳述してあるから爰には云はない。

本町絲屋娘といふ詞は、餘程古くからある。南茂樹氏の說に從ふと、本町といふのは大阪だらうといふ事であるが、兎に角、寶永七年の「松の落葉」には、既に絲屋娘を唄つた歌詞が出てゐる所を見ても、淵源は古いに違ひない。併しこれを戲曲に脚色したのは、ズッと後で、寶曆四年の一月、市村座で、「本町絲屋娘」と題し、姉娘お房（瀨川菊次郎）妹娘小絲（中村粂太郎）䋎左七（尾上菊五郎）で演じたのが最初らしく思はれる。



この狂言は、さして評判にもならなかつたが、その後、安永六年一月に至つて、中村座で、壕越二三治、增山金八が合作の「本町育浮名花婿(ほんちやうそだちうきなのはなむこ)」

といふ狂言を演じたが、これは大評判になつて、後の「本町絲屋娘」の世界の土臺になつた。この時の役割は、本町綱五郎（大谷廣次）絲屋婿左七（嵐三五郎）半時九郎兵衛（山下又太郎）姉娘お房（尾上多見藏）妹娘小絲（芳澤いろは）母妙閑（坂東三津五郎）傾城花咲（嵐松之丞）局岩藤（三國富士五郎）山住五平太（坂東津多右衛門）阿野屋十兵衛（澤村長十郎）石塚彌三兵衛（市川團藏）等で、即ち後世屢々使はれる役名がこの時一定したのである。



「本町育浮名花婿」の脚本は傳はつてゐないから、如何なる筋か不明ではあるが、大體は想像が出來るといふのは、この狂言が非常な評判であつたため、これが操り狂言にかけられ、その臺本即ち義太夫は今に傳はり、しかも曲節さへ殘つてゐるからである。「本町育浮名花婿」が大當りだつたといふのは、この義太夫がしかも二種まで出來てゐるので解る。即ち同年三月になると、肥前座では「江戸自慢戀商人（えどじまんこひのあきうど）」と題し

て、友三郎鬼眼合作の義太夫が出來た。と同じ月に外記座の方には、紀上太郎の作で「絲櫻本町育（いとざくらほんちやうそだち）」がかゝつた。兩者の院本は今に傳はり、殊に「絲櫻本町育」の方は活字にまでなつてゐるが、讀み比べて見ると大同小異で、實によく似てゐる所から見ると、兩者とも「本町育浮名花婿」を題材にして、多少の添削をしたに過ぎぬものであらう。であるから筋も解る。役名なぞは勿論同じことである。

この二つの淨瑠璃も、双方負けず劣らずの評判になつた。本町育の筋書に鳥居清經が繪を加へた同題の黄表紙が發行されると、戀商人も同じく清經の繪で黄表紙になつた位である。併し義太夫の節附は本町育の方が優れ、殊に「小石川の段」の節附が妙を極めて、義太夫流行りであつた當時の江戸民衆の口にのぼつたので、遂に本町育の方が勝利を得てしまつた。「絲櫻本町育」といふ同名題で別な内容の脚本まで出來た。義太夫はその後も流行し、「小石川の段」は



曲が今日まで傳はつてゐるのである。この義太夫の流行は、本町絲屋娘の書替へ狂言を盛んにさせた一つの原因でもあらう。戲曲のみでなく、小說にも盛んに作られてゐる。

「心謎解色絲」は、元より書替へ狂言であるから、原作と筋に於て關係は無い。俠客の本町丸綱五郎を、侍ひの本庄綱五郎としたり、絲屋の娘小絲を、藝者の姿に直したり、二枚目の左七を、お祭り左七といふ鳶の者に直したりしてゐる。このうちでも、鳶の者になつたお祭り左七が、俳優の技倆から役名が喧傳されたので、本家の婿左七は人に忘れられ、「お祭り左七」といふ講談まで創作されるほど有名になつた。



この時のお祭り左七に就いては、面白い話が殘つてゐる、それは、尾上松助の左七も好評であつたが、澤村田之助の小絲も非常な出來と賞讚された。元來この二世澤村田之助は、內氣な俳優で、「朝顏日記」の朝顏なぞを最も得意とす

る人であつたから、どちらかといへば傳法な藝者なぞは柄にない役だつたのであるが、この時の小絲は滅法よかつた。そして、凝り性の田之助は、左七に殺されるとき、血綿では情がうつらぬといつて、淺黄縮緬の着附を毎日蘇袍の血でよごし、興行中日々新らしい着附に取替へて出たといふのである。血糊を毒々しく使ふことは、この時代の頽廢した江戸人へ媚びる刺戟的な風習ではあつたが、そのために小袖を毎日着替へるといふ事は前例に無かつたので、非常な評判になつた。その又血糊によごれた小袖を、物好きな藝者達は買ひ求めて、座敷へ着て出るのを見得としたので、評判は一層高くなつたといふのである。



「心謎解色絲」は、南北と、二世櫻田治助との合作脚本である。南北は主としてお房綱五郎の件りを書いた。一旦死んだお房が蘇生して、婚禮の白裝束のまゝ棺桶から出る趣向や、小石川の場でお房とお時を變らせる技巧なぞは、南北

專賣の手法である。この蘇生の件は、後に二世瀨川如皐が小さん金五郎に借りて「盟結艶立額」を作り、小石川の場はソツクリ默阿彌が眞似て、「升鯉瀧白旗」の大詰に使つてゐる。

二幕目、「絲屋の場」が廻つた臺所で、番頭佐五兵衞と丁稚與茂吉が、鮭の頭を枷に階子段で立廻りをする件りがある。讀んだだけでは要領を得ないが、あれは前年の市村座顏見世狂言が「貞操花鳥羽戀塚」卽ち袈裟御前の筋であるから、幸四郎の盛遠と三津五郎の亙が、高雄山神護寺で石段のタテがある。これが非常な評判になつた所から、それをそつくり茶番で行つたのである。「貞操花鳥羽戀塚」は別册に收容するから御參照を願ひたい。



以下十七頁迄「心謎解色絲」初演繪番附

初演の折の役割は左の通りであつた。

鳶の者、お祭り左七（尾上松助後の三世尾上菊五郎）半時九郎兵衞（松本幸四郎）本庄綱五郎（坂東三津五郎）九郎兵衞女房、お時實ハ絲尾娘小絲、絲屋娘お房（二ヤク岩井半四郎）安野屋十兵衞（助高屋

高助、藝者、中根屋お絲（澤村田之助）神原屋左五郎（市川團十郎）蔦の者風の神喜左衞門（尾上松緑）絲屋番頭、佐五兵衞（澤村四郎五郎）山住五平太（市川宗三郎）石塚彌三兵衞（市川門三郎）家主、粟島權兵衞（坂東善次）後家おりの（芳澤いろは）松本女房、お蔦（小佐川七藏）醫者、百川東林（松本小次郎）質屋手代、金六（市川粂藏）廻し男、儀助（澤村次郎三）十兵衞女房、おらい（市川團之助）信濃者、杢助（嵐新平）赤城光若（坂東簑助）乳人、竹川（岩井梅藏）爲追ひ娘、お君（岩井松之助）肴屋、勝（花井才三郎）丁稚、與茂吉（坂東鶴十郎）

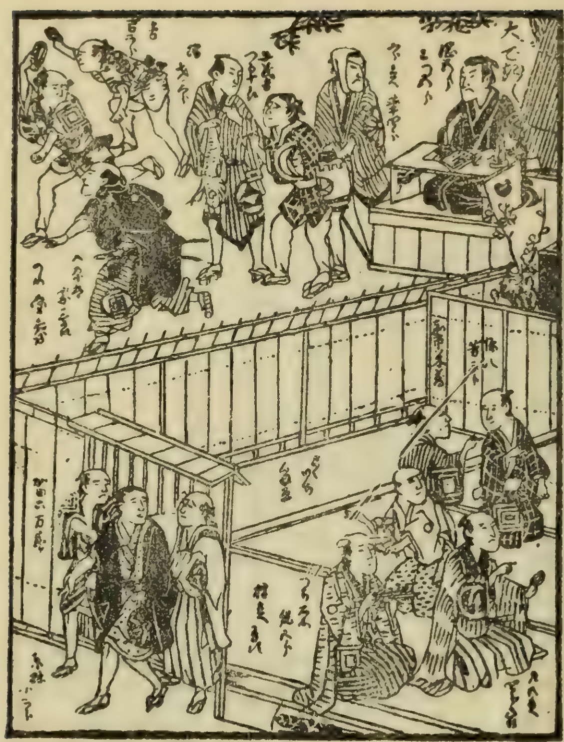
二度目の上演は、文政十二年一月市村座で、名題は「色一座曾我大寄（いろいちざそがのおほよせ）」であつた。役割は佐七（尾上菊五郎この時から佐の字に直つた）綱五郎（坂東三津五郎）十兵衞、髮結ひ仁三郎（ニヤク坂東簑助）おりの、おらい（小佐川常世）竹川（山下龜三郎）儀助（坂東三津右衞門）お房（岩井半四郎）權兵衞（坂東彥左衞門）佐五兵衞（淺尾爲十郎）五平太（山下京四郎）彌三兵衞（藤川八藏）九郎兵衞（澤村四郎五郎）左五郎（尾上松助）お絲（岩井粂三



郎）

この時は、大切「小石川の場」を少し書替へ、風の神喜左衛門と、九郎兵衛女房お時の二役を抹殺し、この代りに髪結ひ仁三郎といふ役を作つて、綱五郎を強請る筋に訂正した。

三度目の上演は、天保十一年一月の河崎原座で、名題は「梅咲若木場曾我」であつた。役割は、



佐七、清兵衛女房お松（ニヤク尾上菊五郎）九郎兵衛、福島屋清兵衛實ハ本庄綱五郎（ニヤク市川海老藏）神原佐五郎（市川九藏）小絲（尾上榮三郎）十兵衛（片岡市藏）おらい（市川鯉之助）お蔦（尾上伊三郎）佐五兵衛（市川三藏）彌三兵衛（市川黒猿）東林（市川箱猿）五平太（尾上菊四郎）

この時は全然お房の件を除去し、佐七の件のみにして、大切に「福島屋清兵衛内の場」といふのを附けた。これは三世並木五瓶が補修したもので、、、絲を殺した佐七は、福島屋清兵衛の内

に隱まはれる。また半時九郎兵衛も爰へ飛び込んで、清兵衛の女房お松に隱まはれる。結局、お松は佐七の舊臣とわかつて、九郎兵衛から色紙を取返すといふやうな筋で、海老藏と菊五郎が、互ひに早替りで勤めた。この場で九郎兵衛が逃げようとする時、お松が晒しをやらうとすると「なんだ晒しだ、緣起でもねえ」それでは三尺をと云ふと「三尺高え木の空、聞いてもゾッとする」最後に引廻し合羽をやらうとすると「なんだ引廻しだ。引廻されてたまるものか」と禁句だらけの臺詞が評判になつたさうである。又この時の初日に、小絲殺しの場で佐七が、型の如く書置を辻行燈で讀まうとしたが、菊五郎は假名がやう／＼讀める程度の知識だつたので、狂言作者が細字で書いた手紙は讀めない。癇癪を起して「誰哉行燈が薄ッくれえや」と出刃で行燈を叩き毀して無理に幕にしてしまつたが、その有樣が眞に迫つて非常によかつたので、翌日から書置は大きな字に直つたが、



矢張り行燈は叩き毀すことにしてしまつたといふ。

四度目の上演は、弘化元年九月の中村座で、名題は「誰噂色菊月」といつた。役割は

佐七（尾上菊五郎）九郎兵衛（松本幸四郎）小絲（岩井半四郎）本町丸綱五郎（市川團十郎）佐五郎、十兵衛（二ヤク市川九藏）おらい（岩井松之助）お蔦（岩井辰之助）彌三兵衛（嵐猪三郎）五平太（中山現十郎）佐五兵衛（中村鶴藏）儀助（市川宗三郎）東林（市川森五郎）



この時は序幕へ新たに本町丸綱五郎といふ役を設け、これと九郎兵衛が喧嘩の中へ、佐七が留めに入る趣向に直した。そして、小絲殺しで終ひにしたから、二幕で濟んでしまつた。昔も脚本のカットは盛んに行はれてゐたのである。

五度目の上演は、明治四年一月の中村座で、名題は「本調絲音色」であつた。役割は、

佐七（五世尾上菊五郎）小絲（三世澤村田之助）九郎兵衛、十兵衛（二ヤク坂東彦三郎）綱五郎（中村

壽三郎）佐五郎（尾上芙雀）彌三兵衞（坂東龜藏）おらい（市川門之助）お蔦（嵐榮三郎）五平太（中村仲太郎）東林（坂東薪左衞門）佐五兵衞（中村相藏）儀助（尾上梅五郎現今の尾上松助）

五世尾上菊五郎が、祖父の三代目張りで見せたのであつたが、どういふ譯か非常な不評であつたので大芝居ではこれぎり上演されなくなつてしまつた。小芝居では、それでも最近まで上演してゐた。

明治三十一年五月になると「江戸育御祭佐七（えどそだちおまつりさしち）」といふ三世河竹新七の作が歌舞伎座に上場され五世尾上菊五郎が佐七を勤めた。これが今日行はれるお祭り佐七である。小絲の緣切り、喧嘩かぶりの殺しの姿、小絲の長襦袢姿等を原作に似せた外は、全く新作であるが、歌舞伎劇としての味はひは可成り稀薄になつてゐる。

『勝相撲浮名花觸（かちずまふうきなのはなぶれ）』

これは文化七年三月の市村座に上演された世



以下二十三頁迄「勝相撲浮名花觸」初演繪番附

話狂言で、即ち前の「心謎解色絲」の次狂言である。一番目は「樓門五三桐」で、幸四郎の五右衛門に三津之助は高景一役だつたので、二番目にこの新作を附けて、三津五郎半四郎を中心に、幸四郎をワキへ働らかしたのである。

本篇は白藤源太とお俊の情話、即ち「河原の達引」の世界の書替へ狂言である。お俊傳兵衛の名が戯



曲に現はれたのは、いつの頃よりであるか判然せぬが、例の爲永宗輔の「近頃河原の達引」は、お俊傳兵衛の開祖とも思はれるが、この淨瑠璃は今日では天明五年五月の作といふ事になつてゐるけれども、疑はしい點があり、天明二年の春には市村座で、既にお俊傳兵衛の狂言も上場されてゐる。白藤源太といふ名も、天明三年春の中村座に見えてゐる。これは今も曲が殘つてゐる。富木の「花川戸身替の段」で、市川門之助が力士白藤源太を勤めてゐるが、白藤は當時

の名力士小野川喜三郎に擬した役だつたさうである。その後も源太お俊の書替へは度々上場されたが、この「勝相撲浮名花觸」が出來てからは、これが有名になつたので、以後新らしい書替へ狂言は出なくなつた。

この狂言の主人公は、無論白藤源太であるが、南北は寧ろ足駄の齒入れ權助に力を入れて書いてゐる。幸四郎獨得の役で、これが評判になつて大入りをしたのである。以後、數回復演はされてゐるが、いつも權助の役者を中心にして上演したやうである。一體南北は、深川に住んでゐた所爲か、本所邊を好んで作中へ使ふ。岩淵といふのは何處であるか知らぬが、外の作にも度々出てくると權助といふ名も南北は好きだつたと見えて、いろ〳〵な狂言にいろ〳〵な役柄で利用してゐる。それだけ、この岩淵の齒入れ屋權助といふ人物は、南北が會心の役だつたのであらう。



初演の折の役割は左の通りであつた。

角力取り、白藤源太（坂東三津五郎）藝者、お俊（岩井半四郎）足駄商入れ　岩淵の權助、坂間傳兵衛（ニヤク松本幸四郎）津川勝次郎（市川團十郎）津川主水（尾上松助）云ひ號け、お澤（小佐川七藏）姉、お富（山下萬作）潮田伴之進（澤村四郎五郎）權助女房、おとり（市川宗三郎）母、おかや（市川門三郎）若徒、左五平（市川栗藏）大のしの富八（花井才三郎）



第二回の上演は、文政四年五月、京都北側の芝居へ、三津五郎半四郎幸四郎の三優が上つて行つたとき、この狂言を出した。三優の持ち役は初演通りであつたが、その外は今不明である。

この時も非常な評判だつたので、京阪人の間にこの狂言の話が殘り、天保九年八月の大阪中座では「紅筆戀取組（べにふでこひのとりくみ）」といふ名題でこの狂言を上場した。角書には「仇なとしのちらし書、いとしとかけた謎々に、角力とらせて白藤源太」

とあつた。役割は、白藤源太（三桝源之助）藝子どし（中村富十郎）梶の長兵衛（淺尾與六）で、お俊おどし權助を長兵衛と、役名を變更したのは、その方が大阪人の耳に馴染みのある爲である。

江戸での第二回上演は、天保五年五月の森田座で、名題は「花菖蒲浮名顔觸（はなしやうぶうきなのかほぶれ）」と改め、源太とお俊は何れも初演俳優の息子が勤めた。權助だけは初演通り幸四郎が、後見格で勤めてゐた。役割は

源太（四世坂東三津五郎）お俊（六世岩井半四郎）權助（五世松本幸四郎）傳兵衛（關三十郎）お澤（嵐龜之丞）伴之進（大谷友右衛門）佐五平（澤村四郎五郎）おとり（惣領甚六）勝次郎（淺尾一友）お富（關三之助）主水（嵐七五郎）

大切、道行の富本は「二世三世角力盟（にせさんせすまふめうり）」といふ名題に變つた。

三度目の上演は、弘化二年一月の市村座で、大名題は「曾我風流家春駒（そがふうりうかれいのはるこま）」。道行は「戀綾瀬流派（こひのあやせながれのみつまた）」といふ常磐津にして、文句も大分增補した。こ



の時の役割は、

源太（十二世市村羽左衛門）お俊（坂東しうか）權助（六世松本幸四郎）傳兵衛（坂東三津五郎）お澤（岩井杜若）おかや（片岡市藏）伴之進（中村芝十郎）おとり（尾上菊四郎）主水（淺尾工左衛門）勝次郎（松本小次郎）お富（尾上民三郎）



これぎり打絶えてゐたのを、大正十四年二月本郷座で、大南北研究を看板に、久し振りで復活上演された。道行は初演と同じ名題で、清元に改調した。役割は

源太（實川延若）お俊（市川松蔦）權助（市川左團次）傳兵衛、おとり（ニヤク澤村源之助）勝次郎、主水（ニヤク市川壽美藏）伴之進（市川荒次郎）おかや（中村竹若）

渥美清太郎識

南北の『書替へ』狂言

むかしは、「書替ハ狂言」が、芝居に大變流行つた。文化文政度に一番多かつた。そして、その流行らした親玉といふのは、大南北、卽ち鶴屋南北だつた。

「書替へ」卽ち「改作」といふ事であるが、今日でいふ改作とは、いくらか意味が違つてゐる。

狂言作者が、或る戯曲を創作する。それを上演するに當つて、篇中の役名は、勝手に附けるのが當然だが、附けない。事實から材を得たものでも、事實の名を使はない。全く架空から絞り出したものでも、架空な役名を與へない。どうするかといふと、或る有名な戯曲から、役名だけ拾ひ出して來て、これを新作の役柄にあてはめて、適當に名を附ける。南北あたりの採つた手法の十中八九はこれである。結局、役名を借りてくるだ

大正十四年二月本郷座上演「勝相撲浮名花觸」大詰の舞臺面



けの事なのだ。これを、彼れ等の術語で「世界を借りる」といふ。そして、Aの世界を借りた新狂言を、Aの「書替へ狂言」と稱したのである。

勿論、例外はある。「四谷怪談」は、忠臣藏の世界を借りて來たから、佐藤與茂七や直助權兵衞といふ名が出てくる。併し、お岩や伊右衞門といふ役は、南北が附けたのである。南北以前にお岩や伊右衞門は無い。史實の有無は別にしても、これ等の役名は南北の創作だ。また、小幡小平次といふ役は、南北の脚本に初めて現はれる。南北以前、小幡小平次は芝居國に存在しない。これも南北の創作である。新狂言の全部が書替へ狂言であるといふのでは決してない。只、大部分がそれなのである。

昔の歌舞伎道には、今から考へると、譯のわからぬ事が隨分澤山ある。この、「書替へ」といふ事も、わからない中の一つである。

文化七年の春の宵、或る風鈴蕎麥屋の惡黨が、大きな商家の娘を誘拐し、縊り殺して金を盜んだ。その惡黨は忽ち捕へられた。江戸中の大評判になつた。南北は早速この三面記事を、一日の通し狂言に作りあげた。さて、例の如く世界を借りて來なければならない。南北は、その惡黨を、駕籠屋の甚兵衞と附けた。殺される娘を、山崎屋の娘お照と附けた。甚兵衞とお照、これは出雲の「双蝶々曲輪日記」にある名前だ。南北は世界を「双蝶々」から借りて來たのだ。そこで、南方十次兵衞とかいふ役名が脚本の中

に生れて來た。名題も「當穐八幡祭」となつた。八幡といふのも、「双蝶々」の「八幡場」から來てゐるのである。

なぜ南北は、甚兵衛だの、お照だのといふ名を附けたのか。なぜ「双蝶々」の世界なぞを借りて來たのか。甚兵衛が頓兵衛でも八兵衛でも一向に構はないわけだ。お照がお花にならうがお梅にならうが、劇的效果に何の影響もありはしない。何も苦しんで紛らはしい同じやうな役名を使つたのだらう。

この時には薄弱ながら、たつた一つの理由があつた。

風鈴蕎麥屋の惡黨は、友達の駕籠屋へ、その娘を連れ込んで殺したのだつた。駕籠屋といふ事が世間の人に强い印象を殘してゐた。南北は駕籠屋を使ひたかつた。駕籠といふと、まづ甚兵衛といふ名が響く。「双蝶々曲輪日記」の駕籠屋の甚兵衛が、見物の頭に浸み込んでゐるからである。「双蝶々」では、ほんのワキ役の親仁である甚兵衛といふ役を、こんな都合から南北は、重要な敵役として扱ふことに決めた。そこで世界は「双蝶々」を借りる事になつた。その餘の役は、みんな双蝶々の役名を附けられた。卽ち、若旦那は山崎屋與五郎であり、その戀女の藝者は吾妻であり、實惡は倉岡丈左衛門である。「双蝶々」の世界は、單に駕籠屋を使ひたい爲から、引張り出されて來たのである。

「書替へ」狂言といふのは、見物の頭に浸み込んでゐる慣習的の意識を利用して、或る事を暗示したい

必要から生れるものである。

今云つた「當穐八幡祭」がそれである。頗る貧弱ではあるが、これなぞは「書替へ」狂言の存在を認めさせる理由の一つだ。

これは南北ではない、西澤一凰の話であるが、天保の或る年、例の仙石騒動が起つた。これを芝居に脚色したい。勿論當時の其筋と雖もそれは許可しない。そこで世界を「戀女房」から借りて來た。「戀女房染分手綱」には、鷺坂左内といふ役がある。仙石騒動の大立者は仙石左京である。左内と左京、似た名を利用し、鷺坂左内を立敵に使つて、その外の役には何れも「戀女房」の世界の役名を附けて、爰に「けいせい繦幕湯」といふ仙石騒動の狂言が出來上つた。單に、左内といふ名を使ひたい爲から、世界は「戀女房」と定まつたのだ。前と同じ理由の例である。

文化の末頃、品川の女郎でありながら、日野中納言といふ公卿の息女だと名乗る、お琴といふ女が現はれて、裁判沙汰になつた珍事件があつた。それがひどく江戸の評判になつた。南北の熊鷹眼から、この事件が遁れる譯がない。忽ちこれを種に出來上つた狂言が、文化十四年三月に河原崎座の舞臺へかけられた、「櫻姫東文章」である。日野中納言の息女お琴を脚色したい爲に、南北は「清玄櫻姫」の世界を借りて來た。お琴は、「吉田の少將惟房の息女櫻姫、後に千住の女郎風鈴お姫」といふ役名で發表された。

目千兩といふ美貌の五代目半四郎が其役に扮して素晴らしい喝采を得た。品川の女郎事件は餘計江戸人の口にのぼるやうになつた。

斯ういふ風な、三面記事なぞを脚色した場合可なり嚴重な當時の其筋の目をくゞりながら、しかも事實の筋と似通つた世界を選ぶ事に於て、書替へ狂言の必要だつた事も亦認められる。

入谷田圃に女殺しがあつた。南北はこれを早速脚色した。文化八年七月、市村座上演の「謎帶一寸德兵衞」がそれだ。最近、左團次や延若が復活させた狂言だから、どなたも御存じであらう。御家人の大島團七、女房お梶、德兵衞、お辰――則ち「夏祭の世界」を借りて來たのだ。世界を「夏祭」にした理由は、田圃の人殺し、といふ情景が、南北に「夏祭浪花鑑」の長町裏殺しを思ひ出させ、同時に見物にも聯想を助けさせる爲に過ぎない。

斯うした、際物を脚色する場合には、兎に角「書替へ」狂言にするのも尤もだとは思はれる。然し、大部分は際物ではないのだ。無意味の他の世界の役名を借りて來たものが多いのだからわからない。

併し、書替へ狂言の抑々の初めは、矢張り際物を脚色する必要から起つたのであらう。それが屢々行はれ續けると、見物の方にもその習慣が浸み込んでしまつて、新狂言でも、耳馴れない新らしい役名よりは、馴染みの深い役名を舞臺で呼ばれる方が、心持ちがよくなつたのであらう。更に進んではそれで

無くては氣が濟まなくなつたのであらう。そして、しまひには、今度の何々の書替へ狂言には、何の役を、どういふ風な役柄に替へてあるかといふやうな、變態的な興味を持つやうになつたので、作者も圖に乘つて、必要でもない書替へ狂言を、無暗と發表するやうになつたのだ、と思はれる。さうとでも推測するより外に仕様はない。

役者の註文で、書替へを餘儀なくされる場合もあつたかは知れない。

たとへば、いつもの「梅の由兵衞」の長吉は女形のやる優しい役だが、あれを一つ、表は優形の丁稚にして、實は敵役といふ、前髪の惡黨をやつて見たいから、是非書いて下さい――今度は不破伴左衞門を盲目の白髪にしてやつて見たい、一つ書き直して下さい――といふ風に、役者から希望が出たとすると、作者は早速執筆しなければならない。そこで、梅由の書替へなり、不破名古屋の書替へなりの一篇が出來上る。化政度の役者にさういふ註文を出す人は隨分あつたから、この順序で書替へ狂言の出來上る事も度々あつたらうと思はれる。尤も南北の全盛時代は、一人で江戸劇壇を脊負つて立つてゐる力を認められても居たから、役者の註文を無條件に呑み込んで、云ひなり次第の狂言を書く程でもなかつたらうが、役者の勢力も可なりに强かつた時代だから、南北の書替へ狂言の中にも、役者の註文で書いた物が屹度あるに違ひない。

南北の書替へ狂言を並べて見ると、流石にこの人らしい、面白い所や滑稽な點がいくらも出てくる。

南北は「双蝶々」の書替へ狂言を四つ書いてゐる。

「春商戀山崎」（文化五年一月、市村座）では、主人公が八幡屋與次兵衛といふ町人になつてゐる。原作の「双蝶々曲輪日記」では、濡髪長五郎、放駒長吉の二人が先づ中心人物であらうが、南北はさういふものは蹴散らかして、原作では吝嗇な親仁である與次兵衛といふ名を持つて來て、シテ役に据ゑてしまつた。原作に氣兼ねなんかせずに、ピシ／＼と自由に名を附ける所が南北らしくつて面白い。それは、いくら原作では中心人物でも、南北が創作した新狂言の主人公には、長五郎といふ名も長吉といふ名も、ふさはしくなかつたのだ。見渡したところ、原作では親仁であつても、與次兵衛といふ名が一番適當だと思はれたので、南北はそれを主人公の名に極めてしまつたのだ。與次兵衛は今は町人であるが、以前は山崎與五郎の若黨、進藤徳次郎だ。與五郎が、お家の重寶放駒の香合を紛失し、詮議のため町家へ下つたので自分も共に町人になるといふ、お定まりの筋であるが、天明時代の盜賊だつた、進藤徳次郎といふ名前を、無造作に持つて來て附けた所が、いかにも南北の呑氣さを發揮してゐて面白い。

與次兵衛の探してゐる香合を、盜んで持つてゐるのが、引窓與兵衛といふ泥坊である。原作の與兵衛は勿論立役で、例の「引窓の幕」で活躍するが、その引窓から思ひついたのであらう。それを肩書にし

た悪黨に變へてしまつた。この悪黨は南北から獨得の「悪」を與へられた役で、極端にその憎ッ振りを發揮して最後に與次兵衛に殺されて死んでしまふ。演じた役者は鼻の高い松本幸四郎である。幸四郎は、南北が好んで書く悪黨を、最も巧みに演じる事の出來た人だつた。引窓與兵衛の役は、幸四郎が生涯の傑作の一に數へられて、後世までも喧傳された。江戸の好劇家は原作の南與兵衛よりも、引窓與兵衛の方をよく知つてゐる。その名を利用して、圓朝が「三人與兵衛」といふ人情噺を書いた位である。

原作では大活躍の長五郎長吉も、この狂言では南北に虐待されてゐる。長五郎は金神長五郎といふ名で蔦の者にされ、長吉は鷲の長吉といふ名の船頭に變へられ、共に端役で僅かしか顔を出さない。その代りに、濡髪の肩書を持つた小靜といふ女伊達と、放駒の肩書を持つた四郎兵衛といふ俠客が出て活躍する。濡髪小靜に放駒四郎兵衛、肩書を利用して、斯ういふ有名な役を引き出す趣向も、南北らしい枯れたやり方だ。

「春商戀山崎」で安く扱はれた代りに「蝶鵆山崎踊」(文政二年七月、中村座)では、長五郎長吉は對等の立派な主人公になつてゐる。二人は元が菊池家の小姓といふので、最初に美しい侍ひ姿に深編笠の形で、鞘當のやうな立廻りを見せておいて、すぐに二人ともいなせな蔦の者の姿に變る。型の如く紛失の寶物の詮議で、二人は町人に身をやつしてゐる筋である。五幕の間、寶物の奪ひ合ひで、複雜極まる筋

が次から次へと開展してゆくが、結局二人は双兒とわかつて仇討になる。爭ひを續けた二人が、後に和解になるのは、これを演じる團十郎菊五郎が、長年の喧嘩をこの時和解したのを、當て込んだものだ。南北は長五郎長吉を、侍ひに出世させてしまつた。出世したのは二人ばかりではない、「双蝶々曲輪日記」の米屋の場で、ほんの端役に出る、野手の三に下駄の市といふ遊び人を、百姓野手の三作、中間下駄の市助といふ、重要な役に引き直して、團十郎菊五郎に勤めさせた。原作ではほんの名前が出るか出ないの端役でも、素晴らしい大役に化けて、目覺ましい働きをする事が、南北の書替へ狂言にはよくある。

原作では駕籠屋の親仁甚兵衛、この狂言でも、駕籠屋の親仁甚兵衛で、これが大事な狂言廻しの役になつてゐる。南北ばかりでなく、どの作者でも、双蝶々の世界を借りる時は、年の若い若くないの違ひはあるが、甚兵衛だけは必ず商賣を駕籠屋にしておく。つまり双蝶々の書替へ狂言には、駕籠屋が必ず出る譯だ。そして、駕籠屋甚兵衛內の場は、その狂言中の愁嘆場と極つてゐる。しかも道具に、「引窓」をきつと使ふ。これは勿論原作のお名殘である。たしかに「双蝶々曲輪日記」の書替へでございますといふ證據に、原作に義理を立てゝその俤を殘しておくのである。どんな作者でも、「双蝶々」を書替へる時は、必ず「引窓」の件だけ、趣向は種々と變へても殘しておく。默阿彌の「雪駄直しの長五郎」は、矢張り

「双蝶々」の書替へだが、熊坂お長の隠れ家の場で、小手柄半次を殺す所に巧く引窓の使つてあるやうなものである。

斯ういふ義理立ては、書替へ狂言には原則として必ず守られてゐる。つまり一二ケ所に、原作の形を留めておく事である。「夏祭」の書替へには、長町裏に似やたうな舞臺で人殺しがあり向うを屹度花車が通る。「權八小紫」の書替へには、鈴ケ森が附き物で、「累」の書替へには、土橋の殺しが無くてはならぬやうなものだ。この義理立てが書替へ狂言の特徴で、また作者は、この義理立ての趣向を目新らしく使はうとして苦心したものなのである。

前に云つた「當穐八幡祭」になると、今度は長五郎長吉がひどい端役に廻り、駕籠屋の甚兵衛が中心の役になつてゐる。甚兵衛は惡黨ではあるが、主筋の山崎屋與五郎のため、金の工面に困つた末が、お照といふ娘を拐はかして殺し、持つてゐた金を盗んだが、お照は與五郎の許嫁であつた事がわかるので、悔悟して自殺するといふ大役、それも親仁ではない。若い役で、矢張り鼻の高い幸四郎が大當てに當てたものである。「春商戀山崎」では、引窓と肩書の附いた與兵衛も、この狂言では南與兵衛といふ侍ひの立役に戻つて、兄の南方十次兵衛の身替り、切腹する。原作では同一の人物である與兵衛と十次兵衛を、兄弟にした所なぞに、南北の巧い書替へ振りが見える。

「蝶々孖梅菊」(文政十一年一月、河原崎座)では、長五郎長吉を双子にして、三代目の菊五郎に早變りで勤めさせてゐる。長吉は引窓小僧といふ泥坊で、長五郎は濡髪と仇名の髪結ひである。長吉の盜んだ放駒の香合を、長五郎が頻りに詮議してゐる。二人の親の駕籠屋甚兵衞の懺悔で、萬事は解決するといつた筋である。「當穐八幡祭」で侍ひだつた南與兵衞は、この狂言では駕籠屋の手傳ひに成り下りいつも若旦那ときまつてゐる與五郎が、これでは八幡山與五郎といふ相撲になつてゐるのも面白い。

もう一つ面白い事がある。當り外さぬ南北の新作も、この狂言だけはひどい不入りだつた。それは芝居が面白くないのではなくて、開演中に菊五郎が、見物の一人と喧嘩したのが原因で人氣を失つてしまつたのだ。そこでこの狂言は撤回し、代りに本物の「双蝶々曲輪日記」を出した。その時は菊五郎が退座したので、この双蝶々が利いて、今度は大入りだつたといふ話である。てもなく書替へ狂言が原作に敗けた事になる。斯うなると南北も往生である。

南北は「權八小紫」の書替へ狂言を五つ書いてゐる。

第一は「靈驗曾我籬」(文化六年四月、市村座)といふので、これは寧ろ原作といつてもいゝ。今日の鈴ケ森は、この時初めて完成されたものだし、俎板の長兵衞もこの狂言が初めてゞあり、そのほかの筋も大體この頃のと變りはない。第二の「浮世柄比翼稻妻」(文政六年三月、市村座)も、鈴ケ森がそつくり有

り、俎板の長兵衛も附いてゐるが、只、汐入堤の彌市といふ新らしい幕が附加されて、今に殘つた。第三の「松梅鶯曾我」(文政五年一月、河原崎座)になると大分變つてくる。白井權八が鈴ケ森で網乘り物を破つたり、小紫が早桶の中から出たりする上に、もう一幕、平井村の百姓權八といふ役が現はれて白井權八と名前の間違ひから葛藤が起るといふ筋が附いてゐる。おまけに累與右衛門まで混入されてあつて、頗る複雜した仕組みである。それが第四の「御國入曾我中村」(文政八年一月、中村座)となると、一層混亂してくる。權八は笹野權三と双子の兄弟であるのを知らずに、二人は始終寶物を枷に爭つてゐる。權八が女の姿をして吉原へゆき、三浦屋の小紫に變るかと思へば、八重梅が男の姿をして權八の身替りになる。しまひには權三權八が双子と判つて、共力して親の敵を討つといふ筋である。第五の「獨道中五十三驛」(文政十一年六月、河原崎座)になると更に奇拔だ。權八はいきなり磔柱にかゝつたまゝで現はれる。それが、二十四刻たつて天水が咽喉に通つたといふので蘇生する所から始まるのだ。木鼠の次郎吉といふ泥坊が、女を殺して逃げようとするのを、磔柱の上から呼び留めて、ちよつと鈴森ケの常込みになり、後に次郎吉が切腹した血汐で、權八の金瘡が治し、寶物を取り得るといふ仕組みである。

「双蝶々」の世界と「權八小紫」の世界とを比べて見ると、同じ書替へ狂言でも、そこに相違のある事がわかる。「双蝶々」の書替へは、只單に役名を借りてくるばかりで、その使ひ方は頗る自由であるが、

「權八小紫」の書替へは、幾らか窮屈になつてゐる。卽ち、白井權八といふ主人公は、どの狂言でも同じ前髮の美しい侍ひで、人殺しの罪から世を狹める役になつてゐる。五つとも同じ事である。權八は「双蝶々」の書替へのやうに、髮結ひになつたり、鳶の者に化けたりしない。筋だけは變つても、役柄に變化はない。幡隨院長兵衞は、矢張りいつまで經つても同じく俠客である。小紫は、いつまで經つても、同じく吉原の遊女である。

つまり、「双蝶々」や「夏祭」の世界は、筋が中心で、役名は從であり、「權八小紫」の世界なぞは、役柄が中心で、そこから筋が生れてくるだけの相違である。前者が、歌舞伎道でいふ本當の「書替へ」狂言なので、後者は、所謂る改作である。奔放自在な、大膽な趣向を立てる鶴屋南北は、勿論本當の「書替へ」狂言の方が得意だつた。評判記は折々「ほんにこの狂言はよく書替へた事ぢや」と南北を褒めてゐる。

南北の作の大部分は、書替へ狂言だといつていゝ。さうして、南北のすぐれた點は、要するにその書替へ振りの、巧みさにあるといつてもいゝ。

（渥美淸太郎識――「早稻田文學」大正十三年十月號所載）

戻橋背御攝

もどりばしせなにごひゐき

戻橋脊御攝

第壹番目　三立目

諸羽社の場
しばらくの場
花山古御所の場

役名。――碓井貞光。將軍太郎良門。伊豫太郎有信。袴垂保輔。髭黑ノ左大將、藤原道包。多田滿仲。河内冠者、賴信。右少辨、長連。猪熊入道雷雲。三郎勝俊實ハ樋爪九郎國連。常陸介正盛。壬生ノ五郎乂。鬼住山平實ハ辻風さぶ六。賴信家來、成春。舍人、當作。常俊悴、藤若。仲光悴、宇佐次郎。加藤豐後次郎忠正。二ノ瀨近忠妹、深雪。仲光女房、關屋。卜部季武妹、照葉。豐田小文次妹、初瀨。常俊妹、鶴の前。蜘蛛の精靈實ハ將門娘、七綾姬。

本舞臺、三間の間、朱塗りの廻廊、上下紅葉の立ち樹、一面に紅葉の吊り枝、上の方御手洗、側に建て札。下の方立ち樹、後に振出し、眞中に曳き捨てし御所車、すべて諸羽の社、神垣の模樣よろしく、こゝに瀧夜叉、つかみ立て前髮、廣袖やつし、黑股引、手ッ甲、丸ぐけにて、袋入りの劍を持ち、立ち身。これを三郎勝俊、上下、剃り立て、衣裳大小にて、袴の股立ちを取り、右の劍を引合

ひ居る。上の方に女仕丁三人、いづれも着流しの上へ、白張、肩を引つ掛けたる形にて取卷き、下の方に捻切り奴四人、取卷き居る。この見得、幕のうち、バタ〳〵。「アリヤ」〳〵の聲勇ましく、早神樂にて幕明く。

皆々　どつこい。

女一　この神垣も髭黑の、御所と唱ふる諸羽の社。

女二　殊にお勅使樣のお入りといひ

女三　斯くわたしらが、尊敬いたす神の庭、怪しき出立の其をのこ。

勝俊　御主君賴光公、やまうの難を避けん爲、當神前に納め置く、源家重寶蜘蛛切りの一腰、盜んで駈け出す向う面、三郎勝俊の目にかゝつたる上からは

奴一　御劍渡して

奴四　繩にかゝれ。

瀧夜　へゝ、甘口にも並べたな。聊か望みあるゆゑに、向ひ町から遙々と、忍び今度の顔見世に、出世の蔓と物した劍、うぬらに渡していゝものか。邪魔だてせずと速かに、道おッ開いて通すまいか。

勝俊　小癪な一言、一腰渡せ。

瀧夜　その廣言を。

勝俊　渡せ。

瀧夜　そこ退け。

勝俊　エヽ、面倒な。ソレ。

ト早めたる大拍子になり、奴四人かゝる。瀧夜叉ちよつと立廻り、奴等を一々毆りのける。これにて四人下座へ逃げこむ。勝俊、刀を拔いて切り附ける。兩人立廻り。瀧夜叉、勝俊を當て、劍を持つて花道へ入る。勝俊、心附き、こなしあつて

おのれ曲者、いづくまでも。

ト早神樂にて、瀧夜叉を追つて向うへ入る。かすめたる大拍子にて、三人思ひ入れ。

女一　ほんにマア、油斷のならぬあの曲者。それはさうとお二人さん、あの髭黒の左大將樣が、この岩倉に閉ぢ籠り、明神樣の庭先へ、假の內裏と唱へ、しかも、今日は周の正月とやら、日もよいゆゑに位に昇るとは、ありやマア、謀叛とやらぢやないかいなア。

女二　知れた事いなア。日頃から我儘もの、京內の女子を捕へて來て、此やうなあられぬ形。(ト側にある竹熊手を取つて)高砂の尉を見たやうな、箒、熊手の朝清めも、ほつとするではござんせぬか。

女三　オヽ、また其やうな事言うて、お目玉を貰はぬやうにさんせ。そして、今日はまた頼信様の御参詣、お勅使様のお入りといひ、必ず粗相をせぬやうに、氣を附けなさんせいなア。

女一　それ〳〵、心附けるにしくはないなア。（ト向うを見て）アレ〳〵、向うへ見えるは、噂のある萬歳ぢやござんせぬか。

女三　オヽ、ほんに、それでござんす。早うこゝへ呼ばうぢやござんせぬか。

女二　それがようござんせうわいなア。

三人　オヽイ〳〵。

ト出の鳴り物になり、花道より宇佐次郎、着流し、蔓柏の紋附いたる素袍の上を着、萬歳烏帽子をかぶり、中啓を持ち、後より藤若、袖なし羽織、白股引、才若のこしらへ。淺黄頭巾の上へ懸け烏帽子を着て、鼓を持ち、出て來り、兩人直に本舞臺へ來て

宇佐　徳若に御萬歳とは、市村の芝居も榮えてましんます。

藤若　御免の受けて才若と、ちよつと出船寶船。

宇佐　帆も十分に顔見世の、替らぬ未熟を皆様へ

藤若　とも〳〵願ふ神の庭、愛敬を新玉の

宇佐　年立ちかへる朝より

藤若　寳の風がふきや町。

宇佐　誠にめでたう

兩人　さむらひける。

トこれより地へ取り、兩人所作あつて、「目出たけれ」と納まる。向うにて

當作　下がれ〳〵。

トてんつゝになり、花道より當作、白張の上ばかり、六尺棒を持ち出て來る。後より壬生の五郎又、縕袍、山岡頭巾、苧の脚絆をはき、花盗人の形、紅梅の枝へ壬生の面を附け、出て來る。後より深雪、やつしの形、手甲、脚絆、草鞋がけにて、梅の花を挿したる藁苞を脊負ひ、女菅笠を持ち出て、花道にて

當作　ヤイ〳〵、こいつらは、これ程下がれと云ふに聞き入れず通るが、コリヤヤイ、爰を何處だと思ふ。諸羽の社とばかり思つたら當てが違ふぞ。今日よりは髭黑公の御所だ。見苦しいざまをして、通すことはならぬぞ。

五郎　エヽ、やかましいわえ。かす舍人め。

當作　なんと。
五郎　今こそ壬生の五郎又といつて、かういう形になつてはゐれど、以前は樋爪の九郎國連といふ大名だ。下がれ／＼と追ひ下げられて、下がるものか。正盛どのに逢はぬうちは歸らぬ。構ふ事はない、通せ／＼。
深雪　ハイ、私しも、今日この處へ賴信樣がお入りと承はりまして、お目にかゝらねばならぬ事がござりまして、やう／＼と參りました者。お通しなされて下さりませ。
當作　イヽヤ、ならぬ。お二人共に御大身、ナニ、わいらがやうな者に御用があるものだ。通る事はならぬ。きり／＼下がれ／＼。（ト立ちかゝる。）
五郎　イヤ、どうあつても、上がる／＼。
深雪　さうぢや、上がりませう／＼。
當作　エヽ、下がれといふに。下がれ／＼／＼。

ト三人ぜりあひながら、舞臺へ押して來る。女形三人立ちかゝり

三人　騷がしい。こりや何事ぢやぞいな。
當作　只今お鳥居先に相詰め居つたら、この二人の者が、見苦しいざまをして、たつて推參いたします

ゆゑ、通すことはならぬと、それゆゑの儀でござります。

女一　女は格別、見れば怪しき賤の男が

女二　樣子は知らねど取分けて、清めに清むるこの神垣。

女三　お勅使樣のお入りといひ、この場へは叶ふまいわいな。

當作　あれ聞いたか。お大名の妹御でさへ、あの通りに衞士のお役目。ましてわいらがやうな匹夫下賤、この處へは叶はない〳〵。サア〳〵、きり〳〵立ちやアがれ〳〵〳〵。

五郎　イヽヤ、どうあつても、正盛どのに逢はにやアならねえ。

深雪　ソレ〳〵、賴信樣に。

ト行きかゝる二人を、當作引退ける立廻り。五郎又、懷中より密書を落す。深雪これを見て取上げ

正盛どのへ、袴垂

五郎　それを。（ト引ツたくつて懷中する。）

深雪　怪しき名宛のその密書、そつとわたしが

ト五郎又へかゝる。當作、邪魔をする。五郎又、深雪が藁苞へ手を掛け、中より文を引出し

五郎　ドツコイ〳〵、それをとは、勝手なとちあまめ。密書をわれが詮議すりやア、艶書の詮議はおれ

がするワ。

深雪　サ、それは（ト思ひ入れ。）

當作　艶書も密書も五分々々だ。双方ともに當作が

ト五郎又が懷より密書を引出す。深雪「ソレ」とかゝる。三人二通を奪ひ合ふ立廻り。よき所にて、いゝいどろんになり、車の中より手を出して、二通を引ッたくる。

三人　ヤヽヽヽヽ。（ト悔りする。）

五郎　イヤア。待てノ＼、折角手に入る今の艶書。

深雪　詮議の種の密書もろとも

當作　この車の物見から、例のどろんで引摺り込んだは

深雪　何は兎もあれ

三人　車の内を。

トかゝらうとする。三人の女形、車を圍ふ。此うち以前の奴四人出て來て、三人をさゝへる。ちよつと立廻り。

女三　お勅使樣のこの御車。

女二　粗相があるとわたしらが

女一　仰せを蒙むる役目の越度。

深雪　すりや、この御車が

宇佐
藤若　お勅使様とや。

五郎　お勅使でも、杓子でも大事ない。

深雪　大切なる二封のあの文。

舍人　おれが出世の蔓にする。（ト女形三人を振切る。）

五郎　ドリヤ。

　　ト車へかゝろ、内にて

雷雲　待て、えゝ。

皆々　なんと。

雷雲　待ちやアがれ、えゝ。

　　ト流しになり、車の中より猪熊入道雷雲、鯰にて出て來り、舞臺へ飛び下り、きつと見得。

皆々　ヤア、お勅使様と思ひの外

宇佐・藤若　猪熊入道雷雲樣。
舍人　今の二通の手紙といひ
五郎　何故あつて留めたのだ。
雷雲　へヽン、古めかしくも留めて出でたる御不審を、申し開くや梅が香を、留めるも花の顔見世に、大入り木戸に客留める、敵役なら息の根を、留袖新造わかちなく、色ならござれ抱き留めて、吸ひ附け煙草の前留めに、現ぬかして通ふ神、めでたくかしこは文の留め。瓢箪かしくは鯰の留め。扇の留めの要石、ゆる／＼大地をおッ留めた、鹿島の神の御前立ち、猪熊明神の御託宣と、ホヽ敬つて白す。
奴四　どつこい。
五郎　おきやアがれ。おれにやア根ッから解らねえ。
雷雲　オヽ、誰だと思つたら、樋爪の九郎か。おれも返り新參ゆゑ、早く出たくつてならなんだが、桃栗三年くり藏も、これで三度目、出汐に困つてゐる所へ、互ひに爭ふ密書と艶書。して、國連のその形は。
雷雲　聞いてくりやれ。人間は、七轉び八起きと云ふが、この國連は十度も轉んで、提灯屋とまで成り

下がり、闇を歩いた事はないが轉び通し、まだ一度も起きた事がない。併し出世の手蔓にもなるその密書、サアく、早く返してくりやれノく。

深雪　ハイノく、私しも、どうぞそのお文を、お返しなされて下されませうならば、有り難うござります。

雷雲　オヽ、さう云ふはたしか、忠昌が妹だな。鶴の前と頼信が戀を取り持つて、だりむくつたといふ事だが、それにも懲りず、また文の使ひか。エヽ、こゝな情知らめ。

五助　コレく、入道、なんぼおぬしが立役ぶつても、戀には疎き御面相、五百羅漢にある顔だぜ。

雷雲　おきやァがれ。

女一　左樣なら、あのお二人は、入道樣のお近附き。

女二　樋爪の九郎國連樣。

女三　二の瀬樣の妹御、深雪さんで

三人　ござんしたかいなア。

當作　さうとは知らず、最前から、大きに無禮を致しました。眞平御免下さりませう。

ト この時向う揚幕にて

呼び　正盛參詣。

五郎　ナニ、正盛の參詣とや。

深雪　正盛樣がお入りあつては、猶々今のあのお文。

五郎　おれも屆ける大事の密書。

深雪　早うこの場で、入道どの。

ト取りにかゝる。雷雲振り切り

雷雲　ドツコイ、賴信めを罪に取つて落す大事の艶書、われに渡して詰るものか。

深雪　イヽヤ、是非とも私しが。

ト深雪、五郎又、雷雲が懷へかゝる立廻り。この中へ當作交り、ごつちやになりて、深雪、一通を間
違へ取つて

さうぢや。

トつか〳〵と花道へ行きかゝる。五郎又これを留める。また向うにて

呼び　正盛參詣。

ト三味線入りの大拍子になり、花道より正盛、撥鬢、上下衣裳にて出て來る。後より鬼住山平、菖蒲

革、羽織袴、足輕の拵へにて出て來る。後より關屋、襠補衣裳にて、梅の枝に短冊を附け、三方に載せ持ち出る。後より照葉、襠補にて、長柄の銚子。次に初瀬、同じく襠補にて、三方に土器を載せ持ちて、花道にて行きあふ。深雪、正盛と入れ替り、正盛「ソレ」と思ひ入れ。山平、深雪を片手に引据ゑ、きつとなる。

五郎　ヤア、いゝ所へ正盛どの。

雷雲　これは〱、常陸之介どの、お早い御出仕、御苦勞千萬。

正盛　その挨拶は私事、今日お髭黑樣より上使の其許、兼ねて御存じある如く、二心なきこの正盛、願ひも叶ふ今日のお目見得、出仕の路次に砂踏み立て、慮外はたらくこの女。

山平　引据ゑました下郎めも、二合半から仕出した謀叛、一六勝負の菖蒲革、涙氣のない鬼住山平。

關屋　兄仲光が名代に、不束なる身も顧みず、今日靑陽の御儀式に、お役目受けしこの關屋。

照葉　お許しうけて道すがら、お供いたせし私しは、卜部季武が妹照葉。

初瀬　豐田小文次が妹の、初瀬も供に有り難い、列につらなる身の冥加、お嬉しう存じまする。

藤若　正盛樣を始め

宇佐　何れも樣には、まづ〱これへ

三人　お通りあられませう。

正盛　山平參れ。

ト矢張り鳴り物にて、正盛先に、皆々舞臺へ來り、上の方に雷雲、正盛、關屋・その外よろしく住ふ。

五郎　イヤナニ、正盛どの、兼ねて貴殿と

正盛　アヽコレ。（ト思ひ入れ）誰かと思つたら常俊が悴藤若、宇佐次郎を始め女ども、この體は。

藤若　私しことは、此たび髭黑公、この北岩倉へ御所をしつらひ、めでたき周の禮にならひ

宇佐　御儀式ありと承はり、藤若どのは才若、また拙者が萬歳も、髭黑公の齡ひ萬歳と、祝しまするその印。

女一　私しども〻朝清めやら、お焚き木を運びますやら、仕附けも致さぬ衛士の役。

女二　御垣守りの篝、子の日の松も植ゑ替へる。

女三　白馬の節會のその時は、大方口取りにも、出まするでござりませうわいなア。

藤若　父の申し附けとは云ひながら

宇佐　あられぬ體にてお目にかゝり、面目次第もござりませぬ。

正盛　なにサ／＼、髭黑樣へ御味方の拙者、心遣ひ必ず無用。

宇佐　然らば、髭黑公の御前
宇佐
藤若　偏へによろしく
正盛　執成し致すでござらう。
藤若　左樣なれば何れも樣。
宇佐　後ほどお目にかゝりませう。
　　　　ト管絃になり、藤若先に宇佐次郎、女仕丁三人、下座へ入る。
五郎　もう四文と出てもようござらう。ナニ、正盛どの、あの袴垂（ト云はうとする。）
闕屋　ヤア。（ト思ひ入れ。）
正盛　アヽコレ、又しても、づばら〳〵と、嗜み召され。
五郎　アヽ、まだ悪いのか。おきやアがれ。イヤナニ、ものでござる。鶴の前より賴信へ送る艶書、この女が持つてゐまするて。
闕屋　すりや、鶴の前樣の
照葉
初瀨　アノ、艶書を。
當作　賴信樣へお手渡しと、姿を變へて此ところへ。

初瀬（深雪を見て）ヤア、お前は忠正さんの妹御。

照葉　ほんに、深雪さんぢやござんせぬか。

深雪　ア、モシ。（ト思ひ入れ。）

雷雲　なんと、慥かに取り持ちであらうがな。

深雪　アイヤ、左樣な事は

山平　ナニサ〳〵、隱しても、もう叶はない。ドレ、山平が

ト深雪を引附け、懷の艶書を引出す。此うち關屋立寄り、それをちよつと取つて

關屋　こりやこれ、慥かに。（ト思ひ入れ。）

敵皆々　その艶書を

ト皆々立ちかゝる。山平を關屋突廻す。照葉、正盛を上へ引廻す。この時、正盛、懷より繋ぎ馬の旗を落す。關屋、手早く取上げ、こなしあつて

關屋　こりや、相馬の白旗。

皆々　なんと。

正盛　それな

當作　ト引取る拍子に、旗、さら〳〵と開く。關屋、引ッ張りで留める。此うち

謀叛の張本正盛、うぬを。

トつか〳〵と行く。山平突廻す。

呼び　賴信參詣。

皆々　ナニ、賴信の參詣とや。

深雪　お入りあつては。（トつか〳〵と花道の方へ行きかゝる。）

當作　旗を證據に。

ト山平を振り切る。これにて山平、深雪おわへ立廻り。此うち當作、旗へ手をかける。正盛、拔討ちに當作をぽんと切る。この血汐の穢れにて、大ドロ〳〵になり、繋ぎ馬の脫け出し心にて黑雲立ち昇る。此とき向うより賴信、若衆形、上下衣裳にて、島臺を持ち、後より成春、上下衣裳、大小にて蕗の臺を持ち、出て來る。深雪、山平、立廻りながら來るを、花道よき所にて、賴信、山平を捕へる。これにて深雪、思ひ入れあつて、つか〳〵と舞臺へ立戻り、下の方へ控へる。正盛、旗を持ちたるまま、關屋と入れ替り、血刀を差出す。五郎又、手拭にて白刃を押へる。双方途端よろしく見得。矢張りドロ〳〵、小太鼓の樂になる。

正盛　ハテ、心得ぬ。今下郎が血汐、この旗にかゝるとひとしく

雷雲　馬の形朦朧として、黒雲一むら立ち昇り

五郎　空にあり／＼現ずる七星。

賴信　かゝる例は、唐土西周の時に當つて、孟津牧野に星落ちて馬と化す。

山平　ムウ。（ト振り切つてかゝる。下へ引廻して引附ける。）

成春　穆王これを愛し、鞭打ちて西天に到り

關屋　祇園精舍に釋迦如來、遺經を聞かれしとかや。

正盛　まつた我が朝、景行天皇の御宇、蝦夷神馬を奉る。帝夢むらく、この馬昇殿して星と化す。

（ト山平、拂はうとするを押へ附ける。）傳へ聞けども、見るは始めて。

關屋　疑ひもなき相馬の重寶。

正盛　七星これを守護なすものか。

賴信　奇異なるこの場の、振舞ぢやなア。

トどろ／＼打上げ、雲消える。正盛、ちやつと旗を取つて懷中する。關屋とちよつと立廻り。此うち賴信、山平立廻りながら、成春附いて、つか／＼と舞臺へ來り、皆々よろしく入れ替り、顏見合せ、思ひ入れ。

雷雲　河内冠者頼信

正盛　何ゆゑ參詣召された。

頼信　ハッ、兄頼光はこの程所労に冒され、引籠りをる時節を窺ひ、相馬の餘類良門を始め、盗賊の張本袴垂なんど申すもの、此處彼處に徘徊なすと聞き及び、御所の警護暇なく、存じの外なるこの遅參。兼ねて髭黒公に心を運ぶこの頼信、急ぎのお召しは、心許なう存じまする。

雷雲　イヤ、髭黒公の上使には、わんぱく入道雷雲。餘の儀でもない、頼信が降參は、紛失の神璽を、手に入れん爲の僞りならんとお疑ひ。誠隨身に相違なくば、家の重寶、蜘蛛切りの劍、まッた、乳繰り合つてゐる、藤原の常俊が娘鶴の前を勸めて、差上げよとの仰せだワ。

頼信　こは改りたる御諚。蜘蛛切り丸は當社に納めござれば、差上げんないと易けれど、鶴の前ことは某の計らひにも

正盛　ならない筈。かね〴〵頼信、不義してをらうがな。

頼信　ヤア、過言なる正盛どの。してまた某、鶴の前と不義と申すには

正盛　證據の無い事云ふべきか。山平、その女に白状させろ。

山平　心得ました。サア、女め。

成春（さゝへて）待て、山平とやら、この女を何と致す。
山平　ハテ、知れた事、鶴の前と頼信が、取持ちをする女ゆゑ。
頼信（深雪を見て、思ひ入れあつて）ヤア、そちや深雪、如何いたして此ところへ。
成春　アイヤ、いよ／＼それに極まれば、人手は頼まぬ、成春が詮議する。サア、深雪どのとやら、しかと取持ちめされたか。よもやさうではあるまいがな。（トこなし）。
關屋　イヤ、取持ちに相違ござりませぬ。
皆々　ヤヽ、なんと。
關屋　證據といふはこの關屋。只今手に入るこの艶書。
皆々　ヤア／＼。
五郎　ちつと相違もござるまい。
雷雲　なんと慥かな證據であらうが。
正盛　サア、關屋、その艶書、この場に於て讀み上げい。
關屋　そのお詞までもなく、髭黒公お心懸け遊ばされし、姫君の不義の艶書、讀まないで何と致しませう。

照葉　ぢやというて、現在の
初瀨　御主君の一大事。
關屋　サア、その大事のお主のこの艶書。（ト右の艶書を出し）讀まねばこの場が相濟みませぬ。
兩人　それぢやというて。
　　　ト立ちかゝるを制して
關屋　ハテマア、お控へなされませいなア。
正盛　サア、きり〳〵と讀み上げろ。
關屋　ハツ。（ト一封を手早く開き）なに〳〵「かね〴〵叡山に忍びをり候處、今宵花山の古御所へ立越え、計略をめぐらし候に、右腹心の輩面會たまはるべく候」。
皆々　ヤアヽ。（ト顏見合せ、恟り思ひ入れ。五郎又、山平、賴信さゝへる）。
成春　變つた艶書のあの文體、ハテナア。
雷雲　そんなら、さつき懷で（ト五郎又と顏見合せ、間違つたといふ思ひ入れ）。
關屋　お望みなれば是非に及ばぬ、これなる文の名宛も讀みあげ、きつと詮議を致しませうか。
雷雲　イヤ、その詮議はなるまいがな。

頼信　そりやまた何ゆゑ。
雷雲　この艶書ゆゑ。
頼信　ヤア。（ト思ひ入れ。雷雲文を出し見せる）。
照葉　（立ちかゝり見て）「頼信樣へ鶴の前」（ト讀む。皆々思ひ入れ）。
雷雲　なんと詮議はなるまいがな。
闕屋　エヽ、それゆゑに、大事の密書も反故同然。
成春　詮議もならぬか。エヽ、口惜しい。
五郎　イヤ、また敵役にも、荒神樣があればあるものだなア。
ト向う、バタ〳〵にて、勝俊、幕明きの形、刀箱を持ち出て來て
勝俊　我が君これに御座ありしか。
頼信　三郎勝俊、あわたゞしい、何事ぢや。
勝俊　ハツ、寶藏に納めある蜘蛛切りの一腰、今朝盗賊入つて奪ひ取り、立退く所を支へしかども、きやつもしれ者、跡晦ましてかいくれに。
皆々　ヤアヽヽ。（ト惘り。頼信思ひ入れ。）

頼信　すりや、盗賊の爲に、大切な蜘蛛切りの一腰、奪ひ取られしとや。ホヽホイ。

勝俊　申し譯は拙者が腹。（ト刀へ手をかける）。

照葉　（とめて）ア、イヤ、こりや、何ゆゑ切腹めさるのぢや。

勝俊　何ゆゑとは、お預りの劍を奪はれ、何面目に長らへん。

照葉　して、切腹あれば、紛失の御劍が出まするか。

勝俊　サアそれは

照葉　死は一旦にして易しとやら、必ずとも早まり給ふな、なア、我が君樣。

頼信　勝俊が誤まりも、わが不覺ゆゑ。ハテ、是非に及ばぬ。

ト五郎又、山平、下の方にこれを見てゐて

五郎　山平。

山平　お聞きなされたか。蜘蛛切り丸の紛失、申し譯には拙者が腹。

五郎　ドッコイ、死は一旦にして易し、なア、我が君樣。……呑み込ませぜりふか。有り難い。なんと正盛どの、甘口な狂言ぢやアござらぬか。

正盛　いかにも國連のお云やる通り、コリヤ、頼信、劍欲しさの拵へ事だな。

頼信　イヤ、全く以て
雷雲　そんなら劍を差上げるか。
頼信　でも、紛失いたせば
正盛　すりや、鶴の前を差上げるか。
頼信　サア、それは
雷雲　但し劍か。
頼信　サア
正盛　姫が入内か。
頼信　サア
皆々　サア〳〵
正盛　頼信返事は
皆々　ドヾ、どうだ。
忠正　（ト向う揚幕にて）その御劍、加藤豊後の次郎忠正、差上げまするでござりませう。
皆々　なんと。

侍ひ立たう。

ト時の太鼓、早舞ひになり、花道より忠正、上下衣裳にて、幕明きの袋入りの劔を持ち出る、跡より瀧夜叉、以前の形、大繩にかゝり、侍ひ二人、これを引立て出で、瀧夜叉を下の方へ引据ゑる。

賴信　次郎忠正、すりや紛失の蜘蛛切りの一腰、其方が手に入りしとや。

忠正　ハッ、今朝當社へ參詣の路次、面を隱せし怪しき奴、引ッ捉へて詮議なせば、劔の盜賊、何者に賴まれしと、拷問に掛けしところ、袴垂に賴まれしとやら、自身の白狀。イザ、御劔は。

ト劔を渡す。賴信取りて、ちよつと改めて

賴信　エヽ、忝ない。賴信いまだ武運に盡きざる印。これも偏へに汝が働き。過分〳〵。

正盛　して、その劔の盜賊といふは。

忠正　卽ちこれへ引き据ゑましてござります。

正盛　ムウ、すりや、彼れが劔の盜賊か。……ヤイ曲者、面をあげろ。(ト瀧夜叉思ひ入れ。)すりや、いよいよわれが、アノ、袴垂に賴まれしとか。

山平　コレエヽ、わつぱめ。袴垂といふは現在おれが

皆々　ヤヽ、なんと。

山平　イヤサ、うぬが悪事を、サア、うぬが悪事を此ところで、きり／＼白状しろ。

五郎　どうだ。

瀧夜　エヽ、ひちッくどい。斯うなるからは何を隠さう。おれが生れは丹波の國、餓鬼の頃から小盗みが好きで、とう／＼親仁の勘當うけ、それから影をくらま小僧、夜盗かつさき家尻切り、今ぢやア盗人の張本、袴垂の手下となり、蜘蛛切り丸をひん盗む大事の役目。首尾よくやつたと思ひの外、見咎められた上からは、切るとも突くとも勝手次第。ナニ、川へ落した雁首同然、早く方を附けてもらひたい。

雷雲　イヤ、盗賊の成敗は追つてのこと。先づ差當るその劒。

頼信　雷雲どの、御前よろしう。

ト差出す。關屋取次ぎ、正盛取つて

正盛　イヤ。この劒は似せ物であらうがな。

皆々　ヤア。(ト思ひ入れ。)

忠正　この忠正が其座も去らず、奪ひ返せし一腰を、似せ物との疑ひは

頼信　何とも以て其意を得ぬ。正盛どのゝ御一言して似せ物とは、何ぞ慥かな證據でもござるかな。

正盛　サア、その證據は。

山平　證據といふはこの辻風。
立役　ナニ、辻風とは。
皆々　サア、辻風とは、オヽ、あの盜賊、みんな此奴が拵へ事、この盜賊は僞り者だ。
關屋　その盜賊が僞りならば、最前手に入るこの密書。（ト出して）殊に名宛も袴垂、眞僞を糺して一々に、詮議を致しませうか。
山平　サア、そりやア
忠正　これなる下部の詞の端々、どうやら怪しい。（ト思ひ入れ。）
正盛　何がどうした。
賴信　蜘蛛切りのその一腰、お納めあるや。
成春　但し密書の趣きで
關屋　きつと詮議を致しませうか。
雷雲　密書を以て詮議すりやア、この艷書を髭黑公へ差上げようか。
立役　サアそれは
敵役　サア

立役　サア

皆々　サア〳〵〳〵

忠正　(密書を取つて見て)　然らば、これなる密書も

正盛　また此方の手に入りし

雷雲　これなる艶書も

頼信　この場に於て

關屋　双方ともに

忠正
雷雲　元へ納めて。

ト兩人一通を投げ捨てる。密書を五郎又、艶書を關屋取つて

頼信　この上は御兩所とも、御前よろしう。

正盛
雷雲　執成しいたすでござらう。

五郎　ヤレ〳〵、それで一方が方附いたが、まだ方附かぬは鶴の前。

忠正　見ればそぼろな形をして、高位の前を恐れぬ振舞ひ。そちや何者ぢや。

正盛　イヤナニ、あの者は、身共が推擧いたした、樋爪の九郎といふ者だ。以後見知つてくりやれ。して

姫が事は。

忠正　鶴の前様にも、かねて御諚を承はり、おッつけこれへ。

正盛　ムウ、流石は忠正、萬事の手つがひ感心いたした。頼信にはテモよい家來を持ちやつたなア。

頼信　これは〳〵、お褒めのお詞、面目を施しまする。

呼び　玉杯の刻限。

雷雲　ナニ、玉杯の刻限とや。

正盛　然らば御勅使。

雷雲　正盛、頼信。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト管絃になり、雷雲先きに正盛、其外皆々入る。跡に頼信、忠正、瀧夜叉あたりへ思ひ入れあつて、瀧夜叉が縄を切る。合ひ方。

忠正　わが君様。

頼信　次郎忠正。

瀧夜　まんまと首尾よく

忠正　謀計について謀計を行ふと、髭黑左大將、正しく神璽の御寶を奪ひ、所持なす上からは、ナニ蜘蛛切りを望まんや。察するところ正盛が計らひ、殘亡の輩を集める巧みと見えた。それゆゑに似せ物を授けて、手段を挫く、我が計らひ。

瀧夜　誠の劍は神前に、深く祕め置きましたれば、ちつともお氣遣ひはござりませぬ。

賴信　髭黑に陷らふも、何卒故なく神璽の御寶、奪ひ返さんわが計らひ。必ずともに沙汰ばし致すな。

ト下座より宇佐次郎、藤若出で來り

宇佐　わが君樣、お入りあられましたか。

藤若　賴信樣にはお早い御出仕、御苦勞さまに存じまする。

賴信　オヽ、これは常俊どのゝ御次男藤若どの、宇佐次郎にも今日の役目、さぞかし大儀々々。

宇佐　お詞身に餘り、有り難うぞんじまする。

ト向うより侍ひ、菖蒲革にて足早に出て來り、直ぐに舞臺へ來て

侍ひ　ハツ、忠正樣へ申し上げまする。

忠正　見れば鶴の前樣を警固の役人、あわたゞしい、何事ぢや。

侍ひ　姬君御社參の路次、一條戻り橋に於て、異形の變怪夥しく現はれ、乘り物もろ共いづくへか、行方

かいくれ相知れませぬ。（ト皆々思ひ入れ。）
忠正　ヤヽ、姫君の乘物もろとも。
皆々　その行くへの知れぬとや。
忠正　さては此ごろ聞き及ぶ、變化の所爲なるか、ムウ。（ト思ひ入れ。）
賴信　心得がたき妖怪の振舞ひ。何事も某しが思ふ仔細あれば、其方は當社の北門に猶も相詰め、若し怪しき事あらば、早速に告げ知らせよ。
侍ひ　心得ました。（トつか／＼と下座へ入る。）
賴信　兼ねて某し察するところ、髭黑には鶴の前を入内させん爲、これなる藤若を、擒になさん手段も知れず。何はともあれ宇佐次郎には、藤若を同道いたし、これより丹波の笹山へ立越えてよからう。
宇佐　すりや、拙者は此場より
忠正　いかさま此儀、然るべう存じまする。
瀧夜　然らば次郎信兼どの、急ぎ用意いたされよ。
藤若　左樣ならば賴信樣。
賴信　信兼萬事心附けい。

宇佐　ハツ。

ト此うち下の松の木に、忍び一人窺ふ。賴信、前の御手洗にて見附け、手裏劍を打つ。これにて忍び飛びおり

忍び　賴信觀念。

トかゝるを見事にポンと切つて捨てる。

宇佐
藤若　これは。

忠正　我が君樣。

賴信　兩人、參れ。

ト管絃になり、賴信先きに兩人奥へ入る。宇佐次郎、藤若殘る。下座より以前の奴出で來て取り卷く。宇佐次郎、藤若を圍ひ

四人　動くな。

藤若　こは心得ぬこの狼藉、何ゆゑあつてわれ〳〵を

宇佐　動くな遣らぬとぬかすのだ。

奴一　何ゆゑとは、常俊が一子藤若、仲光が悴宇佐次郎。

奴二　引ッ捕へて人質と、正盛樣のお指圖うけ

奴三　討手といふは大層だが、この袂へ入れて土産にする。

奴四　ぼんよ、小僧よ、ヤレ、いゝ子だ。きりきり腕を廻しやァがれ。

四人　廻しやァがれ。

宇佐　やかましいワ、がらくためら。今までの市川と、違つて今度の顔見世は、世に成田屋の師匠も初の座頭株、今年は弟子も改めて、初荒事の手始めに、生けッ首を抜かれぬうち、盛砂もつて通しやァがれ、エヽ。

奴一　エヽ面倒な。捻り殺せ。

三人　合點だ。

トかゝる立廻り。大太鼓入りの鳴り物になり、よろしくあつて、宇佐次郎、奴を御所車のわきへ叩き附け、長柄のうちへ抛り込む。

宇佐　藤若どのには、イザイザこれへ（ト藤若を車の内へ入れ、奴を牛にして）サァ弱蟲めら、牛の力はあるまいが、四人一緒に車牛、おれに曳かれて、うしやァがれ。

ト大太鼓のさらしになり、宇佐次郎、車を曳き、向うへ入る。あと時の鐘になつて、山平以前の形、袱紗包みの一卷を持ち出で、あたりへ思ひ入れ。

山平　正盛どのゝ計らひにて、此さぶ六が姿を變へて、今日こゝに忍び込んだも、お頭の指圖によつてさゝがにのこの一卷、首尾よく手に入り、忝けない。（ト懷中して思ひ入れあつて）殊に頭の袴垂どのも、この諸羽の社へ、今日忍び込まれる筈だが、少つとも早く逢ひたいものだが。

ト正盛この時出かゝりゐて

正盛　辻風。

小平　正盛樣。

正盛　コリヤ。（ト時の鐘、あたりへ思ひ入れ。）袴垂より國連が持參の文通、今宵花山の古御所へ、會合なすとの密書の趣き。して、彼の一卷は。

山平　氣遣ひ召さるな。奪ひ取つて卽ちこゝに。

ト一卷を見せる。山おろしになり、向うより盜賊二人、黑四天の形にて、鋲打の乘物を荒繩にてからげ、一散に舁ぎ出て、直ぐに舞臺へ來ておろす。

盜一　仰せに隨ひ、道に待ちうけ、鶴の前が乘物ぐるめ

これは。（ト思ひ入れ。）

兩人　引ッ淩つて歸りました。

正盛 出來したく。直ぐさまこれより奥殿へ。

兩人 心得ました。

ト下座へ舁いで入る。正盛うなづき、思ひ入れあつて

正盛 よいく。……この上は人知れず、忍ばせ置きたる

ト下の方へ礫を打つ。時の鐘になり、黑四天の手下兩人、誂への經櫃を荷ひ、下の方より出て

手一 お指圖の通り、早速叡山へ忍び込み

手二 幸ひこれなる經櫃へ。

山平 すりや、此うちに袴垂。

正盛 コリヤ。……この上は花山の御所へ。

山平 彼の地へ赴きこの一卷、頭へ手渡し致すでござらう。

正盛 辻風、急げ。

山平 心得ました。

ト一卷を懷中し、手下、經櫃をかつぎ上げようとする。この時下座より五郎又、袋入りの劍を持ち出る。あとより忠正、股立ちにて、これを追ひ出て來り、よろしく引据ゑる。

五郎　これこそ誠の蜘蛛切り丸、われに渡して詰るものか。

忠正　小癪な。身の目にかゝるその劍、きり〳〵渡せ。（ト立廻り。）

正盛　すりや、誠の蜘蛛切り丸とや。

五郎　それを。（トかゝるを立廻り。）

山平　何はともあれ、古御所へ。

正盛　辻風、急げ。

忠正　怪しい經櫃、中改めて。

山平　なんと。

正盛　イヽヤ、經櫃よりはその一腰。

ト忠正が持ちたる劍へかゝる立廻り。山平振切り、この時瀧夜叉、この中へ入り、正盛をさゝへる。

これにて忠正、經櫃を押へる。

瀧夜　その經櫃こそ詮議もの　次郎忠正、改め召されい。

正盛　さてこそ劍の盜賊なりと、この正盛を欺きしわれ始め、慮外ひろぐと手は見せぬぞ。

ト立廻りに正盛、懷中より旗を落す。忠正、山平が懷より一卷を出す。

忠正　こりやコレ、さゝがにの一卷。

瀧夜　慥か相馬の

ト山平手早く一卷を取ろとて落す。どろ〳〵にて蜘蛛一杯下り、右の旗を虚空へ卷きあげる。

忠正　ハテ心得ぬ、今の振舞ひ。

瀧夜　俄かに黑雲覆ひ下がり、旗の行くへを失ひしは。

正盛　陰陽と象りし相馬の重器、一つに寄するその時は、不思議ありと聞きつるが、ハテ、爭はれぬ。

忠正　何はともあれ、一卷を。

トかゝる。山平立廻り。五郎又心附き

五郎　その蜘蛛切りを。

ト忠正にかゝる。山平と手下、經櫃を舁ぎあげる。忠正、五郎又を突き廻す。正盛、盜賊を振拂ふ。此うち手下、經櫃をかき、花道へかゝる。

忠正　一卷諸ともあの經櫃。

トきつとなる。この時深雪出で來り、この中へ入りて、正盛をさゝへる。此うち花道の人數は向へ入る。

南無三、あとを慕つて。（ト劍を腰へ差し、花道へ行きかゝる。）

深雪　少つとも早う。

忠正　合點だ。

ト早めたる大拍子になりて、忠正向うへ入る。舞臺は五郎又、盜賊立廻り、正盛刀を拔きかゝるを、深雪きつととめる。この見得よろしく、チョン〳〵〳〵〳〵、　幕

大拍子のつなぎにて、直ぐにこの幕を引返す。

本舞臺一面の岩組、これに三間一ぱいの大御簾をおろし、總て北岩倉髭黑山莊の體。渡り拍子にて幕明く。ト直ぐに向うより奴八人、一對黑雲に鬼の面の捻ぢきり、虎斑の帶にて、誂への鎗を持ち、

アリヤ〳〵の聲勇ましく、振つて出で來たり、ヨンヤサと花道に留り

奴一　代々替らぬ天正月、一番烏も悅んで、渡り拍子の幕明きに、當り前なる一對の

奴二　奴が鎗ふる下馬先の、鯡を肴にいしごきで、ぐつと一ぱいあほッきり、捻切り端よりの一座は八人。

奴三　大座平日式日も、寒の師走もかん負けない、負けない氣丈の寒晒し。

奴四　晒しの手拭頰冠り、お供歸りを待ち兼ねて、ひやかす切り見世そゝり節。

奴五　武士とはいへど二合半、ぶん拔きくぎ拔き中拔きの、草履もしんの習ひあり。

奴六　ありの思ひも天道の、お引合せを看板に、べつたり附けたねれけもの。
奴七　ねれたら持てこい、かい餅も、するがねい〳〵内玄關、日向でやらかせ造り髭。
奴八　お髭の塵取り御機嫌取り、名を取り髪が新らしう、今日を晴れなる伊達道具。
奴一　勇みに勇んで
皆々　振り込むべいか。

トまた渡り拍子になり。皆々本舞臺へ來り、ヨイヤサと居並ぶ。この時下座より雷雲出で來り

雷雲　これは何れもつッ揃つて、いつも鳥毛といふ所を、誂への伊達道具、さぞ小道具は小言を言つた事であらう。併し見事な一對出立ち、御苦勞でござります。

ト時の太鼓になり、向うより仕丁四人、かす烏帽子、白張の露を取り、弓矢を番ひ、あとしさりに出て來ると、多田の滿仲、壺折指貫の形にて取り圍まれ、頼信、關屋、成春、勝俊、以前の形にて出て來る。ト又仕丁四人、同じく弓矢を番ひ出る。後より右少辨長連、冠裝束、公卿の形にて笏を取り、この人數、ぢり〳〵と本舞臺へ來り

仕丁　動くな。
雷雲　これは築島右少辨長連卿。

奴
皆々　只今參內あられましたか。
滿仲　さてこそ、髭黑左大將のこの山莊、內裏にひとしく、參內などと唱ふるは、すりや、道包卿には
　　嘮に違はず。
賴信　いかにも父の仰せに任せ、虛實を窺ひ見るところ
關屋　髭黑樣には、勿體なくも天下を望む
成春
勝俊　御企てゞござりまする。（卜滿仲思ひ入れ。）
長連　それゆゑ禁庭守護の滿仲。うまい話しで乘せる氣で、見えたを幸ひ取り圍ませたは、この長連が
　　そちへの寸志。
滿仲　ヤア、長連卿のお志し、滿仲少しも祝着ならず。仄かに取沙汰聞きしゆゑ、便宜に隨ひ道を述
　　べ、髭黑公のお心を、正路に返し申さん爲、わざと來りし多田の滿仲、先づ何はともあれ道包卿へ。
　　　卜立ちあがる。奥にて
正盛　滿仲お待ちやれ、正盛それにて面談いたさう。
　　　卜管絃になり、正盛、三方へ大杯を乘せ、長柄の銚子を取り、出て來る。
滿仲　ヤヽ、正盛どのにもこの所に。

正盛　貴殿髭黑左大將へ、諫めを入れんとお云やれど、いつかな以て飜がへらぬ、道包卿の御企て。それゆゑわれも玉杯を、今捧ぐるの其折から、貴殿も堅氣をお云やらずと、これより時の宜しきに隨ひ召さるがマア當世、賴信とも〴〵すゝめ召され。

賴信　イヤ、父はともあれ、この賴信、などか惡意に隨ひ申さん。

關屋　御父君にも源家の棟梁、何とてお心惑はせられん。

滿仲　關屋が申すまでもなく、禁廷守護の役目を蒙り、その朝敵に剩さへ、などか一味をなすべきや。

成春　賴光公へもこの趣き

勝俊　言上いたして

滿仲　直ぐさま討手。

長連　すりや、お味方なさぬのみならず

正盛　直ぐに滿仲魁けして

雷雲　髭黑樣の

皆々　討手とな。

滿仲　この上猶豫は禁廷へ恐れ。賴信、參れ。

賴信　ハツ。（ト立ちあがる。）

正盛　ソレ、取り圍め。

皆々　動くな。

トまた仕丁矢衾にて取り卷く。五人思ひ入れ。この時御簾の內にて

髭黑「大江山いく野の道の便りぞと、天の橋立文見つるかな。」

三人　あの聲は

長連　髭黑公。

正盛　尾籠な振舞ひ。

皆々　こ動くな。

ト大薩摩淨瑠璃になる。

〽まだ夜の內に有明の、月の都の岩倉に、すでに九五の位山、鬼が城ともいふやらん。

ト淨瑠璃切れると、御簾のうちにて

侍臣二人　出御。

ト早下り葉になり、正面の御簾を卷きあげると、眞中に髭黑の大將、酒呑童子のこしらへにて、高き岩の上に褥を敷き、枕に凭れ、團扇を持つてゐる。上の方、物部平太有國、赤ッ面、上下衣裳、股立ちに

て、鶴の前を引き附けゐる。鶴の前、廣振り帶附きの形、下げ髪にて、髭黑に恐れゐる。荒川太郎景道、同じく赤ッ面、上下衣裳股立ちにて、大俎を引ッ抱へゐる。左右に照葉、初瀨、女仕丁三人、以前の形にて控へる。この見得よろしく、皆々これを見て

三人　ヤ、左大將の

皆々　この體は。（ト不思議の思ひ入れ）

有國　君の御前だ。滿仲はじめ

景道　賴信べんなご、そこ

兩人　下がれやい。

鶴の　ナニ、賴信樣とや。（ト思ひ入れ。賴信これを制す。）

髭黑　われ兼ねて大位を知らんの望みも、今一陽の時來つて、この山莊を內裏と定め、自から登る位ゐ山も、たゞ口惜しきはこれまでに、人臣の身であつた髭黑。それゆゑ今日の天正月、即ち今日元日に、誕生なせし心とし、乳味の替りは常々から、望める酒に基きて、酒呑童子と我が名を呼び、乘位につれば、天道へ、何か恐るゝ事あらじと、思ひ附いたるこの出立ち。これより直ぐに杯をめぐらし、裝束改め髭黑王、皆萬歲を唱へろやい。

正盛　誠に君の御代長久

長運　たゞ〳〵
皆々　おめでたう存じまする。
滿仲　アイヤ〳〵、憚りながら道包公、そりや、私しの思召し立ち。たとへ嬰兒の名を繼ぎて、酒呑童子と呼ばるゝとも、主は替らぬ左大將、昔が今に至るまで
賴信　臣たる身よりためしなし。
關屋　朝敵の名を受け給はぬうち、お心早う改められ
滿仲　朝廷輔佐の守りこそ
五人　たゞ願はしう存じまする。
有國　ヤア、默らつしやい。人も用ひぬ諫言立て、その偏屈を取りおいて
景道　けふ御乘位のわが君へ、お味方申せばその身も共々、日頃に增した活計歡樂。
髭黑　又この童子が心をかけし、常俊が娘鶴の前。麿が祝ひの日に當り、爰へ捕はれ來りしこそ幸ひ、直ぐさま今より閨の花。滿仲おことも諫言止め、臣下に下るや、ドヾ、どうぢや。
鶴の　數ならぬ身のみづからを、思召して下さりまする、お志しは嬉しけれども、お受けのならぬ其譯は。
正盛　この賴信へ心中立てるか。

鶴の　アヽモシ。（ト心づかひ。）
髭黑　ナニ、これなる姬と、あの賴信
正盛　不義に相違はござりませぬ。
髭黑　ムウ、それゆゑ麿が心には、……憎い女め。……して滿仲が返答なんと。
滿仲　そのお尋ねに及ぶべき。朝恩捨てゝ童子の仰せ、何とて隨ひ申さんや。
髭黑　詞をもどけば
有國
景道　大罪人だぞ。
立女
皆々　サ、それは
長速
雷雲　但しは君に隨ふか。
立女
皆々　サア、それは
皆々　サア〳〵〳〵
敵役
皆々　どうだ。
鶴の
滿仲　たとへ如何なる憂き目に逢はうとも
賴信
關屋　その儀に於ては（ト覺悟の思ひ入れ。）

正盛　ハテサテ、しぶとい
長連
雷雲　この上は君
有國
景道　いかゞ計らひ
五人　ませうな。
髭黑　麿、天下を知るの始め、詞をもどく不敵のやつら、その儘に差置かれぬ。罰を加へて威勢の程を見知らせん。ナニ、正盛、わが愛臣たる、伊豫の太郎を呼び出せ。
正盛　ハツ。（ト花道の角へ來り）それに控へし伊豫の太郎有信、童子のお召し、急いでこれへ。
有信　畏つてござります。

ト大小の合ひ方になり、向うより有信、赤ッ面、上下衣裳にて出て來り、花道に留り

お召しに隨ひ、また今年、しやッ面見せも有り難い、馴染の芝居へ中一年、橘薫る揚幕を、お受けの聲と諸共に、伊豫の太郎有信め、これまで罷り出ましてござりまする。
髭黑　呼び出せしは、鶴の前、靡かぬのみか賴信と、不義ひろいだ科捨て置かれず。幸ひ杯めぐらす折柄、それにて姫を調味なせ。また滿仲はじめ二人のやつら、わが詞を背くの罪、景道、有國、常陸介、彼れらが首をぶち落せ。

女三人　すりや、あなた方を
成春勝俊　この所で
有信　いかさま、仰せを背くの罪ある者、忽せの沙汰ござつては、君の御威勢輕きに似たり。恐れながら御諚の趣き、然るべう存じまする。
髭黑　然らば急ぎ用意いたせ。
有信　委細承知仕つりましてござる。
有國景道　畏つてござりまする。
ト三保になり、有信、股立ちを取り、上下の肌を脱ぎて、見事に舞臺へふつて來る。此うち有國、景道、正盛、身ごしらへして眞中へ大俎を直し、賴信、鶴の前を引据ゑ、上の方に有國、滿仲がうしろ、下の方に景道、賴信がうしろ、次に正盛、關屋のうしろ、その次に女形立役、これを奴八人、仕丁取り圍み、ずつと上の方の岩に髭黑、長連、雷雲、左右に隨ひ、此うち始終、アリヤ〳〵のかけ聲よろしく仕ふ。
敵役皆々　どこえ。
有信　いづれも用意

四人　仕つてござります る。

髭黑　われは今より雲の上、位に座する祝儀の式。女が肉を肴とし、杯のめぐらさん。長連、杯。

長連　ハヽア。（ト長連、正盛の持つて出た大杯を髭黑に渡す。）

髭黑　猪の熊入道、酌をとれ。

雷雲　畏つてござります る。（ト長柄の銚子を取りあげる。）

滿仲　天に風雨の憂ひあり

成春　月にも蝕の影くらき

賴信　酒呑童子の邪まに

關屋　われ〳〵のみか、姬君まで

照葉　御いたはしき

初瀨　この場の仕儀。

或春
勝俊　味きない世の

立役
皆々　有樣ぢやなア。

髭黑　時刻がうつる、急いで用意。

四人　ハアヽ。

有信　今、酒呑童子の嚴命を、御贔屓頭に蒙つて、科極まりし鶴の前。

有國　違背の罪ある多田の滿仲。

景道　不義ひろいだる冠者頼信。

正盛　それに隨ふ仲光が女房。

有信 有國　いで、手料理と出かけべい。（ト大庖丁を持つ。）

正盛 景道　今が最期だ。

四人　觀念しろ、エヽ。

髭黑　（酒を受けもち）ドリヤ、眺めようかなア。

ト大杯にて呑まうとする。有信は庖丁、三人は白刃を振りあげる。トこの時向う揚幕にて

貞光　しばらく。

皆々　イヤアヽ。

髭黑　待て／＼／＼、今受け持ちし玉杯に

有信　罪ある四人を目の下にと、振りあげし其折から、どうやら聞いた聲音にて、暫くと云つたぞよ。

皆々　イヤアヽ。

有國　物馴れぬ赤ツ面は、直ぐさま顫へが參つたやうだ。今の聲は何方でござつた。

景道　慥か筋向うの裏の方から、聞えたやうでござつたぞ

髭黑　吉例とは言ひながら、耳を貫く今の一聲。

有信　しばらくと聲をかけたは

皆々　何やつだ、エヽ。

貞光　しばらく。

皆々　イヤサ

有信　しばらくとは。

貞光　しばらく〳〵〳〵。

〽かゝる所へ、碓井の荒童貞光は

ト大小人寄せになり、揚幕より貞光、お株の形にて勇ましく出て來り、花道いつもの所にて〆る。

〽今日ぞ萬里の大鵬にも、劣らぬ海老を一はねに、三升の紋の勢ひは、目覺しかりける次第なり。

ト書 この文句にてよろしく、花道吉例の所に住ふ。

皆々 どこえ。

髭黒 今この儀式と違背のやつばら、罪を糺さんその所へ

有信 しばらくと聲をかけ、のめづりつん出たわッぱしめ。そも先づうぬは

皆々 何やつだ、エヽ。

有信 イヤサ

皆々 何やつだ、エヽ。

ト書 こゝにて貞光（團十郎）自作のつらねあつて、「ほゝ敬つて白す」と納まる。

皆々 どこえ。

髭黒 待て〳〵。いつもの暫くより、一際勝るその勢ひ。よく〳〵見れば馴染のわッぱし。今年はお江戸八百八町、お許しうけた座頭株、七代目の貞光だな。

有信 斯うあらうとは思つて居たれど、灸もたび〳〵据ゑる日には、あんまり熱くもないものゆゑ、暫くも續けて出逢へば、さう怖くもあるまいと、思ひの外に今度の暫く、道理こそ今までより、一倍と肝にこたへた。

有國　おてまへさへそれだもの、われ〳〵は猶以て
景道　道理で齒の根が合ひましなんだ。
正盛　こりや、如何いたしたらようござらう。
髭黑　如何と申して麿が目障り、早くあつちへ、退けい〳〵。
有信　ハア、。サア、何れも覺悟さつしやい。引き立てゞござるぞ。
皆々　イヤア、。
有信　彼方に座頭の株があれば、此方に引き立ての株もござらう。長連卿、出なさい。
長連　コレサ〳〵、とんだことを言つたものだ。如何にも築地の親父から、引き立ての株は讓られたが、それは鯰の折のこと。今では雲の上人なれば、引き立ての儀は御免々々。差詰め入道、行きやれ行きやれ〳〵
雷雲　これは又、いらざるお指圖。愚僧も度々手懲りを致し
有國　ハテ、そんな事をお云やらずと、行きやれサ。
景道　あたま役だ、行かつしやいな。
雷雲　同じやうに貴殿たちまで…………よい〳〵、仕方がござらぬ。童子樣の御前といひ、間違つて

成田屋を追ひ出されると、度胸を据ゑて、引ッ立てゝお目に掛けようか。

皆々　お手柄の程が、見たい〳〵。

雷雲　ドリヤ〳〵。（ト花道へ來り）わッぱめ、立ちやいな。

貞光　ナニ、われが引つ立ての血祭り坊主か。名は何と云ふづく入だ。

雷雲　おれが名か。忝けなくも、尊くも、酒呑童子のお側去らず。猪熊入道雷雲だワ。

貞光　なんだ、鰯に湯豆腐ふんだんだ……………意地の穢ない坊主めだ。さうしてうぬは、引ッ立てにうせたか。

雷雲　知れた事だワ、きり〳〵立てやい。……………と云ふやつも古うござりますねえ。モシ親方、御覽じませ。また今年も鯰でござります。少としつこいぢやァござりませぬか。でもマア、あなたは取り分けて、おめでたい顏見世ゆゑ、私しも悅び勇んで、木挽町からお供いたして參りましたが、モシそのあなた、ちつとばかりお願ひがござりますて。

貞光　大分上すべりのした坊主だが、さうしてわれが願ひとは。

雷雲　サア、外の事でもござりませぬが、あすこにゐる惡人めらが、わたしを無理にお前さんの、引つ立てに寄越して、かぶらせようといふ皮肉でござりまする。この皮肉に乘るが如何にも殘念。そこ

であなたへ甘え申して、爰を少つとそちらの方へ、お寄りなすつて下さると、あいつらも鼻が明き、わたしも音羽屋のおぢいさんに、褒められるといふものサ。弟子一人お助けと思召して、どうぞ聞き分けておくんなさりましな。

貞光　ヤレ〳〵、長い事をぬかすやつだ。よいワ。それ程に云ふ事だから、如何にもめでたい顔見世ゆゑ、祝儀心にこの所を

雷雲　アイ〳〵。

貞光　道ある方へちつとばかり

雷雲　アイ〳〵。

貞光　立つてやらうと言ひたいが、いやだ。洒落やァがるナ、けづり廻しめ。うぬ、巫山戯ると、橋本町の仲間へ入れて、おツかぶせの五百羅漢、呑代の建立に出すぞ。早く引つこめ。

雷雲　ところを、おれが

貞光　なくならないか。

雷雲　ムウ、そんならば…………呑代建立。（ト五百羅漢のやうに言ひながら舞臺へ來る。）

皆々　エヽ、おかツしやいな。

奴一　サア／＼、どうでお櫃は廻るゆゑ、潔ぎよくやらかしませう。

奴二　ソレ／＼、とても遁れッこはござりますまい。皆一網にぶッかけませう。

六人　それがよい／＼。

八人　アリヤ／＼／＼。（ト花道へ來り）

奴一　素丁稚め、そこ

八人　立てやい。

貞光　今度は道者の江戸見物を見るやうに、大勢連れでうしやァがつたか。うぬらにも名があらう。一一戒名、そこでほざけ。

奴一　こいつは大分安くするな。事もおろかやわれ／＼は、酒呑童子のお氣に入り、鬼瓦の鐵平といふやつこらさ。

奴二　次はその名も、鬼齒朶崕平。

奴二　鬼念佛平。

奴四　鬼一口平。

奴五　鬼木立平。

奴六　鬼蓮毬平。
奴七　鬼打豆平。
奴八　さてどん尻は、鬼殺呑平といふ二合半、丁稚めそこを
八人　立てやい。
貞光　いづれも樣、あんな押しの强い事を申します。立つ事はいやだ。うぬら、なくなれ。なくなりやうが遲いと、睨み殺すぞ。
八人　さうぬかしやア（ト皆々手を振りあげる。）
貞光　どうしたと。
八人　構はぬ。
長連　こいつはよい。
正盛　コレサ。（ト此うち八人、捨ぜりふを言ひながら舞臺へ來る。）
皆々　エヽ、らつちもない。
有信　最前から座頭ゆゑと容赦すれば、酒呑童子の御前をも憚らず、さま〳〵との慮外、緩怠。この上は有信が、ドレ、引き立てゝくれべいか。

貞光　イヤモウ、來るには及ばない。爰にゐちやァ素袍の袖や太刀の鐺が、あなた方へ障るも無禮だ。たつた今、いかにも爰を立つてやらう。併しおれが立つが最期、後と云つちやァ一寸も寄らない。そこへ行くぞ。

皆々　イヤァ丶。

貞光　はつぽうの用意しろ、エ丶。

皆々　イヤァ丶。

貞光　むめうゐんを買つておけ。

皆々　イヤァ丶。

貞光　さらば御輿を引ッ立てべいか。

ト大小トヒヨになり、貞光舞臺へ來る。素袍の上を脱ぎ、皆々を千鳥にして眞中へ來り、鶴の前はじめ立役女形を圍ひ、有信と入れ替つて、しやんと見得。このうち、アリヤ〱の聲。

皆々　どこえ。（ト納まる。）

滿仲 賴信　碓井の貞光、參つたか。

貞光　ハァ丶。

女　待つてゐたわいなア。
皆々
鶴の　いづれも樣も先き程から、お待兼ねでござりました。
貞光　某し參る上からは、氣遣ひな儀はござりませぬ。大船に乘つたと思つて、落着いてござりませ。
…………時に承はらうは、常俊卿の姬君、鶴の前樣、まつた主人滿仲を始め、なぜ手ごめにはおしやるのだ。
有信　その譯は、おれが言つて聞かせべい。わが君酒呑童子、鶴の前にお心を懸けさせられ、それを否みし姬ゆゑに、違背の罪に行ふのだ。
貞光　して又主人滿仲公、賴信公といひ、關屋どのまで、なんで御首、たまはらんとはなしたのだ。
有國　滿仲公ことは、我が君へお味方申さぬのみならず、諫言なせし越度により
景道　また賴信は鶴の前と、不義ひろいだ科、關屋めも
正盛　その家來たる仲光が、女房たるゆゑ、共に殺害。
皆々　皆仰せを背く罪人だワ。
貞光　イヽヤ、そりや髭黑どのゝ横車といふものだ。どこからそんな空株を、買はしやつたかは知らないが、心を懸けた姬君が、隨はぬとて罪人呼ばはり。また道に正しき滿仲公、何故惡に與みなされん。

敵役　賴信公を不義だといへば、其方も不義の科。お首打つなら道包どのから、先へお首をぶち落さうか。

皆々　サア、そりやァ

貞光　それこれのけて、位を望む、髭黑どのは大罪人。これにも返言ありや、なんと。

敵役　サ、そりやァ

皆々　サァ

貞光　サァ

貞光　サァ〳〵〳〵

敵役　返答はどうだな。

敵役　誰れだと思ふ、エヽ、つがもない。貞光こゝへ來たからには、うぬらが邪ま聞いちやァゐない。

貞光　先づ差當つて童子とやら、酒呑とやら、得手勝手な名をくッ附けた、髭黑どのゝ高上りが、第一に氣に喰はない。ドレ、引きおろして

ト髭黑へかゝらうとする。どろ〳〵にて、貞光五體すくむ思ひ入れ。皆々思ひ入れ。

立女　これは。

皆々　わが君の御威勢見たか。

敵役　成る程見たが、きついものだ。その代りには、よい物の尻尾を、おれが見附けておいた。

皆々　

貞光　

有信　ソリヤ、アノ、どこに。

貞光　こゝにあるワ。

ト髭黒の懐より、錦の神璽を引き出す。皆々、「オヽ〳〵」と思ひ入れ。

滿仲　それこそ紛失なしたる

頼信　神璽の御寶。

貞光　滿仲公より禁廷へ。

滿仲　心得た。（ト神璽を受け取る。）

貞光　これからは、敵役の、惡事の根ざらひをしにやアならない。ナニ、川瀧屋のおぢい、ちよつと逢ひたい。

有信　身共に逢ひたいとは、何の用だ。

貞光　外でもない、中納言常俊卿の重器、雄龍の印、おぬしがほつぽにある筈だ。おれにくりやれ、てえ〳〵しませう。

有信　イヤ、おらアそんな物は知らない。

貞光　さうぬかしやア、斯うして。（ト有信を引き据ゑ、懐を探す。）

有信　どうだ、あつたか。

貞光　ムウ、そんなら二人の船まぐろ、きり／＼と爰へ出せ。

有國
景道　どうしておいらが、そんなものを。

貞光　知らずばこゝへうしやアがれ。（ト二人を毆り倒し、懐をさがす。）ハテ、慥かにこゝにと思ひしに。

髭黒　雄龍の印はあるまいがな。

貞光　イヽヤ、それも在りどころは知れた。

有信　して又そりやア

貞光　これなる中に。（トくゝり枕を引き寄する。）

髭黒　南無三、それを。

ト出す手を振りのける。有信かゝるを突きのけて

貞光　寄りやアがると毆り殺すぞ。（ト枕の中より印を出す）。

鶴の　ヤヽ、それこそ父が家の御寶

關屋　雄龍の印で

女形
五人　ござりまする。

貞光　これ程こゝにあるものを、これで二度だが、アヽ、つがもねえ。イザ、姫君、お受取りあられませう。（ト鶴の前へ渡す。）

滿仲　神璽といひ

鶴の　雄龍の印

賴信　再び戻らせたまひしか。

關屋　さぞお悅びでございませう。

女形三人　これといふも、貞光さんのお働き。

滿仲鶴の賴信　エヽ、有り難い。（ト寶をおし戴く）。

貞光　寶は首尾よく戻り橋、御贔屓めでたき顏見世に、祝ひに一つ〆めませう。

立女皆々　ヨイ〳〵〳〵。

有國景道　此方も一つ〆めませう。

敵役皆々　ヨイ〳〵〳〵。

有信　エヽ、何を馬鹿らしい。…………コレ、惡い所へ又しても、わッぱしめがうしやァがつて、此方の仕事をさゝほうさ。この場はこの儘別るゝとも、また重ねての參會には

髭黑　要害堅き大江山、千丈ヶ嶽に立て籠り、この禮はきつと云ふぞよ。
貞光　念には及ばぬ。たとへ鐵城に籠るとも、貞光が鐵拳に、たつた一打ち。それまでうぬらの命は助け、いづれも方のお供して、今立ち歸るが、どいつもこいつも、言ひ分はないか。
敵役
皆々　言ひ分は。
貞光　どうしたと。
敵役
皆々　ない。
貞光　然らば、イザお立ちあられませう。
へさらば〳〵といふ聲は、當世無双の英雄士、凄じかりける
トこの淨瑠璃のうち、鶴の前先きに雄龍の印を三方に戴せ持ち、賴信、關屋、女形立役ついて花道へかゝる。
有信　ソリヤ。
トこれにて仕丁大勢「やらぬ」とかゝる。貞光、大太刀にて一薙ぎに切り倒す。皆々ぶつかぶりにて倒れる。此うち花道の人數は向うへ入る。貞光もその儘花道へ來る。
髭黑　碓井の貞光。

貞光　弱蟲めら。

貞光
皆々　さらば。

ト貞光、白刃をかつぎ、きつと見得。舞臺も見得。下り葉になり、よろしく貞光、白刃をかつぎし儘、向うへ入る。ト留めの拍子木につれ、直ぐに大拍子のつなぎにて、この幕引ッ返す。

幕

本舞臺三間の間、雨落ちより三尺ほど下げて、高さ六尺ほどの二重舞臺、正面ちぎれ御簾、九尺の間へかけ、御簾の緣、萌葱の地に紺にて瓜にあられの摺込み、左右とも毀れし狐格子、塗り高欄も古びたるが折れくだけ、所々に殘りし體。床下に草生ひ茂る。下手の床下出張りあり、西の横手に高欄古びたる體。東西、松生ひ茂り、吊り枝の松へ屋根の小口を見せ、床下の柱、軒口とも照葉あろひば蔓物からみし景色。一體花山の院古御所の體。山おろし、時の鐘にて幕明く。

トこゝに前幕の經櫃をおろし、山平、一巻を持つて、三人思ひ入れあつて

山平　こゝぞ花山のこの古御所、築地の崩れがあつたを幸ひ、追ひ附かれてはと駈け込んだが、よもや次郎忠正が、こゝまではうせまいて。

手一　住み荒れたれど花山の古御所。



手二　築地を越えても、うせまいて。

山平　そんなら、わいらは氣を附けろ。持參の一卷この所で、錠捻ぢ切つて、親方へ。

手下　合點だ。

ト　あたりへ思ひ入れ。山平この間に經櫃へさし寄り

山平　モシ、親方、これが彼の一卷、卽ちこゝに。

ト錠を捻ぢ切りにかゝる。ばた／＼。人音する。

手下　アレ／＼人音。

山平　合點だ。

ト風の音、時の鐘になり、向うより忠正、一散に走り出て來る。舞臺の人數、經櫃をかつぎ、逃げ
とする。忠正、二人を投げのけ、經櫃を引きおろし、きつと留めて

忠正　動きやアがるな、盜人めら。正しくうぬらは袴垂の手の者ども。この經櫃も詮議もの。先づ差當るは最前の一卷。こつちへ渡せ。

山平　小癪な忠正、强盜多きその中、この辻風のさぶ六が、手にある一卷渡さうや。兩人ぬかるな。

手下　忠正、うぬを。

ト經櫃の棒にて打つてかゝる。忠正、棒を取り捨て、切り拂ふ。兩人、切り立てられ、這々逃げる。山平後より切つて行く。立廻つて見事に切り倒し、一卷を奪ひ取り、腰に差したる袋入りの太刀へ思ひ入れあつて

忠正　首尾よく手に入るこの一卷。殊にこれなる蜘蛛切り丸、賴光公へ、オヽ、それよ。

ト行かうとする。薄どろ〳〵になり、正面の御簾のうちより、誂への蜘蛛の絲おびたゞしく出で、持ちたる一卷へまとふ思ひ入れ。

ハテ、心得ぬ古御所の御簾。月も朧、影さして纏ふはさゝがにの

ト一卷を銜へ、刀へ手をかける。どろ〳〵烈しく、御簾の内より誂への蜘蛛の絲出て、銜へし一卷拔かうとする刀へ纏ひ、立ちすくみの思ひ入れにて刀を拔かうとする。御簾のうちより誂への蜘蛛出で、後へ引き戻す。これにて刀を拔き、切り拂ふこなしよろしく、トゞ白刃をわが手に腹へ突込み、苦しむ。この蜘蛛、忠正が持ちたる刀を奪ひ取り、忠正が首を見事に切る。板返しにて一卷を持ちたる忠正の首出る。この途端どろ〳〵打ちあげ、誂へ凄き鳴り物。この時かき捨てたる經櫃ぱつたり音して四方へ割れる。中より袴垂保輔、百日、大褞袍、一本差し、手甲股引にて顯はれ出て、忠正に目を附ける途端に、下の方、床下より、將軍太郎良門、鉢鬘、着込み、行縢、附太刀、弓矢を持ちながら、重ね草鞋、望みの形にてすつと出で、下より見あげることよろしく、窺ひ〳〵椽にあがり、一卷を銜へし首へ兩方一度に

手をかける。きつとなり立廻りよろしく、薄どろ〳〵にて、首板返しにて、誂への大蜘蛛になり、一卷を銜へて御簾の内へ入る。兩人驚き行かうとして立廻り、御簾を引きちぎる。此うち一面に誂への蜘蛛の巣、銀張唐紙古び、よき所に蜘蛛の精靈、凄き下げ髮、白の着附、鼠地の十二單衣、いづれも蜘蛛の絲ちら〳〵と見える模樣、色のかはりし緋の袴、物凄き合ひ方。以前の一卷を開き、軒もる月にかざし立ち身、兩人惘りして左右より一卷へ手をかける。蜘蛛の精ちやつと一卷を隱す。よき切つかけにて鳴り物變り、三人だんまりの立廻り。トゞ蜘蛛の精の手へ一卷納り下の方へ行く。尤もこの立廻り二重舞臺の上なり。袴垂、將軍太郎上の方へ行きて、落しある袋入りの刀を取りあげ、兩人爭ふ。袴垂の手へ鞘は殘る、將軍太郎思はず白刃を拔く、直ぐにどろ〳〵、蜘蛛の精この劍に恐れし體にて、一卷を銜へ、九字を切る、思ひ入れ、兩人きつとなる。蜘蛛の精立ち身の儘、大どろどろにて直ぐに消える。兩人この體を見て惘りして左右へ別れる。これにきつと目を附け思ひ入れあつて、袴垂は白刃、將軍太郎は鞘を取らうとする、立廻りよろしくあつて拍子

幕

幕引き附けると拍子木にならひ、花道よきところへ蜘蛛の精、派手なる振り袖、練の帽子、金銀の扇を持ち、以前の一卷を銜へ、薄どろ〳〵にてセリあがる。途端に東西棧敷へ紅白梅の盛りの水引を引き出す。蜘蛛の精セリあげ、きつと留る。こなしあつて顏へ扇を當てる。誂への揩り鉦入りの賑かなる唄になる途端に、誂への胡蝶二羽、目先きへ舞ふ。これに目を附け、扇にて拂ふ事などよろしく、揚幕の方へ舞ひ行く。蜘蛛の精これに目を附け、こなしあつて向うへ入る。知らせつき、

シヤギリ。

第壹番目　幾野海道追分の場

四立目　笛吹峠春おろしの場

同返し　栗ノ木村の場

役名。

二ノ瀬村、源六。御厨七郎俊連。丹波太郎鬼作。栗ノ木村又次、實は、海上刑部太郎。修驗者、實は、大江郡領政平。百姓、五知右衛門。百姓、芝作。庄屋。雲助。狩人。丹波太郎手下、勘太。見世物師、善幸。又次娘おくり。鶴の前。お浦實は刑部太郎娘、浦淃。

本舞臺三間の間、一面の淺黄幕、上の方山の張り物。正面好みの辻堂。下の方土竈の茶店。すべて丹波海道幾野追分道の體。幕の内よりお栗、やつし前垂れがけにて茶を汲んでゐる。五知右衛門、芝作、百姓の形、大きなる畚を二つ、太繩を入れてこれをかたげ、茶を呑んでゐる。善幸、木綿合羽旅の形にて腰をかけゐる。雲助二人、駕籠をおろし、煙草をのんでゐる。この見得、在郷唄にて幕明く。

くり　どなたもお早うござりました。

駕一　旦那、これからは石道だ。もう一丁場やりませうか。

駕二　丹波の笛吹峠、名代の難所でござります。

五知　イヤモウ、毎日歩きつけてゐるわしさへ、大儀な道サ。

善幸　わしは折々登り下り、この在所の栗ノ木村、又次といふ人を尋ねるのサ。

くり　栗ノ木村はわたしが在所、父さんも今日は家にゐる、行てお逢ひなされませ。

駕一　栗ノ木村の又次どのは、この丹波の國で、不具者ばかり集めて、京大阪や江戸の盛り場へ、見世物に賣つてやるが商賣。

善幸　わしは江戸の築地にゐる見世物師だが、この栗ノ木村へ見世物の相談、冬のうちに來たのでござります。

芝作　わしらは、この山間の岩茸を取りに、この畚に乘つて谷へ下りたりするが、珍らしい名も知れぬ、けだ物などを見ることがござります。

善幸　珍らしいといへば、この間、どこやらから眞黑な馬が駈け歩いて、こゝらあたりの田地田畑へ踏みこみ、荒すとのこと。

くり　その話しはわたしも聞きましたが、怖い事ぢやさうにござります。

芝作　ドレ、わしらは谷へ下りて、一せいやりませう。

善幸　貴樣達も骨を折つた代りに、一杯づゝ呑ませやせう。
駕舁　そりやア、有り難うござります。
芝作
五知　ドリヤ、わしらは谷へ行きませうか。
くり　そんならお早うお出でなされませ。
善幸　こりやア、お世話でござりました。
　ト在郷唄になり、駕籠舁は善幸を駕籠に乘せて下座へ入る。おくり殘り
くり　ほんに、いつも姉さまが、この流れへ布晒しにござんすが、今日は天氣もよし、もう見えさうな
　ものぢやわいな。
勘太　(向うにて) アヽ、コレ〳〵、姉さま、料簡しなさい〳〵。
　ト誂へ摺り鉦入りの唄になり、向うよりお浦、前垂れがけにて手拭を冠り、盥に白布を入れて抱へ、片手に雲助の勘太を捻ぢあげ、下駄をはいて出て來る。あとより丹波太郎、三度飛脚、引廻し合羽、旅形にて、荷物をかつぎ出て來る。勘太、花道にて
　コレ〳〵姉さん、指が折れる、どうするのだ〳〵。
うら　どうの斯うのは知れた事、山家女と仇口の、古いせりふを洗濯の、見ず知らずではあるまいし、

今年も替ぬお目見えに、あられもないとお叱りを、替り三河やさま〴〵の、てんがうさんす雲助さん、必ず弄つて下さんすな。（ト勘太を取つて投げる。）

太郎　コレ〳〵、その腹立ちはお前が尤も。あいつが悪洒落を言つたもので、荷物を自身にこの通り、わしがかたげてお前に詫び事。マア、料簡してやつてくんなさい。

勘太　コレ、姉さん、おれが悪かつた。料簡してくんなさい〳〵。

うら　それ見やしやんせ、ほんに男といふものは、女子に逢うては、脆いものぢやわいなア。

太郎　そんなら、それで料簡して

うら　この場は済ましてあげようわいなア。

勘太　そんなら親方、マア、あちらへ。

太郎　とう〳〵こゝまで擔がせをつた。（ト唄の切れに三人、本舞臺へ來る。）

くり　姉さん、布洗ひにござんしたか。何やら聲高に、あのお方はえ。

勘太　いつも登り下りさつしやる酒問屋の旦那サ。つい供をしてお前の姉御に、常談を言つて腹を立てさせた。よいやうに頼みます。

くり　いつも〳〵、お前もマア、嗜んだがよいわいなア。

太郎 ドレ〳〵、マア、一服のんで行きませう。（卜床几に腰をかける。）

くり 姉さん、今江戸のお方がござんして、父さんを立場で待ち合してぢやわいなア。

うら そんなら父さんに知らさずば、また腹立ちであらう程に、そのお方を連れましておぢやいなう。其うちわしや、見世番しながら布を洗ふほどに、早う行ておぢや。

くり アイ〳〵。そんなら姉さま、見世を頼んだぞえ。

卜在郷唄になり、お栗下座へ入る。向うより源六、やつし旅形にて、澁紙包みと行李を、ふりかけして出て來て

源六 オヽ、お前は早くござりました。草鞋を買つてゐるうち、大きに遲れた。

太郎 イヤ、わしはどうで幾野在に寄り道があり、殘り多いが、こゝで別れます。

源六 イヤモウ、旅は道連れとやら、昨日から大きにお世話になりました。

太郎 アヽコレ、酒でもあれば飲んで別れたいが、姉さん、酒はあるまいか。

うら アイ、酒はこの先きで　卜太郎をよく〳〵見て　ヤ、お前は

太郎 アイヤ、エヘン〳〵、アヽ、まだこの先きが難所と聞けば、なんと急いで漕ぎ附けようか。

勘太 それがようござります。

源六　左樣なら、もうお出でなされますか。
太郎　心が急けば別れます。アヽコレ、登りを急がぬと、ゆつくりとお浦さん、お前にも話しが。……
……イヤ、また重ねて。
源六　これはお名殘り多うござります。
うら　隨分御機嫌よう、お出でなされませ。
太郎　急いでござりませ。
勘太　サア〳〵、やりませう。
ト在鄕唄になり、丹波太郞、勘太、下座へ入る。源六こなしあつて
源六　ヤレ〳〵、道連れに別れたら心細くなつた。併し、もうこゝが追分ならば、僅かであらう。（ト煙草を吸ひ附けようとして）……モシ、火を一つ入れて下さい。
うら　ハイ〳〵　お火でござりますか。（ト火入れ取つて顏見合せ）……お前はどうやら見たやうな。
源六　イカサマ、わしもこなたを。
うら　オヽ、ほんにソレ〳〵、二ノ瀨村の源六さんぢやござんせぬか。
源六　成る程三年あと、在所にゐた時分心易くした、又次どのゝ娘御お浦どの、ハテ、變つた所で逢ひ

ました。

うら　マアノ〵、お前も達者で、おめでたうござんす。

ト茶を汲んで、火入れに火など入れる。合ひ方。

源六　ヤレノ〵、久し振りで逢ひました。見さつしやる通り山挊ぎで、旅をするにもこの通り、商賣道具を放さずに、先きから先きの旅暮し。二年振りでこなたにも逢ひました。又次どのもお達者かえ。

うら　隨分達者で居ります。それは格別、今お前が連立つてござんしたお人は、ねんごろにしなさんすお方でござんすかえ。

源六　イヽヤ、あれは一昨日、但馬海道からフト道連れになつて、泊り〵も一人旅ゆゑ、世話になりましたが、どこの人だか、名も所も知りませぬ。

うら　エヽ。

源六　エヽとはえ。

うら　サイナア、お前はツイ道連れになつたばかりでござんすかえ。

源六　それがどうしました。

うら　コレイナア、おりや盗人でござんすわいな。

源六　エヽ。

うら　この海道筋で、ありや丹波太郎といふ、盗人の頭でござんすわいな。

源六　ムウ。そんなら彼奴は、盗人の頭でござるか。

うら　モシ、お前、金を持つてはゐなさんせぬか。

源六　エ。

うら　イヽエイナア、路銀ないば餘程の金、それを見込んで道連れになつて、附いて來たと思はるゝわいな

源六　（思ひ入れあつて）ムウ、怖い者でござります。護摩の灰が商賣の、目角に違ひござりませぬ。奉公挊ぎのため辛抱して、拵へた金がござります。

うら　そんならその金を見込んで、大方峠の山中に、お前を待つてゐるに違ひござんせぬぞえ。

源六　何をいつても多勢に無勢、大事な金を取られては大難儀。どうしたらようござりませう。

うら　モシ、そりや、斯うしなさんせ。その路銀を、わたしに預けて行きなさんせ。

源六　アノ、二百兩を。

うら　サア、さうすれば、もし大勢で取り巻いても、金さへ持つてござんせにや、大事ないぢやござん

せぬか。

源六　イカサマ。金さへ無けりや、どうするものだ。お前の言はしやる通り、預けませう。

　　ト懷の財布より二百兩を出す。お浦受取り、手拭にて包み

うら　ツイ道通りの旅人なら、心も附かず敎へもせねど、二年振りで逢うたお前、見す〳〵難儀をそれなりに、捨てゝ置いては氣の毒なゆゑ、預りませうとは言うたれど、わたしも女、知つての通りの父さまの氣質なれば、(ト髮にさしたる笄をぬいて)この笄は譯あつて、親の讓りの大切な割り笄、つむりの道具といふではなけれど、粗末にならぬ品ゆゑに、髮の飾りの身嗜なみ。これをお前に渡して置けば、いつ何時でもわたしが內へ、それを持つて、取りにお出でなされませいなア。

源六　ハテサテ、深切に敎へて下さつたお浦どの。見ず知らずの人ではなし、こなさんの內さへ聞いて置けば、大事ござりませぬ。

うら　でも、どういふことで、お前の來られぬその時は、この笄さへ寄越しなさんすりや、金は慥かに渡してあげるわいなア。

源大　成る程、さういふ事なら、この笄、わしが方へ預りませう。して、お前の內といふは

うら　幾野の里の村續き、又次というて、栗の木のある放れ家。

源六　又次どのと尋ねませう。（ト七つの鐘鳴る）

うら　もう、ありや、七つ。モシ、斯うしなさんせ。この麓から峠へかゝる、近道まで教へてあげうほどに、ちつとでも日の高いうちに行きなさんせ。

源六　それは重々忝うござります。どうぞ近道を教へて下さりませ。

うら　そんなら、わたしと一緒に。

源六　案内して下さりますか。

うら　サア、ござんせいなア。

ト在郷唄になり、兩人連れ立ち、下座へ入る。ト善幸出で來り、あたりを見廻し、思ひ入れあつて

善幸　いつぞや、都岩倉にて、梢にかゝりし相馬の白旗、不思議にわが手に入りたるも、栗ノ木又次と心を合せ、徒黨を集むる屈竟の一品なれど、馬の拔け出で空虚となれば、たゞの白旗。最前の話しといひ、何でもこの旗へ黑馬を、戻したいものぢやが。

皆々　サア／＼、ござれ／＼。

トこれに恟りして、白旗を、お浦が持つて出た洗濯盥の中へ入れる。ト下座より、お栗一緒に民右衛門、庄屋の形、百姓二人、ワヤ／＼云うて出で來り

善幸　こりや、マア、皆の衆、何を騷がつしやります。
民右　何事とは、この間から噂のあつた黑馬、此方の村へ刎ね込みました。
皆々　イヤアヽ。
くり　コレイナア、わたしや怖いによつて、皆さんと一緒に、早う内へ去にたいわいなア。
民右　この庄屋が送つてやりませうから、皆の衆、道々氣をつけて行きませう。
善幸　わしも後から行くによつて、又次どのに、よく言つてくだされや。
くり　アイ／＼。そんなら後からお出でなさんせ。
皆々　サア／＼、行きませう／＼。

トてんつゝになり、山おろし。この人數皆々向うへ入る、善幸殘り

善幸　ムウ、そんならいよ／＼噂の黑馬、この旗から拔け出たに違ひないわえ。

トこの時、お浦出て來て、そこらを尋ねる。善幸が持つてゐる盥を見て

うら　めつさうな、この盥を。（ト持つて行かうとする。）
善幸　アヽ、コレ／＼、その盥をどこへ持つて行く。
うら　こりや、わたしのぢやわいな。

善幸　それでも、これは

うら　ハテ、何をしなさんすぞいな。

ト争ふ。大どろ／＼になり、向うより誂への黒馬一散に走り出る。あとより民右衛門、百姓皆々棒を持ち追ひかけ出る。どろ／＼にてお浦、善幸争ひの中へ入る。皆々、ワツト逃げる。善幸も皆々と一緒に逃げて入る。お浦逃げるはずみに思はず手綱をふまへる。馬留る。誂への鳴り物になり、正面の辻堂の扉を開き、御厨ノ七郎俊連、五十日鬘、大小、武者修行の形にて出る。この時三立目の黒雲下りる。兩人きつとこれを見て思ひ入れ。矢張り薄どろ／＼。

俊連　葉公龍を好んで畫き、または鏤めども、眞の天龍を見て魂ひを失ふ、これ龍にて龍にあらざるものを好むとやいはん。

うら　女のよれる黒髪には、大象もよく繋ぐと、色に引かるゝ佛の戒め。

俊連　それは方便、これは又、あればあるもの、これは稀代。

うら　形に影の駒の足、思はずこゝに留まりしは

俊連　手綱はまさに繋ぎ駒、魂ひ入れてその形、現はれ出でしと覺えたり。しるしは目前、こゝに寫して。

ト懐より錦の袋に入れし鏡を出す。大どろ／＼にて馬の上へ黒雲おりる、ト馬は消える。お浦フツ

ト盥の中を見る。白布に馬現はれる。

うら　ヤ、この白絹に、おのづから、形を現はす繋ぎ馬。

俊連　ナニ、白絹とは。

トつか／＼とお浦が抱へし盥に手をかける。お浦振り拂ふと、俊連思ひ入れ。

うら　こりや、何としなさんす。

俊連　サ、それは。（ト誂への合ひ方になる。）

うら　つひに見馴れぬ旅のお方。

俊連　イヤ、外でもない、今の樣子、荒れたる馬の口綱を、踏み留めたお女中、御亭主の名が聞きたい。

うら　ほんに、マア、何の事かと思うたら、わたしに夫はござんせぬわいなア。

俊連　そんならこなたは、寡女か。

うら　それ聞かしやんすお前は

俊連　見らるゝ通りの遠國武士、山陰道にしるべを求め、仕官を望む身ながらも、武士も及ばぬ今の有樣、女房に持ちたい。

うら　アノ、お侍ひ樣が、賤山樵の娘を

俊連　大事ない。こなたさへ應と云や、侍ひやめて町人百姓。

うら　アノ、そんなら眞實それ程に。

俊連　嘘と思はゞ、今こゝで。

うら　心中見せうと言はしやんすも

俊連　古いと思はゞ、洗濯の、盥のうちに

ト白旗に手をかける立廻り。俊連が懐より以前の鏡を落す。お浦ちよつと取り上げる。

うら　この鏡は。（トひつたくり俊連懐へ入れる、思ひ入れあつて）女房にならうわいな。

俊連　ヤ。

うら　お前の心が知れたによつて

俊連　女房になる氣か。

うら　アイ。

俊連　して、こなたの住家は。

うら　この山續きの栗ノ木村、又次といふがわたしの父さん。

俊連　ムウ、聞き及んだる栗ノ木村。

うら　わたしが内へ
俊連　尋ね求めて
うら　必ずともに。（ト俊連は盥、お浦は俊連の懐へ思ひ入れ。）待つてゐるぞえ。
　　ト時の鐘、唄になり、お浦盥を抱へ、向うへ入る。
俊連　ハテ、心得ぬ今の女。盥の中へ入れありしは、慥かに相馬の家の旗。わが所持なしたる名鏡の、奇特に、消えて黒馬の、形は正に繋ぎ馬。（ト懐より鏡を出し、思ひ入れあつて）……女が在り家は栗ノ木村。尋ね求めて今の白旗。とはいへ我が身のこの姿。ムウ。
　　ト思ひ入れ。百姓一人出て
百姓　その名鏡を。
　　ト取りにかゝる。立廻りにて、エイと當てる。思ひ入れあつて
俊連　幸ひこれなる狩人が。ムウ。うせう。
　　ト思ひ入れ。時の鐘になり、俊連百姓を引きとらへ入る。ゴン〳〵にて、淺黄幕切つて落す。
　　本舞臺一面岩組、眞中に谷の蔭山道、下の方九十九折のやうにして、正面に小さき地藏堂、奥深に

山組の模様よろしく、兩方に振りよき松の枝、蔦葛からみ、總て丹波の國笛吹峠谷間の模様、時の鐘、山おろしにて道具とまる。ト右二重舞臺に駕籠舁二人と胴六勘太、以前の形、丹波太郎、盜人の形にて、旅形の若い者をふまへ、錦の袋に入りし蜘蛛切り丸を持つてゐる。

勘太　頭、息の根は

三人　留りましたか。

太郎　こいつは慥かに源家の重寶蜘蛛切り丸。頼親公へ渡せば一廉の金。

勘太　そんならこの劍が

太郎　この侍めは慥かに、藤原家の娘、鶴の前が供をして、うせた奴には違ひない。此奴がこゝへうせるからは、鶴の前もうろ〳〵と、この峠へかゝるは知れてある。コレ胴六、わりやア、この劍を都へ持ち行き、頼親どのへ手渡しするか、多田の館の尊國君に、慥かに手渡し、合點か。

ト渡す、胴六取つて

胴六　呑み込みました。して、頭には。

太郎　鶴の前が來るを待つて、こゝで彼奴めを。

胴六　そんなら、頭。

太郎　早く行け。

胴六　合點だ。(ト蜘蛛切り丸を持つて向うへ入る。始終時の鐘。)

太郎　常俊が娘の鶴の前、今一色の雄龍の印を所持なして、此道へかゝるは必定。こゝへ來たなら合點か。

勘太　呑み込みました。

駕舁　(向うを見て)アレ／＼、慥かに女連れ。

太郎　日も暮れかゝれば丁度幸ひ。

勘太　巣を張つてあいつらを

太郎　二人ともに來い。

ト時の鐘、合ひ方になり。太郎、勘太、駕籠舁、上の方へ入る。ト向うより關屋、鶴の前、三立目の姫のこしらへにて、連れ立ち出て來る。

關屋　常々も申しまする通り、幾野の麓には、私しが知る邊もござりますれば、これにお忍びなされまして、時節をお待ち遊ばしませ。

鶴の　いつぞや都岩倉にて、危い所をやう／＼遁れし、みづからが身の上。頼信樣とも別れ／＼、世を忍ぶ身の味氣なさ、この上とも、其方を力と思ふわいの。

關屋　お氣遣ひ遊ばしますな。女ながらも藤原の仲光が妹、この關屋がお附き申してゐるからは、やがてめでたう頼信樣と、御祝言させますするでござりませう。（ト時の鐘を打つ、月出る）……折惡う日は暮れて、人里知れぬこの山中。月影をしるべに、サア、おひろひ遊ばしませ

ト始終時の鐘にて、舞臺へ來て、二重舞臺へかゝる。ト鶴の前、道の疲れに惱みし思ひ入れ。

鶴の　この程の心遣ひで、いかう痞へが差込んで來たわいの。

トこの時うしろへ太郎、駕籠舁、勘太出かゝりて窺ひ、太郎段々に囁き合ふ。

關屋　折わるう、藥はなし。どうしたものであらう。

太郎　旅のお女中、藥を進ぜませう。

關屋　これはマア、どなたか知らねども、御覽の通りの女連れ。左樣ならばお藥を。

太郎　オヽ、隨分やらう、その代り、其方の藥の萬金丹、しつかり持つた路用の貯へ、ありたけ此方へ渡してしまへ。

勘太　聲を立てもこの山中。

駕二　鶴の前に乳人關屋。

勘太　こびいて行けば、褒美はずつしり。

關屋　ムウ、すりや、われ〳〵が身の上を、知つての上の狼藉よな。
太郎　こゝへ來たのは地獄落し、叶はぬ事だと諦めて、着てゐる物から頭髪の道具、路用殘らず置いて行け。
關屋　ヤア、慮外なる盜賊ども。女と思ひ不敵の詞。近寄つたら、爲にならぬぞ。
太郎　四の五のと面倒な。ソレ、合點か。
兩人　合點だ。

ト禪の勤めになり、鶴の前を引つ立てる。關屋、引きのける立廻り。太郎、鶴の前を引つ抱へ、連れて行く。關屋、やるまいと留める立廻り。一腰を拔いて駕籠舁の眉間を切る。

勘太　ソリヤ、拔いたぞ。

トこれより禪の勤め烈しく、勘太は向うへ逃げて入る。駕籠舁、關屋に打つてかゝる。關屋、鶴の前の手を引きながら、片手にて皆々を追ひまくり入る。ト太郎殘り

太郎　素手ではいかぬあの女め。こりやァ、おれが手をおろして。

ト思ひ入れあつて木蔭へ忍ぶ、トまた禪の勤めになり、上の方より關屋、駕籠舁立廻りながら出で來て、トゞ駕籠舁を切り倒し、がつくりとなる。鶴の前走り出でゝ取り附き

鶴の　コレ、關屋、心を慥かに持つてたもいなう。

トいろ／＼介抱する。關屋手負ひ苦しみ、いろ／＼あつて

關屋　鶴の前樣、あなたにお怪我はござりませぬか。嬉しや、とは云ふものゝこの深手。モシ、大切なるこの雄龍の印、頼光公へ差上げて、再び常俊公の勅勘を。

百姓（出て）雄龍の印、此方へ渡せ。

トひつたくりにかゝる。關屋、雄龍の印を口に銜へて百姓と立廻り、互ひに合打ちになる。兩人思はず二重舞臺より前の谷へ落ちる。鶴の前うろ／＼。

鶴の　アヽコレ、關屋イなう／＼。手負の上に谷底へ。エヽ、どうしたらよからうぞいなう。

トこの時太郎うしろへ出て來て

太郎　阿魔め、われが懐中にある雄龍の印、おれに渡せ。

鶴の　ヤアヽ、そんなら其方も

太郎　オヽ、知れた事。雄龍の印を早く渡せ。

鶴の　イヤ／＼、大切な一品、其方たちに渡さうか。

太郎　きり／＼此方へ渡せ。

鶴の　イヽヤ、其方を。（ト懷劍にて突きかゝるを叩き落し、一かせ切る。）こりや、みづからをも殺しやるかいの。

太郎　目にかゝつたる雄龍の印、持つてうせたが、おのれが寂滅。

鶴の　頼信樣にはお別れ申し、剰さへ盗賊の手にかゝり、こゝで死ぬるか。エヽ、口惜しい。

太郎　こま言吐かずと。（ト切り倒し、懷をさがし、いろ〳〵あつて）……ムウ、すりや、雄龍の印は、もう一人の女らうめが。

大勢　サア〳〵、ござれ〳〵。（ト向うにて聲する。）

太郎　南無三。（ト東の方へ行かうとすると、東の揚幕にて）

大勢　サア〳〵、ござれ〳〵。

トこれにて太郎、二重舞臺上の方へ入る。ト山おろし、時の鐘になり、向うより民右衛門松明を持ち、五知右衛門幕明きの形にて斧を持ち出る。跡より俊連、同じく百姓の形、打ち交り出て來る。東の方より芝作、同じく斧をかたげ、百姓大勢松明を持ち、この跡より源六、以前の形にて出て來る。兩方人數舞臺へ來て二重へあがり

芝作　これは五知右衛門どの、今戻らつしやりますか。

民右　この頃は物騒だによつて、大勢で戻りました。
五知　芝作どのや、今の切り合ひを見さしつたか。
芝作　あちらの山から見ましたが、どうしましたね。
庄屋　コレ〳〵、こゝらあたりは血だらけでござる。
皆々　ハア、、二人ながら谷へ落ちたと見えまする。
　　ト松明にて谷底を見る思ひ入れ。始終時の鐘。此とき中に交りゐたる俊連、源六、そこらを見て
源六　何か奪ひあうて谷底へ落ちた樣子。アレ〳〵、切り合ひの音がします。
俊連、大方泥坊共の仕業でござらう。誰れなりと谷へ下りて、加勢してやつたらなア。
皆々　コレ〳〵、すべり落ちまい、危ないぞや〳〵。
俊連　（芝作と五知右衞門が持つてゐる畚を見て）モシ〳〵、お前方の持つてござるは、そりや畚ぢやござりませぬか。
五知　こりや、岩茸を取る時乘つて下りる、畚でござるわえ。
俊連　そんなら、それに乘つて、下へ下りたらどうでござりませう。
五知　なんでもこの間は、この峠へ追剝が蔓るとのこと。下へ下りて追剝めを、ぶち殺すがようござる。

俊連　そんならその谷底へ、誰が見に行く。

皆々　わしらは氣味が惡うござる。

源六　イヤ、下へはわしが下りて見ませう。

俊連　ヤア、貴様は

源六　わしは笹山越えの狩人でござるが、この間京へ登る道で、盗人に附かれて、金を取られる所でございました。どうぞわしをやつて下さりませ。

俊連　わしも、水上郡へ歸る者でござるが、來かゝつてのことなれば、わしをは谷底へ、やつて下さりませ。

芝作　コリヤ〳〵、畚も幸ひ二ツあるによつて、二人一緒に下りたがよい。

皆々　それがよい〳〵。

俊連　谷底は暗からう。火繩を貸して下さりませ。

庄屋　ソレ、火繩を貸しまする。（ト俊連に火繩を渡す。）

源六　上からはその松明、下からは綱を引くを合圖に、引き上げて貰ひませう。

皆々　合點だ〳〵。

源六　お月様も出てござるし、物の黒白も大概知れませう。

俊連　繩を引いたら上げる手筈。合點かや。
皆々　合點だ〳〵。
ト始終時の鐘にて、畚の綱の先きを松の枝へ引きかけると、上より吹替の大綱を括りおろす。これより畚をおろし附け、俊連・鐵砲を持ち、源六兩人畚の中へ乘る。皆々捨ぜりふよろしくあつて
俊連　しつかりと賴むぞや。
源六　合圖を忘れまいぞや。
皆々　合點だ〳〵。（ト少し繰り下ろす。）
五知　なんと、畚を下ろすなら、ワツサリと木遣りでやらかさうぢやアないか。
皆々　よからう〳〵。庄屋どの、音頭を賴みます。
民右　合點だ〳〵。……ヨイ〳〵ヨヤサノサ。
ト山おろし、誂への鳴り物になり、二重舞臺をせりあげると、畚は少し下へさがる。鳴り物に附き皆々綱を繰り下ろす見得。畚の中なる俊連、源六は乘つたまゝに、靜かに下へ下りる心。右鳴り物にて一面にせりあがる。よきほどに山幕にて舞臺の人を隱す。右の鳴り物、こだまの入りし合ひ方、始終山おろし。

源六　なんとマア、こなさんもわしも、替つた因縁でないか。一生に一度、馬か乗物に乗る氣でゐたが、畚に乗るとは夢々思はぬ。

俊連　イヤ、又これも話しの種。併しお前にこんな所で、始めて逢はうとは思ひがけない。この顔見世から、萬事お世話になるでござりませう。

源六　ナニサ、今まで隣り町や向ひ町で往き違つて、今度出合が互ひに初めて。友達の餘計になるのがわしが好き、何でも心安くこれからしませう。

俊連　火繩があるが、マア一服のまつしやりませ。（ト鐵砲の火繩を出す）。

源六　イカサマ一服やりませう。アヽコレ、始めての出合に、中途でお茶さへ進ぜませぬ。

俊連　イヤモウ、それはお互ひでござります。いづれも樣へもこの末とも、この芝居に重年したお禮を、申し上げたいにも此やうな形。高うはござりますれど、眞ッ平御免下さりませう。

源六　アレ〳〵、谷底が近いかして、水音がしますぞえ。

俊連　ほんに流れの音が聞える。もちつとであらう〳〵。

ト、チョン〳〵にて幕段々に引き上ぐる。舞臺前谷底をせり上げる。こゝに關屋、百姓を仕留めし心にて、袱紗包みを銜へてゐる。この時谷蔭より源六、俊連、畚より下りて、思ひ入れあつて

兩人　ヤアヽ、たしか人影。

　　トこれにて、關屋の銜へたる印を源六取り、ちよつと立廻りに、關屋を當てる。

源六　こりや、コレ、慥かに雄龍の印。

俊連　それを。(ト取らうとする。)

源六　アイヤ、こりやァおれが拾つたものだ。

俊連　でも、ちよつと。

　　ト取らうとするを振り拂ふ。この時俊連の懐より以前の鏡を落す。源六取り上げ

源六　この一品は。

俊連　それを。(ト手早く取つて懐へ入れる。)

源六　ムウ、氷上郡の百姓と、望んで下りし舂おろし。谷の底より心の底、おぬしも只の百姓ではないわえ。

俊連　女が持つた一品を、取つて返さぬわれも又、落つれば同じ谷の底、見附けた物を、此方へ渡せ。

源六　イヽヤ、それよりわれが懐、錦の袋は慥かに鏡。

俊連　雄龍の印と見た目は違はぬ、それを此方へ。

源六　その鏡を。

ト俊連が懐へ手を入れる。やるまいと立廻り。山おろし、誂への鳴り物になり、兩人切り結ぶと、きつかけにて月を隱す。忍び三重になり、これより兩人闇の模樣よろしく、源六、俊連を目懸けて切つてかゝる。この時源六持つたる雄龍の印を落す。俊連取りあげ、うまいといふ思ひ入れ。チヨンと月出る、兩人顏見合せ、トン／＼と後へよつて斧へ手をかけ乘つて、白刃にて打ち合ひ、きつと見得山おろし、大小の鳴り物にて、斧を段々引き上げる。ト後の山を段々にセリ下げると、山の半腹の模樣。兩人乘つたまゝの立て、俊連、雄龍の印を銜へたるを見て

源六　雄龍の印も、さてはおのれが。

俊連　何を小癪な。

トちよつと切り結び、トヾ俊連、白刃にて源六が乘つたる綱をポンと切る。ト源六それなりにドンと谷底へ落ちると、鳴り物やんで時の鐘、山おろし、忍び三重になる。ト俊連刀を納め、二種を持つて

思ひがけない手に入りし雄龍の印、又この一品は照葉の鏡、二いろ共に、エヽ、忝けない。

トにつたり笑ふ。ドンと筒音して、鏡を持つたる俊連が利腕に當る。鏡を下へ取り落す。

南無三、鏡を谷底へ。ムウ。

ト腕を抱へながら下を見込む。鳴り物になり、斧と後の山を段々くせり上げる。下より谷底をせりあ

げる。源六、俊連が持つて下りたる鐵砲を持ち、關屋、筒音にて心附きし心にて、源六に切りかゝつ
てゐるを留めてゐる思ひ入れ。この見得にてセリ上がる。きつと見得。

源六　コレ、うろたへまい、おれは旅人。

關屋　イヽヤ、盜賊。（ト切り附けるを受け留めながら顏見合せ）

源六　ヤ、こなたは。

關屋　お前は。（トがつくりなる。百姓起きかへつて、）

百姓　女め。（ト切り附ける、身を交して百姓を一かせ切る。）

源六　コレ、氣を慥かに。（ト關屋落ち入る。源六こなしあつて、）ホイ。

ト百姓を下へ切り倒す、百姓見事にかへる。源六手を合せ、チョンと木のかしら。源六憂ひのこなし
よろしく　　拍子　　幕。

山おろし、時の鐘の繋ぎにて、この幕すぐに引返す。

本舞臺、三間の間二重舞臺、上の方反故張りの障子、向う赤壁、正面の欄間に、宮のやうにしたる
お札箱をかけ、いつもの所門口、藪疊、古井戸、上の方栗の木、すべて丹波の國栗木村又次内の體。
幕の内より又次、白髪親仁、善幸、前幕の形。おくり、娘にて地をひき、子役の猿、袖なし羽織着て跡

つてゐる。皆々見てゐる。門口に人足形にて、菰包み、長持を置いて見てゐる。賑かなる鳴り物入りの合ひ方にて幕明く。ト右の鳴り物にて、子役ちよつとしたる所作よろしくあつて納る。皆々、ヤンヤヤンヤと囃すと、奥よりお浦、盆に茶を汲んで持つて出で

うら　どなたもお茶をあがりませいなア。

善幸　又次どの、この猿めはよく覺えましたの。

又次　イヤモウ、大抵骨を折つて仕込んだことぢやござらぬ。

くり　父さま。先にからあの衆が待つてぢやわいなう。

人足　又次どのや、見世ものをこの中へ入れて、登せるとのことゆゑ

同　菰包みにして持つて來ました。

善幸　御苦勞々々、此方へ人足入れて下さりませ。

ト人足長持を内へ舁ぎ入れる、おくり、狀箱を出して

くり　父さん、最前庄屋樣から、急にお觸れぢやといつて、持つてお出でゝござんすぞえ。

又次　何事か聞いて置いたか。

くり　イヽエ、むづかしいことゆゑ覺えぬわいな。

うら　そりや、わたしも聞いてゐましたが、何やらお尋ね者とやらの事ぢやといなう。
又次　(状箱を開け)　こりや、御厨の七郎が人相書。
うら　そんならそれが。(ト思ひ入れ)
又次　アイヤ、いつものお觸れ書。後にとつくり見よう。押入れへ入れて置きや。
うら　アイ〳〵。(ト取つて懐へ入れる)。
善幸　又次どの、この丹波路へ入り込んだら、引つ括つて
うら　エヽ。
善幸　イヤサ、引つ括つて置かぬと、この猿めもぢつとしてはゐまい。
又次　ソレ〳〵、此奴にも飯なと喰せてやつたがよい。
善幸　人足の衆も、序でに馳走になつてござりませ。
又次　お栗よ、皆の衆にも馳走して、あの衆にも進ぜませい。
くり　アイ〳〵。そんならお客様。
善幸　猿と一緒に、ドレ、御馳走になりませうか。
ト又次、善幸、お栗、人足、猿を連れて入る。お浦殘りて

うら　昨日思はず麓にて、手に入りし繋ぎ馬の旗。何卒御主人俊連様へお渡し申し、父さんの不忠の詫びと思へども、これまでもお顔を見知らぬ、御主人の弟御、殊に常からあの父さんの氣質、今の樣子。（ト懐より狀箱を出し。）こりや、慥かに繪姿。そんならこれが

政平　（向うにて）サア〳〵、靜かにあゆばつしやい。

トこれを聞いて、ちやつと思ひ入れあつて奥へ入る。トてんつゝになり、向うより政平、鼠木綿やつし、修驗者のこしらへ、偈箱を背負ひ、お札を持ち出る。後より源六、修驗者の錫杖を杖にして、少し足の痛む思ひ入れにて出で、花道にとまり

きつう草臥れたと見えますわいの。

源六　イヤ、少つとばかり足の爪を痛めましたが、お前の錫杖で大きに助かりました。

政平　それは難儀でござらう。尋ねさつしやる栗ノ木村又次といふは、あの家でござる。

源六　そんなら彼處でござりますか。

政平　わしもお札配りに行かねばならぬ。一緒にそろ〳〵とござりませ。サア、行きませう。

源六　それは幸ひでござりました。

政平　サア、そんなら一緒に。（ト矢張りてんつゝになり、兩人本舞臺へ來て）長樂寺でござります。又次どの

はお宿かな。

くり（奥より出て來て）オヽ、法印さまか。ようお出でなさりました。此方へお入りなされませ。

政平　オヽ、これはお栗どの、又次どのはお留守かな。（ト言ひ〳〵内へ入る、）

くり　今奥にお客があつて、挨拶してゞござります。

政平　イヤ、毎年冬至の星祭りに、お札を進ぜまするゆゑ、配りに來ました。

くり　これは有り難うござります。（ト門口の源六を見て）モシ、お供のお方なら、此方へ入らしやんせ。

政平　アヽイヤ、あの人は、この栗ノ木村又次どのを、お尋ねなさる人ゆゑ、こゝまで一緒に來ました。

くり　そんなら此方へお入りなされいなア。

源六　アイ〳〵、御免なされませ。（ト内へ入り）私しはこの近在でござりますが、又次どのゝお娘御お浦どのに、ちつと用があつて參りました。

くり　そりや、わたしが姉さま。何の御用か知らねども、奥にぢや程に、呼んで來ませうかいな。

源六　イヤ、早急にも及びません。ゆるりとで大事ござりませぬ。

政平　イカサマ、草臥れてなら、ゆつくりと逢はつしやりませ。又次どの、奥でござりますか。

くり　アイ、商賣向きの用があつて、何やら談合してぢやわいな。

政平　そんならこのお人と一緒に、奥へ行つて逢ひませうか。

源六　お邪魔ながらわしも行つて、お目にかゝりませう。

くり　お二人ながら、わたしと一緒に。

政平　ドレ、奥へ行つて。（トこの時懐より手紙を落す）。

源六「政平どのへ尊國。」

　　ト政平、手早く取つて懐へ入れ

政平　ほんに、こゝへもお札を配らにやならぬ。

源六　ドレ、そんなら奥へ。

政平　お栗どの。

くり　サア、お出でなされませいなア。

　　ト三人思ひ入れ。唄になり、奥へ入る。ト時の鐘になり、向うより丹波太郎、引廻しの合羽、裸の形にて、一本差し頬冠りにて、うそ／＼出で來て

犬郎　エヽ、今日は寒い日ではある。それにこの間からまんの惡るさ。折角この間但馬海道で、やぶ酒

手を遣つて、附けて來た狩人めは、どこへやら見失ひ、自棄を起して呑み喰ひに、着てゐる物は合羽一枚。裸で道中もならないゆゑ、あの勘太めを附けてやつたが、よく嗅ぎ出してくればよいが、これがほんの、素人に追錢だ。

　　ト言ひ〳〵本舞臺へ來ると、舞臺前井戸より、パッタリ音して、勘太、頰冠りにてヌッと出る。太郎恟りして

エヽ〳〵、恟りした。（トよく〳〵見て）わりやア、岩菅の勘太か。

勘太　こなたの言ひ附ゆゑ、抜け道から忍んで爰へ。

太郎　そんならさうと斷つて出たがよい。恟りしたわえ。して、樣子はどうだ。

勘太　とつくりと見て置きました。

太郎　そんなら又次を呼び出して

勘太　合點だ。（ト懷より呼子を出し吹く。奥より又次、善幸出る）。

又次　丹波太郎、この內へ附込んだに違ひない。

太郎　それで手下の勘太を先きへ。

善幸　この權藤次も、昨日麓で、此方の娘お浦どのが、持つて歸つた、慥かに。

又次　そりやア、おれが氣取つて置いた。
太郎　この間但馬海道から來た狩人め、すつかり金を持つてゐたを嗅ぎ附けて、昨夜見失つて仕舞つたが、其奴が慥かに。
勘太　この家に來たに違ひない。併し今は持つてゐない樣子。
又次　ムウ、金のはかしどころも、今宵のうちには知れるであらう。かねて源氏へ心を運ぶ御厨七郎、搦め捕つて出せば、この身の仕合せ。
善幸　一筋道の栗の木村、是非とも爰へかゝらにやならぬやつら。もし手に餘らば。
又次　イカサマ。（トあたりを見廻し、源六が持つて來た鐵砲を見附け）幸ひな物がある。この鐵砲を合圖に、加勢の人數を集める手筈。首尾よくいつたらこの太鼓。（ト上の方の栗の木へ太鼓をつるし）あゝして置いて打つを合圖に。
太郎　よし〳〵、太鼓が鳴れば加勢に及ぶ。
又次　鐵砲ならば取り圍む、必ず手筈を
善幸　今宵のうちに。
太郎　
勘太　呑み込みました。（ト又次、太郎、勘太、上下へ別れて忍ぶ）。

善幸　よし〳〵、手に餘ればあの鐵砲、首尾よくいけばあの太鼓。それに附けてもあのお浦に逢つて、昨日の物を詮議したいものだが。

くり　（奥より出て）父さん、法印さんが尋ねてぢやわいな、どこへござんしたぞえ。（ト言ひ〳〵出る。善幸思ひ入れあつておくりに抱き附く。）アヽコレ、誰さんぢやぞいなア、惡い事ばつかり。

善幸　誰でもない。おれだ、善幸だ。

くり　何をしなさんすぞえ。其やうなことしやさんすと、父さんに告げるぞえ。

善幸　野暮な事を言ふものだ。こゝの內へ見世物を、買ひ出しに來るのも、有りやうは、お前をおれが引つぱりもの、丹波の國から生捕りとやらかしたいのだ。おれの言ふ事を聞いてくれないか。どうだどうだ。

くり　エヽ、いやらしい、そんな事、知らぬわいなア。

善幸　よし〳〵、さう言やいつその事、あの長持へさらひ込んで、連れて行くによ。

くり　エヽ、いやぢやわいなう。（ト逃げようとするを、有り合ふ長持へ入れようとする。）アレ、父さんいなア。

善幸　コレサ、默つてゐな。（ト手拭にてくゝり、長持の中へ入れ）ちつとの間、この中へ。

ト蓋をする。奥にて政平

政平　ヤレ〳〵、大きに馳走になりました。

トこれにて善幸、コソ〳〵と奥へ入る。奥より政平出て來て、捨ぜりふ言ひながら、ソツと長持を明け、お栗を出し、解いて

くり　ヤア、お前は

政平　コレ。

ト唄になり、お栗を連れ、政平奥へ入ると、合ひ方、時の鐘にて、俊連、前幕の形にて、腕を抱へながら出る。後より捕手四人、十手を持ち、出て來て

俊連　軒にしるしのあの栗の木、放れ家とは、慥かにあの內。

捕手　捕つた。

ト掛る。俊連、利腕を抱へながら、片手にて立廻りあつて、皆々を向うへ追ひ込み、舞臺へ來り、門口をしやんと〆める。時の鐘、奥よりお浦出て、俊連を見て

うら　ヤア、誰さんでござんすぞいなア。

俊連　イヤ、わしは栗ノ木村又次どのといふを尋ねて來た。

うら　その又次といふは、わたしの父さんでござんすが（ト顔を見合せ）ヤア、お前は

俊連　ヤ、さういふ其方は。

うら　モシ、こゝがわたしの內でござんす。

俊連　すりや、アノこの家が。

うら　アイナア。そんなら昨日の仇口を、あじやらと思はず、今こゝへ。

俊連　やう〳〵尋ねて

うら　ハテ、ようお出でなれさましたなア。（ト合ひ方になり、兩人思ひ入れ。）

俊連　ヤレ〳〵、其方に逢うて、マア、落着きました。

うら　マア〳〵、ゆるりと落着きなさんせいなア。

ト煙草盆など持つて來る事あつて、俊連の形を、よく〳〵見て

さうしてマア、見れば昨日の姿とは。違うたお前の形容。

俊連　ハテ、こなたの內へ來るからは、侍ひ止めてこの姿。なんと誠の男であらうが。

うら　そりや、モウ、其やうに思うて下さんす、お心は嬉しうござんすが、もう〳〵、これから女夫になつても、必ず替つてくださんすなえ。

俊連　ハテ、斯うなるからは、なんの替らうぞいなう。

うら　すりや、誠でござんすかえ。

俊連　何の僞りを言はうぞ。（ト あたりへ思ひ入れあつて）ムウ、山家にしては物好きな住居。併しながらこれからは、一精出してやつて見ねばなるまい。

うら　それはさうと、お前とわたしと、マア女夫になるからは、ほんの口先のどれ合ひ女夫、わたしの父さんは堅くるしい氣質ぢやによつて、お前を仲人したといふやうな人がなければ、どうやらをかしいやうなが。

俊連　成る程、夫婦の堅めは仲人が第一。

うら　誰ぞマア。……ほんによい事がござんす、わたしが前から心易うした、二ノ瀬村のこれも矢ッ張り、同じやうな山挊ぎのお人、源六さんといふお方が、先刻奥へ來て、ちよつと逢うたほどに、このお方を賴んで見ようわいなア。

俊連　こなたさへ承知なら、どうでもよい。

うら　そんならちやつと。（ト 納戸口へ向ひ）モシ、源六さん。ちやつと來て下さんせ〳〵。

源六　アイ〳〵。お浦どの、何の用でごんす。（ト 奥より出て來る。お浦、こちらへ連れて來て）

うら　わたしやお前に頼みたい事がござんす。外でもないが、少つと外にいひ約束した男があつて、夫に持ちたいと思ふけれど、知つてゐなさんすあの父さんの氣質。仲人がなうては得心があるまいと思ふによつて、どうぞお前、その仲人になつて下さんせぬか。

源六　そりや、心易くしたこなさんの事、隨分仲人もしませうが、して聟どのは。

うら　幸ひ、あそこに來てぢやわいな。

源六　そんなら知る人になりませう。

うら　さうして下さんせ。（ト俊連の方へ來て）モシ、仲人を頼んで置いたわいな。サア、ちよつと逢うて、禮云うて下さんせ。

俊連　それは忝けない。マア〳〵、近附きになりませう。

ト三人捨ぜりふにて顔を見合せ、悧りして

俊連
源六　ヤアヽ、わりやアどうしてこゝへ。

うら　お前方は、知り人でござんすか。

兩人　ムウ。（ト思ひ入れ。誂への合ひ方になる。）

源六　慥かに昨夜谷底で

俊連 並んで下りた畚の繩、（ト切る眞似をして）どつさり下へまッ逆さま。
源六 下から擊つた手ごたへは、肝のたばねの忽ちに
俊連 岩角、木の根に五體も碎け
源六 背骨へかけて風穴を
俊連 すねこし立たず
源六 七轉八倒。それなりに。（ト死んだといふ思ひ入れ）。
俊連 冥土にあらぬ
源六 この娑婆で
俊連 思ひがけなく
源六 仲人役。
俊連 替つた緣で
兩人 あつたなア。
うら ほんに、こりやマア、とんと分らぬわいなア。斯う出合ひなさんしたところは、お二人ともに、同じ世渡りの山挊ぎ。そんなら疾からお前方は

俊連　笹山越えの狩人。わりやァおれが落した物を、持つてゐるであらうな。

源六　イヽヤ、知らぬが、氷上のおぬしも、今の物、慥かに持つてゐようがの。

俊連　オヽ。……イヤ、知らぬ。もしおれが持つたゐた時は

源六　此方へ貰はにやならぬぞよ。

俊連　殊によつたら遣りもせうが、われが持つた一品も

源六　そんならわれが。

ト兩方よりかゝる。源六は足、俊連は腕の痛む思ひ入れ。

兩人　いつそ。（ト山刀と杖にて、お浦をかきのけ、立ちかゝる。）

うら　コレマア、何を

兩人　イヤ、その一品。

ト突きのけて、一腰を拔いて切り附ける。兩人ちよつと立ちかゝる。お浦、有合ふ修驗者の政平が持つて出た偈箱にて押へ

うら　コレマア、待たしやんせ。お二人ともにこの場の爭ひ。一人は殿御、一人は仲人、中に立つ身のわたしさへ、まだ祝言の杯も、濟まぬ内からこの爭ひ。喧嘩に花の花嫁が、預るほどに、マアマ

アヽア、お二人ともに色直し、濟んでの事になさんせいなア。

俊連 イカサマ、この場で言はれぬ昨夜の仕儀。

源六 互ひに惱みのこの體。（ト兩人痛む思ひ入れ。）

俊連 迂濶に荒氣も出されまい。

源六 思案した上、兎も角も

うら そんなら互ひに、マアこの場は

兩人 引いてやらう。（ト脇差を引いて納める。）

うら それでわたしも落着いたわいなア。

源六 その落着いた序に、わしも落着きたい昨日の事。お浦どの、こなたに預けた二百兩。

うら アイ、そりや何時でも、預つた物ぢやによつて。わたしが印の笄は。

源六 こゝにある。（ト前幕の笄を出す。俊連ちよつと見て）

俊連 模樣は色繪の番ひ獅子、その割り笄は。

うら こりや、わたしが大事の笄。

俊連 そんならそれが

うら　アイ。
源六　大事の品ゆゑ、大切に、預つてゐたこの笄、模様はちよつと見て知つた。そんならおぬしが覺えの品か。
俊連　女に似合ぬ割り笄、替つた模様といふ事サ。
源六　女房の物は御亭主の、内の道具も同じ事。幸ひわしが仲人の、印にちよつと聟引き出。

ト手裏劍にて打つ。お浦、眞中にてうけ留め

うら　わたしがきつと受け留めました。
源六　ハテ、女に稀れな。
俊連　さそくの手の内。
源六　仲人も悦び。
俊連　引き出の品も
源六　持參の品も
うら　この場の仕儀も
兩人　昨夜の仕儀も。（ト鐵砲を打つた心、綱を切つた心をする。）

うら　互ひにゆるりと
源六　此方へ取るか。
俊連　一つに取るか。
うら　預つた品なれば
源六　その時こそは
俊進　一生懸命。
兩人　とはいふものゝ（ト寄らうとして痛む思ひ入れ。）
うら　ハテマア、後まで。
兩人　ムウ。（ト寄らうとして、）
源六　仲人は開きませう。（ト唄になり、源六奥へ入る。）
うら　合點の行かぬこの笄、どうしてお前は。
俊連　覺えがあるか。（ト懷から笄のかたしを出す。お浦、引き合せ見て）
うら　こりや、模樣も同じ番ひ獅子。
俊連　しつくり合ひしその笄、それを所持なしをるからは、海上刑部太郎が娘、浦邊。

うら　この笄のかたしを揃へ、斯くまで御存じあるからは、さては御主人公連樣の、弟御、御厨七郎。

俊連　コレ。

ト押へる、時の鐘、合ひ方、お浦、門口をさす。この時下の藪疊おし分け、又次窺ひ出で、門口に聞いてゐる。

うら　思ひがけない御主人の弟御、御幼少より他國の御身、過ぎ去りたまひし公連樣のお言葉にて、親刑部は家來ながらも、由緒ある主從、妹背の緣定まる印になる割り笄、あなたは東にお忍びと、風の便りにお顏も知らねば、詮方も噂で暮らせしこの年月。昨日麓で思はずも、お目にかゝつたる路用の金、貢ぎの種と思ふゆゑ、印を渡して預かつたも、まさかの時の用意にと、親にも隱すわたしが心、夫婦の緣の番ひ獅子、盡きぬ印と思召し、女房と思うて下さりませ。

俊連　廻り逢うたる女房浦邊、兄が由緒の緣なれど、不忠の刑部が娘の其方、迂濶に緣は結ばれぬ。

うら　すりや、わが親の惡心ゆゑ。

俊連　いかにも。わが兄六郎公連には、平親王へ諫めを入れ、死したる主人を餘所になし、源家へ裏切りなしたる刑部。白旗の行くへは慥かに昨日の白布、探り求めんその爲に、便り來りし此家のうち、心知れざる汝が親、迂濶に足は止めにくい。

うら　すりや、折角廻り逢うても

俊連　旗の詮議は又次に逢うて、夫婦の縁もこれ限り。（ト行きかゝる。お浦留めながら）

うら　待つて下さりませ。

俊連　未練な。（ト振り切るを立ちふさがつて）

うら　成る程、縁を切りませう。

俊連　なんと。

うら　夫婦の縁に繋がれて、隱れ忍ばぬお前のお心、推量したゆゑ、わたしが方から縁切つて、隱まひたうござんす。

ト此せりふを聞いて、又次うなづき、また藪疊へ忍ぶ。

俊連　ムウ、すりや、縁切つた上この內へ。

うら　留めねばならぬその譯は、これ見て下さんせ。

ト幕明きの繪姿を出す。合ひ方替る。上の障子を明け、源六聞いてゐる。

俊連　この繪姿は。

うら　これぢやによつて、女房の方から緣切つて、隱まひたいわたしが心、推量して下さんせいなア。

俊連　ムウ、他人の女に隱まはれませう。
うら　そんなら合點がいた上で
俊連　いかにもこの家に身を忍び、親が本心定まらば
うら　お前の望みも叶うた上で
俊連　ムウ。
うら　エヽ、有り難うござります。（ト額見合せ、源六ぴつしやり障子をさす。）
俊連　ありや、最前の。
お浦　モシ。（ト囁き、長持の蓋をあけ俊連を入れ、思ひ入れあつて、）ドレ、縫ひ物にでもかゝらうかいな。
ト唄になり奥へ入る。又次一本ざし、そろ〳〵出て脇差を拔き、長持の上を突かうとする。ト猿出て又次が袖を引き、物くれいの仕形する。
又次　エヽ、猿め、悔りさせたわい。（ト猿、袖を引ッ張り、邪魔をする。）いま〳〵しい、また喰ひ物をねだるのか。（トまた突かうとする、猿袖を引く。）
うら　サア〳〵、飯喰はしてやりませうぞや。
又次　（悔りして猿を抱へ）エヽ、いま〳〵しい畜生めぢやわい。

ト始終合ひ方にて、又次奥へ入る。ト長持の蓋をあけ、俊連出て

俊連　今に始めぬ刑部が惡心、この身の大事。昨夜谷間で取り落せし、鏡は慥かにきやつが懐、その時わが手に奪ひ取りし、藤原家の雄龍の印、彼れを捕へて一詮議。

勘太　（後より）その印を。（ト取らうとするを突き廻し、ポンと當て、勘太を長持の中へ入れる。）

うら　サア〳〵、飯やりませう。

ト俊連思ひ入れあつて、門口の外へ出て藪疊へ忍ぶ。トお浦、飯櫃に膳をのせ出る。猿附いて出て來る。捨ぜりふ言ひながら長持の側へ來て

何は無うても蟲休めに、これなりと。（ト蓋を明けようとする時、又次、つか〳〵と出る。お浦ちやつとこちらへ來り）サア、飯やりませう。

ト猿にあてがふ。又次、脇差にて長持を突かうとする。お浦悧り、このうち猿は膳を持ち奥へ入る。

うら　アヽコレ、父さん、何をしなさんすぞいなア。

又次　アイヤ、こりや、オヽ、それ〳〵、此うちはおそろしい獣類、生の物を生けては置さこ憎いゆゑ、突き殺して

うら　アヽ、コレイナア、此うちには

又次　おれが代物、そこ退きやれ。

トまた突かうとする。奥より善幸出て來り

善幸　アヽコレノ〳〵、又次どの、さうせまいぞ〳〵。

又次　貴様は善幸、何で邪魔する。

善幸　イヤ、此うちには少つとおれが。……イヤサ、おれが商賣ものだによつて、殺しては惡からうといふ事サ。

うら　ソレ〳〵、お前の言ひなさんす通り、殺すといふは、マア、止めにするがようござんす。

善幸　親仁どの、マア〳〵、待つてやらつしやいな。

又次　エヽ、何にも知らずに何をぬかす。べらぼうめ。

善幸　（ムッとして）ナニ、べらぼうだ。唐茄子親仁め、この長持はおれがものだ。滅多な事をすると料簡しないぞ、料簡しないぞ。

うら　ホンニ、こりや、尤もでござんすわいなア。

善幸　エヽ、長持はわれが物でも、この中に。イヤサ、中の代物はおれが物だ。

又次　そんなら代物の金を寄越すか。

善幸　サア、それは

又次　金取らぬからは、矢ツ張りおれが代物だ。（ト長持へかゝる。）

うら　買ひませう。

又次　ヤ。

うら　この長持、わたしに賣つて下さんせいなア。

又次　アノ、娘、われが金出して

うら　どうぞ賣つて下さんせ。

善幸　いつもはおれが買ふといふこの長持、娘のお浦が

又次　買ふといふなら、賣りもしようが、値段が高い、二百兩ぢや。

うら　そんなら、アノ二百兩に

又次　高いと思はゞよしにせい。

うら　買ひませうわいな。

又次　エヽ、買はざアなるまい。併しその金は。

うら　明日ともいはず、今こゝで。（ト押し入より、手拭に包みし二百兩を出し）サア、受取つて下さんせ。

善幸　ヤア……、又次の娘が二百兩。
又次　よもやと思つたこの金は。
源六　(出て來り、金を取つて)おれが金だ。
又次
善幸　ヤアヽ。
うら　ヤア、お前は。
源六　昨日預けた二百兩、お浦どの、大きにお世話でござりました。(ト懷へ入れる。)
うら　そんならその金
源六　わしが金だによつて、又次どの、この長持はおれが買ひませう。
又次　アノ、この長持を
源六　賣つて下さい。
うら　アヽ、コレイナア、この長持は。………イエ〳〵、滅多に賣ることはならぬわいなア。
源六　ハテ、お浦どの、惡い合點だ。この長持の見世物を、おれが買うたらどなたでも、指でもさゝせる事ぢやアない。
又次　オヽ、賣つてやらう。

善幸　それぢやァおれが

源六　いゝ見世物、二百兩で値段が出來たら、ソレ、金よ。

又次　受取つた。

源六　サア、これからはこの中の化物を、おれが。(トすらりと拔いて突かうとする。)

善幸　ドツコイ、滅多にさうはならぬ。(ト長持の上へ乘り)たとへ賣つてもこの中には、見世物師の商賣道具の引ッ張りもの、中へ入れたは德利の三本足、蛇、蛙の見世物まで、入れてあるのがおれが商賣、一寸法師や三ツ目小僧は、穴からのぞくか、目鏡で見るか、見世物屋の善幸は、男でごんす。

又次　エヽ、何をぬかす。(ト引退ける。)

源六　エヽ、面倒な。(ト長持をグツと突く。)

うら　(驚き)ヤアヽヽ、長持を。………ハアヽ。

ト泣き伏す。この時源六、懷から鏡を落す。善幸取上げ

善幸　コリヤ、これ御鏡。

源六　それを。(ト寄るを振り切つて)

善幸　これで築地へ歸られる。

ト引つたくり、舞臺前の井戸へ飛び込む。源六續いて行かうとする。トこの時下の方より捕手、ばらばら出て取り卷き

四人　動くな。

源六　（思ひ入れあつて）　こりや、何となさりまする。

政平　尊國君の仰せをうけ、大江の郡領政平が、承つて下知をなす、組子の者ども。

源六　ヤヽ、なんと。

　ト鼓の合ひ方になり、障子引きぬくと、政平、衣裳上下にて、お栗を引き附けてゐる。

思ひがけない最前の修行者。この家の娘を擒となし、われを取り卷くその出で立ち。

政平　朝敵餘類の六郎公連が弟七郎俊連、遁れはあるまい。

源六　ムウ、覺えなき名の朝敵呼はり。斯く取り卷きしは心得ぬ。

政平　覺えないはと卑怯な俊連、淡路守賴親には、尊國君と謀叛の企て。汝味方に附かずんば、召捕つて來れとの下知サ。

又次　この家へ入込む其方こそ、公連が弟御廚七郎、政平公へ訴へて、取り圍ませし上からは、本名明かし繩かゝるか、但し政平公へお味方するか。

政平　この家の主、栗ノ木村又次も、頼親どのへ味方のしるし。今人質とせし娘、この政平が連れ行く、からは違背はない。サア俊連、思案極めて返答せよ。ドヾどうだ。

源六　イヤ、どこまでも覺えなき、朝敵の名を呼び立てすれば、政平どのと諸共に、頼親公の隱れ家へ。

政平　イカサマ、一應で明さぬ本名、又次が娘と諸共に、身が陣屋へ引き立て行かん。

源六　どこまでなりと勝手次第。

政平　ハテ、大丈夫なその魂ひ、味方になさば一方の旗頭。

又次　然らば大江の政平公。

捕手　お尋ねありし御廚七郎、腕まはせ。（ト源六にかゝるを突きのけ、政平、拔打ちにポンと切る。）

皆々　これは。

政平　懇望なして連れ行く俊連、家來ながらも

又次　天晴れ御賢慮。

政平　者ども、警護。

三人　ハアヽ。（ト乘り物を持出し、お栗を乘せようとする。）

くり　今に始めぬ父さんの惡心、現在娘のわたしをも、人質として政平どのへ。

又次　一味の潔白、娘でも容赦はいたさぬ。（ト乘り物へ入れ）拙者が義心。

政平　ハテ、小氣味のよい親仁めだわえ。

ト唄になり、この人數向うへ入る。又次殘る。時の鐘の合ひ方になり、丹波太郎出で

太郎　今奥で樣子を聞けば、今のやつめを無理無體、公連が弟にして、取り卷かせたこなたの所存は。

又次　一癖あるゆゑに、あいつを擒に味方に附ける、手段はさま〴〵。娘といふも、ありや誠は、わが子にあらぬ取り替へ子。それはさうとお浦が隱した一品。（トお浦正氣を失ひ居るを引起し、活を入れる）

コリヤ、氣が附いたか。（トお浦、太郎、又次を見て）

うら　是非に及ばぬ、お主の敵。（ト有り合ふ山刀にて切り附る。又次留めて）

又次　コリヤ、氣が違うたか。何するのぢや。

ト捨ぜりふにてあしらひ、立廻り。長持の蓋を取る。中より勘太、肩先きを突かれながら飛び出し

勘太　又次どの。

又次　すりや、此うちと思ひの外

勘太　俊連どのはとうにどこへか

うら　ヤアヽ、すりや、いつの間にやら。……エヽ、忝ない。

ト言ひさうにして、脇差を太郎が鼻の先へ出す。

太郎　エヽ、コレ、鼻ッつらが危ない。

又次　（お浦を引据ゑ）コリヤ娘、わりやァ繋ぎ馬の旗をどこへ隱した。俊連はどこへ遁がした。

うら　エヽ。（ト脇差を持つたまゝこちへ來る。）

太郎　コレ〳〵、又次どの、お浦どのは、あの長持を突かれたので、氣違ひになつたのだ。

勘太
太郎　氣違ひだ〳〵。

うら　（思ひ入れ）オヽ、氣違ひぢや〳〵ぞ。（トこれにて勘太遁げて入る。）

又次　コリヤ、娘、旗はどこへ隱した。白旗は知らぬか。（トお浦、いよ〳〵氣違ひの思ひ入れにて）

うら　何ぢや、旗とは、知らぬかとは。………白刃ぢや〳〵。（ト脇差を持つたなり振り廻す、）

又次　アヽ、危い〳〵。

太郎　コレ、親仁どの、たうとう氣違ひになりました。

又次　白旗よりは差し當る、俊連が詮議。（ト行かうとするをお浦、留めようとする。）

太郎　コレ、われはこゝに。（ト留める、又次ツイと奧へ入る。）ヤイ〳〵、コリヤ、氣を鎭めんか。………
……エヽコレ、こいつはおれが女房にしようと思つたに。（トいろ〳〵あつて）よい事があるわえ。

氣違ひの水こぼさずといつて、どのやうに氣が違つても、水に顔をうつすと、すぐ鎭まるといふ事、幸ひこゝに盥がある。(ト有り合ふ盥へ手桶の水を入れ) コレ、お浦、この水をチッと持つてゐると、氣が鎭まる〳〵。(ト無理に持たせ、太郎、お浦の顔を見て) オヽ、やう〳〵どうやら氣が鎭まつたやうだ。(ト笛の合ひ方になり、太郎思ひ入れあつて) さて又、これからは、又次が言ひ附けた合圖の鐵砲、ドンと打つと村中が取り圍むとの事、太鼓を打てば圍みを開く。よし〳〵。(ト有り合ふ鐵砲を持つて出で、火繩へ火をうつさうとするを、お浦、盥の水を火繩へかける、太郎悄りして) コリヤ、氣違ひめが。

うら　アノ、水こぼしたのぢや。

太郎　エヽ、いま〳〵しい。(トお浦に打つてかゝる。奥より以前の猿出て來て、太郎にかき附く。)猿めが邪魔を(ト毆りつける、猿は栗の木へ、ツカ〳〵と登り、太鼓を打つ、太郎悄りする。) ヤイ〳〵、それを打つてたまるものか。(トいろ〳〵あせる。お浦見て笑ひながら)

うら　ヤア〳〵、太鼓を打て。猿々。

ト太郎、木の側へ行かうとするをお浦留める。これより猿たゝく太鼓に、合ひ方を入れたる誂の鳴り物になり、兩人をかしき立廻りよろしく、トゞ鴨居にかけたるお札箱を敲き落す。中より白旗出る。太

郎取り上げ

太郎 こりや、コレ白旗、政平公へ、さうだ。

ト引ッたくる眞中へ又次出で、旗を引ッとり、太郎をポンと切る。お浦、猿を抱きうつかりしてゐる。

又次 この宮の中に隱しあつたは、疑ひもなき相馬の白旗、娘が狂氣を、旗の威德で。

トお浦のつむりへ翳すと、お浦正氣になりし思ひ入れ。

うら ヤア丶、お前は父さま。

又次 娘、正氣になつたか。

うら 正氣になつたかとは。

又次 其方が隱せし御旗の威德。

うら ヤア丶、そんならいつの間に。

又次 わが手に入りしは、今はからず丹波太郎と爭ひに、思はず落せし箱の中、親子もこれまで包みしは、娘ながらも古主を思ふ其方が貞心。われも今まで惡事と見せしも、政平を計らん今のこしらへ事。大事を知つたる丹波太郎、手に掛けたれば氣遣ひなし。

うら そんならわたしが狂氣して、その白旗の威德で直つたかいなア。

勘太（後へ出て）さては又次は二心、この通り政平公へ。さうだ。

ト駈け出す。舞臺前の井戸より白刃を出し、勘太をグッと突く。勘太苦しむ。バッタリ、誂への鳴り物になり、井戸より俊連、拔刀にて鏡を口に銜へ、ズット出る、お浦見て

うら　ヤヽ、あなたは七郎俊連樣。

俊連　かねて知つたるこの拔け道、刑部が本心疑はしく、心惑ひしそれがしが、疑ひ晴れしのその白旗。

又次　すりや、それがしが忠義の心底、賢察あつてこれまでの

俊連　不忠は却つて忠義の刑部、今より味方を集むるわが存念。

又次　ハアヽ、有り難きお詞。年寄つたれど刑部太郎、これまで惡事と見せたるも、敵を欺くわが本心。イデ、これよりは味方の手筈。

俊連　お家の重寶その白旗、又この御鏡まで手に入りしは、大望成就の吉瑞ならん。

ト二種を又次に渡す。

又次　この二いろさへ手に入らば、この刑部が心の安堵。丹波太郎、大儀であつた。

ト太郎むつくりと起きて二いろを取つて

太郎　この二品、政平どのへ。（トツイと奥へ入る。）

うら　ヤア丶、丹波太郎も

又次　死んだと見せたも皆嘘、口車にのせて、一杯喰つた上からは、最早叶はぬ網代の魚だ。サア、尋常に覺悟召され。

俊連　計ごとは一旦の利潤、汝を計るものは又汝に計らるゝ。かねて知つたる惡事の刑部、さこそあらんと思ひしゆゑ、今奪はれしは皆似せ物。

又次　ヤア。

うら　お前の忠心知つたゆゑ、狂氣となつて僞りの、旗を誠の白旗と、正氣になつてのこしらへ事。親を騙した不孝の罪、お主へ立てる忠義ぢやわいなア。

又次　さては、うぬらがこしらへ事。この上は俊連、うぬを。

ト俊連に切つてかゝるを、お浦、後より又次を一刀切ると、どろ〱になり、前舞臺石の下より繋ぎ駒の白旗、あらはれ出で栗の木へかゝる。舞臺前より水氣立ち、どろ〱、早めの合ひ方。

うら　血汐の穢れに立ち昇る、水氣と共に飛び去りしは

俊連　これまで行くへ知れざりし、まさに相馬の繋ぎ馬。

うら　今目前にあり〱と

俊連　不淨を禁じて、あの梢に、
うら　かゝる不思議も、御旗の威德。
俊連　實に爭はれぬ有様ぢやナア。（トどろ〳〵打ちあげ、水氣止む。お浦、白旗を俊連に渡す。）エヽ、忝けない。これも刑部の惡心悟り、裏の裏行く浦邊が働き。オヽ、出來した〳〵。
又次　（苦しみながら）たとへ此儘死するとも、七郎うぬは
ト行くを奥より、源六出で來り、又次の首を打つ。
源六　朝敵餘類の張本たる、刑部太郎は、斯くの如く、討ちたる上は御厨七郎、兄は忠義の六郞公連、性は善なり、速かに、今より源家に隨はれよ。
俊連　ホウ、元より兄は忠義に死し、名は朽ちやらぬ忠義の魂ひ、われも源家に仕ふる心。
うら　そんならお前は、今日より源家へ。
俊連　仕へるしるしは、白旗を、鏡もろとも賴光公へ。（ト源六へ渡す。）
源六　政平が擒にせしは、常俊が娘鶴の前、彼れが巧みにかねてより、入込み置きしを人質と、送りやつたる組子を退ぞけ、連れ歸つたる二ノ瀨の源六。
くり　（奥より出て）様子を聞きしみづからが身の上。小さい時より入れ替へ子と、知らず暮らせしこの

月日、二ノ瀬の源六が物語り、

うら　それも矢ツ張り、わが親の、巧みと知らず、これまでも

くり　姉よ妹と親子の因み。

源六　忠義にかへつて親を討つ、これぞ丹波の父討栗。

俊連　この白旗は頼光公へ、イザ、二ノ瀬どの。

源六　雄龍の印は藤原家へ、鶴の前が家土産に、送るは卽ち頼光公より、仰せを受けたる、二ノ瀬の源六。

俊連　武に逞ましき頼光公へ、隨ふわが名もゆかりある、浦邊の次郎季武と、今に改む忠義の一人。

うら　惡人ながらも現在の、親を殺した、この身の罪科。（ト自害する。後へ太郎出かけて）

太郎　あの白旗を。（ト取りに行く。俊連引き廻す。）

俊連　出來した浦邊。

うら　サア、その浦邊は忠義の果て。

源六　子に報うたる刑部が惡事。

太郎　うぬも一緒に。（ト俊連にかゝる。突き廻し、源六、太郎が首を切る。）

源六　出世の門出。

うら　どうぞ未來は。（ト拜む。）

俊連　女房。

ト言ひさうにして、首をポンと切る、木の頭、兩人顏見合せ、よろしく拍子　幕。

第壹番目

五立目

市原野の場

役名。　女乞食、お芳。乞食頭、つゞれの次郎。大宅太郎光任。三度飛脚。雲助。乞食四人。

本舞臺三間の間、二重舞臺、草土手、東西蒲鉾乞食小屋、うしろ藪疊み。幕のうちより野伏り四人、火を焚いてゐる。時の鐘、山おろしにて幕明く。

乞一　もう日が暮れて、餘ッ程過ぎたが、いゝ鳥がかゝりさうなものだな。

乞二　物貰ひの乞食をして、往來の鳥のかゝるのを、待つ事はないぢやァねえか。

乞三　イヤサ、この市原野に野伏りをしてゐて、島原や祇園近所へ、お剩りを貰ひに行くは大儀なものぢや。

乞四　そこで往來の鳥を待つのは、ひるてんではなくて、盜人と野伏りの兩天だ。（ト向うを見て）アレ

見や、向うへあかりが見ゆるぞよ。

乞一　何だか知らないが、大方鳥であらう。

四人　隱れてゐろ〳〵。

ト東西へ別れて小隱れる、ト時の鐘、合ひ方になり、三度飛脚、半纏、手甲、股引、大小、飛脚の形にて、狀箱を持ち、飛脚提灯を持ち出で來て

飛脚　丹波の田邊から、京都のあたりの館まで、日着きといふは大抵の道ではない。併し、もう市原野へ來れば今少しぢや。（ト本舞臺へ來り）オヽ、乞食どもが焚き火をした燃えさしと見える。あんまり寒い。一服のんで、あたつて行かう。

トあたりを見て筵の上へ登り、刀を拔いてそこへ置き、煙草呑みながら火にあたつてゐる。向う、バタバタにて、胴六、四立目の形にて、蜘蛛切り丸を持ち、走り出て來て、飛脚に突き當り

胴六　アイタヽヽヽヽ。赦さつしやい〳〵。

飛脚　どいつぢや〳〵、何をするのぢや。

胴六　イヤ〳〵、わしはちつと追手のかゝるを、やう〳〵と逃げて來た者。それで突き當つたのぢや、料簡さつしやい〳〵。

飛脚　さう言ふ事なら料簡もしようが、一人では薄氣味の悪いこの丹波口、それで悔りした。

胴六　もう追手もかゝるまい。ドレ〳〵、わしも一服のみながら、あたりませう。

　　ト飛脚の側へ行き、蜘蛛切り丸をそこへ置いて火にあたる。此うち、後へ四人出て來て

四人　その火にあたるなら、酒手を置いてゆきやれな。

飛脚　ヤアヽヽ。（ト始終時の鐘の合ひ方。）

乞一　おいらは、こゝにゐる乞食だが、奈良の般若坂の、かつたい石と同じことだ。

乞二　その火にあたるなら、おいらが仲間だ。

乞三　それだによつて、仲間入りの酒手をば

乞四　まつ裸になつて

四人　置いて行けといふのだ。

飛脚　そんなら、わいらは盗人ぢやな。

四人　盗人ぢやァない、お乞食さまだ。

胴六　でも、まつ裸になれといふからは

飛脚　追剝ぎぢやな。

トきつとなる。此時胴六は、飛脚の刀、飛脚は胴六が持つて來た蜘蛛切り丸を、取り違へ取つて立ち上り

飛脚　胴六　こいつは、只は置かれないわい。

乞一　只は置かれぬといつてどうする。オヽ、切るか。切られべい／＼。（ト飛脚の側へ行く。）

乞二　オヽ、おいらも切られべい。（ト同じく摺り寄る。）

飛脚　身共を何と思ふ。

乞三　知れた事、飛脚だから金があらうと思つて

四人　それで酒手を貰はうといふのだ。

胴六　そんならその飛脚どのばかりで、おれは構ひはないか。

乞四　われも小附けだ、をかしな野郎、何ぞ持つてゐるであらう。

乞一　今聞きやァ、ものしたものがあると言つたぞえ。

胴六　ヤァヽ。（ト悔りして刀を隱す。）

飛脚　身は頼光公の足輕分の者で、丹後までお飛脚に參つたものぢや。噓でないといふ證據は、首にかけてゐるこの狀箱の中、お墨附があるぞや。

四人　お墨附とは何の事だ。

飛脚　源家の大將頼光公、御病氣なれど、謀叛の者を、討手の役を蒙りたまひ、それで諸國の源家へ下知觸れのお墨附。鎭守府の印鑑のすわつた書附。まだそればかりでない、臣下は元より、源家へ因みの者へ渡されて、顔見知らぬとても、幕下の證據になる墨附ぢや。それより外に金はない、道中の遣ひ殘りの、端た錢より外はない。

四人　そんなら金は持たないな。

乞一　さうして二才野郎、わりやァ何だ。

胴六　おれは何を隱さう、丹波で物した物があつて、それで逃げて來たが、追手が來るからこゝへ隱れて、寒いから焚き火にあたつてゐたが、なんだ。

乞二　何だもすさまじい。その物した物を此方へ寄越せ。

胴六　イヽヤ、知らない。（ト袖にて隱す。）

乞三　何だか隱すが、寄越しやァがれ。

胴六　知らないわえ。（ト逃げようとする。）

乞四　飛脚、われを引ッ剝いで。

ト飛脚をとらへる立廻り。乞食の一と二は胴六を叩きまはす。禪の勤めになり、飛脚は刀を拔いて切

りまくり乞食の三四を下座へ追ひ駈けて入る。

乞一　うぬ、小泥坊と見たからは

乞二　只は遣らない、持つてゐる刀を寄越せ。

胴六　イヽヤ、知らない。

ト三人立廻りにて、乞食の一胴六の持つてゐる刀をひつたくり下座へ入る。後より追駈けて入る。引き違へて乞食の三と四を、飛脚追駈け出て來て

飛脚　うぬら、一々生けて置かうか。

兩人　何を。

ト縫ぐるみにて打つてかゝる、ちよつと鳴り物になり。三人タテあつて、飛脚、兩人を下座へ追ひ込む。思ひ入れあつて

飛脚　この市原野での盗人、不屆きなやつら、追ッ附け召捕らして一々拷問。併し身は大切なるお墨附があれば、道を替へて（ト思ひ入れあつて、刀を納めようとして驚き）コリヤコレ、身共が刀が違つた。なんぼ足輕でも、魂ひが取り替つてはひよんなもの。（ト刀を納めて）併し、鞘も立派なれば、惡いのよりは增しか。アヽ、儘よ。（ト時の鐘になり、飛脚東の花道へ入る。）

四人　お頭、今のを聞かしつたか。
ト乞食四人、出て來り

ト時の鐘にて、上の小屋より次郎、つゞれ、野伏りの形にて出で

次郎　わいらもこれから頼光が館へ、かねて入込む用意の手蔓。…………早く。

四人　心得ました。

ト時の鐘にて向うへ入る、下の小屋よりお芳、女乞食、つゞれ、煙草をのみながら出て

よし　つゞれの次郎さん。

次郎　お芳ばうか。

よし　今のは何ぞになりさうな事。

次郎　かねて望みの今の墨附。

よし　そんならわつちが追つ駈けて。（ト行かうとする。）

次郎　イヽヤ、大事ない。頼光の館へ忍んで墨附を

よし　盗むは手間ひまいらねえが

次郎　忍び入るにはその形ぢやァ

よし　ハテ、知れた事、何になりと。

次郎　そんならこれから
よし　ソレ、行きがけに駄賃場の
次郎　三條あたりで一仕事。
よし　なりたけ働らき
次郎　墨附を
よし　首尾よく盗んで

ト思ひ入れ。三味線入りの禪の勤め、雨車になりて、お芳、風呂敷を肩にあふり、花道へかゝろ。次郎見送ろ。向うより大宅太郎、ぶッさき羽織、野袴、下駄がけにて、傘をさし出て來て、花道にて行き合ひ摺れ違ふ。互ひに思ひ入れあつて、大宅太郎「さてこそ」といふ思ひ入れにて振り返る。お芳、風呂敷をかぶり、向うへ入る。太郎、本舞臺へ來り次郎と渡り合ひ、次郎仕込みにて切りかゝらうとする。太郎、傘にて受け留め立廻りよろしく

幕

第壹番目　攝津介賴光館の場

六立目　同　二人上使の場

同　姉弟名乘の場

役名。　上使、三田源太廣國實は將軍太郎良門。煙草賣り、お芳。上使、三田源太廣國實は平井保輔。家老、大宅太郎光任。奪國君實は泰ノ次郎正文。繪坊主、猪ノ熊入道雷雲。賴光奥方、園生の前實は能勢判官娘、三崎。賴光弟、美女丸實は保昌娘、小式部。田舍娘お岩實は將門娘、七綾姬。

本舞臺、三間の間高足の二重、舞臺下の方、釘隱しとも鍍金の金物、見附金襖、欄間とも殘らず桝の模樣。一面に簾上げ下し、東西紅白の梅の大樹、吊り枝、手洗鉢、すべて鎭守府將軍の館、住吉の神事の體。幕のうちより上の方二重屋體に、奪國君、褐式壺折の衣裳にて、床几にかゝり、雷雲、繪坊主にて、錦の衣裳を着たる抱子を懷へ入れ、片手に錫の瓶子を三方を載せて持つてゐる。侍女三人、着流しにて、三方に大杯を乘せて、長柄の銚子を持ち、侍ひ四人、上下衣裳にて、三方に三つ組の桝を持つてゐる。皆々立ちかゝりゐる見得。下り葉にて幕明く。

侍一　承はれば、今日は吉日によつて、攝津介賴光公には、鎭守府に御任官あつて、津の國の大社たる

侍二　住吉大明神は氏神のことなれば、九月十三日は例年住吉寶の市、則ち桝の神事にて、多くの桝を商ふ。

侍三　この程は、わが君の、御所勞重らせたまふに依つて、今日御祈念のため、卽ち桝の神事。

侍四　さるによつて、お館の襖張り附けは、三桝の模樣、その御祝儀によつて

四人　斯くの如く、銘々三桝を、獻上仕つてござりまする。

尊國　如何にも聞き及んだが、先達てより賴光が病氣とあれば

雷雲　それに、珍らしき住吉桝の神事あれば、その式を御上覽とあつて、勿體なくもこれまで御入り。猶も我が君御持參の神酒を供へ、賴光どのへ進ぜられんとの御諚。

尊國　別て、今日園生の前が招待は、定めて一子のことならん。

雷雲　入道がほつほに入れて參つたこの子は、當京極通り藪の下を、君には夜分御通行の節、御不便とあつて拾はれたまひ、御養育なされしが、聞けば賴光が一子にて、捨てしとの事。

女一　それをこなたへ、お貰ひ返しなされんと、北の方の思召し。

女二　それゆゑ今日、桝の神事を幸ひに、御招待申しましたのでござります。何はともあれ、我が君樣には

兩人　イザ、九獻召しあがられませう。

尊國　イヽヤ、不馳走のその酒、呑みたくない。麿を呼び寄せ、園生にも光任にも、出迎ひもなき無禮の者ども。ドレ、立歸らうか。

皆々　アイヤ、それでは。
園生　(向う揚幕にて)先づ〳〵お待ち下さりませう。
ト三味線入りの亂れになり、向うより園生の前、裲襠衣裳にて菊の花を持ち、跡より咲平、花平、繻子奴にて、竹筒へ菊の花の生けたるを持ち出て來て、直ぐに舞臺へ來り
尊國　これは〳〵、尊國樣には、これにお出で遊ばされましたか。
園生　麿を招待いたして置いて、なぜ出迎ひ致さぬのぢや。
尊國　成る程、恐れ入りましたる御諚ではござりますれど、菊亭よりのお入りと存じ、お出迎ひいたして、それゆゑ失禮、お赦し下されませう。
花平　わけて北の御方には、尊國樣の御覽に入れんと、菊亭のお庭にて、お手折りなされた菊を、これなる花筒へ。
咲平　菊とはいへど花はさま〴〵、黄金、平白、今出川、亂菊、猩々、風車、有栖川に禿菊。
兩人　イザ、御覽あそばされませう。(ト尊國の前へ出す。)
尊國　成る程、菊見もよからうが、桝の神事の見ものといひ、殊に源家の重寶、蜘蛛切り、鬼切り二振りのうち、蜘蛛を退治せし蜘蛛切り丸。さればこそ、その毒蟲殘つて、劍を所持なす者に恨みあ

つて、悩ますと聞き及ぶ。もしや、頼光その類ひにて、物の怪の業ならんか。餘り不思議の蜘蛛切り丸、一見したい折柄に、招待なれば、參つたわやい。

園生 その蜘蛛切り丸の事は（ト思ひ入れあつて）成る程、御上覧に入れますでござりませう。

雷雲 して、君のお拾ひなされしこの嬰兒は。

園生 頼光とみづからの中に、出生なしたる男子なれど、親に祟る人相あれば、一旦は捨て兒となし、それを拾ひとれば、災ひを除くとあるゆゑ、京極通り藪の下へ捨てしを、取られしとあつて、それより館の騒動。

女一 その後お行くへを尋ぬれど相知れず。承はれば尊國様には、お拾ひあつて御寵愛あると承はり

女二 それゆゑお貰ひ返し申さん爲

侍一 桝の神事を幸ひに、御饗應は種々さま〴〵。

侍二 お能囃子の用意もござれば

侍三 御立腹を止められ

侍四 暫くお待ちくださりませう。

尊國 （思ひ入れあつて）すりや、差當る馳走には、この菊の花。（ト菊を取り上げ、思ひ入れ。）

花平喚平　それが主人の只今の饗應。

尊國　一天四海の政事、斯う握つたる尊國が

四人　御謀叛の

園生　エ。（ト思ひ入れ。）

雷雲　其方に大事の嬰兒なれば、尊國樣にも御大事。

尊國　一子をおとりに尊國が、かねての望みの麿が味方、賴光承知いたす心か。

園生　サ、それは

雷雲　異議に及ばゞこの嬰兒を、おツ殺さうか。

園生　サ、それは

皆々　サア〱〱

尊國　どうだ。

園生（思ひ入れあつて）委細畏まりましてはござりますれど、夫賴光は病氣、執權大宅の太郎代參の留守なれば、歸りましたるその上にて。

雷雲　すりや、執權大宅の太郎が

尊國　歸り次第に返言を。

花平　先づそれまでは、尊國樣の、御座改めて御饗應。

園生　御對顏所の上座にて

咲平　蜘蛛切り丸を御上覽。

雷雲　いづれも案内。

皆々　イザ、尊國樣には

尊國　皆參れ、やい。(ト管絃になり、尊國先きに敵役四人、奥へ入る。)

花平
咲平　北の御方には、さぞお心遣ひでございませう。

女一　斯樣な御事多い時には、お氣をお晴らしなさるがよろしうございまする。

女二　煙草は、辛苦を忘れ草と申しますれば、先づ〳〵お煙草でも

兩人　召し上がられませう。

ト煙草盆を持つて來て差出す。てんつゝになり、向うよりお芳、やつし着流し、前垂れがけ、下駄をはき提げ箱の煙草賣りにて、これを足輕、麻の袴、股立ちにて、竹の杖を持ち、出て來て

足輕　下れ〳〵、下らぬか。

よし　お煙草はようござりまするか。

足輕　ヤイ〳〵、爰をどこだと思ふ、頼光公のお館だヮ。

よし　その頼光様のお館だから、商ひに來たが、こなさん、豪氣にやかましく言ひなさるの。

足輕　おれはお足輕で、お飛脚にも歩くが、お庭廻りを見廻りの者ぢやが、見馴れぬ者ぢやによつて、下れといふのぢや。

よし　エヽ、やかましいよ。

ト言ひ〳〵本舞臺へ來る。侍女三人立ちかゝり

女一　コレ〳〵、お足輕衆、何事でござりまする。

足輕　慮外な女ゆゑ、お庭廻りの身が咎めてござる。

女二　お奥の事は私しどもにお任せあつて、お出でなされ。

足輕　左様ならば、お次へ參つて

よし　お茶でもあがれ。（ト笑ふ。合ひ方になり、足輕下手へ入る。）

花平
咲平　見れば女子の商人さうな。

よし　アイ、わつちやァ提げ箱の煙草屋かゝアサ。聞いておくれ。今の世の中ぢやァ宿六より、わつちの商ひがまし。それだから長屋の評判記がようござりやす。其かはり大抵ぢやァないのサ。義太

夫本にもある通り、油引かずの松葉煙草は昔の事、今ぢやァ誰も口が奢つて、國府、酒むし丁子入り、龍王、沼田、根のかはら、きついかゝァと言はれちやア、朝むくゝ起きが日本橋、さかな川岸から新場をかけて、四日市、それから兩國、葺屋町、樂屋おもてを見廻りて、てん〱舞に留場の衆がなぶるのを、よしてもくんな小夜嵐ときめれば、あいつは中の字と値は極つても、わつちが煙草、三十二だがのむがいゝ。（ト煙草を出していぢり〱）どうでおしやべりで新田や、菊煙草のやうに、和らかにやァいきやせん。五匁でも、十匁でも、どうぞ買つておくんなんし。大勢ぢやアござりやせん、たつた一人。……おきやァがれ、口がはしやいでお里が出て、アヽ、咽喉が渇く。何ぞ一杯呑ませなさんせ。……オヽ、お茶もお湯もござりませぬか。

　トづッと園生の前の側へ行き、煙管を取つて煙草をのむ。

女兩人　これはしたり、女中さん、あんまりお側へ。

よし　どうでわつちやァ無闇ものゝ場知らずサ。（ト簪で頭を掻いてゐる。）

園生　イヤ、苦しうない。たま〱商ひに來た女子、殊に氣さくらしい樣子、また慰みにもなりさうなものぢやわいの。

よし　また奥樣は鷹揚なものだ。わつちらだと言つて、まんざら腹からの乞食（ト言はうとして、思ひ入れ

あつて）オツト、言はぬこと〳〵。

花平　ヤア、言はせて置けば、所をも辨まへぬ不屆きな女。

吟平　鎭守府のお館といひ、北の御方へ慮外。

兩人　きり〳〵立たう。（トお芳を引き立てようとする。）

よし　なんだ、お前方は。二合半にも足らない形をして、わつちを引き立てるのかえ。こいつはおつかない。したが、栴檀は二葉とやら。アヽ、賴もしい。

園生　腰元どもは知りやるまいが、「骸骨の上を粧ふ花見哉」といふ發句もあり、また風流は格別なものぢやなア。

よし　ソレ見なせえ。骸骨の上を粧ふとは、どんなに髮形ちを造つても、裸にすれば上つ方でも、こちとらでも同じ事といふ心。その筈でもあらうかえ。ぬしさんでも、わつちらでも、三度喰ふ飯は三度、違つた事は身形ばかり。こゝが今いふ上を粧ふといふところだ。モシ、上へ着てゐなさるは、何といふ着物でござりやすえ。

ト言ひ〳〵園生の前の側へ行き、裲襠をいぢつて見る。

女一　そりや、裲襠と申すもの。

よし　なんだ、裲襠え。ぶつかけなら蕎麥だけれど、こいつは喰はれもせず。
園生　どうやら其方は、裲襠が欲しさうな。
よし　イヽヤ、欲しくはないが、着て見てえね。
園生　大事ない、その裲襠を取らせい〳〵。
女二　畏りました。（ト側にある裲襠を取つてやる。）北の方よりの下されもの、有り難うお受け申しや。
よし　こいつは有り難いね。ト裲襠を取つて）ほんに、口を利いては損はいかねえ。
　ト着て、いろ〳〵わが姿を見る。
女一　これはしたり、いかにお許しなされぱとて、北の方の召し物を、下樣の身で。
よし　何だい。なんぞといふと下樣だの、下村だのと、ほんに肌合の惡い手合ひだ。
園生　そりや、ハヤ、どうで、皆の者とは、墨附の惡い筈。
よし　エヽ。墨附の惡いといへば、なんぞ墨附といふ物が、お屋敷にありやすかえ。
園生　何によらず、我が君頼光公の下知書きに、鎭守府の印鑑のすわつた大切なる物を、お墨附といふわいの。
よし　すりや、その墨附を。（トきつと思ひ入れ。）

園生　ハテ、變つた事に、念を入れる女ぢやなう。

よし　エ。（トぎつくり氣を替へ）　なにサ、墨附ぢやアござりやせぬ、煙草の火附きのいゝ悪い事サ。どうぞ買つておくんなんし。

花平　刻み煙草の商ひなら、大部屋へ連れて行かうか。

園生　その裲襠は其方に取らすほどに

咲平　おいらと一緒に大部屋へ。

よし　そんなら一緒に。（ト裲襠を肩へかけ、提げ箱を持ち、立ち上り）斯うした所は、猪牙から上がる船頭のやうだ。ホヽヽヽ。とはいへ、墨附。

園生　ヤ。（トきつと思ひ入れ。）

よし　お煙草はようござりますか。（ト唄になり、花平、咲平先きにお芳下座へ入る。）

呼び（向うにて）御上使。

園生　ハテ、今點のゆかぬ不時の御上使。いづ方よりであらうぞいなア。

ト太鼓謠ひになり、向うより平井の保輔、えんで衣裳、長上下にて、小さ刀、上下の侍ひ二人刀を持ち、後より大宅の太郎光任、上下衣裳にて、三方に御札を載せ、持ち出て來て、花道にとまる。園生の前、思

ひ入れあつて出迎へ

思ひがけない御上使ゆゑ、お出迎ひの用意もなく、折ふし居り合せしみづからは、頼光が妻、園生の前。……見れは大宅の太郎には、御上使のお供いたしたの。

光任　イヤ、拙者ことは、住吉枡の神事につきまして、仰せ附けられた五條の和歌三神への御代參、途中にてお目にかゝりしゆゑ、御上使の御案內。

保輔　それがし事は、源家の臣下たる、渡邊の源次綱とは從弟同士、武藏の國三田の鄕にて、人となつたる、三田の源太廣綱と申す者。このたび始めて多田の御所へ罷り登りしところ、滿仲公より上使を蒙り、只今伺候仕つてござります。

園生　すりや、聞き及ぶ三田の源太にてありしよな。臣下なれども御父、滿仲公の御上使とあれば

光任　先づ〳〵あれへ。

女兩人　お通りあられませう。（ト太鼓謠ひになり、保輔刀を取つて本舞臺の上へ廻ろ。）

保輔　上使。（ト管絃になり）攝津介賴光には、禁廷守護の役目にありながら、病氣と披露し引込みをるは、將門、純友の殘黨謀叛の企てあるよし、賴光この討手を蒙る時には、無くて叶はぬ名劍は、源家の重寳蜘蛛切り、鬼切り、二振りの劍紛失なせしを、押込めあるは、その難を遠ざけん僞の虛

病ならんと、禁廷より、御父滿仲公へのお疑ひ。直樣二振り受取り歸れとある上使の趣き、斯くの通りでござりまする。

園生 光任　ナニ、二振りの御劍、受取り歸れとある御上使とな。(ト顏見合せ思ひ入れ。)

園生　夫頼光こと、物の怪に犯され、いつぞやより所勞。この程は大切によつて、枡の神事を勤むる程の事。

女一　わが君樣には、中々虚病などとは、世間の取沙汰。

光任　蜘蛛切り、鬼切り、紛失と申すも造說。寶藏に祕めあれば、後刻差上げまするでござりませう。

保輔　それで廣綱、安堵いたしてござる。

園生　(保輔に目を附け) して、廣綱には、武藏にて育ちしとあるが、もしや尋ぬる

保輔　ハテ、異な事の御不審。

園生　ムウ、疑ひもなき(ト思ひ入れあつて) これはしたり、御上使へ御饗應もなく、有り合ひましたる長柄の九獻を。

女二　差上げますでござりませう。(ト長柄、杯を持ち行き) お肴もない、この御酒宴。

ト園生の前思ひ入れあつて

園生　イヤ、肴には、みづからが古歌一首。

保輔　ヤ、なんと。

園生　（合ひ方になり、料紙硯を出し、短冊を持ち）「岩の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣をわれにかさなん。」

女一　北の方には日頃にもお似合ひなされぬ、物堅いお心にて

女二　戀歌めいたる三十一文字。

園生　小野小町が石の上にて、僧正遍照に讀みやりし歌。

ト保輔の前へ短冊を出す。保輔取りあげ、思ひ入れあつて

保輔　「岩の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣をわれにかさなん。」……すりや、これを肴に。

園生　御上使、これに。

ト唄になり、園生の前へ、思ひ入れあつて奥へ入る。保輔見送り

保輔　日頃物堅い北の方の今の樣子、御酒の肴に古歌一首。

光任　拙者などは、軍學兵學は好みの道なれど、歌學はとんと不案内。

保輔　苔の衣をわれにかさなん。（ト思案する。）

光任　併しながら、三日交歌せざれば、その智計りがたしと申す事。

保輔　その心をば

光任　發句に申せば、「世の中を三日見ぬ間に櫻かな。」
保輔　ハテ、滑稽でござるな。
光任　苔の衣をわれにかさなん。
保輔　これを肴に（ト杯を取り上げる。女二、酌をする。）アヽ、憎からぬ古歌ぢやなア。
ト管絃になり、保輔酒を呑む。光任煙草をのんでゐる。下座よりお芳出て來て
よし　ハテ、晝中でも、おつりきな仕事の出來るものだ。（ト言ひながら出るを、光任見て）
光任　ヤイ〳〵。女、其方は。
女一　ありや、最前見えし女商人。
よし　提げ箱賣りの煙草屋かゝアサ。（ト保輔を見て）オヤ、次郎さん、こゝへ來てゐるの。
ト保輔惘りして
保輔　わりやアお芳。（ト言はうとして）ヤイ〳〵、慮外な。上使に向つて馴れ〳〵しき。
ト言ふなといふこなし。
よし　馴れ〳〵しいもフサ〳〵しい。わつちやアお前を尋ねてゐた。
光任　すりや、御上使の廣綱どのには。

女兩人　賤しい女中にお近附きかえ。

保輔　イヽヤ、知らぬ。

よし　ナニ知らねえ。アノ、これでもかえ。（ト懷中より墨附を出してツッと見せる。）

保輔　ヤア、そんなら首尾よく。

よし　ソレ、約束の墨附。（ト言はうとして、）墨黑にべつたり書いたこの文。

保輔（きつとなり）まだ／＼慮外な。（ト惡いといふこなし。）

よし　慮外ながら、わつちでなけりやァこんな仕事は。

保輔　ヤア、その雜言を。（トつか／＼とお芳の側へゆき、引きとらへ、墨附を取らうとする。）

よし　エヽ、おきやァがんなせえ。

ト墨附をもつて逃げようとする。保輔引きとらへ、立廻る。風の音、トヒヨになつて、日覆より雁金群り、一羽おりて來て墨附を銜へ、直ぐに舞ひあがる。兩人驚く。光任これにきつと目を附け、思ひ入れ。

保輔　南無三。

よし　アノ、雁金に。オヽヽヽ。

保輔（こなしあつて）無禮ものめが。（ト引ッとらへ、立廻りにお芳を切つて捨てる。）

光任　武士へ慮外は切り捨てが大法。

呼び　（向う揚幕にて）上使。

保輔　ハテ、心得ぬ。それがしこれに罷りあるに。

光任　又候や御上使とは。

トお芳の死骸起き上りて、又かゝるを、保輔切り倒し、刀を納め、墨附を銜へし雁金を見て、づか／＼と花道へ行く。

御上使の御出迎ひ。（ト皆々出迎ふ。）

皆々　ハア、。

呼び　上使。

ト大鼓謠ひになり、向うより將軍太郎良門、二役およしの早替り、えんで衣裳、保輔と同じ形、長上下にて出て來て、この雁を見て手早く手裏劍を打つ。雁金落ちる。保輔見て「ソレ」と中程へ來る。良門つかつかと行き、雁を取り上げ、墨附をとつて懷中する。兩人顏見合せ、ぎつくり思ひ入れ。此うち良門のあとより、信兼、兼成、時義、花色に三桝繋ぎの長素袍、懸烏帽子、銘々扇を持ち、地謠ひのこしらへにて出る。奥より雷雲、以前の瓶子を持ち、あとより八十瀨、お國、東路、瀧野、花色に三桝繋ぎの

素袍の上ばかり、小結烏帽子にて、銘々笛、太鼓、大鼓、小鼓を持ち、皆々よろしく出で迎ふ。

光任　先刻お入りありしは、多田の御所より上使として、このたび始めての上京。

保輔　斯くいふ三田の源太廣綱でござる。

光任　して、只今お入りあられしは

皆々　いづれよりの御上使様でござりまする。

良門　それがしことは、多田の御所より、御父滿仲公の上使。

女二人　最前お入りの御上使様も、多田の御所より。

光任　して、御家名は。

良門　當御所にてはお見知りなきは御尤も。武藏の國、三田の郷にて、人と成つたる、三田の源太廣綱でござりまする。

保輔　ヤア。(トぎよつとする。)

光任　先きに見えられました御上使も、今また御入來の御上使も、三田の源太廣綱どのとは、……ハテナア。(ト心得ぬこなし。)

八十　今日は、住吉寶の桝の、神事の御執行にて

お國　お奥のものを始めとして

東路　御殿残らず打ち寄りて

瀧野　不調法なる私しどもが

信兼　四座の猿樂、能囃し。

兼成　御番組はそれ〴〵に

時義　皆住吉の謠ひもの。

八十　幸ひの折なれば、御上使樣への御饗應、笛の役目はこの八十瀬。

お國　お國はゆたかに小鼓の役。

東路　この東路は大鼓、

瀧野　續く瀧野は太皷の役。

信兼　拙者どもは地謠ひに、武作次郎信兼。

兼成　坂戸の九郎兼成。

時義　阪東太郎時義。

皆々　囃しの役目、蒙りましてござりまする。

雷玄　尊國君より神事の御酒を、賴光どのへ進ぜられて、斯くの通り。

光任　何はともあれ、御上使の御兩所。先づ〳〵これへ。

保輔
良門　然らば。

ト管絃になり、皆々本舞臺へ通り、保輔は二重舞臺へすつと上の方へ通る。眞中に光任、囃子方は皆
皆二重舞臺へゐならぶ。

光任　して、御上使の趣きはな。

良門　上使の趣き、餘の儀にあらず。賴光には先達てより、病氣と披露し、引き籠りをるは、源家の重寶蜘蛛切り、鬼切り、紛失によつての事。承平の將門、天慶の純友、その殘黨の討手を蒙り、なくて叶はぬ蜘蛛切り、鬼切り。わけて一腰の名劍は、先年賴光公葛城山の蜘蛛を切つて、髭切を蜘蛛切と改む。然るにその蜘蛛の怨念殘りて、所持なす者を惱ますと聞く。右紛失の難を遠けん爲の虚病なりと、禁廷より御父滿仲公へのお疑ひ。早くも立越し、鬼切り、蜘蛛切り、受取り歸れよとの上使。

保輔　すりや、それがしが演舌の通り。

光任　先刻、北の方のお請けありし、初めの源太廣綱どのゝ、上使の趣き、同じ事。

良門　殊に武藏の同産にて

保輔　しかも同名。
光任　同所よりの御上使。何はともあれ、御饗應の能囃子。
皆々　ハアヽ。

ト薄どろ〳〵にて、良門のかなたへ下り蜘蛛する。きつと見て

良門　又しても〳〵、刀に迷ふ蜘蛛の怨念。
保輔　さては。（ト思ひ入れ、チヨント保輔の前へ簾おりる。）
良門　エヽ。（ト扇にて拂ふ。）
雷雲　（ムツとして）ヤア、光任、猶豫いたせばよい事にして、尊國様の御酒を頼光どのへ取次ぎせぬか。さなきに於ては、入道が直々に。（ト瓶子を持ち行かうとする、光任留めて）
光任　心得ぬその御酒を、頼光公へたつて勸める入道が振舞ひ。
雷雲　すりや、毒酒との疑ひか。是非ともこれを

ト また行かうとする。良門、瓶子を引つたくり、雷雲かゝるを、良門左に瓶子を持ち、右の手にて雷雲をポンと當てる。光任思ひ入れ。

光任　まさに瓶子のその御酒は。（ト行かうとする。）
良門　尊國君よりの下され物、疑ふ事はあるまいがな。（ト右の手にて瓶子の口を押へる。この時中指、瓶子

の口へ入る。驚きて）ヤヽ、思はず瓶子の口、押ゆるに、わが指が口になつて抜けぬは、これはしたり、粗相な事を。（ト瓶子へ入れし指の抜けぬ思ひ入れ。）

女皆々　ほんにマア、お氣の毒な。

ト始終どろ〳〵にて蜘蛛纏ふゆゑ、良門、瓶子にて蜘蛛を敲く。良門ウンと悶絶する。皆々驚ろき

光任　ソレ、御介抱。（ト侍女二人、良門のそばへ行き、）

兩人　申し御上使樣。

ト介抱する。良門兩人を拂ひ、スックと立つて、あたりを見て狂亂のこなしにて

良門　ハヽヽヽヽ。矢ッ張り瓶子の口が拔けぬワ。コレ、女子ども。

ト鼓唄になり、舞臺の簾靜かにおりて來る。これより良門、狂亂の所作のかゝりになる。

〽亂れ心や解けやらぬ、千筋の絲のあやめも知らず〽闇路に結ぶさゝ蟹の、緣にひかるゝ小車の、廻る因果は物思ひ、よしやうつゝに夢の花、ちらくもわかぬ仇心、浮氣思へは笹船に乘せてつれゆこもの、神崎へ〽やんれ白波うつや、鼓の川柳、水にもまれて、もまれて水にしみつゆるめつ音こそ入りけれ、しめて寢た夜のふたりの中の子寶、こゝに此花冬ごもり、春待つ花の懷に乳房尋ねん月の影、わやくな空や時雨どき〽寺々の鐘もみだるゝに霜夜の嵐、鳥と鐘とに思ひもあろが、オヽ時知らぬ月夜烏は、いつも鳴くしよんがへ、暫し留りてくれよ

かし、面白や〳〵しども中戸に伏しまろぶ、たゞ狂亂の有樣は、生體なくこそ見えにけれ。

ト よろしく振りあつて納まろ。又、どろ〳〵にて良門悶絶する。侍女二人同じく介抱する。

兩人　モシ、お上使樣、お心が附きましたか。

良門　(心附くこなし) 又もや蜘蛛の念慮によつて、ハテ、殘念な。……矢ッ張り瓶子が離れぬか。

女二　御上使には御逆上と相見えまする。

良門　持病の眩暈、武士にあるまじき、面目次第もござらぬ。

ト 又どろ〳〵にて蜘蛛まとひゐる。雷雲思ひ入れあつて

雷雲　その瓶子をば (ト良門にかゝる立廻りにて、瓶子ひけて毒酒こぼれしこなしにて蜘蛛にかゝろ。蜘蛛死するを見て、雷雲思ひ入れ。) 瓶子の酒のこぼるゝと、忽ち蜘蛛の死んだるは。

光任　まさに毒酒。(ト良門、雷雲を取つて投げろ。)

雷雲　こりや、堪らぬ。

ト 下座へ逃げて入る。合ひ方になり、保輔の前の簾一面に卷きあがる。良門、二重舞臺へ上ろ。下座より美女丸、若衆方、長上下、振り袖衣裳にて、茶臺に茶碗を乘せ、持つて良門の側へ行く。

美女　御上使樣には、お茶一つ召しあがられませう。

良門（美女丸をぐつと見て）それがしは生れ附いたる女嫌ひ、その廣綱に派手やかなる、美少年のお茶給仕。こりや、忝けないわな。（ト茶碗を取る。）

美女　何をお弄りなされますやら。

良門　して、其方のお名は。

美女　頼光が弟、美女丸と申す者、お見知りおかれて下さりませう。

良門　これはしたり、此たび始めてなれば、お顔見知らぬゆゑ、粗相申し上げてござる。眞つ平御免下さりませう。（トいろ〳〵詫びする。此うち保輔おしだまりゐて）

保輔　虎の斑は目に見ゆれど、人の斑は目に見えぬと、王位を出でゝ遠からぬ、源家の館へ似せ上使、御罰によつて、あのざま。

良門（思ひ入れにて）上使の眞僞を改むれば、先の上使のお詞をとらへて一詮議。

保輔　何がなんと。（ト左右方立ちかゝる。光任留めて）

光任　その眞僞わからぬ御上使へ、お口取りの珍物、申し附けし物、これへ。

侍女　畏まつてござります。（ト管絃になり、侍女皆々、結構なる高杯へ黄金を凄まじく積み上げ、持つて出で、保輔、良門の前へ直し）粗末なるお口取、御賞翫下さりませう。

と後へさがる。

兩人　これは。（ト思ひ入れ。）

光任　武藏の方より上京の方々へは。

兩人　アノ、これが珍物。

光任　都に近き井手の玉川、古歌もあつて優風流、心は變らぬ都と鄙、しかし井出の玉川、時ならぬ山吹の花、御覽に入れんため。

良門　すりや、山吹と名を替へて、こがね花咲く黃金の

保輔　賄賂を以て上使の手前、償ふのか。

光任　イヤ、左にあらず。二人の上使、眞僞わからぬこの場の樣子。

兩人　何がなんと。

光仕（扇をとつて開き見て）コレ、御覽下されい。（ト合ひ方になる。）

保輔　その扇面は。

良門　立波の模樣。

光任　風吹けば沖津白浪たつた山、唐土にては綠の林。

保輔　すりや、われ〳〵を、盗人、かたりと疑ふのか。

光任　誠源家の臣下なら、證據の割符が

良門　鎮守府の印鑑すわりしお墨附。（ト以前の墨附を出す。保輔思ひ入れ、光任取つて）

光任　すりや、お墨附、これで疑ひ

良門　晴れたであらう。

光任　（思ひ入れあつて）御覧に入れし扇の畫面はこの白波、それをおとりに見出さん爲、夜前市原野を夜廻りの折柄、怪しき非人、きやつ曲者と知つたるゆゑ、詮議せんと思ひの外、傘引きさき隠れしは、慥かに上使の其お方。さては多くの金銀を、衒り取らん爲なるか。

兩人　（思ひ入れあつて）エイ。（ト金を礫に打つ。光任叩き落して）

光任　コリヤ、黄金を礫に打つたは。

保輔　賄賂を取らねば盗賊の悪名もなし。

良門　元より廣綱偽りならねば、志しは返し遣はす。

光任　すりや、黄金を

保輔　取らねば元の

良門　上使と

保輔　上使。

光任　然らば名劍、後程までに。

兩人　受取り申さう。

皆々　すりや、御上使樣には

兩人　これが勝手。

光任　然らば後刻、お目にかゝりませう。

ト唄になり、光任先きに皆々奥へ入る。良門・保輔ばかり殘る。良門煙草盆を持ち、前へ出て

良門　御上使、ちよつと逢ひ申さう。

保輔　アノ、それがしに。（ト煙草盆を持ち前へ出る、合ひ方になり）出たが、なんだ。

良門　モシ、化けの皮が顯はれたらば、この廣綱が見遁してやる程に、早く歸れ〳〵。

保輔　今年始めて座頭だと思つて、大分大きな事を言ふな。歸つてよければ、おれより先きへ、われ歸れ。

良門　正眞の廣綱が歸るにも及ばぬ。尤も去年までなら、こな樣の自由にもなるであらうが、今年は新

らしく、成田の不動を請け人に頼んで、八百八町の旦那方へ、奉公初めの誠の廣綱。それだによ
つて、われから歸れと言ふのだ。

保輔　惡い奴に逢つたわい。（トこなしあつて）さう言へば、引摺り出しても歸すぞよ。

良門　こりや、面白い。歸るまいといつたらどうする。

保輔　知れた事、刀に掛けて。（ト刀を取りあげる。）

良門　われこそ刀で歸してくれうぞ。（ト拔きかゝる手をおさへて）

保輔　小癪な事を。

ト双方立ち上る。てんつゝ、早舞になり、向うよりお岩、さら毛束ね髮・振り袖やつし、手甲、脚絆の田舍娘。これを中間、紺看板にて棒を持ち、附いて出て來る。

中間　イヤ〳〵、在郷ものめ。御殿へはならぬといふに。

いは　エヽ、何をやかましう言はしやんす。

トせり合ひながら舞臺へ來る。舞臺の兩人は立廻り。これを見て中間驚き

中間　ヤア、拔いたワ〳〵〳〵。

ト下座へ逃げて入る。お岩、こは〳〵中へ入るを、引きのけ、また切り結ぶ。お岩、どうせうといふ

こなしにて、持つて出た笠にて押へ、三人きつと見得にて顔見合せ

兩人　エヽ、邪魔な女め。

いは　マア／＼、待つて下さりませ。

ト留めるを引きのけ立廻り。薄どろ／＼にて、保輔の刀、ポツと折れる。三人驚き

保輔　正に名作。

ト若黨一人出て

若黨　慥かに蜘蛛切り。

ト取らうとするを良門ポント切つて捨てる。大どろ／＼、誂へ三味線入りの小太鼓の樂になる、蜘蛛良門の刀へ纏ふ、三人きつと思ひ入れ。

良門　ハテ、心得ぬ。わが刀に血汐を注げば、忽ちに蜘蛛の群るは。

保輔　怪しき上使と察せしゆゑ、只一打ちと切りかけし、刀をうち折り、血汐の穢れにこの騒動。

いは　わが背子がくべき宵なりさゝがにの、蜘蛛の振舞ひかねてより、聞き傳へたる劍の不思議。

良門　帶せしわれもこの奇特、始めて知つたる、ハテ、業物。（ト刀を見て思ひ入れ。）

いは　さてはいつぞや葛城にて、討たれし蜘蛛の

良門　ヤ。（ト思ひ入れ。）

保輔　それぞ慥かに蜘蛛切り丸。（トきつとなる、良門手早く袖にて隠す。どろ／＼止む、蜘蛛消える。）

良門　イヽヤ、これこそ我が重代。無銘なれども希代の業物、誠の武士の所持いたす一腰、刀を清めて

ト刀を出す。お岩、柄杓にて手水鉢の水をかけ、手拭を取つて、刀に恐れしこなしにて良門に渡す。良門刀を拭く。保輔思ひ入れ、管絃になる、三人顔見合せ思ひ入れ。良門刀を鞘へ納めようとする。保輔思ひ入れあつて

保輔　その刀、しばらく。（ト保輔落ちたるわが刀の鞘を取つて）お替鞘、進上いたさう。

ト管絃になり、いけころし。保輔鞘を持ち、良門の側へ行く。お岩、これに目を附け、眞中にてあとへ寄る。良門構はず刀を差出しゐる。保輔刀をきつと見て、この鞘に刀しつくり合ふゆゑ、良門ぎつくりして思はず振り向く。保輔と顔見合せ思ひ入れ。此うち田舍娘窺ひ見て、この時こなしあつて、ちやつと又あとへ寄る。

良門　すりや、身共が刀へ

保輔　手前の鞘が

いは　しつくり合うたは

保輔　さてはいつぞや諸羽の宮にて、密かに忍ぶ經櫃を、曲者あつて持ち行きしが、その行く先きは花

山の古御所、褄戸蔀も、野嵐に、バラ〳〵と經櫃を、破つて出でし折も折、豐後の次郎が爭ひし、平親王將門が、持ち傳へたるさゝ蟹の一卷。

良門　源家の蜘蛛切り奪ひし樣子、死にもの狂ひに蹴立てられ、木の葉は散つて、蓬々たる、茅萱の茂る荒れ御所の、忍ぶ下家も野の錦。

いは　千早ふるびし神の末、皇居も今は荒れ果てゝ、狐狸妖怪の外とては、誰れしも住まぬ隱れ家へ、打つ太刀音に驚きて

保輔　見れば肌の蜘蛛の巣に、豐後の次郎が橫死によつて

良門　思はず落せし一卷を、取らんとすれば、また曲者。

いは　これも落ちたる名劍と、その一卷を爭へども、事問ふものは山彦に、あいろも見えぬ眞の闇。

良門　百鬼夜行と疑ひし、氣高き美女が一卷を

保輔　爭ふ中にも奪ひしが

いは　猶も深夜に霧深く

良門　姿形ちは分らねど

保輔　さも腥さき風もろとも

良門　天地も裂ける動搖は
保輔　怪しき蜘蛛と
良門　誘ひし女は
兩人　慥かに妖怪。
いは　エ。（ト三人顏見合せ、お岩ぎつくりとなる。）
兩人　さては。（トお岩へかゝる立廻り、一卷を落す。）
保輔　この一卷は。

トお岩手早く取り、兩人拔きかけようとする。お岩眞中にて一卷を開き、きつとなる。大どろ〳〵。お岩其まゝせり下る。兩人驚き

良門　いよ〳〵怪しき女が振舞ひ。
保輔　蜘蛛切り丸は、たしかにそれと。（ト寄らうとする。）
良門　此方も怪しむ曲者が、鞘を證據に
保輔　そちが刀に、しつくり合うたは、慥かに曲者。
良門　すりや、その時の

保輔　曲者
良門　同志で
兩人　あつたなア。
　　ト又どろ〳〵にて下の方へお岩せり上がる、
良門　これに附けても今の賤の女。
いは　わたしや、先刻にから此處にゐます。
兩人　すりや、それに居つたか。（ト思ひ入れ）して、いづくの賤の女。
いは　在所は、下總猿島郡。
兩人　ヤ。（ト思ひ入れ。）
いは　岩井の鄕のもの、尋ぬる人があつて。
保輔　然らば、暫くそれがしが、通達いたして遣はさう。
いは　それは嬉しうござります。どうぞ連れて行つて下さりませ。
保輔　賤の女を同道しては（ト行かうとするをお岩とらへる）ハテ、聞きわけのない。
　　ト振り切る。保輔、懷の袱紗包みの岩井櫛を落す。
いは　エヽ、つれないお人。（トつんと此方を向く途端に、櫛を取上げ、合點のゆかぬこなし。）

良門　まだこなたには聞きたい事もあれば、座席を改め、何かの事を。
保輔　そりや、此方にも、かねての望み。
良門　然らば當家の使者の間へ。
いは　(思ひ入れあつて)　こちらにござんす御上使さん、ちつとあなたに。
保輔　そちや、外に尋ねるものがあると申したではないか。
いは　イヽエ、矢ッ張りこの櫛。(ト言はうとして)　どうぞ、待つて下さんせ。
保輔　アノ、それがしに。……ハテ、變つた尋ねもの。
良門　然らば、お先へ參るでござらう。
いは　どうぞ、さうして下さんせ。
保輔　先づそれまでは
良門　同じ家名の
保輔　上使と
良門　上使。
保輔　まづ〳〵、お先きへ。

良門　後刻面談いたすでござらう。
ト管絃になり、良門思ひ入れあつて、奥へ入る。お岩、保輔殘り、兩人思ひ入れあつて
保輔　最前より怪しき女と思ひの外、それがしを止めしは、仔細あつての事なるか。
いは　こりや、あなたのでござりますか。（ト拾ひし櫛を出す。）
保輔　その岩井櫛は、それがしが懷中いたしをつたが　（ト懷を尋れる。）
いは　たつた今、こゝで拾ひました。
保輔　それは忝けない。こりや、大切の品。（ト懷中する。）
いは　それを大切とおつしやるからは　（ト懷より袱紗に包みし鍬形を出し）これ、お覺えでござんすかえ
ト合ひ方になりて、保輔取りあげ
保輔　こりや、黄金の鍬形。これを所持なしをるからは、
いは　わたしや、下總の國猿島郡で、岩井の郷の賤の女でござんす。
中間（窺ひ出て）ヤイ、女め。うぬ、案内もなく御門を通るゆゑ、咎めたれば逃げ廻つて、よくもお庭へ來たな。サア、出をらう〳〵。（トお岩を引き立てにかゝる。）
いは　マア〳〵、待つて下さんせ、それどころではないわいな。

中間　うぬ、御上使と馴れ〳〵しく物を言ふが　おれは聾ゆゑ、何も聞えぬワ。サア〳〵、來い。

　　トまた引き立てるを、保輔中間を取つて押へ

保輔　コリヤ、女。それがしこそ武者修行と、世を僞つて白波の

いは　ア丶、モシ、人や聞く、必ず密に。

保輔　イヽヤ、こいつは聾。

いは　ほんに、さうでござんしたなア。

保輔　關八州を經廻るうち、しかも正月、鹿島なる

いは　常陸帯の神事にて、闇がりながら拜殿の、帯にて緣を結ぶの神。引き合せにはその夜の雜魚寢、

　二世の誓ひと差櫛の、黄楊にはあらでわたしが、在所の、一村ばかり、さした村名の岩井櫛。

保輔　われも重代二世のしるしに、黄金の鍬形。

いは　下さんしたを大事にして、佛樣とも神樣とも、思うて朝夕願ひ事。

保輔　後の證據と持つてゐたか。

いは　持たねばならぬ只だ一夜、淺き契りもわたしが百歲。

保輔　そりや、われとても深き思ひに

いは　一度の契りに宿したる、お前の胤を、月滿ちて

保輔　さすればその夜のさし汐に、まだ闇がりの常陸帶、神事と共に

いは　嬉しい雜魚寢の男はお前、それとも知らず、花山の院にて逢うたのは

保輔　二世の誓ひのわが妻と、知らぬその夜の怪しみは、蜘蛛の働き、まさに妖術、世にも不思議と思ひしが

いは　未來をかけたわが夫に、何をか隱さん、大和なる、葛城山の女郎蜘蛛、その妖術を此身に受けつぎ、皮肉に分け入る、千變萬化はわが自在。

保輔　女に稀れな頼もしき、その魂ひでいよ〳〵安堵。定めてその身に大望は、察するところ叛逆の

いは　父はこの世を去つたれど、一度源家へ恨みをなし、その妄執を晴らさんと、女ながらも一念は

保輔　百萬騎にも勝つた不敵、諸國を一人ねらふうち

いは　この程思はず古御所にて、父の用ひしさゝ蟹の、一卷も手に入れて、猶も妖術心のまゝ。

保輔　さすれば、おことが氏素性は

いは　言はぬは言ふに岩井櫛、あれを證據に。

保輔　きつと思ひ入れ）さては相馬の

いは　内裏と聞くも恨めしく
保輔　父の仇を報はんと
いは　はる〴〵登りし都にて
保輔　忍ぶその身の隱れ家は
いは　色をも捨てゝ枯れ〴〵に
保輔　花山の御所にて思はずも
いは　逢うたは未來と
保輔　誓ひし女房。
いは　思へば盡きせぬ　（ト中間起きあがつて）
中間　樣子は。（トかゝるを保輔押へ　。　聞えぬ。　ト中間が顏をくらはす。そこへ倒れる。お岩思ひ入れあり）
兩人　緣ぢやなア。

　トこの仕組よろしく　●　ひやうし　幕

管絃のつなぎにて、この幕引き返す。

本舞臺、三間の間二重舞臺、東西の舞臺とも、竹の節欄間にて翠簾をおろしあり。見附に金襖、眞中二重舞臺に、園生の前、小打着、緋の袴にて琴を調べゐる。八十瀬、お國、東路、瀧野、腰元にて控へゐる、舞臺前しがらみの池の方、梅の立ち木へ鶯來て囀りゐる。誂への琴唄にて幕明く。

園生　鶯の、朝每には來つれども、梅の花に來る噂、風雅の常。今日神事によつて住吉の神へ捧げの琴の一曲、それを慕うて囀づるは、ハテ、しほらしい鳥ぢやなア。

瀧野　北の御方には、御奉納の一曲が、相濟みましてござりまするか。

八十　今日は思ひがけない御上使で、いろ〳〵とのお心遣ひ。

お國　只今御奉納の一曲承はりましたが、面白い事でござりました。

園生　全體琴の組といふものは、源氏をおもに入れたものぢやわいの。

四人　その源氏とやらは、色めいたものではござりませぬか。

園生　されば、源氏といふものは、箒木の森より六十帖を綴りしとあり。森の茂りの俤、ありなしの心これ佛法の肝要。空形中の文字妙理、見る者の心によつて、さま〴〵の違ひ。源氏を讀んで出家せし人、また家を滅せし人その數多し。其方衆も好色に心移らぬやう、愼みが第一ぢやぞや。

瀧野　ほんに、あなたのお側に御奉公いたしますれば

皆々　私しどもの仕合せでござりまする。

　　ト東西の屋體にて

良門　ヤイ、水のせまき岩間に住み馴れて、さぞ廣澤の池の鴛鴦。

保輔　ちよつと〳〵に欺されて、もうかんざしはこればかり。

　　ト合ひ方になり、舞臺前の池へ鴛鴦むらがる。東西の御簾あがる。上の方保輔、上下鉢卷にて、胡坐をかき、徳利と茶碗を置き、結構なる火鉢の上へ小鍋をかけ、煮てゐる。下の方良門、矢張り長上下にて花盆に花を並べ、山茶花を活けてゐる。

園生　左右の座敷は御上使さま。

八十　左樣でござりまする。御饗應はこれがよいとお好みにて、いろ〳〵花を、お取り寄せなされてゞござりまする。

東路　御自身にお花を、お活けなされてゞござりまする。

瀧野　これはしたり、こちらの御上使樣は、如何にお好みなさればとて

お國　御自身にお小鍋立てにて茶碗酒、そして鉢卷をなされて、怪しからぬ。

保輔　こりやア、おれが當り前。上使〳〵といかめしくはするものゝ、武藏の三田で育ちたれば、二本差しでも組屋敷同前、時によつては町の裏住み。そこでおれへの饗應は、七五三の料理より、よ

〳〵好いた茶碗酒、葱に鮪のすつぽん煮、こいつは呑めるわい。(ト酒を呑んでゐる。)

お國　アレ、御覧なされ。

園生　コリヤ〳〵、御上使様へ、粗相申しあげまいぞ。

良門　ハテ、蓼喰ふ蟲も好き〴〵と、聞けば彼方の御上使は、饗應に茶碗酒。それがしは又、好きの道とは言ひながら、花を活けての樂しみ。併しお庭先へ廣澤の池を取り入れて、あの鵁鶄の群れる様は、ハテ、よい眺めではある。(ト矢張り花を活けてゐる。)

八十　申し、御上使様、お花の水を取つて參じませうか。

東路　お花の塵を掃除いたしませうか。(ト立ちかゝる。良門おどろき)

良門　コリヤ〳〵、腰元ども。身共は女は大嫌ひ。必ず、寄るまいぞ〳〵。

東路八十　ハイ〳〵。

保輔　(酒を呑んでゐる。)斯う引きうけた所は、どうもたまらぬわい。

ト煙草をのむ。合ひ方替り、奥より美女丸、花盆に花挿しを載せて持つて出て、良門の前へ行き、

美女　御上使様には、お花がいりませうと存じまして、お水を持つて參りましてござりまする。

良門　これは〳〵、美女丸には、仰せ附けられいで、御自身に花の水を、有り難うござりまする。サヽ、

これへ〳〵。

美女　左様なら、お側へ参つてもよろしうござりまするか。

良門　女儀と違うて、どんと苦しうござらぬ。

女四人　アレマア、あんまりな御上使さま。

美女（良門の前へ行き手を突き）武士は武藝が第一でござりまするが、琴碁書畫の外、茶の湯、立花、私しは立花が習ひたうござりまする。何卒御指南下されませうならば

良門　これはしたり〳〵。マア、お手を上げられませう。隨分お心易いことでござる。先づお花にも眞行草がござつて、いろ〳〵に弄ぶもの。山茶花なら山茶花の眞を入れまして、斯うまた流れの枝を。（ト花にて數へる。）

美女　むづかしいものでござりまするが、面白いものでござりませうな。

良門　イヤ、また面白いのは（ト美女丸が顏をぢつと見て）コレ、この水仙でござる。（ト花を取りあげ）水仙の花の姿や若衆振りとは、古人の發句。

美女　エ。

良門　ハテ、憎からぬ。（ト美女丸の手を取り）水仙でござるなア。

美女　そんなら御指南なされて下さりまするか。

ト良門に寄り添ふ。此うち園生の前、腰元、そろ〱下の屋體際へ來り、樣子を聞く。保輔も立ちあがり聞いてゐる。

良門　花の大事も、人の心と同じ事で、眞實の眞をよく定めて、外の枝へ段々目を附けるが身の粧ひ。その花のあでやかに、心も惚れて

美女　さればでござりまする、心の花が花に惚れ、花の心が心に惚れるとやら、申すこともござりますれば。（ト互ひに思ひ入れある。）

良門　花は正面より見るものなれど（ト美女丸を後から引き寄せ）斯う後から眞の添枝そへど、うしろが大事。とかく根じめが肝心でござる。

美女　隨分承知でござりまする。（ト思ひ入れあつて良門へもたれる。）

良門　根じめが極まれば、ちよつと水をつがねばならぬ。

美女　（思ひ入れあつて）それをつげと仰しやるは、斯うでござりまするか。

良門　こりや、モウ、花の傳授を許さねばならぬわい。

ト皆々恟くりする。保輔ちやつと元の所へ來て、煙管にて火鉢を叩き立て、煙草をのむ。

女　申し、北の御方樣。
四人　園生　皆の者、お奧へ。
四人　ハイ丶丶丶。

トこれより本管入り、雲上なる誂への合ひ方になり、腰元四人、下座へ入る。引き違へて光任出て來て、平舞臺にて

光任　北の御方には、御上使の御饗應、御苦勞に存じまする。
園生　其方もさぞ心づかひ。ちと休息しやいなう。
光任　ハツ〳〵、休息も勝手で仕つりましたが、先刻美女丸樣へ素讀を敎へかけましたが、どれへござつたやら。
園生　美女丸は次の間の、御上使のお相手に。
光任　お慰みに素讀でござりますなら、拙者も參つてお相手に。
園生　ア丶コレ、行つては惡い。イヤ、それには及ばぬわいなう。
美女　(思ひ入れあつて)光任樣、私しはこれ御上使樣に、立花のお稽古いたしてをりまする。
光任　それは一段の事でござりまする。

良門　好きより上手と、忽ち上達でござる。ハヽヽヽヽヽ。（ト美女丸へ思ひ入れ。）

光任　然らば、拙者も先刻の讀みさしを。（ト見臺の本を取り出し、煙草のみながら思ひ入れあつて）「皇極經書に曰く、日の月に望む時は月蝕し、月日を掩ふ時は日蝕す、猶火と水の相剋の如し」こゝを思へば何事も心に掛けるは愚癡の至り、人の心はさま〴〵にて、好き不好きのあるものぢやなア

ト此うち園生の前、保輔の屋體のそばへ來て、鴛鴦を見て

園生　申し御上使樣、池の面の鴛鴦は、可愛らしいぢやござりませぬか。

保輔　わしやア、鴛鴦よりは矢ッ張り葱鳥、鎌倉川岸の鶏はうまいやつサ。

ト矢張り火鉢にて鍋燒きをしてゐる。

園生　喰ものゝ事ではござりませぬ。あの池の鴛鴦のやうに。（ト保輔へ思ひ入れ。）

光任　北の御方には、鴛鴦のお尋ねでござりますが、それは彼の唐土、宋の大夫釋明、その妻美にして、國色に名あり、康國これを奪うて宮に入る。

保輔　何だか、チンプンカンだが、そいつは唐の間男だね。

光任　先づお聞きなされい。韓明甚だ恨みを含んで自殺す。その妻これを慕ひ共に死す。これを埋むるに一夜を經て連理木を生ず。又鳥となつてこれ鴛鴦なり。

保輔　ハテ、實深い鳥だな。道理で水の中を歩く時に、雌と雄とくつゝいて番ひ離れぬ比翼の鳥。

園生　成る程、裏店の獨り者が酒くらふやうに、手酌でもうまくねえかえ。

保輔　そんなら九獻のお相手に。（ト思ひ入れ。）

園生　ヤ。（ト心得ぬこなし。）

光任　九獻や一升なくつてもよい。もう一獻つく、取りにやつて、隣りの山の神や、かゝア左衞門の氣取りになつて。

保輔　（思ひ入れあつて）お合ひをするには、辛氣らしいこの緋の袴。

園生　親方の葬ひより外、着た事のない上下も、ひつたくつて

ト園生の前、緋の袴を取り、保輔上下を取る。光任きつとなつて

保輔　コリヤ〳〵、みさきには、（ト言はうとして）其元亂れて末納まらずとありしが、北の方には苦々しき、どうやら禮儀も打忘れて、酒は亂れの基ゐと戒め。

光任　でも、御上使樣への御酒のお相手、どうで亂れにやならぬわえ。（ト思ひ入れ。保輔の側へ行く。）

園生　御上使樣饗應とあれば、是非もなけれど、ハテ、情けない。（トぢつとなる。）

保輔　これは〳〵、北の方には、あんまり恐れ入谷の鬼子母神、こいつは江戸の古い洒落サ。
園生（そこらを見て）杯はどこにあるえ。
保輔　ナニ杯どころか、茶碗酒サ。
ト茶碗を出す。園生の前おどろき
園生　アノ、この茶碗でお茶呑むやうに、九獻たべるのかや。
保輔（茶碗を教へる。）こゝの青いところまで一杯つぐのを、青つきりといふのサ。
園生　成る程、土器の內くもりのやうなものぢや。
保輔　ナニ、內ばかりぢやない。外も雪空のやうに曇つた時は、鐵砲が命だ。それで呑むが、裏店のやりばなし暮しサ。
光任　わが君を打ち捨ておかれて、アノ仕儀。…………とは云へ、差當る御上使の事。ハテ、何としたらよからう。この屈託を紛らすには、好きの學問。
ト矢張り本を見ながら煙草をのんでゐる。このうち美女丸、良門思ひ入れあつて
良門　斯う打ち解ける上からは、いよ〳〵兄弟の因み。
美女　そんならお前は。（ト菊の枝と梅を取る。）

光任　成る程、花に喩へたる親子兄弟、禮儀が第一。

良門　活花の傳授といふは、萩を活けるに湯を使ふやうなもので、この手をちよつと温めて

　　　ト美女丸の懷へ手を入れる。

美女　アレ、こそばうござります。

良門　(心得ぬこなしにて)この乳は。

美女　ハイ、わたしや女でござります。

良門　ヤアヽヽヽ。(ト悃くりする、美女丸上下を脱いで)

美女　保昌が娘小式部と申します者。いつぞや御主人、美女丸樣、御父滿仲公のお怒りあつて、首討てとあるを、お身代りを立てゝ其後山門へ御登山。わたしは子育ちがないとあつて、女を男にして、御主人より有りがたい、美女丸樣の代りになし下され、御不便加へられて御養育。そのやうに御丁寧に仰しやるものではござりませぬ。どうぞ未來をかけて。(ト良門に寄り添ふ)。

良門　ハテ、さう聞いては、どうやら身共も。

保輔　隣りの長屋ぢやァ、何だか面白い話し合ひと見えるわい。

園生　何であらうぞ。(トそろ〳〵と下の屋體の側へ行く。)

光任　兼ねて保昌どのには、よい聟がねを尋ねてゐられたが、思ひがけない小式部、御上使と不埒と思へど、こゝを以つて、詩經に曰く、桃の夭々たる、しん〳〵たるその花は、この子こゝに歸ぐ、桃の花の盛んなるを見て男女婚姻をなす、相共に和順してよろし。

良門　光任どのゝ金言を聞いては、女嫌ひも、好物にならねばならぬわい、

ト美女丸を引き寄せる。

美女　アヽ、モシ、御上使樣、それではあんまり恐れ入ります。

園生　アレ、あの子が恐れ入ると云ふわいな。（ト走つて保輔の側へ行く。）

光任　イヤ、申し、北の御方、小式部が如何なる貴人に對しましたか。きつう恐れ入りますな。

ト笑ふ。保輔思ひ入れあつて

保輔　ありやア、若衆ぢやアないか。

園生　イエ〳〵、美女丸と申す若衆にして置きますが、實は女子で

保輔　初ものか、それでは恐れ入谷の

園生　鬼子母神さま程、子の出來さうなあの子の顏附き。（トそろ〳〵と下の屋體の側へ行く。）

光任　聖人も此子こゝに歸ぐと、陰陽の心をいはれたわえ。

良門　ハテ、珍らしい。七十五日の初ものを。
美女　これは痛み入ります。
園生（悩くりして、こちらへ來る）アレ、痛みいるといなく〱。
光任　小式部が痛み入ると申しますのか。
園生　さうぢやわいの。
光任　子心にも、よく〱迷惑な事と見える。ハテ、氣の毒千萬な。
保輔　したが、そいつは痛み入りさうなもの。
美女　斯うなるからは、外に惡性はならぬぞえ。エヽ。（ト良門の腕へ喰ひつく。）こりや、齒形のつかぬは。
良門　ヤ。（ト隱す。美女丸また腕をまくり）
美女　この痣は。
良門　コリヤ。（ト引き廻して抱く。）
園生　御上使も
保輔　ドレ、お相伴。（ト園生の前、保輔に寄り添ふ。）

良門 可愛の者やな〳〵。

ト東西の屋體へ御簾おりる。光任殘り

光任 ムウ。（ト思案する。時の鐘になり、）みさきどのゝ心體といひ、小式部があの樣子、心あつての事か、ハテ、ナア。（トとろ〳〵にて上の屋體へ蜘蛛まとひ下りる。光任きつて見て）ハテ、心得ぬ。寸に延びたるあの蜘蛛のあれへ纏ふは不審しく、これに附ても心ならぬは、この程都に徘徊なす怪しき女。葛城山の蜘蛛の術を其身にうけて行ふと聞く。正に先年亡びたる將門、純友の殘黨ならん。小賢しきとは思へども、神力勇者に勝つこと能はずの道理。ハテ、心にくき、さゝ蟹の振舞ひぢやなア。

保輔 コリヤ、園生の前、心を附けい〳〵。

光任 あの聲は慥かに御上使。

ト薄どろ〳〵にて御簾まき揚げる。園生の前保輔に凭れ苦しみゐる。この前、下り蜘蛛する。保輔きつと見て

保輔 ハテ、心得ぬ。園生の前と枕交せしその折から、茫然となりしは。

園生 このさゝ蟹が苦しめしか。

保輔 ハテ、恐ろしい。（トどろ〳〵、此うち襖を明けて窺ひゐたるお岩この屋體の方を見ろ、前にある鏡臺へ仕掛

けにて、お岩の顔蜘蛛の姿にうつる。保輔これを見て、）さてこそ、鏡へ蜘蛛の姿が。（トこちらを見る。

お岩と顔見合せ、お岩襖をピッシャリしめる。）　ムウ。

ト思ひ入れ。光任ぢつと考へ

光任　北の方のその有樣は。

園生　御上使樣が、あまり嬉しいお心ゆゑ、それにほだされ、つい枕を交したわいなう。

ト光任きつとなり

光任　ハテ、是非もなき、戀は心の外ぢやなア。

保輔　園生の前が身共の心に隨ふ上は、茶碗酒の下樣を止めにして

園生　今改めて。（ト千秋萬歳の謠ひ、下座にて謳ふ。）

三人　これは。

ト驚く。三味線入り小鼓の樂になり、保輔、園生の前、平舞臺へ下りる。下座より八十瀬、お國、東路、瀧野、三方に土器、島臺、蓬の臺、長柄、くはへを、持ち出て來て

八十　わが君樣には御病氣ながら、何かの樣子をお聞きあつて

お國　お顏の似たるを幸ひに、北の方となつて計られしは、能勢の判官が娘御。

八十　みさきさんが、日頃尋ぬる許嫁の殿御は、今日の御上使にて
お國　酒にみだれて戀ひ慕ひしは、不義のやうには思へども、矢ッ張り貞心。
東路　早う御婚姻のとゝのへ、三々九度の杯を
瀧野　取り交せよと有り難い上意。
三人　早うお杯をなされませいな。（ト保輔園生の前の前へ直す。）
園生　有り難い君の御上意にて、只今婚姻の杯事。頼光公の御所勞ゆゑ、入り込む武士は心々と、それを計つて光任どのと言ひ合せ、お顔の似たる北の方となつて、勿體なくも何かの樣子を、窺うたのぢやわいなア。
光任　すりや、御上使が、こなたの云ひ號けであつたよな。
園生　それぢやによつて、三々九度の杯を。
女三人　早うなされませいなア。
トあひに相生のと謠ひになり、園生の前土器を取りあげる。この時お岩、つか／＼と出で、土器をとつて打ち割る。皆々悔くりして
女三人　ヤア、、こなさんは見馴れぬ女中。

園生　一世一度、大事の婚姻の杯、割らしやんしたは

いは　腹が立つから。

皆々　エヽ。

いは　(保輔をとらへて)　お前、マア、何でござんす。在所のわたしでも構はず、いとしいの、可愛いゝの、死んでも離れぬ女夫ぢやのと、約束して置いて、それにマア、畠ぜゝり、村の者から隣り村、誰れでも彼れでもお嫌ひなしの性悪るさん。そしてマア、色さんといふは、結構な着物着飾り、美しい奥様。お内も結構、綺麗な夜着や蒲團着て、寐さつしやると思へば腹が立つ。なんぼ、わたしがこんな在所ものぢやというて、見替へられてどうせうぞいなア。

保輔　うぬ、一討。(ト抜きかける。)

園生　モシ、めでたいこの場の事なれば、マアく、お待ちなさんせいなア。

八十　何はともあれ、御上使様へ慮外な女中。

皆々　早うこゝを下らしやんせいなア。

保輔　三々九度の杯を、打ち割つたる不屆き者、捨て置かれぬ女なれども、いはゞめでたき折りなれば赦しくれうが、改めて婚姻の酌をしろ。

いは　エヽ。（ト悄りする。）
皆々　否なら、こゝを下らしやんせ。
女　いは　サア、それは
皆々　謡ひものでも諷やるか。
女　いは　サア、それは
皆々　サア、〳〵、〳〵。（トお岩を引つ立て）きり〳〵出て行かしやんせ。
トお岩泣く〳〵思ひ入れあつて立ちあがり
いは　ほんに、マア、何の因果で都へ登り、辛い憂き目に逢ふぞいな。矢ツ張り在所で麦畠の、霜ふみ附けが増しぢやもの。情けない身になつたわいなア。
ト誂への合ひ方になつて、お岩思ひ入れあつて、見返り〳〵花道へ行きかゝり、きつと思ひ入れ。ばたばたと光任の側へ行き
モシ、捨てる神あれば助くる神、どうぞ色になつて下さんせ。
光任　（此うちぢつとなつてゐて）これは又、不埒なる事を。
いは　但しはお否かえ。

光任　サア、それは

いは　さうぢやあらうが、どうぞ間に合せでも大事ない、色になつて下さんせ。

ト此うち奥より、腰元三人出かゝりゐて、この時

三人　イヤ、間に合せでない、ほんまの色を取り持たう。（ト合ひ方になる。）

いは　エヽ。（トびつくりする。）

腰一　最前から聞いてゐれば、あんまりいとしい事でござんすが

腰二　言ひ交した男に見替へられたゆゑ、面當てに急に色が欲しいから

腰三　間に合せでも大事ないと言はしやんすが、眞實こなたに惚れてゐる

ト お岩きつと思ひ入れあつて

いは　男があるとは、ほんの事かえ。

三人　なんの嘘を言はうぞいなう。

腰一　今日お入りの尊國様ぢやわいの。

いは　エヽ。（ト思ひ入れ。）

女六人　どうして、マア、尊國様が。

腰一　ハテ、さういうて欺して……いぢめてな。（ト思ひ入れ。お岩嬉しきこなし。）
いは　さういふ事なら、憎い男へ面當てに、早う連れていて下さんせいなア。
腰二　ハテ、せわしない。マア〳〵待ちや。なんぼさう言つたとて、尊國樣のお上さんになる事。
腰三　そんな形でも行かれまい。何ぞよい事がありさうなもの。（トそこらを見て、十二單衣を見て）
腰四　幸ひ〳〵、こゝにみさきさんのお召しなされた、十二單衣　これを着せて。
三人　お后さまにせう〳〵。（ト捨ぜりふにて、十二單衣をお岩へ着せて）それでこそ、尊國樣のお后さま。
いは　アイ、お后さまぢや〳〵。（トそこらを見せ廻り、保輔へ思ひ入れあつて）お后さまでござんすわいなア。
保輔　ヤイ、女、それがし夫婦を恨むるは尤も。如何にも武者修行の砌り、われと言ひ交したに違ひないが、今改めて緣切つた。
いは　エヽ。
保輔　二世の印と取りかはした岩井櫛、身重のわれと盡未來、緣切つた。
ト岩井櫛を投げてやる。お岩取つて
いは　ハアヽ。

ト時の太鼓になり、下屋體にうちにて

良門　只今打ちしは五ツの太鼓。蜘蛛切り、鬼切り、受取り申さう。

ト管絃になり、簾卷き揚げる。うちに良門、この時上の屋體より尊國君、以前の形にて出て控へゐる。

光任　イヤ、仰せまでもなく、只今お渡し申さう。

園生　（驚き）アノ、二振り共に。

良門　われ〳〵へ。

保輔

光任　お渡し申す、先ツこの通り。

ト刀を腹へ突き込む。どろ〳〵にて、お岩ふるふ、皆々驚き

皆々　これは。（ト篠入りのやうな合ひ方となる。）

光任　御推量の通り、二振りとも疾くより紛失。

良門　すりや、申し譯に。

保輔

光任　光任が切腹、何卒滿仲公へお執成し……それについてもこの女、疑ひもなき將門が殘黨、最屈竟は、それがしが生れは辰の年月日時、蜘蛛の妖術行ふ者に、血汐をそゝげば、忽ちに妖術消ゆると承はれば、叛逆人の根を絶つ爲、また申し譯のこの切腹。

いは すりや、光任が切腹に、わが妖術も消え失せしか。エヽ、口惜しい。

光任 忠死の魂ひ、マツ此通り。

卜腸を掴み出しお岩に打ち附ける。大どろ〳〵、焔たつて、お岩の懐より一卷抜け出で、お岩消える。光任、笛をかいて落入る。園生の前こなし

三人 怪しき女。（卜奥へ入る。）

園生 叛逆人の餘類とは言ひながら、お腹の胎兒は夫の胤、義理ある女子を殺しては、夫へ立たぬ。あと追つかけて、さうぢや。（卜同じく下座へ入る。）

尊國 最前より樣子を聞くに、怪しき上使廣綱。是非一人は似せ者ならん。先づそれよりは何かの企て、一先づ當家を立歸らん。

良門 尊國どの、暫くお待ちやれ。

尊國 何がなんと。

良門 若君を擒に、賴光公を味方に附け、四海を心の儘にせんとは、この廣綱がゐちやァ、マア、ならない。殊に、最前入道が毒酒の計略。心にくい第一番。怪しいは、似せ上使のお身樣は、誰れに賴まれて來た。それを言つてしまはつしやい。

保輔　イヽヤ、知らないワ。
良門　大方さうであらうと思つた。市原野の野伏りども、早く參れ。
三人　心得ました。（トばた〳〵にて前幕の乞食三人走り出て來る。）
保輔　ヤア、わいらは。
乞一　市原野の野伏り、骨箱の六。
乞二　こなたの手下の落葉の松。
乞三　とぶ板の八。
三人　サア、尋常に、本名を名乘らつしやい。
良門　斯うなつちやァ是非がない。百年目だと、きり〳〵言つてしまはつしやい。
保輔　エヽ、いま〳〵しい。斯くなるからは何をか包まん。盜賊の張本、袴垂の平井保輔とはおれが事だ。
皆々　さてこそなァ。
保輔　われ盜賊を業となし、數萬の軍用金を集め、四海を握らんと思ひの外、二才野郎に見顯はされたか。チエヽ、殘念や、と言つたらよからうが、マア、否だ。
良門　そりや、又なぜ。

保輔　コリヤ、お定りのおれが惡黨は當り前。この袴垂は平井の保昌が弟なれば、源家恩顧の大忠臣、大宅の太郎が死したりとも、大磐石、實事師だヮ。

良門　イヤアヽ。（ト悔り、思ひ入れ。）

保輔　サア、御上使の化け損ひ、今年始めて座頭も、まだ赤子の事なれど、お江戸隨一御贔屓を、頭にかむつた金冠り、その將門の殘黨、白狀させるは親父が折檻。新板替つた今年の顏見世。ひつくり返して何れも樣、あいつ一番、しめてお目に掛けませう。ヤツトコトツチヤア、ウントコナア。

ト鼓の合ひ方になり、保輔肌脫ぎ、股立ちを取り、吉例の見得。

良門　そんならわれが

保輔　何と肝が潰れべい。

良門　チエヽ。（ト口惜しきこなし。）

美女　（出て）最早遁がれはござんまい。こなたの戀に迷うたれど、心中に事寄せて、肌に齒形の附かぬといひ、七つの痣のあるからは、將門の殘黨。枕交せし言ひ譯は、先ツこの通り。

ト懷劍にて自害する。良門首を討つ。遠寄せ。

良門　あの、遠寄せは。

保輔　汝を取り巻く味方の手配り。最早叶はぬ、本名名乘れ。

良門　この上は、保輔觀念。

　　ト どんちやん早めになり、良門立廻りあつて、上手の網代塀切り破り、飛び込む。續いて乞食三人入る。

皆々　曲者を取り逃しては

保輔　イヤ、氣遣ひない。

尊國　もう、この上は保輔。八方を取り卷き置きたれば。

　　ト保輔へ拔いてかゝる。立廻りあつて

兩人　ドツコイ

　　ト女形皆々長刀を持ち、この見得よろしく、チョン〳〵にて道具廻る。

　　本舞臺三間の間、九尺高足の亭屋體、御簾かけあり、瓦屋根高欄、惣朱塗り、東西網代塀、紅葉の吊り枝、よき所に井筒、どんちやんにて道具納る。トバツタリ音して誂へ本神樂やうの鳴り物になり、東西の塀を切り破り、上の方良門、下の方お岩、以前の形、拔刀にて出て、きつと見得。始終遠寄せ。兩人窺ひ〳〵、背中合せに行き當り、双方顏見合せ、「ヤア」、ト思ひ入れ、このうち切破りの穴より捕り手二人、四天の形にて出て窺ひゐる。兩人思ひ入れあつて

良門　姿形はかはれども、そちや最前の

いは　御上使樣か。

兩人　さてこそ。（トかゝる、兩人立廻りに、白刃を摑み、兩人思ひ入れあつて）

いは　白刃を恐れぬこの樣子。

良門　賤の女とても、刀の立たぬは、さては不死身か。

捕手兩人　捕つた。（トかゝるを、引き廻して立廻り。）

良門　不死身の孫は稀れにして

いは　もしや尋ぬる下總の、相馬內裏の、百官百司。

良門　平親王の謀叛も、大望空しく遂に滅亡。（ト立廻り。）

いは　一門郞黨ちり〴〵に、せめて血筋の兄妹を、繫ぎ馬の旗までも

良門　敵に奪はれ、その甲斐も、なき身の哀れ、幼きとき

いは　顏見知らねば、これまでに

良門　仇に過せし年月も

いは　思ひ掛けなき

良門　不死身と

いは　不死身。

良門　すりや、疑ひもなき

いは　血筋の兄弟。

良門　姉ぢや人。

いは　弟良門。

良門　七綾姫で

兩人　あつたなア。（ト思ひ入れ。）

捕手二人　捕つた。

ト　かゝるを切つて捨てる。どろ〳〵にて七星顯はれる。きつと見得、小太鼓の樂になり

良門　ハテ、心得ぬ。虚危室壁、南方の宿星太白星、南にたんだくなし

いは　客星中を貫く、これを易といふ、判斷なせば

良門　取りもなほさず澤雷陽。

いは　今一陽の時を得て、旗揚げなさん吉瑞なるか。

良門　圭婁胃は西に當つて、よく守れども

いは　男ゆゑには二道を思はず、却つて不孝の罪。
良門　鬼柳の星は北にして、しかも東の鋭きは
いは　敵に奇兵を用ゆるとも、アレ七曜の破軍をうけ、戀の敵のあの女。よも安穏で置くべきか。

　　トきつと空を見る。この時星一つ落ちる。大どろ〳〵、兩人心得ぬこなし。

良門　分夜の七星この時に
いは　星の落ちたは、お腹の胎兒の
良門　ハテ、不審しい
兩人　事ぢやなア。（トどろ〳〵打ち上げ、遠寄せ。）
良門　さてはこれまで土蜘蛛の
いは　その妖術も光任が、血汐の穢れに空しくなり
良門　されども、それがし兼てより、手に入れたりし源家の重寶蜘蛛切り丸、これを囮に再び旗揚げ。

　　トつか〳〵と屋體へあがる。捕り手二人かゝる。きつと押へ

いは　そんなら弟。
良門　姉ぢや人。（ト兩人を下へドッと投げる。）

いは　必ず吉左右。

良門　お去らば。

トチヤント御簾下りる。此うち始終立廻り。見事にお岩兩人を切り倒し、思ひ入れあつて、奥へ行かうとする。五人の女形、手襷、十手を持ち出て、お岩を取りまき

皆々　動かしやんすな。

いは　こりや、こなさん達、女子一人を大勢で、何とさしやんす。

八十　何とするとは知れた事、謀叛の張本將門が娘、

お國　賴光公を恨まんと、姿を替へて入込みし七綾姫。

東路　乳は替れど朝敵の血筋。

瀧野　敵の末は根を絶つて葉を枯らすと、腹いがきめももろともに

八十　誅せよとある我が君の御上意。

お國　お腹の胎兒は愛しけれど

東路　叶はぬ事と諦めて

瀧野　サア、尋常に

皆々　覺悟さしやんせ。

いは　女子でこそあれ、將門が娘、やはか其方衆の手にあはうや。邪魔せずと、そこ退いて通すまいか。

八十　面倒な。皆さん、ソレ。

トどん／＼になりて、立廻りよろしく、この人數を向うへ追ひこみ、お岩花道に留り、きつと見え。誂への獨吟になる。

〽冬の空、月のけはひのおそろしき、露か霜かと振り袖の。

ト此うち八十瀬出で、窺ひ／＼花道へ行く。

八十　捕つた。

トこれを見返り、きつとこなし。八十瀬打つて行く立廻りあつて、舞臺へ附來り八十瀬をポンと當てる。

〽氷る刃ひらめける、悋氣にくらき闇の夜も、井筒の水の鐘さえて、更ける夜。

ト此うち　お國、東路出て窺ふ、お岩井戸の水を片手にて汲みあげる。

お國　捕つた。

ト刃を　ひらりと差し附ける。水を一つ呑み、またお國、打つて行くを同じく立廻つて切り拂ひ、立廻

りよろしくあつて、どん／＼になり、向うより女形殘らず以前の形にて立戻る。立廻りよろしく、此うち向うより、足輕實は權頭興世走り出で

興世　七綾樣、これにござりましたか。

いは　そちや權の頭興世か。

興世　足輕となつて入り込みしが、思ひがけなく手に入つたる鬼切り丸。（ト出し）これを功に保輔樣へ、こなたの助命いたしたぞ。

いは　ナニ、七綾が命乞ひ。情けに刃向ふ刃があらうか。エヽ、忝けない。（ト刀を取る。）

八十　ヤアヽ、鬼切りといひ

お國　叛逆人の七綾を

東路　助けるは二心。

三人　ドレ、わたしらが

ト行きかゝる。お岩この一腰にて八十瀨を切つて捨てる。大どろ／＼、お岩屋體へ上る。皆々うしろへかゝる。

瀧野　コリヤ、コレ、臨月。

東路　たしかにお產。

ト兩人を見事に下へ取つて投げる。きつと見え。チヨンと山幕切つて落す。
本舞臺一面の山幕になる、ト矢張りどんちやんにて、下座より中間出て

中間　似せつんぼとなつて、世の中を知らぬにて、やう〳〵とお家の家督に、なくて叶はぬ印子の藥師。これを盜めば出世の種。うまい〳〵。

花平　（窺ひ出て）その尊像を。

トかゝるを、中間棒にて振り拂ふ立廻り、花平一腰ぬいて切つて行く。中間棒にてあしらふ。始終どんちやん。雷雲出で來て花平を支へる。

中間　ヤア、入道か。どうもあの子がならねえわな。

雷雲　こゝ構はずと。

中間　勿論。

ト早神樂になり、中間、箱を持ち、向うへ走り入る。咲平出て來て、雷雲を突き廻し

咲平　よく友達を馬鹿にしたな。

雷雲　馬鹿にやアしない。邪魔になるから支へるのだ。

花平　その替りには入道、うぬを。（トちよつと切つて行くを支へて）

雷雲　こりやア、何とするのだ。

花平　何とするとは知れた事、お家の寶を奪ひ取つて、駈け出す曲者、捉へしを、うぬが邪魔して逃がしたからは。

咲平　入道、うぬを引ッ捉へ、二本の足を投げ切つて、夜見世の辻賣り、大蛸に

花平　切つて酢蛸か櫻煮か、花々しくも顔見世の、花たち花が手料理で、雷雲うぬを切り刻み

咲平　二つ實のある揃ひの奴、姿は假りの下部でも、我が本名は白川の、文丸といふ源家の忠臣。

花平　われも名乘れば源氏の郎黨、瀧夜叉といふ厄介若衆。

兩人　うで蛸入道、覺悟ひろげ。

雷雲　ヤレ、ぬかしたり蛸盡し、うぬらを見越しのおれなれど、邪魔だてするが面倒さに、睨み殺してくれべいワ。

咲平　さう云やア、うで蛸より

花平　水を浴びせて

兩人　寒氷り。

ト打つて行く。立廻りにて、雷雲衣裳ぬげて裸になる。誂への賑かなる鳴り物にて、雷雲相手に大立てあつて、雷雲の髭を引ツ張り

二人 うしやアがれ、エヽ。

トさらしになりて向うへ入る。どんちやんにて山幕切つて落す。本舞臺一面の高舞臺、正面淺黄幕、東西築地塀、この舞臺一面の萩垣、前面山幕、どんちやんにて納る。ト靜かなる遠寄せになり、良門、つか／＼と向うより出て來る。捕り手、四天にて、後より鎗を持ち出で、花道にて突いてかゝる立廻り。本舞臺へかゝる。きつと見得。下座より、別の捕り手、四天にて鎗を持ち、双方より突いてかゝる。大太鼓入りの合ひ方になり、大だてあつて向うへ皆々追ひ込む。花道にてきつと見得。よきほどにエイと矢一つ來るを、良門引ツ摑み

良門 ヤア、小ざかしきへろ／＼矢、殊に附きたる短冊は。……「將門は顳顬よりぞ射られけり、

ト下座にて

保輔 俵藤太が謀りごとにて。」

良門 何がなんと。

保輔 ヤア／＼、平の良門へ、平井の保輔、見參々々。

ト突ッかけ、どんちやんにて、保輔、弓矢を持ち、花平、咲平、軍兵大勢、弓張りを持ち出て來る。

良門本舞臺へ戻り、きつと見得。

皆々　名乘つた〳〵。最早のがれぬ良門と

ト始終どんちやん。下座より尊國、肌脱ぎ拔刀にて、抱き子をかゝへ、これに附いて腰元四人、長刀を持ち、出て來て

皆々　ヤア〳〵、强惡非道の尊國樣、覺悟〳〵。

尊國　ヤア、こざかしき覺悟呼はり。餓鬼を囮に賴光を、味方に附けんと思ひしに、鶍の嘴となつたるか、エゝ。口惜しい。この上は源家の胤のこの餓鬼も、まッこの通り。

ト刺し殺す。

良門　ホゝウ、潔ぎよし〳〵。斯くなる上はこの蜘蛛切り、イザ、尊國どのへ。（ト刀を渡す。）

尊國　いふにや及ぶ。蜘蛛切り丸手に入るからは、サア、良門と名乘らつしやい。

良門　なんと。

尊國　この名劍を取らう爲の、尊國樣だワ。

良門　それに又、頼光の一子を殺せしは

尊國　それこそ、そちが姉たる七綾が、出産なしたる赤ッ子だ。頼光が一子を取つたと言つたも嘘、尊國樣と言つたも嘘、光任どのと言ひ合せ、うま〳〵はまつた平の良門、われも名乘れば源家の郎黨、秦の次郎正文といふ者だワ。

ト ばた〳〵にて興世、鬼切り丸を持ち出て來る

興世　イザ、保輔樣へ鬼切り丸、お渡し申し上げるからは、偏へに助命願ひ奉る。

保輔　心得申した。(ト取つて) サア、良門と名を名乘れ。

良門　イヽヤ、知らない。

保輔　たとへ實名包むとも、大宅の太郎が繋ぎ馬の、似せ物を授け、計りしゆゑ、姉たる七綾、實心に立返り、權の頭が返り忠にて、紛失の鬼切り丸まで、手に入つたからは、包まず本名

皆々　名乘つた〳〵。

良門　エヽ、口惜しやナア。似せ上使となつて入込み、頼光を亡きものにせんと思ひしに、保輔めに見顯はされしか。今は何をか包まん。葛原の親王が五代の孫、常陸の大掾國香が弟、下總の國猿島郡に内裏を構へ、自ら號せし平親王、將門が一子、將軍太郎平の良門、間近く寄つて、面體を、

拜み奉れ、エヽ。

皆々　扨こそなア。

良門　斯くなる上は、たとへ味方の五萬六萬、足手纏ひに何かせん。それがし一人が百萬騎、片ツ端から死人の山だ、觀念なせ。

皆々　なにを小癪な。

保輔　ヤレ、待たれよ。今討取るは安けれども、七綾が最後の願ひ、良門が、目出たき花の顏見世なれば、源家の御仁心にて、一旦この場は見逭し遣はす。繫ぎ馬の白旗は、其方に得させん、イザ。

良門　イザ

兩人　イザ〳〵。(ト渡す。良門取つて)

良門　エヽ、有り難や、忝けなや。この白旗の手に入る上は、時節を待つて再び旗揚げ。

保輔　先づそれまでは

良門　平井の保輔。

保輔　平の良門。

良門　方々

大勢　さらば。

良門　これより二番目の發端始まり左樣。

ト打ち込みになり、この人數皆々二重舞臺へ上がる。この打ち込みの鳴り物、誂への通りに替つて、この道具を後へ引きあげる。

第壹番目六立目の大詰

第二番目

口幕　隅田堤の場

役名。切見世の店頭、鬼七、實は、伊賀壽太郎。海老雜魚の十實は渡邊源次綱。飛脚、よい助。藪醫者、張臂道庵。船頭、八。鬼七女房、お綱實は侍女、苫屋。

鳴り物にて、屋體は段々と斜に引き込む、下に控へし人數詰め寄つて後向きになる見得。その前通りへ山組をせり上げ、人數を隱す。この途端に屋體の前へ、鼠木綿に雪の降り來る景色を書きたる一杯の幕を切つて落す。舞臺前雨落ちへ浪板セり上げ、高梁前へ雪を置いたる吊り枝の柳をさげる。知らせに附き佃騷ぎの鳴り物に替り、舞臺へ雪をおほたる屋根船、障子立て切り、蓑笠の船頭、後向きに東の方よ

り棹さして乗込んでゐる見得、船納る。ト留めの拍子木にて船左右に開く。この途端にうしろの山組、一度に返ると、雪の積りし三圍土手、浪除の杭、枯れ蘆、船附の雁木、うしろに石の鳥居、樹木たつぷりと雪積りたる體。途端に日覆より雪大分降つて來る。道具納る。ト船頭思ひ入れあつて、正面を向く。船頭の八にて、船の中へ思ひ入れあつて

八　モシ、おかみさんえ。そんならわつちやア武藏屋へ行つて、お煙管を尋ねて參りますよ。モシ、暮れたら提灯は棚にありますヨ。モシ、蠟燭は枕箱にありやすヨ。アヽ、コレ〳〵、酉の市の土産の熊手へ、雪が積つたワ〳〵。アヽ、寒い〳〵、よく降る雪だ。

ト下駄を引つさげ、向うの雁木へ飛ぶ。土手の上を通り、鼻唄をうたひながら下座へ入る。このうち始終佃節、生ころしあり。眞乳山の入相の鐘鳴る。屋根船より海老ざこの十、勇み肌のこしらへにて走り出で、船頭八が跡を見て、

十　コレ〳〵、船頭や〳〵。…………コレ、おれが土産の熊手を床の間へ忘れたから、取つて來てくれろヨ……。市川やの小僧や。忘れやアがると聞かねえぞ。ヨヽ、エヽ、べら棒に早い足だ。

（トあとを見てゐる、船の障子を明け、お綱、袖頭巾の女房にて顔を出し

つな　コレ、十さん、呼びなさんな。打つちやつて置きねえよ。歸るとわるいわな。

十　それだつて、酉の市へいつて、熊手を買つて來ねえのは、あんまり間抜けに見えるわな。
つな　わつちの土産があるから、いるなら持つて行きな。
十　お前、いるであらう。
つな　ナニ、なくつてもいゝわな。
十　宿六が小言を云はうぞえ。
つな　うつちやつて置きねえな。これがの。（ト拇指を見せて）何のかのと云ふと、今にお前の所へ行くよ。
十　いゝかえ。怖くはねえか。何のつきに。
つな　カウ、十さん、眞のこつたによ。
十　江戸ッ子だわな。
つな　嬉しいよ。
十　とんだ氣紛れだ。
ト佃になり、障子を立て、海老ざこの十、中へ入る。よい助、三度笠、丸合羽にて、尊像の箱を風呂敷に包み、スタ〳〵出る。あとより道庵、醫者のこしらへ、傘下駄にて出て來り
道庵　コレ〳〵、お飛脚、お前急ぎだといつて、千住まではどうで行けねえ。アレ〳〵、あの向う川岸

に今戸といふ所がある。そこへ行つて、百姓宿といつて泊りなさい。
よい　アヽ、そんならその今戸とやらへ行つて泊らうが、一人でも泊めようか。
道庵　泊めは泊めようが、物騷だよ。
よい　ナニ、物騷だ。そいつが、いやだよ。
道庵　それだから斯うしなさい。お前のその大事のものを預けて、お前ばかり宿へ泊るがよい。
よい　成る程、それもいゝわえ。併しおれが持つてゐては、別して金になる品ではないが、これは多田の家に、無くて叶はぬとやらいふ、藥師如來の印子とやらいふ佛だ。しかも、天竺から來たの。アヽ、遠いところから來たの。
道庵　アヽ、そんなら持つてござるは、その印子の尊像、アノ、藥師如來の
よい　左樣々々、茅場町ではない、天竺の藥師だ。
道庵　モシ、それをお前、ちつと拜ませさつしやらぬか。
よい　アノ、この佛樣をか。
道庵　左樣サ。その替りには大雪になつたら、わしが家へお前を泊めて進ぜるが、なんと拜ませては下さらぬか。

よい　そりや、モウ、旅は道連れ、世は情けとやらいふ事もあるから、成る程、泊めてもらはうが、わしは都の者ゆゑ勝手が知れぬ、旅籠はいくらでござる。

道庵　なにサ、わしは醫者でござるから、宿賃はいりませぬ。寒からうと氣の毒に思ふから、たゞ泊めまするワ。

よい　それは忝けない。さう深切に言つて下されば、拜ませいでは。サア／＼、拜まつしやい／＼。

道庵　これは忝けない。誠、よき所へ通りかゝりまして、有り難い尊像を拜みまする。

よい　サア／＼、拜まつしやりませ／＼。

ト風呂敷に包みし白木の誂への箱を開き、内より赤地錦の袱紗に包みし厨子入りの尊像を出し、渡す、

道庵　エヽ、これが藥師様かな。

よい　左様々々。

道庵　成る程、これは包んだ袱紗も結構な錦だ。誠にこれは有り難さうな。

ト見ようとして、一目散に逃げんとする。よい助、うろたへ

よい　泥坊々々。（ト道庵を捉へる。）

道庵　コレ、めつさうな。わしや泥坊ぢやアねえ／＼。

よい　そんなら、寄越さつしやい〳〵。

道庵　したが、今夜ばかり貸さつしやい。

よい　エヽ、どうしてめつさうな。大事の物だワ。

トせり合ふはずみに、箱の蓋も身も川へ落す。この二品、川を流れる。道庵、尊像を右の手で握り、揚げようとする。よい助も取りすがる立廻りに、よい助は土手より突き落され、川へはまる。此うち捨て鐘、道庵思ひ入れあつて

道庵　よくしたものだ、あの、野郎めは川へドンブリ、印子の佛はおれが物。ドレマア、こゝで開帳して、（ト見ようとする。薄どろ〳〵にて、握りしまゝ離れぬ思ひ入れ、いろ〳〵。）これはどうだ。おれが手へ藥師の尊像が吸ひ附いたか。……コレ、吸ひ附いたか〳〵。吸ひ附いたなら、これは蛸藥師樣か。コレ、離れさつしやい〳〵。ハテ、こいつ手古摺つた藥師だ。

トいろ〳〵離さうとする思ひ入れにて下座へ入る。矢張り佃節、土手の上より鬼七、パッチ、半合羽、下駄、白張の傘、頭巾頬冠りにて出て來る。捨て鐘聞える。

鬼七　アヽ、コレ、長屋の手合ひはなぜ遲い。また喰ひ醉つて喧嘩でも始めにやアいゝが。どうでこの雪ぢやア、今夜はずるけだ。みんなの來るまでに、船を呼んでおかう。……竹屋ア〳〵、向う越し

だア〳〵。（ト呼ぶことあつて）エヽ、雪のせゐか、聞えねえか知らん、（ト船を見て）アヽ、屋根船がゐるワ。向うへ行くなら、便船したいものだが。（ト呼びかける心にて雁木へ下りかゝり、流れてゐる箱の蓋を見附け）アヽ、何だか板に書いたものが流れて來たワ。何だ知らん。

トいろ〳〵ありて、さしてゐる傘をすぼめて引き寄せる。箱の身の方は、船の際を流れる。この時船のうちより海老ざこの十、出かゝり、捨ぜりふにて箱の流るゝを見て

十　アヽ、なんだ、何か流れて來たな。（ト竹熊手にてかき寄せ引き揚げろ。その時鬼七も箱の蓋をかき寄せて取り揚げる。海老ざこの十、思ひ入れあつて）見覺えのあるこの箱は、こりやコレ、印子の

鬼七　藥師如來の尊像と。（ト蓋の文字を讀む、海老ざこの十これを聞いて）

十　ハテ、割符の合つた

つな　（この時障子をあけ）十さん、寒いに何だな。

鬼七　ヤア、どうやら、かゝアが（ト見ようとする。お綱、障子をぴつしやりさす。海老ざこの十、手拭を冠ろ。この途端一度に木の頭、鬼七、箱を懐中して）ハテ、ナア。

ト思ひ入れよろしく

ひやうし幕

第二番目

序幕

羅生門河岸切見世の場
茨木屋勝手住居の場

役名。 茨木屋鬼七實は伊賀壽太郎。海老雑魚の十實は渡邊綱。藪醫者、張臂道庵。貸物屋、金六。獸屋、權助。鬼七女房、お綱實は侍女、苫屋。三日月お仙實は俊連息女、九重姫。

本舞臺三間の間、正面朝鮮矢來、左右に切見世の路地口、よきところに葭簀張りの山鯨の煮賣り見世、長床几を出し、總じて都東寺の羅生門河岸、雪積りし景色。こゝに權助、けだもの屋にて、合羽を着たる中間を引ッ捉へゐる。吉、富、兼、同じきほひにて立ちかゝりゐる。喜之助、路地番の形にて鐵棒を持ち、これを留めてゐる見得。雪ちら〳〵と降り、四つ竹節に通り神樂を打ち込む。と左右の路地より若い衆四五人、頰冠り下駄がけ、或ひは大笠をかぶりし大福餅や、大笠をかぶりたる水屋など出入りする景色、舞臺の人數捨せりふあつて

權助　駄折助め、喰ひ逃げをさせるものか。動きやァがるな〳〵。

折助　アヽ、コレ〳〵、錢はあるわな。拂つたらよからう、放さつしやい〳〵。

喜之　モシ〳〵、權助さん、マア〳〵、錢を拂ふといふから、放さつしやいな〳〵。

權助　コレサ、喜之ばう、てめえもいゝ事を言ふものだ、この折助めは、今日ばかりの事ぢやねえ。度度の事、必ず口を出さつしやるな〳〵。

喜之　そいつはいゝぶちものだの。

吉　アヽ、なにか、その折助が山鯨の喰ひ逃げか。小さな野郎だがイケ意地の汚ない間抜けだなァ。

富　ナニ、間抜けな事があるものか。度々來て喰ひ逃げをするは、氣の利き過ぎたのだ。ナウ、さうぢやねえか。

兼　ほんに、イケ、業晒しな折助だ。コレ、喜之ばうや、こんなやつは長屋の子供の簪でも拔くものだ。面を覺えて置くがよい。

折助　アヽ、モシ〳〵、お前方も同じやうに、さういぢめる事はねえわな。わしも雪降りのお使ひ、あんまり寒いから、そゝつた歸りに山鯨を六膳、酒を三合、當身の權助ザ。

權助　置きやアがれ。權助とはおれが事だワ。どうで一文もあるまい、百五十の抵當に丸裸にしてやるべい。(ト立ちかゝる)。

喜之（これを留めて）コレサ〳〵、この雪の降るのに丸裸にして、この長屋の路地へ行き倒れになられちやア、路地番の厄介だ。扶持方棒でもふんだくつてやらつしやいな。

權助 ナニサ、癖になる、構はつしやるな、とは言ふものゝまさかさうもなるまいかえ。

吉 コレサ、權ばう、折助が着てゐる紙合羽でも、ふんだくつてやるがよいわな。

權助 それもさうかえ。サア折助め、合羽を置いて行きやアがれ。

折助 アヽ、モシ、これを取られると、部屋頭に叱られます。堪忍して下さりませ。今度からきつと喰ひ逃げをしますまいよ〳〵。

富 エヽ、業晒しな折助だ。

象 脱いで行け〳〵。

權助 脱ぎやアがれ。

ト立ちかゝり、赤合羽を引つたくる。皆々寄つて捨ぜりふにて、中間を花道の方へ突き飛ばす。

三人 エヽ、をとゝひうしやアがれ。

折助 覺えてゐやアがれ。

三人 ナニを、朴念仁め。（ト立ちかゝる。）

折助　べらぼう、はッつけえ。（ト四ツ竹節になり、向うへ逃げて入る。權助、合羽を引ったくって）

權助　籠襤褸に賣つても百五十にはならうか。

喜之　合點がいかねえの。

權助　取らねえには増しか。ドレ、葱でもこせえて置かうか。

ト障子の内へ入る。皆々床几にこぞり寄つて捨せりふ。また四ツ竹節になり、向うよりお留、塒についたる鬘、木綿やつし、しみつたれな形にて、薬の通ひ箱を抱へ、片ちんばの下駄、大丸の番傘をひろげ、車のやうに廻しながら出る。あとより金六、貸物屋にて、唐草の蒲團三疊みばかり肩にかけ、番傘を提げ下駄がけ。お色、お蝶、切り見世女郎の拵へ、扱帯の形、朱鼻緒黒塗りの足駄にて、垢摺りの附きたる手拭を持ち、錢湯の歸り心。此うち雪小止みし體。捨せりふよろしく、直ぐに本舞臺へ來る。

粂　カウ、みんな見や、今湯から歸るやつサ。べらぼうに長い湯だの。

吉　裸參りの提灯が、聞いて呆れがねに來る。

いろ　エヽ、吉さん、大分洒落が上がつたの。

吉　勿論サ。

粂　富公見さッし。この手合ひは湯屋でふやけたか、べらぼうに脹れたやつサ。

てふ　打つちやつて置きな、脹れてもいゝヨ。
富　とんだ大福餅だ。
とめ　こし餡なら一つおくれな。
いろ　エヽ、この子はまた喰ひ物といふと、コレ、これに言ひ附けるヨ。（ト小指を見せる。）
とめ　エヽ、さういふと留さんと、簪の理窟を言ひますヨ。
いろ　言つて見や。たゞは置かねえぞ。それだから壻に附きやァがるワ。ざまァ見やァがれ。
とめ　うつちやつて置きなせいヨ。
いろ　エヽ、イケツ口を（ト立ちかゝる。金六、喜之助留める）
金六　コレナ、お色さん、子供だわな。不承しねえな。この子もまた年もいかねえものだ。薬を取つて来たら、早くいつて煎じて服むものだ。サァ〳〵、行きねえ〳〵。
てふ　コレ〳〵、小職のうちは、あの子達に可愛がられるが徳だよ。あんまりつべこべ喋舌るものぢやアねえよ。モシ、金六さん、その蒲團はどこへ持つて行く。
金六　こりやァ、何サ、中長屋のお常さんの客が、昨夜泊つての、今日またこの雪ぢやァ歸られねえといつて、今も幕の內を取りにやつて大じやれサ。蒲團が薄いといつて、三疊み借りに來たから持

つて行くところサ。

てふ　エヽ、そりやア、アノ、いつもの烏丸から來る、吳服屋のおたきだヨ。あの客は豪氣に、えてきちがあるヨ。

兼　何だ、烏丸だ、とんだ枇杷葉湯だ。

てふ　エヽ、置きねえな、あの客の眞似はならねえヨ。

富　吳服屋の飯炊の眞似を、誰がするものか。

いろ　コレ、さう言ひなさんな。來るたんびに廣さんの羽織が替るヨ。

吉　そいつは見世のやつらの羽織を借りて來るのであらう。

二人　こいつは大笑ひだ。

いろ　借りてもようござりますヨウ。

三人　エヽ、なき蟲があつくなるやつサ。ハヽヽヽ。

金六　ドリヤ、長屋へ置いて來ようか。

ト四ツ竹の合ひ方になり、お留先きに金六、蒲團をかつぎ、路地のうちへ入る、この合ひ方にて、向うよりお仙、紅の板〆の肩入れせし一ツ着、板〆の扱帶、五分長の襦袢、黑塗り朱鼻緒の足駄、笄に

ふすま袋をさげ、紅の垢摺りの附きたる算盤絞りの手拭をさげて出て來る。あとより海老ざこの十、肴屋のこしらへ、たゝみの股引、足駄がけ、手拭を持ち、澁蛇の目の傘をさして出て來り、花道にて

十　コレナア、お仙ばう、ぬしは湯へ行つたのか。べらぼうに早い足だの。韋駄天の娘ぢやァあるまいし。アヽ、こいつは飛脚の下歯になる氣だな。一時三里犬走り、股がすれたら治丹ばうを貼りねえ。

せん　エヽ、置いてくんねえな。わつちやァいつも錢湯が早いが、今日はどうでも雪が降るせゐかして、ツイうつかりと長湯をしたの。それにマァ、番頭のだりむくりが、顔見世を見にゆくなら、わつちと一緒に行かうのなんのと、二つ三つ話すうち、雪の止むのを待つてゐるやつサ。

十　得て、湯屋の番頭にやァ、角力の話しと、顔見世の評判。てめえ芝居を見たか。

せん　アイ、この中髪結のおしげさんと、中長屋の子供衆が連れになつてね。

十　葺屋町を見たか。

せん　アイ、暫くの幕からサ。

十　アヽ、暫くは成田屋か。

せん　アイ、奇妙だヨ。

十　久しいものサ。定めしあの眼玉で睨んだであらうヨ。

せん　面白かつたヨ。

十　何だか、おいらは團十郎はきつい嫌ひサ。

せん　オヤ、江戸ッ子のやうにもねえ。

十　おへねえ氣まぐれヨ。ハヽヽヽ。ドリヤ、そこまで連れにならうか。

ト通り神樂になり、四ツ竹節になつて、兩人本舞臺へ來る。

てふいろ　オヤ、お仙さん、わつちらは先きへ來たヨ。

せん　よく置去りをしなさつた。

喜之　モシ〳〵、お仙さん、べらぼうに長湯だの。さういつでもまだ、わしが面よりは短かゝらうね。

三人　成る程、喜之助の面は夕顔だ。

喜之　置きなさいな、人そばえな。時に肴屋の十さん、この頃からこの長屋へ出るが、お仙さんは誠に美しい玉だね。

せん　エヽ、無駄を。おきねえな。

十　イヤモウ、きつい評判よ。その上、この子は男嫌ひだと聞いたが、お仙ぼう、ぬしは男は。

せん　ナイ、男嫌ひも氣が強いがね、どういふ事かわつちやア、男にひたつく事ががうてきに否だな。
十　そいつはいゝ氣前だの。時に喜之ばうや、てめえあの店頭の鬼がかゝアのお綱は、先度、切りをたゝいたではないかえ。
喜之　さうサ、あの、お綱さんは、ありやァ先度の三日月お仙サ。前の半四郎に似たといつて、素敵に流行つた、二代目のお仙さんサ。この子は三代目のお仙さんサ。
十　てめえ、よく知つてゐるな。
喜之　知らねえてわな。築地へ引ッ込んだ親父の彦左衞門が若い時分で、路地番をしてゐたものを。ほんに、その時はわしらは、まだ小僧ッ子の時分だ。
いろ　エヽ、おつかましい。去年厄年だといつて、大師河原へ月參りをしたちやアねえか。
喜之　厄年だ、そりやア、二十五の厄だわな。
いろ　オヤ、四文錢で二十五か。
喜之　よしねえな、聞いた風な。
十　コレ、喜之助、そんなら手めえ、親仁から二代目の路地番か。
喜之　さうサ。ほんの事だが、團十郎は七代目だが、築地は二代目サ。ちつと御由緒のある家柄サ。

十　成程、面の長いのも二代目だな。
喜之　エヽ、おきなさいな。（トこのうちかすめて通り神樂。）
いろ　モシ〳〵、十さん、あの太神樂は、この雪の降るのに、何で歩くのだえ。
十　ありやァ、今日は冬至だからョ。
てふ　東寺とは、こゝの羅生門のあるところかえ。
十　ナニサ、唐の正月サ。
てふ　オヤ〳〵、唐にも正月があるかえ。
十　無くツてわな。
てふ　とんだ正月が唐にもあらうか。この洒落はどうだえ。
吉　エヽ、置きやァがれ。
十　時に喜之助や、おらァこの子の事について、ちつと話しがあるが、おぬしが親分の七五郎といふは、話しの出來る男か。
喜之　アイ、そりやァほんの事だが、わかつた人サ。
十　成る程、近附きぢやァねえが、この羅生門河岸で、鬼と異名を取つた男、話しの出來ねえ事もあ

るめえ。外でもねえが、こゝにゐるお仙ばうが事に附いて。

せん　エヽ、わつちが事に附いてとはえ。

十　ハテ、眞面目になるな。この頃からこの長屋へ、突出しの地もの同然。客を取るのも有りやうは、恥しさうな始末會ひ。女嫌ひの海老ざこも、この阿魔ならばと遂にない、味な心に、信濃屋の、お半ぢやァねえお仙ばう。聞けば長屋の店顏、鬼が抱へといふゆゑに、ちつと話しがあつて來た。喜之助や、七ばうが內は、この長屋の何軒目だ。

喜之　アイ、奥から口へ二軒目サ。

十　どうで尋ねにやァならねえが、お仙ばう、ちつとてめえに話しがあるヨ。

せん　アイ、身じめえにかゝるから、早く言ひねえ、何だえ。

十　ハテ、あの手合ひが聞いてゐるわな。

てふ　差しがあるなら、わつちは先きへ行つて見世を張らう。ナウ、お色さん。

いろ　さうサ、お仙さん、後からお出でョ。

吉　おいらは山鯨であつたまつて、ひやかすべい。

富 衆　さうすべい〳〵。

喜之　そんなら十さん、お仙さんと二人殘つて

十　どうしたと。

喜之　きまりなんし。

ト四ツ竹節になり、お色、お蝶、喜之助、路地へ入る。吉、富、兼、山鯨の見世へ入る。お仙、海老ざこの十殘つて

せん　十さん、お前わつちへ用といふのは、彼の事かえ。

十　オヽヨ、この中酉の市の歸りがけに、雪に降られて榎木戸から、便船頼んだ屋根船で、そつちの小指と呑み合つて、連れの手あひは二階へぶちあげ、あとは行火に四の蒲團、おつりきな話しになつたが、コレ、必ずてめえへお杉を頼むヨ、

せん　そりや、モウ、頼みなさる事なら、呑み込んぢやァあげようが、これに知れたらいゝかえ。

ト拇指を見せる。

十　ハテ、その時は又算段があるワ。コレ、てめえに含みを言つて置かう、耳を貸さツし。

ト　お仙に囁く思ひ入れ。この時お仙が襟にかけたる、荒磯錦の守り袋、ぶらりと下がる。海老ざこの十囁くうち、この切れを見附け、思ひ入れあつて

切り見世女の三日月お仙が、襟にかけたる掛け守りは、世にも稀れなる荒磯錦、正しく伊豫の

せん　エ。（ト驚き懷中する。）

十　ハテ、變つた切れを

せん　もう話しは、これ切りかえ。

十　必ず頼むよ。

せん　呑み込んだよ、十さん。

十　お仙ばう。

せん　廻つて來な。（ト四ツ竹節になり、路地のうちへ入る。）

十　（あとを見送り）あの三日月を先きにして、内の下歯を巻きあげる、それに附いても宮戸川、流れ寄つたるこの箱の內なる品か（ト前幕に取り得し白木の箱を懷より出す。）

大屋若衆　サア／＼、急いで貰はう／＼。（ト向うの聲に思ひ入れ。）

十　ドリヤ、仕掛けて見ようか。

ト四ツ竹になり、路地のうちへ入る。直ぐにてんつゝ、通り神樂、雪降つてゐる。向うより人足二人、絲立てをかけ雪の積つたる早桶を差しになひ、大屋、やつし股引、草鞋、丸合羽を着て、編笠を冠り、施

主の體にて、これに續いて、スタ／＼と出て來ろ、舞臺へ來り

人足　モシ／＼、お施主さん、どうやら繩が切れさうで、きち／＼しますよ。

同　どうでも佛が川流れで、水腫れのせるかして、豪氣に重もたい。アレ／＼、繩が切れさうだ／＼。

大屋　ナニ、繩が切れさうだ。こゝでマア佛をこぼしては、しんまつが惱い。マア／＼、山鯨の前へ下ろせ／＼。

兩人　さうしませう／＼。（ト早桶を下ろすはずみに繩は切れる。）

大屋　ソレ／＼、繩が切れたワ／＼、こゝでゆつくりと締め直すがよい。

人足　さうしやせう／＼。モシ、大屋さん、こゝらで繩を貰ひなさんし。

大屋　さうしませう／＼。幸ひこゝの見世で貰ひませう。……モシ／＼、ちとお賴み申します／＼。

權助　オイ／＼、こつちへお入りなさいまし。牡丹かえ、紅葉かえ。（ト赤合羽を持ち出る。）

大屋　イエ／＼、繩を一つ下さい。今こゝの見世の前で早桶の繩が切れて、死人がこぼれかゝりました、早く繩を下さい／＼。

權助　（腹を立て）何だ、人の見世の先きへ死人を下ろして、繩をくれろ、こいつは何だ。うぬがさまを見やアがれ。紙雛の施主か、節季候の旅立ちか、おえねえ氣まぐれだ。ちよつとも置く事はな

らねえぞ。この死人を、其方へ持つて行きやァがれ〳〵。（ト早桶を突きやる。）

大屋　コレ〳〵、こなたは山鯨の亭主か。コレ、繩が切れたら、見世の先きであらうが、ねいし、お大名様のお玄關前であらうが、下ろしたがどうした。死人を下ろすことは法度か。さう強情を言はれちやァ、五日でも十日でも、この死人をこゝの見世へ置かにやァならねえ。不承ながら、置いてもらはう〳〵。

人足　さうだ〳〵、持つて行くことは否だ〳〵。

トロ々にわめく。この時勇みの三人出て來り

吉　こいつは何だ、山鯨の前へ死人を下ろしたな。

富　そいつはとんだ話しだ。薄穢ない。

兼　持つて行きやァがらねえか。

權助　持つて行きやァがらねえと、うぬらは、うぬ、締めるぞよ〳〵。

大屋　何だ、施主を締める。サア、締められるなら締めて見やァがれ。

人足　締められべい〳〵。

權助　イケふざけたやつらだ。若い衆や、締めさつしやい〳〵。

三人 合點だ。死人かつぎを、ぶッ挫けく。

ト立ちかゝる。喜之助、路地より鐵棒を持ち、飛び出で

喜之 コレサく、譯は知らねえが、靜かにしなんしく。(ト入つて留る。)

權助 否だく。おれが見世に死人を置かれちやア、濟まされねえく。

人足 濟まさねえと言つて、どうしやアがるく。

權助 斯うするわえ。

ト早桶の棒を取つてぶつて掛かる。入り亂れになり、桶の繩切れ、内よりよい助の死人、經帷子の形頭陀袋をかけたるが轉げ出る。皆々捨ぜりふにて、思はずよい助を踏み散らし、見世にある手桶を取つてぶつ附ける。この水、よい助にかゝりその上踏れ、息吹き返す思ひ入れ。皆々これを知らず同士打ちに叩き合ふ。よい助、心附きたる體にて、すつと立ち、喧嘩ときいてこの中へ入り裁人の思ひ入れにて

よい 待たつしやいく。(ト捨ぜりふにて留めて廻り、權助の襟をひッ抱へ)おれが預つた、預けさつしやい預けさつしやい。

皆々 否だくく、否だヮ。(ト飛脚の形を見て)イヤア、わりやア何だ。裁人かく。

よい オヽ、裁人に濁りを打つた、ざいにんだ。

皆々 イヤア、幽靈だ。

ト肝を潰し、ワツと言つて兩方の路地へ逃げて入る。よい助一人殘つて、早桶のこぼれ、又は手前の形を見て思ひ入れ。矢張りこのうち通り神樂。

よい アヽ、そんなら、おれは、川へどんぶりはまつたと覺えたが、それから後は夢うつゝ。このアおれがざまといひ、そんなら死んだか。死んだらこゝはもう地獄か。コレ、こゝは地獄か。おれは死んだか。(トうろ／＼あたりを見て、路地口の行燈を見て、路地口を覗いて見て)イヤノ＼、どうやら娑婆で見た路地口。火の用心に、路地四ツ切り、紙屑籠のかゝつた樣子。そんならこゝは地獄ではない。その近所の切り見世か。ア、コレ、何にしろ寒い事だぞ。(ト捨せりふ。捨てある合羽を見附け、そつと取りあげ)殺す神あれば助けるこゝに紙合羽、娑婆か冥土か知らねども、どうで濡れたる紙合羽。(ト手早く着て)ドレ、そゝつて行かう。

ト思ひ入れ。四ツ竹節、鐵棒の音にて道具廻る。

本舞臺三間の間、向う白地紋からの紙にて張りたる唐紙、よき所に妙見樣のお宮を飾り、上の方障子屋體、下手惣銅壺の竈、水瓶、臺所道具、煙り返し、誂への八間を吊し、荒神棚に高盛りの飾、

よき所に木綿蒲團をかけたる炬燵、鬼七、切り見世亭主のこしらへにて、首きり入りあたりながら、笊の中にて鴨の毛を引いてゐる。箱火鉢の銅壺へ燗徳利をかけ、女房のお綱、燗をしてゐる。お仙、化粧してゐる。道庵、さんすゐなる醫者のこしらへ。右の手を懷へ入れ、張臂をして、お留が脈を片手にて見てゐる體。いつもの所へ門口、雪しきりに降る。總て羅生門河岸の切り見世の内證、樂屋の方は、そゝり唄、鐵棒の音、女郎の呼びかける聲にて道具とまる。

ト矢張り此模様、仕組よろしく、かすめて、四ツ竹の合ひ方。

鬼七 道庵さん、どうだね、その餓鬼はものにならうかえ。

道庵 ならいでは。愚老がかゝつた病人に、憚りながら一人でも怪我のあつた例しがないぢや。もう、山歸來もよからうかえ。

鬼七 ナニ、その餓鬼は、去年判人が、お松を値をよく抱へた禮に、預けて置いて行かうと、證文もない玉だから、死んでも元値な阿魔サ。

とめ わしらは、餘ッほどしひなだ。氣を利かしてこの熊手で、門口の雪でもかゝうか。

ト前幕に出した酉の市の竹熊手を持つて出ようとする。

つな コレ／＼、そりやア、雪搔きぢやアねえ、酉の市の落葉搔きだわな。そんな無駄をせずと、早く

仕掛けて服まねえか。何時だと思ふ、もう七ツだわな。イケ埒の明かねえ。………ほんに埒の明かねえといへば、コレ、お仙や、てめえもマア、いゝ加減に身仕舞ひもしやな。外の子供はとうに見世を張つてゐるヨ。あんまり埒が明かねえぞ。

せん　アイ。どういふ事か、今日はいつそ白粉の灰汁が出ないでヨ。

つな　言ひ譯をせずと、早く顏も仕習ひなせえなヨ。

トこの時向うの襖をあけて、おいろ、四文錢を一本出し

いろ　アイ、おかみさん、口明け。

つな　奇妙だの。

ト取つて、鼠鳴きをして錢箱へ入れる。この時また襖のうちにて、戸をたてる音する。お綱、直ぐに引手をちよいと明けて覗き、また締めて置く。

鬼七　お色が見世へ上がつたは、おのやつぢやアねえか。

つな　イヽエ、初會サ。（ト火鉢の火をあふぎゐる。お留七輪へ藥を仕掛ける。）

道庵　イヤモウ、商賣といふものは、何になつても苦勞は絶えぬ。こゝの内などは樂に見えても、それぞれの心遣ひが多からうて。イヤ。それはさうと、おぬしの爲には血筋ではないが、マア〳〵、伯

……父ちやて。綱が伯父のこの道庵。死んだ女房は伯母も同然。イヤモウ、工面の悪いその中で、女房に死なれ、いつそ仕切ればよかつたに、今日は初七日、ふた七日、イヤ三十日、それは〳〵、七日々々の物入り多いゆゑ、よんどころなく今日は無心に來たのぢや。お綱、さう思つてくりやれよ。

つな　エヽ、そんならお前、七日の物入りが多いから、無心に來なさつたのかえ。

道庵　氣障であらうが、七五郎どのと相談してな。

鬼七　ハテモウ、そりやア、外でもない、伯父からに頼んだこなさん、かゝアのお綱と相談して、七日七日の物入りも、この鬼七が聞くまいものでもねえが、かゝアが綱の伯母といふなら聞えたが、綱が伯父とは新らしいわえ。

トこの時門口の脇の路地の口より、金六、大風呂敷をかつぎ、袋に入れし大小を持ち、出て來り

金六　七さん、お内かえ。（ト入る。）

つな　オヤ、貸物屋の金六さんか。持つて來たのは、そりやア、マア、何ぞ、賣り物か。

金六　ナニサ、こりやア、向う屋敷から質に取つて來た、上下と大小。直ぐに内へ歸るところだが、今親方が内にゐる時分、逢つちやアちつと悪い理窟があるから、少しのうち此方へ置いてくんなさい。

つな　お安い事サ。こゝは鬱陶しい。あの座敷へ行つて寝轉んでお待ち。蒲團があるよ。辻番がぬるくば天窓を張んな。

鬼七　コレ、損料屋、今日は冬至だ。今鴨雑煮が出來るよ。

金六　そいつは稀代だね。モシ、御免なさいませ。（ト道庵を見て）すい、道庵さんか、コレ、お前、この中の蒲團四疊はどうするな。

道庵　ハテ、もう二三日貸さつしやいな。おれも工面が惡くて、かゝアが七日々々の物入りをさへ、借りに來る仕儀ぢや。親方へいゝやうに頼むわな。

金六　エヽ、久しいものサ。イヤ、そりやアさうと、いゝ所で逢つた。ちつと腕を見てくんな。

道庵　どうしなさつた。寒氣にでも當つたのか。ドリヤ〳〵。（ト片手にて脈を見る。）

金六　コレナア、道庵さん、お前イケかぢけた。なんぼ寒いといつて、懐手をして、片手で脈が知れるものか。此方の手を出しねえな。（ト出させようとする。）

道庵　アヽ、コレ〳〵、右の手はちつと、どうも。

金六　なぜ出さねえな。

道庵　サア、出されぬ譯は。……アノ、オヽ、ソレ〳〵、愚老は則ち張臂道庵、これは醫者の張臂名

代どころ、そこで片手は

金六 エヽ、出しなさいな。

ト無理に出させようとする。この時向うの襖を明け、お蝶、小錢百を持つて顏を出す。

道庵 金六 エヽ、悧りした。

てふ アイ、おかみさん。（ト小錢をコロリと出す。）

つな（取つて思ひ入れ）久しいもんだの、氣を附けな。鹽屋の奉公ばかりさせるの。

てふ エヽ、自烈ツたいヨウ。

ト唐紙をたて、門口の戸を叩く音する。流行り唄になる。

金六 コレサ、脈を見て下さいよ。

道庵 ハテ、今見るよ。

金六 兩手出さつしやいな。

道庵 ナニ、片手でも分るわな。

ト爭ひながら、金六、大小風呂敷包みを持ち、障子のうちへ入る。お仙、形を直してゐる。暮れ六ツの鐘、お留、行燈をともす。

つな　コレ、お仙や、いゝ加減に見世へ出やな。

せん　アイ、もうようござりやす。ドレ、見世を張つて

　ト思ひ入れあつて、唐紙を明けようとする。お綱、目を附けゐて

つな　カウ／＼、待ちや、何だマア、てまへのその着る物の着やうは。コレ、こゝへ來や。コレ、見つともない、猪首になつてゐるわな。（トいろ／＼直すことあつて）てめえの形はどうも人柄がいゝよ。何の事はねえ、椎茸髷の御守殿のこしらへだ。それで商賣になるもんぢやねえよ。マア、立つて見な。立つて見な。コレ、見世を出て、長屋歩きをして無駄を言つて歩くにも、それ／＼の風があるわな。コレ、見や、煙管も斯う持つわな。勇み手合ひは勿論、坊主でも屋敷者でも、但しは生眞面目な親仁でもノ、遠目であらうが、顔と顔を見合つたが最期の助、につこりと笑つてノ、頤で斯う呼ぶわな。コレ、よく見な。……カウ／＼、町人さん、寄んねえな、カウ／＼お屋敷さん、カウ見たやうだによ。何だなう、人じらしな、性を附けやよう。……とノ、なりたけ下卑にやりねえ。向うに角の八本は、勇みが來ようが、ぐつとこちらから呑んでかゝりねえな。さうして、まだ前髪に油氣があるぞ。誰れが結つた。（ト髪を見て思ひ入れ。）

せん　お崎さんは氣合ひが惡いといつてね、今日の髪はおよしさんサ。

つな　道理だァ。あの髪結ひさんは、餘りほど手が下がつたよ。サア、おれがやうに遣つて見や。

せん　アイ。聞いておくれ。（ト思ひ入れあり。）カウ〳〵〳〵、町人さん、カウ息子さん、カウ見たやうだヨ。……斯うかえ。

つな　マア〳〵、そんなものサ。

せん　まだ教はる事があるかえ。

つな　まだ〳〵ある段ぢやァねえが、マア〳〵、今日はそれで置かう。

せん　モシ、慥かまだありやすぞえ。

つな　無くつちやァ。まだこの外に肝心のせりふがあれど。

鬼七　そりやァ、なんだ。

つな　こりや、マア、今度の事サ。

鬼七　そんならお仙に教へる事は

つな　内侍でござんす。

鬼七　ほんに、その事よ。

つな　どうして。こりやァ、この子には荷が張るわな。

鬼七　アヽ、出來まいか。
つな　餘つぽど不器用だもの。
せん　モシ、わたしや見世を張りますよ。
つな　エヽ、知れた事だ。早く行きねえな。
　　ト矢張り唄になり、お仙、上の唐紙を明けて見世へ出る思ひ入れ。この時向うの唐紙を明け、お蝶うろたへ逃げて出て來り
てふ　アレ、幽靈だよ〳〵。エヽ、幽靈が見世へ上がるわな〳〵。
　　ト駈けて來る。跡よりよい助、頭陀袋の六道錢を持ち、よろり〳〵と追ひかけ出る。皆々驚き
鬼七　ヤア、幽靈だ〳〵〳〵。
　　ト皆々立騷ぐ。この音に喜之助、鐵棒を持ち、門口より走り出で
喜之　なんだ、喧嘩だ〳〵〳〵。
鬼七　イヽヤ、幽靈だ〳〵〳〵。
喜之　親方、幽靈はどこへ出ました。
鬼七　水瓶の間へ入つた。
喜之　そいつァ溝鼠ぢやァねえか。親方、薪ざつぱで追ひ出さつしやいな。

鬼七　こゝにゐやァがるワ。(ト水瓶の間を突く。よい助、逃げて出る。)
皆々　ソリヤ、幽靈だ。
ト立騷ぐ。よい助追ばれて、上の方緣の下へ逃げて入る、
てふ　カウ〳〵、親方さん、幽靈は緣の下へ、入つたよ。
鬼七　ナニ、緣の下へ。そいつは九太夫の幽靈かも知れねえ。
喜之　親方、無駄を言はずと、行燈を持つてござい。
鬼七　合點だ〳〵〳〵。
金六　(出て來り)何だ、幽靈が、どこへ出た〳〵。
鬼七　聞かつしやい。お蝶が見世へ幽靈が上がつたを、あつちこつちへ追ひ廻して、緣の下へ追ひ込んだワ。藪を突ついたら蛇が出ようが、緣の下を突ついて、幽靈を追ひ出すのだ。
金六　惡くすると喰ひつくよ。
皆々　追ひ出せ〳〵。(ト棕櫚箒、鐵棒、てんでに薪ざつぱなどを持ち、緣の下をのぞく。)
喜之　どうだ〳〵、ゐるか〳〵。
鬼七　幽靈は奥の方へ入つて、目ばかり光らせてゐるワ。
皆々　そいつだ〳〵。引き摺り出して、喰ひ附かれるな〳〵、(ト緣の下を突つく。よい助苦しがり、また駈け

出る。）ソリヤ、幽靈が出たワ。

鬼七（よい助を取つて押へ）騷ぐな〳〵、幽靈は生捕つたぞ。繩を持つて來い〳〵。

喜之　合點だ〳〵。幽靈を逃がさつしやるな。

皆々　縛つておけ〳〵。（ト喜之助繩を出す、鬼七縛らうとする。）

よい（泣きながら手を合せ）アヽコレ、待つて下さい〳〵。

つな　コレナ、待ちなさい。幽靈が何か遺言があるさうな。聞いてやりねえな〳〵。

鬼七　何だ、幽靈が遺言がある。今になつて卑怯なやつだ。コレ、エヽ、誰れだと思ふ、羅生門川岸で切り見世の、茨木屋の鬼といはれた七五郎、鬼の内へ迷つてうせた幽靈め、おれには何の恨み、何の祟りで出やァがつた。

よい　サァ、幽靈がこゝへ迷うて、出て來た用は

皆々　幽靈が出た用は。

よい　恥かしながら幽靈は、鐵砲はなしに來たわいなァ。

皆々　おきやァがれ。

鬼七　アヽ、そんならこいつは、そゝりにうせた幽靈だな。

つな　コレ〳〵、幽靈さん、勤めを持つて來なすつたか。
よい　六道錢を握つてゐます。
てふ　モシエ、親方、幽靈がわつちに、六道錢があるから、殘りの九十を達て引けとサ。イケあつかましい幽靈だね。
喜之　ア、待ちなさい〳〵。そんならこの幽靈は、さつきに山鯨の權助が見世で、轉げ出たその時の死人だな。
よい　左樣々々、川へはまつた土左衞門、投げ込みのその道で、蘇生つた、めでたい亡者サ。
皆々　イヤ、とんだ話しだ。
金六　そんならこの幽靈は、無宿者だね。
よい　左樣でござります。とてもの事のお情けには、親方、この亡者をあなたの家の居候ふに、お願ひ申しまする。
鬼七　成る程、鬼が内へ幽靈の居候ふ、こいつは話しの種だ。お綱や、置いてやらうか。
つな　それだつてお前、どこの人か知れもしねえに。それにマア、死んだといふから、病人かも知れない。
鬼七　ハテ、そりやア、案じるな。奥にやアおぬしの伯父の道庵、お手醫者が附いてゐれば、氣遣ひは

ない。何しろ醫者にかけるがよい。

喜之　そりやア、後生だね。カウ〳〵、道庵さん〳〵。

道庵　オイ〳〵、愚老に用かな、（ト出て來り）何ぢや、病家かな。アヽ、大抵の所ならお斷り申して。

鬼七　何サ、病人ぢやァねえがね。今日路地口でよみぢ返つた新佛が、こなさんの療治で、達者になりさうなら、居候ふに置いてやる積り。

道庵　アヽ、蘇生つた佛が、居候ふになりたいといふのかな。ドレ〳〵、脈を見てやりませう。どこにゐます。

よい　ハイ、私しでござります。どうぞ御覽じて下さりませ。

道庵　ハアヽヽヽ。亡者は貴樣か。ドリヤ、伺ひませう。（ト片手で脈を見る。）

よい　モシ〳〵、お醫者樣、あなた片手をどうなされました。

道庵　ハテ、この人はいらぬ事を尋ねる。張臂をせねば醫者やうでござらぬ。斯う右の手は、大槪の病人では出しませぬで、左樣に思し召せ。貴樣ぐらゐの脈は、片手でも片足でも、間に合せるの。

よい　ハテ、大風な醫者だ。（ト兩人顏を見詰め、いろ〳〵思ひ入れあつて）

道庵　イヤアヽヽヽ、この死人は。

よい　この醫者は。

道庵　慥かに、この中隅田堤で、殺した飛脚だワ。

よい　ヤア、そんならその時、おれを殺した

道庵　イヤ、これは餘人に見せさつしやい。（ト行かうとする。）

よい　ドツコイ〳〵、逃がしはせぬぞ。おれが敵の藪醫者め。おれが敵だ、勝負々々。

道庵　エヽ、べら棒め。（ト片手で突き飛ばし、逃げようとする。）

金六喜之　アヽ、コレ、どうした〳〵。

ト立騒ぐを、道庵突きのけ、逃げようとして、門口より路地へ駈けて入る。よい助、追つかけて行かうと門口へ出る途端に、落間より、道庵に似寄りの見物、花道へヒョイと上がる。

よい　ウヌ、醫者め〳〵。（ト武者振り附く。見物うろたへ、向うへ逃げろを追ひかけて、揚幕へ入る。）

金六喜之　イヤ、とんだ氣まぐれだ。

ト金六、お留、障子のうち、お蝶は見世へ行く。喜之助、路地へ鐵棒を突き入る。此うち流行り唄、鬼七、お綱、殘る。正面の襖を明け、お仙、腹立ちたる氣色にて、ヒンシヤンしながら

せん　エヽ、わつちは否だわな。泊りを取るか何のと、アタいやらしい。そんな事は外の見世へ上がつ

て言ひな。わつちらは御免だよ。（トこのせりふにて出て來る。鬼七聞いて）
鬼七　コレ〳〵、お仙や。何だてめえ、どんな客が上がつたのだ。何を泣きッ面をして熱くなるのだ。
せん　それだつてお前、わつちにふく見世をいひながら、そんな理窟の悪いことをすると、親方のアノ
　これがね。（ト小指を出して、思はずうか〳〵と言ふ。お綱思ひ入れ。）
鬼七　コレ、親方のコレとは何か。このお綱がどうした。
せん　サア、こりやァね。
鬼七　これがどうした。（トこれにてお仙思ひ入れ。お綱思ひ入れあつて）
つな　エヽ、何だな。この子は勤めするやうにもねえ、これとは何か、アノ。（ト指を出して、思ひ入れあつて）
　エヽ、何か、馴染の客人が、小指を切つてくれろとでも言つたのか。そりやァ、モウ、この商賣
　にやァいくらもある事だわな。何をそんなにうろたへて、騒ぐ事はねえわな。
せん　イヽエ、それでも十さんがね。
鬼七　十とは誰れだ。
つな　ハテ、いゝわな〳〵。十とは何か、客人が天窓の物を質におくから、さうは言はれず、七といふ字
　を十の字に棒を曲げずに、ナア、さうか〳〵。何のそれを、エヽ、仰山な、娘子供ぢやァあるま

いし、義理を立てる氣前で、其くらゐな事を、切り拔ける働きがねえとは、エヽヽ、素人にも劣る。

ト目顔で思ひ入れ。鬼七もこなしあつて

鬼七　イヽヤ、そりやア、アノてめえが、味にせりふに目を附けて言ひ廻すが、其くらゐな事に如才のある阿魔ッ子でもあるまい。聞けば男が嫌ひだの、どうの斯うのと、小間しやくれたそのお仙。鬼といはるゝ親方が、手を下ろして附きものか、但し狐か化物か、そこらを買ふやつが幾たりあつて、現在の亭主を鼻毛に

つな　エ。（ト思ひ入れ）

鬼七　サア、あるまいとも言はれぬから、この阿魔ッ子を問ひ條にかけて、善惡黑白を分ける。差し詰めこのお仙、堅木の薪の折れる程、敲き折つて。

ト お綱へ當て、お仙を提へて、有り合ふ薪にてぶちにかゝる。お綱留めて

つな　コレサ、何も知らねえこのお仙を、むぜッかいな、可哀さうに。（ト留める。）

鬼七　コレサ、お綱、なんにも知らねえとは何の事だ。そしてこの餓鬼が、何ぞ知つてゐる事でもあるのを、てめえ知つてゐるか。

つな　何だねお前、味にからんだ物の言ひやう。どうかそれぢやア、お仙にわつちが

鬼七　頼んであると誰れが言つた。言へば言ふ程おぬしはおれに、味にせりふへ節をつけて

つな　コレナ、さうぢやアねえがね。

鬼七　さうでないなら、構やるな。

つな　それだといつて、可哀さうに。

鬼七　ハテ、仕置きをするは當り前だワ。

ト打たうとする。お綱留める。よき途端に門口より、權助、うか〳〵と出て來り、折檻と見て内へ入り

權助　モシ、親方、權助が來やした。マア〳〵、待ちなさいまし。こりやア、また子供衆の折檻かえ。モシお綱さん、お前この子によく言ひ聞せなさいな。七さんには店行事から用があつて來やした。ちよつとマア懸合ひがあるよ。

鬼七　用は後でもいゝ。延びてるさつしやい。

權助　ハテ、今聞かにやアならぬ羽目だ。ちよつとわしに逢つて下さいよ。

鬼七　エヽ、今行くわな。

權助　ちよつとあよびねえな。モシ、仲間づくの事だわな。

ト無理に引ッ張り〳〵、障子のうちへ連れて入る。お綱、お仙、後を見送り、思ひ入れあつて

つな　エヽ、この子としたことが、手前が不器てんなことをいふから、ツイおれまでが、凹むやうな事になるわな。

せん　それだといつてお前、あの十さんがお前さんの事を頼みなさるその口で、理窟の悪い事を言ひなさるからね。

つな　ハテ、もう、いゝわな、こんな時にはうつかりと物を言ふと、えて間違ひあるものよ。そりやァ、さうと、てまへ、あの大事の守りを持つてゐるか。

せん　アイ、持つてゐるのを、あの十さんが見なさつて、男の起請であらうから見せろといつて、書きものを

つな　エ。（ト思ひ入れ。この時道庵、路地より出て門口にて内を窺ふ。お仙守りをお綱に見せる。）そんなら守りの書きものを、あの十さんが見かぢつて、無理な理窟を。

せん　アイ。

つな　（ト言ふ顔よく／＼見て、愛ひを含みし思ひ入れあつて）添へし守は荒磯の、伊豫の國にて、父上の、お情け受けて安々と、産み落したる姫君に、斯く淺ましき（ト思ひ入れ。）

道庵　さては。（ト思はず言ふ。）

つな（悄りして思ひ入れあり。）エヽ、見世を張りねえな。

ト唄になり、お仙思ひ入れあつて、障子のうちへ入る。直ぐにこの唄にて道庵、門口をそつと明け

道庵　お綱〳〵。（ト入る。）

つな　伯父さんかえ。

道庵　オヽ、道庵ぢやが、コレ、お綱、てめえには改めて、ちつと話しがあるぢや。不承であらうが聞いておくりやれ。

つな　そりやア、モウ、伯父さんの話しがあると言ひなさしつちやア、何事おいても。

道庵　コレ〳〵〳〵、その伯父さんも、有りやうは、赤の他人のこの道庵。七が所へ仲人の、その橋渡しが縁になり、頼まれた假りの伯父だが、今日といふ今日縁を切る。さう思つてゐやれよ。

つな　モシ伯父さん、縁を切るとはえ。

道庵　ハテ、純友の餘類だから。

つな　アヽ、コレ、それをどうして

道庵　コレ、隠しやるな。殘黨と知つたは抱へのあのお仙、おれが外から聞くとも知らず、荒磯切れの懸守り、純友が方に限る切れ。親の傕と二人して、話してゐたを、見かぢつたが、何と違ひはある

まいがな。

つな（思ひ入れあつて）さう伯父さんに知られちやア、隱したとても詮がねえ。併し守りのあの切れは、荒磯錦か知らねども、純友とやらいふ人の、別して身寄りの

道庵　ないとは言はさぬ。たつておぬしが言はねえと、この儘われを連れて行き、言はせる所でしやべらせる。この道庵と會所へ來やれ。（ト左の手にて引き立てんとする。お綱振り切り）

つな　エヽ、置きなさいな。詮議をされる覺えはない。

道庵　イヽヤ、詮議をせねばならぬ。手向ひすると伯父の威光で、（トまた掛かるを、片手ゆゑお綱振り切る。）

エヽ、自烈つたい〳〵。おれが片手で不自由だと思やアがつて、馬鹿にするか。兩手はあれど右の腕に此やうに、握つたものが

ト右の手を出す。これに前幕の印子の尊像、袱紗の包みを握り詰めゐる。お綱これを見て思ひ入れあつて

つな　こりや、伯父さんの右の手に、握つてござんす袱紗の切れ。さも堆かき（ト腕を捉へ、よく〳〵見て）どうしてこれを伯父さんは

道庵　話すも餘り慾張りだが、この中隅田の雪の日に、知らぬ飛脚が持つて來た、白木の箱の其うちに、

薬師如來の印子の御佛。多田の家から持つて來たと、聞くとその儘大金に、ならうと思つて物したが、佛の罰かこのやうに、握つた儘に手を離れず、因果な佛に見込まれて、今ではどうも道庵が、イヤ手古摺つてゐる最中よ。

つな　エヽ。そんならそれは、アノ隅田の、雪のその日と云はんすが、その時醬か屋根船の、際へ流れし白木の箱。割符を合すその尊像。モシ、伯父さん、どうぞわつちにくんなさい。

道庵　イヤ、モウ、今では益體な。手前療治にいかないこの手、離れる事なら離したい。ならう事なら離してもらはう。

つな　そんなら、どうでも、握つたその手が離れぬかえ。離れぬならば斷うしねえ。この合口でその指を、切つたら大方離れさうによ。幸ひお前のさしてゐる

ト道庵が差してゐる合口を拔いて、切らうとする。道庵うろたへ

道庵　ヤア、その合口で指を切る。イヤ、めつさうなことを言ふ。指を切られてたまるものか。それよりわれを純友が、身内の詮議を（ト片手でかゝる。）

つな　（合口を見て）伯父さん、お前、その指を切つてしまひな。

道庵　おきやァがれ。伯父の五本の指を切つて、心中にもなるまい、無駄をせずと、會所へ來い。

つな　五本の指をくんなさい。

道庵　コレ〳〵、危ねえ、刃物を寄越せよ。

つな　指をくんなよ。

道庵　エヽ、無駄をするな。

ト片手で突き廻す。お綱、合口を兩手に握り、道庵の指を切らうとして、思はず腕首がよき程落す。どろ〳〵になり、血の穢れにて、腕を放れ、尊像落ちる。道庵苦しみ倒れる、お綱、思ひ入れあつて

つな　さては血汐の穢れにて、握りし尊像。（ト取り上げる。）

道庵　ウヌ、大それた、切つたな〳〵。

つな　アヽコレ、誠に怪我だよ。

道庵　怪我だといつて濟むものか。その尊像を寄越しやアがれ。エヽ、コレ、どうでも片手は不自由だ。アレ、お綱が伯父を、このやうに切つたぞ〳〵。切つた〳〵〳〵。

ト武者振り附く。よろしく佃節か何なりと騒ぎ唄、鐵棒の音、兩人立廻りよろしく、トヾ、道庵片手にて炬燵蒲團を取つて投げ、又は櫓をも取つて打附けることよろしく、お綱、道庵を仕止め、死骸を炭櫃の下へ入れ、切つたる手首、合口も下家へ打ちこみ、また元のやうにして、蒲團にてこぼれし血

を拭き、元のやうに櫓にかけ、尊像は懐中してホツト思ひ入れ。

鬼七　お綱や〳〵。（ト呼ぶ。お綱思ひ入れ、鬼七出で來り）コレ、かゝアや、わりやア先刻からこゝにゐるか。

つな　アイ、アノ、お仙に何やら教へてゐて。（ト思ひ入れ。）

鬼七　（顏を眺めて）何だこの女は、色青褪めて、きよろ〳〵と。コレ、てめえ、なんぞ氣になる事でもあるか。（ト思ひ入れ。）

つな　アイ、イヽエ。

鬼七　アイ、イヽエ。そんなら氣色でも惡いか。

つな　アイ、どうも氣合ひが。

鬼七　惡くば藥でも服むがいゝ。伯父御もゐたぞよ。見てもらやれな。

つな　アイ〳〵。（ト思ひ入れ。）

鬼七　（目を附け）伯父御はどこにだ。呼んでやらうか。コレ、道庵さん。

つな　アい、モシ。もうよくなつたよ。

鬼七　ハテ、押すとわるいよ。コレ、紙入に紫金錠があつた。

つな　アイ。（ト思ひ入れ。）

鬼七　エヽ、早く服みやれな。

つな　アイ。

　　ト唄になり、お綱思ひ入れあつて、障子屋體へ入る。鬼七殘る。この唄を借り、海老ざこの十、傘をさし、路地口を出て來り、門口にて

十　お頼み申しやせう。茨木屋の七さんの內はこゝかえ。

鬼七　アイ、七五郎はわしだが、マア、お入りなされませ。

十　お許しなされやせ。（ト內へ入り）こりやア、お初にお目にかゝりやしたが、七さんかえ。

鬼七　アイ、わしは茨木屋の七五郎といひやす。面が怖いか、世間では鬼と異名を取つた男。して、お前はどれからござりました。

十　アイ、わしやア海老ざこの十といふ、肴屋でござりやすが、今來やしたは、別の事にてもござりませぬ。ちつとお前に、無心があつて來やした。

鬼七　エヽ、無心とは。何の無心かえ。

十　外でもないのサ。此方の抱への其うちに、杜若によう似た三日月お仙、このごろ見世へ出るからは、年もあらうがそこが話しだ。貰ひに來やした。貰ふ男も矢ツ張りわしだ。モシ、御不承ながら

あの女をわしに下さい、貰ひに來やしたヨ。（トずつけり言ふ。）

鬼七　（思ひ入れあつて）アヽ、何の話しでござつたかと思つたら、抱へのお仙を貰ひにござつたのか。そりや、モウ、折角こなさんが來たものを、潰されもしまいし、お仙が年季の證文も卷いて、こなたに熨斗を附け、清く女を

十　くれる氣かえ

鬼七　否だ。

十　どうしたと。

鬼七　ハテ、よく物を積つて見さつしやい。こなさんが當時流行する、若い人でもあらうが、わしも炎木屋の七五郎、勇み手合ひを相手に商賣、欲しいといつて貰ひに來るたび、猫の兒ぢやアあるまいし、金で抱へた阿魔どもを、さう手輕くやつて見さつしやい、竈にかゝはるワ。わしが高い鼻の下が、そこりになる話しだから、不承ながら、こりやア、出來まいかによ。この寒いのに、こなさんも長い橋を渡つて、足を運ばせるも氣の毒だから、さつぱりとお斷りだ。併し、これを緣にして、ちつと遊びに來ねえ。こなさんの返事は、マア、こんなものサ。

十　アヽ、不承知か。併し、こりやア、不承知でもあらう。何をいつても玉を取られちやア、米櫃

鬼七　にかゝはる話しだ。そんならお仙は貰ふまい。あの女の代りを貰はう。

鬼七　成る程、貰ひかゝつて貰はずにも歸られまい。事と品によつたらば、相談づくといふ事もあるが、お仙の代りには、どの餓鬼を貰はうといふのだえ。

十　誰れ彼れとも言ひやすまい。初めがお仙で出來た話し、お仙の面に似た女を、一人貰ひたいね。

鬼七　お仙が面に似たといふ、その心當てがあるかえ。

十　隨分あるの。外でもねえ。あの阿魔に似たといふは、こなさんの抱寐をする、女房のお綱どの、貴樣のかゝアをおれに下さい。

鬼七　（思ひ入れあり）ナニ、おれがかゝアをくれろ。アヽ、これで讀めた。道理でさつきお仙めと、お綱が今もうつかりと、色青褪めた

十　エ。

鬼七　マア、そんな理窟は後へ廻して、コレ、こなさんは年はいかねえが、豪氣な横を言ひ出したな。さういへば、どうかこなさんは、萬更見ねえ顏でもねえ。アヽ、どこでかこの中見たやうな。

十　見た筈サ。あとの酉の日、花又の、二度目の市の歸りがけ、雪に逢つたは榎木戸と、便船したる屋根船の、丁度雪見の宮戸川、連れは二藤へぶらさげて、あとは行火に差向ひ、酒の手もある年

増ゆる、意氣なかゝァと小野郎が、氣の差したのが因果の始まり。

鬼七　アヽ、そんならこの中雪の日に、長屋手合ひと向島、喰らひ醉つたるうたゝ寐を、待乳の鐘に起されて、いつそ今宵はずるけうと、土手から船を呼子鳥、覺束なくも向う越し。

十　慥か汐時、雪水に、せかれて何か流れ寄る、それを幸ひお土産の、竹の熊手で引き揚げた、その時土手に（ト思ひ入れ。）

鬼七　黄昏なれど雪の暮れ、洲にかゝつたる屋根船の、内ぞ怪しき出合ひ船、そんならもしや

十　ヤ。（ト兩人顏見合せ、思ひ入れ。）

鬼七　こいつア面の立たねえ話しだ。

十　サア、斯う言ひ出してちやァ金輪ざい、わしが腰押し成田山、千葉妙見の扱ひでも、これはつかりはお斷りちやが、非分になつても貰つて行く、三行り半の去り狀に、當時流行りのかまはぬを、印形にして、しつかりと、押したその上、おれにくりやれ、七五郎どん、マア、さう思つて下さい。

鬼七　成る程、おぬしは大層な、横たつぷりな男氣に、流石の鬼も手こずつて、相談づくで遣りもせうが、去年に替つて顏見世から、おれが役儀を讓つたも、お江戸氣質のあなた方、御贔屓強いお取立て、いづれも樣に免じたら、女房はおろか、御當地で、數年勤めた店頭、座頭株も、讓ろよい

ものでもないが、こなさんは、どうでも鬼が女房を。

ト このあたりよりお綱、障子を明け窺ひゐる。

十　鬼が女房、鬼神でも、貰ひかゝつた海老ざこが、かゝアにせねば男が立たぬッ。

鬼七　隨分やらう。

十　それで野郎の面も立つわえ。

ト 思ひ入れあつて、この時お綱、つか〳〵と出て、鬼七の側へ坐り

つな　コレ、七さん。

鬼七　何だ。

つな　お前、何だどころぢやァねえわな。あの十さんが振り込んで、横を云ふのを、とつくりと、わつちやァあすこで聞いてゐたが、どこの國にか亭主のある、女房をくれろといふやうな、こんな不法があるものか。それでもわつちが身に取つちやァ、筋違ひでも憎くない、惚れたといふ二字を聞いては、萬更にあんまり腹は立たぬわな。それにはお前は今直きに、わつちを遣らうといふのには、こいつは譯がありやせう。そんな氣まづい亭主なら、わつちの方から斷りだ。遣らば遣りねえ、十さんの、綺麗に女房になつてから、お前の顏を見返すのだ。コレ、十さん、お前も今日か

十　ち達て引にも、わつちを女房にしてくんなよ。

仕兼ねるものか、わしも男だ。娘子供の色事とは、譯の違つた亭主持ち、餓鬼同然な海老ざこが、年増にかゝつて跳ねられちやァ、友達めらへ立たねえ羽目。人の女房を貰ふ氣で、首が惜しくてこのやうな、大束附木は賣られない。サア、きり〳〵と方を附けやな。

つな　お前の性根が極つちやァ、わつちも物が言ひよいよ。今まで色戀せぬ身だが、お前の氣性に惚れやした。今日まで馴染んだ亭主だが、愛想がつきた。サア、七さん、離れる氣なら、去り狀くんねえ。

鬼七　そんなら七が女房の綱、異名に取つたこの鬼が、手をすつぱりと切る氣だな。

つな　切らざァお前もおつかない、顏の立たねえ羽目といひ、小口も利いた茨木屋。

十　その女房のこのお綱、亭主が鬼の手を切らせ、連れて行くには去り狀が

鬼七　欲しくばこゝで今直ぐに、渡す代りに其方から、貰つて置きたい品がある、女房の綱と、その品を

十　此方にあらば何なりと、この女には替へられない。貴樣にやらうがその替り三行り半の去り狀は。

鬼七　おぬしに渡す去り狀は、幸ひこゝに認めた

ト合ひ方替り、思ひ入れあつて、鬼七懷より、前幕の流れ寄つたる白木の札を出し、有りあふ熊手へ

十　（挾み、海老ざこの十の前へ差し出し、思ひ入れあつて）白木の箱のこの蓋を、女房お綱が去り狀と

つな　熊手へ挾みし判じ物、何やらによく似た形、慥かにそりやア東寺なる、鬼の住みたる羅生門。

鬼七　建てゝ歸つた金札の、その夜の役は渡邊の

十　ヤ。

鬼七　サア、綱を貰ひに來たこなさん、女房はやらうがその替り、去り狀替りの箱の蓋、しつくり合せるその箱を

十　そんならこの中、雪の暮れ

つな　今戸の河岸のかゝり船、流れ寄つたるその箱の、蓋は二人の手に渡り、中身は慥かに

十　なんぞの役に立たうかと、貰つて來たるこの箱の、併し、中なる代物は（ト以前の箱を出す。）

鬼七　蓋の文字の樣子では、滿仲公の御所持ある、多田の藥師の印子の尊像、それを女房のその替り、渡して置いて連れて行け。

十　イヽヤ、覺えのない尊像、この海老ざこの手には無い。蓋を持つたが詮議の蔓、女房に添へて尊像を、貰つていかねえ其うちは、貧乏ゆるぎもしやアしねえ。

鬼七　おれもそれなる箱のうち、納めありつる御佛を、詮議しださぬ其うちは、歸るといつても歸されぬ、五分でも敷居を跨いで見やれ。

つな　コレ、さうお前方お二人が、角芽立つての言ひ合ひも、元の起りはわたしから。鬼と言はれる七さんも、角突合ひをさつぱりと、また十さんも、物事を、三升の角を不承にも、丸く素直になつた上、箱のうちなる代物の、詮議をしたらよからうと、女のいらざる差し出だが、さういふ始末にして見ねえ。

十　イカサマ、おぬしの言ふ通り、人の女房を貰ふ氣で、強身ではかりもいかねえ話した。

鬼七　こなたにやらうといふ女房、お綱が差出た事ながら、肩張り詰めても濟まねえ羽目。そんなら互ひに仲もよく

つな　わつちを遣るとも遣らぬとも、魚と水とのその上で

鬼七　物事團子にやらかさう。

十　さう其方から碎けちやア、此方はトヾがどうなりと

つな　兎に角、話しは酒の事、わつちやア燗をつけるによ。

鬼七　男は當つて碎けろだ。炬燵へ來さッし。

十　わしもあたつて、巫山戯うか。
つな　二人五徳、仲直り。
鬼七　當たらつしやいな。
十　緣起がいゝね。（ト四方より蒲團を明け、きつと目を附け、思ひ入れあり。）
鬼七　炬燵の際にはこの生血。
十　炭櫃の下へしたひしは
つな　エ。（ト二人を突きのけ、蒲團の上へきつと腰かけ、しやんと納る。）
鬼七　女房お綱、ハテ、仰山な。
つな　サ、これは
十　蒲團押へてかみさんの、氣色ばんだる驚きは、そんなら炬燵に（ト思ひ入れ。）
つな　アヽ、モシ、炬燵のうちは埋め火の、今といふ今、七さんと、緣の切り炭、いけてある、炭櫃ゆゑに、十さんを、この炬燵へはどうもマア、御不承ながら遠慮して。
ト鬼七へ思ひ入れ。海老ざこの十、こなしあつて
十　今まで五德に三つ金輪、話すといつたお綱さん、誠に變る。そんならこゝに

ト寄るを、お綱きつと思ひ入れ。

つな あの小座敷に置炬燵、行火に火がよい。お前あすこで遠慮なう

十 あたつてるようが、其うちに、いさくさなしに、かみさんを

鬼七 やるかやらぬか善悪の、邪正を糺すは、熊手に添へた

つな 去り状替りの箱の蓋。それも印子の尊像の

鬼七 その道行の判るまで

十 この茨木屋にいぢかつて

つな わつちを連れてゆくものか。

鬼七 紛れからんだ絲口の

つな 結び目解けるか、ほぐるゝか。

十 二人引く手の緣の綱。

鬼七 繋がつてから、女房の

つな 綱が噂の夜雨かな。

十 それは雪の夜、お綱さん。

つな　十さん。
十　ムウ。（ト炬燵へかゝる、三人思ひ入れ。）
鬼七　話して行きやれ。
十　思案ものだよ。
ト唄になり、以前の札を挾みし熊手を持ち、海老ざこの十、障子のうちへ入る。お綱鬼七殘る。あと合ひ方。お綱奥の方を見やり、こなしあつて
つな　コレ、七さん。モシ、思はず手に入る（ト懷より尊像を出し、見せうとする。）
鬼七　アヽコレ、言ひ譯らしくわが手から、おれに渡すに及ばぬ品。亭主の鼻毛を數へたお綱、長屋の手合ひへ知れぬうち、内には置かぬ、出てうせう。
つな　そんならわたしを十さんと、もし間男でもしたといふ
鬼七　もし間男も氣が強い。眼前今戸の雪の暮れ、洲にかゝつたる出合ひ船、見し見ぬ振りの通りもの、面の汚れぬそのうちに、去つた女房は片時も、内には置かれぬ。サ、コレ、きり〳〵ここを
ト目顔で知らせ、表へ出さうとする。お綱呑み込み
つな　エヽ、出ろなら出て行くこゝの内。これから晴れて十さんの、世話になるのがわたしが願ひサ。

ト此うちお仙出かゝり、立ち聞きゐる。

鬼七　エヽ、イケ腹の立つ、その口を。（ト立ちかゝる。）

せん　（かけ寄つてこれを支へ）アヽ、モシ、おかみさんを去る事はわたしに免じて。

鬼七　うぬもかゝアが間男の、慥かに相摺り、二人とも、目立たぬやうに雪道をナ。コレ、キリ〳〵こゝを。（トお仙を外へ突き出す。お綱こなしあつて）

つな　抱へのこの子も連れ立つて、あの十さんの世話になる。七さん今から、二人とも

鬼七　きり〳〵うせろ。

つな　うせねえぢやア。

せん　コレ、そりやアあんまり。

つな　一緒に來や。（トお仙が手を取り、向うへ行かうとする。）

十　（奥にて）エイ。（トかけ聲して門口の雪一度に散る。三人思ひ入れあり。）

鬼七　軒に積りし白雪の

つな　一度に散亂なしたるは。

ト、ドンと太鼓の頭を打つ、三人思ひ入れ。

三人　ことに聞ゆる

ト思ひ入れ。この太鼓すぐに通り神樂になり、行列三重を彈き出す。三人思ひ入れあつて、お綱、お仙向うへかゝる。揚幕より喜之助、青漆の合羽、高股立、大小、紺看板、若黨の形に着替へ、中間一、笠をかぶり、つか〳〵と出て來り

中間　片寄れ〳〵。

ト押し戻す。兩人中間を掻きのけ、行かうとする。この時赤合羽、竹笠の中間、銘々三つ星、一の字の箱提灯を持ち、つか〳〵と出で來り、兩人を中へ挾み、舞臺へ押し戻し來り、バラ〳〵と取り卷き

八人　お迎ひ。

つな　こりや、わたしらが行く先きを、支へて出さんすお供さん、紋も覺えの三つ星に

せん　一を引いたる市川の

中間　そのお旦那のお迎ひに

鬼七　行列揃へし供廻り。誰れを迎ひにどこへ行く。此方の家には其やうな、立派な客の泊りはない。こりやァ大方門違ひ。

つな　外を尋ねて見なさんせ。

十　（障子のうちにて）イヽヤ、迎ひは身が同勢。それへ參つて主に面談。

鬼七　ヤ、何だ。

ト鼓の合ひ方。障子を開き、海老ざこの十、上下衣裳大小に改め、以前の熊手を持ち、渡邊のこしらへ。金六、權助、奴の形に着替へ、つか〳〵と出て

金六
權助　動くな。（ト三人を圍む。）

鬼七　合點のいかねえ、海老ざこが、衣服大小改めて、呼びかけたには樣子があらう。

つな　その身の素性を海老ざこさん、話して聞かしてくんなさい。

十　申さずとても提灯の、紋に顯はす三つ星に、一の文字は、誰れあらう、源家譜代の嗚許のもの、武藏の三田にて生ひ立ちし、渡邊の源次綱。

鬼七　さてはあなたが渡邊の

つな　その綱さんが、この綱に、足を附けての目論見は

十　二人が素性を知らんが爲に。

鬼七
つな　ヤ、なんと。

金六　旦那の指圖に貸物屋、大小衣服を持ち込んだも、お側使ひのやつこざらさ、お草履摑みの奴の三田平。

権助　山鯨から附け込んで實名探る附人は、同じ仲間の二合半、山椒醬油か盛切り權平。
喜之　鬼の子がらに喜之助も、路地番、門番引ツくるめ、指圖に入り込む三崎の藤内。
金六　實名隱す茨木屋。
権助　きり〳〵姓名
三人　名乘つた〳〵。
鬼七　イヽヤ、實名本名と、その名を隱す男でない。疑ひ晴らして速かに
十　イヽヤ、包むは卑怯の至り。正しく純友餘類の一族。綱もお仙も氏素性、ありと睨んだ渡邊が、胸中探らんその爲に、便船したる船のうち。色で仕掛けてあはよくば、一味に招かん計略の、膺へ落ちたる間男の、仕事にかゝつた顏を見せ、わざと入り込み窺ふところ、夫婦といへど隔てある、やうにも見えて二つには、抱へのお仙を手荒くも、見せて誠は勞はる樣子。彼れこれ以て心得ずと、目を附けおきしに、又候や、最前下家へ血汐の滴り。人を殺めて印子の尊像、この家に隱し置きつらん。詮議の役目は源次綱、われに渡さばこの場は一旦、見遁して得させん。左なきに於ては抱への女、直ぐさま繩掛け拷問なす。返答聞かん、ナヽなんと。
鬼七　すりや、われ〳〵が身の上を

つな　疾くより知つたる渡邊どの。
十　異議に及ばゞ召捕らさうか。
鬼七 つな　サア、それは
十　實名明かすか。
鬼七　サア、それは
十　尊像渡すか。
鬼七　サア
皆々　サア〳〵〳〵
十　返答いかに。ドヾ、どうぢや。
鬼七　エヽ、遁れるだけはと思へども、敏き詞に是非なくも、素性を明かさん、女房と、いひしは僞り
御主人の
つな　お情け受けしみづからこそ、純友公の手廻りにて、宮仕へせし侍女菅屋、お腹に宿せしこの姫は、
主君の爲の御落胤。
せん　九重姫が身の成行き。

十　して、又、男が實名は。

鬼七　かねて音にも聞きつらん、純友公の身内にて、伊豫の國高綱の、落城なせしその時まで、君に附添ひ奉り、忠臣無二と呼ばれたる、伊賀壽太郎正純なるワ。

皆々　さてこそなア。

鬼七　斯く實名を明す上は、渡邊觀念。（ト一腰を取つて立ちかゝる。）

十　ヤレ、待て伊賀壽、たとへ其方刃向ふとも、八重に取り卷く我が圍み、却つて姫の命の瀬戸。そこを存じて八重姫、當屋もろとも命を助け、無事にこの場を見遁し申さん。その替りには印子の尊像、故なく渡すや、ナ、なんと。

鬼七　その一言に僞りなくば

つな　わたしが手に入る印子の尊像、渡邊どのへ速かに。イザ。

十つな　イザ〳〵。（トお綱、海老ざこの十へ尊像を渡す。海老ざこの十取つて）

十　これぞ誠の印子の尊像、今より當地に勸請なし、多田の藥師と後の世まで

鬼七　然らば伊賀壽は、この儘に、お二方の御供せん。

十　役目濟んだるこの綱は、直ぐにこの場をこの儘に。（ト表の方へ來る。）

せん　返す〳〵も御仁心。
つな　仇には思はぬ渡邊どの。
鬼七　併し下さくなこの内へ、ござつたからはお歸りまで、矢ッ張り勇みの海老ざこの十。
十　十めん九めんのこの形で、歸りは例のそゝり節。
せん　またこの次と吸ひ附けた
つな　莨一葉の別れ路も。苦界の習ひ、お屋敷さん。
十　又ひやかしに
鬼七　必ず來さつし。
つな　十さん。
十　あばよ。
皆々　お立ち。
十　コレ。（ト木の頭。）ハテ、野暮なやつぢや。
　　トよろしくあつて
ひやうし　幕

二番目 大切

浮世を廻ろ一筋も
狂言綺語の道直に

親子連枝鶯

常磐津連中

役名。 源頼光。山賤、斧右衛門實は三田の仕。山賤、鐵藏實は鬼同丸。馬士、どう六實は夜叉太郎國秀。鯰坊主、雷雲。池田中納言息女、花園姫。賤女實は豐後次郎妹、白梅。賤女實は三田源太妹、紅梅。快童丸。山姥。女奴、此絲。

本舞臺三間の間、一面に振りよき梅の立ち木。この前に笹龍膽の紋附きたる紫の幕を張り、西より東へかけて、見事に紅梅、白梅の吊り枝、よき所に初音が原と書いたる榜示杭。上の方草土手の上に常磐津連中居並び、すべて箱根山中、渡り拍子やうの鳴り物にて幕明く。

ト頭取出て、淨瑠璃名題、役觸れあつて、其爲口上さやう、直ぐに前彈きになる。

〽御贔屓に頼光は、東國へ、下向も既に箱根なる、初音が原も恥かしき、花園姫にお杉役、赤い奴を引きかへて、イヨ有り難いかつらが顏見世。

ト誂へ賑かなる鳴り物になり、眞中に頼光、羽織衣裳にて、紫の袱紗をつむりへ卷き、紅梅の枝、吸筒を附け、これをかつぎ、上の方に花園姫、廣振り袖、裲襠の上より扱帶をしめ、梅にて葺きたる傘を頼光

へさしかけ、下の方に此絲、奴の衣裳にて毛氈を附け、茶辨當にもたれ、兩人を見てゐる。三人この見得よろしく、舞臺眞中へせり上げる。鳴り物打ちあげて

〽人も木毎に早咲の、梅に心も移り香を、止めてこゝに御大將、酒宴の興も杯の、花園 數さへ積る花の雪、降りみ降らずみ傘を、さすがに姫は、さゝ鳴きの、まだ鶯の懐子、此絲 さてまたお末の此絲が、とんだ役目の茶辨當、かつぐも日頃のやつこらさ、御用に立ての仰せなら、色の諸分けはチヽチツト、やつたやうではないわいな〽浮氣の風が葺屋町、こちへこちへと入り來る。

ト舞臺よろしく納まる。

賴光　誠に、花あれば人といふ、言葉宜なるかな。賴光當國の任蒙る折柄、蜘蛛の障礙にしばしの惱み。この程とみに全快なし、直ぐさま下向に赴く路次、この初音が原の梅の盛に、日時をうつし思はずも。

花園　咲きも殘らず散りも始めぬ、この早咲きの梅の景色、櫻にまさるよい眺めでござりますわいなア。

此絲　モシ〳〵、お二人樣、梅をお褒め遊ばすはようござりまするが、私しは奴がはりの、ひよんな役目で、肩やら手やら、堪つたものぢやござりませぬ。

賴光　イカサマ、さうであらう〳〵。花見の供に侍ひどもは、堅くるしうて如何かと、本陣に皆殘して

置き、其方一人を道の供、さぞ心配なことであらう。サヽ、これからは花の下で、酒と致さう。

花園　アノ、九獻をお上がり遊ばしまするか。

頼光　ハテ、たべいでは。仕附けもせぬ浄瑠璃の大將役、これは素面でどうして（ト杯を取り上げる。花園姫瓢にてつぐ。）イヤ、これは憚り。誰ござらう、池田中納言の御息女、花園姫どのゝお酌。恐れ入りましてござりまする。

花園　アレ、又あんな。（ト此絲へ思ひ入れ。）

此絲　ほんに、お野暮な事ではあるぞ。あなたも源氏の御大將樣、……お色の一人ぐらゐは、ナア、お姫さま。

ト花園姫恥しがる。

頼光　イヤ〳〵、女によつて家國を亡ぼす事、和漢にその例しまゝあれば、われに於ては女の道は

此絲　アノ、お膳を据ゑましても。

頼光　箸は取らぬ〳〵。

ト此絲、花園姫、顔を見合せ、こなしあつて

花園　此絲。

此絲　姫君さま。

〽辛氣〳〵の折からに

卜摺り鉦入り、浮いた合ひ方になり、向うより白梅、紅梅、染やつし、賤の女のこしらへ。衣裳の褄を端折り、水桶をつむりへ乘せて出て來り、花道にとまる、

〽八瀨や大原ぢやなア、黑木をかはいの、しのぶをかはいの、こちはかはいの男まさりに麓から、水桶つむりへがつくりこ、そつくりこ、登り下りをあて呑みに。

卜この文句のうち、兩人とも、水桶をおろし休みゐる。卜向うよりどう六、馬方のこしらへにて、沓をこしらへながら出て來る、

〽今日も朝からよたん坊、箱根は八里かれ樣は、だりむくつたる馬方の、女馬が好きか後から、ほてつぱらめと抱き附いて、ドウド、ヨヽさうだとじなつくを、エヽと振り切るはずみにころり、二人は先きの坂道を、あとからひよろ〳〵のたまくが、ぶつくさ言うて來りける。

卜白梅、紅梅先きに、どう六捨ぜりふにて本舞臺へ來る。

どう　うぬ、阿魔めら、待ちやアがれ〳〵。……ヤイ、よく泉坂のどう六樣を、二人して投げやアがつた。うぬら、遣る事は、ならないぞ〳〵〳〵。

白梅　コレ、大概なこと言はしやんせ。こちらが何のこなさんを

紅梅　それいなァ。足場の悪いこの山道、大方石か木の根で、こなさん獨りして

どう　イヤ〳〵、女には負けては、仲間の者へ面が立たない。どこのか所をくりぬいて、胴亂がはれに

してくれべい。

ト立ちかゝる。此うちこなたの三人、酒盛りしてゐて、この時見兼ねて、此絲支へて

此絲　アヽ、コレ〳〵、待たしやんせ。

どう　イヤ、構はつしやるな〳〵。

此絲　サア、構ふまいと見てゐたれど、女を捉へておとなげない。却つてこなさんが笑はれうと、それ

でアノ

どう　アヽ、何かえ。女を相手にすりやァ、わしを人が笑ひますかえ。

此絲　笑はいでかいの。

どう　ハテ、ナア、そいつは思案ものだわえ。（ト思ひ入れ。）

此絲　コレ、女衆、馬士どのはわしが宥める程に、ちやつとござんせ〳〵。

兩人　そりや有り難うござります。（ト兩人立上がる。）

賴光　コリヤ〳〵、女、其方たちは、この所の者さうなが、これより北に當り、彩雲の棚引く山は、何と申すぞ。
紅梅　アイ、彩雲とやら、さいかちとやら、其やうなものは存じませぬ。
白梅　北に當つた山と申すは、伊豆の國、足柄山と申すのでござりませう。
賴光　ナニ、伊豆の足柄山とな。彩雲はまさに人傑の、隱れ住むべき祥瑞。すりや、足柄の山中に。ハテナア。（ト思ひ入れ。）
花園　さうしてそなたの鬻ぐものは、何ぢやぞいの。
どう　イヤ、その柄杓はござりませぬが、桶の中のは、呑み水でござります。
此絲　ムウ、なぜその水を麓から。
白梅　サア、この山中には、よい水がござりませぬゆゑ
紅梅　毎日斯うして麓から、汲んで登りますわいな。
此絲　そりやア、しんどい事であらうのに、なぜに男は
兩人　イヽエイナア。
〽所ならひかお國の作法、かの御亭は留守して子の守りをすりや、おかゝ麓の水を汲むえ、

そこで男は夜なべの仕事、寝床敷蓙けんけばむしろ、ゆるさんせ山椒魚、蟲には奇妙にきく
といな、言葉をしほに打ち連れて、賤が住家へ急ぎ行く。
ト白梅、紅梅、下座へ入る。

どう　ドレ、おいらも仕事を、……モシ、お前方は、馬はいりませぬか。

此絲　コレ〱、あの人、頼みたいわいの。

どう　そりやア有り難い。宿へなりと、山へなりと。

此絲　イエ〱、そんな事ではない、コレ。（ト囁く。）

どう　そんなら、あの旦那様が、こちらのお姫様をとめるやうに。

此絲　アヽ、コレ。

どう　そりやァお安い御無心だが、わしやァおじやれの色事より、外は何にも

此絲　サア、それならわたしも道々の、泊り〱で見聞きした

どう　おじやれと

此絲　馬士の

どう　色事を

〽夕暮れ急ぐ旅の空、泊り烏の塒をと〽お泊りかえ〱〽もしお泊りならば泊らんせ〽連れが先きへと振り放す、無理に捉へて引き入れて〽草鞋とく〱お荷物は、こゝへ奥の間に寢させて置いて、もうよい頃とくね垣を、潛り出合ひの折りもよく〽どう六さんかの足許に、わんと一聲〽畜生め〽なくがしよざいか威張るが癖か、その乘りあぢに喰らひ込み、寒の師走も日の六月も、裸かで道中通し馬〽そりやアノぬしが六道に、皆張りこみの裏表、おひへを一つ違引も、おじやれの身には眞實に思やこそ、ヤレ樣ゆゑなら、潮來出島の勤めでも。

トこれより太鼓、鼓のあしらひ、

〽すいたよ髪の毛生え元まで、附けし油の匂ひまで、しよんがえ〽今夜逢はうとて川端通れば、門では招かで櫓で招く、オヤ〱。ヤレ〱〱

此絲　さうだぞ〱、〽さうぢやいな〽今の浮世は色の世盛り。モシ、お大將樣、わしらがやうな身の上まで、割れ鍋に閉ぢ蓋と、それ相應の、小色もやらかしますぞえ。

此絲　それ〱。殊にあなたは誰れあらう源の頼光公、お色の一人や二人なうては、世間へ對して御外聞が

賴光　ア、イヤ〳〵、たとへいか程勸むるとても、この賴光は苟しくも
〽弓矢の道に生れ出で、經典の道も尋ねしかば、代々の武道と事替り、ちよつと摘みしたぼもなく、また引つかけし得手もなし、元より藝者女郎には、ちつとも食やひ仲の町、胸倉取つてこれ申し、そりやマア何の事ぢやい、などのと、言はるゝ身にはあらねども。
既に軍馬に跨がる時は、妻妾をも顧みず。さすれば女色は武道の妨げ。
〽重ねて諫め無用ぞと、矢張り氣まじにのたまへば。
此絲　こりやモウ、梃でもゆかぬものぢやわいの。いつその事に姫君樣、あなた直き〳〵打ちつけにナ。……わたしはその間にお手水の
〽水もくも手の杜若、とじやくこなさんよいやうと、家居ともとめて
ト此絲、下座へ入る。
どう　コレ、女中おれにどうして。……オヽイノ〳〵。（ト兩人を見て思ひ入れ。）ソレ、仕方がない、やらかせ〳〵。（ト花園姫を賴光の側へ突きつける。）
花園　コレ、申し〳〵。（ト賴光が顏を見る。）
〽拙き身にもあこがれて、幾夜寢覺めの枕にも、物や思ふと恥かしく、身のいたづらに形振

りも、かこち顔なるきり〲す、ないて明石のあゝ羨まし、どうぞお側にいつまでも、猶餘りあるお情けを、やいの〱も口のうち、人こそ知らぬ可愛らし、〱頼光公も姫君の、さすが心の割りなさに、ともかくもとの御氣色を〱見て取り持ちが、これからの、あとの所は幕の内、さア〱早うとせり立つ馬方が、花の木の間へ。

ト どう六、頼光花園姫を無理に幕のうちへ入れる。

どう ヤレ〱、仕附けもしない取持ち役、どうやら斯うやら床を廻した。ハヽヽヽヽヽ。(ト合ひ方になり、どう六思ひ入れあつて、あたりを見廻し) 鬼同丸と心を合せ、頼光が當國へ、下つてうせるその道で、窺ひ寄つて馬方に、姿を窶した夜叉太郎國秀なれども、これまで名に聞えた武勇のやつばらが隨へば、仕損じてはと見合す折柄、幸ひとこの初音が原の、梅見物に、供とては、附いてうせた女めばかり。今頼光と花園姫が、うまいその中、覗ひ寄つてたつた一討ち。あとは都の滿仲、頼信、これらは射止めた猪同然。ドレマア、手強い頼光めを。ソレ〱。

ト 傍示杭のもとを掘り、一腰を出し、ぼつこみ行かうとする。この時下座より白梅、紅梅、つかつかと出て來て、これを支へ

兩人　曲者、動くな。

どう　うぬはさつきの、變な小女郎。コリヤ、何をしやァがる。
白梅　其方こそあれなる幕の内、そりや、何事をしやァがる。
どう　サ、そりやァ
紅梅　頼光公へ近寄つて、只一討ちとは、これが誠に出來ない相談。
白梅　それより怪しい其方の身の上。
紅梅　繩打つて詮議する。
白梅　サア、尋常に
兩人　腕まはせ。
どう　ムウ、そんならわいらも、こりやァ只の
白梅　知れた事、保昌様の仰せをうけ、頼光公の御下向を
紅梅　目立たぬやうに警固の役。誠わらはは源家の身内。
白梅　豐後の次郎が　妹　白梅。
紅梅　三田の源太が　妹　紅梅。
兩人　サア、速かに繩にかゝりや。

どう　小癪な女め、さうぬかしやア、マア、うぬらから。

ト一腰へ手をかける。兩人吹き替の梅の傘をおつ取り、支へる、ちよつと立廻りに、どう六左右を拂つて、三人シャンと見得、摺り鉦入りの所作だてになる。

〽花に嵐はな、いつも當るぢやないかいな、梅の白雪白妙の、積るわく〳〵、さんざ座敷の綿帽子、見事に咲きし紅梅の、色もうつらふ手毬の、八重に七重に、七重に八重に、重ね重ねる人の山々。（トよろしくあつて、どつこい。）

〽梅のしもともちり〳〵ぱつと、匂ひこぼるゝ爭ひは、ながめ盡せぬ。

トきほひ三重、カケリになり、眞中にどう六、左右に白梅、紅梅詰め寄りきつと見得。この道具ぶん廻す。

向う一面山幕、眞中に振りよき松の大樹、枝葉左右に茂り、蔦かづら面白くかゝり、この松の上の方に栗丸太にて仕立し葛家、簾掛けあり、尤も屋根、簾とも誂へあり、梅の吊り枝、松と照葉の紅葉を打ち交ぜたる道具。すべて伊豆の國足柄山深山、谷かげの體、この道具に納る。ト直ぐに鳴り物打ちあげ、淨瑠璃になる。

〽松風ともに吹く笛の〱、聲すみ渡る谷蔭の、蔦のかつらの纏ひては、茂れる木々を垂木とし、木の葉の屋根に露霜を、置きまどはせる山住居。

ト衒をかぶせたる篠入りの誂への合ひ方になり、簾まき上げる。うちに山姥、機を織つてゐる見得。正面に山神の畫像を掛けあり。簾あげると打ちあけ、直ぐに浄瑠璃。

〽孟母が昔ならねども、織るや手業のきりはたりてう〱、世を空蟬の唐衣、櫛せぬ髪のおのづから、鬼とや人の見るやらん、恥しさよとにつこりは、それしやあがりと三重の帶、とく甲斐もなきうき身かや。

山姥（機の手をとゞめて）　山里は、ものゝ侘しき事こそあれ、世の憂きよりは住みよかるらん、と數へて見れば七歳あまり、この山蔭に身をのがれ、明けても暮れても樂みは、たゞ一人の快童丸。……ほんに、あの子としたことが、マア、どこへ行きやつたやら、岩角木の根に爪突いて、また怪我でもしやらにやよいが。

〽ほんにどつちへいたづらな、子に引かされて立ち出る、軒の松葉がえり元を、ちよいとおひたし凩に、つれてかつ散る紅葉の時雨、さら〱さつと降りかゝる、袖を小笠に打ち見やり。

トこの文句のうち山おろしになり、山姥、蔓のまとひし枝を突き、花道へ來る。ト日覆ひより紅葉大分散る。山姥これを見あげて、思ひ入れあつて

吹きしく風にもみぢ葉の、ア丶、散るは〳〵。

〽それ林間に酒をあたゝめ、紅葉を焚くといへり、〽さなきだに暮るゝを惜しむ深山邊の、小倉の紅葉かこつけに、汲みかはしたる杯へ、落葉の風情今も見る、景色にさのみ替らねど、われは姿もいつのまに、うつろひ果てし有樣や、ア丶おとましと打ち萎れ、越し方思ふぞ道理なる。

トよろしくありて舞臺へ立戻る。直ぐに大薩摩淨瑠璃になる。

〽遠近のたつきも知らぬ山中を

ト草笛入りの合ひ方、誂への鳴り物になり、斧右衛門、白髮おやぢ、柿の頭巾、袖なし羽織、股引、手甲、大まさかりを腰にさし、柴を背負ひ出ると、東の花道より鐵藏、淺黃頭巾、袖なし、手甲、股引、柴を背負ひ、まさかりを腰にさし、出て來る。

〽足に任せて踏みわけて、老木若木のわかちなく、柴を背負つて大束を、しつかと肩へ兩掛けに、戻り木樵の氣散じに、伊豆の下田はさて色所、誰れも湊へ焦れ寄る、ほんにさ、唄を

山路の道連れに、西と東の花道へ、隔てゝこそは歩み來る。

斧右　そこへ見えたは、根ツこの鐵藏ぢやァないか。

鐵藏　さういふは切株の斧右衛門どの、よく精出しますの。

山姥　オヽ、お二人とも、早うござんしたな。

斧右　ホヽウ、快童がお袋か。

鐵藏　今日はまだ逢ひませぬの。

山姥　マアく、一服のんでござんせいな。

斧右　イカサマ、いつもよりまだ日は高い。

鐵藏　そんなら一服やつて行かうか。

ト兩人柴を下ろす。山姥葛家のうちより、百日紅の火入れを持つて來る。兩人煙草を吸ひつける。互ひに捨せりふありて

斧右　時に、今日は小僧が見えぬが、どうしました。

山姥　さればいな、どこへやら遊びにいて、先刻にからわしが側には。

鐵藏　そりやァ危い。何といつても子供の事、怪我でもしたらどうしやる。

斧右　ソレ〳〵、後先き見ずの頑是なし。オヽ、早く呼ばつしやい〳〵。
山姥　サア、わしも疾うからさう思つて。
鐵滅　さう思つてなら、呼ばつしやい〳〵。
山姥　ほんに、あの子としたことが、また大方猪猿相手に、角力取つてゐやるか知らん。ほんに油斷もすきもなることぢや（ト言ひながら、こちらへ來り）快童どこにぞ、快童丸〳〵ヤアイ。
ト揚幕にて
快童　オヽ。
ト聲をかけ、大太鼓入りのいつもの鳴り物になり、向うより快童丸、枇杷の葉をかつぎ走り出で、花道よき所に留る。
〽神樂月とてな、片山里も、笛や太鼓で面白や、足のつめたに草履買つてたもれ、子をとろ子とろ、どの子が目好い、かごめ〳〵籠の中の鳥は、いつ〳〵出やる、夜明けの晩に、つるつるつッはいた、木の根笹原潛りくゞつて、ひよいと來たみどり子、〽母を慕うて山道を
ト舞臺へ來り
快童　コレかゝ様、おりやこんな花を折つて來たよ。

〽いたづら盛りぞ愛らしき。

兩人　オヽ小僧、歸つたか。

山姥　わしがちつと見ぬうちに、ちやんと山遊び。さうして今まで何してぞ。

快童　アイ、わしや天狗の巣立ちとつゝかまへて、鼻柱折つて泣かせてやつた。

山姥　これはしたり、又そんなわるさばつかり。ソレ、をぢさん達に、お辭儀しや〳〵。（ト快童お辭儀する。）ソレ、其方のをぢさんにも。（ト快童辭儀をせぬゆゑ、つむりを捉へ、辭儀をさせる。）

兩人　ヤレ、よくお辭儀が出來たな〳〵。

斧右　ドレ、をぢが褒美をやるべいぞ。（ト柴に附けたる枝附きの蜜柑を出す。）

鐵藏　おれも小僧に鼻藥を。（ト袋に入れし饅頭を小枝の先きに附けて）

兩人　コレ〳〵〳〵。（ト見せびらかすを、快童丸ほしがる。）

〽これを蜜柑や麓のおまん、誰れにやらうな、餘所の子にやろか、今朝も隣の洟汁垂れどのが、腰へあちよとて婆さまの細工、くべた溫石餅かとおもて、とろと圍爐裏で手を燒いたの

兩人　アツヽヽヽヽ。

〽枝の鶯いとし、ほんそにや、鈴やつぼ〳〵、でん〳〵太鼓に風車、くるり〳〵、やつくる〳〵

くる、くるり〳〵と、廻る子よりも親心。

山姥 サア〳〵、快童、その代りにはいつもの踊りを、をぢさん達に踊つて見しや。

快童 アノ、踊りを踊るのかや。

斧右 こりや、よからう。

鐵藏 サア〳〵、早く〳〵。

兩人 見たいわいの〳〵。

山姥 ソレ、快童、山家踊りは

快童 何というた。

〽おんらが在所はな、奥山の、てゝ打ちのでんぐり〳〵〳〵、栗の木の、木の根を枕にござれ、抱いてころび寐、こな小女郎が、直すぐ山家の品物でござれ、だいてころび寐。

快童 かゝ様、乳呑まう。

山姥 又かいなア。いつまで乳々と、そんな事云やると、つめ〳〵ぢやぞ。

快童 アヽヽヽ。(ト泣き出す。)

斧右 これサお袋、そんな事せずと、だまさつしやいな〳〵。

山姥　イエ、モウ、どうも。（ト言ひながらだます。）

鐵藏　さう言はつしやるな。子供はとかく乳々と。………イヤ、乳といへば、お袋や、この小僧の父御わえ。

山姥　サア（ト思ひ入れあつて）アノ、父御も一緒に。（トこなしある。）

斧右　ナニ、父御も一緒にだ………それでもついぞ御亭主は。

山姥　そんならちよつと近附きに（ト庵のうちより羽織を持つて來り）わたしが夫、二人ながら、よう見知つて下さんせ。

兩人　ナニ、この羽織を。（ト合點のゆかぬ思ひ入れ。）

山姥　サ、まだ年打たぬ女子の身、願ひあるゆゑ山ごもり、年月たつうち若しひよつと、いたづらな氣も出ようかと、心の戒め、それゆゑに、筐を今に夫と思ひ、親子三人ゐる心で

鐵藏　したり、イヤ、きつい女もあればあるものだ。まだ三十になるやならずで

斧右　さうして目立つ伊達羽織、これを男の筐とは、ハヽア、そんならこなたの元の身は

山姥　恥しながら都九條で、勤めを立てし憂き身の末。

鐵藏　道理で只の者ぢやァないと思つた。

斧右　なんとおふくろ。ものは相談、わしらはその九條の廓とやら、つひぞ話しに聞いた事もないが、なんと聞かせちやァ下さるまいか。

鐵藏　ソレ〳〵、とてものことに、その御亭主の客人と、こなさまとのいきさつも、おいらに話して聞かさつしやい。

山姥　これは、マア、めつさうな。どうして今更その話しが

斧右　ハテ、何も慰み。仕形話しでやらつしやい。

快童　かゝさま、早く話しねえな。

山姥　この子わいの、何にも知らいで。ホヽヽヽヽ。イヤ、モウ、其やうに言はしやんすもの、話さぬも何とやら。

鐵藏　幸ひこゝに羽織もあり

斧右　シテ、その話しは

兩人　どうだな〳〵。

〽浮世語りも恥しや〳〵〽流れせはしき浮き勤め、替る夜毎のその中に、惚れた男の意地わるな、餘所へ買れてまゝならぬ、時來ては心の廻り部屋〽おきやァがれ、今夜も客か、お目

もじなし候はねばと書いて寄越して置きながら、恩にきせるの八ッ當り〳〵胸にこたへて逢ひたさの、そつと座敷をぬき足に、廊下の音のせぬやうに、明る障子もじれつたく、物をも言はずに取り縋る〳〵オツトよしても暮れの鐘、今までどこのか色男と、すつぱり茂つてやう〳〵と、氣つにはめなでかきやうと來たのか、ちい〳〵め、コレ〳〵かけるものに取つては、衣桁に小袖、船に苫、匂ひ袋に金財布、軒の燈籠削りかけ、輪飾り胸札狐罠、木の芽峠の茶屋の緣先き、〳〵よしかえ、こんな所にゐるようより、ドリヤと辰の尾、しがみ附き、〳〵コレナア今日は取りわけ、言ふ事聞く事たんとある、その約束で今朝早う、ござんす筈を憎らしい、初に逢瀬のきぬ〴〵に、おくり出口のさらば垣、朝露結ぶ緣ぢややら、振返つての一言が、身になるやうな嬉しさに、心に思ふありたけを、言ひ交したに胸盡し、〳〵野暮な口舌のたゞ中へ、ぶつて脇からまたひとり。

山姥 聞かしやんせ。小田卷といふ太夫すも、其方に惚れてゐてな。毎日送る日文の數、大方三萬三千三百三十三本ほども遣つたでござんせうが、返事のないに腹立てゝ、顏に紅葉の裲襠を、取つて脫ぎ捨て、どこもかも。

〳〵ほう〳〵夜中にかけ來り、階子とん〳〵わたしが側。

コレ、八重桐さん、否な男に惚れはせぬ。これまで其方は澤山に、抱いて寐たあのおさん、今からわたしに下さんせ。

〽貰ひに來たとずつけりに、此方も日頃の癇癪酒。

コレ、くだ卷さんとやら、折角お前の無心ぢやが、もう百年もたつてから、松葉を添へてぬしさんにあげう、あた馬鹿らしいと言ひさまに

〽突きのけはずみ、ばた〳〵、緣から下へ落の人、胸がいた〳〵たゝゝゝゝと、泣き出す騷ぎの聲に、小田卷が遣手、引船、仲居、飯焚、出入りの座頭に按摩取、はこ山伏に占やさん、雪駄片足に下駄片足、駈け來る口から奧座敷、太夫さんの仕返しと、こゝでは打ちあひ抓りあひ、銚子燗鍋踏み返し、そりやこそ津波が打ち交せて、隱居が子を産む、ヤレ取り揚げ、ソレ鰹節、擂鉢、まな板、庖丁ぐわら〳〵、ぴしやりと鳴る音に、そりや地震よ雷よ、桑原々々、觀音經、妙法菩薩、京中の、話しの種となりにける。

斧右　そいつは亂癡氣騷ぎだつたな。

鐵藏　それからしまひはどうなつたな。

山姥　それから廓の宿老親方、寄つてかゝつてやう〳〵と取り鎭めて、此方の口舌も、ツイづる〳〵

と仲直り、杯がはりに口と口。ホヽヽヽヽ、もう話しはこれぎりぢやわいの。

斧右　ハテ、それからが肝心のところだ。

鐵藏　もちつと、後をやらつしやいな。

快童　それよりいつもの桃太郎にしないな。

斧右　イカサマ、小僧は、コリヤ、不承知であらう。

鐵藏　ハテ、何ぞよい話しが。

快童　おらア、角力がよい。おぢいと〳〵早くこゝで。

斧右　とんだ望みをするやつだ。

鐵藏　よい〳〵、そんなら今の話しの後を

斧右　おぬしとおれと

鐵藏　角力によそへて

兩人　ドレ、取り組んで見せべいか。

ト白囃子になり、兩人こなしよろしくあつて、ドッコイと淨瑠璃になる。

〽忍び大關逢ふ夜もあらば、人目關脇あらうと儘よ、アリヤ〳〵〳〵よんやサ、百手く

だいてにその睦言も、漏さぬ中に力水、コリヤ〳〵〳〵よんやサ、縁小結に通ふ神、遣り手がこはい前頭、首尾をつくらふ化粧紙、アリヤ〳〵〳〵よんやサ、誰れも三升に三ツ銀杏、この取組ぞはなぐし。

トこの立廻りのうち鐵藏、懐より連判を落す。斧右衞門取りあげ

斧右　こりや、コレ、味方を集むる連判状。

鐵藏　（ちやつと取つて）斧右衞門どの、靜かにござい。

〽麓の方へと。

ト鐵藏こなしあつて下座へ入る、斧右衞門見送り

斧右　合點の行かぬ、あの鐵藏、あいつも一癖あるやつだわえ。

快童　かゝ樣、山廻りに行かう〳〵。

山姥　これはしたり、又そんなわやくを。

斧右　コレ〳〵、その山廻りとは何の事だえ。

山姥　サア、人家はなれし山住居、わしもこの子も誰ひとり、友呼子鳥も連れもなく、心慰む方とては

〽よし足引の山廻り、四季の眺めもいろ〳〵に、〽浮き立つ空の彌生山、桃が笑へば櫻が

ひぞる、柳は風の鷹揚に、誰れを待つやら小手招く、霞の帶の辛氣らし、〆めて手と手の盆踊り、七箇の池にうつり氣の、恨なぐしの振りの葉は、露の玉章落ち初めて、焦れて濡らす袖の海、ついだまされて室咲の、梅の暦もいち早く、〳〵門に松立ちやつい雛も、出るかと思へば時鳥、あやめ葺く間に夏の月、待宵過ぎて菊の宴、オヤ祝ひ月里神樂、ほんに〳〵、ほんにせはしき浮世、オヽわれは、白雪積る山廻り〳〵。

斧右 ムウ、窺ふところまだ裏若き女の身、かく山中に住居なし、悴を守り立つ心のうち、何か願ひのある者ならん。われこそは多田の滿仲が寵臣、三田の仕といふおやぢ。願ひの品にて、力ともなり得させんが、包まず樣子を語れやい。

山姥 ナニ、あなたが三田の仕樣とや。この上は何かお隱し申しませう。われ〳〵二人は北面の侍ひ、坂田の藏人時行が妻、忘れがたみでござりまする。

斧右 さてこそな。して、時行が妻たる身で、いかなる仔細でこの所に。

山姥 サア、その願ひは夫時行、武門の家にはありながら、柔弱非力の身を悔み、無念の最期に過ぎ行く折柄、お腹に宿せしこの快童、何卒勇士に育て上げ、一天下に名をあげさせよと夫の遺言。それよりこの足柄山に分け入つて、山神に誓ひを掛け、この七年の歳月を

斧右 ホヽウ、驚き入つたる物語。母が丹精、山神の加護、悴が勇力さぞあらん。ヤイ、快童、この場に於て、それがしと、わりや力を試して見るかよ。

快童 おもちれえ〳〵。

山姥 コレ、快童。大事のところぢや、負けまいぞ。

斧右 サア、來い快童。

快童 合點だ。

〽神變不思議の快童丸、こなたはあしらふ勇力士、快童いらつて傍なる、松を根こぎに引き拔いて、ふんちがつたる有樣は、人も恐るゝばかりなり。

ト快童丸、縫ぐるみの松の木を引つこ拔く見得。

斧右 その松の根こぎ面白い。サア、打つて來い。

快童 合點だ。

〽勝負々々と打ちかゝるを、すかさず豪氣の力瘤、柄より腕の節くれて、しつかと摑めばめり〳〵〳〵、エイヤ〳〵と捻ぢ切つて、左右へ別れて立ちたりしは、目覺しかりける次第なり。

斧右　ォヽ、力の程は見えた〳〵。かゝる稀代の勇士の芽生え、それがし推擧し、頼光公の家臣となさんが、如何に〳〵。

山姥　何がさて、頼光公へ差上げれば、母が悦びこの上なし。偏によろしく、仕樣。

斧右　然らば今より、父が坂田の氏を顯はし、坂田の公時と名乘らせて、直ぐさまこれより同道なさん。

山姥　スリヤ、父御の名跡を。エヽ、嬉しや悦ばしや。コリヤ〳〵、快童、今日からは、坂田の公時といふ侍ひぢやぞ。隨分おとなしうしませうぞ。

快童　そんならおれは侍ひになるのかや。嬉しい〳〵。

山姥　ォヽ、嬉しい筈〳〵。さりながら、今行きやると、この母に、もう逢ふ事はならぬぞや。快童、こゝへ。

ト　快童丸そばへ來る。山姥これを見て思ひ入れ。

〽夫のかたみと見るに附け、そなたの大事さ大切さ、今日別るれば今宵より、母は獨り寢の閨のうち、さぞ面影の懷かしからう、頼光公へ御奉公、勤める暇の明け暮れに。

武術を勵み立身せよ、ヨオヽ、

〽かならず。

必ず人さまに

〽山姥が子と笑はれな。
今別るゝともこの母が
〽そなたの影身に附添ひて、只老先きを守護すべし、とはいふものゝ、これがマア、名殘惜しやいとをしやと、抱きあげ抱きしめ、思はずワツト一聲は、梢に響きて哀れなり。
ア丶、われながら誤つたり。斯くては果てじ快童丸、頼み申すは仕樣、名殘りは盡きじ、早おさらば。
〽暇申して歸る山の、雲に心をかけ添へて、山また山に山廻りして、行くへも知れずなりにけ
ト山姥、砧にて消える。この時山神の像ぬけて、焔硝火たつ。白地になる。

快童　かゝさまいナウ〳〵。

ト尋ねる。早笛になり、斧右衞門、下座の方を見やり

斧右　見たか快童。麓の方より暴れ來る猛獸。仕が後に控へてゐる　手捕りになして君へのお土產。

快童　合點だ。

ト早笛になり、兩人大手を廣げ待ちかゝる。下座より鐵藏、黑四天の形、牛の皮をかぶり走つて出て、ちよつと立廻りあつて、牛の皮を引つ取り、三人立廻り。

斧右　ヤア、うぬは鐵藏。
快童　先刻のおぢいか。
鐵藏　いかにも山賤鐵藏とは、世を憚りし暫しの假名、誠はいつぞや頼信めに、搦め捕られし、市原野の、鬼同丸とはおれが事だ。
兩人　さてこそなァ。
鐵藏　われに大義の望みあつて、英雄集めんその爲に、姿を替へて窺ふところ、只者ならぬ小悴、老人、味方をなさばその通り。異議に及ばゞ角にかけ、猪、狼の餌食となすが、返答は、どうだ〳〵。
斧右　おろかや、われこそ三田の仕、快童丸も今日よりは、源家の忠臣、坂田の公時。
快童　奉公初めに、おぢいを縛つて。
斧右　牢獄破つた極悪人、頼光公の御前へ引く。サア、尋常に
兩人　覺悟なせ。
鐵藏　小癪なことを。
ト立廻り、引臺よろしくあつて、ドッコイと留る。向う揚幕にて
雷雲　ヤレ、來いやい。（トどん〳〵になり、裸身に鎧を着、鯰にて、軍兵大勢連れて出て來り）左大將の仰

せをうけ、快童丸を味方にと、出掛けて見りやア三田の仕、さては源家へ引き取つたな。今一人は鬼同丸、三人一緒に引ツくるめ、入道が手柄にするワ、

三人　何を小癪な。、

雷雲　ものども、ソリヤ。

　　トどん〳〵になり、三人へ大勢かゝる立廻りあつて

山姥　やみなん〳〵。

　　ト流れになつて、正面の山幕切つて落す。後打ちぬき遠見の山、ぬり張りの月一杯に飾り附け、山姥、誂への姥のこしらへにて、杖にすがつて岩臺に立ち身。この儘舞臺よき所へ押し出す。

快童　ヤア、かゝ様の

三人　この體は。

山姥　山神應護の奇特によつて、望みたんぬる上からは、今こそ人界輪廻を離れん、わが子よ去らば。

雷雲　山姥ぐるめに打つてとれ。

軍兵　やらぬワ。（ト立廻り。）

　　〽實にや一陽來復の、時こそ來たれ歸り咲き、武勇の花も今こゝに、榮え榮ゆる源氏の御代、

盡きぬ歌舞伎ぞめでたけれ。

ト淨瑠璃一杯よろしくあつて、上の方斧右衞門、連判を鐵藏と引ツぱり、下の方快童丸、軍兵を積み重ね上に乘り、雷雲詰め寄る。眞中に山姥立ち身、皆々この見得よろしく、ドツコイ。

斧右　先づ今日はこれぎり。

めでたく

打ち出し

心謎解色絲

こころのなぞとけたいろいと

心謎解色絲

序幕　　深川八幡の場

役名。　半時九郎兵衛。鳶の者、お祭左七。赤城左京之助光若。乳人、竹川。本庄綱五郎。石塚彌三兵衛。山住五平太。醫者、東林。絲屋番頭、佐吾兵衛。廻し男、儀助。神原屋手代、金六。角力取、ずんぎり。鳶の者、權。同、八。同、源。藝者、お絲。仲居、お卷。鳥追ひ、お君。同お八重。同、お六。九郎兵衛女房、お時。松本女房、お蔦。

本舞臺三間の間、下座の口石の鳥居、向う石垣の上に玉垣、この前に葭簀張りの茶屋、奉納の提灯開帳札、寄席、淨瑠璃の貼り札など誂への通り、深川八幡の景色、爰に五平太、家中侍ひの形にて、金六、質屋。ずん切、取的の角力とりにて、上手の床几に腰をかけ、次の床几に權、八、源、鳶の者、餘所行の形にて腰をかけ、茶店の婆、茶を汲みゐる。大拍子、神樂、鳥追ひ唄にて幕あく。

權　ヤア、こりや關取の弟子、ずん切どのではないか。

ずん　どなたかと思つたら、お揃ひなすつて初買かえ。

八　イヤ、今日は何よ、山の手と下町と、いさくさがあつた所から、手やいの中がござるので

源　今日二軒茶屋で中直り、そこでおいらも雜魚の魚まじり。
ずん　そりやァ飲み口でござりやすね。そんならあの頭の子分
三人　そのお祭り兄ィを、待合はせて居るのよ。
金六　待つといへば五平太さん、昨日わざ〳〵爰までと、お手紙でござりましたゆゑ、二百兩持つて參りましたが、彼の質物の色紙は。
五平　サア、藝者のお絲が身請けと賴んだ二百兩、いづれ後方。
ずん　モシ、そんなら、あなたもあのお絲さんかえ。そりやァとんだ事だ。私しは今日、あの子がお馴染の
五平　絲屋の番頭佐五兵衞か。大事ない〳〵。おれも佐五兵衞を待つて居る。
權　おいらアこゝで待たうより
八　山へいつて待つて居ませう。
三人　サア來やれ。

ト鳥追唄、大拍子、神樂になり、鳶の者三人金六に附いて鳥居の内へ入る。直にこの鳴り物にて、向うより佐五兵衞、手代の形。東林、醫者にて、楊枝をつかひながら出て來り、花道にて

東林　春もやゝ景色調ふ月と梅、ではない色と酒、粂本の二階で洒落足らず、また藝者を連れて山じやれとは妙々。

佐五　イヤまた、そよと南が吹いてくると、白魚網で屋根船もよいが、とかくお絲めが酒ばかりくらつて、中の字をきめるにはあやまる。

東林　中の字といへば、アレ、仲町の眞中をよろ〳〵と、とんだ氣性な藝者だ。オイ〳〵、早く來ないか。お絲坊、つんぼう。

ト長く呼ぶ、向うにて

いと　何を惡洒落な。東林さん、待ちなさんせいなア。

ト誂への流行り唄になり、向うよりお絲、仲町藝者にて、お卷につかまり、酒に醉ひしこなしにて出てくる。儀助、廻しにて、三味線箱を持ち、附いて出て來り

まき　佐五さんと一緒に來ようと思うても、お絲さんが轉ばさんせうと思うて。

佐五　オット、その轉ぶを願つて居ても、下駄が轉ばずやで辛氣辛苦だ。ドレ、手を引かうか。

いと　イエ〳〵、丼で三ツや五ツ飮んだとて、醉ふやうな弱い酒ぢやござんせん。昨夜も土橋の玉泉さんと飮み明し、とう〳〵盛り潰したは、餘ッ程手柄者でござんせうがな。

儀助　きつい御自慢。その度々に迷惑はこの廻し、酒と一緒に、お絲さんに廻されるには

いと　困るによつて、否かえ。

儀助　何サ、御祝儀はパツ〱と、去年の雪の樣に、頻せえほど下さるし、これからまた山へいつて、
水風呂桶で始めやせう。

いと　こりやよいわいなア。

まき　サア、ござんせ。

ト唄の切れにて皆々本舞臺へくる。

佐五　こりや五平太樣、ずんぎりも待ちかねたであらうな。

五平　佐五兵衞、きつう待たしたな。

いと　お前は五平太さん、そんなら佐五さんともお近附かえ。

五平　オツト、さしだと氣遣ひがるは尤もだが、これまでは身共も、そもじを口說いたなれど、とんと
思ひ切つて、これから佐五兵衞に取りもつが嬉しいか。

いと　そりやマア、お禮から先へ云ひやんせう。

東林　イヤ、また得心さへすれば、本町筋の番頭株、石町新道あたりへ圍はれ、居ながら拜む撞鐘堂。

儀助　ざつと五十や三十の、小金には困るまい。
東林　妙々。
ずん　さう致したら、わしも折々参つて、地取でもお目にかけませう。
　ト此うちお絲、お巻に囁いて、紙に包んだ物を渡す。
まき　アイ、モシ、ずんぎりさん、これはお絲さんから。（ト金をやる）。
ずん　これは有り難うござります、よろしくお禮を。
　ト此うち、鳥追唄になり、鳥追お八重、編笠にて三味線をひき、鳥追お君、同じく盆にお拈りを入れ持つて、下座より出て來て
きみ　ことぶき祝ふ初春に、七福神の寶船、エオイ〳〵。
　トうたふ。お八重は三味線をひく。
まき　アレ、お絲さん、見なさんせ。
いと　ほんに、可愛らしい鳥追ぢやわいなア。
きみ　御新造さん、入れさしやんせ、入れて下さんせいなア。
東林　イヤ、藝者を捕へて入れろとは、妙な事を云ふわえ。

佐五　マア、縁起がいゝ。ドレ〳〵、壹文やらう。

卜錢入れより出してやる。お君盆にて受ける。

儀助　こんな子を鳥追にしようより、年一ぱいなら仲町しろもの。

きみ　旦那さん、金下さんせ。

皆々　ヤ、何といふ。

きみ　金が欲しい、金下んせ。

八重　コレ〳〵お君、そんなこと言はぬものぢやぞえ。

佐五　ハテサテ、つけ上がりのした乞食め。何ぞ買ひたい物でもあるか。

きみ　イヽエ、買ひたい物はござんせんが、金下さんしたら、それを怖い伯母さんにやつて、可愛がつてくれる外の小屋へ行きたうござんす。

いと　ハテナウ、どうやら哀れな物の云ひやう、其方は實の兩親はないかや。

八重　ハテ、この子の親というてはござりません。貰ひ子か、拾ひ子か、このやうに門附に出ても、貰ひが薄いと、打つたり毆いたり、それは〳〵惨い目にあひます。わしはツイ隣でござりまするが、常住詫してやりますわいなア。

まき　ほんにそれは、むごい事にあふ子ぢやなア。

八重　それで、外の可愛がる内へ行きたがりますが、小さい時から世話したゆゑ、金取らにや遣らぬ遣らぬと、云ふ事を聞いて居るゆゑ、それで今のやうな事を申しまするわいなア。

きみ　錢や米を貰うて歸なぬと、毆かれたり、縛られたり、飯も喰はさずに、それが怖い。眞の父さんや母さんに逢ひたうござりまするわいなア。

いと　聞けば聞く程、いぢらしいその子の身の上。待ちや〳〵。足るか足らぬか知らねども、お卷さん、これ遣つて下さんせ。（ト鏡袋より小判壹兩出して渡す）。

儀助　ヤア、鳥追めに一兩とは、仕合せ者だな。

まき　それいなア、コレ〳〵そこな子、これを遣らうと云はしやんす程に、どうぞマア、その可愛がる小屋とやら、内とやらへ。

八重　これは有り難うござります。私しが又內へ歸りまして、外へやる相談してやります程に、それまでも人に見らるゝと、直に取り上げられます。お君、戴いて仕舞うておきや。

まき　ドレ〳〵、わしがよい所へ仕舞うて置いてやりませう。その守おこしや。（ト提げて居る守袋をとつて、中より守を出して見て）モシ、お絲さん、でも此やうな守が入れでござんす。

いと（何心なく取つて）こりや眞間の繼橋、手古奈のお守。（ト裏を反して）治承二年戊戌四月五日誕生の男子十吉。

儀助　お絲さん、何のこつたな、小穢い。

東林　乞食の守、早く返してしまふがいゝ。

いと　イヽエイナア、男子十吉と書いてあるが、この子は女子、殊に（ト指を折つて）年の數の違ひといひ、わたしも小さい時から持つて居る、この通りの手古奈のお守、こりや滅多にない守といひ、もしやわたしの兄さんが。

八重（向うを見て）モシ〳〵、アレ向うから、この子を慘うする婆さんが來ますわいなア。

　トこれにてお卷、今の守へお札と金を入れ、お君が腰へつけてやるうち、通り神樂にて、向うよりお六、乞食婆、編笠と三味線を持ち、キョロ〳〵駈けて出て來り、お君を見て

ろく　この餓鬼は爰にうせたか。今朝小屋を一緒に連れて出たに、ちやんと小路隱れをしやアがつたな。

八重　イヽエイナア、最前一の鳥居より、はぐれたというて逢うたゆゑ、一緒に門付して、分けてやらうと思うて。

ろく　それ、さういふ他人劫な。憎らしい。（トお君の頭をくらはす）。
佐五　コレサ〳〵、さう酷うするな。
ろく　何サ、どんなにしても大事ござりやせん。この餓鬼は、わつちが熊ゲ谷に居る時、棄兒か、宿なしの子か、この守を着けた儘、狼が咬へて來たを、わつちらが内で可愛さうだと、雜巾に火をくつつけて、狼を追ひちらし、助けてやつて育てた餓鬼、頑是の出來るにつけ、仲間の奴らが、拾ひ子だの、繼ッ子だのと、他人劫つけられ、いけねえつちやアござりやせん。サア〳〵、早く歩びやァがれ。また晩は食止だぞ。（ト頭をくらはす。お君泣出す）。
八重　お六さん、その樣にせいでもよいわいなア。
ろく　イヽエ、打つちやつて置きなせえ。これから深川中を引摺り歩く。うしやァがれ。
ト鳥追唄、捨せりふにてお君を引摺り行く。お八重、宥め〳〵向うへ入る。
東林　なんと、むごい婆アぢやアないか。
佐五　酷いといふは、あの婆アよりお絲、今の乞食に壹兩やる、派手も器量もありながら、兎角おれにやァ色氣なし。得心さへすれば、直に身請け、年季をぬいてやるがなア。
いと　（ムッとして）佐五兵衛さん、身請々々と云うても下さんすな。上げたり下したり、調子違ひの三

味線ぢやあるまいし……お卷さん、儀助どん、わしや此お客の座敷は勤めぬぞえ。

儀助　また惡い蟲を起して、そんな我儘。

まき　それ〳〵、皆醉うておいでなさんすによつて。

いと　イエ〳〵、人を弄り散らかして、わたしや退るぞえ。

まき　それぢや惡いわいなア。お前が癇癪起しなさんすと、わたしが座敷の廻しやうでも惡いかと、內の手前

いと　イエ〳〵、わたしが善い樣に云ふわいなア。（ト紙に包んだ金をやる）。

まき　モシ〳〵、これぢや猶惡いわいなア。

いと　イエ〳〵、何ぢやあらうと、退けて下さんせ。

儀助　モシ、それぢやアこの儀助が、中內へ濟みません。

いと　濟まうと、濟むまいと、わたしが知つた事かいなア。（ト包んだ金を額へ打付ける）。

儀助　オヽ痛い。（ト取つて見て）こりやお金……こんな痛みはいくらでも、いた有り難い。

皆々　ハテ、とんだ癇癪持ちだ。

いと　ドリヤ、これから杵正さんへ行つて飲み直さうわいなア。

ト流行り唄になり、お絲向うへ行きかける。これにて儀助、お卷も是非なく從いて行く。舞臺皆々呆れて居る。このうち花道よりお祭左七、五寸だろみの股引、半纒の上へ裏襟の掛つた小袖を着、革羽織、鳶の者にて出て來る。跡より半時九郎兵衞、やつし股引、誂への形、頰かむりにて、鳥飼の蒸籠を兩掛にかつぎ出て來り、花道にてお絲に行き逢ふ。

九郎　妹のお絲ぢやァないか。

いと　お前は兄さん。

九郎　中内へ寄らうと思つたに、よい所で逢つた。

左七　ハヽア、そんならあの子は、こなさんの妹かえ。

九郎　面目次第もないが、わしが身性が惡くつて、今に强請りやす。イヤ、此處ぢやァ何も話されない妹、彼處へ歩びや。

いと　イエ、わたしやちつと。

九郎　ハテ、歩びやれといふに。

ト矢張り右の唄、彈きつゞけにて、皆々本舞臺へ來る。お絲、下の方の床几に腰を掛ける、九郎兵衞、蒸籠を下す。

ずん　これは左七さん、今し方まで皆さんが

左七　そりや大方權や八だらう。今日は仲間の中直り。親分、風の神喜左衞門どのゝ名代に、帳場からすぐに深川くんだり、顏を出すも面役、歸りはまた、有象無象にとつつかれて、鷲でも買はにやアならねえ。

九郎　モシ、この蒸籠は、あの松本へいくのだね。

左七　さうサ、抛りこんで下せえ。

九郎　合點でござります。時に絲屋の番頭さん、今永代でお前の所の小僧が、山へ行くならこの袴を屆けてくれろ、その間におれは豆藏を見ると、横着な奴サ。風呂敷が小さいから、わしが風呂敷へ包んで、くつつけて來ました。（ト蒸籠の棒に、くゝしてある風呂敷取つて袴ばかり渡す）。

佐五　あの丁稚め、また野良をこいてうせるか。

ト袴を取るうち、五平太、九郎兵衞が持つてゐる風呂敷に目をつけ

五平　この風呂敷は覺えがある。

九郎　エヽ。

五平　さてはこの間鎧の渡しで、家來小者が包みを盜み取つたはわれだな。

九郎　アヽ、コレ〳〵、滅多な事を云はつしやんな。わしやァそんな者ぢやァごんせんぞえ。
五平　ぬかすまい。コレ、この風呂敷の端に、山住氏と縫ひ印。
九郎　サア、それは
五平　これでもおのれ、爭ふか。
九郎　イヤ、この風呂數は拾つた。
五平　なんと。
九郎　先月から本町の夜番に雇はれ、町内を廻る折、大道で拾つたこの風呂敷、夜番は物を拾ふなとお觸れでもあつたか。
五平　ヤ。
九郎　このお侍は、滅多無性に人に難癖を云ひかける。おれも、ちつとやそつと、人に面を見知られた九郎兵衛、盗人と云はれちやァすまない。ウヌ、どうするか、見やァがれ。
ト蒸籠の天秤棒を取つて立ちかゝる。
五平　おのれ、侍ひに向つて慮外ぬかすと、ぶッぱなすぞ。（ト柄へ手をかける）。
東林　モシ〳〵、滅多を事なされまするな。

五平　イヤ〳〵、此方にも覺えある風呂敷ゆゑ。

九郎　なんの事だえ。二本棒の侍ひと犬ッころが怖くつて、江戸の住居がなるものかえ。これから死ッくらだ。こゝへ出やァがれ。

五平　おのれ、もう料簡が

ト拔いてぶつかける。九郎兵衞も天秤棒振りあげる。皆々こはがる。お祭左七中へ入る。

左七　これサ危ない。

ト止るもかまはず、兩人たゝきあふを、左七棒の先と、拔身を持つた腕を引ッ捕へる。

五平　イヤ、退きやれ。

九郎　退いてゐなんし。

左七　イヽヤ、滅多に退かれない。大道中の段平もの、こんな中へ入るのが、血の氣の多い仕事師サ。先刻からの一部始終、かたがあつても跡のない、云つてみりやァこつぱ喧嘩、それに危ない拔身の眞中、合點で飛び込む鳶頭、互ひに堪忍、鐵棒の、火の用心より身の用心、お祭左七がこりやァ貰つた。じゆんはりと、手を拍つてくんなんし。

五平　イヤ〳〵、若い者、なんぼおぬしが云ふ事でも

左七　わしが仲人で料簡ならざア、喧嘩に枝が咲きやすぞえ。
佐五　モシ〳〵、お前がこゝにお出なすつちやァ惡い。マア〳〵、松本へござりませ。
五平　イヤ〳〵、ぶつた切つて仕舞ふ。
九郎　鮪の胴骨ぢやァあるめえし、ごたくをあけやァがんな。
五平　イヤ、おのれは
皆々　マア〳〵、ござりまし〳〵〳〵。

トわめく五平太を、佐五兵衛、東林、儀助、お巻つれて鳥居の内へ入る。

いと　どうなる事かと思つたら、癪が痛うなつたわいなア。
ずん　ほんに左七さん、大きにお世話でござりました。
左七　なにサ、おれも鳥飼からこの人を雇つて來て、いさくさがあつちやァ氣障だ。何か間違ひの筋と聞えるが、得て武さといふ奴は、不理窟を云ひたがるもの。イヤ、理窟といへば、あの子に話があるといふ事。コレ、ずんぎり、この蒸籠を、松本へ擔ぎ込んでくりやれ。
ずん　アイ〳〵、畏りました。
九郎　そんならわつちは行かねえでも。

左七　よいとも〳〵……アヽ、今日もまた友達めらが醉はにやアよいが。

　　　ト太神樂、鞠の曲の鳴り物にて、お祭左七さきに、ずん切、蒸籠をかつぎ、鳥居の内へ入る。お絲、
　　　あたりを見廻し

いと　兄さん、まだお前、心が直らんな。

九郎　そりや何を

いと　今も今とも、外聞が惡うてなるこつちやござんせん。

九郎　ハア、この風呂敷の事か。こりやアほんに拾つたよ。おれもてまへや女房のお時が事を思つて、
　　モウ〳〵いたぶりや、手慰みをさつぱり止めようと思へばこそ、本町へ夜番に賴まれ、大家衆の
　　お剩り酒を飮んで、たつた月に二貫五百、一年に四兩あまり、この夜番を三十年も辛抱すりやア
　　おぬしが身請をする程に、喜んで居やれ。

いと　何を、三十年藝者してたまるものかいなア。

九郎　イヤサ、さう云はねえものだ。おぬしもそれを樂みに、今おれに

いと　また無心でござんすかいなア。

九郎　イヤサ、さうぢやないが、おれも兄弟の間で言ひ憎い事だが、あの極樂水の相長屋の嬶アとねん

ごろして、からく亭主に見つかり、斬るの突くのと亂騷ぎ、やう〳〵お定りの七兩二分で濟ます筈だが、肝心のその金に行き詰り、據なく來た。それで無くつて、なんぼ妹だといつて、又も今日も、どの面さげて云はれるものだ。もう〳〵これに懲りぬ事はない程に、慈悲だ、情だ、兄一人救つてくりやれ。(ト泣く)。

いと　もうお前の、その猫撫聲や空涙に、懲りたものぢやないわいなア。

九郎　おぬしがこの金を貸してくれにやア、おれもでんど沙汰になつて、恥面かゝうより、いつそ天水桶へ身を投げて死ぬぞよ。

いと　アレ、又あんな事を。

九郎　それで死なれにやア、せつかいで腹を切らうか。いつその事に、手拭で首をくゝつて
　　　　ト手拭を出して首へ巻く。

いと　アヽ、もうよいわいなア。所詮さう云ひ出しては、只は去ぬまい。これなと持つてゆかしやんせ
　　　　ト後　簪を貳本拔いてやる。

九郎　こりやァ貳本で二兩か三兩、ばつたりに賣つたら、もうちつとにならうか。

いと　そんなこと云はずと、持つて行かしやんせ……イヤ、行かぬ内に聞かうと思つて居たが、アノお

前にもわたしにも、親達が下さんしたといふ、眞間の手古奈のお守、わたしや持つて居るが、お前はどうしなさんしたえ。

九郎　サア、あの手古奈の守は

ト云はんとする所へ、お卷出て來り

まき　モシ〳〵、お絲さん、ちよつて來て下さんせいなア。

いと　イエ〳〵、わたしやもう、あのお客で、松本へ行くことは否でござんす。

九郎　ハテ、さう云はずと、何も商賣、行きやれな。

まき　アレ、兄さんもあゝ云うてぢや。マア〳〵、ちよつと。

いと　アヽモウ、藝者には何がなるぞいなア。

ト辛氣な思ひ入れ。流行り唄になり、お絲とお卷、下座へ入る。

九郎　まづ妹めをせびつて、後ざし二本に有り附いた。……それにしても、この間鎧の渡で、醉どれの中間めが風呂敷包み、よい代物とちよろまかして、明けて見たれば破れ熨斗目、風呂敷ばかり貳百がものもあると持ち料にしたら、思ひがけない先刻の侍ひめが風呂敷ださうだ。危ない所を云ひ拔けた、運にまかして、よい仕事がありさうなものだが。

ト向うを見て思ひ入れして、下の方へ小がくれると、直に三味線入りの神樂、大拍子になり、向うより石塚彌三兵衞、ごましほの侍ひ、若殿、竹川お乳の人、腰元守を持ち、跡より本庄綱五郎、近習。菖蒲革の武士、草履取り付添ひ出て、直に舞臺へ來る。この內下座より五平太出迎ひ、平伏して

五平　これは〳〵若殿樣、今日は二軒茶屋へお立寄りとござりまするゆゑ、お先へ參つて松本へ、申し付けおきましてござります。

若殿　彌三兵衞は直樣別當へ立越え、右の仔細申し達すであらうな。

彌三　御意でござります。お家の寶、小倉の色紙、卽ちこれへ持參仕つたも(ト懷中より袱紗包みの箱を出し)姬君お輿入れ御婚禮の夜の床飾り、氏神にて祈念致すが御吉例ゆゑ、この段申し入れ、相賴みまするでござりませう。

五平　して、松本へ下さるゝお目錄は。

綱五　その儀は拙者申し付け、これへ所持致し居りまする。(ト小さな文箱を出す。)

五平　お途中の儀は一色私しおかゝり、後方までに、家來にお渡し下されい。

綱五　承知いたしました。

五平　然らば私しは、お入りの用意申し付けませう。

ト五平太下座へ入る。此うち下の方より九郎兵衞聞いて居て、下の方に蹲踞ひ居眠り居る中間の脇差を盗み入る。

乳人　若樣、お久し振りで富が岡への御參詣、お附きの衆も、さぞよい慰みでござりませう。

腰元　竹川さんのおつしやる通り、外珍らしい私しどもまで、見飽きませぬ春の景色、有り難うござりする。

綱五　何は兎もあれ、まづ御神前へ。

彌三　いざお入りあられませう。

ト唄になり、皆々下座へ入る、綱五郎つゞいて行かうとする所へ、九郎兵衞、今の脇差を差し、摑み手して出で來り

九郎　へイ〳〵、暫くお待ち下さりまし。

綱五　其方は。

九郎　私しは山住の中間、主人申し越しまするは、只今お約束の松本へ遣はさる、お目錄、あなたへ申して持つて參る樣にと、申し付けましてござりまする。へイ、私しは新參、お見知りないゆゑ。これを證據に持つて參れと、卽ち主人が名前の風呂敷。（ト懷中より出して見せる）。

綱五　ムウ、相違もあるまい。然らば其方に。（ト左の手に文箱を出さうとする）。

九郎　へイ／＼、慥かにわたくしが（ト取らうとする、その手を綱五郎しつかり捕へる）。アイタヽヽ、こりや何となされまする。

綱五　なんとするとは、こゝな紛れ者め。

九郎　ヤア。（ト恟り）。

綱五　中間小者が、主人の供に股引穿かうか。察するところ騙りの骨頂。

九郎　南無三しまつた。

ト振り切らうとする拍子に、九郎兵衞が利腕まくれる。綱五郎、腕の彫り物を見て

綱五　ヤア、小絲命の、この彫り物は

九郎　何を。

ト立廻りに振切り、九郎兵衞一散に向うへ逃げて入る。綱五郎跡を見送り

綱五　ハテ、油斷のならぬ。

ト袴の塵を拂ふ。佃の騷ぎになり、綱五郎、悠々と下座へ入る。右の鳴り物にてこの道具をぶん廻す。

本舞臺、正面一間の屋體、向う床の間、襖、上の方に一間の離れ座敷、障子をたて、この間鐵砲垣植込み、手水鉢、下の方に正面へ見せたる萱門、建仁寺垣、二軒茶屋松本と書いたる行燈好みの通り、爰に左七、濁酒を取り、ずん切と鳶の者酒を飲み居る。お蔦、松本の女房にて、酌をして居る。鳶の者、裸にて取組みゐる。右の鳴り物にて道具とまる。

左七　こいつは面白い。夏ならば泉水へ飛び込んで擲き合ひといふ所だが、一番とれ〳〵。

兩人　どつこいな〳〵。（トつかみ合ふ）。

ずん　それ〳〵、右の足が浮いた。左をさして、それ、殘つた〳〵。

權　よんやさ。（ト八を投げ出す）。

ずん　勝角力、足場野々々々。（ト給仕盆を團扇のやうにあげる）。

左七　待て〳〵。あいらがのは無手だから、喧嘩がましだ。いつそずんぎり、三人がゝりをとつて見せないか。

ずん　何をするも稽古の爲だ。一番とりますべい。（ト裸になる）。

三人　こいつは面白いやア。

ト權、八、源、かゝるを、ちよつと立廻つて、ずん切、三人を面白く投げる。

つた　勝角力、ずんぎり〳〵。
左七　こいつは身ぐるみ遣らにやァならない。（ト半纏や革羽織を投げて遣る）。
つた　東西々々、さるお方よりすんぎりに御祝儀下さる。
三人　どうでも商賣人には叶はない、いま〳〵しい。
ずん　こりやァ有り難い、半纏に革羽織ご　併しほんの常談ごにお氣の毒、お返し申しませう。
左七　なに、常談といつて、角力に遣つた物を取返されるものか。
ずん　そんならほんに下されまするか。
左七　そこが江戸ッ子だワ、初松魚を喰つたと思やァ濟むワ。
權　こりやァずん切、仕合せ者だ。伊勢久で貳兩通用の革羽織だ〳〵。
左七　外聞の悪い事を云ふな。質や八をおくものか。只入替へて來たばかりだ。
八　おきやァがれ……時にいま〳〵しい、おればかり釘も拾はない。
ずん　お前にはこの革羽織を
源　くれるか。
ずん　なにサ、大事だから預けて置きやす。また着て歸ると、友達に借りられるから、半纏ばかり貰つた

顔サ。

源　そんならおれが預つて、關取の内へ届けてやらう。

左七　權やおれも裸ぢや居られない。これで仲町へ行つて、古着でも買つて來てくれ。

（ト紙に包んだ金をやる。）

權　モシ、古着と　氣障だな。いつそこの金を祝儀にやつて、あの料理番の松が布子でも、借りてあげやせう。

左七　そんならさうしてくりや。

つた　それまでもお寒うござりませう。ゆき丈の揃はぬ假り着より、これなと引掛けておいでなさんせいなア。（ト襖の内より夜着を持つて來て着せる）。

左七　おきやァがれ、とんだ辻法印だ。

八　オヽ、角力をとつて寒くなつた。

つた　風呂が沸いて居る、お入りなさんせ。

源　そんなら行つて溫まりやせうか。

ずん　左七さん、有り難うござります。

左七　ハヽヽヽ、とんだお帳につく奴サ。

　　卜佃になり、ずん切と三人、着物を抱へて奥へ入る。

いと　（奥にて）又かいなア、もうく云うて下さんすな。

　　トこれにて左七、上の方へ來る。お蔦、衝立を仕切りにする內、合ひ方になり、奥よりお絲、びんしやんして出て來るを、佐五兵衞、東林、宥めながら附いて出て

東林　これサ、お絲さん、番頭の心意氣が、肉桂薄荷ではあるまいし、さうツンとする事はないわな。

佐五　それサ、よくく思へばこそ、堀留から度々の迎ひ船、今日は出番、今日は懸取りと、いろいろと名を附けて、口說いてもく、さう慘くはしないものだによ。

いと　佐五兵衞さん、藝者といへばいふものゝ、取るに足らぬ小僧のわたし、とやかう云うて下さんすは、嬉しうござんすけれど

佐五　へヽヽヽ、小僧もすさまじい。提灯小僧か、屋根小僧か、どうで化されるは知れて居る、古狸の革羽織。

東林　否だといふは、外にちんくの色があるな。

いと　イヽエ、ちつと古いが、色と土用干しぢやわいなア。

佐五　イヤ、そりや嘘だ。今深川で、一といつて二のない藝者のお絲が

つた　色男の無いは、そりやわたしが證人ぢやわいなア。(ト衝立のかげより出る。)

東林　オヽ、こりやお蔦さん、さういふお前も一つ穴の

つた　イエ〳〵、狐でない事は稻荷樣も見とほし。マア、今のお絲さん、古鐵買ひに見せても、色がないとは思はねど、そこがござんせん。主の色は、たゞ酒と、人に物が遣り好き。

佐五　道理で內證は火の車、酒が好きなら、新川新堀伯父樣に持つて、物が遣り好きなら、大身の槍でも管槍でも、お望み次第。色なしと聞いちやア猶の事、これサお絲……お絲坊。

ト摺寄つて、手を取らうとする。

いと　アレ、又かいなア。思ひきりのわるい。(ト振り放す)。

佐五　ムウ、おれも本町筋で一軒の支配人、恥をかゝしてもよいか。……アノ、どうでも。

トこの內、後へ五平太、儀助、金六出て來り

金六　否ならお絲さん、わたしが方の方を附けて下さりまし。

佐五　オヽ、こりやア神原屋の金六、儀助、五平太さん。

五平　おれも共々取り持つて、よい身にしようと思つても、お絲が得心せにやア、義理も絲瓜も無いか

ら、この手合ひも

金六　ひどく催促と出かけるのサ。サア、どうして下さるな。

ト　お絲、金六をヂロリと見て思ひ入れ。

儀助　モシ、何もさうお前、落着いて居ては悪い。私も廻しをしてゐる。何とやらも釣り方、爲になるお客、佐五兵衞さんゆゑ、昨夜も中内の二階で、耳へ章魚のいるほど言つたぢやァござりやせんか。今時お前の様な

いと　アイ、儀助どん、わたしや慾を知らぬ藝者ぢやわいなア。

儀助　なんの事たな。人をはぐらかすやうな。さう立派な藝者衆なら、この間玉松の船頭に立替へた祝儀と、粂本の女どもに遣つた前垂れの立替、四兩貳分、返しておいて口を利くがいゝ。

金六　それサ、この神原屋の手代金六も、質の捨て利から、種なしの貸小間物屋の受合ひ、金高は覺えてござんせう。儀助がのも、おれがのも

儀助　たつた今、方を附けて、大風を云ひなせえ。

いと　サア、その金は

東林　無いのかえ。

五平　無くば佐五兵衞に得心して、方々の仕埒をつけるがよいではないか。名を取らうより、とつくりと思案をしやれ。

ト　お絲思ひ入れ。

左七　お蔦さん〳〵。

つた　アイ〳〵。（ト左七の側へ行く）。

左七　彼處のいさくさア何だえ。

つた　サア、何ぢややら。

左七　ちよつと聞いた所が貸借り、可哀さうに藝者一人を、口を出したくつても、ちやんころ無し。エエ、錢のないは、首の無いより劣つたものだ。

つた　ほんに儘にならぬ世の中。マア〳〵、一ツおあがりなさんせいなア。（ト酒をつぐ）。

五平　コレ、佐五兵衞、それ、こゝが金。

佐五　ハテ、ようござります。金六どん、その金を。

ト　金六が首にかけてゐる貳百兩の財布を渡す。

コレお絲、それ、拂つてしまやれ。


尾上松助
澤村田之助
豊国画
豊国画

いと　拂へとはえ。

佐五　ちよつとしても貳百兩。得心さへすれば直に身請、借金拂つて苦界を遁れ、心にかゝる雲もなく榮耀をしないか。

いと　イヽエ、否でござんす。

佐五　エ。

いと　サア、因果な事で、わたしや藝者の苦みが、好きぢやわいなア。

東林　あゝ逆上が強くては、ぶし人參でもとゞかぬワ。

儀助　それ〳〵、何時まで云つても出來ぬ金。

金六　頭の物からしかけまで、云やァみんなおれが物。

東林　恥面かゝすがつれない見せしめ。

五平　可愛さ餘つて憎さが百倍。

金六
儀助　いつそ爰でふん剝ぐよ。

ト立ちかゝる、お蔦中へ入り

つた　モシ、金六さんは金六さんとも思はうが、平常恩になる廻しの身で、ちつとは料簡もありさうな

もの。

儀助 イエ〳〵、こんな子に達引をするはきつい損。

金六 それ〳〵、お前口をきくからは、金でも立替へる氣かえ。

つた サア、わたしぢやというて。

兩人 出來ざア退いて居なせえ。

つた サア。（ト思ひ入れ）。

左七 お蔦さん〳〵。

つた アイ〳〵。（トこちらへ來る）。

左七 金のないのは忌々しいの。

つた アイ、わたしも口惜しうごさんすわいなア。

五平 みす〳〵ぶらつく金を取らずに

東林 石を抱いて川へ入るとはこの事。

佐五
東林 ハテ、馬鹿な女もあればあるものだ。

いと 言葉の強みや金づくで、藝者が自由になるものと、思うて居る番頭さん、野暮にも餘つほど間の

ある、こけの清水で洗ひあげ、粋になつて口說かしやんせ。名さへ苦界と覺悟して、身は三味線のどうなろと、意地を立てるが藝者の表、頭の飾り此しかけも、欲しくば持つて行かしやんせ。藁で結うてもわたしはわたし、心を飾つてゐるわいなァ。(ト差して居る櫛笄を拔いて投げつける)。

金六　さう云やァいつそ

ト立ちかゝり、お絲の着物や帶をひつ剝ぎ、長襦袢一つにする。

東林　ハヽヽヽ、それが名うての藝者の形か。

四人　ハテ、よい態の。

トこれより三味線入りの靜かな神樂になり、この時、左七見兼ねたる思ひ入れ。着て居る夜着を脫いで後よりお絲に着せる。お絲見て

いと　エヽ、お前は先刻の

左七　わしかえ……わしやァお祭左七といふお先もの。先刻から聞いて居て、足は飛出す、手はむづむづ、口を出したいにも、こなさんが女だけ、どうやら味に思はれうと、飛び出す蟲を堪へて居たが、あんまりな猿松めら。サア、此しかけは左七さんが、お着せ申した晴着だが、ひつ剝いで見ねえか。それこそ忽ち劍の舞、出刃庖丁をまはし夜着、ほんに蒲團のうらみな奴等だ。

ト向う鉢巻、あげ足で胡座かくと、皆々氣味わるき思ひ入れ。

いと　左七さん、嬉しうござんす。お前は知らしやんすまいが、その男氣と嫌味のないが、わたしやとうから……ほんに色があつたなら、否な男に口説かれもせまいに……なア、左七さん。

ト思ひ入れ。

左七　それほど欲しかア、千本杉で拵へるがよい。とんだ地形だ。

いと　アレ、又焦れつたい事ばつかり。

左七　何が焦れつたいよ。

いと　サア、お前が寒からうと思うて。

左七　なにサ、裸はでんぼうの當り前、土仕事にでもかゝりやア、寒の中でも眞ツ裸、喧嘩と酒盛は身輕がいゝのサ。

つた　イエ〳〵、中直りに山へ來て、風引いたといはれてはすまん。ドレ、着る物を……取つてくるまでも、ナウ、お絲さんも、どうやら左七さんに……こりやいつそ、あの夜着の端を半分借りて、入つて居さんしたら、どうぢやえ。

左七　そんならあの夜着を、二人で着ろといふのか。

つた入りごみの錢湯、着るもの丶來るまで、孫店に居なさんせいなァ。
東林　コレ〳〵、そりやァあんまりだ。爰に惚れてゐる番頭も、この東林も見る前で
儀助　それ〳〵、藝者と俠ひとつ眞ツ裸。
三人　一つ夜着とは
左七　小胸が惡いか。……おれは人の忌がる事が、きつい好きだ。そんならお蔦さん、あの中へ入るによ。
左七　冷え物でござい、御免なせえ。（トお絲が着て居る夜着の中へ入る）。
いと　そりやもう、嬉しいわいなァ。
五平　エヽ、いま〳〵しいわえ〳〵。こりやァもういつそ、ぶちまけて武士の意地づく、刀にかけて。（ト氣をもみ、立ちかゝらうとする）。
佐五　これは五平太さん、急いては事を仕損ずる。殊に向うはお先眞闇の俠ひ、何事も惚れて居るこの佐五兵衞さへ、ぢつと辛抱するほどにナ、お前も氣を揉ますと、マァ〳〵、細工は流々、仕上げを見てござりませ。
五平　イヤ〳〵、根ツから仕上げが出來榮せぬ。角を矯すノ〳〵と、牛を殺すやうなもの。

東林　それ〳〵、こりやアどうやらかうやら、お絲左七は

金六
儀助　ほんの色に。

左七　なれ〳〵、こいつは面白いわえ。お絲さん。ぢやアない、これからお絲、色だぞ〳〵。

いと　ナイ〳〵。眞の色は、マア斯う煙草つけてあげようかいなア。

ト夜着の片袖より手を出し、煙草つけて出す。左七こちらの片袖より手を出し、取つてのむ。

五平　アレ〳〵、あの煙草ののみざまわえ、比翼鳥なら見世物にでもなるが

儀助　いま〳〵しい、見る目、嗅ぐ鼻といふざまだ。

左七　オヽ、人の見る目や嗅ぐ鼻で、斯うして見せるが俠ひの色だワ。

いと　その詞を違へぬ杯、飲んで下さんすか。

左七　味な事から意氣張りに、ついした事の云ひがかり、いつそのくされに

つた　左七お絲と色の名披露目、わたしが仲人せうわいなア。

トつぐ。お絲飲んで、左七にやる、左七も飲む。

三人　佐五兵衛さん、あれを見てはお前

五平　もう料簡がならぬ〳〵。胸が燃えて、身が裂けて、頭で痺れがきれて、足の裏で頭痛がする。佐

五兵衞、こりやどうせう〳〵。

佐五　ハテ、こゝが辛抱所だわな。

五平　ぢやといつて、これがマアどう

左七　云ひ分いやア誰でも相手だ、サアお絲

いと　左七さん、眞實ぢやぞえ。

四人　そんならどうでも、爰で二人が

左七　近う寄つて、御縁を結ばれませう。

ト唄になり、お蔦屏風を引廻し、皆々氣を揉むた笑ひ

つた　ホヽヽ、逢ふは否なり思ふはならずとは、そりや昔の事……どなたもゆつくり氣を揉みなさんせ。

五平　コレ、佐五兵衞、折角心を盡して、おぬしに頼んだ事も水の泡。

ト合ひ方になり、お蔦奥へ入る。

佐五　まんまと無駄骨、御苦勞千萬。

東林　ヤア、そんならアノ番衆が、惚れて居ると思つたお絲には

五平　誠は身共ぢや。その譯は斯うぢやて。（ト皆々を花道の方へ連れて來り）一體あのお絲には首たけなれど、身共では得心せぬ面魂ゆゑ、絲屋の番頭、店者で食ひつかせ、うんとさへ云つたら直に身請、ハテ、此方へ引取つてさへしまへば、本尊は身共ぢやといふうて、本望遂げうと思うたれど、それでも行かねば、もう自棄ぢや。是でも非でも身請する。金六、約束の貳百兩、持つて來たか。

金六　そりやァ如才なく、佐五兵衛も、おれが持つて來た貳百兩を、玉に使つてやりかけたれど、行きません。これ貳百兩。して、質の代物はえ。

五平　こりや世にも稀なる小倉の色紙、必ず粗末にする事はならぬぞ。（ト懷中より出して渡す）

金六　斯ういふ物を質にとるには、一札を入れにやァならぬと、お約束致しましたが、書付をしておいでなされましたか。

五平　オヽサ、此方所持の小倉の色紙、貳百兩の質物に入れ、外より異論ないといふ文言の一札、即ち身共が手跡。（ト出して見せる）

金六　成る程、これでようござりまするが、肝心の判が

五平　南無三、生憎印形を持参せぬ。コリヤ、あとから遣らう。マア、約束の貳百兩を

金六　左樣なら早く遣はされまし。

ト色紙を取り、貳百兩を渡す。金六、今の一札を紙入へしまひ、五平太金を戴き

五平　忝ない。これでお縁めが身請を

儀助　それでは五平太さんはいゝが、つまらねえは番頭さん、的もなくつて深川へ來たのかえ。

佐五　ハテ、盜人の晝寢も、五平太樣との目算。後家持ちの絲屋を幸ひ、出入屋敷から、しこしらへをして、身上を取るは易けれど、娘のお房を女房にするが、ちと行きにくいで氣を揉むのよ。

東林　ハヽア、そんならあの娘のお房に、貴樣が

佐五　イヤモウ、惚れたとこそいへ〳〵、首ツ丈の上を五六尺はまつてゐれど、どうもいかぬ。東林老、こなたの配劑で

東林　出來るとも〳〵、圍ひ者や緣談、色事の取り持ちで、過ぎて行く愚老。出來ぬ色をこしらへる工夫も、疾うから致してあるて。

佐五　そりやアどういふ工夫だ。

東林　ハテ、手もない事、毒を盛るのサ。

皆々　ナニ、毒を。

東林　イヤサ、氣の毒だから工夫はしてやらうが、マア〳〵、それは後の事。
佐五　成る程、ゆつくり。して、あの彌三兵衞めを失策らすは
五平　そりや斯う。（ト囁く）。
佐五　合點でござります。それならわしやァ奥へいつて、その事にかゝりませう。サア、東林老
東林　色の工夫か。ハテ性急な。
佐五　ハテ、善は急げだわな。
ト合ひ方になり、佐五兵衞、東林、奥へ入る。
五平　マア、あれはあれでいゝが、いま〳〵しいはお絲左七め。
儀助　傍に人も無い樣に、目の前で床入り。
金六　どうぞ仕樣はござりませんか。
五平　今日若殿のお立寄こそ幸ひ、借切りの座敷、無禮者と云ひ立て、ソレ、二人を引摺り出せ。
金六
儀助　合點でござります。サア、お絲左七、出やァがれ。
ト兩人屛風の内へかゝる。内より見事に投出される。五平太「うぬ」と屛風を引退け、立かゝらうとする。内に綱五郎立派に坐り、煙草盆を控へゐる。皆々見て愕り

儀助
金六　ヤア、お絲と思ひの外

五平　こなたは

綱五　本庄綱五郎でござる。殿の御供、暫しが内休息の別間へ、五平太どの、こりや何故の狼藉。

五平　イヤサ、これは

綱五　貴殿は貴殿とも思はうが、不届きなは町人ども。物をも云はず武士の胸倉、無禮の見せしめ。それで懲りずば、目に物見せうか。

ト刀を持ち、立上る。

儀助
金六　アヽ、御免なされまし〳〵。

ト儀助、金六、うろたへ逃げて奥へ入る。

綱五　おのれ、その分に致しおかうか。

ト立あがる。この時下座にて

竹川　サア〳〵、お越しあられませう。

五平　アレ、若殿のお立さうな。ソレ、綱五郎どの。

綱五　ハツ。

ト下に居るうち、合ひ方になり、若殿先に竹川、腰元兩人、彌三兵衛附いて出て來り

これは若殿樣には、最早お立でござりまするか。

彌三　この二軒茶屋へお立寄りは、殊ない御意に入つて

竹川　御機嫌うるはしけれど、長居は却つて恐れあれば、お立をお勸め申しましてござりまする。サ
ア、何れも樣。

綱五　若殿樣のお立ち。

トこの内奥より佐五兵衛、袴羽織にて　おづ／＼出て

佐五　イヤ。恐れながら、暫くお待ち下さりませ。

綱五　そちやお出入、本町絲屋の手代

佐五　佐五兵衛と申しまする者。後家持ゆゑ、主の名代に、お願ひにあがりましてござりまする。譯と申しまするは、この度若殿樣へ奥樣お輿入につきまして、お簾まはりその外、絲物一式の御用仰せ付けられましたる外に、御代々御吉例とござりまして、お家の寶、定家の色紙の表具方も仰せ付けられ、お好みに任せ、天地はいもり切、中雲に鶴の緞子、風體一文字大和錦まで、御註文の通り揃ひましたるゆゑ、早速仕立てしまふせうと、度々石塚彌三兵衛樣まで

彌三　ヤイ〱、佐五兵衛、その儀はこの程も書中を以て申し遣はした通り

佐五　サア、まだ急がいでもよいと、お斷りではござりまするが、只今の下仕立てませねば、よい職人が

彌三　まだ申すか。その儀ならば、身が宅へ參つて懸合へサ。

五平　イヤ〱、彌三兵衛どの、お上にも先達てより、お急ぎなさるゝ色紙の仕立、なぜ又延引めさるゝな。

彌三　イヤサ、それは

五平　但し色紙が、何とぞして延しめさるか。

綱五　イヤ〱、大切なる殿の御重寶、預る人は彌三兵衛どの、その寶が何と致さう。仕立を急ぐも延引も、預り主の心次第、貴公が裁判めさるゝは、そりや役目違ひ。

五平　イヤ、さうでござらぬ。もし凶事あらばお家の恥辱、幸ひ今日持參めされたこそよき折柄、立合の上、佐五兵衛へお渡しなされ。

彌三　サ、それは

佐五　但し紛失でも致しましたかな。

彌三　サア
兩人　サア／＼／＼
佐五　早く色紙をお渡しなされい。
彌三　いかにも渡さう。（ト色紙の箱をそこへ出し、思ひ入れあつて）綱五郎、介錯頼む。
　　ト腹切らうとする、綱五郎びつくりして
綱五　ヤ、こりや何故の生害。（ト止める）。
彌三　イヤサ、預りの色紙を見やれサ。
　　ト綱五郎止めながら、色紙の箱を明ける、内より願書出るを披き
綱五　「願ひ奉り候ふ口上の覺……一、私儀御預りの小倉の色紙、去る極月改め候ふ節紛失仕り候ふにつき、早速詮索仕り罷在候ふ、もし急御用の節申譯立ち難く候ふ間、其砌は武道の掟是非なく切腹仕り候ふ、死後の御詮索偏に願上げ奉り候ふ、以上。月日。石塚彌三兵衛……ヤヤ、すりや、色紙は疾くより
皆々　紛失とな。
　　ト皆々思ひ入れ。佐五兵衛、五平太は顏を見合せ、舌を出す。

彌三　サア、先達て色紙の仕立、御内意あると其儘改め見れば、何者が盜み取りしか、封も包みも其儘に色紙紛失、すぐさまお屆け申し、切腹とは存ぜしが、人も知つたるお家の寶、この事世上へ流布あつては、殿の御恥辱、精力を盡してなりと、出るものなら詮議して、お家のお名を出すまいと紛失のその日より心は早鐘、一夜さも工夫に寐た夜はござらぬわいの。左程に致す今日までも、手掛り知れず。御前に於て露顯致す仕儀となつたは自業自得、申し譯は兼ての覺悟。……アヽ、これにつけても一人の悴左七、幼少の時、御前に於いて無禮、打捨ておかれず勘當なしたを、懇意の町人、安濃屋十兵衞が引取り、世話致しくれたれど、不所存にて、あらぬ身持と聞いたれど、かゝる時節に、せめて手許に居つたなら……これとても返らぬ繰り言。綱五郎、介錯頼む。

ト此うち上の障子をあけ、左七見てゐて、この時出ようとして、彌三兵衞綱五郎と顏見合せる。

綱五　イヤサ、悴同前のこの綱五郎、貴殿の御恩を受けたりし、遁れぬ拙者が付添ひ居れば、氣遣ひな事はない程に、ナ……物いうては惡い、何事も

ト呑み込ます。これにて左七障子しめる。

ヤア、そちや悴。

彌三兵衞どのゝ身の凶事はさせぬ程に、ナ、合點か。

五平　イヤ、合點がゆかぬ。みす〳〵科きはまつた彌三兵衛をお身が

綱五　イヤ、この科人は拙者でござる

五平　なんと。

綱五　サア、元來この色紙は、先だつて內見の儀を彌三兵衛どのへ、達て賴めど承引なきゆゑ、虫干に小者を賴み、拜見せんと取寄する途中に於て、盜まれしと聞きて仰天致せしかど、我が身の罪を隱さんと、箱は其まゝ返せしが、今彌三兵衛どのゝこの越度を、なんと餘所に見られませう。重重厚きこの身の罪、明して切腹。（ト腹切らうとする。）

彌三　イヤ〳〵、跡方もない、そりや僞り。科人は矢張り身共。

ト刀に手をかけるを

綱五　ハテサテ、申さば拙者はお側役、貴殿は何人、生先ある若殿のお守役、ことにこの節御本家の、お跡目になるべき御沙汰といひ、お側には肌ゆるされぬ（ト五平太へ思ひ入れして）イヤサ、心おかるゝ家中の方々、御成人まで守護なされずば、忠義の道が立ちますまい。寶が重いか、殿が重いか、この儀をとくと御勘辨。

彌三　ウム、いかさま。

綱五　御合點ならば御介錯。（ト腹切らうとする。）
光若　ソレ、止めい。
竹川　御意ぢや。綱五郎どの、お待ちなされい。
綱五　ハツ。（ト平伏する。）
光若　家の寶は寶とせず、たゞ仁を以て寶とすとは書經の教へ。生害には及ばぬ。されど科ある綱五郎、竹川よきに申し付けい。
竹川　ハテ、流石は私しがお育て申した和子樣。オヽ、お出かし遊ばしました。……心ありけな科人の綱五郎どのは、途中より追放、彌三兵衛どのは、暫く遠慮と殿樣の御意。
彌三　すりや、この身は遠慮
綱五　拙者はこのまゝ御追放
兩人　エヽ、有り難うござりまする。
五平　寶の科人、閉門に追放とは
佐五　思ひの外な科の安賣り、何のいらざる罪を被つて、これがほんの蓼喰ふ蟲、阿呆拂ひのお定り。ドレ、その大小を

ト綱五郎が兩腰をとりにかゝるを

綱五　こりや何と致す。

佐五　ハテ、御追放なら、その二腰を

綱五　わりや取上げる役人か。

佐五　ヤア

トぎよつとするを、直に取つて投げ、起きる所を杯臺にて打据ゑ

綱五　こゝな素町人めが。お急ぎもなき色紙の仕立、途中へ押して願ひに出たは、こりや何か深いたくみ。(ト五平太を尻目にかけて)とくと糺す奴なれど、場所といひ此身の越度、今日は赦し遣はす。以後も差出て無禮をなすと、打放すぞ。

ト突放す。佐五兵衛しよげる。綱五郎思ひ入れあつて、兩腰を竹川が前へ直し

綱五　御家風通り、イザ、お取上げ下されませう。

竹川　いかにも、この二腰は彌三兵衛どの、お預りなされ。

彌三　ハア。(ト受取り)この二腰を預りの上は、綱五郎、腰が明いて何とも氣の毒。身が兩腰はこの場の寸志、浪人の表道具。(ト手前の二腰を拔いて綱五郎にやる。)

綱五　お志、しかと拜借。（ト取つて差す。）
腰元　最早程なう日も黄昏、若殿樣にも、お立の伺ひ。
光若　いかにも竹川、供觸れいたせ。
竹川　とくより申し觸れました。イザ
ト皆々立あがり
彌三　然らば綱五郎、暫しは汚名に忍ぶとも、義心の惠み、いつか晴れ
綱五　寶を詮議いたすなら
竹川　その時歸參は
光若　身が許す。
綱五　エヽ、有り難うござります。
五平　若殿のお立ち。
ト唄になり、若殿先きに竹川、腰元、彌三兵衞、五平太心を殘して附いて、向うへ入る。奧より東林出て來り
東林　番衆、五平太どのと云ひ合せは

佐五　コレサ、滅多な口をたゝくまい。（ト立上らうとして）アイタヽヽヽ。

東林　どうした〳〵。

佐五　どうした所か、あの侍ひめに、とんだ目にあつた。これからは死にくちだ。必ず止めまいぞ〳〵。

東林　ハテ、止めはしないに、それは何を云ふのぢや。

佐五　イヤ〳〵、こなたが料簡しろといつてもならない。コレサ、止めまい、一番達引をせねばならない。

トカみながら、東林を引ッ張つて花道の方へ行く。

東林　これサ、譯も知れねえ氣違ひのやうな男だ。

佐五　イヤ〳〵、男がぶたれては濟まない〳〵。止めるな〳〵、放してくれ〳〵。

ト通り神樂、鳥追の合ひ方にて、佐五兵衛捨てぜりふ、喚きながら東林を引つ張つて向うへ入る。ト障子の内より左七、お絲、衣裳を着替へ、出て來り

左七　委細の譯は、あれで殘らず承りましたが、綱五郎樣、お目にかゝるも面目ない左七がこの形。

いと　何やら譯は存じませねど、今お出でなさんしたお年寄は、左七さんの親御さんとやら。

左七　切腹の、腹切るのと聞いても、勘當の身の出るにも出られず、兎角する内、氣遣ひするなと謎

お詞。どうなる事と惣身に汗。

いと　辛氣な思ひ、あの一間で聞けば、親御の身の科を

綱五　引受けた仔細、幼少の時ゆゑ、左七どのの御身は御存じあるまいが、もと身が親人は、赤城家でもずんど輕い足輕。彌三兵衛どの、取立にて、重役にも肩を並ぶる立身。身共とてもその引きで押しも押されぬ御近習役。その大恩ある御親父、殊にお家に於て、なければならぬ古老の忠臣、なんと罪におとされう。此身の恩と、若殿のお爲を存じ、科を引請け、身を捨てたも、俗にいふ大を助ける小の蟲。お腹は立てられな、御親父彌三兵衛どのには、似ても似つかぬ最前のしだら折よく身共が居合せたりやこそ、貴殿も先程、すでに五平太が手籠のしだら、殿の御前の沙汰にならねば、その身ばかりか、親御の面皮。たゞ假初めの色情に、バツとしすぎた床の内、派手な浮名は立てぬものぢや。

左七　左七を左七と思へばこそ、有り難いその御意見。ふとした事の達引から、思ひがけない云ひ約束。

いと　互ひに心を明し合ひ、假初めならぬ夫婦の固め。

綱五　すりや塵未來離れぬ氣か。

いと　三味線冥利

左七　今は俠ひの意氣地をかけて
綱五　出かした。この緣、親が許す。
いと　エヽ、親御さんが
左七　許すとは。

ト合ひ方變つて

綱五　この二腰は御親父の魂、勘當こそ叶はずとも、左程かためた緣ならば、この親も得心と、この刀は此彌三兵衞どのが、取り持たるゝも紛失の、色紙の在所を共々に。
いと　多くの客に附きあふわたし、藝子で居るも詮議の手蔓。
左七　身にかゝつたる左七めも、せめてあなたのお力に、なるも矢ツ張り親の爲。
綱五　夫婦和合は色紙も戻り、圓く治まるめでたい吉左右。
左七　お知らせ申す爲でもござれば、これより何處に落着きなされまするか。
いと　お宿をちよつとわたしらに。
綱五　今日只今浪人の、何處をそれと定めなき、しるべを求むるそれまでは、靑天井に土疊、天地の間は殘らず住家。（トほろりと思ひ入れ。）

左七　アヽ、その御難儀は親人が、致さにやならぬ世の義理で
いと　忠義とやらで淺ましい
綱五　これも憂世の七轉び、八起きと申せば、いつか又
左七　元の御身に、それまでの
いと　忍びぐらしをどうぞマア
綱五　所は後よりお知らせ申さう。
左七　とは云へ、思へば
いと　お痛はしい。
綱五　ハテ……降らぬ内に、お暇申さう。

ト唄になり、綱五郎向うへ入る。すぐに奥よりお蔦、銚子杯を持つて出て來り

つた　お絲さん、左七さん、今奥で聞いて居れば、綱五郎さんとやらが、親御さんに成り替り
左七　二人をほんの夫婦だと、許してくれたは忝いが
いと　氣の毒なは、あのお方のお身。
つた　ハテマア、それもどうぞなりさうな事。マア／＼、お前方二人は、めでたい女夫の杯。

左七　それもさうかえ。そんならお蔦さん

つた　仲人はわたしぢやぞえ。

ト酒をつがうとする所へ

儀助　ヤ、その杯はおれがさせぬ。

ト飛んで出て杯を取りにかゝるを

左七　わりやア廻しの儀助、なぜこの邪魔を

儀助　五平太さんのお頼みゆゑ。

左七　ナニ、五平太が

儀助　サア、祝言と聞き、氣が悪さ、女房呼んだらひいやりと

トかゝるを突退け

つた　水祝ひより

いと　祝儀の石打ち。

左七　腰骨四五十、祝つてくれべい。（ト踏みのめす）

儀助　ところをおれが、悪態入れて

兩人 ト又かゝるを、左七銚子にて、儀助が頭を割る。

左七 ハテ、命冥加な猿松め（ト隔てる）。

兩人 アヽモシ、それは。

ト銚子を振上げる。儀助へたばる。お蔦お絲、左七をとめる。よろしく拍子 幕

時の鐘、だらにて引返す。

本舞臺、向う一面の笹藪、雪たつぷり積る。竹しなへてある。爰に九郎兵衛、雪の積つた俵蓙をかぶり、頬冠りにて立つて居る。お君、以前の形、跣足にて、うろ〳〵して居る。時の鐘にて幕あく。

きみ 伯父さま、わしが内へは何方へ行きます。

九郎 われが内は何處だ。

きみ 何處ぢややら知りません。

九郎 滅法界な。わりや迷子だな。

きみ イエ〳〵、内へ去ぬと叱られるが怖さ、歸らずにゐたれど、寒うてなりませぬ。

九郎 さうであらう。去年から斯う雪の降る事もないものだ。可哀さうに、送つてやらうが、迷子札で

も無いか。（トお君が腰を探る）。

きみ　アヽ、その守は、大事の金ぢやわいな。

九郎　ナニ金だ

きみ　アイ、小判といふ物。誰にも遣るなと、伯母さんの言うてゞあつた。（ト行かうとする）。

九郎　コリヤ、こゝへ來い。

ト凄き合ひ方、時の鐘、無理に捕へ、腰の守を取らうとする。

きみ　あれい／＼。

ト逃げようとする。立廻りの内に、お君、九郎兵衞が擧を摑む。

九郎　アイタ／＼、途方もないませた餓鬼だ。

ト守を取らうと帶を解く、お君怖がり、駈出す。立廻りにこの帶、首へまとひ、引張るはずみにお君、ムント死ぬる。九郎兵衞恟りして

九郎　ヤア、こりや死んださうな……なれども金を（ト守をあけて、中より小判壹兩出し、見て恟り）こりやア

九郎　たつた壹兩、南無妙法蓮陀佛。とんだ殺生させをつた。

ト守をそこへ捨てゝ、死骸を溝堀へ蹴込むうち、向うにて人音するゆゑ、下の藪蔭へ入る。バタ／＼

にて向うより五平太、頰被り、儀助頰へ紙をあてゝ鉢卷をしめ、駈け出て來る。雪頻りに降る。

五平　コレ〳〵、儀助、して、あのお絲めは、いよ〳〵左七に

儀助　あの綱五郎めが策略で、女房の祝言のと、吐すが小胸が惡さ。邪魔に入つて飛んだ目に逢ひました

五平　そりやア捨てゝは置かれない。早く親方へ、身請の金を渡してくれろ。(ト最前の財布より百五十兩出して)ソレ、百五十兩。これでよい樣に、跡の五十兩は引取つた上の入用。(ト財布の紐をしめる。)

儀助　合點でござりますが、あの左七めが、まだわしを追ひかけて、言ひ分でも云ふ素振であつた。道を替へて行きませう。

五平　すりや、あの野郎めが

儀助　わしが仕返し、頼みます。

五平　あの野郎は、暗闇でも見違へぬ目印の半纏。(ト目釘を濕す)。

儀助　それにしてもこの雪、笠でも持つてくれればよかつた。(トそこらを見て)こりやアおつな物が落ちてある。これでも被つて行かう。

トそこへお君がおきし編笠を取つてかぶるうち、向うより鳥追婆お六、きよろ〳〵出て來る。

ろく　いま／＼しい、あの餓鬼め、何處へうせたか。（ト舞臺へ來り）モシ／＼、爰らで鳥追の餓鬼めはお見かけなされませぬかえ。（ト儀助が編笠を見て）ヤア、この編笠は、あの餓鬼めが編笠。

儀助　ヤアなんと。

ろく　こなたが知つて居よう。サア、出した。

儀助　箆棒め、おれが知るものか。そんな事にかゝつちやアゐられない。（ト振り切り行かうとする。）

ろく　イヽヤ、お君を返した／＼。

儀助　知らないといふに、退きやアがれ。附くな／＼。

ト振切り、下座へ入る。

ろく　あれサ、おくんなさんやしな。大勢ぢやアござりやせん、たつた一人の子だアなア。

ト追ひかけ入るうち、バタ／＼にて向うよりずん切、左七に貰つた着物、半纏を着て、大黒傘、中開きにて駈けて出てくる。

五平　左七め、覺えたか。

トぶつかける。立廻りにずん切が鼻をそぐ。

ずん　間違ひだ／＼……左七ぢやアねい／＼。

ト利腕を捕へ、云ひ譯しても分らぬ思ひ入れ。この時五平太、今の財布を雪の中へ落し、兩人摑み合ひ、下座へ入る。ト遠くにて迷子の鉦太鼓、しんとした合ひ方になり、向うよりお時、やつし世話女房にて、粂本の番傘、十九文下駄、小提灯を、提げ出て來る。

とき　こちの人九郎兵衛どのは、今日は深川へと聞き、叶はぬ用ゆゑ、粂本へ行つて、妹子のお絲さんに聞けば、疾うに歸らしやんしたとの事。二人が中に無ければならぬ金を、急いで才覺か……また因果に降る雪ではあるぞ。

ト此うち下座より五平太引き返し、きよろ〳〵出て來り

五平　エヽ、いま〳〵しい、左七だと思つたら、ずんぎりめ、飛んだ所で大事の金財布を落した。

トそこらを尋ねるうち、お時舞臺へ來る。五平太、お時が提灯を引つたくり、そこらを尋ねる。

とき　滅相な、人の提灯を

五平　イヤ、金を落した、ちつと借りよう。

とき　ナニ金を（ト提灯とつてそこらを見る）。

五平　ヤア、拾ふとは太い女め。

ト引たくるはずみに提灯消えて暗がりの思ひ入れ。兩人、突退け〳〵尋ねる、此うち後の藪を押分けて

九郎兵衛出て、五平太をとつて投げ、これも尋ねる。これより三人の立廻り。雪を蹴散らし、しなへて居る竹にひつかゝり、財布上へ上る。三人はこれを知らずに立廻りのうち、九郎兵衛が股間へ首を入れ、上へあげる。九郎兵衛思はず竹に手をかける。これにてお時の鼻の先へ財布ぶらりと下がる。お時、探つて見て、

とき　ヤア、こりや金財布。

九郎　さういふ聲は女房か。

とき　こちの人。

五平　それを

ト九郎兵衛飛び下りて、五平太に以前の俵をかぶせる。お時、財布を戴き、思ひ入れ、よろしく、見得にて、拍子

幕

二幕目　本町絲屋の場

役名　半時九郎兵衞。本庄綱五郎。山住五平太。絲屋番頭、佐五兵衞。醫者、東林。家主、

栗島權兵衞。神原屋左五郎。丁稚、與茂吉。肴屋、勝。手代、小助。同、條八。絲屋後家、おりつ。同娘、お房。友達娘、おせん。同、おみき。宿老女房、おこの。按摩、德市。仲人、槌右衞門。

本舞臺、三間の間、軒にヽヽ中根屋と染めたる紺の暖簾、正面に戸棚、札をはりたる絲箪笥、三尺暖簾、亭の看板をかけ、下の方絲物品々と染めたる長暖簾、門口、すべて本町絲屋の店先、爰に振り袖なりの、娘お仙、おきみ、手毬をつき居る。佐五兵衞、帳合をしてゐる、小助、條八、手代のこしらへ、十呂盤をおきゐる。東林、權兵衞、煙草盆ひかへる。手毬唄に通り神樂をかぶせ、賑やかに幕あく。

佐五　エヽ、七貫貳百五十八匁。

小助　ハイ、七貫貳百五十八匁。

佐五　三貫四百七十七匁五分。

條八　ハイ、三貫四百七十七匁五分。

東林　これサ番頭どの、どうぢや、鹽梅はよいかな

佐五　ヤ、東林樣、お出でなされましたか、お庇で咳はとまりましたて。

東林　これはしたり、かの毒、ナ、ソレ、あの、どく〳〵の鹽梅はどうぢやな。

佐五　モシ〳〵、その事ならば、爰ではちと差合ひ。左樣な事は船中にては申さぬ事にて候ふ。

ト謠にてうたふ。

權兵　コレ、佐五兵衛どの、さる屋敷から頼まれましたが、なんと貳百兩ばかり、利金をふくして貸されまいかな。

佐五　それは出來まいものでもござらぬ。先のお屋敷はナ。

權兵　知つてゞござらう、山住樣サ。

佐五　アヽ、何か、五平太樣か。

權兵　さうサ。

佐五　あなたの方は、そりやモウ、此方で埒あくやうにしておきましたて。

東林　それは御苦勞なさるゝな。此方で相談が出來まするて。

權兵　アヽ、さうでござるか。何でも二百兩借りたら、しつかり禮金と思ひの外、無駄な事に骨を折りました。

ト通り神樂、鳥追ひ唄になり、向うよりおりつ、後家の拵へ、おこの、世話女房、供の者一人ついて出て來り、直に門口へ來て

りつ　サアノヽ、お入りなされませ。



せん　後家御樣、只今お歸りなされましたかえ。
みき　わたしらは、鞠をついて、お留守を致してをりました。
りつ　それはよう遊んで下さんした。サ、御新造樣、これへお通りなされませ。
この　ハイ〳〵、左樣なら御免なされませ。（ト皆々内へ入る。）
權兵　これはお歸りさうな。イヤナニ、佐五兵衛どの、只今の相談の外、ちと貴樣に話がござるが、暫く待ちませうか。
佐五　さうして下さりませ。
東林　この東林も、是非ともこの間の事を。
佐五　ハテ、呑み込んでをりまする。……モシ、東林樣、飯焚めが、今朝から、氣合が惡いと申しまする。どうぞ御覽じて下さりませ。……（ト目顔にて思ひ入れあり）コレ小助、御案内申しやれ。
小助　畏りました。東林樣、二階へお出でなされませ。
りつ　御苦勞樣にござりまする。
東林　これはしたり。醫者の役でござる。モシ、後家御にはちと、お脈を伺はうかな。ハァ、お若いに惜しいものを。ハヽヽヽ。どりや、見て進ぜうか。

ト唄になり、小助案内して、東林、權兵衞、奥へ入る。

條八　ハイ、お茶をあがりませ。

トおこのへ茶を出す。

佐五　これは御宿老樣の御新造樣、ようお出でなされました。何か御用とござりまして、後家御をお招きなされましたが、なに御用でござりまするな。

りつ　イヤ、佐五兵衞、案じやるな。其方も知りやる通り、配偶佐右衞門どの病死しられて、もう三年娘は二人持ちながら、わしが爲には生さぬ仲。殊に姉の小絲は、赤城のお屋敷に七年前まで御奉公。

この　ほんに姉娘の小絲さんは、奥勤めの砌、同家中の本庄樣とやらへ言ひ號け。しるしもすんだその上で、お屋敷内にねんごろした男があつての駈落ち。それから便り音信なう

りつ　配偶の病死の元も、姉の不埒が氣にかゝり、それからのぶら／＼病ひ。

佐五　アヽ、モシ／＼、それが御宿老樣の御用でござりまするかな。

この　イヽエイナ、後家御を招き、わしがついて來たはナ、この間から話しておいた聟の事。妹のお房どのも嫁入り盛り、ひよつとした事の出來ぬうちと、主とも相談、先方からは取急いで度々の催促。

少分ながら五百兩の地面を持參、よい聟どのぢやによつて、今夜マア内々で、お房どのと杯を
さすのぢやわいな。

佐五　エ、御新造樣、何と仰しやります。アノ、お娘御のお房樣へ、今夜急に聟が來るえ。イヤ、呆れたものだ。この御身代で、こそ／＼／＼と入り聟がどう致されませう。殊に先旦那の御一家方へ、委しう相談もなされいで、どうしてマアお房樣へ。

りつ　イエ／＼、そりや大事ない。別家十兵衞は此間からの眼病、何事も御宿老樣の御承知の事ならば、よろしう遊ばされませいというてぢやわいの。

佐五　サ、左樣ではござりませうが、餘り早急、少しは支度はせねばなりますまいに。

りつ　サ、その支度のことも、旦那どのが息災の内、嫁入衣裳も拵へて、どうで姉の小絲は門端も踏まされぬ、妹のお房へは百兩といふ支度金、それもわしが別に封じておきました。その上、讓り狀も、コレこの樣に（ト懷中より讓り狀を出し）今御宿老樣へ、お目にかけて來たのぢやわいの。

佐五　エヽ、そりや讓り狀でござりまするか。（トよく／＼見て）成る程、相違もない親旦那の御手跡の殊に百兩といふ化粧料もあるお房樣、ハテ、ござる聟樣は仕合せなお方だなア。

この　して、お房どのは、留守でござんすかえ。

傳八 アイ、西河岸の地藏樣へお參りなされましたで。
この もう、お歸りでござんせう。
みき わたしらも待つてをりまするわいな。
佐五 今にもお房さんがお歸りなされ、聟入りとお聞きなされたら、アヽ、さぞあのお子はりつや。
佐五 アイヤ、お悦びでございませう。ドリヤ、お讓り狀も簞笥の中へ納めませうか。

ト思ひ入れ。花やかなる唄になる。佐五兵衞讓り狀を簞笥に入れる。この唄にて向うよりお房、振り袖、跡よりお芳、下女の形、鉢植の紅梅を持ち、與茂吉、前髮丁稚にて枝なりの金柑をもち、肴屋の勝、下駄がけ、鹽引を一本提げ出て來り、花道にとまり

勝 モシ〳〵、お房さんえ、西河岸の地藏詣りでござりやすね。
ふさ お前は肴屋の勝さん、こりや、地藏さんへ參らしやんしたかえ。
勝 なにサ、わつちやァあんまり、鮭が來たから、お前さんの所へいま持つて行がけサ。
よし よい所で勝さんが連れになりなんしたで、いま惡口云うた若い衆は、みんな逃げてまゐりましたわいな。

ふさ　其方、よう禮を云やいの。
與茂　ナニお前、勝さんが來ねえでも、わつちが居たもの、どうして彼奴らが何を云ふ事がなるものか。ほんの事だが、云はゞ云つた見たがいゝ、とッ捕まへて、ひよい〳〵とぶん投げらァ。
勝　そりや人をか。
與茂　イヽエ、四日市で當りのある蜜柑を、
勝　何を云やァがる。
よし　サア、お出でなされませ。
ト唄の切れにてこの人數舞臺へ來り
ふさ　母さん、今戻りましたわいな。
りつ　娘、今戻りやつたか。
この　さぞ込み合うたであらうな。
みき　お房さん、待つてゐたぞえ。
せん
ふさ　ほんに、よう來て下さんしたの。
佐五　地藏樣は、さぞ賑やかでござりませう。イヤ、勝公、來さッし。

勝　アイ、此頃はお遠々しいね。
　ト皆々よき所へすまふ。
りつ　コレ娘、わがみの歸るを待つてゐたわいの。
ふさ　そりや、何の用でえ。
この　その用はな、わたしが云ひませう。
ふさ　御宿老様の御新造様、ようマアお出でなされましたな。
この　ほんに、今日は取分けよう參りましたわいの。コレ、お房どの、マア、わたしがお内へ來たのは
の、常々母御樣と相談しておきました聟どのゝ事、先方から急にと云うて來たゆゑに、今夜内
内の杯をさせうと、その相談に來ましたわいの。
ふさ　エヽ、そんなら何と仰しやります。あなたのお世話でわたしの所へ、聟さんが見えまするかえ…
…モシ母さん、そりやほんまの事かえ。
りつ　サア、女暮しでは町内が濟まぬゆゑ、急に今宵、其方の所へ。
ふさ　モシ、母さん、わたしやその樣な祝言は、アイ、否でござんす。お果てなさんした父さんが、存
生の内から、祝言り白小袖、色直しの惣模様、みな父さんが拵らへては置かしやんしたけれど、

わたしや妹、お行くへは知れねども、赤城のお屋敷にござんした、姉さんの小絲さん、惣領の事なれば、どうぞ姉さんの行くへを尋ねて

りつ　ハテ、それがマア、今急なことにならうかいの。姉も其方も、わたしが身腹を痛めぬ兄弟。何方をどうとも思はれねど

この　姉の小絲樣は、庭帳にも付いてあれば、急なことには

佐五　モシ〳〵、左樣でもござりませうが、どうしてマアあのお子が、聟をおとりなさるゝものだ。お房樣のお心は、云はずとしれた、それナ……ソレ、外の男でこのお內を、お納めなさるゝ思召しで、ござりませうがな。

よし　こりや番頭さんの云ひなんす通り、お房樣はこの間から、夜に入ると、こちのお店の端へ出なんす、あの占屋さんの御浪人さんに

トうか〳〵と云ふ。お房、氣の毒なる思ひ入れにて

ふさ　これいなア、そりやわがみ何を云やるぞいの。よしとしたことが、ツカ〳〵と、アヽ占屋さんの若いお方には

りつ　その占屋さんの若いお方には

ふさ　その占屋さんに
佐五　高野山なら弘法大師。
みきせす　たがやさんとは、三味線でもあるまいし
與茂　桶屋さんなら、朝からたがよう。
勝　大家さんなら、晦日に店賃。
佐五　エヽ、何を馬鹿〳〵しい。どうでお房さんが否と仰しやる内は、内祝言は延引サ。
りつ　ハテ、是非々々今宵と、御宿老樣とも對談して
この　仲人とやら、何やらに、名代に來たわたし、是非とも今宵
ふき　さうでござんせうが、どうもわたしや、今夜の杯は否でござんすわいの。

トずんと立つて奥へ行かうとする。

りつ　コレ〳〵、娘、マア〳〵、返事して行きやいなう。
よし　マア〳〵、お返事をなされませいなア。
ふさ　エヽ、わたしや知らぬわいな〳〵。(ト振り切つて奥へ入る。)
みきせん　ア、コレ、待ちなさんせ〳〵。

ト捨て臺詞にて、おきみ、おせん、お芳ついて入る。

りつ　コレ、娘、それでは濟まぬわいの。(ト行かうとする。)

このハテ、ようござんす。わたしがよいやうに申しませう。マア〳〵、わたし任せに……ほんに、それはさうと、せめて支度はしてお置きなされませ。

りつ　合點でござんす。

この　コレ、お房さんえ〳〵〳〵。(ト呼びながら入る。)

勝　モシ〳〵、後家御樣え、何か急な事でござりますかね。

與茂　勝さん、誰ぞ死んだか。

勝　エヽ、默つて居やァがれ。

りつ　ほんに、よい所へ來て下さんした。態となりと、祝言のまなびを

勝　合點でござりやす。そこはわつちが間に合はせるね。マア、この鮭は何に遣はうね。

與茂　コレ、鱈がひやしてあるの。

勝　そいつはいゝワ。送りの手合ひの吸ひ物には奇妙だ。コレ、てめえ、胡椒の粉を買つて來たり。

與茂　べらぼうめ。アノ本郷まで行くのか。

勝　なんのこつた、乾物屋にあるワ。

與茂　乾物屋で若衆を賣るか。

勝　エヽ生藥屋にもあるワ。

與茂　オツト合點。芳町の河岸へソレと。(ト向うへ走り入る。)

勝　サア〳〵、若い衆、お前も手傳つて下さい。

條八　心得ました。何でもしませう。

りつ　マア、長熨斗の支度しませうか。

勝　サア〳〵、お出でなされませ。

ト合ひ方になり、おりつ、條八、肴屋、捨て臺詞にて奥へ入る。佐五兵衛殘つて

佐五　サア〳〵、とんだ話になつて來たわえ。あの娘へ急に聟が入つては、ちつと此方の(ト思ひ入れあり) こゝが彼の毒の所だ。それについても、今簞笥の中へ入れておいた讓り狀も着服して(トあたりを見廻し、簞笥の抽出しをソツと明け、讓り狀を出し) この文言の似せ筆して、絲屋の身代家屋敷、この佐五兵衛へと

ト思ひ入れ。奥にて人音するゆゑ、狼狽へて、そこにある鮭を見つけ、この口へ狀をねぢこみ、知ら

ぬ顔して居る。奥より東林出て來り

東林　コレ〳〵、番頭、この間から賴んで置く、あの後家御の事はどうしてくれるぞ。

佐五　コレ、東林さん、そこ所ぢやァござらぬ。今夜聟が來るとよ。

東林　サ、その噂も今聞いたて。今日わしが來たも、コレ、この毒を

ト紙入れより毒の包みを出し見せる。佐五兵衛とつて

佐五　モシ、東林さん、お賴み申した毒の調合、これでござりまするな。

東林　左樣々々、愚老が家傳の毒でござる。

佐五　忝うござりまする。この間までは一家の内に煙たい奴は、安野屋の十兵衛、彼奴と思うたが、こりやモウ今夜の入り聟めに、喰はせずばなるまいわえ。

東林　コレ〳〵番公、そりやあんまり白木屋めいて古風な趣向だ。ハテ、聟が死んでも親類うちが合點せぬワ。こりやァ祝言の酒の内に毒があつたも知れませぬ、御詮議を願ひまするといふ時は、まづ一番に番頭へほしぶちがかゝるワ。今時分の世話狂言、その位の智慧はあまり遲蒔き唐辛子、相變らぬ儀だぞえ。

佐五　モシ〳〵、そして、どうすれば跡腹が病めぬの。

東林　サア、そこだて。内の手代に芥子ほども疑ひの懸らぬ、珍らしい趣向といふは、コレ、貴様の惚れたあの娘、いつそお房に毒を服ませるがよい。

佐五　エ。（ト思ひ入れありて）何を云ふな。お娘を殺す位なら、お前に毒は頼まぬワ。

東林　こりや疑ふも尤もだ。コレ、毒といふのは、斑猫、水蛭、ほうきう、この三味を酒の中へ調合して、服ませるが最後の助、忽ち往生かんまみ陀佛。さて祝言はだりむくり、聟が持参の地面取込み、非難を附けて追ひ出すワ。さてその跡へ乗り込んで、絲屋の身代のんだ上、直に娘を蘇生させ、貴様の女房、死んだお房が蘇生る、その良薬が、ありまの松〳〵。

佐五　成る程、そりやア相談ものだわえ。これまでの趣向と違ひ、聟を助けて娘を殺し、後にてお房を生かへらす仕樣といふは。

東林　サ、服ました毒を下すも療治、それが俗にいふ、毒薬變じて薬の所、天水を以て服ませた毒を消す妙薬、誠にこれは、法事〳〵。

佐五　イカサマ、それに違ひがないならば、今夜お房に服ませた上、娘が死なば早々に弔ひを取急ぎ、蘇生らすはこの番頭。さすれば命の親も同然、義理にも聟にせずばなるまい。それにつけてもお前の手で、娘の命を殺しても、又生かすといふ證文をとりまするぞ。

東林　隨分それも承知々々。
佐五　して、その藥の代金は
東林　兩方しめて三十兩。
佐五　エ、それはあんまり
東林　高いも低いも色の道。お氣に入らずばこの方もこの毒を（ト紙入れへ納めようとする。）
佐五　アヽ、コレ／＼、氣の短い。買はうよ／＼。
東林　そんなら毒は先づ渡すワ。
佐五　（毒を取つて）コレ／＼、當分手付がこゝに五兩。（ト紙入れより出して渡す。）
東林　して、跡はいつ寄越すのだ。
佐五　ハテ、首尾よく行けば直にやります。その代りには、内の後家御を取り持ちまするぞ。
東林　それは近頃忝い。ドレ、マア、請合うたといふ證文をやらう。
　　トかけ硯を引寄せ、さら／＼と書いて、佐五兵衞へ渡す。よく／＼見て
佐五　よし／＼。斯ういふ慥かな請合ひなら、わしも丈夫に毒を娘に服ませまする。もしお前がわしを騙すと、この證文をもつて（ト思ひ入れ）併し何處へ願はうな。

東林　サ、おれもさう思ふ、
東林　何か忘れた事がある。慥かまだ一いろ藥を渡さなんだ。
佐五　ソレ見なさい。殺し放しでたまるものか。アヽ、埒もない。早く下さりませ。
東林　渡します〳〵。コレ〳〵、三十兩のうち、五兩取つて、跡金はまだ二十五兩でござるぞ。
佐五　承知サ。
東林　コレ、後家御を賴みますよ。
佐五　承知サ。

ト東林紙入れを出し、氣付藥を出さうとする。奧にて

よし　佐五兵衞さん〳〵。

ト呼びながら出るゆゑ、東林ちやつと紙入れを懷中へ入れ、知らぬ顏してゐる。奧よりおよし、勝、權兵衞出て來り

コレ、佐五兵衞さん
佐五　エヽ、悔りさせたワ。
よし　モシ、あのお方が、お前に御用があるとの事。そして、後家御樣がお呼びなされてゞござりま

す。ちよつとお出でなされませ。

佐五　オヽ、今行くよ。あのお方とは、アヽ、權兵衞どの、まだ歸らずに居たか。

權兵　ハテ、この男は、ちつと貴樣に金口の相談があつての。

ト此うち勝、鮭を見附け、取上げて

勝　こゝにあつたか。よく猫が附かなんだ。

ト提げて奥へ行かうとする。佐五兵衞うろたへ、これに縋つて

佐五　アヽコレ勝公、この鮭を何處へ持つて行く。

勝　ハテ、供の衆に切つて附けにやァなりませぬよ。

佐五　ナニ、この鮭を切る。そりやァとんだ事だ。

勝　なに飛んだ話があるものか。切りやァ惡いかな。

佐五　サア、この鮭を切つては（トいろ〳〵思ひ入れあり）コレ〳〵勝公、切つたらこの首はおれが貰ふぞよ。

勝　ハテ、どうでもしなさいな。

權兵　これサ番頭、話があるわな。（ト引ッ張る。）

佐五　エヽ、うるさい人だ。コレ、勝公、必らず鮭の頭は入札だよ。

勝　臺所の柱へ掛けて置くから、どうともしねえな。

權兵　これサ、ちつと相談があるよ。

東林　コレ、番衆、この藥はどうせう。

佐五　ハテ、今は惡いよ。

トあたりへ心を遣ふ。通り神樂になり、向うより店子、やつし股引の形にて駈けて出て來り

店子　本町の絲屋だといつたが、大方向うの内であらう。（ト門口へ來て）モシ〳〵、お内に淡島權兵衛さんはゐられまするかえ。

家主　オイ〳〵、誰だ〳〵（ト門口を見て）ヤ、小石川の店子の衆だの。なんぞ急な用でも出來ましたか。

店子　モシ、大屋さん、とんだ事でござりやす。お前のおかみさんが、いま大黑障をしてネ、長屋の手やひが醫者を呼びに歩いたが、近所の醫者は淡島と聞いて、みんな留守遣ひます。早く歸つて見さつしやりませ。ありや大の黑障だ。

權兵　なんだ、嚊アが大こくしやうだ。そりや鯉でも喰ひはせぬか。

店子　馬鹿な事を云ひなさいな。鯉を喰へば鯉の食傷、こくしやうか食傷か、巴屋が來たもの、如

才があるものか。
權兵　これ〳〵、嬶ァは苦しがるか。
店子　イヤモウ、顔が青くなつたよ。
勝　青くなつたら、綠青ではないかね。
店子　早くござりませよ。
權兵　そいつは行かずばなるまい。（ト行かうとして東林を見つけ）イヤア、爰に醫者樣がござつた。モシ
　モシ、急病人だ、ちよつと來て下さい。
東林　アヽ、コレ〳〵、愚老は急用がござる。餘人に見せさつしやい。
佐五　どうしてこの醫者どのが、ナニ遣られるものか。
權兵　ハテ、近所だからちよつと來て下さい。
東林　して、何處でござる。
權兵　小石川の極樂水だ。
東林　イヤア、本町から小石川が近所なものか。
權兵　ハテ、つい鼻の先だ。（ト無性に引つぱる。）

よし　サア、番頭さん、お呼びなさるゝ。ちやつとお出でなされませ。

勝　ドレ、鮭を切らうか。

佐五　アヽコレ、それを

勝　ハテ、鮭がどうしたな。

東林　コレ番衆、藥は

トいろ〳〵思ひ入れ。佐五兵衞、勝が鮭と東林が藥を心遣ひして、およしに引つ張られ、東林も氣付を出して渡さうとするを、肴屋、店子無性に引つ張り、向うへかゝる。佐五兵衞人目あるゆゑ何事も云はれず、下女に引つ張られて奧へ入る。東林氣付を持つたまゝ引つ張られゆく。この内通り神樂、向うより與茂吉、胡椒の粉の袋を持ち、按摩德市が杖を引つ張り、德市が笛を吹きながら引かれて出て來り、花道にて

與茂　イヤア、お醫者さん。泥坊でもしたのか、强氣な目に逢ふの。

德市　與茂吉どの、泥坊か〳〵。

東林　コレ〳〵、丁稚々々、てまへ内へ行つたら、コレ、この藥を番頭に、きつと渡してくれろ。大事の藥だぞ。屆けてくれろ〳〵。

ト云ひながら、袋入りの氣付の粉藥を渡す。與茂吉とつて

與茂　よし〳〵、きつと屆ける。迷ひなさんな。

店子　サア〳〵、來さつしやいな。いつそ引ッかつけ。

ト東林を天上持ちにして向うへ入る。與茂吉、德市をつれ、舞臺へ來て

與茂　何だかあの醫者めは、餘つ程な科人だわえ。

勝　コレ小僧や、胡椒を買つて來たか。

與茂　なんと早かつたであらう。

勝　サア〳〵、早く寄越せ。

與茂　オツト合點だ……とは云ふものゝ、袋が二つになつたから、ちつとむづかしい。

勝　コレエヽ、早く寄越せ。

與茂　大方これであらう。（ト一つ持ちたるゆゑ、藥の袋を肴屋へやる。）

勝　エヽ、箆棒め、何をまごつきやァがる。

ト藥袋をとつて、鮭を持つて足早に奥へ入る。與茂吉、德市殘り

德市　コレ、丁稚どの、何か忙しさうだの。

與茂　今夜聟入りがあるワ。
德市　そいつはめでたいの。
與茂　ナニめでたい。目も持たないで
　　ト爰にて佐五兵衞袴をはき、蝶花形の附きし銚子を持ち出で
佐五　コレ、東林さん〳〵。(ト尋ね廻り)エヽコレ、この酒の中へ彼の毒は仕込んだが、肝心の氣の附く藥を置かずに行きをつた。アヽコレ、氣付を早く受取りたいものだ。
　　トこれにて與茂吉心附き
與茂　モシ〳〵、番頭さん、今あの東林さんがね、藥を出してね、これ、この藥を番頭に屆けてくれろと云つてね、天上持ちになつて行きやした。(ト胡椒の袋を出す。)
佐五　アヽ何か、東林さんが藥をわれに屆けてござつたか。それで落着いた。(ト紙袋をとつて)アヽ、これが彼の藥だな。
與茂　何かえ、よこねを散らすのかえ。
佐五　エヽ、默りやアがれ。
　　ト袋をあけて藥を見ようとして、黃昏ゆゑ見えぬ思ひ入れにて

日の暮れるのに行燈も點しをらぬ、たはけづらめ。

徳市　モシ、番頭さん、療治をなされまするかえ。

佐五　オヽ、今は急がしいから、後に頼まう。

徳市　左樣なら臺所の二階に、飯焚どのを揉んでをりますから、お呼びなされませ。私しもしまひ次第モシ、いつものこの笛を（ト一つ吹いて）斯う吹きますから、お出でなされませ。

佐五　合點だ〳〵。

徳市　お臺所の二階に居りまする。（と探り〳〵奥へ入る。）

佐五　エヽコレ、五兩やつたら、東林が氣付藥と届けた妙藥、二口しめて三十兩とは、ハテ、高いものだ。

ト袋の中を覗いて見る。與茂吉同じやうに、うか〳〵覗いて見るはずみに、佐五兵衞と鉢合せする。この途端にこの藥、二人が鼻へ入る。

兩人　アイタヽヽ。（ト頭を押へ）アヽくさみ。（ト一度にする）。

佐五　エヽ、べらぼうめ、アヽ、くさみ。

與茂　お前がべらぼうだ。アくさみ。

兩人 アヽヽヽ、アヽ、くさみ。

ト互に顏へ嚏をしかけ、佐五兵衞思ひ入れありて

佐五 ア、金だけあつて妙藥の、效驗は違うた（ト兩人鼻をむぐ〳〵して）

兩人 アヽ、くさみ

佐五 ものだナア。

兩人 アヽくさみ。

ト唄になり、向うより若い衆一人供にて、箱提灯をともにし、左五郎旅上下、聟のこしらへ。仲人槌右衞門、羽織、町人にて、附き出て門口へ來り

槌右 ハイ、賴みませう〳〵。宿老の御新造は來てござりまするか。左五郎樣をお連れ申しました。

佐五 ヤア、、聟どのが來た〳〵。（ト銚子を持つてうろたへる。）

與茂 そりや聟だ〳〵。聟だ三間兩隣、くさみ〳〵〳〵。

ト呼びながら奥へ入る。引違へておりつ、丸行燈をさげ、おこの、三方に三組みの杯を載せ、持ち出て來り

りつ コレ、佐五兵衞、聟樣がお見えなされたではないか。

佐五　左様でござりまする。

この　サア、左五郎様、これへお通りなされませ。

左五　ハイ〳〵、然らば御免なされませ。（卜上へ通る）

槌右　今日はお日柄もようござりまして、おめでたうござりまする。

左五　イヤモウ、定めてお待兼ねでござりませうと、取急ぎまして参上仕りました。して、あなたが中根屋の後家御様でござりまするかな。

この　左様ぢやわいな。モシ、おりつさん、聟の左五郎さんへ御挨拶なされませいな。

りつ　ハイ〳〵。これはマア、何か急なことゆゑ、お待受けもそこ〳〵。御新造様がお出でなされましてお仲人やら。何やらに、お世話なされて内祝言の杯ごと。近所の披露目は追つての事と、女主人では町内の思惑も如何と、親類どもを呼集めまする間もなう、今宵の取結び。お聞きもござりませうが、生さぬ仲の娘、可愛がつて下さりませいな。

左五　これは早、結構な御挨拶。私しが神原屋左五郎と申しまする、誠に商ひの道と申しても、一向存ぜぬ不器用者。御宿老のお世話をもちまして、今宵早急の聟入り。お店の事も何もかも、お指圖下されまして萬事よろしく、ヘイ、お頼み申し上げまする。

この　何事も知れぬ所は、あの番頭どのに、聞合はするがようござんすぞえ。

りつ　左様でござりまする。コレ、佐五兵衛、聟さんにお近付になりやいの。

佐五　ヘイ〳〵、左五郎様、これは早お初にお目に懸りました。即ち私しが中根屋の見世を預りまする、佐五兵衛と申しまする、至つて不調法者でござりまする。只今仰しやりまするには、商ひの道も御存じないとのお詞。してマア、何を御存じで聟にお出でなされたやら。僅か少分の地面を持參で、まだ手入らずの娘御をしめたその上、年若な後家御もなめる思召しか。モシ、憚りながら商賣に抜目のない佐五兵衛、絲屋の店にゐるじかつては、きなかの錢でも自由には致させませぬ。花聟様、左五郎様、左様お心得なされませ。

左五　（思ひ入れあり）ハテ、慇懃な番頭どのゝ御挨拶。小糠三合持つならば、ナニ入り聟に來ませうぞ。今もこなたの云ふ通り、僅かな地面がわしの持參。その上素人、どうで役には立ちますまい。何かとこの上、貴様の世話で

佐五　いよ〳〵聟に、左五郎様が

左五　宿老どのゝ、お世話ゆゑ

佐五　お娘を女房に身代まで

左五　存ぜぬながら行く〳〵は

佐五　ハテ、あつかましい

左五　ヤ。（ト思ひ入れあり）番頭どの、頼みまするぞよ。（トこなし。）

りつ　ほんにマア、この娘は、何を致してをりまするやら。

この　今着更へてゞござんした。コレ、女中衆、房さんをお連れ申さんせいな。

よし　ハイ〳〵、畏りました。

ト合ひ方になり、丸綿をかむり、白無垢なりのお房を、お芳介抱して出てくる。後よりおせん、三方の長熨斗をのせ、これをもち、おみき附いて出て來り

サア〳〵、お房さん、おめでたいお内祝言、御機嫌ようお杯を遊ばしませ。お前さんのお望みのことは、私しがようナ、モシ、存じて居りまするから、マア〳〵、今宵のお杯は、皆様の仰しやる通りになされませせいな。

せん　友達のわたしらも、よい所へ來合せて

みき　お房さんのめでたい祝言にあうて、待ち女郎やら何やらに

兩人　ほんにあやかりたうござんすわいな。

トお房ぴんしやんとしてよき所へ坐り、傍の方を向いてゐる。

りつ　サア〳〵、ちやつと祝言の杯をめでたう納めて。ナウ、佐五兵衞。

佐五　左樣でござりまする。お杯が濟んだと申しまして、後で貰ひ引は、いくらもある事でござりまする。

ふさ　エヽ、阿呆らしい。わしやまだ得心もせぬものを

りつ　アヽコレ、それでは惡い。マア〳〵、今夜の所は（ト思ひ入れ。）

左五　モシ〳〵、おこの樣、どうやらお房どのは、祝言が不承知の樣ではござらぬかな。

この　イヽエナニ、さうではござんせぬ。お房さんは、よう得心でござんすわいな。

佐五　左樣でござりまする。どうで杯をしたというて、後はたいらん（ト云はうとして）アイヤ、早くお杯を濟して、この佐五兵衞が白いか黑いか（トうぢ〳〵して）サア〳〵、お杯〳〵。こりや私しよりお酌を致しまする。祝言の杯は、嫁御の方からお始めなされて（ト無理矢理に杯をお房に持たせ、思ひ入れあつて銚子の酒をつぎ、こなしありて）サア〳〵、その酒を一思ひにぐつと飮んだり〳〵。（ト氣をいらち、お房飮みかねるを、側よりせりたて）それ〳〵、そこらで謠ぢや〳〵。

槌右　オツト心得ました　四海波靜かにて

ト とうたふ。お房、腹立てろこなし、ぐつとのむ。佐五兵衛うろたへ

佐五 アヽ、南無阿彌陀佛。

ト思はず泣出し、また氣をかへて、念佛を謠の節に直しうたふ。皆々捨て臺詞にて悦ぶ。おこの、三方の杯を左五郎が方へ持ちゆく。

この サア〱、これから聟の左五郎樣へ。

ト差し出す。左五郎杯をとろ。佐五兵衛うろたへ

佐五 アヽ、コレ〱、その杯をアノ、聟樣が

りつ めでたう酌をしやいなう。

佐五 サ、この酌は

この 早うつがんせいな。

左五 番頭どの、憚りながら頼みます。

佐五 アヽ、この酌はどうも

りつ エヽ、なぜつぎやらぬぞ。コレ、およし、わが身、つぎやいの。

よし ハイ、畏まりました。

ト何心なく銚子へかゝる。佐五兵衞これを離さず

佐五　アヽコレ、酌しかゝつたこの番頭、これぱつかりは

ト銚子を離さずゐる。この時お房、俄に苦しき思ひ入れにて

ふさ　アヽコレ、どうやらわたしや、胸が苦しうなつて來たわいな。アヽ、胸先が、コレ、苦しい〳〵、苦しいわいな。

ト胸を押へて苦しむ。皆々驚き立騷ぐ。

りつ　コレ娘、どうしやつたぞいの。

下女友達　お房さんいなう〳〵。

この　早う醫者樣を呼びにやらんせいな。

槌右　ドレ、私が一ッ走り。

ト向うへ駈けて入る。奥より勝、駈けて出て來り

勝　モシ〳〵、お房さんは急病かえ、そりや折わるくとんだ事だ。持病の癪であらうな。

ト介抱する。左五郎杯を持ちたるまゝ、うろ〳〵して

左五　これ〳〵、この杯は、嫁御がさゝれたが、どう仕りませうな。

勝　どうともしなさい。杯どころぢやァないわいな。コレ、熊の膽はないかの。

左五　でも、さゝれた杯。誰れぞ酌をして下さい。

勝　ハヽ、娘御が癪だによつて、癪を押へてゐるに、そばから酌々と、退いてゐなさい。

左五　これサ、杯の酌を頼みます。

勝　エヽ、氣のきかない、癪だから騒ぐわな。しやくはおさへて居るよ

左五　お押へでござるかな。あの祝言の杯を押へていゝかえ。

勝　エヽ、煩い人だ、コレ、番頭さん、此お子を斷うしてもおかれまい。お居間へ床をとりなさいな。

佐五　合點ぢや〳〵。

勝　お房さんはわしが抱いて行くよ。

左五　モシ、酌はどなたぢやな。

勝　ハテ、癪はお房さんだわな。

佐五　エヽ、聟さん、退きなさい。何をまごつかつしやるな。

ト左五郎を突飛ばし、皆々捨て臺詞にて大騒ぎになり、勝、お房を抱上げ、皆々介抱して奥へ入る。

左五郎、杯を持つたまゝ突廻され、一人殘つて

左五　これはマア、どういふ話だ。イヤハヤ、べらぼうな目にあつたとは此事であらう。杯事の段になつて、お房が飲むとあの苦み。もしあのお房に色があつて、この祝言の邪魔をして、銚子の中へ毒を入れたか。さうした時には、おれも一緒に毒の相伴。（ト持ったる杯を見て氣味わるさうに、あたりへ投棄て）初春早々、命を一つ拾つたわい。

ト思ひ入れ。合ひ方にてこの道具この儘ぶん廻す。

本舞臺三間の間、上の方へ二階を見せ、正面は誂らへの段梯子、よき所に最前の鹽引、首の所残りぶらりと掛けてあり。下の方は惣銅壺の土竈、八間に燈を點しかけてあり。臺所の道具、與茂吉茶釜の下を焚いてゐる。佐五兵衞、網の手燭をもち、そこら中を尋ねて居る。暮六つの鐘にて道具とまる。

トさしがれの鼠一疋、八間の油へかゝる。與茂吉見て

與茂　道理で八間が暗くなつた。また鼠めが油を嘗めるか。畜生め、シイ〳〵。

ト棕梠箒をとつて、追ひ散す。

佐五　コレエヽ、與茂吉、何を騒ぐ。奥ではお房さんが、今をも知れぬ急病。面白さうに、靜かにしをらぬか。

與茂　ハテ、わつちやァ鼠を追ふわな。お前また何を尋ねなさるな。

佐五　おれは鹽引の切かけを尋ねる。
與茂　そりやァ大方、鼠が引いたかもしれねえ。
佐五　さう思ふから氣が氣ではない。われも釜の下を焚いたら、燃さしを差くべておけ。火の用心が惡いぞ。この樣に取込みな晩は氣を附けてゐろ。コレ、藥も掛けておけ。
與茂　承知サ。そりやアいゝが、お房さんはまだ氣がつかねえから困つたものだねえ……鼠に燃さしを引かれてはならぬ。

ト捨臺詞にて薪の燃さしを釜の下の灰の中へさしこみ、七輪を出して藥鍋をかけ、團扇にて煽ぎながら眠る。

佐五　アヽコレ、估券の入つた鹽引を、何處へ吊しておきやアがつたやら。してマア、あのお娘の氣付藥も（ト思ひ入れあり）イヤ〳〵、こりやアまだ早いわえ。

ト捨て鐘にて、手燭を持つて、そこら中を尋ねるとて、躓きて持つたる手燭の燈火消える。この時二階の障子をあけ、徳市、一文笛を吹く。佐五兵衞思ひ入れ。按摩障子をさす。

按摩が療治の相圖の笛の音。（ト段ばしごへ駈け上り、思ひ入れありて、）イヤ〳〵、この取込に療治をしてもゐられまい、アヽコレ、估券の入つた（ト吊しある鮭を見つけ、）これだ。「あがり口人の

出入のしげけれど、鮭は頭へ障らざりけり』。(トふつと塵を吹いて、)これで懸りし埃もはれ

ト鮭をとつて探り見て、頭の繩を掴み、八間の燈火へ翳し見る思ひ入れ。この時ドヽンと打込み、管絃と思はせ、通り神樂になる。與茂吉下より火吹竹を持つて窺ふ。

これまで切つた鹽引の、頭の中に估券證文。エヽ、忝い。

與茂 番頭見つけた。

ト この聲に愕りして

佐五 ヤなんと。

與茂 人の事をば云ひながら、絲屋の長をもする人が、鮭の頭をめがけるは、天命知らずの番頭どの、きり〳〵おれに首を渡せ。

佐五 小癪な丁稚め、この鹽引の

與茂 首をわたせ。

佐五 見事取るかよ。

與茂 なんでもないこと。

佐五 どうして。

與茂 斯うして。

ト火吹竹にてぶつてかゝる。佐五兵衞ひらりと飛下り、摺子木をとつてぶつてかゝり、これより兩人段ばしごへ駈け上り、駈けおり立廻りよろしく、兩人とも持つたる物を互ひに打落される。この時八間へ鼠出て油を嘗める。これにて燈火暗くなる思ひ入れ。捨て鉦合ひ方。兩人闇の思ひ入れ、探りまはる。釜の下の燃さしをとつて兩人立廻り、段梯子へぶつゝけ、この時ぱつと燃さしの火とび散る。

兩人顏見合せ、

佐五 大べら棒め。(ト丁稚を蹴飛し)おれまでも氣狂にしやァがつた。

與茂 餘ッほど腹がこなれた。

佐五 おきやァがれ。頭が要らばソレ、うぬにやるワ。

ト鮭の口の估券をとつて懷へ入れ、頭を投げやる。與茂吉とつて

與茂 こいつはよい目覺ましだ。

ト又七輪へかゝり、鮭の頭をあぶりゐる。合ひ方になり、奧よりおりつ、お芳に介抱されて出て來り

よし 番頭さんは爰に居られますわいな。

佐五 これは後家御樣でござりまするか。

りつ　コレ佐五兵衛、老少不定とはいひながら、内祝言の今宵になつて、あのマア様子、ありやもうどうで、娘はかなふまいわいの。

ト泣きゐる。佐五兵衛介抱して

佐五　アヽ、お心弱い。御臨終でもござりますまい。コレ、お芳、こなたはお房様のお側を離れますまいぞ／＼。

よし　アイ／＼。（ト駈けて入る）。

佐五　モシ／＼、後家御様、なんぼお若いと申しまして、只今仰しやつた老少不定、こりや安野屋の十兵衛方へも人を走らせませう。親類方も、お招き申さねばなりますまいて。

りつ　サア、何事も其方、よいやうに計らうてたも。わしやモウ何ぢややら、夢見た様ぢやわいの。

佐五　左様でござりませう。殊にお前様は義理ある娘御、まだあのお子の姉御様もござりまするが、只今では音信不通、別してお房様には、親旦那からお譲りなされた、お化粧料の百兩の金。

りつ　サア、あの子に附いた百兩も、今にもお房が、もしもの事がある時は、直にお寺へ納めてしまふわいな。

佐五　そりや御尤もでござりまするが、もしその大金を寺へ納めたと申しまして、何の役に立ちませぬ

ハテ、あのマアなまぐさ坊主どもが、女狂ひにでも遣ひますれば、却つて佛の爲にはなりませぬ
こりや矢ツ張りあのお房樣へ。
りつ　そりやどうなとあの子の爲に、なる樣にしてたもいなう。
佐五　サヽ、それを私しが聞いてをりますれば、親類方が何と仰しやりませうと、御遺言と申しまして
お髮も剃らず、あのまゝ祝言の白小袖で葬りまするも、こりや上つ方に隨分とござりまする。
りつ　アヽモウ、あの子は叶ふまいかなう。
ト泣伏すを介抱して
佐五　御尤もでござります。もしもの事がござりますれば、あのお子のお金はお房樣の衿にかけさせ
りつ　葬つてくりやいなう。
ト思ひ入れ。此うち二階の障子を明けかけ、左五郎窺ふ。與茂吉眠りゐる。手代兩人奥より駈けて出
て來り
手代　モシ〳〵、お房樣が殊の外、とり詰めてゞござりまする。只今も知れませぬ。ちよつとお出でな
されませ〳〵。
トロ々に云うて引返して駈け込む。

りつ　娘は死にやるかいの。コレ、お房イなう。

ト立たうとして俄に癪の差込みし思ひ入れ。佐五兵衞、いろ〳〵介抱して

佐五　コレ、お前までが同じ様に、コレ、氣をしつかりと持たつしやりませ。番頭が居ります。モシ、佐五兵衞が居りまする。只今私しが申した通り、お房様へ附いたる金は（トおりつが耳へ口よせ）只今お前に申した通り

ト小聲にて云はうとする。與茂吉眠りゐて、七輪へこけかゝり

與茂　アッ〳〵。

ト目を覺ます。佐五兵衞恟りして

佐五　まだうせたか。

トこの拍子に左五郎と顏見合はせ、左五郎障子をさす。爰にて拍子木の頭

モシ、私し任せになされませ。

ト時の鐘、五つの拍子木、この道具をぶんまはす。

本舞臺三間の間、絲屋の横手を見せたる道具、土藏板塀、忍び返し、見越しの白梅、下の方にひと

り番屋。すべて本町夜の景色。よき所に綱五郎、木綿頭巾をかむり、一本差し、浪人體にて、机の上に小さき行燈をともし、八卦道具をならべ、腰をかけ、辻八卦の體。町人形の者、手の筋を見てもらひゐる見得、通り神樂五つの鐘、時の拍子木にて道具とまる。

ト下座より町人羽織の若い者三人出てくる。この內に龜、源太、晝鳶の拵へにて、ウツ〳〵と懷を窺ひ、下座へ入る。

町一 さて〳〵、人はいつ何時も知れませぬ。惜しい娘を殺しました。

町人 葬禮は明日でござらう。

ト此やうな臺詞よいやうに、花道の內を途絕れぬやうに向うへ入る。

町一 ハイ〳〵、左樣なら天道樣を信心しまするな。

綱五 隨分、御信心が第一でござります。

ト十二銅を置き、向うへ入る。このうち始終通り神樂、ひとつ鉦聞え、時の鐘のだら。向うより中間、留守居提灯をともし、五平太、袴羽織にて出て來り、直に本舞臺へ來て

五平 今打つは五つぢやな。

中間 左樣でござりまする。（ト行かうとする）。

綱五　當卦本卦の考へ、失物、待人、走り人、男女合性善惡の考へ。

五平　（これを聞いて）アヽ男女合性。これはよいわえ。內々きやつめが心意氣を見て參らう。コリヤ〳〵。提灯待て〳〵。（ト綱五郎が側へよつて）時に合性でござる。一算おいて下されい。

綱五　畏りました。あなたのお年はな。

五平　拙者まことの年はなんでござる。

ト近くさし寄り、燈火にて顏見合せ

綱五　ヤ、貴公は五平太どのぢやござらぬか。

五平　左樣云やるは綱五郎どのか。

綱五　左樣でござりまする。これはマア、よい折柄

ト五平太、これにて挨拶なしに

五平　家來まゐれ。

ト行かうとする。綱五郎とめて

綱五　アイヤ〳〵、山住どの、お屋敷をお暇の拙者、お詞もござるまいが、そこが武士の情でござる。何卒朋友のよしみと思し召されまして

ト思ひ入れ。五平太こなしあつて

五平　家來、灯りを消せ。

ト中間あかりを消す。

綱五郎どの、暇出ましたる其許と身ども、夜中とは申すものゝ、御口談致したと申しては殿へ立ちませぬ。そこで燈火を消させましてござるが、身共へ何ぞ御用でもござるかな。

綱五　これはマア、お志のほど千萬忝なう存じまする。其許へお尋ね申したい一儀は、別の事でもござりませぬ。この間中深川にて、貴公も御存じの通り石塚氏の越度。その折柄、身共引請けまして、斯樣に浪人致し、詮議仕るは彼の定家の色紙、承はれば、この邊の質屋方に、二百兩とやらの質物に入れあるとのこと。貴公には、その儀お聞きなされたかな。

五平　（思ひ入れありて）イヤ〱、承はらぬ。決して五平太承はりませぬが、質屋に入つて居らうも知れませぬ。ハテ、大金の品ゆゑ、そりやモウ、質屋にもござらうが、今云はつしやりまする二百兩が三百兩、定めし高金でござらう。それを又、貴公には、在所が知れますれば、お請けなさる思し召しか。

綱五　左樣でござりまする。色紙の在所詮議のため、この浪人。身を粉に碎きましてなりと……サ、斯

様には思ひ居れど、只今にては浪人の世渡り。

五平　金子調達出來ませぬか、

綱五　お恥しう存じまする。

五平　左樣でござらう。よし、質物に入りござらうが、身共が金子たん足致して質受けも仕る。必ずお氣遣ひなさるゝな。……ぢやが、それでは身共が立身も致さうが、アヽ、氣の毒なは石塚氏、四五日の内には色紙を詮議し、彌三兵衛どのが差上げねば、腹を切らねばなりませぬ。アヽ、切腹せずばなりますまい。

トこれにて綱五郎思ひ入れ。

ハテ、一家中の風説には、勘當いたした悴左七郎、町人と罷りなつたあの者に、その色紙を賣り渡して、金子合力いたしたと、專ら家中で取沙汰でござる。それゆゑこの間は、急に石塚の科が重うなりまして、アヽ、今にもいとしや縛り首にも、あはれうも知れませぬ。

綱五　モシ〳〵五平太樣、すりや私しが浪人仕つたるその跡にて、石塚氏へ

五平　殿樣より殊の外のお咎め。アヽ、氣の毒な儀でござる。

綱五　ハテ、その儀は何とも以て。（ト思ひ入れあつて）イヤナニ五平太どの、いづれ拙者めが金子調

達仕り、その質物にまかりある色紙の儀は、身共に請けさせては下さるまいか。

五平　そりやモウ、御勝手になさるゝがよいが、その質屋御存じかな。

綱五　アヽイヤ、その儀は

五平　それ御覧じろ。どうして滅多には知れますまい。然し御苦勞なされて色紙の詮議おしやるがよい。して、其許には、只今の御住宅はな。

綱五　へイ、小石川極樂水邊に、裏屋住居のかすかな世渡り。

五平　左樣でござらう。アノ小石川極樂水とな。ドレ、ちよつと所を記しておきませう。

ト懷の紙入れを出し、腰より矢立を拔いて、捨て臺詞にて鼻紙へ覺え書をせんとする。この時窺ひたる龜、五平太が紙入れをさらふ。五平太肝を潰し

ヤ、盗人め。（トうろたへる）。

ト東のあゆみへ逃げる。五平太、供の中間うろたへて

盗人　泥坊々々。

五平　家來、あかりをともせ。紙入を盗られたワ。大事の證文が……家來、うろたへるな。泥坊々々。

ト二人ともうろたへて、消したる提灯を持つて、東の方へ追つかけて入る。かすめたる通り神樂、

時の鐘。揚幕より九郎兵衛、手拭を頭へまき、木綿やつし股引、藤くら草履、夜番の拵へにて、弓張をともし、鐵棒を曳いて出て來り、下の番屋へ入り、提灯を消し、辻番火鉢を出し抱へゐる。矢張り一つ鉦聞える。

綱五　ハテ、うろたへて五平太の今の樣子。懷中の紙入れを取らるゝとは、ア、、町中でも油斷のならぬ……それにつけても、今云うた事が定なれば、猶々以て片時も早く、尋ね出さにやならぬ色紙。質屋にあつても金が先立つ。ア、今の身で大金の、

ト思案の思ひ入れ。矢張り通り神樂、一つ鉦聞え、下座より勝、與茂吉出てくる。綱五郎又以前の床へ腰かけゐる。

與茂　コレ〳〵、勝さん、こぶ鱈はまだかえ。

勝　大べらぼうめ。こぶ鱈どころか、花嫁のお房さんが、杯を引受けたが最期の助、氣合が悪いと言ひ出して、誠に夢を見た樣な話だわえ。

與茂　わつちもさう思ひやす。お房さんの頓死しなさつたも悲しいが、こぶ鱈にあはぬも悲しうござります。

勝　エヽ、何を吐しやァがる。ほんに、わしが買つて來たこの胡椒の粉も、出たち平の八はい豆腐へ

も入れられまい。（ト袂より袋入れの粉薬を出し、ふつと見て）こりやアコレ胡椒の粉ぢやアない……なんだ、「氣付粉薬、三味調合致し置き候ふ。」（ト讀んで）べらぼうめ、こりやアコレ粉薬だワ。こぶ鱈へ入れねえで仕合せ。うぬ、飲んでしまやアがれ。（ト舞臺へ捨てゝ花道へゆき）あゝ又急にとり詰めるものか。あの番頭めも聟の噂を聞いたなら、おかやき餅もあらうのに、杯事を債めたは、あいつがどうも（ト振り返り思ひ入れあつて）小僧や、直に行つて來るぞよ。

ト通り神樂になり、向うへ入る。綱五郎これを聞きゐる。與茂吉、薬の袋を取つて

與茂　エヽ、こぶ鱈もないに、胡椒ばかり何にするものか。

ト小言云うてゐる、後より

綱五　コレ〳〵、丁稚どの〳〵。

トこれにて與茂吉ふりかへり

與茂　アイ、私を呼ぶのは八卦屋さんか。どうだ、商ひがありやすか。

綱五　コレ、貴樣に聞きたいは、何ぢややら宵から、お内は人出入り多くて、今宵祝言があると聞いたが、アレ〳〵、あの鉦の音は貴樣の内か。

與茂　アイ、わつちらが内サ。八卦やさん、聞きなさい、今夜の祝言がひつくりかへつて、明日の葬ひ

になりやした。

綱五　ヤ、葬ひになつたとは。

與茂　サア、聞きなさい。花嫁のお房さんが、何か今夜の祝言を聞いて、いつそ癪を起してね、お家さんに向つて、忌だ〳〵と云ひなさるものを、無性に杯をしろ〳〵と云つての、お房さんがその酒を一口飲みなさると、直にお前、アヽ苦しい〳〵と云ふかと思ふと、めでたく往生しなされたわな。（トしく〳〵泣く）。

綱五　アヽ、そんなら娘御のお房どのが、杯すると忽ちに死なれたか。して、その聟と、杯してか〳〵。

與茂　イエ〳〵、聟どのへ杯を指さうといふ所で、苦しい〳〵といつたもの、その酒を後で誰が飲むものか。

綱五　そんなら聟と杯はせずぢやな。

與茂　アイ、聟殿は飲まずサ。そしてね、白無垢を着たなりで、棺の中へ入りなさつたが、アヽ、惜しい娘を殺したぞ。

綱五　アヽ、そんなら娘御は白無垢のなりで、棺へ納めたか。

與茂　アイ、白無垢ばかりぢやァございやせぬ、あの番頭の佐五兵衛めが云ふにやァ、お髪もお剃りなされずとようございまする、ハテ、お大名様はその儘で埋めまするから、ようございますと吐かして、髪も剃らず、白無垢のなりサ。

綱五　アノ、髪も剃らずにか。……ハテナウ。

ト思ひ入れ。この時番屋の戸をあけ、九郎兵衛顔をいだし、聴き耳立てゝ窺ふ。

與茂　モシ〳〵、まだ〳〵話のやうな事がありやす。あの後家様が云ふにはね、お房さんの貯へ金が百両あるとサ、それをお寺へ納めようと云ひなさつたら、番頭めが云ふにやァね、そりやァ、御無用になされませ、寺へやつたとて、坊主が女郎を買つたり、圍ひ者をしたり、ほんの役に立たない事でございます。それよりは矢張りあのお子の衿へ掛けさせて、あの世の貯へにさせ申すがよいと勸めたれば、正直な後家御様、お房が身に附けた金ぢや、そんならさうしませうと、内外の者にも沙汰なしに、頭陀袋の中へ百両入れて、土へ埋めるとは、世間にはとんだ話もあるものだね。

トうか〳〵と口走る。綱五郎思ひ入れあつて

綱五　アヽ、何と云ふぞ。百両といふ金を、アノ、死なれたお房どのとやらの衿へかけて、アノ、棺の

中へ。

與茂　入れたに違ひないよ。わつちやァとつくりと見やした。それを番頭めが見つけてね。コレ、今後家様と話した事を、必ず誰にも云ふなと云つたがね、ツイお前に云ひやした。モシ、必ずお前、誰にも云ひなさるなよ。アヽ、これに付けても、あの後家様がお心よしだから、いゝやうになさる。エヽ、歯がゆくつてなるものぢやァねえ。エヽ、腹の立つ。（ト袋の薬を其處へ捨てゝ）モシ、今云つた事は、必ず沙汰なしよ。云ひなさると、わつちァ食止にあひやすよ。

綱五　決して誰にも云ふ事ぢやァないが、アノ、いよ〳〵

與茂　違ひねえね。云ひなさるなよ。

トこの時絲屋のうちにて

△　與茂吉や〳〵〳〵。（ト呼び立てる）。

與茂　アイ〳〵、今行きやす〳〵。

△　與茂吉や〳〵……與茂吉よ〳〵。

與茂　與茂吉よ〳〵と呼んでも見たが、可愛いお房さんは……土をかぶつて（トしく〳〵泣きながら）誰と寢るの。

ト唄を諷ひ、下座へ入る。あと合ひ方。九郎兵衛、番屋の中より窺ひゐる。綱五郎あとを見送り

綱五　あの愚しい丁稚がいふ事、よもやとは思へども、女親の淺はかから、大枚の百兩、死んだ娘に萬一着けて、サ遣るまいものでもない。此方は金で苦勞するに、ある所には（ト捨て、おきし藥の袋を見つけ、取上げて見て）胡椒の粉ぢやと云ひをつたが、こりやコレ粉藥、しかも中の包みに、丁寧に上書がして（ト袋の中の包みを見て）「氣付粉藥三味調合いたしおき候ふ、天水をもつて用ゆる。」……アヽ、こりや胡椒の粉ではない、氣付粉藥と書いてあるに、エヽ、粗相な丁稚めゝ

ト懷中の紙入れを出し、この中へ入れるとて、内にある文を見つけ取つて

ほんに、こりや此間どこの下女やら、墨色の判斷とおいて去んだが、女子の手跡、殊には艶書。もう取返しに見えさうなものぢやな。

ト又懷中する、この時絲屋にて頻りに鉦の音する。これにてきつと思ひ入れ。九郎兵衛も聽耳たてる。

イヤ／＼、どうでこの身に大枚な、無ければならぬ二百兩、今の話が定なれば

九郎　寺へ仕掛けて娘が衿に

綱五　かけて葬むる葬禮も

九郎　慥かに明日の七つ時。
磯五　夜に入つたなら人知れず
九郎　塚をあばいて
綱五　盜みしたなら天道の
九郎　道にそむいた強惡は
綱五　いつか一度は
九郎　世間の噂に
綱五　ア、人の口には
ト思はす互ひに振り返り、九郎兵衞、引戸をばつたりと、拍子木のかしら、綱五郎行燈を吹消す。
トこの時早めたる一つ鉦の音、これにならつて拍子木のきざみよろしく、拍子　幕
この間通り神樂にてツナギ、引返し。

三幕目　大通寺墓所の場

役名。 半時九郎兵衞。本庄綱五郎。番頭、佐五兵衞。神原屋左五郎。醫者、東林。鳶の者、風の

神喜左衛門。家主、粟島權兵衛。仲人、棍右衛門。信濃者、杢助。長屋の者、留六。絲屋娘、お房。

木舞臺三間の間、白壁の塀、上の方に黒き寺の門、この柱に「本町貳丁目絲屋佐右衛門寺」と紙に書き貼りてある。よき所に條八、嘉市、佐五兵衛、麻上下施主の形にて、大道へ莚を敷き、堀際に禮返しの見得、葬ひの鳴り物にて幕明く。

ト門の內より町人大勢、羽織股引、葬ひの歸りにて出て來る。門前に女非人、强飯の殘りをもらひ居る

非人　ハイ、旦那樣、お强飯のお殘りを下さりやせ。

町人　アヽ、無いく。附くなく。(ト施主の前へ行き、辭儀をする)。

佐五　これは早、今日はどなたも遠々の所、有り難う存じまする。めいくお宿へ上りまする筈にござりまするが、自由ながらこれにてお禮を申し上げまする。

町人　これは御丁寧。さぞお力落しでござりませう。

手代　どなたも遠方御苦勞に存じまする。

ト矢張り葬ひの鳴り物にて、町人皆々向うへ入る。爰にて鳴り物せはしくなる。

佐五　イヤア、お葬ひはもう濟むさうな。コレ、てまへ達はお歸りの衆へ、丁寧に挨拶しませうぞ。

手代　心得ました。

佐五　わしはちよつと行つて、葬る所をよく氣を附けてやらねばならぬ。アヽ、世話の多い事ぢや。南無阿彌陀佛。

トうろたへて門の中へ入る。引違へて杢助、信濃者の拵へ、淺黄の股引にて、炭俵を一俵天秤棒の先へつけ、寺の門より出てくる。

非人　ハイ、旦那さん、お強飯のお殘りを下さりやせ。

杢助　ナニ、お強飯をくれろ。飛んだ事をいふ乞食だ。今日の葬ひは饅頭だ。おらア五人前ひきまはして來た。てまへ達貰つたがあらば、此方へくれろ。國へ土産にするワ。（ト紙包を出して見せる。）

非人　アヽ、道理で旦那衆が下さらねえ。お鍋さん、強飯ぢやアねえ、饅頭だとよ。

非人　エヽ不景氣な、しみつたれな葬ひだの。サア、來なさい〳〵。

ト葬ひの鳴り物にて下座へ入る。門の內、ばた〳〵して、龜、序幕の形にて駈けて出て來る。跡より槌右衞門、麻裃、葬ひの形にて追つかけ出て

槌右　ソレ、泥坊だ、捕まへて下さい〳〵。

杢助　オツト合點だ。

ト追ひ廻はして龜を捕まへる。手代兩人、捨ぜりふにて立騷ぐ。門內より所化僧、麻の衣にて駈けて

出て

所化　何でござる、泥坊が捕まりましたか〳〵。

槌右　此奴太い奴では無いか。玄關で社衿を脱がうと思ふうち、ちよいと紙入れを拔きをつた。サア、返せ〳〵。（トこづく）。

龜　アヽコレ、靜かにしなさい〳〵。

李助　おのれ、あの旦那の紙入れとやらを返さぬと、毆りいがめるぞ。

龜　なんだ、このごうざい野郎め。いらざる事によく四文と出やァがつた。覺えてうしやァがれ。

皆々　サア、出さねえか〳〵。

龜　アイ、出すよ〳〵。（ト懷より紙入れ四ッばかり出し）サアこの内だ。貴樣の盜られたのを搜ねて取らつしやい。

槌右　取らいでワ。（ト四ッの紙入れをあちこち見て）オヽ、これぢや〳〵。（ト手前のを取つて懷へ入れる）。

所化　エヽ、太い奴だ、いつその事に野郎め、墓場の隅へ生埋にしませうか。

皆々　いつそ坊主、にさつしやい〳〵。

龜　とんだ事を言やァがる。（ト振り切つて逃げる）。

手代　泥坊々々。

ト追ひかけて向うへ入る。爰にて暮六つの鐘鳴る。

所化　さて〳〵、油斷のならぬ事でござる。時に今の泥坊めは、コレ、紙入れを置捨てにしをつた。

槌右　ほんにうろたへた奴でござる。アヽコレ、降りさうになつた。日が暮れずば持込むまい。アヽ、煩さい事だ。

所化　また葬ひでもござるかな。

槌右　エヽナニ些細な、至つて貧窮な貧乏葬ひが參るて。なんの人そばえな、死なずともな事を。

所化　アヽコレ、この紙入れは困つたものだ。

槌右　モシ旦那、わたしに下さりませぬか。

李助　この男はらつちもない、泥坊の物をか。

槌右　イヽエ、江戸では持ちませぬ。國へ土産にします。

李助　ハテ、らつちもない男だ。ソレ、持つて行かつしやい。

ト捨てる。李助拾ひとる。この内に前幕に五平太より拔いたる紙入ある。

槌右　これはお忝なうござりまする。どうで拔殼であらう。（ト紙入を拈くつて花道へかゝる）。

槌右　コレ、信濃者、ならうなら泥坊に返して仕舞へ。
杢助　さうしようかね。コレ、泥坊どの、紙入れをやらう。コレ、泥坊々々。
皆々　アヽ、らちもない男だ。
ト禪の勤めになり、所化僧、門内へ、杢助、槌右衞門向うへ入る。五つの鐘にて、この道具引いて取る。
本舞臺三間の間、向う黒幕、一面に玉椿の卒塔婆垣、所々に石垣、よき所に湯灌場、正面に今埋めし桶の緣出かゝり、その際に七本卒塔婆、大塔婆立てゝあり、寺男鍬を持ち、その際を掘つてゐる。すべて墓所の體。時の鐘、一つ鉦にて道具納まる。
ト向うより綱五郎、頰被り、一本ざしにて窺ひながら出て來り、花道にて
綱五　アヽ、どうやら降りさうになつて來たが、あの鐘がもう五つでもあらうか。門の出入りを案じたが、幸ひの所へ葬禮が來たので、それに紛れて……丁稚子供の云ふ事を、誠に思ふ淺はかながら（ト云はうとして向うを見て）アヽ、墓場に人が見えるわい。（ト本舞臺へ來り）モシ、物が尋ねたうござります。
寺男　オイ、なんだえ。この暗いのに恟りした。なんでごんすえ。
綱五　ハイ、モシ、今來て居る葬禮は、絲屋の娘御の死なれたのでござりますかえ。

寺男　なにサ、ありや淡島權兵衞といふ人の、かみさんの葬ひサ。絲屋の娘御は、それ〳〵、そこに埋めかけてござるが、番頭どのゝ來るまでは、土を掛けるなといふて行かれました。

綱五　アヽ、そんならこの埋めかけてあるのが、絲屋の廟所でござるかな。

寺男　さやうサ。（ト空を見て）アヽ、ぼろついて來た。あの番頭どのは、何をしてござるやら、ドレ、笠を取つて來ようか。

ト矢張り時の鐘にて、寺男、下座へ入る。綱五郎、跡を見送り

綱五　そんなら爰が、志して來た絲屋の墓。どうぞ人の目にかゝらぬうちに

トあたりを見廻して、塚の方へ近よつて思ひ入れ、この時向うにて

權兵　合點しねえぞ〳〵。

皆々　ハテマア、ようござるわいの〳〵。

ト人音するゆゑ、綱五郎うろたへ

綱五　アヽ、爰へ來るさうな。ドレ、湯灌場へなりと。

ト湯灌場の戸を明け内へ入り、戸をさす。かすめたる通り神樂、禪の勤め。向うより留六、前幕の形にて、誂への塔婆をかつぎ、築地屋と書いた弓張をともし、跡よりめど六、角助、股引やつしにて、女

布子のかゝりし早桶をかつぎ、權兵衞、編笠施主の形、木綿羽織、股引にて、片肌ぬぎ、立ちかゝるを、喜左衞門、股引、鳶の者にて、これをとりさへながら、權兵衞を押へつけて出る。所化僧、酒に醉うたる體にて、管を捲き、矢八、所化僧を宥めながら出て來り、本舞臺へ來て

所化　これサ、施主どの、出家を捕へて、どうするのだ〳〵。

喜左　ハテマア、坊さん、靜かに云ひなんしな。コレ、大屋さん、お前もいゝ加減にしなさいな。

權兵　これサ、喜左衞門どの、聞かつしやいな。このづくにふめが、おらが嬶アの髮剃をせずともよいとぬかしますワ。コレエヽ、夜夜中投込み同然に來た葬ひだといつて、さう安くする事はねえ。小石川では小口もきく淡島權兵衞といつちやア、七間間口の支配もする大家だぞ。髮剃がなぜ出來ねえのだ。なんぼ二百旦那だといつて、さう安くしやアがる事はねえわえ。

めど　これサ大屋さん、靜かにしねえな。長屋の手やひもゐるからの。お前のへこむ話もあるまいわな。

角助　道行は分つて居るわな。ナウ、頭、さうぢやござんせぬか。

喜左　さうサ〳〵、始末合はわしが付けるから、マア、わし任せにしなんしよ。

留六　大家さんのかみさんの葬ひだけ、長家の手合がこつそりと

矢八　持込んだ上、湯灌もべらぼうによく洗つて、髮剃の幕になつて、なぜなりやせぬえ。

留六　大家のかみさんの髪剃に、いさくさがあつちやァ、店子の者も外聞が悪い。コレ、坊さん。

所化　コレナ、この衆は野暮な事をいふ手合だ。湯灌さへ濟めば、髪剃は無駄なものだわな。それに今日は本町の絲屋の娘御の葬ひで、劍菱を片馬持込んで、寺中が豪氣に喰つたから、目はちらつくし、コレ、お施主さん、斯うさつしやい。二十八文持たせて、門前の髪結床へ遣りねえ。夜なべがあらう。あの下剃は豪氣に上手だて。エヽイ。(ト醉つた思ひ入れ)。

權兵　なんだ、俺が嚊ァを髪結床へやれ。コレエヽ、このデモ坊主め、それをうぬに教はるものか。絲屋の葬ひだといつて、おらだといつて、佛に替る事があるものかえ。この童心坊主めが。

所化　なんだ、この大家め、大風な事を云ふな、葬ひだ〱と、コレエヽ、初々しくくる佛なら、祝儀でもくれるものだワ。大所の犬猫は、これよりは結構なお葬ひをするわえ。髪剃をしたと云つて、高が布施は二十四文か。コレエヽ、氣のきいた夜鷹は床花にも貰ふワ。エヽ、大笑ひ、ちやんちやん坊主にでもして、ひつ天地獄へやりやァがれ、なんの事だえ。

權兵　このけづり廻しめ。權兵衞さんのお葬ひを、いきなりにけちを付けたな。この鍋太郎坊主め、ぶッ挫くぞ。

所化　何をこの長面め、怖いものかえ。

權兵　まだ太平樂を吐しやァがるか。どもくり坊主め。
　　卜留六が持つたる塔婆を取つて、所化をしたゝかぶつ。

皆々　これサ大屋さん、大概にしなさいな。

所化　オヽ、痛いぞ、御出家をぶつたな。コレ、施主がお寺をぶつても濟むか。和尚も頭は圓いが、心までが坊主ぢやァねえぞ。おれも三河島では小口も利いた鍋太郎道心だ。ウヌ、願人坊主の緒が切れたぞ。
　　卜絲屋の墓に立てゝある大塔婆を拔いてぶつてかゝる。これより皆々捨て臺詞にて叩き合ふ。寺男、鍬をかつぎ出かゝり、取さへる。矢張りかすめたる通り神樂、喜左衞門この中へ入り、

喜左　これサ、大屋さん、お前腹も立たうがね、なんぼ腹を立つたといつて、死んだかみさんの爲になるといふ話もねえわな。なんなら不承しなんしな。

權兵　そりやもう、內外世話をして下さるこなさんも久しい店子だ。大家たるべき者が、長屋の衆の挨拶を聞かねえも本意でもねえて。

皆々　さうサ〳〵。

權兵　鳶頭のこなさんの挨拶だ。可うごんす、濟ませやせう。

喜左　そいつは有難いワ。男は中つて砕けろだ。大屋さんも坊さんも、いさくさはわしにくれて、一つしめなさい。
皆々　サアサア、しめなさいしめなさい。
皆々　アヽ、よいよいよいよい。（ト手をうつ）。
権兵
所化　エヽ、お世話でござりました。
皆々　これは御不承でござりやせう。
喜左　コレ、坊さんは、ざつと佛の頭を剃つて遣りなさい。
権兵　なにサ、もうよしにしませう。昨夜までも抱寝をした嬶の髪剃を、亭主が見てゐたら、かうぞり程な血の涙が落ちて、精靈の爲にもなりますまい。
皆々　そこもあるね。
所化　時にお内儀は急な事であつたね。
権兵　さればサ、不斷息災な女でござつたが、食あたりサ。
皆々　何を喰はれました。
権兵　聞きなさい、鰒汁の中へ、天麩羅をさらひ込んで、ごまめ鱠の殘つたのを、こけいたまに喰つた

から、あかぎれが破傷風とやらになつて、がらり頓死しました。したが實正な女サ。息を引取るまで、大福餅の事を云ひ死に死にました。そこで、迷はねえやうにと、頭陀袋の中へ、大福餅を入れて葬ります。

喜左　さて〳〵、大屋さんは、かみさんには孝行だね。

皆々　こいつは御褒美が出やせう。

寺男　モシ、埋めてもいゝかね。

權兵　よしサ〳〵、わつさりと埋めて貰はうぞえ。

皆々　合點だ〳〵。（ト立ちかゝる）。

喜左　コレ〳〵、若い衆や、マア、その臺石をこちへ除けさつし。

留六　オット合點だ。

　ト石を動かせども動かぬ思ひ入れ。喜左衛門見て

喜左　これな〳〵、こつちへ退かッし。そんな事で動くものかな。ほんの事だが、わしが若い時は、大山の子安でも、王子でも、七十五貫といふ奴をやらかして三度さしたね。今時分の若い手合は、女を見るとびろつくが、力といつちやァ十六文がものもねえ話だ。その位な石は、わしには懐

へ入れて温石にするワ。退かツし。コレ、斯うやりねえな。
　ト片肌ぬいで臺石へかゝる。一向地離れもせぬ思ひ入れ。
皆々　どうだ頭、持てやすか〳〵。
喜左　待ちやな、斯うやらかしてナ。(ト動かせども一向動かぬゆゑ)こいつは今日はどうかしたわえ。日が悪いせゐか(トいろ〳〵あつて)アヽ、持てない筈だ。今日は親父の祥月命日だ。
皆々　エヽ、頭は負惜みか。サア〳〵、やらかせ〳〵。
　ト早桶を穴へおろし
喜左　こりやァ長屋の手合、御苦勞だね。
皆々　アイ〳〵。モシ、大屋さん、おめでたうござりやす
權兵　これはお世話でござりました、時に塔婆は何處へ行つたの。
皆々　今叩き合ひに使つたが、そこらに有りやせう。
　トそこらを尋ねる。留六、大小の卒塔婆を二本拾うて
留六　コレ〳〵、爰に二本あるが、大屋さんのはどれだえ。
喜左　ハテ、戒名があらう。坊さん、戒名は何といひやす。

所化　大家さんのかみさんは確か。オヽ、それ〳〵、さぼてん信女といひました。
留六　こりやァどつちがどうだえ。
所化　ハテ、愚僧にそれが讀めてたまるものか。大屋さんに見てもらはつしやい。
權兵　これはしたり、それが讀める位なら家主はしませぬ。一體大屋の物を書くは、長屋の者が馬鹿にしますヮ。大屋が明き盲だから、物を書く手合には店を貸しませぬ。
喜左　そこで長屋内はみんな無筆サ。
權兵　わしらが店は無筆長屋サ。
喜左　それだから長屋中が物知り澤山よ。コレ、大屋さん、斯うしなんし、委細構はず絲屋の方へ小いのを立てゝ、お前の墓へ大きいのを立てなさい。ハテ、大は小を兼ねやす。
權兵　成る程、錢の出る事ぢやァなし、大きいのが德だ。
皆々　さやう〳〵。
所化　ドレ、立てゝ進ぜう。
　　ト絲屋の卒塔婆を淡島の墓へ立て、小の方を絲屋の置土の方へ立てる。
皆々　サア、これで土を掛けうかの。

權兵　時に土を掛ける前に、一升さげて來たが、寺の臺所で、熱やつこでもしませうか。

皆々　なにサ、お構ひなされやすな。

喜左　併し、大家さんの志だ。一杯づゝ飲んで行かつしやいな。

皆々　さうしませうか。

權兵　サア、來さつしやい〳〵。

所化　これは寺の役德だ。

ト桶の上の布子を肩にかけ、皆々捨て臺詞にて通り神樂になり、この人數殘らず下座へ入る。この時五つの鐘、雨車の音して、向うより東林、赤合羽を着て、中間笠をかむり、駈けて出て來り、すぐに舞臺へ來て

東林　こいつはどうでも雨だわえ。あの番頭めを出しぬいて、お房が襟にかけたる百兩、あいつが來ぬ間に（トあたりを窺ふ。捨て鐘。桶の方へ近より、手早く繩を引切り、手をさしこみ、思ひ入れあつて）さてこそ總身のあたゝまり、二十四時が其うちはどうして。まづ此方は頭陀袋の百兩を

トいろ〳〵死骸の襟のあたりを尋ねる。この内綱五郎、戸を明けかけ、聞きゐる。

イヤアヽ、聞いたに違はぬ、慥かに小判で

ト財布を取らうとする。綱五郎蔭より出て東林を投げのけ、死骸の方へ近寄り、財布を浚ふ。

アヽコレ、それを

トさゝへる。立廻り、綱五郎、東林を取つて押へる。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、矢張り玉椿の垣の裏通りを見せ、溝堀の流れ灌頂、千部開帳札などを立てたる寺の裏通り、爰に佐五兵衛、頬被りにて裾をからげ、鍬を腰にさし、卷火繩をもつて、卒塔婆垣を外より破つて居る見得。雨の音、時の鐘にて道具とまる。

トすぐ忍び三重になり、鐵挺にて垣をこぢる思ひ入れ。

佐五 エヽ、折惡く降つて來たな。したが、この暗がりを幸ひに、桶の内なるお娘を引出し、コレ、この藥で(ト懐の紙入をたづれ、手にあたる證文を出し)アヽ、こりや、あの東林めが、お娘を殺さぬ受合ひの手形。慥か氣のつく藥は(ト藥包みと心得て、胡椒の粉の袋を出し)これだ〳〵。この藥を天水をもつて飲ませる時は、忽ち氣がつく(ト空を見て)ほんに、雨水がいつたわえ。それに俄にこの降りは、この佐五兵衛が正直を、天も感納まし〳〵てや。エヽ、忝い……併し、この寒さでは、なんぼ氣のつく死人でも、ひよつとこれぎり氣の附かぬ其時は、おれは誠に主殺し。また

首尾よく行く時は、内の後家御を騙かして、娘の襟にかけさせた、頭陀袋の百兩を取出して、色紙の質受け。ちつとも早く、寺へ忍んで

ト忍び三重、時の鐘、雨車の音。佐五兵衛、火繩をふつて、垣根を鐵挺にてこぢる。この時向うより九郎兵衛、竹の大笠を被り、跣にて、窺ひ〱出て來り、本舞臺を透かし見て

九郎 向ふの垣が大通寺の惣卵塔、夕方埋めた絲屋の墓は、本堂の左の方。それ〱

ト窺ひ來る。この時縫ぐるみの犬、佐五兵衛を吠える。佐五兵衛、鐵挺にて追ひ廻す。このうち九郎兵衛、合點ゆかぬ思ひ入れにて蹲まる。

佐五 誰だ〱、そこに居るは、誰だ〱(ト思ひ入れあつて)アヽ、犬ださうな。

ト九郎兵衛、につたりと笑ふ。佐五兵衛、垣根へ半身入る。九郎兵衛、扨はと思ひ入れ。この模様、時の鐘にて道具まはる。

元の墓所に戻る。爰に綱五郎、東林を引伏せ、頭陀袋の内の金をくはへ、爭ひ居る。片わきにお房の死骸、引出しある。兩人捨て臺詞の立廻りあり、東林をあてる。東林「ウム」と倒れる。綱五郎思ひ入れありて



綱五　噂に聞いたに違ひなう、死人の女が襟の金。この間に早う

トつか〳〵と行かうとする、雨車の音はげしく、雨水咽喉へ入りし思ひ入れにて、お房「ウム」とうめく。

ヤヽヽ、今の大雨に死人の女、息吹返せしあの樣子。今この者が云ふに違はず、二十四時がその内は（トお房をさぐり見て）こりやコレ惣身の溫まり、蘇生つたか。（ト思ひ入れあつて）人を助ける善根は爰のところ、昨日思はず手に入つた氣附を含めて（ト紙入れより藥の包を出し、飲ませんとして）イヤ〳〵、今この娘がよみがへつては、念がけて來たこの金が、綱五郞が手には入るまい。金が調はぬその內は、石塚氏の難儀となつた、色紙の質請……といふて今眼前に助かる女を、この儘おけば、死ぬるであらうし、見殺しにしては本意でない。助けて遣らうか……アヽ、助かつたらこの金が……手に入らねば大恩うけた彌三兵衞樣を、みす〳〵見殺し。此方を救へば娘の命、壽命のあるのを其儘に、見棄てゝどうも（トあちこちと思ひ入れありて）イヤ〳〵〳〵、こりや矢ツ張りこの女を助けた上にて、命があらば無心云うても、この金を借りねばどうも……よもや其時否とも云ふまい。オヽ、さうぢや。さうぢや。

ト持つた藥をお房に含ませ、手向茶碗を探りとりて、墓手桶の水を飲ませようとする。お房口を閉ぢ

て居るゆゑ、抱きかゝへて、薬も水も、口うつしに飲ませ、わが胸をあけ、お房を暖める思ひ入れありて

コレ、心が付いたか。コレ、娘御、氣を附けさつしやい、氣をしつかりと持ちませうぞ。

トあたりへ憚り、耳へ口をよせ呼びいける。お房、やう／＼心づきし思ひ入れ。ウムと又うめく。

コレ、女中々々、氣が附きましたか。心が附いたか。

ト耳に口よせ、きつと云ふ。お房、眼を開き、茫然として

ふさ　母さん、祝言は、堪忍して下さんせ／＼。（ト泣く。）

綱五　コレ／＼、母様どころかいの。母様はこゝには居ぬ。お前は一旦死なれたれど、コレ、甦つたのぢやわいの。（トお房が耳へ口をよせて云ふ。）

ふさ　エヽ、コレ、誰もゐやらぬかいの／＼。（ト呼びたてる。）

綱五　コレ／＼、爰は宅ぢやない、菩提所の墓所ぢやわいの。

ふさ　エヽ、そんならわたしや一旦死んで（ト思ひ入れ。）恥かしうござんす／＼。（ト泣入る。）

綱五　これサ、何も恥しい事はない。葬禮も濟んで、土へ埋んだお前、どうやら脈があるゆゑに、氣付を含ませ、介抱して、やう／＼お前は心が附いたのぢや。

ふさ　エヽ、すりやアノ、お前さんの御介抱で、わたしは心が附きましたかえ。

綱五　さうぢやわいの。

ふさ　そりやマア、有り難うござりまする。……さうしてあなたは、どういふ事で此やうに

綱五　サ、これは（ト思ひ入れあつて）もう斯うなつては隱すに及ばぬ。コレ娘御、わしはこなたの襟にかけてござる、百兩の金が欲しさに、寺へ忍んで、道ならぬその金、盜まんばつかりに

ふさ　エ、死んだわたしが、どうして金を

綱五　お前は知るまい。コレ〳〵、この頭陀の内に（トお房に金をさぐらせ見せる。）

ふさ　ほんに、こりや金。どうしてわたしや持つて居やんす。そしてお前、その金を

綱五　サ、道ならぬ事ながら、無ければならぬ百兩の金。ある所には大枚な、金を埋める葬禮と、聞いたが因果、夜に紛れ、助からぬ身の小の蟲、大の蟲なる侍ひの、命にかゝはる事ゆゑに、盜み心も浪々の、尾羽うち枯れし武士の果て。コレ、手を合せます。この樣子、必ず沙汰して下さるな。歸參いたさばその節は、きつと返濟するほどに、どうぞ貸して下さりませ、下さりませ。

と思ひ入れ。お房こなしあつて

ふさ　何ぢややら、わたしは存ぜぬ金の譯。一旦あなたの御介抱、命の親のお前さん、なんの否やを申

しませう。暗うて黒白はわからねど、お侍ひさんと仰しやるが、して又あなたは何れのお屋敷。

綱五　アイヤ、以前は侍ひ、今の身は、お前のお宅本町の、絲屋の門へ夜に入ると、お店のはしの占算八卦置きの浪人でござります。

ふさ　エ、アノお前さんが（ト恟りして、わが思ふ男ゆゑ、顔を見たきこなしにて）そんなら夜毎にわたしが門へ（ト思ひ入れあつて）エヽ、恥しうござんすわいな／＼。

綱五　これサ、何も恥かしい事はござらぬ。蘇生つてめでたうござるわいの。お前は寺へ便つてから、早うお内へ。私は人目にかゝらぬその内に、この金借りて立退きまする。浪人なれど本庄綱五郎といふ武士の果て。姓名明かして置くからは、必ず共に沙汰なしに。コレ、頼みまするぞえ。

ト金を持ち、振り切つて行かうとする。お房すがつて

ふさ　アヽコレ、待つて下さんせ。

綱五　サア／＼、尤もぢやが、この金借りても、今云ふ通り歸參の後は

ふさ　エヽ、わたしや金の事は知らぬわいな。あなたにちつと（ト立寄らんとして身節の痛む思ひ入れ。）アイタヽヽ。アヽ、こゝらがきつう痛むわいな。

綱五　さうであらう／＼。棺の内に一日二夜ござつたもの、身内が痛むは、こりや尤も。コレ／＼、そ

れにつけても、どうぞこの儘見遁して

ト行かうとする。お房縋つて

ふさ　アコレ、わたしも一緒に、連れて行つて下さんせ。

綱五　アヽ、らつちもない。お前は歸つてめでたう祝言。

ふさ　アヽコレ、その祝言が心にかゝつて、わたしや迷うて、蘇生つたであらうわいな。

ト恥かしき思ひ入れ。

綱五　コレ、男は格別、女子のお前を同道しては、この身に思はぬ密夫の

ふさ　サア、その樣な名が立つては、あなたは迷惑なされうけれど、わたしや疾うから見初めた殿御……こんな事申したら、あつかましい女子ぢやと、思し召すであらうけれど、お近附でもないお方へ、云ひよる品も內證で、下女のお芳に呑み込ませ、云ふに云はれぬ心のたけ。文と見せずにこの墨色、よう御覽じてと宛名も書かず、上げました事がござんしたが、あなた、覺えがござりますかえ。

綱五　オヽ、成る程、その樣な事もござつた。何處の下女やらこの間、コレ〳〵。（ト紙入れより文を出し）この墨色の判斷を、ようなされてと渡して行たゆゑ、披いて見れば女子の手跡。文は切なる戀路

の文、いづれの女中のいたづらに、某をなぶるのか、但しは外へやる文を、墨色との間違ひかと
思うて持つてゐましたが、フム、そんならお前が

ふさ　アイ。(ト顏を隱して思ひ入れ。)

綱五　アノ、眞實に

ふさ　サア、思ひこがるゝ心の內、文で推量なされてなら、可愛い事ぢやと、爰から直に

綱五　サテ、連れ立たうにも定まつた、聟のある身のお前の事。

ふさ　それで合點のないならば、矢ッ張りわたしを元の樣に、死なして置いて下さりませ。

綱五　どうして今更

ふさ　死なされぬなら、お否であらうと、願ひを聞いて下されますか。

綱五　(思ひ入れあつて)なんとせう、それ程までに思うてなら

ふさ　連れて行つて下されまするか。

綱五　いかにもこれから同道しませう。

ふさ　エヽ、そりやアノほんに

綱五　イヤ、これが誠に不思議の因緣、大方これも前生で

ふさ　結んだ縁の綱五郎さん、お前はわたしが命の親。

綱五　それ〳〵、慥かそなたの名はお房、偽りならぬ本町の

ふさ　その色絲の結ぼほれ、所もあらうに此やうに

綱五　サア、墓所の前での馴染めは

ふさ　どうした粋な

綱五　御先祖の

ふさ　お仲人にて思はずも

綱五　蘇生つたは

ふさ　わたしが仕合せ。今からどうぞ

綱五　見捨てはせぬ。

ふさ　アヽ、嬉しうござんす。（ト思ひ入れ。）

綱五　アヽ、かゝる珍事も

ト思ひ入れ。この時ちよつと月を引き出す。兩人抱く。よきキツカケにて又月隠るゝ。玉椿の垣ばつたりと音する。兩人恟りして

ふさ　オヽこは。

綱五　アヽコレ。

ト思ひ入れ。垣根メリ〳〵音する、綱五郎囁き、お房を介抱して、湯灌場の戸をあけ、内へ入り、戸をさす。矢張り雨の音。捨て鐘。よき所の垣を破り、佐五兵衛、巻火繩をふつて、窺ひ〳〵忍び込み、暗がりゆゑ火繩にて、今埋めし廟所の塔婆を探りあて、火繩をふつて、文字をやう〳〵讀む思ひ入れ。

佐五　容房院花月信女、施主本町絲屋。（トやう〳〵讀み）これだ〳〵。（ト探り寄つて早桶の繩を引つ切る。内より權兵衛女房おさや、女の死人にて、頭陀袋をかけ、經帷子の形、これを抱へて出し、探り見て膽をつぶし）ヤ、こりや白無垢ではない、帷子一つだ。エヽ、そんなら坊主めが剝ぎをつたか。エヽ、あのづくにふめが。（ト腹たてる思ひ入れ。懷の紙入れより以前の胡椒袋を出し、口うつしに飲ませるとて、うろたへて鼻へ入り、無性に嚔をしながら、花手桶の水を飲ませ）コレ、お房さん。（ト思はず聲高に呼び、心付きて小聲になり、耳に口よせ呼ぶ事あり。肌をさぐり見て）エヽコレ、惣身が氷のやうだ。（ト思入れあり、裸になり、布子をおさやに着せ、だき抱へ、介抱しても氣の付かぬゆゑ）ヤお房さんはほんまに死んだ、コレ、お房さん〳〵〳〵。（ト泣聲になり、うろ〳〵して）アヽコレ、死なれては事だワ事だワ。この藥で氣の附かぬは、エヽ、あの醫者めに騙られたか。マア〳〵、何よりは頭陀の內

の百兩、こいつが命（ト頭陀袋をさがし、内より大福餅を二ツ出し、肝を潰し）ヤ、百兩は無くて、こりやこれ慥か腹太餅だが

トうろたへる。この時九郎兵衞、佐五兵衞が出でし垣より忍び入り、窺ひゐる。

サア〱、無いワ〱。

トこれを九郎兵衞聞きつけ、死人の白き形を見つけ、扨はさきへ盗人まはりしかと駈け寄り、おさやを引附ける。佐五兵衞はうろたへ

ヤ、盗人はうぬだな。

トかゝるを見事に投げる。佐五兵衞、九郎兵衞にむしやぶりつく。この物音に、湯灌場の内より綱五郎、お房を介抱して窺ひ出る。九郎兵衞、おさやが掛けし頭陀の内をさがし、金なきゆゑこれもうろたへ、佐五兵衞を引附け、詮議せんとする。佐五兵衞は九郎兵衞が取りしと心得、逃がさじと組みつく。兩人立廻りのはずみに死人のおさやを引立て、これを枷に、小聲にて爭ふ。綱五郎、お房をいたはり逃げんとする。九郎兵衞白き形を窺ひ見て、お房の袖を捕へる。綱五郎この中へ入る。立廻りにて片袖ちぎれ、九郎兵衞の手へ殘る。佐五兵衞むしやぶりつくを、九郎兵衞立廻り、綱五郎、佐五兵衞が脱捨てし布子を拾ひ、お房に着せ、兩人花道へかゝる。矢張り此うち忍び三重、時の鐘、一つ鉦の念佛。向うより左五郎、半合羽、ぱつちの形、一本ざし下駄がけ、蛇の目の傘、花手桶へ樒を入

れ、提げて出て來り、花道にて兩人に行逢ひ、お房が白き形に惘りして、早足に舞臺へ來る。この時立廻りの兩人、左五郎へこけかゝる。これにて左五郎、また惘りする。佐五兵衛、「盜人め」と左五郎へかゝる。立廻りにて左五郎、佐五兵衛が下帶に挾みし紙入をとろ思ひ入れ。よき時分より、喜左衛門貳升樽を提げて、醉うたる體にて、捨ぜりふにて出て來り、氣を失ひゐる東林が上へフトこける。これにて東林心付き、起き上り、喜左衛門に武者振りつき、立廻り。佐五兵衛、おさやに組附く、四人間違ひの立廻り。九郎兵衛は白の片袖、左五郎は紙入れ、めい〳〵思ひ入れありて懷中する。綱五郎、お房をいたはり、花道にて躓く。この仕組とたん一度に拍子　幕

雨の音、時の鐘だらにて、幕の外を、綱五郎お房向うへ入る。ジヤギリ

四幕目　安野屋の場

役名。鳶の者、お祭左七。安野屋十兵衛。山住五平太。番頭、佐五兵衛。醫者、東林。信濃者、杢助。中間、角内。廻し男、儀助。丁稚、岩松。藝者、お絲。十兵衛女房、おらい。

本舞臺三間の間、安野屋といふ軒暖簾、「御鼻紙袋ぎれ煙草入品々」と書きたる看板つるし、下に門口、正面戸棚、納戸暖簾、よき所におらい、鏡立を置き、お絲が髮を直して居ろ。あたりに櫛だたう

取散らし、角の柱に紙屑籠かけてあり。岩松、臺箱に向ひ、煙草入を縫うてゐる。杢助、前幕の形にて、古き產所籠の掃除してゐる。深川相川町安野屋の店、通り神樂、てんつゝにて幕明く。

岩松　コレサ、杢助どん、こつちへ埃が來るわな。靜かにさつしやい。

杢助　ハテ、ちつとは埃が掛らう。不承さつしやい。さて〳〵鼠が、喰うたワ〳〵。

いと　モシ、おらいさん、ありや何の籠でござんすえ。

らい　ほんにお前方は知らんすまい。ありや產所籠というてナ、女子のやゝを產む時、あの內へ入つてゐるのぢやわいな。

いと　ハテマァ、をかしい形の物でござんすなァ。

岩松　モシ〳〵、おかみさん、伊勢屋から借りに來るのは、この籠でござりまするかえ。

らい　さいなう、お內儀さんが臨月ぢやというて、この間から借りに見えるわいな。

杢助　モシ、おかみさん、鼠の喰つた所は貼つて置きやせうね。

らい　さうして下さんせ。

杢助　時におかみさんえ、わしは紙入れの賣り物がござりますが、お內で買つて下さりませぬか。

ト前幕の紙入れを四つばかり出す。

らい　この人としたことが、こちの内はの、誂へ向きの紙入れは、お好み通りに拵へれど、古い紙入れの賣買ひはせぬわいな。

李助　エヽ、古いのはお買ひなされませぬか。この間拾うた紙入れがござりましたから、賣らうと思ひましたが、そんなら國へ土産にでも致しませう。

岩松　拾つた紙入れを誰が買ふものだ。大笑ひだ。

李助　ナニ、この小僧め。小い形をして、默つて仕事をしろ。

岩松　エヽ、おいてもおくれ。

らい　コレ、李助どの、こなさん用がなくばの、その籠の鼠の喰うた所を、一寸貼つておいて下さんせ。

李助　アイ〳〵、畏りました。貼つてあげやせう。

らい　そこらに紙が有らうわいの。

李助　ナニ、反故でもようござりやせう。待ちなさい、こゝらにあらう。（ト古き紙入れのうちより手紙その外、五平太が紙入れより證文を出し、何心なくひろげて）モシ、この書いた物は遣つてもいゝかえ。ちよつと見ておくれ。

トおらいへ反故を出す。岩松見て

岩松　アヽコレ〳〵、おかみさんはノ、書く事も讀む事もノ

ト思ひ入れ。杢助呑み込み

杢助　アヽ、おかみさんは物を書かつしやらぬか。それは御不自由、わしも書きませぬ。ハヽヽヽ。

トおらい恥かしき思入れにて

らい　サア、ものを書かぬは、我が不器用は思はいで、ほんに親達を恨むものいなう。

杢助　小僧どん、反故はおれがおごらう、糊を出したり。

岩松　オイ、合點だ。ドレ、糊をつけてやらう。

杢助　アヽ、また碌な事をすればよいが。

トてんつゝになり、岩松、杢助が出せし紙入れの反故をひろげて糊を付ける。杢助、產所籠の後の方、上の方を捨ぜりふにて反故にて貼る。お絲は顏を直して居る。おらい、三つ櫛の掃除して居る。向うより駕籠舁、四つ手駕籠をかつぎ、スタ〳〵と出て來り、門口へ來て

駕屋　ハイ、旦那のお歸りでござりまする。

らい　歸らしやんしたかえ。お前方、大きにお世話さまでござりました。

ト挨拶する。駕籠の內より、十兵衛、羽織、町人の形にて、衿巻頭巾、目拭を持ち出る。駕籠の者、草

履を直す。

十兵　これは駕籠の衆、これ迄は大儀でござつた。

かご　ハイ〳〵、左樣ならば明日からは、もうよろしうござりまするか。

十兵　もう療治も今日限りでござるて。

かご　それはおめでたうござりまする。この上お大事になされませ。

ト駕籠を擔ぎ、向うへ入る。十兵衞内へ入る。

いと　十兵衞さん、お歸りなされましたかえ。して、今日は、御鹽梅はどうでござりまするえ。

十兵　イヤモ、殊の外ようござつて、平生のやうでござるが、醫者どのゝ云はるるには、今日一日は點藥を致すがよい、明日からは煎藥ばかりでよいと云はれた。

いと　それはまア、おめでたうござりまする。わたしも春さきの所爲かして、今朝から持病の癪が氣ざしたやうぢやわいなア。

らい　とりかぶつて居なんすから、わたしが髮を撫で付けて上げたわいなア。ア、久しう醫者へ通ひましたて。

十兵　それはようしやつた。コレ、お絲さん。今日五平太樣がござりましたかな。

いと　イヽエイナ、まだござんせぬわいな。

十兵　して、左七樣は見えませなんだか。
いと　イエ、今日は見えずでござんすが、この頃二三度尋ねて見えても、逢うては惡いとあることゆゑ、逢はなんだので、もしひよつと（ト思ひ入れ。）
十兵　お絲さん、知らしやる通り、左七さんは赤城家の御家中、石塚樣の御子息。十五の年にお屋敷をお暇。もの固い彌三兵衞樣が、町人になされたいとわしへのお頼み。お世話申すその内に、喧嘩好きにて友達交際、喜左衞門といふ鳶の者も、石塚樣の御家來筋、その喜左衞門が子分となり、今ではいさみの町抱へ。この頃聞けば御親父樣には、定家の色紙紛失より、御切腹にも及ぶところ、身に引受けて、綱五郎樣の御浪人。確かに色紙は、お前をわしへお出入の緣で、預けさしつたあの五平太どのゝ仕業ぢやと、誰とはなしにその風聞。
らい　それに付けて此中から、二人がお前にのみ込ますに、さりとはマア合點の惡い。お絲さん、立合せられたこそ幸ひ、何であらうと、五平太さんの所へ行て
いと　アヽモシ、おらいさん、モウ／＼、どうぞ五平太さんの事は
らい　サア、そりやモウ、心に入らぬは知れてあれど、お前、左七さんをいとしいと、眞に思ひなさんすなら……ナア、こちの人。

十兵　それ〳〵、ちつとの内辛抱して、五平太どのへ身を任せ、その色紙の手懸りが知れさへすれば、跡の所は、何でもあのお人に、氣を許させて、その事を、サ、そこはお前の手段にあること。ハテ、何をするのも男のため。

らい　その色紙さへ左七さんから、綱五郎さんへ上げさんすりや、彌三兵衞さんの御閉門も許り、綱五郎樣が御歸參なされば、左七さんもその手蔓で、元のお侍ひにならしやんすといふもの。可愛い男の身の出世が、お前は否でござんすかえ。

十兵　左七さんに打明けて、云つた所が向う見ず、始まらぬ事と思ふゆゑ、首尾するまでは矢ッ張り主とも、ほんに緣を切つて見せにやァ、目代にうせるあの儀助が、マアのみ込まぬといふもの。それゆゑ此ごろ二三度、左七さんが尋ねて見えても逢はせぬは、首尾よく遣ふ下拵へ。こゝは一つ、お前の料簡、左七と末始終夫婦にならうと思ふなら、色紙の事を、お絲さん

いと　（いろ〳〵思ひ入れありて）成る程、この間からお前方が、いろ〳〵云うて下さんすけれど、左七さんを除けて、五平太づらと寢るが否なと思ふばつかり。可愛い男の御出世に、さつぱり心が付きましなんだ。その色紙の在所さへ、騙して聞けばよい事なら、人身御供に掛けたと思うて

十兵　五平太どのゝ心に隨ひ

らい　身を任す氣にならしやんしたか。

トお絲うなづく。

十兵　それでこそおまへ女だ。

らい　そんなら今にも五平太さんが、引取ると云はしやんしたら、機嫌ようして、合點かえ。

いと　サア、それもこれも左七さんと、跡ではどうぞ女夫にして

らい　そりや氣遣ひしなさんすな。

十兵　夫婦にしないでどうするものか。

いと　アノ、きつとでござんすぞえ。

十兵　知れた事サ。

いと　それさへ違ひのない事なら、うまう丸めてその色紙、あの五平太が業ならば、手懸りなりと、品なりと。

十兵　さういふ心に据つたら、今にも目代のあの儀助がうせる所へ、左七さんがもし御座つたら、すつぱり突き出して、向うへ行つたり。

いと　アイ。（トふさぐ思ひ入れ。）

らい　お前、未練ぢや行かぬぞえ。
十兵　ア、コレ、さうして綱五郎樣も御歸參をさせ申し、左七樣をも元の御身に（ト思ひ入れ）。
いと　モシ、十兵衞さん、付かぬ事ぢやが、その綱五郎樣といふは、久しい跡に奧勤めの女中さんとやらに云ひ號け、その仲人は石塚樣、綱五郎樣はお國詰の留守の中、御家來の若黨が、親御樣の金子を預り、奧女中と二人づれ、駈落ちとやら聞きましたが、そんならその時
十兵　ハテ、よう知つてござるの。こなさんの今云はつしやる、逃げた女の名は小絲、お前はお絲、ハテ、似た名でござるの。その小絲といふはお小姓の時分から、赤城の屋敷の奧づとめ。本町絲屋の惣領娘、この十兵衞が親方筋、暖簾も貰ふ筈なれど、それでは親仁の位牌所が絶えるといふて、親旦那のお指圖で、安野屋といふて仕馴れた商賣。小絲どのを連れて退いたは、十右衞門といふ若黨め。今にでも二人の在所が知るれば、綱五郎樣は女敵。小絲どのゝ親御樣、末期の際に十兵衞へ仰しやるには、不所存な娘、行くへ知れゝば町人でこそあれ、綱五郎樣の手前、現在親が助太刀して、娘めは助けてはおかれぬが、今をも知れぬこの老病、死んだ跡では、コレ十兵衞、そち助太刀して、主の娘であらうとまゝ、おれが遺言名代ぢやほどに、必らず憫れをかけるなと、お腹立の片頰にも、涙を零してわしへのお頼み。こりや有やうは助けてくれい、見遁がしてくれ

いと、末期の際の旦那のお頼み。

いと　ムウ。そして綱五郎樣が、女敵とやらが知れた時には、親御樣のつりばりで、あの左七さんも、そんな所へ。

十兵　そりや今も云ふ通り、左七樣の親御の咎を、身に引請けし綱五郎樣、殊に小絲どのを彌三兵衛さま、彼これもつて今にても、女敵二人に逢ふ時は、左七樣も是非とも助太刀。この十兵衛も主人の娘御、手出しのならぬ家來筋でも、親旦那の御遺言、ア、ならう事なら二人とも

らい　目にかゝらぬ遠い國に、ござんすればよいけれど。

いと　そりやモウ、小絲さんとやらは、幼稚い中から奥勤めと聞く。すりや勤めたは對手の男、何のマア、小絲さんとやらは、誠に騙されなさんしたのでござんせう。

十兵　サ、騙されたにもせよ、綱五郎樣の手前、今となつては、いとしい事ぢやが、浮世の義理。

らい　跡は妹のお房さん、それもいとしや俄の病氣、わたしが去年初産に、水子を一人殺してさへ、殘り多いと思ふのに、聞けばいとしや小絲さん、不義の男に添臥しの、お腹に宿せし一人子を、安産あるとその儘、棄てさんしたといふ噂。それも活計につきはてゝ

トお絲一々その身にあたる思ひ入れ。

十兵　これはしたり、何役にも立たぬ事。本家の絲屋に縁もなき小絲どの、悪者の十右衛門とやらいふ男めと、添うてござるは、親類内の面よごし。

らい　でも眞實の初子を、我が手で捨てるとは、マア、よく〳〵な

いと　さうでござんす。わたしもこの頃八幡さんで逢うて、あの子の年恰好、目許口許、どうやら兄さん

十兵　ヤ。

いと　サ、兄さんゆゑに、いかい苦勞もした事ぢやわいな。

トめい〳〵思ひ入れ、此うち杢助、産籠を貼り仕舞うて

杢助　ヤレ〳〵、貼つたぞ〳〵。さて、よく鼠めが喰ひ裂きをつた。ドレ、こゝへお日様があたるな。こちらを向けて（ト反故の方を表の方へむけて干す。）

十兵　オヽ、杢助か、何をしやつた。

杢助　ヘイ、産籠の繕ひを。旦那、何日頃いりますえ。

十兵　イヤ〳〵、モウ〳〵、今も女房が産の事を云ひ出して、アヽ、否な事やの〳〵。

杢助　モシ、旦那、嘘ばつかり、また近いうちでござりませうがね。

十兵　コレ、おらいや、産籠をなぜ爰へ持出したのぢや。

らい　さいナ、伊勢屋から借りに來やんしたによつて、鼠喰ひをこそくつてもらうたわいな。

十兵　アヽ、伊勢屋ではもう産きたか。ハテ、精の出る事ぢやの。ハヽヽヽ。

ト思ひ入れ。通り神樂になり、向うより五平太、羽織袴、大小にて、角内、中間にて、草履をつかみ出て來り、花道にて

五平　イヤナニ角内、忘れた事があるわえ。其方は佐賀町の會所へ參り、只今直に參る程に、米方のかかりの者に、他行致さぬやうにと申して參れ。

角内　ヘイ〳〵、畏りました。(ト行かうとする。)

五平　ア、コリヤ〳〵、もう此方へは參らずとよいぞ。矢張り會所に待つてをれ。

角内　畏りました。

ト通り神樂にて　引返して向うへ入る。五平太、門口へ來り

五平　十兵衞、宿にお居やるか。

十兵　これは五平太樣でござりまするか。サア〳〵、お通りなされませ。

五平　許しやれ。(ト内へ入り、上へ通る)。

十兵　コリヤ、お茶をあげいよ。
岩松　ハイ、お茶上がりませ。（ト茶を持行き、火鉢を出す）。
らい　五平太樣、ようお出でなされましたな。
五平　お内儀、この間餘儀ない物をお預け申して、お世話の段忝なう存ずる。イヤナニ、十兵衞どの、貴樣にもこの間話しました、あの深川の歸りがけ、儀助に渡した殘りの金、行違ひの女めに捲上げられたは、イヤモウ、武士にあるまじきしだら。それからやう／＼殘金の遣はし、今夜直に洲崎の寮へ引取る積り。目代の役には、あの儀助めを頼み置き申した。今日までは何かとお世話。コレ、お絲、晩から身が寮へ引取る程に、さう心得てゐやれ。
いと（思ひ入れ）すりや、わたしを洲崎の寮へ、今宵連れて行きなんすかえ。
五平　左樣々々、さぞ悦びであらうな。
いと　アヽ、わたしや折惡う持病で、（ト表の方を見て思ひ入れ）。
らい　ほんにこのお子は、今日は氣合が惡いというて、只今やう／＼髮も撫付けてあげましたわいな。
五平　それは存ぜず。して、少しは快いかな。コレ、東林坊を呼ばつしやるがよいぞや。
いと　十兵衞さんの今のお話、殊に晩には、寮へ行かねばならぬと思へば、一倍氣合が、

五平　ヤ。

らい　アイヤ、ちつとマア奥へ來て、炬燵へでもあたりなさんせいな。コレ、岩松、わがみも來て撫つてあげやいの。

岩松　畏まりました。

いと　左樣なら十兵衞樣。

十兵　オヽ、冷えさつしやるなよ。

いと　アイ。

らい　五平太樣、ゆるりとお話しなされませ。

ト通り神樂になり、お絲こなしあつて、おらい、岩松附いて奥へ入る。杢助、銜へ煙管にてぼつ〳〵眠り居る。

五平　さて、十兵衞どの、この間は何かと貴公のお世話、千萬忝なう存ずる。五平太、改めましてお禮申すて。（ト手をつく。）

十兵　これはしたり、左樣に仰しやりますると、却つて迷惑仕りまする。私し本家中根屋佐右衞門、初めまして御恩になつたお屋敷のお役人方、粗略には仕りませぬ。殊に當時御閉門仰せ付られま

したる石塚様は、別して御恩になりましたる私し、折悪う眼病と申し、本家の絲屋の娘の病死、かれこれもちまして存じながらの御無沙汰、申しませう様もござりませぬ。して、紛失仕りましたる色紙の行くへは、只今もつて相知れませぬかな。

五平　左様でござる。何奴が盗み出しましたやら、御大切の色紙、今以て相知れませぬ。して、貴公には眼病でござるかな。

十兵　左様でござりまする。付け薬いたしまする間、御覧なされませ、斯様に盲人も同然でござりまする。

五平　それは不自由でござらう。

トこの時杢助居眠りかゝり、産籠にて頭をうち、ふつと目を覚し

杢助　これはしたり、晝中に眠りこけるとは、アヽ不調法……南無三、日が陰つた。其方を向けませう。御免なされませ。（ト反故にて貼りし方を正面へ向け）アヽ、何か忘れたと思つたら、おせちを喰はなんだ。ドレ、お勝手でお振舞ひに預らうか。

十兵　オヽ、まだ支度前か。飯喰つて歸らつしやれ。

杢助　ハイ〳〵、左様なら旦那、せちに逢はう。ハヽヽヽ。

ト合ひ方になり、奥へ入る。五平太、産籠の形を見て

五平　アイヤ、十兵衛どの、この籠は何でござるな。

十兵　ヘイ、これは女中の産所へ置きまする籠でござりまする。

五平　ハア、この中へ入つて産みまするかな。

十兵　左樣さうにござりまする。

トこの時おらい、茶臺に茶碗を載せ、持つて出て

らい　ハイ、お煮花を入れました。お一つお上がりなされませ。

五平　これは忝ない。構はつしやるな〳〵。(ト茶碗をとる)。

十兵　モシ、五平太樣、承はりますれば、紛失の色紙が、神原屋とやら申しまする質屋にござりまする
との風說、いよ〳〵それに極まらば、マア何奴が致した儀でござりませうな。

五平　さればでござる。主人の寶を盜みまして、質物に入れるなぞとは言語道斷、手前屋敷では左樣な事
を致す奴は、町人になつた左七か、お暇の出た綱五郎か、いづれ此奴らは縛り首がものはござる
て。(ト産籠に反故と心得、五平太が手跡の色紙の證文はつてあるを見て)ヤ、この籠に、こりやマアど
うして。(ト驚ろく。)

十兵　五平太様、この籠がどう仕りました。
五平　サア、この籠が何とやら（ト證文を讀み見ることあつて）どういふ事で身が紙入れの
らい　エ、何でござりまするえ。
五平　イヤ〱、ナニ十兵衛どの、貴公、いよ〱眼病かな。
十兵　左様でござりまする。洗ひ藥も今日ぎり、もう晩程からは藥を罷めまする。アヽ、眼が我が物の様になりませうて。
五平　アヽ〱、それは困つた儀でござるの。
十兵　モシ、お聞きなされませ。私しが眼病でをりまするに、妻めが無筆。
らい　お恥しいが、わたしが一向讀書が出來ませぬゆゑ、一入不自由にござりまする。
五平　アヽ、お内儀は無筆でござるか。
十兵　左様でござりまする。
五平　それは重疊、御亭主が眼病に、お内儀が無筆。誠にこれは、似た者は夫婦とやらでござるの。ハヽハヽ。
十兵　何を仰せられまする。

五平　ア、イヤ〳〵。十兵衛どの、身共この産籠を借用致したう存ずるが、出來ませうかな。

十兵　それは早、お易い御用でござりまするが、女房、伊勢屋から借りに來たではないか。

らい　アイ、それゆゑ貼つてもらうておいたわいな。

五平　イヤ〳〵、御亭主、先約がござらうとも、是非とも借りねばなりませぬぞ。

十兵　イヤモウ、お貸し申すまいではござりませねが、私しが小僧めを、去年七夜の内に殺しましたゆゑ、あまり縁起ようない産籠でござりまするから。

五平　ア、イヤ〳〵、それはあやかりたいの。拙者子供はきつい嫌ひで、その上妻めが、宿へ歸りが遲いと、殊の外むづかしう申して、煩さい奴でござるから、今度の臨月がよい幸ひでござる、母めも産みまする子供も、一度にあやかつて死にまするやうに、願うてめでたう借用仕るて。

十兵　イヤモウ、その思し召しならば、隨分お持ちなされませ。

五平　お借り申さう〳〵。然らばこれより直に持參仕るでござらう。これはお暇申さう。

十兵　お歸りなされまするか。

五平　急いで歸らねはなりませぬ。（ト産籠を抱へた儘門口を出ようとして、出られぬ思ひ入れにて、手前の姿を見て）　イヤ〳〵、十兵衛どの、どうか晝中に、武士が斯樣な品を持參しては、道の程もいかゞ

でござる。こりや斯様仕らう、只今家來を寄越しまする間、きつと渡して下されい。

十兵　左樣なされませ。

らい　御家來へきつとお屆け申しませう。

五平　然らば直に遣はしまするぞ。日當りのよい方を向けておきませう。

ト證文の方を向うへ押付け、急がしさうに門口へ來る。

十兵　もうお歸りなされますか。

五平　直に取りに寄越しまするぞ。

ト合ひ方になり、一散に向うへ入る。

らい　何ぢやゝら、そは〳〵してお歸りなされましたわいな。

十兵　イヤモウ、氣の知れぬお人ではあるぞ。

ト杢助出て來り、產籠を見て

杢助　これはしたり、なぜ日蔭へやらつしやりました。まだ祿々に干もせぬものを。(トよき所へ取直す)

十兵　アイヤ〳〵、その籠は、今お侍ひ樣にお貸し申したて。

杢助　エヽ、お屋敷へ行きまするかえ。お手前遣ひだと思つて、反故で貼りましたが、お屋敷樣へあげ

るに、反故貼りぢやァ悪くはないかの。

十兵　アヽ、反故で貼つてあるか。それはマァどうしたものぢや。産籠は血の穢れもあるに、いかに物を書かぬというて、反故で貼るといふ事があるものか。アヽ、そりや貼り直してやるがよいぞ。

らい　イヽエイナ、わづか鼠が喰ひ裂いた所ばかりでござんす。ちよつと白い紙で、貼り直してあげませうか。

十兵　さうせいでわいの。杢助どの、手傳うてやつて下され。

杢助　ようござります。わしが貼りませう。モシ、おかみさん、糊を付けなさい。

らい　アイ〳〵、こゝに白い紙がござんした。（ト半紙の紙を出す）。

十兵　どれ〳〵、わしが糊を付けてやらう。

杢助　そんならわしはめくりませう。

十兵　ハテ、二度手間をさせる程に。

ト通り神樂、鳥追の合ひ方になり、十兵衞、半紙へ糊をつけろ。杢助、そろ〳〵反故をめくろ。此うち捨ぜりふ、反故の中に破ろゝ紙あり。

杢助　アヽ、こいつは破れた。

らい　よいわいな、引めくりなさんせ。

杢助　アイ、そこねぬやうにしやせうよ。

らい　アヽ、それ〱、破りなさんせ。

ト小さき反故はちぎれる。おらい丸めて、柱へかけ有る紙屑籠へ入れる。杢助證文をめくり

杢助　おかみさん、この反故は何處ぞへ貼りなさい。

らい　アイ〱、幸ひ櫛疊紙へ貼りかけうわいな。

杢助　オツト合點だ。（トおらいが櫛疊へ貼りかけおく）。

十兵　サア〱、外の事はおいて、籠を先へ貼りませうぞ。

ト火鉢へ五郎八茶碗をかけ、紅絹の裂れで目を洗ひながら指圖する。杢助、捨ぜりふにて籠を貼りしまひ

杢助　成る程、白い紙で貼ると、又よく見えるわえ。

ト矢張り通り神樂にて、向うより角内駈けて來り、門口より

角内　頼みませう〱。

杢助　ハイ〱、どれからござりました。

角內　イヤ、五平太方から參つた。產籠とやらを急に遣はされい。只今入用でござるとの事。早うお渡しなされませ〳〵。

十兵　これは御苦勞、直にお渡し申すがよい。

杢助　アイ〳〵。折助さん、お持らなされませ。（ト產籠を門口へ出す）。

角內　エヽ、これでござりまするか。ハテサテ、持にくさうなものでござりまする。これは籠でした竈かな。珍しい道具だ。

杢助　これは御苦勞。

角內　お暇申します。

ト通り神樂になり、引擔いで向うへゆく。向うより五平太、いきせきと出て來り、花道にて行合ひ

五平　コレ〳〵角內、何を致してをる。

角內　イエ、何も致しませぬ、直に持つて參りました。

五平　エヽ、埒のあかぬ、して、產籠はそれか。

角內　左樣でござります。

五平　（よく〳〵見て）イヤ〳〵〳〵、これではない、違うた〳〵。

角内　でも、これを渡しました。

五平　黙りならう。肝心の反故を貼つてない。

角内　何か存じませぬが、これを渡しました。

五平　エヽ、たはけづらめ。これではないわえ。サア／＼、うせう／＼。

　　ト通り神樂にて、すつと内へ入る。

らい　これは五平太樣、只今御家來衆が

五平　サア／＼、その儀でまゐつた。あの籠は違ひましたな。

らい　イエ、違ひませうやうは

五平　イエ／＼、違ひました。身共が好みは反故貼りの産籠。こりやこれ殘らず白紙を以て

十兵　エヽ、その事でござりまするが、お聞きなされませ、産籠のこそくりを、反故で致したさうでござりまする。あまり辨へのない事と存じまして、唯只白紙で貼り直しおきました。

五平　ヤ。（ト恟りして）コレ／＼、十兵衞どの／＼、してその反故は、どう致されましたな。

らい　エヽ、その反故でござりまするか。皆ひとつに致しまして、あの紙屑籠へ捨てましてござりまする。

五平　ナニ、あの反故は紙屑籠へ。
らい　左様でござりまする。
　　　ト五平太、紙屑籠をきつと見て
五平　したり、ハテサテ、結構な紙屑籠でござる。アヽ、見事な古びの鰮梅、誠に天晴れのお道具でござるわい。
らい　これはしたり、龜井町で十八文で求めました。
五平　ハテサテ、それは下直な儀でござるな。なんと御亭主、物は相談でござるが、あの紙屑籠を内の紙とも、身共にお譲りなされぬかな。
　　　ト十兵衛思ひ入れあつて
十兵　エヽ、左様ならこの產籠は、御入用でござりませぬかな。
五平　左樣でござる、折角所望仕つたが、產籠はお返し申して、其かはりに紙屑籠を頂戴したいな。
十兵　それは早お易い事でござりまする。勝手の隅の、うす汚い紙屑籠がお好みとは、ア、味な物好だ。
　　（ト思ひ入れ）あの屑籠は、親仁が代から持傳へ、いはゞ大事の
五平　サヽ、左樣見受けた。親代々の道具ならコレ（ト金子三兩出し）些少にはござらうが、晩方までも

お絲を貴公に預けおく、この程よりのお世話のお禮、お内儀へ金子三兩、請けて下され。

らい　モシ、こちの人、五平太樣がこの金子を

十兵　お氣の毒には存ずれど、折角あなたのお心ざし。

らい　そんならお貰ひ申しまして。

杢助　産籠がはりの紙屑籠（ト取つて渡し）これでござりまするかな。

五平　近頃もつて忝ない。コリヤ、角內、大切な籠、持參いたせ。

角內　ヘイ。

ト紙屑籠を持ち、五平太先へ門口へ出る。

十兵　五平太樣、もうお歸りでござりまするか。

五平　暮方迎ひを遣す間、お絲をその節渡しておくりやれ。

らい　左樣なら五平太樣

五平　十兵衛、眼病大事に。

十兵　ようお出でなされました。

ト唄になり、通り神樂にて五平太先に立ち、籠の內の紙屑をひろげては捨て、改めては捨て、傍より

角内、紙屑籠を差出しながら尾いて行く。門口の犬、紙屑拾ひと思ひ、吠えかゝるを、角内、竹みつをぬいて、シイ〳〵と追ふ。岩松出かゝり居たりしが、これを見て、暖簾掛けの竹をもつて

岩松　オヽしき〳〵〳〵。

トけしかける。五平太は側目もふらず、紙屑ばかりひろげては捨て〳〵、この人數向うへ入る。十兵衛、杢助殘る。丁稚奥へ入る。

杢助　成る程、紙屑籠が三兩になるとは、お江戸はとんだ物が値がしますね。

十兵　茶人の癖で、いろ〳〵な物好はあるものながら、あの五平太樣は、眞逆さういふお人でもなし、殊にあんな紙屑籠。（ト考へる）。

らい　エヽ、何の役にも立たぬ事を考へなさんすは、氣を遣うて、目の毒ぢやわいな。

十兵　イカサマ、云やればそんなもの。ドレ、ちと奥で目を休めうか。

らい　お前寢轉びなさるなら、風引かぬ樣に搔卷でも……ほんに中じきりの障子へ、猫めが穴を明けをつた。大抵モウ寒い風が……杢助どの、お前、糊次手に、ちよつと塞いで下さんせぬか。

杢助　アイ〳〵、その貼り序に、小僧どのゝ頭もはつて遣りませう。

らい　何を云はしやんすやら。コレ、その產籠も、奥へやつておいて下さんせ。

十兵　オヽさむ……寒だけ立たずば、暖かになるまいぞ。

ト唄になり、十兵衞先に杢助、産所籠を持つて、この中へ糊盆刷毛をいれ、ひつかついで奥へ入る。おらい、そこら方付けてゐる。通り神樂になり、向うより儀助、羽織ばつち、尻はしよりの形にて、額へ膏藥をはり、足早に出て來る、儀助を見えがくれに左七、頰被りをして出て來り、儀助は直に舞臺へ來て

儀助　さて、ようお日和が續きますな。(ト云ひながら内へ入る)。

らい　オヽ、儀助どんでござんしたか。今のさき山住樣より

儀助　アイサ、その事で參りました。お絲さん、奥にでござりますか。

ト煙草盆ひかへる。この内左七舞臺へ來り、門口より内を窺ふ。

らい　アイ、今日は今朝から癪が痛いというて……お絲さん〳〵、儀助どのが見えたぞえ。

いと　(奥にて)なんのマア、見えいでもよい事を

ト鳥追ひ唄の合ひ方になり、奥よりお絲出て來り

オヽ、儀助どん、毎日々々こなさんの役も、大儀な事でござんすな。

儀助　サア、あの山住樣のお頼みで、左七に逢はせぬ目代の役。意地の惡いと思ひなさらうが、せう事

がござりやせん。時にお絲さん、とんだことが有るものさね。それ、いつぞや八幡で、お前が可哀さうだと、金を一兩やりなすつた、七つ八つな乞食の娘、あの晩に寺町で、〆殺されて死にやしたとサ。

いと　エヽ……そりやアノ、ほんの事かいの〳〵。

儀助　サア、そこで死骸は小屋へ引取つたといふ事。菩提の爲に守り袋を、回向院の地藏樣へ納めてやつたと、あの折の女太夫が、守を見せてわしへの話し。お前が可愛がらしつた事だによつて、二朱も貰うて付けて遣らうと、守は預つて、コレ、持つて來たが、定めてあの壹兩の金に、目をかけての事でごんせう。惨いこつちやアござりやせんか。（トお君が守袋を出して見せる）。

いと　ほんにこりや、あの子がさげてゐた守り袋。そんならその時わしがやつた金ゆゑに……斯ういふ事と知つたなら、現在姪の事ぢやもの……イエサ、現在目のまへ見た子の事、可哀さうにと思ふもの、知つてか知らぬか兄さんが……イヤ、親が聞いたら悲しからう。儀助どん、この守りはわしが納めて、お念佛でも唱へてもらうてやらう程に、こりや此方へ置くぞえ。

トこの臺詞のうち、氣兼して憂ひの思ひ入れ。

儀助　成る程、お前は奇特ものだぞ。

ト此うち門口にて左七樣子を聞き、この時明けてズッと内へ入り

左七　御免なさい。

儀助　ヤア、こなたは左七どん。

トこれにておらい、ちやつと有合ふ衝立にてお絲を隱す。

左七　アコレ、おらいさん、何もさう隱す話はない。道理で此頃うち尋ねて來ても、逢はせないと思つたて。こりやァなんだの、あの侍ひめに金轡でも箝められて、慾の深い女性根、こりや向うへ廻るのだな。よしサ、とち萬人並んでも、左七さんが色事を遊ばしたあのお絲、彼奴も又、隱されて賴光谷を通りはしまいし、默つて居る氣が知れねえ。ヤイお絲

ト衝立の側へ行かうとするを、儀助引戻して

儀助　待ちやれ。こなたには用が有るワ。

左七　ナニ、おれに用がある。

儀助　オヽ、此中内から尋ねてゐた。よう先度はわしが額を打割つたといふ事か。癪にさはつたせうがにやァ、未練みしやくがあるものかえ。それがどうした。

儀助　どうしたも凄まじい。人の頭へ疵を付けて、それから今日まで挨拶なし。外科から醫者から買ひ藥、〆めて見たなら一兩二三分、サア、たつた今寄越してくりやれ。

左七　この耄碌め、とんだ御託を上げやァがるな。コレ、人の頭を打こはして、五文出した話はないわえ。そこを退きァがれ。

ト引退けるをまた止めて

儀助　イヤ、さうは云はせない。話がならざァ見えがゝり、預けてなりと出入をするが

左七　そりやァどうとも勝手にしろえ。マァそれよりは

ト振もぎつて行くを、おらい隔てゝ

らい　待ちなさんせ、左七さん、何ぼ心易いこちの内でも、さうヅカ〳〵と、ほんにマァ不躾な。成る程、お絲さんは此方ぢやけれど、五平太樣から預かり物、お前との譯も知りながら、逢はしてはこちの人が、五平太樣へ立ちません。それぢやによつて逢はさぬ程に、サア、歸らしやんせ〳〵。

左七　インニヤ、歸るまい。斯うなつちやァ敵の内でも、親の内でも、そんな立てわけがあるものか。逢はせまいといふ程、逢はにやァならない。エヽ、そこを退かつせえな。

ト引退ける。儀助捨ぜりふにてとめる。三人この立廻りに衝立を打かへす。お絲、煙草をのんで居る。

お絲、わりやァなぜ默つてゐる。サア來や。(トお絲を連れて行かうとする)。

いと　何處へ行くのぢやえ。

左七　知れた事よ。これからおぬしが願ひの通り、連れて行つて女房にして、どいつらにも鼻をあかせてやらア。サア來やな。

ト手を取つて引つ立てる。お絲、その手を振切つて

いと　おかたじけ。

左七　エ。

いと　左七さん、わたしやもう藝者ではないぞえ。五平太さんのお蔭で座敷を退いて、奥さんになる身の上でござんす。それにマァ小石川三界、そしてほんの内でもない所へ、ほんに馬鹿らしい、誰が一緒に行くものでござんす。

左七　べらぼうめ、いつもとは違ふワ。人を焦らすも目かりを利かせろえ。コレ、何奴も此奴も向う面た。こんな小胸の悪い所にゐる話があるものか。サア、じやらけずと、立て〳〵。

いと　否でござんす。(ト合ひ方)。左七さん、ついしたことの張合ひで、お前と色になつたけれど、もうさつぱりと切つたほどに、さう思つて下さんせ。

左七　エヽ、思ひつきでもない。戯談云はずと、きり〳〵しろえ。
儀助　お絲さん、そんならお前眞實に、五平太樣の奥樣に、なりなさる氣になんなすつたか。
いと　儀助どんの知れた事ばつかり。百五十兩といふ金出して、退かせて下さんした五平太さん、男はともあれ、その心意氣に惚れたゆゑ
らい　此方に斯うして居なんしても、早う側へ行きたいの、イヤどうしての、かうしてのと、餘りの事で、聞きにくい樣な事でござんすわいな。
儀助　それがほんならお前の仕合せ。門端へも寄せない五平太樣を、さうなさるといふは、成る程女は、金と辛抱だてな。
左七　（思ひ入れあつて）ムウ、先刻つから云つた事、酒の癖だと思つて居たが、お絲、おぬしやァほんに玉がへりか。

トお絲なんのといふ思ひ入れ。

らい　アモシ……そこが浮世のみんな金づく。めん〳〵の身を考へたら、さういふ氣にもならうかいな。
左七　そんなら一旦五平太に、立金させる狂言だと、今までのろく思つて居たが、お絲、眞實しめえ、

さうした氣に

いと　ほんにお前も酷い自惚れ。成る程初手は五平太さんが、否で〱ならなんだれど、よく〱わたしを思うてなりやこそ、今時百五十兩といふ物出して、座敷を退かせて下さんした、その眞實がいとしうなつて

左七　おれが事は無茶にする氣か。

いと　無茶にする氣になつたりやこそ、この頃尋ねてござんしても、隱れて逢はぬぢやござんせんか。その前後の見分けもなう、又も尋ね探して、ほんに阿呆らしいと思ふ程、一倍愛想が……マアよう積つても見なさんせ。五平太さんの方へ行きや、御苦勞なしの御新造樣。お前の女房になる時は前垂れ帶の裏屋住み、潮來節ではなけれども、手鍋提げよと口では云へど、實は乘りたや玉の輿、マア乘換へさうなものかいなア。

左七（むつとして）默りやアがれ、おたふくめ。うなアその筈ぢやアあるまいがな。しがない事も、ひつてんも、合點づくで言ひ交し、ぱつと浮名も辰巳ぢやア、人に知られた仲ぢやアないかえ。今更性根が腐つたと、どの面でぬかしやアがる。コレ、色にも相應義理があるぞよ。

いと　なんの、義理に搦まれ紙子着て、隅田川へはまるやうな、阿呆が當世あらうかいな。

左七　こいつはもう打ちやつちやァ
ト盤板をもつて立ちかゝる。おらい、儀助とめる。
儀助　コレ、こなたは滅法界な
らい　マアそれでどうさんすぞ。
左七　どうする物か。叩ッ殺しておれも死なァ。退きやァがれ。
ト両人を突退け、又かゝるを、儀助とめる。おらい、お絲を囲ふ。
儀助　コレ、死ぬなら額の算用しやれ。
左七　喧しいわえ……エヽ、あまめ。（ト儀助を引のけ、お絲へ立ちかゝる。）
らい　お絲さん、危ないわいな〳〵。
儀助　此方の方の付かないうち、さうはならない〳〵。
ト取付くを投退ける。この中へ奥より十兵衞出て来る。
左七　サア、あまめ、そこへ出ろ〳〵。
十兵（左七をとめて）待たつせえ、左七さん。
左七　エヽ、退きやァがれ〳〵。

十兵　コレサ、わしだよ、十兵衛だよ。（トきつと云ふ）。

左七　十兵衛どの、退かつしやい〳〵。

十兵　イヽエ、なりませぬ、わしが内でどうしたものだ。マア、靜かにさつしやい〳〵。（トなだめる）。

左七　十兵衛どの、マア聞いて下さいまし。

十兵　ハテ、聞かないでも知つて居ます。無法も程があるものだ。そしてマア、いつの事か知りませぬが、あの男の頭へ疵を付けて、それなりけりにしておいちやア、向うで腹を立つのも尤も。料簡付けてやらつしやりませ。

左七　十兵衛どの、料簡を付けてやれたァ

十兵　おらい、先刻の金をもつて來い。

らい　アイ〳〵。（ト五平太より取りし金を持つて來て、十兵衛へ渡す）。

十兵　サア、これをやらつしやりませ。（ト左七へやる）。

左七　ナニ、あいつにこの金

十兵　ハテ、さうぢやァござりませぬ。もし、でんどへでも出る時にやア、お前の體にそれほどな……サア、早くやつてしまはつしやりませ。

左七　ヤイ儀助、ソレ、療治代三兩あるぞ。受取りやァがれ。(ト儀助へ投付ける。)

儀助　恩にもひらにもならない金、取らないでどうするものか。(ト金をとる)。

左七　サア、これからあの畜生めを(ト立ちかゝる)。

十兵　コレサ、こなさん、先刻からわしが出たなら、氣の毒だらうと、寢たふりをして居ましたが、尤もお絲どのと、固い約束の事もありませうが、そこをあの子も振切つて、五平太様の所へ行くにやア、譯があらうと推量して……サア、譯はなけれど抱への身、親方任せにならにやアならない。一つは身分の片付どき、慾もちつとは人間だもの、知らにやァ立たぬ今の世の中。突出されたが口惜しいとて、切つはツつはわが恥を、大きく觸れるやうなもの。さつぱり斷れておとなしく、ナ……それ、緣さへありやア又、どうか、マア、そんな事は儘にして、退いてやるのはお前の爲、イヤサ、あの子のため。左七さん、男らしくさつしやりませ。

左七　イヽエ、男らしくしますまい。世話にもなるこなさんのいふ事だが、この儘ぢやァ顏がよごれる。

十兵　サア、その顏も又立つ時が

ト此うちお絲煙草をのんで居て

いと　アヽ、もし十兵衛さん、もう構はずと捨てゝおかしやんせ。彼方で何と云はうとも、わたしさへ

五平太樣の方へ行きや、相手のない一人角力、酒呑んで見て居るわいな。儀助どん、さうぢやないかえ。

儀助　お前、何時の間によい料簡になんなすつた。(ト思ひ入れ)。

いと　ハテ、ぞつこん惚れた……といふではなし、藝者の色と髷結ひは、かけ流しがよいわいな。

左七　さうぬかしやアこの左七を、汝はてんから遊ぶ氣だな。

いと　のろいお前と思つたゆゑサ。

左七　ウヌ、その口を。

ト飛びかゝつてお絲を引摺り倒す。十兵衛さゝへて

十兵　コレサ、どうしたものだ。女子どもを捕まへて、怪我でもさせりやなりませぬよ。さりとはほんに料簡の惡い。

らい　マア、こゝを放しなさんせ。

ト云ふを十兵衛、おらい、やう／＼に引放す。儀助、お絲を介抱する。

左七　否だ／＼。

十兵　コレ、今夜この子は五平太樣へ行く身體だ。明日來てわしに言ひ分云はつしやりませ、わしもそ

の時とつくりと……サア、今日の騷ぎの禮も云ひます。

らい　サア〳〵、左七さん、歸つて下さんせ〳〵。

左七　歸らないでどうするものか。もう賴んでも居やァしない。ヤイお絲、いつか一度は綱五郎どのに逢ひもしよう。その時ぅぬはあの人が、親父樣の刀の前で、行末永く夫婦になれと云はれた事を氣の毒にやァ思やァがらぬか。そればつかりか、この左七はな（ト口惜しき思ひ入れ）。

いと　サア、それも緣づく、夢と思へば濟むわいなァ。

左七　エヽ、うぬはなァ〳〵。

トふるへる。お絲煙草をのみながら

いと　儀助どん、晩から洲崎の寮へ行つて、五平太さんとしつぽりと、積る話をしようと思へば、わしや今から樂みぢやわいな。

左七　エヽ、いま〳〵しいその頤たを

ト立ちかゝるを、皆々支へる。儀助、後より抱へる。此はずみに煙草盆を蹴返し、左七儀助ともに仰向けに倒れ、左七、起ながら手に當る茶碗を持つて

はッつけあまめ。

　　　　　ト お絲へ打付ける。皆々思ひ入れ。

いと　氣が違うたさうな。

　　　　ト左七、儀助をとつて投のけ

左七　覺えてうしやァがれ。

　　　ト曲撥になり、ツイト向うへ走り入る。お絲思ひ入れ。儀助起上り

儀助　とんだ目にあはしやがつた。

らい　お絲さん、お前これでさつぱりとしなんしたであらうな。

十兵　成る程、あのお人さんも、ちつと思案をして見たら……正月しまから緣起でもない、儀助どん

　どこも痛めはさつしやれぬか。

儀助　イエ、何サ、腰の骨を打つたばかりサ。時にお絲さん、よくお前すつぱりと切れなすつた。有や

　うはこの頃から、口ぢやァ退くと云ひなすつても、どうしてと思つて居たが、今ので感心、この

　事を五平太樣に話したら、尾をふつて嬉しがらつしやるでござりませう。

いと　なんの、嬉しがつてもらふとて切らうぞいな。この身の爲を思うたりや、ちつとも早う譯いうて

　五平太さんにも氣おきなう、お世話にならうと、それでさつぱり。（ト癪のさし込む思ひ入れ）。

らい　お絲さん、また癪がいな。

十兵　コレ、氣の弱い……イヤ、氣の勇む折は、癪の起るものだ。それに、熱燗にして二三杯、そんな時には飲むがよい。

らい　それ／＼、そんな事がようござんせう。儀助さん、お前も一つ

儀助　イカサマ、迎ひの駕籠の見えるまで、御相伴いたしませう。

十兵　おらい、昆布鱈でもこしらへやれ。

らい　アイ／＼。サア、お絲さん

ト　お絲矢張り思ひ入れ。おらい見かれ

エヽ、これはしたり……まだ胡椒があつたかしらん。

ト鳥追唄、通り神樂になり、おらい、お絲をせり立て、儀助ついて奥へ入る。十兵衛煙草のみながら思案して居る。ト直に向うより佐五兵衛。羽織ぱつち尻はしをりにて、急ぎ足に出て來り、直に舞臺へ來て

佐五　十兵衛樣、お宿にござりますか。

十兵　その聲は佐五兵衛どの、さぞお娘御の御病死で、何やかやとこなさんのお骨折、内の者どもゝ言

ひ暮して居りまするて。

佐五　何が〳〵。それに付いて、大變な事がござりまするて。

十兵　ヤヽ、何が〳〵

佐五　イエサ、マア葬ひめでたく終つて、娘御を穴へも葬り、シャン〳〵と手を打つて歸りましたその夜のうち、火しやが見入れてさらつたか、但しあの世も江戸のやうに、大雪でも節々降つて、往來でも止つたゆゑ、蘇生つてどこぞへか、桶を破つて死骸は種なし。十兵衛さん、もしお内へは見えませぬかな。

十兵　それはまづ怪しからぬ事。知つての通り、わしも今内證で、絲屋へ出入りはなれど、御一家方の前もあれば、御病死の知らせもないゆゑ、態と葬送にも行きませぬが、ハテ、とんだ事もあるものな。

ト思ひ入れ。また鳥追唄、通り神樂になり、向うより東林出て來り、直に舞臺へ來て

東林　百川東林、お見舞申す。（トずつと内へ入る）。

十兵　これは〳〵東林樣、ようお出でなされました。

東林　何かお絲どのが御不快ゆゑ、見舞ひまするやうにと、山住氏の先刻仰せでござつたが、大方春氣

で逆上の氣味でござらうてや。（ト佐五兵衛を見つけ）ヤア、、絲屋の番衆、この間の跡金はどうして
下さる。

佐五　東林さん、お前もよい氣な事を云ひなさい。もうきなかも遣られるものかな。

東林　なぜ〳〵。公、そりやァわからんぜえ。ソレ、三十兩と價を極めて、手附に五ヲヤ受納して、ソレ、跡金が天神樣の御緣日、請合ひ通りころりと、ソレ、お娘はいきみんたん。

佐五　シツ〳〵。

それを云うては惡いと思ひ入れ。東林これに氣も付かず

東林　あれは愚老が家傳の一藥、外へはなか〳〵施さねど、公が達てのお賴みゆゑ、その金に子の日と一炷きの薫りはのめく奥座敷。（ト河東節を一口かたり）コレ、少とつら山の武者所、あやま針の料簡がならないといふ奴だの。

佐五　エヽ、よく洒落る醫者ッぽうだぞ。コレ、あの藥でやらかす事は味くやつても、肝心の治す藥にどこの國に胡椒の粉をあてがつて、水つ鼻やら、くさめやら、その上とんでもない死人を掘出し
エヽイ、その臭ひとした事が、思ひ出しても、アレ〳〵、エイ。

十兵　そりやマア、なんの話だえ。

佐五　エ。

ト兩人心づき、ぎよつとする。

十兵　本家の娘御お房樣が、急死の樣子、今の話し。こりや二人をたゝいたら

ト佐五兵衞東林、顏見あはせ思ひ入れ。

ハテ、娘御にしろ、死骸にしろ、御新造樣が、さぞ大體な事ではあるまい。

ト思ひ入れ。時の鐘、通り神樂になり、向うより駕籠舁き、四手駕籠をかつぎ出て來る。左七、頰被りをしてこの後を尾け出て來る。駕籠舁き直に舞臺へ來て

駕由　安野屋十兵衞樣はあなたでござりまするか。

駕乙　洲崎へ參るお迎ひ駕籠を持つて參りました。

十兵　オイ〳〵、それはお世話でござりました。……お絲さん〳〵、アレ、迎ひの駕籠が來たによ。

ト奥にて

いと　アイ〳〵。

トこれを聞き、左七、下の方へ小隱れをする。ト鳥追唄の合ひ方になり、奥よりお絲、儀助、おらい、行燈を持ち、出て來り

そんならおらいさん、わたしや、もう參りますぞえ。
らい　なんぼ知つた同士でも、今夜何かをかしからう。わたしや明日、お悦びに行かうわいな。
佐五　誰だと思やアお絲さん
東林　ハア、そんならいよ／＼洲崎の寮へ。
儀助　アイサ、今夜から、晴れて五平太樣のおかもじ樣サ。東林さん、お前もこれから一緒にいつて、飲みかけ山からこの方、大洒落はどうでござります。
東林　そいつは有がたい。さうめでたく直がなつたら、行かずんば有るべからず。併し今夜は
佐五　晝さへ病家はないもしないで
東林　何サ、寒からうといふ事よ。
いと　十兵衞さん、段々お前の厚いお世話、どうぞ主へよい樣に、ナ……五平太さんへよいやうに。
十兵　そりやア氣遣ひしないがよい。明日にも見えりやアとつくりと……サア、わしが五平太樣にはよいやうにお賴み申して、お前の心も話すから、味な事を苦勞にして、煩はぬやうにするがよいによ。
いと　わたしやモウ、それぱつかりが
儀助　ハテ、とんだ事を云ひなさい。五平太さんはお前まかせ。

東林　それ〳〵、さいこ湯でもゆかぬむづかしい性分ながら、美人の七には御意次第、氣兼ねはちつともないとこ唐人は新しいか。

佐五　面白くもない。お絲さん、この頃うちに御祝儀ながら、押しかけて、久し振りでお前の名護屋帶でもねだりやせう。

らい　サア〳〵、ちやつと乘らしやんせいな。

　　　トお絲駕籠へ乘る。

東林　どれ〳〵そんならお供仕らうか。（ト尻をはしをり）運ぶ足はちつと

佐五　又つらら山の武者所か。

東林　イヤ、難澁やうかんはどうでごんす。

儀助　何を云ひなさるよ……これは大きにおやかましう。

十兵　儀助どん、御苦勞。お絲さん、此方の樣子も……二三日中には（と思ひ入れ。）

いと　どうぞこの譯、おらいさん

らい　（うなづき）駕籠衆、御苦勞でござんす。

いと　ア、もし〳〵じれつたい。

ト泣くを見せじと顏へ袖を當て、片手にて垂れをおろす。

儀助　サア、遣つて下さい。

ト矢張り時の鐘、たらにて、儀助先に駕籠の提燈を持ち、四手駕籠跡より、東林、河東節を語りながら付いて向うへ入る。おらい跡見送り、門口をしめる。ト下の方より左七出て、懷中より新しき出刃庖丁を出して、手拭にまき、腰へさし　思ひ入れあつて跣になり、この跡を追ひて向うへ走り入る。

佐五　よくそれでもあの藝者め、山住樣へは行つた事だぞ。

十兵　サア、色といふもほんの浮氣で、よく噛みしめて見る時は、讀みと唄であらうぞい。

らい　オヽ、ほんに、何は無うても櫛道具がなくば、いつち不自由であらうに、杢助どんでも頼んで、わしがのを持たせてやらう……杢助どん／＼、ちよつと來て下さんせ。

杢助　オイ／＼。（ト云ひながら出て）ヤレ／＼、腹がよくなつて、ぐつすりとやらかしたら、いつの間にか日が暮れたな……ハイ、お暇申します。（ト直に表へ出ようとする。）

らい　アヽ、これいの、頼む事があるから呼んだのぢやわいの。コレ、こなさん、大儀ながら、今そこへ行た駕籠に追つ付いてな。

杢助　オツト合點。（ト尻をはしをりながら、又表へ駈け出さうとする。）

らい　エヽ、これはしたり、まだ用も聞かないでからにの。
杢助　わしやア晝間の紙屑籠に、また産籠でも賣るのかと思つて
佐五　十兵衞さん、餘ッ程な代物だな。
十兵　その筈サ、ありやァおしなよ。
　　ト此うちおらい、以前の櫛疊を出し
らい　これを屆けて貰ふのぢやわいの。待たしやんせ〳〵。ちつと中を方附けて（ト行燈の側へもつて來り、たたうの內より落毛、手拭紙などを取出し）こりや先刻こなさんが、産所籠を剝がした反故であつた。
　　トこれも側へとり出す。佐五兵衞、何氣なうこれを取上げ
佐五　なんだ「入置申一札の事。一、此方所持の小倉の色紙、金貳百兩の質物に入置き申す所實正也、右之儀に付、外より異論申す者これなく候　神原屋左五郎殿、山住五平太」。
十兵　世話でござつた。（ト書付をとろ。）
らい　こちの人。
十兵　嬉しや色紙の在所がしれた。

佐五　ヤ。（ト驚き、初めて心づき）ほんに色紙のその書付、マ、どうしてこゝに

　　ト取りにかゝるを、十兵衛、持つたる煙管にて　頭をびしやつと、佐五兵衛思ひ入れ。

十兵　誠に燈臺もと暗しと、寄りもよつたり無筆と眼病、現在内にある證據を、それとも知らずお縫どの。

らい　道理であの五平太どのが、産所籠といひ、紙屑籠

杢助　そんならありやァ買かぶりか。晝がんどうが拔いたる紙入れ、内にあつたるその反故が、十兵衛樣の尋ねさつしやる、あれが證據になりますか。

十兵　ぬしが拾うた紙入れより、此方で尋ぬる色紙の手がゝり。

佐五　それをうか／＼讀み散らして、五平太樣の身の科を……マア、その書付

　　トかゝるを、その儘ぐつと引付け

十兵　うぬも怪しい醫者との五音、絲屋の急死も白狀ひろげ。

佐五　南無三、それを

　　ト振りはなし、逃げるはずみに、わざと行燈を打かへす。皆々暗き思ひ入れにて、十兵衛探りながら二重舞臺へ上る。おらい、行燈を持ち、これも探りながら二重舞臺へ上る。佐五兵衛まごつく。杢助

とらへて

杢助　うぬ、番頭め

ト武者振付くを刎ねかへし

佐五　その間にこゝを

ト逃げんとする。背後へ岩松出かゝり居て、火鉢の灰を佐五兵衛が顔の邊へ投げ付ける。これにて佐五兵衛、たぢ〳〵とするを、岩松足をもつて引かへす。十兵衛。佐五兵衛と思ひ、杢助を引つける。

杢助　アヽモシ、わしだ。

十兵　すりや、佐五兵衛は

岩松　爰にをります。

十兵　女房、あかりを

らい　心得ました。

トおらい火を打つ。この人數立廻りよろしく、時の鐘、木の頭にて、東の方より黒幕を引出し、この人數を隱す。

すぐ上の方へ橋の袂、下の方へ辻行燈をふり出し、日覆より柳の吊り枝、この道具とまる。

左七　十二軒から先へ拔けたが、あの提灯が確かにお絲め……それ。

ト矢張り時の鐘、だらにて、ばた〳〵はげしく、向うより左七走り來り、直に舞臺へ來り

ト橋の袂へ小がくれる。ト佃の騷ぎになり、向うより儀助先に駕籠、東林出て來り

東林　なんと儀す公、今夜はさぞあの左七めは、寢心が惡からうの。

儀助　それやア知れた事サ。寢心のよいは五平太樣、おいらも祝ひでもお貰ひ申して、裾としやれにやアなりませぬ。

東林　カウ、おれをお半とする氣はなしか。どうだ〳〵。

トこの樣な事を云ひながら舞臺へ來る。左七出て、いきなり提燈を切つておとす。うろたへ、儀助逃げ出す。これにて駕籠舁、「とんだ奴だ」といふ所へ、出刃庖丁來るゆゑ驚き、その儘駕籠を捨てて逃げて入る。東林、腰の立たぬ思ひ入れにて

東林　人殺し〳〵。

ト震へながら云ふゆゑ無闇に切る。これにて駕籠のうちより

いと　左七さんか

ト出る所を

左七　いけ畜生め。覺悟しやアがつたか。

ト突く。お絲「アッ」ト倒れる。東林、矢張り「人殺し／＼」と云ひながら上の方へゐざり逃げるを、また切り倒す。お絲、起き上つて

いと　モシ、これを見て（ト懐より書置を出す。）

左七　やかましいわえ。

トいろ／＼むごく切り倒して、上へ乗つかゝる。お絲下から書置を突きつけ／＼するゆゑ、左七何なといふ心にて引奪る。お絲、よろぼひ起きて苦しむ思ひ入れ。そのうち始終佃ぶし、この時ゴントまた捨て鐘になり、左七、書置を辻行燈にて讀み

ナニ、書置の事（ト思ひ入れあつて）コレ、お絲

トお絲をひつ抱へる　お絲がつくりと落入る。

ホイ。

ト思ひ入れよろしく　ひやうし

幕のうち捨鐘にてつなぎ、引かへし

幕

大切　小石川の場

役名。半時九郎兵衛。本庄綱五郎。鳶の者、お祭左七。同、風の神喜左衛門。家主、粟島權兵衛。安野屋十兵衛。長屋の者、留六。神原屋左五郎。番頭、佐五兵衛。山住五平太。絲屋娘、お房。九郎兵衛女房、お時。

本舞臺、三間の間、向う赤壁納戸口、上の方反故張り障子、よき所にしやちの繩どうづきの道具、長鳶。纏といふ字の油障子をたて、留六、勇みの形にて、百萬遍の珠數をくり、眞中に喜左衛門、ふせ鉦をうつて居る。長屋の者大勢、珠數をくつてゐる。百萬遍に通り神樂をかぶせ、幕あく。

喜左　願以此功德平等施一切發菩提心往生安樂。

皆々　南無阿彌陀佛々々々々々々々

喜左　アヽ、こりやァ長屋の手合も御苦勞でござりやした。ぶつかけでもう一杯飲まうぢやァねえか。

留六　なに、辭儀はしねえわな。蕎麥も酒も、がうてきに馳走になつたの。時に頭、初々しく何の法事をさつしやるのだえ。

喜左　今夜の百萬遍はの、おらが息子の眞實の母親の、祥月命日の逮夜サ。そこでこなた衆を賴んで、

お念佛を上げたのサ。

留六　そいつは奇特でごんした。時にコレ、頭、左七どのはどうしましたえ。

喜左　何だかあの野郎は、年中氣まぐれで、うぬが内へは寄り付かねえのサ。

皆々　ハテ、困つたものだなう。

喜左　時に隣の浪人どのと、うしろ長屋の九郎兵衞どのは内にかの。

留六　アイ、内にだが、あの手合は、念佛は嫌ひでごんすよ。

皆々　こりやア頭、馳走になりやした。

喜左　まだ蕎麥も酒もあるよ。

留六　何サ、十分に食つたの。頭、休まつし。

皆々　サア、行きませう。

ト通り神樂になり、皆々門を出て、下座の口と路地の内へ入る。留六、うろ〳〵内を見廻し、路地の蔭へ思ひ入れにて窺ふ。喜左衞門、跡を方付け、行燈を出し、傍の箱を見て

喜左　アヽコレ、隣の浪人と半時が内へ、一膳づゝやりたいものだに。

ト思ひ入れ、この時捨がね、合ひ方にて、向うより左七、以前の形にて、頰被りにて、づか〳〵と出て

來り、思ひ入れあつて、

左七　せめて後の親の、喜左衛門に逢うたる上で、この書き物を頼んだ跡は

ト門口へ來り、内へすつと入り、しやんと戸をさす。

喜左　オヽ、左七か、歸つたか。何處を歩いて居たな。

左七　アイヽ友達と妙義へ參つて、それから二三日ずるけやした。見れば百萬遍でもあつた樣子。こりやア何ぞ志でもあつてかえ。

喜左　志があつてかえとは、コレ、母親の祥月を忘れたか。おぬしが親身の母親の、コレ左七、イヤサ、石塚樣の御子息左七樣、こなさん身持が

ト思ひ入れあつて

お前が今夜の百萬遍も、いつち御座らにやならぬ御身分。それにマアこなさんは（ト云はうとして）何の役に立たぬ事を。コレ、わしは長屋内へ蕎麥を配つて來るから、せめてちつとの内、留守を頼みますよ。

ト唄になり、蕎麥の箱を提げて路地口へ入る。左七殘つて

左七　喜左衛門の話で、思ひ出した母親の、今夜は逮夜。短氣なゆゑに昨夜の仕儀。人を殺したこの左

七、可愛やお絲が書置を、届けた上は潔よく、翌はどの道死ぬる命、さすれば母の祥月命日、同じその日に死ぬのは定業、それに付けても不便なは（ト書置を出し）南無阿彌陀佛々々々々々。

ト回向の思ひ入れ。唄になり、路地の内より十兵衞、小提燈を提げ、矢張り目拭を持ち出て來り、障子の印を見て

十兵　小石川の裏家住居、路地を入つて角の家。アヽ、これぢや。（ト門口に來て）賴みませう。喜左衞門どのは留守でござるか。十兵衞でござります。

左七　ヤ、十兵衞どのか。

ト當惑のこなしにて、奥へ行かうとする。十兵衞、戸を明け、ずつと入つて

十兵　左七どのか。わしを見て隱れるのか。

ト左七思ひ入れあつて

左七　なに隱れませうぞ。今こそしがない町抱へ、以前は赤城の御近習役、おれも侍ひ、なんで此方へ隱れる科はしませぬて。

十兵　イヽヤ、私には隱れまいが、もし探されると廻り氣から、世上の人に恐るゝ眼色、眼病上りの十兵衞が、赤筋ばつたこの目にさへ、只事ならぬこなたの素振り。

左七　ヤ。

十兵　サ、尋ねて來たは左七どの、ならう事なら元の侍ひ、せめて兩腰さゝせたら、この災難も

左七　エ。

十兵　これを見さつしやりませ。

ト色紙の證文を渡す。左七とつて、よく／＼見て

左七　ヤ、こりやコレ山住五平太が、色紙を質屋へ預け置く、頼みの一札。その金高も貳百兩。

十兵　質屋の家名は神原屋、左五郎どのとあるからは、これぞ絲屋へ入り聟の、あの左五郎にちがひない。

左七　合點のゆかぬはこの證文、どうしてこなたの

十兵　昨日思はずわしが見世へ、晝働きがあけて來た、その紙入れの内の反故。わしは眼病、危くも、その場に居合はす五平太どの、詞の轉倒その上に、山住どのゝこの手跡、證據にならうとこなたの行くへ、尋ぬる道にて情なや、昨夜洲崎の人殺し。

左七　すりやアノ、お絲が切られた事

十兵　正しく色ゆゑ意趣切りに、あうたるものとお上の御沙汰、云はすとこなたへ疑ひの、かゝりや繋がる左七どの、アヽ、こなたは親御に不行跡。

左七　ア、さう思つても持ち前の、短氣は損氣の基とやら、藝者子供に惡口の、腹に据ゑかね二つには男を騙す畜生め、世上の女へ見せしめに（ト懐の出刃を出し思ひ入れあつて）憎さも憎しと手にかけて、跡の祭のこの書置。

ト書置を出す。十兵衞取つて、行燈にかざす。留六、門口より窺ふ。

十兵　さてはこなたの親御樣、石塚氏のお咎めを、身に引受けし綱五郎樣、女敵ねらふ對手は葛飾、その妹のお絲ゆゑ、添はれぬ義理とあきらめて、兄をかばひしこの書置。

左七　サ、その書置を反故にせず、身寄りの人の手へ渡し、わしもくたばる。

ト出刃にて死なうとする。十兵衞、その手をとらへ、きつと止めて

十兵　コレ、武士の悴が見苦しい、この庖丁でこなたは死ぬか。コレ、女に迷つて大切な、命を捨て親御へ立つか。殊に色紙の手懸りの、この一札から詮議して

左七　サ、請け戻すにも二百兩、金が先だつ

十兵　今のお前の御身分では、それも尤も。本庄樣とも折入つて

左七　すりや綱五郎の隱れ家も

十兵　正しくあなたも此あたり

左七　逢うた上にて潔よく

留六　そんなら左七は人殺し

ト聲立つるを、十兵衞引付けて、上の方へ突きやる。立廻りにて左七、疊を蹴上げる。留六、床下へ落ちる。左七、手早く上へ疊をしやんと置く。

十兵　壁に耳、岩が物いふ

左七　ムウ。

ト出刃を腹へ突立てようとする。十兵衞この手を止めて

十兵　コレ。

ト思ひ入れ、唄になり、この見得よろしく、道具逆に廻る。

本舞臺三間の間、向う鼠壁、上のかたに出入ひりの戸棚、下のかた臺所道具、一つ土竈、上ながし手桶、すべて綱五郎獨住みの體。爰に綱五郎、一本差しにて、太平横より米五合ばかり飯釜へ明けてゐる。片脇に古行燈、よき時分より通り神樂、矢張り彈き流しの唄、道具とまる。

綱五　何ぢややら、近所に百萬遍があるかと思へば、隣長家では稽古所の長唄、或ひは木遣の稽古のと

さて〳〵町家といふものは、アヽ、物騷がしうて（ト思ひ入れありて表を見やり、門の戸をさし、鍵をかけ）定めし戸棚の内も、アヽ、この寒さでは

ト思ひ入れ。合ひ方になり、窺ひよつて、戸棚の戸をそつと明ける。内よりお房、矢張り白無垢の形にて出かゝり

ふさ　綱五郎さん。

綱五　コレ。（ト思ひ入れあつて）遠慮はない、サヽ、爰へ出さつしやりませ。

トお房出て來る、綱五郎、戸棚の内より辻番火鉢を持つて來り、思ひ入れあつて

アヽ、まだ炭團の溫りがござるな。

ふさ　今も近所のお方がござんして、戸棚を明けうかと、大抵心遣ひをした事ぢやござんせぬわいな。

綱五　さうでござらう。わしは又夜に入つたを幸ひに、この間其方に借りた百兩の金を持つて、神原屋といふ質屋を尋ね、不足の金は日限をして、何分色紙は片時も早う請取つて來たいが、それにつけても、確か元金二百兩との事。その質の置主も、皆五平太めが爲業と思へど、もし荒立てゝ手懸りをも失うてはと、心を碎く質請けの、確かな證據もない事ゆゑ、向うで何と云はうやら。せめて元金二百兩、揃うてさへあるならば、又分別もあらうのに、折角借りても百兩不足。

ふさ　モシ、綱五郎樣、昨夜もお前が其やうに云うてぢやゆゑ、わたしも思案しやんしたが、よい事があるわいな。

綱五　オヽ、よい智慧があるか〳〵。

ふさ　さいな、斯うしなさんせ。お前アノ、わたしが内へござんして、母さんに跡金百兩の相談なさんしたら、よもや出來ぬといふ事はあるまいわいな

綱五　これはしたり、アヽ、流石は女子ぢや。一旦葬つた死人の金、借りたる上に、其方まで、連れて退いたと知られては、盗人の惡名うけ、この身の願ひも叶はぬ上に（ト思ひ入れあり）アヽ、又よい思案も出ようわいの……アヽ、ほんに空腹であらうに、ドレ、飯拵へして進ぜませう。

ふさ　イヽエイナ、わたしやまだ欲しうござんせぬが、モシ、綱五郎さん、不思議な緣でこの樣に、あなたのお内に匿まはれ、お世話になるはわたしや大體、嬉しい事ぢやござんせぬが、この間の暗紛れ、コレ、此やうにわたしが袖のちぎれたは、そでない緣の切れめかと、それが心にかゝるわいな。

綱五　ハテ、斯うなつたからは、本庄綱五郎、侍ひぢやわいの。刀の手前、其方を捨てゝは武士が立たぬ。この身の歸參が叶うた上は

ふさ　女房に持つて下さんすかえ。
綱五　眞以つて僞は申さぬ。
ふさ　エヽ、嬉しうござんす。（ト思ひ入れあつて）あなたもしつけぬ水仕事、わたしも側から手傳うて上げうかえ。
綱五　これはしたり、大身代の箱入り娘が、どうしてマア。
ふさ　ハテ、世帯を持てば夫婦ぐらし、飯ごしらへは女房の役。
綱五　殊に持參は百兩の、誠にこれが掘出し女房、世間の人が聞いてなら
ふさ　迷ひの者と添ひ寢して、兒もたぬ身は六道の、賽の川原で小石川。
綱五　こゝは劍の山の手に、町の住居も占算、呵責の苦患のがれたら
ふさ　末は二人も西の空、極樂水へ宿がへの、蓮の臺と有合ひの
綱五　蒲團一つが玉の床、思ひあふみの三疊敷。（ト木綿蒲團を敷く）。
ふさ　宵から二人手枕に

ト木枕一つと、有合ふ五合桝をとつて蒲團の上へ置く。

綱五　抱いてねはんの前方に、煮焚きが肝心。

ふさ　仕つけぬ業を

綱五　女夫が稽古に

ふさ　エヽ、嬉しうござんす。

長唄「妄執の雲はれやらぬ

ト稽古所にて唄ふ。お房惘りして

ふさ　ありや何でござんすえ。

綱五　アヽ、ありや隣裏の稽古所ぢや。

ふさ　道理こそ、さういひなさんすりや、ありや、「鷺娘」の唄ぢやわいな。

綱五　何ぢや「鷺娘」ぢや。さう云やれば、白無垢の振り袖姿。わしは黒の小袖きて、しつかい鷺と烏が、世帯したやうぢやわいの。

ふさ　何を云ひなさんすぞいな。

綱五　どりや、米をかしぎませうか。

長唄「せめて哀れと夕暮に、ちら／＼雪に濡れ鷺の、しよんぼりとかはゆらし。迷ふ心の細流れ、ちよろ／＼水の一筋に、恨みの外は白鷺の、水になれたる足どりも、濡れて雫と消える

もの。

トこの文句のうち、綱五郎、釜の中へ米を入れ、お房緣を押へて、米を磨ぐ思ひ入れ。捨ぜりふにて、直に竈へかけ、水を入れ、柄杓を立て、加減する。よき時分より權兵衞、門口へ來り、内を覗き、お房を幽靈と心得『水に馴れたる足どりも』といふあたり、忍び足して内を覗き、門口にて慄ふ。唄切れる。

ふさ　今のわたしが身の上で、思ひ當つた姉さんの、色ゆゑ大事のお屋敷を、男を連れての斷落も

綱五　や、何と云やる。其方には姉があつて、今いやるでは屋敷を斷落ち、男を連れてと云やつたが……殊に其方は絲屋の娘、もしやその姉は

ふさ　アイ、赤城のお屋敷、奥向に

綱五　すりや、身が主人のお屋敷に、勤めて居たと云やるといひ、その親許は絲屋と聞いたが、アヽ、割符を合はす（ト思ひ入れ）。

ふさ　エ。

綱五　ハテサテ、緣は

ト當惑の思ひ入れ。お房こなしあつて

ふさ　モシ、必ず見捨てゝ下さんすなえ。

ト縋る。門口に窺ふ權兵衞、悧りしてぶちかへる。此とたんに九郎兵衞、下駄がけにて路地より出かかり、この體を見て

九郎　誰だ、そこへ倒れたは（ト見て）大家さんぢやアござらぬか。

權兵　九郎兵衞どのか、とんだ事だ。コレ、こゝの浪人は、幽靈を引摺り込んで、今出合ひ最中だわな。

ト騷ぐを聞いて

九郎　モシ／＼、そんなら何と云ひなさる。爰の内へ幽靈を

權兵　オヽ、しかも振り袖の幽靈サ。

九郎　（思ひ入れあつて）そんなら此奴に違ひなく（ト白無垢の袖を懷よりそつと出す）。

權兵　もう／＼、今夜早々店だてだ。

ト大音に云ふ。綱五郎思ひ入れ。

九郎　コレサ。

ト權兵衞に囁く。内にては綱五郎、お房へ囁き、合ひ方になり、づか／＼とよつて戸棚をあけ、お房を隱し、しやんと戸をさす。權兵衞は呑み込み、囁き合ひ、路地の内へ入る。九郎兵衞、門口へよつて

綱五　モシ、お賴み申しやせう〳〵。
アイ〳〵、どなたぢや、只今明けまするぞ。
トあちこち方付け、行燈の火をかきたてたり、いろ〳〵するうち、通り神樂、合ひ方にて、路地より
お時、世話女房にて、草履下駄の音ぐわた〳〵として出て來り
とき　九郎兵衞どん、何をして居なさんす。
九郎　お時か、コレ（ト囁き）よしか。
とき　どうしてマア、滅相な
九郎　ハテ、大事ない、仕掛けて見るよ。
ト合ひ方になり、九郎兵衞窺ふ。こなしあつてお時、門へよつて
とき　アイ、ちつとお賴み申しやせう。
綱五　ハイ〳〵、今明けまする。（ト門口をあけ、顏見合せ）これはしたり、男の聲ぢやと思うたりや、お前はどれから
とき　アイ、わたしや背中合せの裏長屋、九郎兵衞といふ者の女房でござりやすが、亭主は先へ來やして門が閉つてをりやすゆゑ、わたしに云ひ付けて歸りやした。お前さんがこの間お越しなされやした

綱五　ハイ、一人住みの浪人でござるが、おてまへ、何ぞ御用でもござつてか。
とき　アイ、お長家の喜左衛門さんの内に、佛事がござんすゆゑ、長家中が寄り合つて、精進ものを遣はしまする。それを屆けにまゐりました。
綱五　それはお世話。勝手存ぜぬ私し、何分よろしく賴みまする。
とき　左樣なら、御酒の三升も遣はしやせう。（ト內へ入り）ほんにあなたはお一人かえ。
綱五　左樣々々、獨身でござるて。
とき　そりやァ御不自由でござりやせう。お仕事でもあらば遣はされませ。
綱五　それは忝なう存ずる。
とき　御遠慮はござりませぬよ……モシ〱、お前さん、袖口が綻びてをりまするよ。
綱五　イヤモウ、綻びは常の事でござるて。
とき　ちよつとお出しなされませ。ツイ一針、縫うて上げやせう。
綱五　イエ〱、又序がござらう。殊に絲針とてもござらねば
とき　イエ〱、わたしが頭りに、袖口ぐらゐの綻び。オヽ、コレ〱（ト髷にさしたる針をとつて）丁度紺の絹絲が有りやした。サヽ、お寒からうが、ちよつとお脫ぎ。

綱五　イヤ、ならうなら、この儘にして縫うて下さりませ。

とき　左様なら、さうしてお出で。（ト綱五郎が袖口をとらへ）ア、、暗い行燈だの。
　　トかき立てんとて、腕を伸すと、「十右衞門命」と彫つてある。綱五郎見付け

綱五　ア、「十右衞門命」。

とき　エ。（ト腕を引き袖口をぬふ）。

綱五　お内儀は、ア、、浮氣ものと見えまするわいの。（ト目を付ける思ひ入れ）。

とき　エ、、お前こそ獨り暮しと云ひなさんすが、コレ、見なんせ、蒲團の上に並んだ枕は、なぜござんすえ。

綱五　サ、これは（ト思ひ入れあり）今米を計つて見ようと思ひまして

とき　エ、、おきなさんせ。お前さんもこりや女にか〻つちやア、御如才のなさ〻うなお方ぢやわいな

綱五　イヤモ、女は至つて嫌ひでござるて。

とき　よう嘘を云ひなさんす。（ト持つたる針にて突く）。

綱五　アイタ、、、、、、。
　　トこちらへ逃げる。お時、蒲團の上へこけか〻り

とき　エヽ、仰山な、何をマアそのやうに

　トこの時戸棚の中にて、悋氣の模樣にて、ばた〳〵と出ようとする。

綱五　アヽコレ、出ては惡いぞ〳〵。

とき　エ、何が出るのぢやえ。

綱五　サ、こゝの家は日が暮れると、凄じう鼠が出るで、その鼠が宵に出ては惡いと存じて。（ト思ひ入れあり）コレ、お内儀さん、綻びはもう出來ましたかの。

とき　アイ、もうようござんすわいな。

綱五　それは忝うござります。

とき　ほんに、今の戸棚の内は、鼠にしては大きな音でござんした。この行燈で、ようマア御覽じて（ト行燈を引廻さうとして灯を消し）これは粗忽な、ツイ消したわいな。

綱五　そりやモウ、いちばい鼠めが騷ぐであらう。ドレ、ちよつと灯を點けて

　ト火打箱を尋ねあたり、捨ぜりふにて、かち〳〵と打付ける。この音を聞いて九郎兵衞、そつと内へ入り、能き所にすわる。お時床の上に坐る。綱五郎附木へ火をうつし

サア〳〵、つけました〳〵。どこにまア不遠慮な、お長屋のお内儀樣とたつた二人、燈火を消し

て（ト行燈へ點し、ふつと九郎兵衛を見て）や、こなたは何處から。

とき　ほんにお前は、何時の間に。

九郎　ふんばりあまめ、動きやァがるな……モシ、御浪人、わしやァ棟割裏長屋、半時九郎兵衛といふ、不職でくらす貧乏人だが、人の女房を引摺り込んで、慰みものにさしつて濟むか。間男は御定法、並べておいて四つにするワ。

とき　アヽコレ、滅相な、何でマアその樣に。ナ、モシそりや間違ひでござんせうぞえ。

綱五　エヽ、そんなら貴公が、このお内儀の御亭主でござるか。誠にこれは珍事ちうよう。決して左樣な。

九郎　モシ〱、御浪人樣、おらが嚊アを引摺り込み、間男せぬとの言ひ譯が。コレ、その間男の證據、一人ぐらしのこなさんが、枕二つはなぜ置いた。但しは嚊アと寢ぬならば、外に隱した女があるか。

綱五　サ、それは。

九郎　女がなけりやァ、寢たのはこいつか。間男されちやァ野郎がすたつた。斯う言ひ出しちやァたつた今、譯をつけやれ、後ともいはず、一時待たねえ半時九郎兵衛。御浪人、性根を据ゑて挨拶し

やれ。(ト合ひ方)。

綱五　すりや、どうあつても間男と。

とき　斯うなるからは胴をすゑ、いつそ貰うて下さんせいな(トずつかりとなる)。

綱五　ア丶、そんなら内儀も間男ぢやと。

とき　もう遁がれッこはあるまいわな。

九郎　あれ聞け、あれでも僞るか。

綱五　これでよめた。身共これなるお内儀に、毛頭不義は致さねど、夫婦よつての目論見か。内儀の腕に入ほぐろ、その名はたしか十右衛門、命と彫れば御亭主の、九郎兵衛どのは小絲命と、二人が二人彫物の、その上、たしか深川にて。

トきつとなる、九郎兵衛うろたへ、ちやつと肌を入れ、思ひ入れあつて

九郎　そりやこなさん見た筈だ。一つ長屋の棟割に

綱五　むねきな人のあらうとは

とき　知らで今日までつきあふも

九郎　ツイそれなりの知らぬ同士。

綱五　逢ふとそのまゝ間男と
とき　疑ひうけたもお前の災難。
九郎　枕二つはぬけられまい。但しは外に隱し女房が（ト戸棚へ目を付ける）。
綱五　イヽヤ隱した女は無い。二つ枕はこの内儀と、間男したに違ひない。
九郎　こりやさうなけりや叶ふまい。包めば外に詮議のある、獨りぐらしのこの家へ、もしや浮かまぬ幽靈が
とき　迷うて來たか、その時は、お前の囘向で、未來永劫、浮かめてやらんすお心か。
綱五　ナニ幽靈とは面白い。事によつたら侍ひの、迷ひの者と見たならば、この世はおろか、あの世まで。
九郎　この片袖で（ト白の袖をちよつと見せる）。
綱五　すりやその袖を。
九郎　戒名俗名そんじよそれ、施主は本町絲屋の娘。
とき　エ、すりやその袖は、アノ、絲屋の……そんならわたしが（ト戸棚へ思ひ入れ）。
九郎　コレ、われもめつたに動かされぬ。サ、浪人どの、こんな餘計の仕事があつちやア、よもや女房

と間男を

綱五　仕つた。

九郎　いよ〳〵こなたが

綱五　間男いたした。

九郎　間男ならば首代もらはう。

綱五　その首代とは、如何程いります。

九郎　小判で百兩。

綱五　ヤ、あの百兩の……コレ、貯へも無い浪人が

九郎　イヽヤ、無いとは云はせませぬ。殊によつたらこの袖で、物を云ふ氣だ、御浪人、耳を揃へて首代百兩。

綱五　渡すからには振りの袖、此方へ所望仕るぞ。

九郎　賣つて進ぜう。百兩ならば、首代かねてこの袖を

綱五　然らば所持のこの金子、手詰めとなつて

ト財布に入れし百兩を出す。九郎兵衞、白の袖を出し、互ひに引かへ

九郎　首代慥かに受取つた。
綱五　此方は袖を買切り百兩、それで身どもの惡名が
とき　間男沙汰もこれぎりに
九郎　算用すんだ。
綱五　其方の出入が濟んだなら、九郎兵衞夫婦は身が爲の、又改めて不義密夫、女敵討たにや歸されぬ。
こゝ一寸も動くまいぞ。
ト刀を取つて詰寄る。この時門口へ十兵衞出かゝり窺ふ。
九郎　出入りの濟んだ間男沙汰、引くりかへしに御浪人。
とき　わたしら二人を間男とは
綱五　ぬかすな女め、おのれら胸におぼえがあらう。赤城の屋敷に勤めし砌り、小絲といひしは汝ならん。不義の對手は若黨の葛飾十右衞門、その時それがし國詰の留守のうち、仲人ありしは彌三兵衞どの、互ひに印をとりかはし、某歸國と聞きしゆゑ、懐姙の身のいひ譯なく、拂ひ方の金を奪ひ、逐電なしたるおのれら兩人。本庄帶刀が忰綱五郎、願うてもなき女敵ども、この家へうかうか來りしは、これ天命のなす所。サア、覺悟きはめて、それへ直れ。

九郎　すりやこなさんが聞き及びし、本庄綱五郎といふ浪人か。

とき　何でわたしら夫婦の者が、お前の爲の女敵ぢや。サア、證據があらば見せさんせ。

綱五　證據なきこと云ふべきか。面は互ひに見知らねど、この程ちよつと深川にて、見付けおいたる彫物の、今又身どもが目にかゝりし、夫婦のもの腕の彫物、證據を見せうか。（ト腕へかゝる。）

九郎　南無三。

ト振り切つて驅け出す。この時十兵衛、づか〳〵と入り、九郎兵衛をきつとゝめる。綱五郎、お時を引付ける立廻り。

とき　ヤ、そなたは安野屋の

綱五　十兵衛か。

十兵　コレ、小絲どの、無事であつたか、エヽ、お前はなう……女心に前後の、辨へないとはいふものゝ、お主の目をぬき不義の科、妊娠になつたその跡にて、本庄樣と縁談の事、極つた屋敷を駈落ち、妹のお房どの（ト落ちある振り袖を取つて）コレ、この如く世を早う、又は迷うてござるやら、四十九日がその内は、魂魄はなれぬ家の棟か、但し縁なき戸棚の内に（ト綱五郎と顏見合はせ思ひ入れあつて）サ、縁なき家に迷ひ來て、その幽靈の出所が違ふ。いはゞ絲屋の家來筋、見て見ぬ

振もしたけれど、親旦那よりくれ〴〵も、お頼みあつたこなたの行くへ、斯う見付けたら百年目。
本庄様の腰押しして、女敵討の腰押します、さう心得てござりませ。

綱五　そりや云ひ號けの、これなる小絲が妹は、本町絲屋の娘のお房。すりやアノ
　　　ト戸棚へ目を注け思ひ入れ。

十兵　妹も迷うてこの内へ、その上不義の兩人が、落ち込んで來て兄弟の、天命のがれぬ小絲どの、御親父様に、代つてわしが（トお時へかゝらうとする）。

とき　親とお主の目を盗み、本庄様に侍ひの、一分捨てさすその科人、見付けられたる上からは、お刀穢しのお厭ひなくば、サ、綱五郎様、お手討に。

九郎　返す刀に私しも、小絲と同罪、科はのがれぬ十右衛門、疊の上で死ぬが本望。

十兵　その覺悟なら十兵衛が、町人ながら助太刀の、目當は葛飾十右衛門、主の娘をかどはかし同前、親御の遺言、主の娘の容赦はない。跡でこの身を大身の槍、磔合點、サヽ、助太刀を、本庄様。

綱五　すりや十兵衛は現在の、主の娘の容赦なく

十兵　この身を捨てゝ助太刀を

綱五　ア町人ながら健氣な十兵衛、願ひの通り、助太刀頼む。

十兵　それで旦那へ私しも
とき　そなたの手にかけ、殺されても
九郎　十兵衞どのは親御の名代。
綱五　武士を捨てさす不義者二人。
九郎　命はこなたに
綱五　身どもが貰つた。
とき　對手のわたしも
十兵　家來のわしが
ト入かはつて立廻り。綱五郎、お時を引付ける。十兵衞、九郎兵衞が腕を取つて
綱五　身が目を盜みし女敵二人。
十兵　その助太刀は家來の十兵衞。
兩人　まツこの通りに。
ト綱五郎、お時が彫物の、命といふ字を小柄にてつく。十兵衞、九郎兵衞が彫物の命といふ字を、有合ふ燒火箸を取つてやきがねを當てろ。四人一度に思ひ入れあつて

とき　これは。
綱五　ハテ、成敗は二人が命、命かけての腕の彫物。其方も小絲が命をとらうが、身もこの者の命をとれば、これにて本望達せし道理。
十兵　アレ小絲どの、聞かしつたか。
とき　御恩の程は詞にも
九郎　云ふに云はれぬ本庄様。
兩人　エヽ、忝ない。
十兵　これに付けても安からぬ、心がゝりは左七様、武士ならぬ身の人殺し。
綱五　ナニ、左七が人を害めしとや。この綱五郎も浪人の、色紙の金の足しにもと、道に背きし百兩も、この身に付かぬと諦めて
九郎　騙りおふせし美人局、首尾よくいつて此方の身の科、不義間男のその砌、盗んで逃げた御用金、償ふ爲の惡黨も
とき　女夫かせぎの惡だくみ、これまで二人が溜め金の、足しにもがなと深川にて、雪のその夜に五十兩。

九郎　數もやう〳〵百兩まで、殘りの不足は五十兩、都合したなら二人とも、その金持つてあなたのお屋敷、名乘つて出て打たれんと、金催促のその内に、惡いしつぽを見込んだ百兩、正しくこの家と思ふから、女房を玉に美人局、百兩ゆすらば二口〆め、金高丁度二百兩、色紙の質請け、石塚樣の御難儀を、モシ、お助け申せば幸ひの、これまで溜めたこの百兩。（ト胴卷より出す）。

とき　こゝに住居と知らぬ身の、あなたのお在所知れたなら、尋ね參つて打たるゝ覺悟。僞りならぬは七年以前、産み落したる一人の娘、女敵討るゝその時は、二親のみぢめを見するが悲しさに、中仙道に忍ぶうち、岡部の在の畔道へ

九郎　捨てる娘も後々は、成人せよとこの親が、餓鬼の時分の腰さげに、眞間の繼橋手古奈のお守り、外に添へたる書き物は、治承二年戊の四月五月誕生の男子重吉とはわしが幼名。いづくで育つて死んだやら。モシ、何卒溜めた百兩を、せめてお役に本庄樣。

ト差出す、綱五郎取つて財布の百兩と合せ

綱五　惡人ながら九郎兵衞が、前非を悔いての身の懺悔。某とても道ならぬ、この百兩と都合して

九郎　色紙を請けて下さるか。

綱五　二人の者が志、情は情、仇は仇。

両人　エヽ、忝ない。

十兵　色紙の代金揃ひなば、請戻すのも今宵の中。即ち割符のこの一札。（ト件の證文を出す）。

綱五　すりや、一札が十兵衛の

十兵　手に入りましたも不思議な廻り。この片袖も憚りながら、綱五郎様、縁なきお房の御回向を。

ト思ひ入れ。戸棚にて物音する。

ときたえて久しき兄弟の

ト立よるを十兵衛止めて

十兵　イヽヤ、この場へ迷ひの妹御、よもやうかうか出られまい。迷ひを晴らすこの一札。袖と證文、かへがへに

ト質屋へ遣る一札を投げる。綱五郎とつて

綱五　こりや五平太が入れ置く一札。

十兵　アモシ、この十兵衛は眼病の。宛名は何とあらうとも、定かにわからぬ反故同然。金の催促付いたる一札、揃ひし上は本庄様。

綱五　質屋に逢うて片時も早く

九郎 色紙の質請け御油斷なく
とき 跡かまはずと、貴方は直に
綱五 必ず頼むは左七が事。又は戸棚のあの内の
十兵 モシ、氣遣はずとも、夜更けぬうちに
綱五 十兵衛、必ず
三人 本庄樣。
綱五 どりや、一走り。

ト唄になり、綱五郎、二百兩と一札を持ち、足早に向うへかゝる。この時左五郎、羽織ばつちの形にて出て來り、花道にて摺れ違うて、綱五郎は向うへ入る。左五郎、花道より舞臺を窺ふ。お時、跡を見おくり

とき 明けて云はれぬ戸棚の内の
十兵 アコレ、主人は他行
九郎 必ず指でもさすまいぞ。

ト思ひ入れ。ばた／＼にて、路地のうちより左七出て來る。内を窺ひ

左七　そこにござるは、十兵衞どのか。

十兵　さういふ聲は左七樣、色紙を請ける二百兩、揃ひし故に本庄樣は

ト　これを聞き、左五郎思ひ入れあつて、舞臺へ來る。

左七　ナニ、その金が出來たとや。エヽ、忝ない。（ト内へ入る）。

左五　すりや、今逢うたるは綱五郎、その金出來たは、確かにお房が金ならば、疑ひもなき亡者は戸棚に

ト　づかづかと戸棚へかゝる。左七さゝへる、立廻り。

十兵　こりやこなさんは花聟左五郎。

九都　そのこなさんがなんで戸棚へ

左五　お房の縁を切らうと思つて。

ト　合ひ方。

とき　あの子の縁を切らうとは

左五　ハテ、せうびんな小野郎に、あんなうツついお房ばう、まことに下世話の泥龜に、月なき夜半の暗紛れ、認めて來た三下り半、この去り狀は十兵衞どの、お房へ屆けて下さいまし。

ト　佐五兵衞より渡りし紙入れを投げてやる。十兵衞とり上げ見て

十兵　こりやコレ絲屋の讓り状。今一通は（ト見て）ヤヽヾヽヽ、醫者東林が番頭へ、毒の請合ひ、入れおく一札。

九郎　そんなら娘の病死の元もときみな番頭がこしらへごと。

佐五　廟所で拾うた二通の書き物、これで絲屋の納りも、綱五郎樣の詮議の色紙も、お危ねえ事、知らぬ事とてわしらが内に、その置き主も佐五兵衛、五平太。一足早くばこの色紙、本庄樣へ渡さうもの。毎年變らぬ世話事に、質屋はいつでも敵役。そこをひねつて惡者の、置主めらに渡さぬつもり。口ばし青き小二才でも、わしも江戸つ子、水道の水、憚りながら、アヽ、つがもねえ。

ト色紙の箱を出す。

三人　すりやその箱が、たづぬる色紙。

左七　在所が知るればこの身の明り。たゞ此上は九郎兵衛どの、わしが死んだらその跡にて、この書き物を（ト書置を九郎兵衛へうち付け）こなたの見る前

ト出刃を出し、腹切らうとする。皆々うろたへ、これを止める。

十兵　こりやこなさまは最前の

左七　譯合ゆゑに、くたばる命。

九郎　氣が違つたか左七どの。併し渡したこの書き物。(ト開く、中より附守おちる)。合點の行かぬこの守
この書き物の手跡は妹。(ト見て)ヤヽヽヽ「書置の事」。

とき　エヽ。(ト驚く)。

二人　こりやどうぢや。

九郎　なに〳〵「この程一軒茶屋にて末かけて云ひ交し候ふ左七樣御事は、實の親御の彌三兵衞樣の御身の難儀をその身に引うけ、御浪人なされ候ふ、綱五郎樣の言ひ號けあそばしたる奧女中小絲樣をつれて駈落いたし候ふは、兄九郎兵衞に候へば、左七樣にも助太刀なされ候ふとの御事、左七樣に候へばとても左七樣に添ふこと叶はず、この身に思はぬ愛想づかしにて、あなたの御手にかゝり候はゞ、何卒女敵と仰せ候ふ兄の命、小絲樣をお助け下され候ふやう、くれ〴〵もねがひ上候」

ト思ひ入れ。このうち權兵衞、門口に窺ひ居て

權兵　さてこそ左七は人殺し。(ト左七へかゝる)。

左七　それだによつて

ト腹切らうとする。左五郎これをとめる。十兵衞、權兵衞を取つて引しき

十兵　モシ、門口を閉めさつしやりませ。

九郎　合點だ。

ト書置を捨て、門の口をさす。その間にお時、書置をとり

とき「その上深川にて七歳あまりの娘の鳥追、生れを聞けば以前は捨子、乞食の手汐に育てられ、何とぞ眞の二親に逢ひたさに金こしらへて親方へ渡し」……モシ、七歳餘の娘の子、殊に捨子と、書いてござんすわいなく。

九郎　サアく、跡を讀めく。

とき「兩親の行くへ尋ねたく、それにつき金が欲しうござんすと、幼心の不憫さに」

權兵　このまゝ訴人に

ト刎ねかへし駈出す。左五郎引付けて、ひき敷き、左七、腹切らうとするを、十兵衞とめて

十兵　アコレ、わしが代つて讀みたいが、眼病あがりでちらつくやうだ。サヽ、その跡く。

とき「わたしが兄さんの捨てさんしたる娘のこと思ひ出し、有合せの金一兩、守の中へ入れおき候ふ所中には眞間の手古奈の御守、改めんと思ふうち、仲間の乞食が連れ行くゆゑ、是非なう別れ、跡にて聞けば僅か一兩の金ゆゑに、その子は殺され、守の內の書き物ばかり、人殺しの證據と申し

候ふを見れば、疑ひもなき兄さんの年月時日、すりや一人の姪を一兩の金ゆゑ殺させしも、皆わたしが業、御堪忍なされ下され候ふやう願上げ〳〵、これまでお世話下され候ふ十兵衛どの御夫婦へよろしく御傳へ下され候へ〳〵、心懸りは兄の身の上、義理ある小絲樣御事、何卒怪我あやまちのないやうに、草葉の陰より祈り〳〵、申したきこと山々御座候へども、涙にむせび惜しき筆とめ〳〵綱五郎樣、左七樣へ、絲」……エ、コレ、そんならこの書置を殘したかえ。

左七　左七が思はぬ手にかゝり、可愛やお絲は死にました〳〵

十兵　して、書置の中にある、幼き鳥追の娘とは

九郎　只今申した九郎兵衛と、小絲が間に誕生の

とき　夫の手古奈の守を添へ、捨てたその子が成人して

左五　乞食の手汐に育てられ

左七　親の行くへを尋ねんと、血筋と知らずお絲が合力。

十兵　道引く縁の伯母と姪、その一兩と金ゆゑに

とき　可哀や娘は惨たらしう、殺した奴はそりや何もの。顏は知らねど娘の敵。

九郎　女房、われは討つ心か。

とき 手沙にかけねど血を分けし
九郎 娘を殺した科人は
とき お前、知つてか。
九郎 コレ、知らぬ事とて、おれだわい。
とき エヽ。
十兵 ナニ、現在の娘をば
左七 九郎兵衛どのが
佐五 殺したとは。
権兵 また人殺しか
トかゝるを、左七引付け、當てる。お時、九郎兵衛にすがつて
とき コレ、九郎兵衛どの。わが子を殺して落ちつき顏。コレ、七年逢はぬあの娘、なんでお前は殺さんした。サ、その譯云はんせ、コレ、九郎兵衛どの。
ト胸づくしを取つて思ひ入れ。
九郎 尤もだ〳〵。かゝア、道理だ。コレ、娘と知らず殺したも、守の中には金と聞き、日頃非道な九

郎兵衛が、騙して取らうとするうちに、帶に巻かれて首をしめ、絶入る息のその死骸。腰に付けたる守の內、探せばわづか一兩の、金ゆゑ可愛や殺したかと、何時にかはつて胸騷ぎ。これも肉身分けし子を、親の手づから殺したと、知らぬ凡夫の悲しさは、堀へ蹴込んで立かへり、今日までわれにも沙汰なしに、隱した事も恐しや

とき　天のお罰で殺したる、その子は一人のわが娘。僅かな金ゆゑあの子の災難。お前の妹御お絲さん、その一兩を遣らしやんせずば死ぬまいに、いたはる心が仇となり、顏も知らねど一人の娘、産むとそのまゝ捨てたもお前。他人の手汐に育てられ、二親戀しと尋ねるを、又ぞろ親が殺すとは、いかなる過去の約束事、常からお前の惡心が、妹に報い、わが子にまで、報うて來たと九郎兵衛どの、こなさんは知らんせぬか。コレ、今日まで作る身の科が、一度に報うて來たのぢやわいなう。

ト守袋を以て、さまざまと口說く。九郎兵衛思ひ入れ。左七こなしあつて

左七　現在、妹のお絲の敵だ。九郎兵衛、左七を存分に

九郎　イヽヤ今更こなさんを、妹が敵と討つたならば、可哀やお絲があの世の迷ひ。

十兵　妹の娘が菩提の種、色紙を差上げ左七どの、御出世なさるがお絲どのへ、これに增したる追善あ

らん。左五郎様の持参の色紙、跡追つかけて本庄様へ。
左五　わしが心も反故にせず、持つて参つたその色紙、商人だけに元金は
九郎　この九郎兵衛が一走り、金と色紙を引替へに。
左七　帰参の後は、お絲が敵と
十兵　まづ大切な色紙を早う。
とき　せめて妹を、この場へちよつと
ト賍よつて戸棚をあけろ。後の壁切ぬきあり。
ヤヽヽヽ、うら壁切つて、妹はこゝには
左七　後隣は九郎兵衛どのゝ
九郎　わしが内から壊つた壁が
左五　こりやまだ九郎兵衛、根性が（ト立かゝろ）。
九郎　思はぬ疑ひ。お房の詮議に
権兵　（心づき）お房は番頭佐五兵衛が、葛籠にぶッ込み、連れて行つたワ。
左五　扨こそ此方のどさくさ紛れ

とき　壁をこぼつて妹を

十兵　盗み出した番頭佐五兵衛。

左七　遠くは行くまい。

九郎　色紙もろとも。（ト門口へ出ようとする）。

權兵　ソリヤ。

ト路地より捕り手三人、弓張り、十手にて、づか〳〵と出て

捕人　捕つた。

トかゝるを、九郎兵衛、千鳥に内へ投げ込む。十兵衛、左七、左五郎、三人の捕り手を引しく。お時、權兵衛に蒲團をかぶせる。

十兵　こゝ構はずと

左七
左五　色紙を早う。

とき　こちの人

九郎　合點だ。

トごん〳〵にて、九郎兵衛向うへ走り入る。舞臺はこの見得にて道具廻る

本舞臺三間の間、うしろ黒幕、白壁の塀、こゝに綱五郎、五平太を引とめ、葛籠の合せ目より白振り袖の出かゝりしを背負ひゐる佐五兵衛を引付けゐる見得。禪のツトメにて道具とまる。三人立廻りあつて

綱五 こりや山住五平太、さては身どもが持參せし
五平 色紙の金の二百兩、殊に證據のその一札、われに遣つてはこの身の破滅。
佐五 こなたが内に隱しておいた、お房も裏からひん盜み、おれが女房だ、こゝ離した。
綱五 さてこそお房を葛籠の内に(ト引付ける)。
五平 綱五郎、覺悟。

ト切り付ける。立廻り。後より九郎兵衛、色紙の箱を持ち、づか〳〵と出て

九郎 綱五郎樣。
綱五 九郎兵衛か。
九郎 お尋ねなさるゝ小倉の色紙。
綱五 手に入つたか。エヽ、忝ない。
佐五 五平 それを

トかゝろを兩人(りやうにん)、きつと留(と)めて見(み)え。

九郎　まづ今日(こんにち)はこれぎり。

トめでたく

打出し

勝相撲浮名花觸

かちずまふうきなのはなぶれ

勝相撲浮名花觸

發端　柳橋の場

役名　船頭、長助。箱持ち、善八。中間、又助。藝者、お俊。角力取り、白藤源太。足駄の齒入れ、權助。

本舞臺三間の間、後ろ黑幕。東より西へ柳橋の欄干、横を見たる道具。舞臺一面に、浪板にて、所々に小船大分、よき所に屋根船一艘、簾を下ろし、提灯を點し、繫ぎある。花道より舞臺へ棧橋を掛け、橋の袂、誂への石垣。時の鐘、四つの拍子木、雨の音にて幕明く。

ト長助、船頭の拵へ、剝身笠にて、鼻唄を唄ひながら川岸をつけてゐる見得。空を見て

長助　アヽ、小降りになつたわえ。

ト枕箱を出し、煙草をのんでゐる。矢張り時の鐘。向うより善八、下駄がけにて、大黑傘をさし、繼ぎ棹の三味線箱を萌葱の風呂敷に包み、これを背負ひ、丁子車の附きし留守居提灯を點し、出てくる。後よりお俊、江戸藝者の拵へにて、蛇の目の傘、黑の長合羽、塗り下駄にて出て來る。花道にて

善八　モシ、お俊さん。伴之進様がお船に待つてゞござりませう。ちつと早く歩きなさいな。併し道が悪うござります。氣を附けて歩きなさいよ。

しゆ　コレ、善八どん。こなさん、マア、伴さんの雇ひなら、留守ぢやと言うてもよい事を、この、マア、雨に、早う歩くも張合ひが無いわな。

善八　ハテ、どこへ出なさるもお客だわな。小言を言はずと、お出でな。

しゆ　何だな、きいた風な。靜かに言つてもいゝわな。

ト小言を言ひ〳〵、本舞臺へ來る。長助、提灯の印しを見て

長助　アヽ、八つ丁子の紋はお俊さんだの。コレ、善公か。

善八　オイ、長スか。豪氣な雨であつたの。して、旦那はお船か。

長助　待つて居なさるわな。

善八　サア、お俊さん。棧橋が辷りますよ。

しゆ　コレ、善八どん、やんだの。

善八　アイ、晴れて來やした。

しゆ　傘を持つてくんな。



長助　サヽ、こゝへお寄越し。

ト船より傘を取る。この内、お俊合羽を脱ぐ。長助船より取る。

しゆ　長助どん、お慮外な。伴さんはお連れがあつてか。

長助　イヽエ、お一人サ。

しゆ　氣障だなう。

長助　ナニ、氣障な事がありやせう。ちよつと見なさい。ソレ、お開帳。

ト簾を上げる。中に白藤源太居る。お俊見て

しゆ　オヤ、白藤さん。

源太　豪氣に待たせたの。

しゆ　エヽ、人ぢらしな。

ト思ひ入れあつて船へ入る。

善八　人ぢらしも凄まじい。お前、道々豪氣に小言を言ひなすつたが、どうだえ、善公は通り者だらうね。

しゆ　善八どん、奇妙だよ。

善八　エヽ、雨もやんだが、御機嫌も直つた。
長助　善公や。三味線箱を寄越したり。
善八　オツト、合點。
　　ト提灯を消し、箱も一緒に船へ入れる。長助手傳ひ、よろしくあつて
長助　コレ、善公。その小船を傳つて來さつし。向う河岸におつりきな幕があるの。
善八　飲める話か。
長助　勿論サ。
善八　面白いの。
長助　危ねえぞ。辷るまいよ。
善八　オツト、來たり。
　　ト小船を傳つて、二人とも土藏の際へ上る。
源太　コレ〳〵、この手合ひは、今時分どこへゆくぞ。
しゆ　なんだな、話しねえな。
長助　ナニ、直ぐに行つて來やすよ。鬮取り、枕箱に蠟燭がありやすよ。

善八　オット、あとは言ひッこなし。

長助　おきやアがれ。

ト捨て鐘になり、兩人、上の方、へ入る。あと合ひ方になる。

しゆ　コレ、源太さん。お前も、マア、わたしが氣性も知らねえか何ぞのやうに、伴さんの雇ひだと言つて、わたしを呼びに寄越したは、こりやア飛んで來るであらうと、疑つて書いた狂言だの。そりやアお前でもねえよ。

源太　コレ〳〵お俊。毛頭おれア、そんな遊びを考へ出すやうな生れでもなし。ハテ、商賣は何だな、角力取りではないか。人を投げる手は知つても、藝者を轉ばす手は知らねえの。

しゆ　エヽ、知らねえ者が、あの兼松はどうして產しなすつた。お前の子ぢやねえかえ。

源太　兼松をおれが子でないとはいつ言つた。

しゆ　サア、わたしやア、生れついて、色氣のある男が嫌ひ。それで、ツイ、お前と眞に斯うなつたぢやアねえか。お前の爲には惣領のあの子、乳母でも置いて育つて見たいが、それぢやアわたしがしみッたれに見えようと言ひなさるから、あの善八の世話で、本所の岩淵とやらへ里に遣つて置けど、この頃はもう大きくなつて居よう。マア、笑ふわいな。

源太　サア、おれも一寸兼松を見に行かうと思うても、この商賣で乳飲ッ子を抱きかゝへるも薄鈍いものよ。殊に、最屓にして下さる衆が、家を持てと言はつしやるが、この江戸で、白藤が家を持つた事、在所へ知れちやァ

しゆ　悪いのかえ。そりやァ大方、お前の話しなさんした、云ひ號けのお澤さんとやらが

源太　ひよつと尋ねて來られては、おぬしが手前言ひ譯も無い話。殊におれが親の源兵衛どのゝ、恩になつた石濱の御家中、主水樣の弟御、御浪人さしつた勝次郎どの、身性のわるい生れつき。貢いで置くも、あの人にするではない、兄樣にすると思ふから、お邸で紛失の短刀といひ、詮議して差上げれば、主水樣の御推擧で、この白藤は殿樣へお目見え。お長屋を貰つてその時は、てめえもお袋も引取つて、お邸へ引越し女房だ。こんな相談もお袋が聞かれて、何を木に餅の生るやうな事をとさげすまれるも氣の毒ゆゑ、あの長助を頼んで、今夜はゆつくり話さうと、釣り出したものよ。

しゆ　なんのマア、耳の不自由な母さんに、遠慮がいらうぞいな。あの兼松が事も、里親の手にかけずとも、わしが育つて見たいと言はしやんすが、それではどうも、世間の手前

源太　イヤ〳〵、藝者の内で、しめしを干す程、しみつたれな物はねえ。お袋が心善しだけに、猶々物に遠慮があつて。それにしても、主水樣と、應對した勝次郎どの、不埓な金が五十兩。二人の手か



ら役所へ上げろと言はしつたが、どうもその五十兩が。(ト屈託の體)。

しゆ　わたしもそれが氣に掛つてな。まだその外にお前の在所、東金とやらに居なさんす、お澤さんとやら、ひよつと今にも逢うたなら

源太　アヽ、役にも立たぬ事を。なんであのお澤が、江戸三界へ。……イヤ、この六月は屹度來るて。

しゆ　六月になりや、何故來なさんすえ。

源太　ハテ、回向院に嵯峨の釋迦の開帳がある。

しゆ　エヽ、阿呆らしい。(ト思ひ入れあり)。オヽ寒む。風邪ひいたやら、寒氣がして來たわいな。

源太　おれもこの間まで瘧を病んで、コレ、見やれ、腕の細つた事を。(ト思ひ入れあり)。お俊や、寒氣がするなら、コレ〳〵、蒲團を着て居やれな。(ト五幅蒲團を取つて、お俊に着せる)。

しゆ　お前も病み上り。冷えなさんすな。こゝへ入りなさんせ。(ト蒲團を半分着せる)。

源太　イヤモウ、この春は箆棒に寒かつた。ドレ、提灯を消さうか。(ト立たうとする)。

しゆ　コレ、なぜ灯を消しなさる。

源太　ハテ、暗くして話さうわな。

しゆ　エヽ、矢ッ張り灯して置きなさんせいなア。

源太　サア、灯して置いちやア、此方で（ト言はうとして）話は暗くつても出來るわな。

ト立ちかゝつて提灯を消す。

しゆ　サア、早く話しねえな。

ト横にならせる。源太氣の毒さうに

源太　アヽ、網の目にも風留るだ。

ト船の簾を下す。時の鐘を打込む。雨車の音。向うより岩淵權助、汚き形にて、素足を端折り、跣足にて、破れし番傘をさし、頬かむり。中間又助、やつしの形にて、同じ拵へ、襟へ手拭ひを卷き、相合ひ傘にて出て來る。花道にて

權助　アヽ、どうか小降りになつた。コレ、又助、向うの橋詰めか。

又助　さうサ、この間から話す通り、石濱の屋敷の重寶、千代鶴の短刀、銘は慥かに（ト思ひ入れ〳〵。）

權助　國安といふぢやアねえか。

又助　それ〳〵、その國安々々。國安とは言へど、値は高い短刀だげな。捨賣りにしても、百兩からの代物。

權助　それをおぬしの主人勝次郎どのが

又助　サア、お邸を暇が出て、彼處や此處に居候ふ。わしを呼んで言はるゝには、勝手を知つた邸の内、あの短刀を盗んで來いと言はるゝから、直ぐにその晩邸へしかけ、盗みは盗んだが、滅多には渡さぬの。

權助　われが主だと言つた勝次郎は、人の惡い奴ぢやァねえか。

又助　サア、二文でも手放さねえ生れ附き。折角おれが夜盗に入つて、旨味を彼方へ取られた上、もくが割れゝば、首はおれが切られて、金は彼方で巧うやるソ。そこで氣が變つたの。

權助　そして、未だ勝次郎には渡さねえか。

又助　どうして〳〵。シタガ、彼處や此處に居候ふのこの又助。盗み物の短刀、持つても歩かれすと、あの石垣の間へ突ッ込んで、隱して置いたて。

權助　いゝかえ。用心は惡くは無いかえ。

又助　ナニ、あの石垣はおれが庫も同然。盗み物をたび〳〵隱して置くが、さて賣らうと言つて、口がかゝらねえ。どうぞおぬし、賣つてはくれまいか。

權助　そりやァ知れた事だ。おぬしが風體で、そんな代物が、ナニ、捌けるものか。殊にてめえ無宿ぢやァねえか。古布子や雪駄とは違ふワ。誰が相談するものか。おれに寄越しやれ。値を好く捌いて遣

ろワ。

又助　頼んだぞよ。百兩になれば、コレ、二十兩遣るワ。

權助　面白いの。併し、こんな代物には、鑑定書があつたであらう。

又助　サア、その折紙はノ、つい勝次郎どのゝ方へ渡したて。

權助　アヽ、そりやア惜しい事をしたなア。併し、代物さへあればいゝわえ。

又助　さうサ。折紙は又どうともならう。サア／＼、來さつし／＼。

ト兩人舞臺へ來り、棧橋より川へ下りて、又助、石垣の際へ寄り

こゝだ／＼。コレ／＼、人が來るが、頼むぞえ。

權助　合點だ。

ト方々を見張つて居る。又助、石垣の間をほじくり、古風呂敷に卷きし短刀を出し

又助　コレ／＼、これだ／＼。

ト差出す。權助上より手を出し、短刀を取り

權助　アヽ、これが短刀か。

又助　さうサ。それでも百兩にはなる代物よ。ドレ、跡をならして置かう。どうで盗んだ物はこゝへ持

つて來ねばならぬ。おれが大事の處だ。

ト權助上にて彼處此處と見廻す思ひ入れあつて、手を伸し、又助が襟の手拭を直ぐに首にまとひ、兩手にてグツト締める。又助聲立てる間もなく苦しんで死ぬ。捨て鐘、權助息の通ひをよく〳〵見て、直ぐに蹴返す。又助、川の中へ落ちる。水音烈しくする。權助、短刀を拔き、見ようとしても、暗き思ひ入れ。この物音に驚き、船の中の簾を上げて

しゆ　オヽ、怖。今の音は何であらうな。

源太　大方、身投げかも知れねえ。

しゆ　オヽ、氣味の悪い。それだから、灯を消しなさんなと言うたに。

源太　ハテ、枕箱に火繩も附け木もあるわえ。コレ〳〵、こゝにあるワ。

ト枕箱を出し、中より火繩を出し、お俊が方へ出す。兩人捨ぜりふ。お俊、附け木を取つて火繩の火を移し、附け木へぽつと燃え附く。提灯へつけんと、お俊立ちかゝろ。權助灯の附くに、幸ひと、思はず短刀を見んと、探り寄つて、お俊が目先きへ突き出す。お俊ハツと言うて、附け木を川へ落し、源太に抱き附く。この聲に權助悔りして、短刀を後ろへ隱す。源太、お俊を抱へて、刀を取つて立たうとする思ひ入れ。この仕組み宜しく、時の鐘、だらにて、拍子

幕

幕のうち、捨て鐘のツナギ、引返し。

序幕

大のしの場
割下水の場

役名 潮田伴之進。船頭、長助。番人、作右衛門。若黨、左吾平。角力取り、槌山島右衛門。尾張屋勘吉。呉服屋、六之助。草履取り、丹八。波江川丈七。お澤姉、お富。大のし下女、お倉。同、お美代。讀賣り、三五郎。大のし、富八。東金宿のお澤。津川勝次郎。藝者、お俊。角力取り、白藤源太。足駄の齒入れ、權助。坂間傳兵衛。

本舞臺、三間の間、正面、上の方に九尺の格子を附け、それより下の方へ掛けて、屋根附きの門拵へ、左右へ開き戸、これに引き戸の潛り取り附けてあり。門の鴨居に神田川參會といふ札下げてあり。すべて柳橋大のしの門口。幕の中より大のし富八、やつしの形にて、入り口に長火鉢を据ゑ、これに串に刺したる大きなる鯛を燒いて居る。長床几にお倉、お美代、前垂れ、下女の拵へ、笊に入れたる嫁菜を拵へ居る。辻打ちにて幕明く。

ト呉服屋六之助、町人、羽織、やつしの形にて出て來る。あとより尾張屋勘吉、やつし、着流しの形にて、仕出し多勢に交つて出て來る。

六之　勘吉どん。どうぞ今日は捕まへたいものだの。

勘吉　イヤモウ、兩國あたりに毎日まごついて居る筈でござる。

ト言ひ〳〵、舞臺へ來て、富八を見て

六之　富八さん、お忙しいの。

富八　オヽ、お前がたはなんだ。けふは出番か。ちつと寄つて行きなさいな。

勘吉　イエ〳〵、ちつと尋ねる者がござるて。

富八　エヽ、駈落ち者かえ。

勘吉　何サ、勝次郎といふ浪人サ。

くら　アヽ、そりや向う河岸にござります、勝次郎さんの事かえ。

兩人　さやうサ。

富八　あの人なら、毎日おれが內へも遊びにござるて。

兩人　そんなら、お前のお座敷を借りて、待つて居やせうか。

みよ　モシ、六之助さん。今日此方の内に來て居なさんすお俊さんが、お前に逢ひたいと言うてござんしたぞえ。

六之　エヽ、お俊さんが來てかえ。あなたのお頼みの櫛の註文、幸ひと持つて來たに。

勘吉　いゝ幸ひだ。お俊さんに逢うて行きやせう。

富八　さうしなさい。今日は神田川の參會、坂間の旦那傳兵衞樣の座敷に出て居なさる。てまへ達、敎へて進ぜろ。

くら　アイ〳〵。サア、お出でなさんせ。

六之　そんならさうしませう。

勘吉　勝次郎どのに逢ふまで、富八さん、お座敷を塞げますよ。

富八　ゆつくりと用を足しなさい。

下女　サア、お出でなさんせ。

ト辻打ちになり、六之助、勘吉、お倉、お美代、附いて内へ入る。富八捨ぜりふにて、燒き物の鯛を臺所へ運んで居る。矢張り辻打ちにて、向うより岩淵の權助、やつし、そぼろなる形にて、素麵櫃に抱き子を入れ、片荷の箱に道具を入れ、これを天秤棒にて擔げ

權助　足駄の齒入れ。足駄の齒入れ。

ト言ひながら出て來る。富八見て

富八　オヽイ。好い所へ齒入れが來た。コレ、下駄や足駄の齒を、みんな出して入れさせないか。

下女　アイ〳〵。（ト古下駄を二三足持つて出て來て）サア、これを入れて下さんせ。

富八　コレ、値切り小切りはしないによつて、丈夫にしてもらはうぜ。

權助　何サ、齒入ればつかり、掛け値はござりませぬ。いつも致しますから、如才はござりませぬ。

ト言ふうち、下座より若い者、足駄と下駄を繩につるし、持つて來て

男　コレ〳〵、これをみんな入れて下さい。そして、この差し齒の方は、ぎく〳〵しないやうに入れて、この河内屋へ持つて來さつし。その時、錢を遣るよ。（ト言ひ捨てゝ下座へ入る）。

富八　ソレ、見さつし。おれが呼び掛けたばつかりで、段々近所から持つて來るワ。その格子の際が好からう。

權助　アイ〳〵。日當りが好い。ドリヤ、こゝらで仕事を始めようかな。

ト辻打ちになり、格子の際へ荷を卸し、鉋、鋸、才槌なぞ取り出し仕事にかゝる。向うよりお富、やつし、女房の拵へ、後ろ帶。振り袖、眼病體のお澤、錦繪を懷へ入れ、紅絹の目拭きを持ち、供の

男一人、附いて出る。あとより潮田伴之進、羽織、着流し、大小、ばつちにて、出て來る。あとより丹八、紺看板、供の形にて、持ち草履を持つて出て來る。皆々直ぐに舞臺へ來て、伴之進、富八を見て

伴之　オヽ、大のしか。先日はいつもながら喰べ醉つたて。今日は、あの時の勘定を致さうと思つて參つた。

富八　それは有り難うござります。マアく、これへお掛けなされませ。

丹八　お旦那、御覽じませ。いつもく、よく客のある内でござります。

伴之　さやうく。大分取込みだ。（ト床几へかける）。

富八　イヤモウ、今日は參會と伊勢講で、殊の外取込んで居りまするて。（トお富を見て）コレ、お富さん、今日は大分手間どりましたね。

とみ　サア、今日は行きやうが遲うなつたゆゑ、療治は後へ廻つたその代り、ゆつくりとお療治も受けて、歸りはちつとこの子にも氣を晴らさゝうと、あの廣小路で方々見せて居りましたが、豐國とやらの畫いた錦繪を、在所へ土産にしたいといふゆゑ、それを買うて、見附けを越して、藏前の傳兵衛さんの所へ寄つたれば、今日は參會で、此方の内へ來てぢやと聞いて、それからそこく

にして戻りましたが、其方も草臥れはせなんだかえ。
さは　イエ〱、わたしもぢつとして居るより、歩いて居る方がようござんすわいな。
富八　それがよいのサ。そんなら濱町から見附けを出て、傳兵衞さんの所へ寄つて歸つて來たのか。道理で妙な方から歸つて來たと思つた。何でも今、この子の言ふ通り、紛れて善い事もあるものだ。なんと、それ程歩くうち、ちつとづつ方々が見ようなつたやうか。
さは　どうしてマア、心にこれが見たいと思うたとて、自由にならぬこの病ひ。いつそ一思ひに。この目が潰れてしまうたら、結句思ひはあるまいと、思へばいとゞ氣合ひが惡うござんすわいなア。
とみ　又其やうな事言やるかいの。此やうに、何から何まで、お世話になる富八樣、なんぼ心安立てぢやとて、ほんにお氣の毒な事ばつかり。必ず氣に障へて下さりますなえ。
富八　なんの、大事ないのサ。どうしてわたしが氣にかけるものだ。そんな事は打つ捨つて置くがよい。時に、國へ土産に買つて來たといふ、錦繪はこれか。
ト見ようとすれば、お澤押へて
さは　アモシ、なんのわたしが物好きで買うたこの錦繪。見やしやんせいでもようござんすわいな。
富八　ハテ、何も恥かしい事はない。ちよつと見せなさい。(ト言ひながら取つて錦繪を開き) なんだ、國

へ土産にする繪は、豐國の描いた坂三津に、杜若か。大和屋に大和屋、有り難いの。今では田舍の衆も江戸へ出ると、直ぐに浮氣になる奴サ。

伴之　イヤモウ、めんえうな。娘子供は三津五郎を贔屓にするて。時に、あの二人は、大のしが親類といふやうな事か。

富八　イヤ、別して左樣な儀でもござりませぬが、坂間の旦那傳兵衞樣の、母方の御親類。在所は上總の東金、江戸見物やら療治やらにござりましたが、どうでも坂間の内はお取込み。殊に私どもの内は川を見晴らし、保養にもならうかと、お二人ながら此方の内へ、御逗留でござりますて

伴之　アヽ、斯う見た所が、どうやら妹姉と見えるわい。ハテサテ、田舍にしては好い生れぢや。殊にまだ嫁入り前と見えまするな。

富八　左樣でござりまする。シタガ、あの子には云ひ號けの男があれど、そのマア男が、一向國へ歸らぬによつて

伴之　アヽ、男に捨てられたか。

　　トうか〳〵いふ。お澤ハツと恥かしきこなし。

とみ　アヽコレ、富八さん。なんのマア、言うても言はいでもの事を。

ト思ひ入れ。富八氣の毒なるこなし。

富八　そいつは惡かつた。ツイ、うか〳〵と、イヤハヤ、わが身ながら、よく無駄を言ふ奴サ。

ト此の時、荷の中にて抱き子泣く。

權助　アヽ、又吠え出したな。（ト荷の中より抱き子を出し、思ひ入れあつて）エヽ、又ダツスリやりやァがつた。又寒い目をしやァがれ。

ト上の着物を剝ぎ、荷の上へ掛けて干す。皆々見て

富八　なんだ、この男は。足駄の齒入れの荷の中に、小さい子を入れて歩くの。

とみ　ほんに、好い子ぢやが、こりや、お前、母親が無いのかえ。

權助　アイ。有つたといつて、無いも同然。この小僧は里に取りやした。

さは　エヽ、そんなら男のお子かえ。

權助　アイ。よく肥つて居りやすよ。

とみ　アレ、妹、其方に見せたい。よい男の子ぢやわいの。

さは　ほんに、里に取りなんしたとあれば、定めしそのお子の親御さんも、乳が無いといふやうな事でござんせう。申し、姉さん。どうぞそのお小さいのを、わたしに抱かせてドさんせいなァ。

とみ　ほんに、其方は子煩惱。ドレ、わたしがあなたに譯言うて。……ア、モシ〳〵、お聞きなさる通り、あの子は常から子可愛がり。どうぞちつと、抱かせてやつて下さりませ。

權助　お安い御用サ。併し抱き賃が出やすよ。ハヽヽヽヽ。

とみ　ドレ、叔母がちつと抱いて遣りませう。……サア、妹、このお子ぢや。抱いて見や〳〵。

さは　アイ〳〵。（ト抱き取り）これはマア、よう肥えて居なさんすなア。……シタガ、こりやいかう肌薄でござんする。

權助　アイ。たつた今、拔きやしたから、彼處へ干して置きました。

富八　コレ、齒入れどん。こなたはその子を、どこから里に取つた。

權助　アイ、あの小僧はね、當時盛んの角力の關取り、白藤どのと、藝者のお俊さんとやらの仲に出來た子サ。モシ、シタガ、こんな事は沙汰無しだよ。

トこれにて皆々思ひ入れあつて

仲之　ナニ、その餓鬼があのお俊の（ト思ひ入れ）。

とみ　お俊さんとは、この間、こゝのお內でお目にかゝつた

さは　あの藝者さんと白藤さんの、仲にもうけた、アノ、この子が。エヽ。

（ト悔りする途端に、抱き子頻りに泣く。お深いぶりつけながら、抱き子の顔を見たきこなし。）

とみ エヽ、ソレ、お小さいのが、おむづかつてぢやわいの。

さは でもマア、この子の。（ト、下ろして思ひ入れ）。

權助 アヽ、寄越しなさい。泣き出すと止度の無い小僧だ。大の泣面だ。サア、こゝへ寄越しなさい。

さは サ、もつとこの子を、抱かせて置いて下さんせいな。

とみ 今、聞きやつた譯ならば、尤もな事ながら、それではどうもそのお子を

さは サ、さう思へども、床しいお方の。（ト抱きかゝへて思ひ入れ）。

權助 ハテ、又泣きやすよ。

（ト差寄つて取らうとする。向うにて

大勢 喧嘩々々。（ト言ふ）。

丹八 お旦那、喧嘩が出來たさうでござります。

富八 アヽ、喧嘩がある。お富さん、危なうござりますよ。

權助 巾着切りでも捕まつたか。ドレ、お寄越しなさいやし。（ト無理にもぎ取る。又抱き子泣く。）エヽ、又吠える。（ト振り廻す）。

さは　せめてあの子に

とみ　ハテマア、來やいなう。

ト辻打ちになり、お澤抱き子へ心殘すな、お富無理に手を曳き、内へ入る。權助、矢張り荷の方へ寄つて抱き子をいぶりつけ、細工にかゝる。向うより津川勝次郎、下駄がけ、着流し、大小の形にて、讀賣の體の三五郎の襟髮を引摺つて、出て來る。あとより船頭長助、下駄がけの形にて、捨ぜりふにて取押へながら、出て來て、直ぐに舞臺へ來て、勝次郎、伴之進と顏見合せ、あたりへこなしあつて、三五郎を引据ゑる。

伴之　アヽ、御身は勝次郎どのぢやござらぬか。

勝次　これは伴之進樣でござりましたか。

伴之　其許は町人を捕へて、晝中に何を仰山に。

勝次　サア、聞かつしやりませ。大抵太い奴ぢやアござらぬ。コレ、エヽ、われが請け判をして寄越した又助は、大切な用事を申し附けたに、折角首尾好くしおほせて、その短刀を（ト言はうとして、思ひ入れあり）サア、大切な物を賣つて來ますと、持つて出たが最期の助、それから直ぐに隨徳寺。今逼塞の身で、家來に駈落ちをされちやア、第一、此方の工面が違ふ。聞けば、われが内に、あ

の又助を、隱まつて置くけな。わりやア請け判の身分で、奉公人に盗みをさせるか。サア、又助を出せ、出しやアがれ〳〵。

三五　モシ〳〵、旦那、仰しやる事は御尤もでもございますが、何だか根ッから譯が解りませぬ。

勝次　何が解らねえ。

三五　サア、成る程、又助を私しが宿になつて、あなたへ上げました。奉公人の取逃げ、駈落ちをするを、ナニ、私しが馴れ合つて致しませう。その上、何をマア盗んで逃げました。小袖か、お羽織か、代物が解らねば、詮議の致しやうがござりませぬ。して、品は何でござりまする。

勝次　サア、何でおらうと、大切な品だ。又助を連れて來れば解る。うぬ、宿の役だ。たつた今連れてうせろ。

ト　これにて勝次郎、困つた思ひ入れにて

三五　ハテサテ、それが御無理でござりまする。

勝次　何が無理だ。（ト立ちかゝろ、長助留めて）

長助　モシ〳〵、勝次郎さん。その中間の又助とやらが、請け判を据ゑたこの三五郎どの、遁れ手はねえが、今もあの人が言ふを聞けば、その又助が駈落ちをしても、おらノ旦那と內證は、一つ釜だと言つ

たけにござります。そんならお前様御得心で、家來に駈落ちをさせなすつたのでござりませう。

勝次　默りやアがれ。主が家來と馴れ合ひの駈落ちと吐すのか。何をこゝな房州船頭め。うぬが知つた事ぢやアねえ。すッ込んでうしやアがれ。（トこれにて長助ムッとして）

長助　なんだ、すッ込め。イヤ、すッ込むめえ。こなさんも二本差せど、萬吏主家來の馴れ合ひの、駈落ちをさせかねねえ人でもねえ。この中もわつしが附いて、深川へ行つて、一兩二分の下りを、この長助の顏で借りてやつたよ。まだその上にこの間、茅場町の角力で、千疋といふもの花を遣つて、それもわつしが請け合ひ。向うからは催促を受けるし、して見りやア、マア、こなさんも、あんまり又助と逦れた仲ぢやアねえ。サア、その請け合ひの金を、今寄越さつしやるか。

勝次　コレ、エヽ。うぬは人中で、おれに天井見せやアがるな。

長助　見せりやアどうする。こんたは二本差したとて、怖かアねえよ。

勝次　どうしたと。

長助　やかましい。借りた物を出して言はつしやいな。

勝次　うぬ。これといふも、この讀賣りの野郎め。

ト三五郎へ立ちかゝるを、富八、この中へ入り

富八　これはしたり。マア、静かになさいやし。コレ、こなたもおれが内へでも行かつしやい。

三五　何さ、打ちやつて置きなさいやし。

富八　ハテ、人の言ふ事も聞くものだ。

丹八　サア〳〵。マア、どこへか行かつしやいな〳〵。

三五　ハテ、打ちやつて置きなさい。

ト辻打ちになり、捨ぜりふにて、丹八、三五郎を引つ張つて、大のしの中へ入る。

勝次　コレ、エヽ、なぜあの野郎を逃がした。エヽ、長助、うぬはあの野郎と共謀だな。

長助　おかつしやい。駈落ちの中間と、こなたさんが共謀であらうが。

勝次　どうしたと。

ト下駄を脱いで、長助へ打つてかゝる。長助、この手を摑まへて、あちこち振り廻す途端に、この下駄権助の前へ飛ぶ。下駄の歯は缺ける。権助、これを取上げ

権助　モシ、この下駄へ歯を入れますかえ。（ト下駄を見せる）。

皆々　アヽ、今の下駄の歯が缺けて

勝次　コレ、歯入れ。ツイ粗忽で、おぬしの前へ飛んだ下駄。ドレ、こゝへ寄越しやれ。

權助　わしが面へ、當たる分にやァ構はぬが、すんでの事に、預り物のこの小僧に

勝次　ハテ、おぬしは、小さいのを連れて、商賣に歩くか。

權助　この節ァ一職ぢやァいかねえから、足駄の齒入れと里ッ子を、一つ荷にして歩くのサ。

富八　ハテ、商賣にやァ精を出すなう。時に、旦那、一つ召上がりませぬか。

伴之　身もさやう存じて參つたが、この人にちつと用事もあれば、マア〳〵、てまへは先きへ行つて。

コレ、あのお傻が來て居るぢやァないか。

富八　左樣でござります。

伴之　然らば押しつけ行く程に、お傻にもさやう申してくりやれ。

富八　畏りました。あなた、御一緒にお出でなされませよ。

ト辻打ちになり、勝次郎に挨拶して內へ入る。

長助　コレ、勝さん。下駄を振り上げる程なら、立て替への金を寄越しなさいな。

ト權助は又元の所へ坐り、仕事にかゝる。

伴之　コレ〳〵、長助。身もあれで聞いて居つたが、當時不自由な勝次郎どの、大概な事は

長助　イエ〳〵、折角の御挨拶でも、どうもこの事ばかりは

仲之　待たれんと言ふのか。勝次郎どの、ハテ、氣の毒な儀でござる。

ト勝次郎思ひ入れあつて

勝次　思ひ出した。好い物がある。コレ、長助、大切な物だが、金の出來るまで、この折紙をわれに預けて置く。サア、これで二三日待つてくれろ。

ト懐の折紙を長助に渡す。

長助　ナニ、折紙え。こんな反故で五兩餘りの請合ひを待てかえ。モシ、わしやア金で欲しいわな。

仲之　コリヤ／＼、わいらは何も知らぬから、尤もな事ぢやが、その折紙といふは、そりや大金になる品。二三日の處待つて進ぜろ。ハテ證文も同然、身が請け合ふ程に、その折紙を預かつて。

長助　エヽ、左樣なら、お前さんお請け合ひかえ。ようござりやす。さう仰しやるからは、證文だと思つて、預かつて置きませう。

仲之　それで身共も、勝次郎どのも立つて、マア、喜ばしいわえ。

勝次　コレ、反故だと思つて、又粗忽にするなよ。

長助　イヤモウ、證文だと思やア、しつかりと預かつて置きませうよ。

勝次　併し、人に決して見せめえぞ。

長助　伴之進樣、こりやァお世話になりました。

ト辻打ちになり、長助大のしの中へ入ろ。勝次郎見送り

勝次　成る程、下司といふものは、仕方のないものだ。時に、伴之進樣、わしが邸をだりむくつた跡で、お金が二百兩紛失して、兄の主水が難儀になつて居るといふ話を聞きましたが、貴殿には其やうな事御存じないか。

トこれにて伴之進ぎよつとして、又思ひ入れあつて

伴之　それは珍說。……一向承らぬが、そりや虛說でござらう。

勝次　イヤ〳〵、何でも兄の主水は、不首尾に違ひない。大方、外に惡い奴が、二百兩捲き上げて、おッせいがッせい、この勝次郎に、冠せる工面でした事であらうが、これぱつかりは、わしが出た跡だによつて、萬更わしが科にもなるまいが、なんと好い事をする奴があるではござらぬか。

ト伴之進こなしあつて

伴之　ハテ、それ程の事を、拙者が知らぬといふ事はござらぬが、まづ密かに樣子を探つて見ませう。

ト此うち勝次郎も思ひ入れ、權助、荷箱の中より、短刀を出して、伴之進が前へ持つて行き

權助　モシ、お侍ひ樣。あなたをお見かけ申しましてのお願ひでござります。どうぞこの短刀をお買ひ

なすつでは下さりませぬか。

ト出す。勝次郎見て、恟りして

勝次　オヽ、この短刀は、今最中、尋ねて居るおれが短刀だ。ハア、そんなら汝は、駈落らした又助めと馴れ合ひだな。サア、此方へ返しやァがれ。（ト下に掛けるを拂ひのけ）

權助　エヽ、おきやァがんなさい。ナニ、おれがその譯を知るものだ。あの、駄折助めが、そこら中から附き馬や、尻りを持つてうしやァがつて、トヾは言ひ譯無さに、どうぞこの短刀を賣つてなりと、方々の借りを拂つて下さいと、言つて置いて行つたッきり、行くへが知れない。何でもこの短刀にやァ、强氣に種々な足が附いてあるが、それとも盗人になりやァ、お前も抱いて入るから、マア、さう思つてござい。

勝次　エヽコレ、もうちつと早く出しやァがると、双方都合よくやらかすものを、見すく\おれが物を

權助　何がどうした。いまく\しい。いつその事に、おれが方から持ち出さうか。

作之　コレサ町人。それは短氣。コリヤ、短氣は損氣ぢや。こりや、この作之進が買うて遣はさうか。

權助　そりやァ有り難い。たつて買ひたいと言はつしやれば、商人も足許を見て賣り切る所が、小判で百兩なら、賣りませう。

伴之　アノ、百兩。
權助　さやうサ。
伴之　成る程、早速買ひ取らう。幸ひ、これに金子はあれども、（ト勝次郎へ隱すこなしあつて）是非身共が求めるに相違ないが、なんと、晩まで待つてくれまいか。
權助　ようござります。御人體な伴之進樣とやら、違ひもござりますまい。待つて上げませう。もう斯う値の出來た上からは、わつしが持つて居るも心遣ひ。こりやァあなたへお渡し申しませう。
ト伴之進へ渡す。
伴之　すれば、聞き分けて短刀を、身共へ渡してくれるか。
權助　アイ、岩淵の權助でござります。泥の中でもこの足駄、口と心は入れ替つて居りまする。
伴之　ハテ、頼もしい。然らばきつと晩方まで。
權助　エヽ、有り難い。そんなら短刀はお渡し申しましたよ。ドリヤ、錢を集めて來ようか。
ト抱き子を懷へ入れて、足駄を二三足持つて、下座へ入る。
伴之　まづ、短刀は手に入つたワ。
勝次　こゝに一つ、好い事が出來たは、その以前、おれが親父が、白藤が親の源兵衞といふ奴を、世話

をして郷士にした、その大恩がある故に、白藤はお俊が所に、居候ふとなつて居ても、この勝次郎へ仕送りをしてくれる白藤。この短刀を玉に遣つて、あの白藤に首尾よく買はせて、身共が邸へ歸參の手蔓。

伴之　又その上に、今の齒入れめは、高が町人。コレ。(ト勝次郎に囁く。勝次郎呑み込む)。ナ、ソレ、斯うして彼方へ、おれは返してしまふワ。所で、こなたが白藤めに、百兩拵へさせて買はせれば、正味の短刀は此方へ〆上げて、貴樣の手先で百兩出來るワ。よしか。そこで又(ト囁く)。

勝次　(ソク／＼して)合點だ。うまし／＼。

伴之　ざつと一つ飲まうか。

勝次　飲むべい／＼。

伴之　サア、お來やれ。

ト辻打ちになり、伴之進先きに勝次郎、勇み立つて大のしへ入る。直ぐに向うより白藤源太、關取りの形、羽織を肩に掛け、誂への提げ煙草入れを提げ、裏附き草履にて出て來る。あとより槌山島右衛門、浪江川丈七、いづれも弟子角力の拵へにて、出て來る。花道にて

島右　モシ、親方、大のしへ寄つて見なさりやすか。

源太　インニヤ、今日は於俊がきつと出てゐるであらうから、寄つたら又、口がやかましからう。

丈七　それサ。併し、坂間の傳兵衛さんに逢ひなさらずば、折角呼びに寄越したものだによつて、ナァ槌山。

島右　それサ。今、場所から歸りがけだといつて、ちよつと寄つて見るがようごんせう。

源太　成る程、それもさうだ。そんなら汝等二人大のしへ行つて、誰ぞ呼び出して聞いて見るがよい。

兩人　アイ。

源太　直ぐに先きへ行けよ。

兩人　アイ。

ト島右衛門、丈七、先へ立つ。源太あとより舞臺へ來る。この内、權助、下座より古下駄足駄を提げて出て來る。懷の子泣くゆゑ、下駄を枕にさせ、叩きつけ、仕事にかゝらうとしてフッと源太を見て

權助　モシ、お關取り樣。どうぞお煙草一服、お貰ひ申したうござります。

源太　煙草か。それ。

ト提げたる煙草入れごと權助へ渡す。權助取つて見て、恟りして

權助　こりやア大層なお煙草入れでござりますね。どうしても御關取りは違つたものだ。そして金物は

オヽ〳〵、こりやァしかも、銀で蝶花形だね。成る程、強氣な煙草入れだ。そして鎖ばかりがいい金だ。これが一つ有りやァ、一かどの元手になります。ハヽヽヽヽ。(ト言ひながら、煙草を取つて煙草入れを源太へ返し)有り難うござります。(ト直ぐに仕事にかゝる)。

島右　ほんに親方、いつの間にか煙草入れが出來ましたね。

丈七　見やれ。何といつても、越川は古狸だよなァ。

島右　モシ、そんなら古いのを、わたしにおくんなさいやし。

丈七　コレ、おぬしはお俊さんをいたぶつて、煙草入れを取つたぢやァないか。今度はおれが番だワ。

島右　何サ。何でも

丈七　強氣に慾張つた奴だ。こりやァおれが物よ。

島右　ナニ、われに遣つてつまるものか。

源太　エヽ、此奴らは役にも立たない事を吐しやァがる。それよりおれが言ひつけた事をしやァがれ。

兩人　アイ。(ト大のしの門口へ立寄り)オイ。誰ぞちやつと頼みたうごんす。

ト合ひ方になり、奥よりお俊、着流しの形にて、少し醉うて居るこなしにて、出て來る。兩人、お俊を見て

オヽ、お俊さんかえ。

しゆ　何ぢやいな。お前がたは大きな聲で、けたゝましい。ちと嗜んだがよいわいな。

丈七　お俊さん。わしらも親方と一緒に

島右　今場所からの歸りがけサ。

しゆ　ほんにさうでござんすか。白藤さん。お前、何でこゝへござんしたえ（ト言ひながら、床几へかける）。

源太　イヤ、おれもおぬしがこゝへ出て居る事を知らぬではなし、こゝへ來たうもないけれど、坂間傳兵衛様が呼びに寄越してぢやゆゑ、ちよつと呼び出して逢はうと思うて、彼等にいひつけてやつた所へ、おぬしが出合ふも、味な事であつたなア。

しゆ　それいなア。わたしもお前に逢うて、急に話さにやならぬ事が

トあたりへ思ひ入れ。源太こなしあつて

源太　コレ、わいらもこゝの内へ行つて、逢はれるなら、傳兵衛様に逢つて、おれが來て居るといふ事を話してくれろ。

丈七　アイ、合點でごんす。わしらもこゝの内で待つて居て、船頭の長助に逢うてなア。

島右　そんなら親方、

兩人 行つて來ますぞえ。

ト兩人大のしの内へ入る。あと合ひ方。

源太 時に、お俊、話したい事とは、何ぞ又、氣遣ひな事では無いか。

しゆ サア、外の事でもないがな。困つた事は、あの勝次郎様が、いつの間にやら、あの下座敷で、例の惡たれ酒でござんすわいな。

伴太 ヤ、そんなら奥に、勝次郎様が。エヽ、情けない。そして一人か。外に連れでもあつてか。

ト言ふ所へ、内より

伴之 イヤ、その連れは身共ぢや。

ト合ひ方になり、伴之進以前の形にて出て來る。お俊思ひ入れ。伴之進こなしあつて、床几へかける。源太思ひ入れあり。

源太 イヤ、これは伴之進様。ようお出でなされました。

伴之 オヽ、白藤關取りか。ハヽア、見ればお俊と二人、何ぞ遠慮な事ではないかな。

源太 どう致しまして。私しも只今場所から歸りがけ、こゝの内へちと用事がござりまして、參りかゝつた所へ、ツイお俊と、引合ひましてござります。それは格別。旦那、明日あたり、場所へ入ら

つしやいませぬか。

伴之　成る程、今度の角力は大入りぢやげな。取り分け、伴之進は角力が好きぢや。女と取るが好きぢや。ハヽヽヽヽ。兎角、色酒でなければ、面白く無い。併し、色戀ひも金が無うては始まらぬ。近年は、色男ぢやとばかり言うて居ても、金が無くてはいかん事の。身共などはさのみな男でもないが、コレ、これでする。（ト紙入れを出し）この様に、懐には、三十と五十の金を貯へねば面白うないの。世の中には、色戀ひをしても、女には働かせて、それで身過ぎをするやうな男もあるて。ナウ、關取り。

源太　さやうでござります。當世は名を取らうより得を取れで、何事も金でござります。殊に、あなたは行渡つたお生れ。御身上はよし、立派なお武家様ゆゑ、定めし女の方から、無性矢鱈と持たせかけ、定めし、ハヤ、お困りなさるでござりませう。

伴之　ナニ、さまでの事もないのサ。……イヤ、今日は、大丸の支拂ひも致して參らねば相成らぬが、慥か呉服代も五六十兩あつたかも知れぬ。（ト紙入れを明け、いろ／＼あつて）慥かその位ゐは有ると思つたが。……アヽ、これは一角、これは熊の膽。

ト紙入れの中をいろ／＼搔き探す。抱き子泣く。權助、いぶりつけながら、伴之進が言ふ事を聞いて、

おづ／＼と側へ寄り

權助　モシ／＼、あなた。その熊の膽をちつと下さりませぬか。地びたへ寢かして置いたせゐか、蟲がかぶると見えます。

件之　オヽ、遣らう／＼。先刻の里ッ子か。

權助　左樣でござります。

ト　これにて源太、伴之進、顏見合せ思ひ入れ。伴之進、抱き子の着物を見て

伴之　コレ、齒入れ。どうも合點の行かぬ事があるわえ。この餓鬼が着て居る裂れは、去年おれが大丸へ誂へて、しかも上方へ染めにやつた身が留形。この裂れは……オヽ、お俊、おぬしが所へも持たせて遣つたが、去年から今年までに、つひに着たのを見た事が無いが、お俊、あの留形は拵へたか。

しゆ　アイ、お前の方から下さんした物ぢやによつて、直ぐに仕立てさゝうと思うて、たしか（ト種々こなしあり）今に持つて居りますわいなア。ハテ、似た物は烏、何ぼでもあらうわいな。

ト此せりふなどぢぐぢに言ふ。この内に權助、藥を持つて

權助　ハイ、有り難うござります。

ト元の所へ來る。源太、お俊、顏見合せ、思ひ入れ。伴之進目を附け、合點して

伴之　成る程、大概それで餓鬼が素性も解つたぞえ。何だか味な詞のめりはりで、どういふ縁か、あの小僧が、どうも可愛くつてならぬ。世は樣々な人心だ。どこの奴か知らねえが、頑是も無い子を里に遣り、乳が無けりやァ癇の蟲で、今の間にころりばつたり。エヽ、親の面が見たい。ハヽヽヽ身共とした事が、要らざる人の疝氣で、アヽ、大分鬱いで來た。オヽ、おればかりと思へば、お俊も、白藤も、目に涙をもつて、鬱いだ顔附きだの。コレ、なんとこゝは氣を變へて、わつさりと酒にせうぢやないか。

　ト　お俊思ひ入れあり。

しゆ　ほんに、それもようござんせうわいな。

　ト辻打ちになり、奥より三五郎、丹八出で來り

丹八　モシ〳〵、お旦那、あの若い者が面白い流行り唄を賣りまする。お召しなされませ。イヤ、面白い文句でござります。

伴之　アヽ、何ぢや、流行り唄ぢや、そりや好からう。本は殘らず、身共が買ふ程に、サア〳〵、そこで唄へ〳〵。

三五　ハイ〳〵、それは有り難うござります。併し、餘り珍らしい唄でもござりませぬ。私しは、たび

たび此やうな商ひを仕りまするゆゑ、御覧じませ、四つ竹を所持して居りまするて。（ト懐より四つ竹を出し、格子の方へ來て）モシ／＼、お内のお女中さん、ちよつと三味線をお頼み申しやす。

トこれより三味線入りの四つ竹節になり、仕出し大勢出かゝり、これを聞いて居る。

東上總の市見の郡、村の小名をば金置村と、疋田源兵衛が惣領息子、角力取りにて白藤源太、親の源兵衛が果てられて後、五十五石の田畑屋敷、とんだ藝者に皆入れあげて、今は互ひに心底づくで、情けのおども り、子のある仲では、着替へも質屋へ鳶色縮緬、お金をねだつた金無し錦の、帶を蒲團にしのぎもさらつて、いとし可愛の子ゆゑに里扶持、ぶち／＼肥つた角力取り草、戀ゆゑ細つた顋で蠅、ほう／＼、はい／＼、ほら／＼／＼。

トこの唄のうち、舞臺の人數宜しく思ひ入れ。源太物言はずに引ッ捕へる。

皆々 喧嘩だ／＼。（ト立騒ぐ）。

源太 白藤が聞く前で、もう好い加減に唄やァがれ。（ト取つて投げる）。

仕出 そりや投げられたワ。

ト足早に下座へ入る。三五郎起き上つて

三五 オヽ、痛い／＼。コレ、關取り、讀賣りの商人を、何故こなさん、力に任せてぶん投げた。骨が

碎けて、アヽ痛い〳〵。

ト ねだりかゝる。奥より富八、刺身庖丁を持ち、ツカ〳〵と出で來り

富八　コレ、エヽ、この野郎め。うぬ、大のしの店先で、關取りとあの子の事を、四つ竹節に拵へたは、われが細工か。外に頼んだ奴でもあるか。おれが内で唄はれちやア、この富八が立たねえ。持つて來た庖丁で、うぬが鼻をそいでやらうか。

ト 立ちかゝる。三五郎向うへ逃げる。伴之進駈けよつて

伴之　コレサ、富八、大人氣ねえ。あんな者を相手にして、マア〳〵、離しやれ〳〵。

富八　ナニ、あの野郎め。

ト 振り上げる。伴之進留めて、もぎとる途端に、庖丁飛んで、門口の天水桶へ落ちる。

伴之　この男も氣の短かい。あんな者を、大人氣ねえ。

三五　あんな者とは、お前頼みなすつたから

伴之　エヽ、やかましいわえ。氣をきかせて、早く行きやアがれ。（ト目顔で知らせる）。

三五　それだといつて、あの野郎までが同じやうに、鼻をそぐも凄まじいわえ。エヽ、しみツたれ野郎、エヽ。

ト辻打ちになり、はふ／＼向うへ入る。富八立ちかゝつて

富八　アレ、又、あんな癡言を。

作之　エヽ、料簡しやれな。

富八　エヽ、極樂蜻蛉め。（ト思ひ入れあり）モシ、旦那え。只今の庖丁は、どうなりましたえ。

作之　サア、どう致したのか。そこから飛んだであらう。コリヤ、尋ねてつかはせ。

丹八　ハイ／＼。どこへ參りましたかな。（トあちこち尋ねる）。

富八　イエ／＼、捨てゝお置きなされませ。そこいらから出るでござりませう、……イヤ、そりやアさうと、モシ、旦那え。お誂へのお吸ひ物が出來ました。サア、一つ召上がりませ。

作之　オヽ、さやう致さう。コレ、お俊、おてまへも座敷へ參つて、一つ飲みやらぬかいの。

ト お俊が手を取る。

しゆ　ハイ、只今、參じまする。わたしやちつと、こゝに。

作之　イヤ／＼、白藤が側には置かれぬ。來やれといふに。

ト手を取る。お俊その手を拂つて

しゆ　イエ、參りますまいわいな。

伴之　そりや、なぜ〳〵。

しゆ　ハテ、お前さんの雇ひぢやござんせぬぞえ。

伴之　ヤ。

しゆ　今日の雇ひは、神田川の傳兵衛さん。あなたのお召しなされたわたしなら、お側に引附けてもお置きなされぢやが、外の雇ひで參つたわたし、今日ばかりは、アイ、あまり自由にもなり憎うござりまする。

伴之　サ、そりやァ

しゆ　左樣なものぢやござんせぬかえ。

伴之　イヤ、こりやお俊のいふのが皆尤も。ナウ、關取り、さうではないか。

源太　どうでござりますか。私しは存じませぬのサ。

伴之　イヤモウ、お俊坊が、皆尤もぢや〳〵。アヽ、お連れ申すまい〳〵。それといふのも、あの足駄の齒入れが

ト權助聞いて

權助　エヽ、先刻のかえ。（ト短刀抜く仕方をする）。

伴之　アコレ、それではない〳〵。ソレ、その下駄箱に居る、オギヤア〳〵に心が殘つて。（ト權助思ひ入れ）ア子供と申す者は、さて〳〵汚い、穢いものぢや。あの小僧めを見て、身共一倍滅入つたやうぢや。コリヤ、富八、近所の藝者を殘らず呼びに遣れ。コレ、與一兵衞では無いが、懷には五十兩、今宵はばつ〳〵と遣ふ。お俊、わが身も御用をおしまひなされたら、ちとお出で。この五十兩を、アヽ、遣ひたい〳〵。

富八　どうでもなされませサ。

しゆ　アイ、間があらば、あなたをお留めに參りませう。

伴之　ハテ、つれない挨拶。ナウ、お俊ばう。

伴之　そりや忝い。關取りも飮みに來やれ。

源太　有り難うござります。

富八　旦那、サア、お出でなされませ。

ト唄になり、伴之進思ひ入れあつて、丹八、富八附いて奧へ入る。三人殘る。合ひ方。お俊、源太と顏見合ひゐる。

しゆ　こりや兼松ぢやわいな〳〵。（ト駈け寄つて抱き上げる。權助悃りする）。ほんによう大きうなりやつ

たなう。(ト抱きかゝへて思ひ入れ)。

権助　モシ〳〵。その里ッ子を兼松と言はつしやるお前は、アヽ、そんならお俊さんとはお前かえ。

しゆ　アイ、恥かしい事ながら、この子を生んだ、わたしは藝者の

源太　お俊とは色戀ひと、こツぱづかしいが、浮名の立つた

権助　エヽ、お前が關取りの白藤さんかえ。知らねえ事とて、わつちの嬶ァが乳で預つた、北本所の岩淵に、今日と暮して明日の日は、足駄の齒入れで世を送る、権助とはわしが事でござります。

源太　エヽ、貴樣が御亭主權助どのとな。

しゆ　これはマア、おかみさんとは度々お目にかゝつたれど、お前には初めて。何かとこの子が、いかいお世話になりますわいな。

権助　イエモウ、嬶ァは度々参りまして、御馳走になりますと、歸りますと吹聽致しまするて。イヤモウ、この樣にお世話を致しますも、これもお前、何ぞの因縁づくでござりやせうよ。ハヽヽヽヽヽ。

源太　誠に縁づくでござらう。イヤ、それはさうと、見れば內儀も同道せず、こなさん男の身で、商賣先きまでこの子を連れて

権助　サア、お聞きなされませ。この間、この子がね、嬶ァが乳を喰ひついてね。何が、乳がこんなに脹れ上


せいれごん助 松本幸四郎
豊国画

つて、外科様へかゝつて、延塗薬だの、膏藥だのと、むづかしい身上が、一倍亂騒ぎでござりやす。そこで、お前、死かゝつて居る嬶ァに、この子を預けても置かれず、と言つて、こんな事をお前がたへ知らせたら、どうか強請事でも申すやうで、お氣の毒と存じやして、御沙汰は致しやせぬが、嬶ァは今も知れやせぬ。因果な事にやァ、嬶ァよりか、この子が可愛くつて、商賣先きまで荷へ入れて、彼處や此處で貰ひ乳の、モシ、お案じなさいやすな、煩はせる事ぢやァござりやせぬ。ソレ、御覽じやせ、よく肥つて居ませうが。ほんに、愛嬌のあるところは、お母さんに似申して、それ〳〵、目鼻立ちはお父さんにその儘サ。

ト兩方の顏を見比べて、思ひ入れ。

しゆ　エヽ、そんならお内儀さんは、乳が脹れて、御病氣かえ。そりやお氣の毒な事でござんすなァ。

權助　何サ、お前、この子に喰ひつかれて、それが元になつて、嬶ァが死んだといつて、この子を解死人にも取られまいし、お案じなさる事はござりやせぬ。併し、たつた一分二百で、嬶ァを一人殺すかと思へば、あんまり外聞の好い話でもござりやせぬよ。

ト空涙をこぼして思ひ入れ。源太、氣の毒さうに

源太　イヤモウ、辨へ無しの當歳子。ハテ、そりやァ困つた事をしましたの。

權助　何サ、お案じなさる事はござりやせぬ。サア、こゝへ遣はされませ。廣小路で一杯飲ませて來やせう。サア、モシ、こゝへお寄越しなさいやし。

ト お俊渡し兼る思ひ入れ。權助抱き取る。お俊心附き、懷の鏡袋の間より、紙包みの小粒を出し

しゆ　モシ、こりやあまり僅かなれど、お內儀さんのお口に合ふもの、何なりと買うて上げて下さんせ

ト 權助に渡す。權助、捻り見て、思ひ入れあり。

權助　へゝゝゝ。およしなされやせな。ナニ、お前、こんな事をなすつて、却つてお氣の毒でござりやす。へゝゝゝ。さやうなら、お貰ひ申して置きやせうか。(ト空笑ひをする)。

源太　醫者にでも見せさつしやらば、必ず遠慮無しに、言うて寄越さつしやりませよ。

權助　ハイ〳〵、その時はお願ひ申しやせう。さやうならお二人さん、又この間にお目にかゝりやせう。お案じなされますなえ。

しゆ　そんならお賴み申しまする。御病人大切に

源太　氣を附けて進ぜさつしやい。

權助　ハイ〳〵。こりや有り難うござりやす。サア、お乳を飲ませるよ。泣かねえものだ。ドリヤ、參りやせうか。……足駄の齒入れ。足駄の齒入れ。

ト辻打ちになり、抱き子を懐へ入れ、荷を擔いで、下座の方へ入る。兩人殘り、こなしあつて

しゆ　源太さん、堪忍して下さんせ。お前の爲には、惣領のあの兼松、わたしが藝者の身過ぎゆゑ、育てる事も世間の手前、他人に預けりや、あのやうに。

源太　言やればさうかえ、辨への無い餓鬼だといつて、この白藤が眞實親身の一人子を、脛にかけたる泥足駄、それと一つに荷の中へ、轉がしこんで育てるは、狆や猫にも劣つたかと、思へば〱泣かぬ目に、熱い涙が先き立つて（ト思ひ入れあり）。エヽ、馬鹿に涙をこぼす奴さ。

しゆ　尤もでござんす。思ひ廻せば思ふ程（トこなしあつて）ホヽヽ、お前ばかりかいな。わたしまでが同じやうに、ホヽヽ。これだもの。子を持つちやア、もう段切だなう。

ト兩人涙をこぼし合うて、思ひ入れ。辻打ちになり、向うより若黨左五平、一本ざしにて、息せきと出て來り、源太を見て

左五　これは關取りではござらぬか。

源太　さやう仰しやるは、主水樣の御家來、左五平どのかな。

左五　左樣でござりまする。内々其許へ急御用ござつて、當時の旅宿と承る、藥研堀まで參りしところ、他行との儀。せめてお使ひの印し、お俊どのになりとお目にかゝつて參りたく、雇ひ先きを承

り、これへ參つてござるて。火急の御狀。サヽ、拜見なさるがよい。(ト懷より一通を出し、渡す。)

源太　これはハヤ、御苦勞に存じまする。暫くお控へ下さりませ。(ト封を切る)。

しゆ　何ぞ案じる事ぢやござんせぬかえ。

源太　サ、おれもさう思ふて。(ト狀をいろ〳〵讀む事あつて)この御狀の趣きには、この白藤めがお抱へと罷り成り、お目見え延引仕るも、お邸内にて樣々とのお取込み。殊に短刀の儀も、御舍弟勝次郎樣に一家中の疑ひ。その上お出入りの商人へ、騙りがましき事ござるとの御紙面。何とも以て

左五　イヤモウ、申さうやうも無いしだら。この間よりお聞きの通り、いつの間にやらお役所の通ひを盜み、吳服屋、或ひは小間物屋、騙り同然な事ども、金子〆高五十兩、勝次郎方より償はねば、盜賊の惡名。合ひ役、家中へも、主水が立たぬと、殊の外の御立腹。明日までに金子調達致さねば、お役所の手前。ハテサテ、氣の毒な儀でござりまする。

トこの時、奧の方バタ〳〵にて、勝次郎逃げて出る。尾張屋勘吉、吳服屋六之助、追つかけ出て

六之　勝次郎樣、見附けました。吳服物の通ひの一件

勘吉　小間物の御用も、お役所では知らぬとある。

兩人　サア、お前は騙りだ。ござりませ〳〵。

ト立ちかゝるを、毆りのけ〳〵、兩人を投げ退け、刀に手をかけて、立ちかゝるゆゑ、二人は這々と逃げて入る。源太駈け寄つて、勝次郎を引きつける。

勝次 エヽ、離せ〳〵。慮外な奴等だ。ぶッ放して

源太 コレ、勝次郎樣。今の二人がお前へ慮外も、元の起りは、コレ、これでござりませうがな。

ト手紙を見せる。勝次郎取つて、よく〳〵見て

勝次 すりや、お役所の通ひの譯を

源太 明日までにこもうの金子、五十兩を差上げねば、あなたのお身に關はる事。兄御樣には御家中へ面が立たぬとこの文體。騙られた今の二人、こなたは斬つて濟みますか。お邸内で紛失の、その短刀の疑ひも、お前にかゝつて、モシ、それに心が附かつしやらぬか。エヽ、お前はなう。

ト思ひ入れ。勝次郎悄げたるこなしあつて

勝次 さう聞いては、言ひ譯も無えこの體裁。關取り、善いやうに賴みます。

しゆ モシ、償はしやんす五十兩。ちつとは、お前、お心當りがござんすかえ。

勝次 どうして〳〵。てめえ達の世話になる身分で、ナニ、五十兩の働きが

源太 ようござります。主水樣のお面が汚れる事ならば、出來ないまでも五十兩、工面して見ませうて。

左五　然らば拙者も御返事を、承るまでお待ち申して。

源太　晩程までには、善惡の、屹度御返事致しませう。

勝次　兄貴が難儀になる事なら、どうぞ工面を

源太　ハテ、わしも白藤。關取りでごんす。どうか仕樣もごんせう程に、お使ひどのとお前は一緒に

しゆ　勝次郎樣。

勝次　賴んだぞよ。

　　ト合ひ方になり、左五平附いて、大のしの内へ入る。お俊、源太の側へ寄つて

しゆ　コレ、白藤さん、晩程までと使ひを待たせて置かしやんすが、五十兩といふ金が

源太　ハテ、どうして出來よう。出來ないと知りながら、まんざら使ひの聞く前で、僅か五十兩そこらの金で、白藤といはるゝ關取りが、どうマァあらはに

　　ト思ひ入れ。お俊もこなしあつて、

しゆ　尤もでござんす。朝夕世話にしなさんす、あの惡者の勝次郎さん、手足纏ひの多い上、又降りかかる五十兩。

源太　久しいやつだが、おぬしの方でも、よもや工面は（ト裏間ひかゝる）。

しゆ　サ、それも馴染みの客先きへ、頼んで見たら、出來まいものでもなけれども、何をいうても晩方と、刻限極まる五十兩。

源太　出來ぬ時には、白藤が、男の一分。(ト思ひ入れ)。

しゆ　エ。

源太　ハテ、何とせう。それからそれまで

ト　お俊　思ひ入れあつて

しゆ　拵へませう。

ト　この時、お澤、門口へ出かゝり居る。

サ、お前も關取り、白藤さん。わたしも藝者の身ながらも、人さん方に知られた仲。今から急に頼んだら、馴染みのお方で、ひよつとその金

源太　どうぞ工面を、コレ、お俊。たび／＼ながら、頼んだぞよ。

しゆ　アイ。

ト思ひ入れ。この時、お澤、そろ／＼出て

さは　モシ、お俊さんとやら。そこにお出でなさんすかえ。

しゆ　アイ。お前は田舍のお客さん、御眼病ぢやござんせぬかえ。

さは　アイ、保養ながらの出養生。今日で大方二周り。まだ碌々に、はつきりとも致しませぬわいなア。

源太　アヽ、あの子は田舍者か。ハテ、それにしては好い生れだの。

さは　申し、お俊さん。わたしや今日姉さんと、在所土產に、廣小路で、求めた錦繪。こりや役者繪でございますかえ。ちよつと御覽じて下さりませ。

ト三津五郎、半四郎の春狂言の錦繪を出す。

しゆ　アイ、大方さうでござんせうが、わたしは急な用があつて、今はどうも見て居られませぬ。

ト屈託顏にて行かうとする。お澤引きとめ

さは　サア、お取込みではござんせうが、わたしや今宵にも迎ひが參ると、在所へ行かにやなりませぬ。どうぞ御面倒ではござんせうが

源太　アレ、あゝ言うてぢや。ちよつと見て進ぜやいの。

しゆ　ハテ、困つたものぢやなア。（ト錦繪を取上げ見て）ほんに、こりや杜若と坂三津でござんすわいな。……もうようござんすか。ドレ、マア、わたしや

ト行かうとするを縋つて

さは　アモシ、まだお願ひがござりまするわいな。
しゆ　エヽ、まだでござんすかえ。サア。早く仰しやりませ〳〵。
さは　外の事ぢやござりませぬが、その坂三津とやらの繪は、あの白藤さんに、よう似てあるぢやござりませぬかえ。
しゆ　ハテ、樣々な事を言はしやんすわいな。（トよく〳〵見て）成る程、この繪はどうやらお前の顔に
源太　イヤモウ、そこら中でその樣な噂をするて。
さは　サヽその白藤さんによう似てあるといふその役者繪、わたしや在所へお土産にしやんすわいな。
ト錦繪を抱きかゝへる。お俊こなしあつて
しゆ　ぬしに似た繪を其やうに、大切がりなさんす娘御さん、アヽ、コリヤ、お前（ト思ひ入れあつて）
コリヤ、滅多にこゝは離されぬわいな。
源太　コレ〳〵。今約束の金の才覺、ちつとも早う。
しゆ　アイ、行きやんす。サア、來なさんせ。（ト源太が手を取る）。
源太　アコレ、おれも一緒に行くのか。
しゆ　このお子の側にや置かれぬわいな。

源太　馬鹿を言へ。娘ッ子と角力取りが、どう取組みがなるものか。

しゆ　随分取組みが出來ますわいな。

源太　コレサ、無駄を言ふ手間で、今の事を賴むといふに。

しゆ　エヽ、まかうでな。

源太　馬鹿を言ふなえ。

トこの時奥にて

○　お俊さん〳〵。（ト忙しく呼ぶ）。

しゆ　アイ〳〵、今行くわいなア。（トお澤を見て）お前さん。その袷をたんと（トこなしあつて）お土產にしなさんせえ。

○　お俊さん〳〵。

しゆ　エヽ、行くわいなア。

トびんしやんして入る。あと合ひ方。源太思ひ入れあつて

源太　エヽ、藝者のやうにもねえ。よくむかッ腹を立つ奴だ。（トお澤の側へ寄つて）モシ、姐さん。お前田舍だと言はつしやるが、在所は何處だえ。

さは　アイ、上總でござんすわいな。(ト恥かしき思ひ入れ)。
源太　ナニ、上總だ。わしもづう國だ。上總は何處だ。
さは　アイ、わたしが在所は東上總、東金宿でござんすわいな。
源太　ハテ、そりやアわしが近所だ、して、親達は何といふ人だ。
され　サア、それはな。
ト支へて居る。よき時分に、お富出かゝりゐて
とみ　その親の名は、わたしが申しませう。
ト源太見て
源太　ヤ、こなさんはお富どの、どうしてこゝへ。
とみ　アイ、妹が眼病、療治ながらに江戸三界、姉妹づれの逗留も、皆こなさんゆゑ。
源太　ナニ、姉妹づれとあるからは、そんならあの子は、白藤が
とみ　言ひ號けしたお澤ぢやわいなア。
源太　エ。(ト思ひ入れあり)。こりや斯うしては
ト逃げようとする。お富支へて

とみ　アヽ、コレ、久しく便りも無いお前、ちよつと妹に

さは　アヽ、申し、わたしやとうから白藤さんに、逢うて居やんす。ちやうど幸ひ眼病の、見えぬも増しでござんせう。

ト思ひ入れ。この時、門口より坂間傳兵衛、羽織、一本差しの町人にて、出かゝつて窺ふ。

とみ　サア、その見えぬのがいぢらしう、思ふがゆゑに、逢うたを幸ひ

ト源太を留めようとする。この時、傳兵衛この中へ入り、源太を突き遣り

傳兵　關取り、講親達が尋ねてゐたぞえ。

源太　ヤ、傳兵衛どのか。

とみ　ほんに、お前は

さは　お聲は慥か

傳兵　傳兵衛でござります。コレ、お澤ばう、眼病に風がしみちやア惡からう。關取りも目はしを利かせて（ト思ひ入れあり）早く行きやれな。

源太　でも、この儘に

傳兵　ハテ、尋ねて居たわな。

源太　ハイ。（ト二人を見て）お富様、後にお目にかゝりませう。

ト合ひ方になり、氣の毒さうに、門の中へ入る。お澤ハッと泣く。お富さしより、介抱して

とみ　オヽ、尤もぢや〳〵。少さい時から言ひ號け、男は無事にありながら、角力を好んで内を外。國へというては、これ程も、歸つて來ても下されぬ。その胴慾を、恨みもせず

さは　又逢ふ事もあらうかと、待つ甲斐も無き眼病の、在所の衆が土產にと、江戸の角力の番附けに、白藤といふ關取りが、あるというたを力草、そんなら江戸へ廻つてと、姉さん頼んで海山を、越えて尋ねた甲斐も無う、どうか譯あるお俊さん、どうでわたしが

傳兵　添はせてやらう。

さは　エ。

傳兵　この傳兵衛が母方に、由緣のこなた衆姉妹が、わしへ頼んだ白藤は、女房ならねど子まである、戀ひ仲の、コレ（ト半四郎が錦繪を取り）杜若に似たるあのお俊、こゝへ呼んだもぬし達に、逢はせもせうし、成らうなら、義理に搦めて退去りの

とみ　その相談も只ならぬ

さは　子仲まであるお俊さん。どうでわたしは

傳兵　ハテ、そこが談合。
とみ　添はれぬまでもお優しい
さは　せめて詞に色あらば（ト思ひ入れあり）それが樂しみ。（ト錦繪を抱きしめて思ひ入れ）。
傳兵　ハテ、白藤は
兩人　エ。
傳兵　あやかり者だよ。

ト唄になり、三人宜しく、この見得にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、向う茶壁、床の間附き、左右に小座敷あり、塗り骨の障子をたて、すべて大のし奧座敷の體。爰に伴之進、杯臺を枕にして、寢ころび居る。これにお俊もたれかゝつたる見得。流行り唄にて道具とまる。

ト奧よりおみよ、おくら、燭臺を持ち、出て來る。

みよ　お俊さん、こゝにお出でなさんしたかえ。
くら　今、傳兵衛さんが、お前を尋ねてござんしたわいな。サア、ちやつと參會の座敷へ

両人　行きなさんせいなア。
しゆ　サア、今までぬしの座敷に居やんして、大勢の相手になつて、あまり酒が過ぎたゆゑ、伴さんの座敷へ、うたゝ寝ながら來やんした。アレ、ちつとの間、斯うして置いて下さんせえ。
みよ　アイ、ようござんす。傳兵衛さんへは善いやうに申しませう。なう、お倉どん。
くら　それがようござんす。とろ／＼となさんせいよ。
しゆ　頼むぞえ。
両人　アイ／＼。
ト燭臺を殘し、奥へ入る。お俊おと見送り
しゆ　ちつとの間寝かせて下さんせえ。コレ、沙汰無しに頼むぞえ。（トいろ／＼思ひ入れ。この内合ひ方。伴之進にもたれかゝり）モシ、伴さん。先刻には、ついした事から、アノ、お前に。コレ、目を覺しなさんせ。コレイナア。
トいろ／＼いやらしくしかける。伴之進大いびきにて、現な事いうて寝返りなする。この時、懐より紙入れ落ちかゝる。お俊これを見つけ、思ひ入れあつて
お前先刻に言ひなすつた事は、ありや嘘かいな／＼。

ト伴之進をゆする。益體なき事をいふ。この時、奥座敷にて拳を打つ聲する。これにてお俊、わなわなと顫ふ事あつて、懐より出かゝりし紙入れを、そろ〳〵取上げ、中の金を出さうとする。この時、大勢の聲にて

若衆 〆めませう。シヤン〳〵〳〵。

ト手を打つ。お俊これに驚き、その儘紙入れを懐中する。この途端に、傳兵衞出かゝり居て

傳兵 お俊や。コレ、お俊。

しゆ アヽイ。(トこなしあつて)エヽ、傳兵衞さんかえ。

傳兵 コレ。てめえ、大分恟りしたの。

しゆ アイ、思ひがけなう、呼びなさんしたによつて

傳兵 恟りしたか。ハテ、仰山な。コレ、ちつと話があるぞえ。

しゆ エ。(ト思ひ入れ)。

傳兵 コレサ、また恟りか。何もさう驚く事はねえ。マア〳〵、下に居さつし。

しゆ アイ〳〵。ちつとわたしや(トわな〳〵する)。

傳兵 アヽ、用があるか。そんなら今でなくともいゝ。行つて來さつし。

しゆ　アイ〳〵。ちつとお待ちなさんせえ。
ト思ひ入れあつて、懐を押へ、つか〳〵と奥へ入る。

傳兵　なんだ、あの女は。強氣に驚いた顔をして行つたが、もし此方の事を聞き囓つたか。
ト思ひ入れ。この時、伴之進、ウムと伸びをして

伴之　誰ぞ水を一杯くれろ〳〵。コレ、お俊や〳〵。（ト目を覺まし、起る）。

傳兵　アヽ、伴之進樣。

伴之　てまへは傳兵衛か。

傳兵　さやうでござります。……アヽこれで讀めた。道理でお俊が今の氣振。モシ、旦那、イヨ、色男々々

伴之　コレ〳〵〳〵、ナニ、色男だ。おれがどうした。併し、お俊とどうやら寢たやうでもあつたが、アヽ、夢だらうよ。

傳兵　エヽ、好い加減な事を言ひなさい。今までこゝにお俊と、たつた二人

伴之　アノ、二人居たか。

傳兵　白を切りなさるな。

伴之　おれもさう思つたが。（ト帯を締め直さうとして、フツと心づき）ヤ、無えワノ〳〵〳〵（ト無性に騷ぐ）。

傳兵　モシ〱、何が見えやせぬ。

伴之　サ、ちつとした物が見えぬが、よもやあの奥へは置くまいし。たつた今まで（ト狼狽へて、尋ねる事あつて）コレ〱、そんならこゝにお俊が居たか。

傳兵　今、奥へ行きやした。

伴之　それで讀めた。

傳兵　エ。

ト思ひ入れ。この時奥にて

丈島　うぬは泥坊だ〳〵〱。（トこの聲を聞き）

伴之　ナニ、泥坊だ。誰だ。何を盗んだ〱。（ト狼狽へて入る）。

傳兵　なんだ、氣が違つたさうな。

ト見送る。奥より長助、丈七、島右衛門、爭ひながら、出て來り

丈島　うぬは泥坊だ〳〵。

長助　何をわしが盗んだな。この手合ひも聞き分けのねえ衆ぢやァねえか。

丈七　それだと言つて、花觸れをさせて、今日まで挨拶無しだワ。こりやァ汝が、引摺り込んだの〱

島右　二人の頭へ千疋遣つたと、あの勝次郎さんが言はしつたワ。その花もおぬしに、とうに渡したと言はしつたわえ。

長助　よく嘘を吐く侍ひだ。コレ、お前がたがさう言はうと思つての、先刻あの人に逢つて、催促をしたら、一文も無いワ。その代りにはこれを預けるから、二三日待てといつて、コレ、こんな物を預けたワ。伴之進樣が、取つて置けと言はつしやるから、萬更取らねえよりはと、コレ、これを預かつて置いた。

ト最前の折紙を出す。傳兵衞これに目を附ける。

丈島　コレ〳〵。そりや、何だ〳〵。

長助　これか。こりやア何とかいふもんだが、金になる物さうな。

丈七　おきやアがれ。何とか反故が、何になるものか。

島右　おらア金で取らう。

兩人　そんな物は、要らねえ〳〵。

ト長助を突き飛ばす。よろ〳〵として、長助、傳兵衞の方へこけかゝり

長助　エヽ、この手合ひは滅法界な。……モシ、御免なされませ。（ト傳兵衞を見て）ヤ、お前は傳兵衞樣

かえ。

傳兵　長助、何を騒ぐのだ。

長助　モシ、お聞きなさりませ。あの勝次郎といふ侍ひがね、この衆に花を進ぜて、その催促を受けて、モシ、こんな物をわしに預けて、二三日待つてくれろと言ひやすが、こりやア、モシ、一二兩になる物かえ。

傳兵　ドレ、見せやれ。(ト手に取り、よく〳〵見て)千代鶴の短刀、銘は國安。こりやア折紙だな。

長助　さやう〳〵。その折紙々々。

傳兵　その位ゐな金にはならうよ。(ト返さうとする)。

長助　モシ〳〵、旦那え、只今お聞きなさる通りでござります。どうぞお前樣、その折紙とやらをお預りなされて、二兩二分お貸しなされては下さりますまいか。

傳兵　イヤモウ、馴染みのてまへが言ふ事、出所さへ慥かなら。

長助　アイ、あの勝次郎といふお侍ひでござりやす。

傳兵　アヽ、あの若い侍ひか。

長助　さやうでござりやす。

傳兵　いゝワ。預つて貸して遣らう。
長助　そりやア有り難うござりやす。
傳兵　ソレ、小判で三兩。
長助　ハイ、切つて參りませうかえ。
傳兵　ハテ、それなりで遣やれ。
ト折紙を懐中して、紙入れの三兩を渡す。
長助　こりやア有り難うござりやす。コレ〳〵、こなた衆見たか。金になつたワ。
丈島　そいつは奇妙だ。
長助　コレ、三兩あるが、殘つた二分はおれが遣ふワ。きれん丸で切つてやらうワ。
兩人　早く頼むよ。
長助　承知サ。モシ、旦那、お忝うござりやす。
ト流行り唄になり、捨ぜりふにて、三人向うへ入る。傳兵衞殘つて、折紙を出し
傳兵　石濱家にて紛失の、その短刀の折紙が、廻り廻つて來るといひ、お上の極印打つてある、金子の中が二百兩、その盗人も慥かにそれと(ト件之進であらうといふ思ひ入れあつて)、お役所からの言附

けで、事荒立てぬ詮議の手蔓。どうか段々

ト思ひ入れ。奥にて人聲するゆゑ、ちやつと懐中なし、衝立を引よせる。流行り唄、五つの鐘にて、左五平、源太出て來り

左五　モシ／＼、鬮取り、もう五つでもござらうが、最前お約束の金子は、どうでござるな。

源太　イヤモウ、如才無う働きまするが、さて出來にくいのは金でござりまする。折角お約束申したがどうも今晩の所は、合點が參りませぬて。

左五　ハテサテ、それは、どう致したものでござりませうな。

ト當惑の思ひ入れ。よき時分に、お俊出かゝりゐて

しゆ　モシ、源太さん、ソレ、金。

ト包み金を渡す。

源太　ヤ、こりや、お俊、そんなら其方が働きで

しゆ　やう／＼拵へた五十兩。早う其お使ひへ

源太　してマア、どうして大枚の

しゆ　ハテ、氣遣ひはござんせぬ。見世二階に居なさんす、參會のお客の中、手詰めな事と譯言うて

ト言はうとする。

源太 アヽコレ。(ト左五平へ思ひ入れあつて)よくしやつた。サア、お使ひ、先き程對談致したる、五十兩の金、即ち勝次郎樣の働きにて出來仕つた。この由を主水樣へ仰せられ、少しも早うお邸へ、お召し返しのあるやうに、サヽ、早う御持參なされいな。

左五 それは大慶。勝次郎樣のお心も直り、あなたのお手より金子差上げられゝば、主水樣のお顏も立ち、これに增したる儀はござりませぬ。然らば、お暇仕らう。

ト包み金を手拭へくるみ、懷中する。

源太 只今も申す通り、私し共の手より出來ましたる金子ではござりませぬ。即ち勝次郎樣のお働き。この段よろしく、御披露賴みまする。

左五 畏りました。屹度申し聞けまするでござりませう。

源太 夜道でござれば、私しが送つて上げませう。

左五 イエ〱、それには及びませぬて。

源太 サア、ござりませ。

左五 これは御丁寧な。

ト合ひ方、時の鐘にて、左五平、源太向うへ入る。この内始終、傳兵衞聞いて居る。

しゆ　エヽ、有り難い。あの金の出來たので、主水樣のお顏も立ち、白藤どのゝ一分も立つて、マア此やうな（ト喜び、思ひ入れ。こなしあつて）嬉しい中にも恥かしい、割つて言はれぬ（ト思ひ入れ）。

傳兵　コレ〳〵、お俊。

しゆ　エヽ。（と愕りして、傳兵衞が方へ寄り添ひ）傳兵衞さんかえ。

傳兵　ハテ、仰山な。最前其方にいひつけた、この傳兵衞が其方にちつと

しゆ　何ぞ御用でござんすかえ。

傳兵　ハテ、藝者を捕へて話したい、用は言はずと（ト思ひ入れ）。

しゆ　アイ、わたしは何ぞ、また外に、言はしやんす事あつてかと、疵持つ足の

傳兵　ヤ。

しゆ　マア、どのやうな用事でござんすえ。

傳兵　サア、其方へ話は、コレお俊、つい斷う〳〵とは言ひにくい。幸ひこゝに酒もあり、言ひ出すからは（ト有り合ふ銚子杯を取つて）野暮な事だが、てまへにこゝで

ト　お俊思ひ入れあつて

しゆ　傳兵衛さん、なぜ改めて杯を

ト合點の行かぬこなし。この時、左右の障子を明け、お澤、お富窺ふ。

傳兵　言ひ出すからは、傳兵衛も、男の切れ端、屹度其方に承知させねば

しゆ　お前のお顔が立たぬかえ。

傳兵　そんなものサ。

しゆ　でもわたしには、白藤と、人の知つたる色がござんす。

さは　アレ、聞かしやんせ。迚も願ひは……ハア。

とみ　コレ。

ト思ひ入れ。兩方一度に、障子をバッタリ閉す。お俊思ひ入れ。傳兵衛、お俊が手を捕へ

傳兵　一つ注ぎや。

ト、チヤンと唄になり、この道具をぶん廻す。

元の門口へ戻り、大戸締り、提灯を吊し、大のし夜の體。唄、捨て鐘にて道具とまる。

ト爰に三五郎、割り木を持ち、内を窺うて居ろ。門口より、富八、ぶら提灯を下げ、出て來り

富八　あの廻しの善八めは、もう迎ひに來さうなものだが。

　ト行かうとする。三五郎窺ひ居て

三五　野郎め、覺えたか。

　ト打つてかゝる。富八、この手を捕へ

富八　うぬは先刻の讀賣りだな。

三五　先刻の事を

　ト打つてかゝる。立廻り、三五郎、割り木にて脾腹を突かれ、ウムと氣絶する。富八、手早く天水桶を取つてぶつかぶせる。この時、最前の庖丁、三五郎が頭へ當りし心。富八思ひ入れあつて

富八　大箆棒め。

　ト流行り唄になり、向うへ走り入る。内より丹八、留守居提灯を持ち、伴之進、勝次郎出て來り

勝次　コレ／＼、潮田氏。先刻の短刀は買ひ切らしつたか。どう致されたな。

伴之　これはしたり。そこ所ではござらぬ。懐中に持ち合せた、あの五十兩も、コレ。（ト囁く事あつて）斯樣でござるワ。

勝次　アヽ、そんなら貴公のその金も、大方行くへは

伴之　睨んだゆゑに、事荒立てぬ、身共が詮議。
勝次　して、短刀の納りは。
作之　それも仕様が
ト思ひ入れ。この時、用水桶を突退け、三五郎小鬢に少し疵を受け、刺身庖丁を持つて、ツカ〳〵と出て
三五　合點しねえぞ〳〵。
ト立騒ぐ。丹八これを捕へて
丹八　コレ、エヽ〳〵。われは先刻の讀賣りだな。氣でも違つたか。
三五　お前がたは先刻の旦那方。モシ、お聞きなされませ。こゝの亭主を待ち伏せして、冠らせられたこの天水桶。水の中にこの庖丁がございまして、わしやァ面を切りました。この分ぢやァ、濟みませぬ濟みませぬ。
ト立騒ぐを伴之進見て
伴之　箆棒面め。そりやァ相手の無い喧嘩といふもの。何が證據だ。
三五　これでございます。
ト庖丁を差出す。伴之進取つて

伴之　勝次郎どの、善い代物が出來ました。

勝次　そりやア、何が代物に

伴之　細工は流々。コレ、氣をつけろ。

丹八　心得ました。

トあたりへ思ひ入れ。件之進短刀を出し、中身を拔いて刺身庖丁と摺り替へ、鞘に納め

伴之　コリヤ、丹八、われが差した竹光を

丹八　ネイ〳〵。(ト拔いて出す。勝次郎取つて)

勝次　この竹光へ短刀を

ト兩人手早く中身を摺かへ

コリヤ、他言致すな。

丹八　呑み込みました。

ト腰へ差す。捨て鐘になり、下座より權助、荷を擔ぎ、出て來り

權助　そこにござるは先刻のお侍ひ樣。短刀の代金を、只今下さりまするかえ。

伴之　サ、今晩とは申したが、ちと此方に手支へるて。

勝次　明日の晩まで待つてくりやれサ。
權助　ようござります。外といつても、むづかしい代物。そんなら必ず明晩は、百兩と引替へにお賴み申しまする。
件之　氣遣ひ致すな。明日の晩には、揃へて百兩。マア、それまでは

ト短刀を渡す。權助取つて

權助　して、取極めをする場所はえ。
勝次　身が橫網の借家に於て。
權助　エヽ、お前の所でこの短刀。こいつはどうやら。（ト思ひ入れあり）。アヽ、儘よ。
勝次　權助、必ず
權助　明日の晩、お目にかゝりやせう。

ト流行り唄になり、荷を擔ぎ、向うへ入る。

件之　流石は下郎。一ぱいはめて
勝次　これにつけても添へたる折紙、あの船頭の長助に
丹八　あの野郎なら、わしが騙して

勝次　大事な折紙、われは必ず
丹八　呑み込みました。
伴之　勝次郎には、白藤に、矢張り短刀は權助が、手にあるやうに騙し込み
勝次　彼奴に百兩働かせ、其奴を取ッ手に、又一花。
伴之　金はおてまへ
勝次　貴殿は短刀
伴勝　これで五分々々、
丹八　物事めでたう。
伴勝　コレ。

ト唄、時の鐘になり、伴之進、東のあゆみへかゝり、丹八先きに提灯を持ち、思ひ入れあつて入る。
三五郎下座へ入る。揚げ幕より源太、息せきと駈け來る。勝次郎を見て

源太　そこにござるは、勝次郎樣ではござりませぬか。
勝次　關取りぢやァないか。して、先刻に兄貴の所から、使ひを寄越した五十兩は、どうしてくれる。
コレ、心柄とはいふものゝ、役所の通ひで騙つた事の、もくが割れちやァ、首が飛ぶ。コレ、白

源太　藤、こいつはマア、とんだ話になつたぞえ〳〵。

源太　ハテ、氣遣ひさつしやりまするな。そのお役所の五十兩、あのお倅が働きで、お前の手から出さしつたと、主水樣へは申し上げ、たつた今、使ひの人を送つた歸り。追ツつけ首尾は直ります。吉左右を待つてござりませ。

勝次　エヽ、そんなら邸の兄貴の所へ、おれが手先きで拵へたと、五十兩持たせて遣つて下さつたか。エヽ、有り難い〳〵。コレ〳〵〳〵。これに就いても、おれに疑ひのかゝつた短刀の在所を、嗅出したよ〳〵。

源太　ヤ、何と言はつしやる。その短刀の在所が

勝次　サア、知れた所が、血で血を洗ふ、駈落ちをした又助めが仕業ゆゑ、只取らうと言はれもせず。買はうといつては小判で百兩。

源太　して、短刀の持ち主は

勝次　北本所の權助とて、その日暮しの夫婦住み。殊に、潮田伴之進、短刀求むる相談あれば、彼方で買はぬ其うちに、サア、おれが買ひ戻して來る。サ、ちよつと百兩工面してくりやれ。今、取つて來ねばならぬ。サア、ちよつと百兩、拵へてくりやれ〳〵。

ト苛立てに催促する。

源太　コレサ〳〵、待たつしやりませ。其やうにどうマア大枚百兩が。今もお俊が働きで、邸へ上げた五十兩、其ほとぼりのさめぬうち、どう百兩の（ト思ひ入れあり）して、その先きは、何とやら言ひましたの。

勝次　北本所の岩淵に、足駄の齒入れで權助といふ者だ。

源太　エヽ、そんならわしが兼松を、預けて置いた里の親。そんなら、どうとも、相談が

勝次　サア、さうであらうが、潮田が、明日早々買ふ約束。若しも向うへ買はれちやア、兄貴の手前言ひ譯無い。是非々々、今宵その金の

源太　さう仰しやる事なれば、金は明日にも白藤が、どの道、工面にかゝりませうが

勝次　コレサ。かゝりませうで濟まうと思ふか。たつた今、その金の（トじろ〳〵見て）いゝワ。金が出來ずば、いつそおれが、死んで見せべい。

ト刀へ手をかける。源太押へて

源太　アコレ、こなさんを殺しては、この白藤が、世間へどうも

勝次　立たずば金を拵へやれ。但し、短刀をたつた今、取つて來るか。

源太　モシ、また無理を言はつしやるか。
勝次　無理なら、いつそ死ぬべいか。（ト又死なうとする）。
源太　アコレ、待たつしやりませ。それ程に言はつしやらば、こゝから直ぐに、權助が所を尋ねて
勝次　取つて來るのか。
源太　ツイ、一走り。（トつか〳〵と行きかゝる。思ひ入れあり）いかに恩ある人だとて、あんまり非道な
勝次　エヽ、まだ居るかえ。
源太　エヽ、行きますわな。

ト唄、時の鐘にて、源太向うへ入る。勝次郞、門口へ入り、あとを見送り、二枚開きをシャンと締める。この模樣にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、後ろ黑幕、上の方、白壁の境。下の方、町家の戸をたてたる夜の景色。すべて本所割下水のあたり。爰に權助、荷箱を下し、抱き子に小便をやつてゐる見得。時の鐘にて道具とまる。

ト權助思ひ入れあつて

権助　さても〳〵、通用のいゝ餓鬼だ。又グッスリ抜かれようとした。（ト抱子泣く）。やかましいワ、又吠えるか。白雪糖でも嘗めたいか。ソレ〳〵。おれが乳でもしやぶつて居ろ。又抜きやァがるな。抓ねり上るぞ。

ト捨ぜりふにて抱き子を懐に押込み、荷の中より短刀を出し

百両になる代物。夜道はどうやら物騒だ。

ト腰に差して、荷を擔ぎ、行かうとする。矢張り時の鐘にて、向うより源太、息せきと出て來り、権助に行き合ひ、両方よりためらひ見て

源太　コレ、権助どのぢやァないか。

権助　さう言ひなさるは白藤さん。

源太　オヽ、好い所で逢ひました。今こなたの内へ尋ねて行くところ、ハテ、好い所で逢ひましたて。

権助　エヽ、そりやァこの子の事でかえ。

源太　イヤ〳〵、里子の事でもないが、こゝでこなたと話して居るうち、その兼松がひもじからう。マアマア、こなたの所へ、サア、連れ立つて、行きませう〳〵。

ト荷繩を引ッ張り、行かうとする。

権助　何サ、ひもじい事はねえよ。今、横綱で一ぱいもらつた。腹はいゝのサ。用があるなら、こゝで言ひなさい〳〵。

源太　そんなら、かいつまんで話さうか。こなたの方へ、勝次郎様の身にかゝつた

権助　エヽ、この短刀の事か。

ト腰を見る。源太こなしあつて

源太　千代鶴といふ短刀を、こなたが持つて居るとの事。物は相談だが、なんと、この白藤に賣つてはくれまいか。

権助　そりや、モウ、現金に金さへ取れば、賣るまいものでも無いが、關取りも知つてゞあらう、伴之進様といふお侍ひが、明日は屹度百兩で買ふと、値が出來て居る代物。今更どうも、こなさんの方へ、賣らうとも言へやすまいよ。

源太　サア、そこが相談。伴之進様が百兩に附けたなら、その上の所は、どのやうにでも、餘計を遣らう程に、この源太に買はせてくりやれサ。

権助　モシ〳〵、關取り〳〵、お詞の中だがね。僅か一月に一分二百の里扶持さへ、滞らせるぢやねえかえ。それに百兩からの代物、不躾ながら、お話は出來やすまい。この事に附いては、御免なさ

いやし。先約の方へ賣りやす。さう思つて下さりませ。

ト行かうとする。源太とめて

源太　コレサノ〳〵。こなたにも似合はぬ。よく〳〵な事なればこそ、おぬしが内へ出かけて來たぢやァねえか。是非ともわしが買はねばならぬぞよ。

權助　モシ〳〵、買はうと言はつしやるが、そこに金が有りやすかえ。

源太　サア、そこが相談ではないか。

權助　その位なものであらう。どうで話は出來まいよ。

ト行かうとする。源太ムツとして、權助を引きつけ

源太　コレ、權助。その短刀は、いはゞ元は盜み物。いゝでんどへ出されぬその品を、賣られぬといふのみならず、相談づくに乘られぬとは、おぬしはそりや無法といふものだ。この白藤が買はないうちは、五分でもこゝは動かされぬ。

ト引き戻して突き遣るはずみに、權助どつさり轉ぶ。此はずみ抱き子泣く。權助思ひ入れあり。

權助　だがよ〳〵。(トいぶりつけ、源太が側へ摺りよつて)コレ、關取り、イヤサ、源太どの、こなさん、里親のわしを、情が剛いといつて投げたの。イヤサ、投るのかよ。コレ、こなさんは角力取りだ

から強からうが、わしは弱いよ。ぶん投げて手柄になるか。この權助が憎いといつて、こなさん
この子まで憎い事はあるまいの、コレ、この子は、こなたの實の子ぢやァねえかな。……コレ、
てめえを泣かせたのはナ、アレ、あの父樣だよ。ぞん氣な親もあればあるものだなァ。（ト源太に
見えぬやうに、したゝかに抓れる。抱き子泣く）オヽ、だがよく〳〵。

源太　そりや、モウ、たつてわしがいふ事を用ひねば、里親のこなたでも、男の意地づく、我が子の事
にもかへられぬ。否でも應でも、その短刀、この白藤が、命にかけても

權助　取り返すといふのか。さうはならないワ。こなたが名代の關取りゆゑ、先約を變改したといはれ
ちやァ、わしも男だ。その上、こなさん、今なんと言はしつた。その短刀は、根が盜み物と言は
つしやるが、こりやァわしが盜んだのかえ。コレ、盜人を出す日には、こなたの世話をする勝次
郎が先き馬だワ。

源太　サ、そりやァ

權助　それでもお身樣は、盜人を出すのか。この權助は白きちやうめんだぞよ。その上、こなたの爲に
は里親だぞよ。恩のあるわしを盜人にするのかよ。エヽ、こゝな恩知らずめ。

ト源太をくらはす。

源太　うぬ、この白藤を、くらはしたな〳〵。

權助　オヽ、ぶッくらはした。こなたの餓鬼を育てゝやる、この權助を、盗人の同類と吐したから、くらはした。

ト源太思ひ入れあつて

源太　アヽ、こりやァわしが惡かつた。我が子の恩を顧みず、腹立ち紛れに、ツイ言うた。コレ、料簡して短刀を

權助　否だワ。……おれも男だ。その日挊ぎの貧乏人、食ふや食はずの野郎でも、相手が關取り、こなさんゆゑ、死んでもおれが短刀は

源太　是非渡さねば、この上は、悴が爲には大恩ある、里親のおぬしといひ、手にも足りねえ素人を、大人氣なけれど、白藤が、相手にせにやならぬ。約束事と諦めて、その短刀をおれに渡しやれ。

權助　エヽ、そんならどうでも、こゝを素手では、通さぬな、どうするものか、是非が無い。殺して取るなら、いざ知らず、息の通ひのあの中は、決してならねえ。マア其處を。

ト短刀を腰へ差し、抱き子を懐へ捻ぢ込み、身拵へして、駈け出す。白藤追つかけ、引戻す。立廻り
權助抱き子を一心に抱へる。子は頻りに泣く。

こりやァ汝が子だぞ〳〵。わりやァ子を殺し、おれを殺すか。盗人だ〳〵。白藤が人を殺すワ殺すワ。

源太　コレサ、靜かにしろ。短刀さへ賣つてくれゝば

權助　否だ〳〵。人殺しだ。盗人だ。白藤が盗みをするわえ。近所の者は出ないかえ。番人は居ぬかえ

ト大聲に呼び立てる。源太思ひ入れあつて

源太　ヱヽモウ、是非に

ト拔いて、後ろより一刀斬る。權助ウムと倒れ、抱き子をかゝへて。これを放さず

權助　斬つたぞ〳〵。人殺しだ〳〵。

ト抱き子を枷に、荷の中の下駄、足駄を打ちつける。伏せ鉦、念佛になり。源太抱き子を引ッたくり、上の方へ置くうち、權助血だらけになり、正面の白壁へ取りつき、上らうとして落ちる。源太後ろより斬る。この立廻りのうち、白壁へ、蘇袍にて、手の形、所々につく。權助、短刀を持ち、花道へ逃げる。源太追つかけゆく。跡にて、子はしきりに泣く。源太後先へ心づかひあつて、やう〳〵引ッ捕へ舞臺へ引き戻して來る。源太抱き子を懷へ入れ、短刀を引ッたくり、又斬り下げる。權助、これにて、ウムと倒れるはずみに、源太が提げ烟草入れを帶際より引ッ切り、これを握り居る。源太これを知らず、滅多斬りに斬り伏せ、抱き子を懷へ入れ、權助を仕留め、血刀を拭ひ、手に入れし短刀の風呂

敷を明けて、いろ／＼尋ね、折紙らしき品とても

包みの中に短刀はあれど、

トいろ／＼尋ねる思ひ入れ。この時、抱き子また泣出すゆゑ、いぶりつける。この時、下座より作右衛門、番人の拵へ、ぶら提灯を腰に差し、四つの拍子木を打ちながら、出て

作右　大分子が泣くが、捨子でもありはせぬかな。あゝ又、町内の厄介だ。

ト拍子木を打つて、歩く。源太、下の方へ寄つて、短刀を抜き、切尖を探り見て、思ひ入れあり。

源太　ヤヽ、この切尖は、短刀ならぬ

ト悄りする。作右衛門これを聞き、窺ふはずみに死骸を見つけ、ワツというて、提灯を捨て、仰向けに倒れ

作右　斬つた／＼／＼／＼。

ト拍子木を無性に打つ。源太似せ物と心得、無念の思ひ入れ。抱き子頻りに泣く。源太ツカ／＼と花道へかゝり、ホツと息を吐き、抱き子をいぶりつける、直ぐに作右衛門が早拍子木にて、

幕

幕の外、時の鐘にて、源太一散に向うへ入る。あとシャギリ。

中幕

藥研堀の場
神田川の場

役名　潮田作之進。箱持ち、善八。若黨、左五平。呉服屋、六之助。下女、お作。權助女房、お鳥。お俊母、お萱。津川勝次郎。津川主水。藝者、お俊。白藤源太。坂間傳兵衛。

本舞臺、三間の間、世話場屋體。上の方、鼠壁、稽古三味線を掛け、正面、暖簾口。下の方、押入れ、佛壇。下座の方、二階障子立。舞臺下に、丁子車の紋附いたる腰障子建て、誂への門口、柿の暖簾を掛け、この外路地口。幕の内よりお萱、やつし姿にて、上の方に縫ひ物をして居る。下にお作、下女の形、善八、序幕の廻しにて、兩人窺ひ合ひ、枕拍子を取つて居る。右の唄にて幕明く。ト兩人一くさり取つて、善八取り損ふ。

さく　アレ、不器用な善八さん。身に染みて、取らしやんせいなア。

善八　コレサ、お作、おれが不器用なのぢやア無い。おぬしの間が惡いのだ。

さく　何を。唄も碌に覺えずに、この枕拍子が取れるものぢやないわいなア。

善八　イヤ、枕拍子は取れないでも、おぬしさへ取りやアいゝが、コレ、どうだ。

ト手を取るを振り放し

さく　アレ、悪い事を。お袋様が見てぢやわいなア。
善八　イヤ、見ても譯は聞えぬ。耳が圓通寺、大事梨地の硯箱。
ト戲れようとする
さく　アレ、滅相な。退かしやんせいなア
ト枕を取つて打ちつける、これにてお萱、仕事をやめ
かや　コレ〳〵、何ぢや。譯は知れぬが、お作、又、善どんと爭ひかいなう。
さく　イエ〳〵、戲談ばつかりするによつて。……と言うても聞えぬお袋様。
善八　おれが口說くもきかねえ、いま〳〵しい。はツつけ阿魔の、がう人阿魔め。
トお萱が前へ辭儀をして、お作を睨める。
かや　何ぢや、行儀を躾ける。……ツム〳〵。そりや奇特な。コレ、お作、こちの家はお客もござる。
ちと善どんに、行儀でも習うたがよい。
さく　アレ、まだあんな事を。ホヽヽヽ。
善八　何を笑ふ事がある。惚れたから口說く。今に無理にでも本望を遂げるぞ。
ト又辭儀をする。

かや　ヤレ、おれそれの好い人ぢや。お俊は好い廻しを持つて、仕合せ。イヤ、お俊といへば、あの子は錢湯へ行つたぢやないか。

さく　ハイ、最前お出でなされました。（ト大きく言ふ）。

かや　飯の支度や、鏡臺も出して置いたかや。

さく　アイ、奥へ皆揃へて置きました。

善八　イヤ、お俊さんの歸るまで、もう一遍やつてくれないか。

さく　無理な事さへ言はしやんせずば、

善八　イヤサ、この枕拍子は坂三津が拵へたといふから、何でも覺えて、女をぶち殺さにやアならない。

さく　そんなら。（ト又枕を持つ）。

兩人　ヨイ〳〵〳〵。

ト又右の唄になり、兩人宜しく取つて居る。この唄にて、向うよりお俊、湯上り、浴衣を抱へて出る。少しあとより傳兵衞、序幕の形、丁稚一人、甲斐絹の風呂敷包みを背負ひ、附て出て來て、花道にて

傳兵　オイ〳〵、其處へ行くのはお俊ばうぢやアないか。

しゆ　ヤ、お前は傳兵衞さん。

傳兵　今、湯か。きつい朝寢をしたと見えるな。
しゆ　サア、昨夜も夜が更けたさかい、ツイ。……時に今日は何方へ。
傳兵　サア、仲間の相談を八百善といふ事ゆゑ、歸りは隅田川の夜櫻と出かけて來たが、おぬしにちつと用があり、そこでこの藥研堀へ廻りかけたのよ。
しゆ　そんなら、マア、ちよつとお寄んなさんせいなア。
傳兵　イカサマ、立ちながらも出來ない話。……コレ、銀藏、おれは用がしまふと、あとから小船で追ツ附くから、わりやァ仲間の手合ひと、先きへ行け。
丁稚　ハイ〳〵、畏りました。
　　ト取つて返す。
傳兵　コレ〳〵、又何かをたんと食つて、食傷でもするな。
しゆ　そんなら、傳兵衞さん。
傳兵　サア、行きやれ。
　　ト矢張り右の唄にて、兩人本舞臺へ來り、内へ入る。
　　オヽ、こりやァ善八、妙な事をするな。

しゆ　又、さくと枕拍子か。なんの出來もせぬ癖に。
善八　何サ、もう本間、本式。お客の前でも遣られやす。
傳兵　藝者の廻しが枕拍子とは、ハア、勸學院の雀だな。
しゆ　モシ、母さん、アレ、坂間の（ト教へる）。
かや　オヽ、旦那樣、ようお出でなされました。（ト辭儀なする）。
傳兵　オヽ、母さん、お前はいつも達者で。……と言つたところが
しゆ　お氣の毒でなりませぬわいなア。
ト此うち、お作煙草盆を出し、茶を汲んでくる。傳兵衞茶を飮み
傳兵　イヤモウ、斯う南風が吹込むと、內に居る氣は無くなるてな。併し、まだ船は早いス。（ト懷を探し、煙管ばかり出して）南無三、こりや煙管筒を
しゆ　何處ぞへ落しなされましたかえ。
傳兵　イヤ〳〵、出がけに道でのんで、內の氣で、煙管ばかり懷へ入れて出る奴サ。
善八　そりやア大きに御不自由でござりませう。
傳兵　善八どん、何でもあるまいか。

善八　ハイ、ござります。この間按摩が置いて行つた、これ〳〵。

ト押入れより張り子の煙管筒を持つて出る。

傳兵　オヽ、こりや、ポンといふやつだの。

しゆ　そんな物が、どうしてマア。

傳兵　イヤ〳〵、これを借りよう。これも洒落れの中だ。

善八　モシ、洒落れといへば、この間頼まれた杵屋の

しゆ　ほんに、お氣の毒でござりまするが、この摺り物、お願ひ申してくれいとて

ト本文庫より摺り物を出して渡す。傳兵衛取つて

傳兵　「浚ひ興行仕り候。晴雨とも。」……よし〳〵。當日に挨拶しませう。

ト右の本文庫より、序幕の伴之進が紙入れ出かゝり居るを

善八　こりやァ妙な紙入れ。お俊さん、お前、どうしてこの男の紙入れを。（ト取上げるを）

しゆ　アヽ、コレ、それは

トちよつと取つて、懐へ入れる。

善八　モシ、わたしやァこの間落して不自由だが、くんなさらぬか。

しゆ　イエ〳〵、こりやお客に預つて居るのぢやわいなア。（ト思ひ入れ）。
かや　お俊や。お久し振り。お杯でも
傳兵　イヤ〳〵、内ぢやア面倒だ。何もかも、善八、ちよつと、川口へ行つて、ちよつぴり
善八　裏通し、誂へて參りませう。
傳兵　お俊ばう、その出來るうち、おぬしに、とつくり
しゆ　そりやアノ、昨日の事でござりまするか。（ト重々しく言ふ）。
傳兵　サア、おれも退ツ引きならねえ譯ゆゑ
しゆ　モシ。そりやマア、奥でゆる〳〵と

ト善八、お作思ひ入れ。

傳兵　そんなら、一杯飲みながら
しゆ　お作、奥は方附いてあるかや。
さく　ハイ〳〵、掃除して置きました。
傳兵　そんならお俊。……母さんも
しゆ　マア、お出でなさんせ。

ト唄になり、傳兵衛、お萱、お作、善八、暖簾口へ入る。お俊おとより思案しい〳〵、これも奥へ入る。この唄返して、向うより源太、序幕の形、羽織に抱き子を包み、抱へて來てくる。あとより六之助、序幕の形、萌葱の風呂敷包みを背負ひ、附いて出てくる。直ぐに本舞臺へ來て

六之　關取りさん、こゝがお前のお宿でござりまするか。

源太　江戸に居る中の旅宿。六之助どの、此方へ入らつしやれ。

六之　ハイ〳〵。(ト兩人内へ入り)時に、お誂への小立ち。(ト風呂敷より仕立てた着物を出す)。

源太　オヽ、思ひの外、早かつた。代は濟んであるぞや。

六之　ハイ〳〵。又お願ひ申しあげます。今年も相變らず、名物切れ正寫し、珍らしい浴衣の新形。いろいろ世間廣いあなた、お得意樣がたへ宜しう御吹聽お願ひ申せと、親方が申しつけましてござります。

源太　イヤ、又、旦那衆や仲間の者へも吹聽しませう。……ドレ〳〵、オヽ可愛らしうよう出來たわい

ト羽織を取つて、抱き子に着せかへようとする。

六之　オヽ、よいお坊樣でござりまするの、お子樣にはこの縞柄は、ようお似合ひなされませう。(ト抱き子の着て居る着物を見て、)モシ、こりや夥しく血が附いて居ります。

ト源太ちやつと拵へた着物を引ッかけ

源太　サ、こりやおれが怪我。地取り場の疵咎めして

六之　そりや隨分、お大事になされませ。イヤ、大事といへは大のしの誂へ物。私しはお暇申しませう。

源太　オヽ、こりや御苦勞。

六之　左樣なら、また御用お願ひ申しあげます。

ト合ひ方になり、六之助門口へ出る。源太戸を締め、此方へ來て、思ひ入れあつて、抱き子の着物を着かへさせ、羽織の上へ寢かせ、血の附いて居る着物の置き所に困り、二重舞臺の疊を上げ、炬燵の素櫓を出し、緣の下へ入れる。この時、抱き子頻りに泣く。これにて源太、狼狽へ疊を直す。此うち六之助、門口の節穴よりこの樣子を見て頷き、向うへ走り入る。源太子を抱き上げ、ゆすぶりつけて居る。奧よりお萱出て來り

かや　オヽ、源太どの、歸らしやつたか。

しゆ　こちの内で不思議な、子供の泣き聲と來て見れば

源太　オヽ、坊主めぢや。なんと愛らしうなつたではないか。

しゆ　ドレ〳〵。（ト抱き取り）昨日も、知つての通り、柳橋で逢うたけれど、あの里親の權助どのが

かや　娘、この子は何處の子ぢやぞいなう。

しゆ　アレ、母さんとした事が……兼松でござんすわいなア。

ト耳に口を寄せて、大きく言ふ。

かや　ハヽア、石原へ里に遣つた兼松か。……ヤレ／＼、笑ひ居るワ。わしも初孫の事ゆゑ、其方があの人の本の女房と、ひろめもしたり、座敷でも引かせるやうになれば、手鹽にかけて育てたいは山々なれど……早うなう、そんな事も

源太　イヤ、商賣づくで、江戸が江戸に立たぬわしが身の上。それもマア、遲からぬ事でござります。

ト ちよつと頷いて見せる。

かや　ウム／＼。それもさうかいなう。

しゆ　時に、お前はこの子を、どうして連れてござんしたぞえ。

源太　聞きやれ。昨夜は上方の角力の相談で、回向院前へ泊つて、今朝朝湯の出合ひがしら、あの權助めに逢うたところ

しゆ　又、乳の述懷言うたのかえ。

源太　イヤ、そればかりでない。坊主が事について、又ゆたぷり、困るところを知つて、足許を見られ

るが忌々しさ。そんなら、返せ、と取り戻して來たのよ。

しゆ　ほんに、又しても面の憎い。そんな事なれば、此方から遣つた物、皆取り返してござんすりやよいに。……イヤ取り返せといへば、この子の着物、わたしが拵へて遣つたのとは違うてあるが。

源太　エ。

しゆ　どうして、マア此やうな

源太　そりやア、なによ。今朝取り返して、アノ、一つ目の岡田屋の前を通つたら、見世で呼び込まれ、父今年も新規の浴衣お願ひ申す、格別下直も久しいやつ。見るは目の毒で、ツイ坊主めに拵へてやつたのよ。

しゆ　ほんに、こりや可愛らしい縞柄。わたしも袷の表に、取寄せて見ようわいなア。

源太　イヤ、大分當世に向く物を賣るて。

ト抱き子泣き出す。

しゆ　オヽ、誰がよく〳〵。

源太　坊主めは、そりや大方ひもじいのであらう。

しゆ　ひもじいというて、もう乳は上つて、無し。……モシ〳〵、母さん、里親があんまり憎いによつ

て、ぬしがこの子を取り返してござんしたが、どうぞ乳はあるまいかいなァ。

かや　何ぢや、酢があるまいか。喰初めもせぬうちに、どうして

しゆ　アレ、まだいなァ。（ト書いて見せる）。

かや　ムウ、何ぢや、里親が憎いによつて、取り返した。それで、乳に困る。……そりやさうであらう
乳母も里も急にあるものぢやない。マア〳〵、裏の三つ物屋のお内儀に

しゆ　それ〳〵、貰うて飲ませて下さんせ。

トお萱抱き子を受け取る。

源太　こりや又、世話をかけずばなるまい。

しゆ　そりやモウ、母さんは正眞の孫ぢやもの。ひもじいを見て……イヤ、お前もひもじからうに、奥
に川口から、いろ〳〵おいしい物が來てござんす。あがらんかいな。

源太　イヤ、まだ食ひたうも無いが、川口とはきつう奢りかけるな。

しゆ　イヽエイナァ、神田川の、坂間の旦那がござんして

源太　アノ、傳兵衛様が

しゆ　お前にも逢ひたがつてゞあつたわいなァ。

源太　何かにつけて頼もしい旦那。そんなら、ちよつと行て逢はうか。
しゆ　母さん、お前は早うその子に
かや　何ぢや、磨り粉。磨り粉より白雪糖がよい。
しゆ　アレサ、これぢやわいなア。（ト乳を教へる）。
かや　オヽ、ちよつと行て、貰つて來ませう。
源太　ドレ、御挨拶申さうか。
ト唄になり、源太思ひ入れあつて奥へ、お萱は抱き子をゆすぶりながら、下の路地口へ入る。バタ〳〵になり、向うより勝次郎、序幕の形、あたりをキヨロ〳〵見ながら、駈けて出る。あわたゞしく内へ入り、戸を締める。お俊悔りして
しゆ　ヤア、お前は勝次郎様。
勝次　お俊、どうぞおれを、隱してくれ〳〵。
しゆ　そりやマア何でござりますぞいなア。
勝次　何だどころでは無い。今朝邸の小者に逢つたら、どうでもおれに詮議があるゆゑ、搦め捕ると、兄上水どのが、尋ねて歩くと聞いて、白藤に相談せうと、來かゝる廣小路で、兄貴のすッ影。見

附けられちやァ大事だ。どうぞ何處ぞへ。

しゆ　そりやマァ合點のゆかぬ。その事で源太さんも、いろ／＼と苦勞して居やしやんすゆゑ、あなたの引負ひなさんしたお邸のお金、やう／＼と昨日拵へて、ぬしの手から納め、マァ一方は方附いたと喜んで居るに

勝次　何でも見附かつちやァ、むづかしい。兩國あたりをぶらつくは、慥かに（ト戸を細目に明け、向うを見て）アレ／＼、兄貴がこゝへ。こりや、どうせう／＼。

ト狼狽へる。お俊も狼狽へ、あたりを見廻し、二重舞臺の素櫃を見附け、思ひ入れあつて疊を上げ

しゆ　窮屈でもござんせうが、マァこゝへなと。

勝次　イヤ、牢へ入るにはましだ。

ト緣の下へ飛び込む。お俊手早く疊を元のやうにするうち、唄になり、向うより津川主水、羽織袴の侍ひ、左五平、序幕の形にて供をして出て來る。

主水　コリヤ左五平、白藤の旅宿はあれか。……案内しやれ。

左五　ヘイ／＼。（ト門口へ來て）關取り白藤どのは在宿でござるかな。

しゆ　ハイ、宿に居られます。（トうち／＼思ひ入れ）。

主水　宿に居るとか。……然らば、其方は立歸り、若し火急な用事あらば、早速に相知らせい。

左五　へイ〳〵、畏りました。

ト合ひ方になり、左五平向うへ入る。主水はズッと内へ入る。

しゆ　あなたは。

主水　身は石濱の藩中津川主水。白藤在宿なら、ちよつと面談致したい、と申し次いでおくりやれ。

しゆ　ハイ。そりやモウ隨分申しますでござりませうが、自由がましうござりまするが、只今、據ない客を受けて居りますれば、濟みます事なら

主水　ムウ。其許が俊と申すお女中かな。

しゆ　左樣でござります。

主水　然らば關取りに申すよりは、却つて早う解る事もあらうか。

しゆ　してマア、御用は。

主水　弟勝次郎、搦め捕つて引かにやならぬ。

しゆ　エヽ。

主水　包まず在所を、言うておくりやれ。

しゆ　そりやマア、どういふお咎めで。

主水　この金子ゆゑに。（ト金包みを出す）。

しゆ　こりや昨日源太さんより

主水　弟が調達致したと、差越したこの金は、先達て此方御金藏にて紛失、內々詮議のこの金子。證據は月星の極印。

しゆ　エヽ。

主水　殊にこの金子は、今度、御菩提所、梅柳山、御建立寄附の金ゆゑ、新たに御定紋の月星を、極印に打ち、外にあらざる五百兩の內、二百金先達つて紛失。金奉行の面々申し譯立たず、內々の騷動いかばかり。然るところ、昨日弟めが、吳服所の引負ひ金、まづ調達致したと、家來左五平へ源太よりの取次ぎ。オヽ、出來した、先づ一方の申し譯立たんと、同役共へひけらかし、差出だしたるこの金子。滿座の中にて印の極印。ハッと赤面、言句も出でず。科に科を重ぬる弟め。兄の武士まで廢つたわやい。

しゆ　すりや、この金がお屋敷で紛失の（ト改めて）ほんに月星の極印。ムウ。そんならあの伴之進が

主水　なんと。

しゆ　サア、萬事勝次郎様の事は

主水　引受けた白藤。弟をかばうて、兄の難儀を餘所に見るか。

しゆ　サア

主水　勝次郎を渡すか。

しゆ　サア

主水　是非出さにや、家探し致しても

トお俊を引退け、立ちかゝる。奥より源太出て來る。

源太　暫く〳〵。暫くお待ち下さりませ。

主水　其方は白藤。

源太　委細はあれにて、殘らず承りました。昨夜勝次郎様より調達の金子と申すは、全く弟御様のお手より出ました金子ではござりませぬ。

主水　して、その出所は。

源太　コレ、お俊、おれが苦勞を助けようと、大枚のあの金、馴染みの客に貰やつたというたが、その客は、何處の何といふ者ぢや。

しゆ　サア、その客はな

源太　言はねば其方が盗人になるがや。

しゆ　サア

源太　サア〳〵。コレ、默つて居ては事が濟まぬわい。

　　トお俊ハッと思ひ入れ。主水「ウム」と手を組み、思案。この内、流行り唄になり、向うより伴之進、序幕の形に、權助女房お鳥、裏店の嚊の形にて出で來り、花道にてらよつと囁き、伴之進は直に路地口へ入る。お鳥、門口へ來て

とり　闘取り樣、内にござりまするか。

源太　貴樣は權助の内儀。(トはッと思ひ入れ)。

とり　申し譯がござりませぬ〳〵わいなア。お預り申しやした大事のお子。あの兼松樣を何處へやら、失してしまひましたわいなア。(ト大泣き)。

しゆ　ヤア〳〵。合點のゆかぬ。コレ、その子はの(ト言はんとするを)

源太　コレサ。……此方から預けた大事の子を。泣いてかゝるは、譯が解らぬ。どゞ、どうして失したのだ。

とり　これが泣かずに居られませうか。私しどもの内の權助は、昨夜斬られて死にましたわいなう。

しゆ　エヽ。……そりやマア何處で。

とり　サア、この間、あの子に乳を喰ひつかれて、此やうに脹れ上り、寒氣はする、心持は惡し、寢て居て飮ませる事はならず。ひもじがつて泣きはする。顏はあんなに怖らしいが、ずんと心の優しいわし等が夫、晝商賣に出るにも、箱の中へ入れて、得意先きで貰ひ乳。昨夜も抱いて出て、それッきり、歸らぬから、今朝六つ起きで尋ねに出たら、あの割り下水の石橋で、むごく斬られて居ましたわいなう。（ト泣く）。

しゆ　エヽ。（ト源太が顏を見て、思ひ入れ）。

とり　サア、一緒に殺されたら、あの子も死骸がありさうなもの。見えないは何處へ遣つたか、失したと思はれます。權助を殺した奴が知れたらば、あの子の行くへも知れませう程に、どうぞ

源太　料簡してくれろといふのか。

とり　亭主に別れ、泣きの涙の其うちで、お詫びに參りました。どうぞマア

源太　エヽ、やかましい。默りやァがれ。……人の大事の子を、金を取つて預りながら、提灯か傘を見るやうに、ツイ失しましたで、事が濟まうと思ふのかい。

とり　サア、それだによつてお詫びを

源太　詫びをすれば、人の生死も構はぬのか。

とり　サア、それは

源太　行くへを尋ねて、きり〳〵と返しやれサ。

とり　サア、尋ねるといつたとて、何處を當てに。こりや又足を擂木。おらが夫でも、氣のきかねえ。隙な時に死んでくれゝばいゝに。

ト門口へ出かゝり、思ひ入れ。此うち、路地よりお萱、抱き子を抱へて、出て來る。

かや　サア〳〵、もう明日まで、こたへるやうに、しつかりと飲ませて來ました。

ト內へ入る。源太恟りして

源太　アモシ

ト立ちかゝつて、隱さうとするを

かや　コレマア、腹がようなつたら、にこ〳〵笑ふ。愛らしい子ぢやないかいなう。

トお鳥抱き子を見て

とり　ヤア、この子は內へ歸つて居るか。

ト源太思ひ入れ。お萱、お鳥を見て

かや　こなたは里に遣つた權助の內儀。むがうして取り返されたが面目なさ、又あやまつて預けてくれいと、わせられたか。

とり　何を、どう聾め。（トお萱を引退け）サア、關取りさん、イヤサ、白藤どの。この子はどうして爰へ歸つて居るよ。

源太　サア。（ト術無きこなし）。

しゆ　イヤコレ、お鳥さん。あの坊はな、昨日わたしが柳橋で、權助さんに逢うて取り戾したを、ぬしは知らずぢやによつて

とり　へゝ、そんならアノ、お俊さん、お前が……取り返したと言つたら、ムウと言ひさうな噂だと思ひなさるか。なんでも詮議の絲道はこの餓鬼。

ト抱き子にかゝるを、源太ちよつと突き廻す。お萱此方へ來て

かや　何を。この子を預からうとて、なんの預けよう。これから大切にこの婆が育てる程に、斷り言うて早う去なしや。（トこの時抱き子泣出す）。オヽ、誰がよく〳〵。（ト叩きつけながら、ツイと奥へ入る）。

とり　ハヽア、これで讀めた。おらが夫を殺したも、そんじよそれ。コレ關取り、この胴亂覺えて居るか。

源太　ヤ。

とり　權助が殺されて居た所に、落ちてあつたといふ蝶花形。……金物打つた煙草入れ。こりや、こなさんのであらうがな。

源太　イヽヤ、知らない。廣い江戸。同じ紋はいくらもある。それが證據に

ト　お鳥思ひ入れあつて、門口へ出かゝる。

こりや、内儀、何處へ行く。

とり　知れた事。斯う／＼いふ筋道、餓鬼を御詮議下されましたら、人殺しも知れませうと、お願ひ申すワ。

しゆ　イヤ、それは聞き分けないといふもの。わたしが連れて戻つたあの子。

とり　イヽヤ、女を相手にやせぬ。どこまでも白藤（ト出かゝるを）

しゆ　さう言や遣られぬ。待たしやんせ。

ト引留める。立廻りに、お俊が懐中より以前の紙入れ、門口の外へ飛ぶ。此うち、路地口より伴之進出て居て、この時、紙入れを取つて

伴之　お鳥、待て。人殺しより盗人の詮議。

トずつと内へ入る。

とり　お前は

しゆ　伴之進さん。

伴之　昨日、柳橋の茶屋で、身が所持の金子五十兩、入れ置きし紙入れ紛失。その紙入れがこゝに有るからは、お俊、盗人はわれだな。

しゆ　エヽ。（ト思ひ入れ）。

伴之　エヽ、も凄まじい。表向きは立派な藝者、內證は人の懷を目がける巾着切り。それでも關取りを情夫で候ふの、白藤が女房氣取りで、人がちよつと觸つても、ぴんしやん刎ねる潔白な藝者か。

しゆ　サア。

伴之　斯ういふ慥かな證據があつても、盗まぬと言ひ譯するか。

しゆ　サア。

伴之　サア〳〵〳〵。こゝな大盗人め。

ト源太、お俊の膝を取つて、此方へ向け

源太　お俊。すりや昨日の金の出所は

しゆ　堪忍して下さんせ。御放埒な若旦那も、お主をお主と思へばこそ、蔭になり日向になり、さまぐ〜に辛苦しなさんす、側で見る目のいとしさ。アヽ、どうぞちつとなと、心便りになりたいと、思うても悲しいは、お前といふもの出來てから、爲になるお客は皆離れ、何ぼあつても座敷ばかりは、高の知れた花代。ところに、昨日切迫の金。お前の苦しみしやんすを、助けたいばつかり、ツイ出來心で、伴さんの紙入れ

源太　五十兩掠めて

主水　弟が爲に調達したか。

しゆ　面目ない。恥かしうござりますわいなア。

伴之　さては所持した金の行き場。

主水　すりや、この金の出所は

伴之　身共でござる。

主水　然らば、お侍ひ。腕廻した。

ト反りを打つ。伴之進悔りして

伴之　ヤア、身共に繩かけうといふ其許は。

主水　貴殿と同家、石濱の家中。

伴之　なんと。

主水　お國詰めゆゑ面體御存じあるまいが、この程罷り登つた津川主水、貴殿所持とあるお俊が掠めたこの金子は、先達て、お屋敷御金藏へ納めある、御菩提所へ寄附五百金の內、二百金紛失の金、證據は一兩々々、月星の極印。すりや其許が、お金の盜賊よな。

伴之　サア、それは

主水　サア〳〵〳〵。なんと。

伴之　ア、、コレ〳〵。身共存ぜぬ。

主水　ヤア。

伴之　サア、一體紙入れも盜まれた覺えござらぬ、覺えござらねば身共が金であらうやうも無し。とツとモウ、入我々入でござるて。

主水　すりや、お俊は紙入れの盜賊ではござらぬか。

伴之　なんの〳〵。潔白な正直者サ。

主水　すりや、矢張り解らぬ金の出所。詮議は白藤。

源太　暫くこの場を拙者にお預け。
とり　その詮議は預けても、預けられぬは人殺し。この胴亂を白を切れば、まだ〳〵岡田屋の若い者に、聞いて置いた餓鬼の褞袍。血の附いたは、慥かにこゝに。
　　　ト上の方へ行かうとする。源太、お俊立ちかゝるを、伴之進ちよつと留めるうち、お鳥疊を上げる。中より勝次郎ヌツと顏を出す。皆々見て悔り
主水　そちや、弟
源太　勝次郎樣。
　　　トお俊ツカ〳〵と行き、疊をしやんと直し、その上へ乘つて
しゆ　サ、こりやわたしが隱し男。
一同　なんと。
しゆ　浮名が立つてはせきせかれ、晴れて逢はれぬ日蔭の身と、なればなる程いとしうなるも、因果な緣のこの下家へ、隱して置いたは恥かしながら、この俊が、アイ、情夫でござんすわいなア。
伴之　すりや、白藤といふ
源太　由緣を退けて

しゆ　幾人あろと、色と情けで世を渡る、藝者の表でござんすわいなア。
主水　ハテ、思ひもよらぬ下家より、それといはれぬ弟めが、身は三味線の絲筋に、搦めてひくもひかれぬは、隱し男と胴するゐて、意氣地を立つる心根を、無下にもならずこの儘に、海老尾とは思へども、刀の手前かし棹の、思案の極意、この場の納り。
伴之　ウム。
ト合ひ方になり、主水は源太の前、伴之進はお俊の前へ、兩方より捕り繩を投げる。
源太　この取り繩は。
主水　男さまりの魂ひに、詮議をゆるめる金の出所。お俊へ問ひ狀。
伴之　それと明さぬ人殺しの、白藤が實否。
しゆ　すりや、わたしら二人に
源太　二人か詮議を
伴之　縛めも、拷問も
主水　水入らずに尋ねいサ。
ト包み金を懷中する。

とり　して、證據の胴亂は
伴之　どうならうとも身共が預り
とり　敵を取つて下さりませ。
ト胴亂を投げる。バタ〳〵になり、向うより左五平、走り出て來り
左五　お旦那、先き程御意の通り、お役所の樣子承りましたるところ、先達て紛失の短刀、明日未明に差上ぐべきやう、お上邸より御使者到來。御同役中樣も、早くその旨申し上げよとの儀でござりまする。
主水　ムウ、すりや、國安の短刀を
源太　明日未明に
主水　聞く通りの仕合せなれば
源太　若し手に入らざるその時は
主水　切腹とはかねての覺悟。
しゆ　すりや、今宵のうちに
伴之　その捕り繩の返答も

主水　いづれ、夜中の鐘を合圖。

伴之　それまで身共はこの家の奥で

とり　わつちやァ歸つて待ちやせう。

主水　然らば白藤

源太　主水樣

伴と　あの下家の

ト立ちかゝるを、お俊、源太隔てる。立廻りに、伴之進が懐中より、序幕の摺りかへた短刀を落す。

源太取つて

源太　これは。

ト伴之進ちやつと取つて、懐へ捻ぢ込み

伴之　イヤサ、この場の落着、

主水　屹度糺して

しゆ　いづれ、後かた

源太　宜しい吉左右。

主水　ハテ、頼もしい男ぢやなア。

ト唄になり、主水思ひ入れあつて左五平を連れ、向うへ入る。お鳥花道へ行く振をして、とつて返し、路地口へ入る。伴之進こなしあつて、奥へ入る。源太、お俊、捕り繩を見てホツト思ひ入れ。時の鐘。

源太　ありやもう入り相。夜中までに約束の、その短刀の事に就き、お俊、わが身に相談があるが、なんと諾いてはくれまいか。（ト お俊挨拶無く、俯向き居る）コレ、なぜ物を言はぬのぢや。

しゆ　恥かしいわいな〳〵。（ト打伏す）。

源太　恥かしいとは、最前の金の事か。

しゆ　サア、いかに男の爲ぢやとて、さもしい心が、日頃から、あるやうに積らるゝのが、恥かしい恥かしい。

源太　コレ、すりや矢ッ張り他人向き。披露目こそせね、斯うして居れば、女房なり亭主のおれに、なに外聞。

しゆ　ぢやというて。

源太　ハテ、それ程に思ふなら、おれも言うて聞かす。割り下水の石橋で、權助を殺したはこの白藤。

しゆ　エヽ。

源太　慥かに短刀所持と聞き、あと追つかけて様々と、だませどすかせど附け入る悪者。是非に及ばず

しゆ　して、短刀は。

源太　まツかな似せ物。

しゆ　エヽ。……して、眞の物は誰がマア

源太　慥かに奥の伴之進。取り落したな、それぞとも、荒立てられぬ詮議の筋道。……相談とはこゝの事よ。

しゆ　アノ、わたしに詮議をせいかいなア。

源太　サア、常からおぬしに惚れて居るあの侍ひ。色で仕掛けて

しゆ　取り戻すも、有る事ではござんすけれど、一筋縄では行かぬ奴。もしも此身を任せといふたりや

源太　ハテ、それまでに行くものか。こんな事、アノ、わが身が、平常語る淨瑠璃に、いくらもある筋ではないか。

しゆ　ほんに、さう言はしやんすりや、芝居で常住する愛想づかし。狂言氣取りになつて、せまいものでもござんせぬが、むごう辛う言ふを、お前得心して聞いて居やんすか。

源太　ハテ、とゞのつまりは、寶物を取らうため。何もかも書置きで解る趣向は、田舍者のおれでも知

つて居る。
しゆ　そんならお前も、その心になつて
源太　まづ、短刀はそれでも行かうが、まだ一種の折紙が
しゆ　それはちつと心當りがあれば、
源太　何もかもわが身に任す。
しゆ　ア、此やうに苦勞したとて（トちよつと思ひ入れ）。
源太　ハテ、それも女房の役ではないか。
しゆ　何を。お前には、昨日ちよつと逢うた、言ひ號けの娘御が
源太　何を。ありや在所での約束。斯うなつて見れば、田舍臭うて七里けつぱい。
しゆ　そんならわたしは
源太　どこまでも女房。
しゆ　子までであるのが
源太　腐れ緣ぢや。
ト奥にて

かや　お俊や〳〵。傳兵衛樣がお呼びなさる。ちやつとおぢや〳〵。
しゆ　アイ〳〵。（ト立上り）源太さん。今の事はそれでよけれど、もしも其うち人殺しの
源太　詮議が廻らば、それからそれ。
しゆ　名さがの立つ二人が罪科。
源太　どうでしまひは讀賣りや
しゆ　四つ竹に乘る
源太　覺悟の前。
しゆ　苦は色かはるものぢやなア。

ト唄になり、お俊思ひ入あれつて、奥へ入ひろ。ト二重の疊を上げ、勝次郎、以前の抱き子の着物を持ち出て來り、門口へ出ようとする。

源太　勝次郎樣、何處へござる。
勝次　サア、緣の下で樣子を聞けば、齒入れの權助も殺され、短刀も手に入らず、兄貴は兄貴で縛つて行かうと、どうでしまひのつかないおれが體。何もかも引ツ背負つて、暗い所へ行く心よ。
源太　すりや、その着物を持つて

勝次　おぬしの體を明るくして遣るワ。

　ト又行かうとするを、源太、勝次郎を引留め

源太　マア、待たつしやりませ。（ト勝次郎を引据ゑる。合ひ方になり）モシ、お前の體へ難癖を附けまいため、苦勞をするが、こなたの目にはかゝりませぬか。

勝次　ヤ。

源太　なんぼ若いとて、ちつとは思ひやりもありさうなものぢやがな。

勝次　そんなら矢ツ張り、不身持のおれを

源太　大事にするも、親御樣への恩送り。

勝次　その大事にする者が、なぜ極印のある金を遣つて、おれを盜人にした。

源太　サア。

勝次　この白藤の不忠者めが。

源太　サア〳〵、御尤もぢや〳〵。これも矢ツ張り大切の、思ひあまつて拵へたれば、廻り廻つて先刻の體裁も、お前の灰汁が拔けた上、歸參の種の短刀も

勝次　慥かに權助、と思ひの外、あれが似せ物で、又外に

源太 心當りも今宵の九つ。

勝次 それまでおれはこの褞袍、ちよつと捨てゝ（ト立上がるな）

源太 ハテ、又出ると碌な事は仕出かさつしやらぬ。そりや矢ツ張り、縁の下へ

勝次 ぶち込んで置かうか。

源太 それ〳〵、内で遊んでござりませ。

勝次 そんなら遊び賃に、二分くりやれ。

源太 ハテ、御苦勞無しの氣ではあるぞ。

ト唄になり、源太思ひ入れあつて、奧へ入る。勝次郎あとを見送り、につこりして、小立ちの着物を袂へ無理に捻ぢ込んで居る所へ、伴之進先きに善八、銚子杯持ち出て來り

善八 伴さん、お前もこゝで一獻お上がりなされませ。

伴之 ハテ、何奴もよく喰ふ奴だてな。

勝次 コリヤ、伴之進どの。

伴之 勝次郎か。

勝次 又お俊に釣られてくろ、とんだだぼ沙魚だ。

伴之　イヤ、又釣られるも憎くない。ずぶ杜若といふ面の藝者。

善八　貸元がずるくないが玉に疵。わしもあの白藤ぢやア、よく幕を切るお杉役にも頼まれ、氣が惡くつてなるものぢやアない。

伴之　エヽ、いま〳〵しい。いつそ場所で投げ殺されゝばよいと思へば、意地わるく强い相撲め。

勝次　イヤ、そんな廻り遠い事より、つい寂滅させる

伴之　工夫があるが。

勝次　外でもない。これだ。（ト着物を出す）。

善八　そりやア餓鬼の着物ぢやア無いかえ。

勝次　サア、こりやアあの白藤めとお俊が、仲へ出來た餓鬼の一つ身。これが血みどろになつて居るは、慥かに割り下水の人殺し。

善八　そんならアノ、わしが口をきいてやつた、權助めを、あの相撲めが

勝次　コレサ、しかとそれともわからないが、これを以て遣ッ附けたら、どうかそれになつて寂滅しさうなもの。

伴之　成る程、最前お鳥めから、預つて置いたこの胴亂。こればかりでは齒切れがしないが、その縕袍

では慥かだ。

勝次　それでおれが尻割りに出てやらうか、規模をするかえ。

善八　そんなら金さへ見りやァ

勝次　主家來の見さかひがあるものか。

善八　ハテ、賴もしいお心な。

作之　さういふ事なら、金を遣るまでの抵當に、この笄の片しを預けて置かう。

ト懐より出す。

勝次　こんな物をか。

作之　ハテ、割り笄は金の割り符といふ心。

勝次　そんならこれを預つて

作之　うまくやつてくりやれ。

ト奥にて

しゆ　善八どん。何處へ行つたぞいなァ。

勝次　ありやァ、お俊。

ト伴之進目で知らせる。勝次郎思ひ入れあつて、着物を袂へ捻ぢ込み、屋體の上へ入る。伴之進、上の二枚折りの屛風の蔭へ寄つて居る。合ひ方になり、奥よりお俊、杯を持ち、少し醉うたるこなしにて、出て來て

しゆ　善どん、合ひを賴んだ杯を飮まずに、こゝへ來たは、手がわるいぞえ。

善八　サア、あんまり坂間の旦那に强ひられて、醉うたんぼうになる苦しさ。

しゆ　イエ〱、逃げても逃がしやせぬ。

善八　そんなら、どうでも酒を飮めかえ。

しゆ　サア、酒も飮まさにやならず、相談もせにやならぬ事があるわいなア。

善八　お前の相談なら、大概知れたもの。又關取りとの幕を切れかえ。

しゆ　イヽエ、切るは切るぢやがな。

善八　何だえ。

しゆ　あの人と緣が切りたうなつたわいなア。

善八　エ。

しゆ　サア、たつた今、切りたいには、どうしたらよからうぞいなア。

善八　藪から棒に、飛んだ事を言ひなさるが、サア、お前が、それを本の事にしろ、平常關取りの世話になるこの善八、この相談にはマア

しゆ　乘られぬかえ。

善八　サア。（ト思ひ入れ）。

伴之　イヤ、その相談には身共が乘らう。

ト前へ出る。

しゆ　お前は伴さん。そんならアノ

伴之　搔摘んで樣子は聞いたが、今更白藤と退かうといふは、合點が行かないながら

しゆ　サア、浮名の立つたこれまでの譯ゆゑ、さう思はしやんすは尤もでござんすが

伴之　たつて相談したいといふなら、乘つてやるまいものでもないが、マアどういふ譯であの關取りに

しゆ　愛想が盡きたわいなア。

伴之　ヤア。

しゆ　又愛想が盡きまいものか。人間並でもない大きな體、世辭も金も無い不器用な人に、どうして今まで心易うした知らん。

作之　お俊、そりや嘘だ。
しゆ　エ。
作之　さう言つて、おれを乘せ、白藤が首にかゝる、證據の胴亂をせしめる氣か。（ト懷より出す）。
しゆ　エ。
作之　矢ッ張り彼奴が可愛いのであらう。
　　　ト お俊思ひ入れあつて
しゆ　なんの。愛想が盡きて、緣を切る氣になつて見れば、行き倒れて死なうが、どうせうが、わたしの構ふものかいなア。
作之　そんならほんに、こりやア要らぬか。（トぶらつかせる）。
しゆ　なんの。それが事になつて、此方の内を出て行けば勿怪の幸ひ。そんな物がこゝにあるゆゑ、これまでとやかう深切に、言うて下さんしたお前の氣が悪い。早うどこぞへ遣つて下さんせいなア。
善八　よし〱。物を言はせるまで、わしが預りませう。（ト胴亂を取る）。
しゆ　こなさんが預つたら、早う持つてゆかしやんせ。エヽ、氣の利かねえ。
善八　ほんに、どうか邪魔になりさうな座敷の樣子。

しゆ　早う何處へなと

善八　行けといへは、傳兵衛樣が、駕籠を誂へてくれろと言はしつた。ドレ、駕籠屋から

伴之　錢湯へでも行つて來やれサ。

善八　伴さん、御祝儀は〆めたものだね。

ト流行り唄になり、善八、胴亂を懷へ入れて、向うへ入る。

伴之　あれを見たら、身共もちつと落着いたやうだが

しゆ　落着いたら、世話して下さんすかえ。

伴之　イヤモウ、白藤さへ目の前で、突出してしまへば、懸け替への無い首でも遣る氣だ。

しゆ　エヽモウ、そんな氣にかゝる……それ程わたしを思うてなら

伴之　金か。

しゆ　イヽエ。

伴之　着物か。

しゆ　イヽエ。

伴之　そして何だ。

しゆ アノ、お前の持つて居やしやんす、國安とやらの短刀を

件之 エ。

しゆ ホヽヽヽ。きつい悔りのしやう。サア、あれを下さんせというたら、定めて源太さんにでも遣る事かと思はんせうが、さら〳〵さうぢやござんせぬ。外にちつと

件之 眞實欲しいといふなら遣りもせうが、お俊、ほんに白藤を突出すかよ。

しゆ アレ、まだ疑ひ深い。（ト抓る）。

件之 アヽ痛い。もうめかすとは有り難いが、すりや、いよ〳〵

しゆ お前の見る前で、すつぱりと

件之 突出したら

しゆ その短刀

件件 切れ文と引替へに

しゆ 必ず詞を、モシ、つがへたぞえ。

トいやらしいこなし。合ひ方になり、奥より源太出て來り、この體を見て

源太 エヘン〳〵。（ト咳ばらひをする。これにて兩人別れる）。お俊、わが身は先刻からこゝに居たか。

しゆ　アイ。わたしが内で、わたしが何處に居ようと心次第。お前はマア、こゝへ來るなら來ると、お客の座敷、ちつとは遠慮したがようござんすわいなア。

源太　イヤ、おれはそんな事は氣が附かなんだ。……こりやァ伴樣、飮んで居りますね。

ト煙草盆を控へ、下へ坐る。

伴之　イヤモウ、藝者の喰ひ倒れは當り前。おぬしもちつと粹になりやれな。

しゆ　野暮ら野暮、背負つて立たれぬ箔附きの大象といふは、ぬしの事ぢやわいなア。（ト呑み込ます）。

源太　そんなら（ト扨はといふ思ひ入れあつて）ム、ハ、、、その又、大象に何で惚れて、鬼やかう吐して斯うして居るのぢや。

しゆ　そりやツイした時の表裏で、安本丹も喰うて見たれど、長うはいけぬ。これから又、伴さんのやうな、見づきの肴を、（ト寄りかゝる）。

伴之　旨いとお見立ては、鯒の星鰈をさゝれたワ。

トいやらしく衣紋をつくる。源太ムツとしたるこなしにて、立つて行かうとする。

しゆ　待たしやんせ。

源太　用があるか。

しゆ　お前、今のやうに言はれたのが腹が立つかえ。……腹が立つなら、男らしう、物を言うたがよいわいなア。

源太　男らしう、物を言へとは。

しゆ　サア、女子に斷う言はれ、料簡して行かずと、存分にして、美しう、手を切つたがよいわいなア。

源太　ヤイ、お俊、酒の上の惡いはいつもの事と、胸で納めて居たが、手を切れとは、そりや重い臺詞だぞよ。

しゆ　重いも輕いもいつた事か。高が、緣切つて欲しいわいなア。

源太　緣が切つて欲しくば、斷うして切つてくれう。

ト踏みにかゝるを、伴之進隔てゝ

伴之　オツト、闕取り、逆上るは尤もだが、これが本の女房といふではなし。疵附けられては、あとの膳に据わる身共が難儀。

しゆ　それいなア。何ぞといふと、力自慢に瘤を出して、あの鈍い顏見やしやんせ。ホヽヽヽヽ。

源太　ムウ。おのれはなア。握み殺しても飽足らない奴ぢやが、心の腐つた奴に、べんべんとくッついて居て、恥に恥を搔かうより

しゆ　縁を切る氣にならしやんしたら、こゝはわたしが内。どこへなと出て行かしやんせ。宿無しさん。
源太　エヽ。うぬはなア〳〵。よくもそんな口が叩かれた事ぢや。（よいワ。望み通り出て行つてくれう。
ト行きかゝる。
しゆ　行かしやんすなら、別れた證據、向後構ひないといふ、切れ文書いて行かしやんせ。
ト合ひ方。
源太　うぬがやうな奴に何の未練。望みの通り
ト源太そこにある硯箱にて、巻紙へ切れ文を書く。この内、二階の障子を明け、傳兵衞、下を見い〳〵
これも何か巻紙へ書いて居る。源太書き終り
ソレ、切れ文。大事にかけて、うしやアがれ。（ト投げつける）。
しゆ　三度戴いて、禮を云ふぞえ。
源太　エヽ、うぬ。（ト立ちかゝる）。
しゆ　どうしたとえ。
ト源太を門口へ突き出す。
源太　人の皮着た畜生めが。

ト門口をシャンとしめる。尤も、これまで、始終表面ばかり腹の立つこなし。お俊も右の思ひ入れよろしく、源太ツカ／＼と跫音して、花道中程まで行き、につこり思ひ入れあつて、そろ／＼取つて返し、門口に立聞く。

伴之　オヽ、お俊ぼう、出かした／＼、よく言つた。釋迦でも腹を立てにやァならない、今の愛想づかしで、のろくなり切つて居る白藤めも、思ひ切つて書いたその切れ文。

しゆ　なんの。土俵の上では強からうか、手もなう突き出してしまうたれば、これでは、お前も

伴之　疑ひが晴れいでどうするものか。もう／＼、襟元がぞつとして、頭が痺れる程、嬉しい／＼。

しゆ　嬉しくば、約束通り

伴之　ソレ、短刀と、遣りたいが、あんまりうま過ぎて、心の程が覺束ない。

しゆ　アレ、まだ、それほど疑はしやんすなら、まだこの上に

ト伴之進が脇差しにて、指をポンと切る。

伴之　ヤア、そんなら指まで切つてくれる氣か。重ね／″＼の心中を見て、この上、どう疑はれう。サアサア、約束の短刀。

ト渡す。お俊、この内、指を紙に包みつゝ

しゆ　これでわたしも嬉しいわいなア。

伴之　嬉しくば、此方も約束の、ドレ、その切れ文と今の指を

ト取らうとしるを、此方へ持ち替へ

しゆ　イエ、これを遣るはお前ぢやない。

伴之　エ。……そんなら矢ッ張り白藤か。

しゆ　イヽエ、これを遣るのは

伴之　外に誰だ。

トこの時傳兵衛、書いた物を卷いて、懐へ入れ、二階の階子を下りながら

傳兵　小びんながら、この傳兵衛樣だ。

ト舞臺へ下りる。

伴之　ヤア。

ト愕りする。外の源太も愕り、思ひ入れ。

コレ、お俊。こりやマア、どういふ譯だ〳〵。

傳兵　どうも斷うも理窟は無い。高が、お俊がおれに惚れて、白藤が手を切りたがつても、この傳兵衛

ある事を聞いちやア、おいそれと退きもせず、切れ文も書かない事を知つて居るゆゑ、幸ひ、おれが方に折紙もあり、短刀も取れば、これも揃つて役に立つゆゑ、お身様をだしに使ひ、白藤ぐるめ一ぱいはめ、短刀に切れ文を、骨折らずに取つたのだ。なんと、うま〳〵した狂言か。

ト源太もハツと思ひ入れ。

伴之　ヤア〳〵。そんなら白藤ぐるめはめたのか。こりや大事だ〳〵。（ト立つたり居たり、氣を揉み）さういふ事なら、その短刀を

傳兵　ありやア元が盗み物。指でも附けると、盗人にして縛し上げるぞ。

伴之　ヤア〳〵。そんなら返してもくれないのか。

傳兵　これもみな、お俊が働き。

しゆ　子までなした源太さんにさへ、今まで切らぬこの指も、浮世の中の義理詰めに……イヤサ、お前の深切、白藤さんを突出して、退いたといふ證據のこの指。傳兵衛さん。

ト指と短刀を渡す。

傳兵　オヽ、短刀もろとも受取るからは、お俊

しゆ　疑ひ晴らして下さんせ。

伴之　ヤア、白藤が腹が立つ〳〵。おぬしも腹が立たう〳〵。こりやマア、どうせう〳〵。

ト是れを聞き、源太門口をズツと明け、内へ入る。

源太　ヤイ、お俊。今門口で聞いた事、ありや誠か、眞實か。

ト取りつくを突退け

しゆ　お前は何處へやら行かしやんしたと思うたに、立聞きしなさんしたら、是非がない。いかにも、あの通りぢや程に、お前も諦めて下さんせいなア。

源太　エヽ、そりや、その筈ぢやあるまいがな。

伴之　さうだ〳〵。モウ〳〵、腹が立つて、臓腑が沸え返つて、どうも斯うも、斯うもどうもならぬ。どうぞしてくれ〳〵。（ト立騒ぐ）。

源太　エヽ、やかましい。（ト撲り倒し）外の者なら、遣り事にかけても、默つて居ようが、おれも白藤、わりやそれで濟むかよ。

しゆ　濟まぬというて、どうするえ。

源太　イヤ、うぬ。

ト立上る所へ、お萱、抱き子を抱へ、走り出て、源太へ差しつける。合ひ方になる。

かや　コレ、源太どの。委細はあれで聞きました。腹が立たう、尤もぢや〳〵。

伴之　オヽ、尤も〳〵。尤も中の尤も頭だ。……コレ。お袋、様子を聞いたと云ふが、こなたは耳が聞えるかよ。

かや　サア、蟻の囁くまで聞え過ぎれど、藝者の母になつて居れば、どうの斯うのが面倒さ。三年あとの病氣から、聞えぬと云うては居れど、聞かにやならぬこの場の仕儀。イヤ娘、わりやいつの間に（ト傳兵衞を見て）といふも面目ない。……尤もハヤ、お客の座敷を勤める藝者、堅いばかりでもゆかず、事と品にとて寢るとやら、轉ぶとやらもあるこつちやさうなけれど、そりや外の藝者衆の事。其方ばかりは、コレ、この源太どの、色戀を離れ亭主分、好い事ばかりは無い商賣なりや、仕合せの悪い折々は、溜つた金の貢を受け、人の暮しはからくりもの、身上の尾を出さぬとなりや、拜んで居る白藤どの。殊に、斯ういふ子仲までありながら、おのれは、ようマア、今のやうな事が

ト腹立ち泣き。お俊もヂツとこなしあつて

しゆ　サア、そりやモウお前が言はいでも、汲み分けては居るけれど、言ふに言はれぬ（ト傳兵衞睨める。これにて）事も何にも無い。高が嫌になつて乘替へる氣。男がようて、金持ちの傳兵衞さん。母さ

ん、お前もこれから御隱居樣。樂んで居やしやんせいなア。

かや　エヽ、おのれはなア。

伴之　エヽ、おのれはなア。

ト立ちかゝるを

源太　ハテ、默つてござれ。

ト引据ゑる。傳兵衞思ひ入れあつて

傳兵　イヤ、默つて居ちやア事が解らない。突き出されたら、思ひ切つて、得心の挨拶して居候ふの當り前。きり／＼内を出て行かしやんせ。

しゆ　居候ふの當り前。きり／＼内を出て行かしやんせ。

かや　イヽヤ、そりやならぬ。親の詞も用ひぬからは、おのれ勘當してなりと、白藤どのは置かにやならぬ。出たくば、おのれ、出て行き居らう。

しゆ　出て行かいで。その勘當も、とうから待つて居たわいなア。……年寄りと古骨は、抱へて居る程、邪魔ぢやわいなア。

源太　エヽ、おれはおれとも思はうが、現在親にその頤。

ト立ちかゝるを、お萱留めて、抱き子を突きつけ

かや　コレ、斬つても飽足らぬ憎い奴ぢやが、可愛うござるこの子が。……あれを斬らば、こなたも死ぬ。

源太　生れながらの孤子に

かや　するも彼奴が心柄。エヽ、おのれはなア。（ト赤子泣き出す）。

しゆ　こりやモウどうも

ト堪へかね、寄らうとするを

傳兵　コレ、水離れを忘れたか。

かや　ハヽア。

ト抱き子を抱へ、泣く。源太思ひ切つたるこなしにて

源太　アヽ、恩も恨みもこれまでの、夢と思へば事は濟む。人に知られたこの白藤。心の腐つた女めに、未練な事はもう言はぬが、無ければならぬその短刀。なんと手切れにくれまいか。

傳兵　さう和らかに出りやア、おれも傳兵衞。短刀に折紙添へて

源太　くれたらお俊もくれてやらう。

傳兵　ソレ、改めて

トお俊へ渡す。

しゆ　あとで似せぢやと言はぬやう。

ト折紙も見せ、短刀も拔いて渡す。源太よく〳〵見て、鞘へをさめ

源太　しつかりと受取つた。

傳兵　男と男が齒と齒の切れ文。この切れ文は返して遣らう。

ト二階で書いた物を源太が懐へ入れるうち、中を割つて

伴之　その短刀を

ト二品へ立ちかゝるを、傳兵衞門口へ突き出し

傳兵　又泥坊になりたいか。

伴之　サア、それは

傳兵　一緒に歸るが、無事であらう。

伴之　ウム。

ト是非なく堪へろ。

傳兵　サア、お俊、駕籠は善八にいひつけて、廣小路に出來て居る。これから連立ち、向島の別莊。サア、出やれ。

ト お俊が手を無理に取つて、門口へ連れて出る。この内、暖簾口より勝次郎出かゝり居て

勝次 この短刀は、おれが兄貴へ

ト短刀と折紙を持つて、門口へ駈け出すを、傳兵衛引ッ捕へ、短刀と折紙を引ッたくる。この立廻りのうちに、傳兵衛眞の折紙を懐へ入れる。勝次郎、傳兵衛が懐へ手を突込み、以前の煙管筒と摺り物を二品と間違へ、摑み出すを、その儘内へ投げ込む。源太、勝次郎を引附ける。この立廻りに、勝次郎、以前の着物を落し置く。

傳兵 ソレ、短刀、折紙。持つて居るぞ

源太 女房と釣り替へ。動かつしやるな。

ト赤子泣き出す。

しゆ アレ、又、あの子が（ト思ひ入れ）。

傳兵 ハテ、もうおぬしの子ぢやァあるまい。

權助 男の子は男に附くと

かや 貰ひ乳でなと育てませう。

しゆ とはいへ、これが

傳兵　ハテ。（ト思ひ入れ）。

しゆ　義理は切ないものぢやなァ。

伴之　イヤ、呆れました。

ト不承々々に先に立ち、お俊心を殘すを、傳兵衛思ひ入れしい〳〵、連れて向うへ入る。

源太　こなたがこれを持つて駈け出すは、又外へくれる氣か。人殺しなり、女房去り、千辛萬苦もこの二品。兄御の事も思はつしやらぬか。

勝次　それだによつて

ト起き上つて、二品を見て

勝次　ヤア、こりや張り子の煙草筒に摺り物。

ト源太取つて

源太　まことに。……すりや、お俊と傳兵衛めに、また遣られたか。

かや　ヤア〳〵〳〵。（トうろ〳〵する）。

勝次　この捕り繩で二人の奴等を

ト最前の二筋の捕り繩を持つて駈け出すを、源太ちやつと留めるうち、路地よりお鳥出て來り、落ち

てある着物を拾ひ

とり　さてこそ人殺しの證據の着物。白藤、おのれを

ト源太にかゝるうち、勝次郎振り切つて一散に向うへ走り入る。源太お鳥を殴り倒す。よろ〳〵とな

り、有合ふ棕梠箒を取つてお萱に打つてかゝる。立廻り、四つの鐘。

源太　南無三、後夜。夜中までには、もう一時。

かや　行てござれ。

ト源太見事に尻をからげ、曲撥、時の鐘送り。源太一散に向うへ走り入る。舞臺はお萱、お鳥よろし

き見得にて、この道具をぶん廻す。

本舞臺、三間の間、三つ程並び土藏の、うしろ黑塗りの駒寄せ。下座の口、木戸、誂への道具に納る。

ト時の鐘、佃にて、花道より駕籠舁、垂れを下し、提灯を附けたる四つ手を擔ぎ出て來る。跡より

傳兵衞、以前の形にて、附いて出、舞臺へ來る。伴之進あとより駈けて、出て來り

伴之　オイ〳〵、そこへ行くのは傳兵衞ぢやないか。

トこれにて駕籠を立てる。

傳兵　さういふは伴之進どのか。

伴之　傳兵衛ならば、われを、

ト抜いて切りかける。これにて駕籠舁、アット逃げ込む。傳兵衛、伴之進が利腕を捕へ

傳兵　このおさぶは危ない。何をするのだ。

伴之　知れた事だ。この駕籠は慥かにお俊。短刀まで捲き上げられ、道で言ひ譯言はうと、藥研堀から一緒に出たを、廣小路の暗闇で、よくおれをまいて、つん逃げたな。ぬく〳〵お俊と添はさうか。破れかぶれだ、覺悟しろ。

ト振り解いて斬つてかゝるを、見得よく留め

傳兵　ヤレ、待たつしやい。女房子のあるこの傳兵衛。ナニ、あの藝者に迷ふものだ。お俊はこなたに遣る心。

伴之　なんと。

傳兵　サア、主持ちのこなた。お身樣が手を切らしては、向うが角力、後々の爲にならぬと、そこでおれにかづけて、緣を切らせ、こなたの所へ行かうと、お俊が皆頼んだわな。

伴之　ヤア。

傳兵　それ程、心中者に思はれるとは、こゝな畜生め。
伴之　それに又、おれが大切な短刀を遣らせたは。
傳兵　オツト、言ふまい。それもあの勝次郎めと、取り合ひのうち、摺り替へて、似せ物を渡し、まことはこゝに御座します。
ト短刀と折紙を提灯の側へ出す。伴之進見て
伴之　ほんに、こりや眞の短刀。ハテ、とんだ手品遣ひだな。
傳兵　この短刀にお俊を添へて、こなたに遣るが、嬉しいか。
伴之　イヤモウ、傳兵衛大明神、樣々々。ドレ、その短刀を
ト取らうとするを、此方へ持替へ
傳兵　オツト、この位な物、只ばならぬ。骨折賃の金と引替へ。
伴之　尤もだ。して、その高は。
傳兵　百五十兩。
伴之　イヤ、その金
傳兵　無いとは言はさぬ。持つて居る事知つて居る。

伴之　イヤサ、この金はどうも

傳兵　否ならおれも、マア否だ。

伴之　そんならどうでも

傳兵　金を渡すか。

伴之　サア

傳兵　サア〳〵。ハテ、離れ際の惡いお人だ。

伴之　アヽ、せう事が無い。ソレ、丁度百五十兩。

ト財布より出して渡す。傳兵衞取つて

傳兵　ソレ、改めて見さつしやい。

ト駕籠の垂れへ打込む。

勝次　月星の極印。紛失金に相違ない。

ト駕よりヌツと勝次郎出る。伴之進悔りして

伴之　ヤア。こりやお俊と思ひの外

勝次　オヽ、勝次郎だ。若氣の至りといひながら、おのれ等に煽てられ、これ迄の惡事、放埒。どんな天

魔の見入りでも、白藤夫婦が最前の、身を粉に碎く辛苦を見て、どう改めずに居られるものだ。

傳兵　この傳兵衞もお出入りゆゑ、いひつけたる盜人詮議。搗てゝ加へて白藤に、言ひ號けの上總のお澤。おれも遁れぬ緣といひ、里は大盡、白藤が、末の爲と心根の、不便な義理を柵に、言ひ聞かしてお俊に頼み、一旦緣切り、祝言させ、あとはどうとも捨て詞。やう〳〵お俊に得心させ、手切れの短刀鍔際で、摺り替へさせたも、この金を

勝次　其方に出させうため。お俊が手より五十兩、今又こゝに百五十兩。これで丁度二百金。

伴之　ヤア〳〵。そんなら殘らず言ひ合せか。

勝次　知れた事だ。こゝでこそ兄貴の捕り繩、役に立つた。引ッ括る。腕まはせ。

ト繩さばきする。

伴之　アヽコレ、その金を持つて居たとて、盜人の金借りまいものか。金藏へさへ入らねば

勝次　どつこい。さう言はせまい爲にこそ、最前取つたこの笄。（ト笄を出す）。

傳兵　御金藏に落ち散つたその片しは、コレこゝに。（ト同じく笄の片しを出し）これでも陳じ爭ふか。

伴之　サア、それは

三人　サア〳〵〳〵

勝次 なんと。
伴之 ムウ。……してお俊めは何處へやつた。
傳兵 知れた事。外の駕籠でおれが別莊。原庭へ四五日逗留。
勝次 してこの譯を白藤へは
傳兵 口上書きに認めて、切れ文と見せ、最前懷。あとで讀めば、得心する。
勝次 スリヤ、何もかも
傳兵 手都合、上首尾。

トばた／＼にて、向うより善八走り出て來り

善八 ヤア、傳兵衞樣。いま本所河岸でお俊樣の駕籠に逢つたら、先刻私が預つた、關取りの胴亂を、しやにむに浚つて一目散に、駈け出して行くへが知れぬが、ありやマアどういふ譯でござりませう。
傳兵 ヤア、そりや慥かに人殺しと、名乘つて出る氣か、但し、別れを悲しんで、死にゝでも行きはしないか。
勝善 ヤア。
傳兵 エヽ、コレ。後の思案も聞かず、早まつた女だなア。

善八　まだその上に廣小路で、役人衆がひそ〳〵と、話すを聞けば鬬取りを、縛れ、くゝれといふ噂。
勝次　すりや、白藤も
傳兵　サア、行くにも行かれぬ。こゝにも盜賊。
善八　その泥坊は善八が
伴之　そんならわれも
善八　矢ッ張り此方の内幕サ。
伴之　さう言や、うぬから
トかゝるを立廻りに、傳兵衛、伴之進を見事に四つ手へ打込み、垂れを下し、捕り繩にて括る。
勝次　これは。
傳兵　當座の牢輿。
勝次　出來ました。
傳兵　白藤、お俊が、跡も氣づかひ。（ト花道へかゝる）
勝次　ちつとも早く。
傳兵　コレ、駕籠を急がうぜえ。

勝次　やつとせ。

ト駕籠を舁き上げる。尻をからげる。佃騒ぎにて、

ト幕の外、矢張り佃にて、傳兵衛向うへ入る。あとシャギリ。

ひやうし幕

大切　道行の場

浄瑠璃　おしゆん白藤風誘鐘四竹　富本齋宮太夫連中

役名

潮田伴之進。船頭、長助。藝者、お俊。白藤源太。坂間傳兵衛。

本舞臺、下の方まで、一面の黒幕、柳の吊り枝。舞臺先きへ流れの浪板、芽吹き蘆のあしらひ、すべて石原、夜の景色。爰に白藤源太、尻からげ、一本差しの形、これを黒の捕り手四人にて、十手を構へ、取圍んで居る見得。寺鐘にて幕明く。

四人　動くな。

源太　待つた、お役人様。こりや何となされまする。
捕一　ヤア、吐すまい。おのれ、昨日、割り下水にて、權助と申す者を殺害の由。
捕二　即ち女房が訴人によつて、召捕りに向ひしところ、逐電ゆゑに手分けなし
捕三　この所にて見つけし上は
捕四　最早遁れぬ、白藤源太。
四人　尋常に、腕廻せ。
源太　成る程、露顯致せし上は、全く陳じは致しませぬが、ちつと仔細ござつて、只今は、どうも繩にはかゝれませぬ。暫しのうち、御宥免下されませうならば、此方より名乘つて出で、御刑罪を受けませう。何卒この儀、お聞き濟み
捕一　仔細あるにもせよ
捕二　見附けし科人、それなりに
捕三　見遁して置かうや。
捕四　無益な事を申さずと
四人　尋常に、腕廻せ。

源太　さう仰しやれば、是非に及ばず。お手向ひ致してなりと
四人　無法な奴め。腕剉せ。

ト四人一度に打つてかゝる。一つ鐘になり、源太一刀を抜いて、ちよつと立廻り、捕り手四人を向うへ追ひ込み、花道にて白刃を納め、ウム、と思ひ入れ。ゴーン、と時の鐘の頭を打込む。これにてチヨンと黒幕を切つて落す。向う椎の木屋敷の道具。下の方、齋宮太夫連中居並び、直ぐに浄瑠璃。

〽身を捨鐘と突きいだす、男の立端こゝかしこ、お俊が行くへ白藤は、見果てぬ夢の今更に破れかぶれとなりふりも、背の儘なる亂れあし、片葉の蘆の角芽ぐむ、心一圖に騒がれて、あと追ふ風の音さへも、もしやそれかと立ちどまり

トこれにて花道より舞臺へ戻り、よろしくあつて

源太　慥かにあのお俊めは、傳兵衞めとこの道へ、先きへ失せたか、但しは跡か。身に科のあるこの白藤、繩目の恥にかゝらぬうち、どうぞ彼奴をぶつ放し、返す刀に何奴も此奴も……マア何にしろ、傳兵衞めが、塒を尋ねて。オヽ、さうだ。

〽胸の曇りもおのれやれ、晴らさんものと息せきし、岸をあなたへ見覺えの、庵崎さしてぞ

ト三重、雨車の音になり、一散に下座へ入る。ト掠めたる時の鐘、雨車、すぐに浄瑠璃。

〽それぞとも、知らでぞ歩む夜の道、泪の雨と降りしきる、その春雨にしよんぼりと

トばた〳〵になり、向うよりお俊、大のしの番傘を中開きにして來り、花道にて

〽お俊はひとり濡れ羽鳥、干すかたも無き憂き事に、命一つを投げ島田、神ならぬ身は昨夜まで、變るまいぞと抱きしめて、嬉しの森の睦言も、今日は悲しの森となる、淺い緣の其なかに、あゝ羨まし女夫石、ならう事ならあのやうに、契りもかたう朽ちもせで、添はゞ心の竹町も、届かんものと女氣の、あとなき思ひ、行きなやむ。

トお俊、空を見上げて

しゆ　嬉しや、雨もやんださうな。白藤さんとやう〳〵で、言ひ替してから一年三年、兼松といふ嬰兒まで儲け、改めて祝言せねど、女夫の心で今日が日まで、睦まじう暮して居たも、いふにいはれぬ仕儀になり、今宵の體裁、白藤さん、さぞ憎かつたでござんせう。

〽その言ひ譯もしたけれど、いはれぬ義理と間違ひと、千代鶴とやらの短刀を、どうぞと思ふ心から、愛想づかしの有りじやうも〽心で泣いて〽死ぬ覺悟、さうとも知らず、亡き後の、四十九日も立たぬうち、傳兵衛さんが世話やいて

しゆ　あの

〽言ひ號けのお澤さんと、女夫は知れて居るけれど

しゆ 二世を

〽かけてと

しゆ 言はれたら

〽わたしや

しゆ あの世で

〽何とせう、死なぬうちからその事がと、袖にかこつぞ、哀れなり。

しゆ アヽ、なんほどのやうに思うたとて、死んでしまうたその後での事。それより早うぬしの代りに、石濱のお邸へ、人殺しと名乘つて行て、殺されたなら、可哀い事ぢやと、ぬしの口から一遍の、回向をしても下さんせう。そればつかりが樂しみとは、はかない事になつたわいの。……アヽ、何のこれも愚癡といふもの。未練殘さず、さうぢや。さうぢや。

〽出でゝ心を取り直す、空も朧の月影に、見えぬお俊を尋ねわび、氣も關取りはうろ〳〵と

ト これにて源太、下座より出て來り、お俊に行き合ひ、チヨンと月出る。源太、お俊を見て

源太 ヤ、お俊か。

しゆ　白藤さん。

源太　うぬを一遍尋ねて居た。

〽言ふ間も荒氣に、切り込む大刀。

しゆ　マア〳〵、待つて

〽潜りつ拔けつ〽遁しはせじと、捻ぢつけて、思ひ知れよと只一突き〽、刎ね退くはずみに、大地へぐつと、力に任せ、立つたる白刃〽お俊は落ち散る一通を、冴ゆる刃金の月あかり。

ト この立廻りのうち、源太が懷より中幕の一通落ちる。お俊捻ぢつけられた形にてこれを拾ひ取り

しゆ　白藤どのへ、坂間傳兵衞。

源太　何を。

ト白刃を拔かうとする。その手に縋つて

しゆ　サア〳〵〳〵。その腹立ちは尤もでござんす。尤もぢや。尤もぢやが、モシ、今お前の懷から、落ち散つたこの手紙。どうやら樣子のありさうな。マア〳〵〳〵、氣を鎭めて、ちやつとこれを

ト目先へ下より突きつけるを

源太　おのれが書いたその切れ文。見たくでもない、それよりは

ト又白状を取らうとする。お俊、手紙を持ちながら、その儘留める立廻り。

しゆ　モシ、それでも坂間傳兵衛と

源太　どうしたと。……（ト立廻り、源太フト手紙を見て）ナニ〳〵。「お澤こと我等母方の縁者にて、言ひ號けの其許を慕ひ……」こりやおれが切れ文とは……（ト思ひ入れ）、ハア、違うてあるには、何か樣子の（ト源太取り上げ）「其許を慕ひ、眼病となり候ふこと、あまり不便に候ふ折から、お俊こと、短刀の折紙を質に致し候ふ所へ附け入り、退ッ引きさせぬ義理詰めにて、相頼み、愛想つかしを致させねば、其許にもお俊を捨てゝ、お澤と夫婦にはなられまじくと、それゆゑ無理なる頼みにて、緣切らせ申し候ふ。」……ヤヽヽヽ。

しゆ　そりやわたしに傳兵衛さんが、頼ましやんした今日の入り譯、お前にさうと打明けては

源太　箆棒め。そんならさうと

しゆ　マア〳〵、あとを

源太　「一旦お俊と手を切り、お澤と祝言致され候ふ上にては、お俊が事、何となりと名をつけ、一緒に置き遣はし申すべく候ふと存じ候ふ。斯樣に申し候うても、似せ物の短刀を引替へ渡し候ふ我等ゆゑ、疑はるべく候はんなれども」……疑はねえでどうするものだ。折角手に入る短刀は似せ物。

しゆ　エヽ。

源太　それだによつて、おぬしも、こりやア、傳兵衛めにはめられたな。

しゆ　サア、どうもそれでは手紙の文體……ドレ、（ト取つて）「疑はるべく候へども、その儀は貴殿お世話なされ候ふ勝次郎どの身上にかゝりし、梅柳山寄附の金子、正しく伴之進が盗み候ふものと存じ候ふゆゑ、彼れに同心致し候ふ體に見せ、眞の短刀にて心をゆるさせ、盗賊の證據見出ださん爲に候へば、折紙諸共短刀は、慥かに所持致し候ふゆゑ、少しも氣遣ひ致されまじく候ふ。」

源太　ムウ。すりや、あの短刀にて、伴之進を、盗賊と見出ださうため……ドレ、……「且つ又、勝次郎どの事も、其許方の厚き志しを感じ、眞人間になられ候へども、これとても、伴之進に油斷させ、盗賊の證據見出だし候はゞ、心安う捕へん爲の、惡しき身持ちに候ふ間、さやう思し召し下され候ふ。右の段々、話したく候へども、伴之進心づき候ふては、首尾致し難く、それゆゑ、荒增し書面に認め申し候ふ。」オヽ。

しゆ　わたしも、これ程まで、傳兵衛さんの、御深切なといふ事を

源太　夢にも知らず、お俊、其方を犬畜生と思つて居た。堪忍してくれ。免してくれ。

しゆ　イエ／＼、愛想づかしの事ばかりぢやござんせぬ。わたしが手よりお邸へ、上げたお金の事より

して、勝次郎樣へお咎め。それもわたしがした科ゆゑ、言ひ譯と、一つには、添はれぬ縁の悲しさに、死ぬるこの身を人殺しに、なつてお前の命の代り、あの石濱のお邸へ、覺悟極めて死にゝ行く、わたしが心。白藤さん、さらばでござんす。

ト行かうとするを、源太その儘留め

源太　コレ、待て、お俊。

しゆ　イエ〳〵、この事言うては得心がと、それゆゑ獨り覺悟のわたし。留めずと離して（ト泣く）。

源太　コレサ、待ちやれよ。（ト引廻して）それ程おれを思つてくれる、志しは嬉しいが、人を殺したその科を、女にかぶせて、のめ〳〵と、生きて居さうなおれでも無い。その解死人と腹切つて、死ぬのは矢ッ張りこの白藤。あの頼母しい傳兵衞どのに、短刀の事、何もかも、世話の次手に皆任せて

しゆ　さういふお前の心なら、後に殘つてわたしばかり、迚も生きては居ぬ心。ならう事なら、一緒に死んで

源太　そりや斯うなつたら、互ひの因果。

しゆ　得心して下さんすか。

源太　明日は世間の笑ひ草。笑はれ次手に

しゆ　二人共々。さうして死ぬるは

源太　ハテ、死ぬ所はお定まり、田を三圍りの神過ぎて

しゆ　人白髭の、森の彼方。

ト、チヨンと月入る。源太思ひ入れあつて

源太　アヽ、定まり事であらうかい。

トこれにて淨瑠璃のうち、三圍の道具になる。

〽二人つれ立ち、道芝も、春の限りと山吹の、露重げなるその風情、外には知れぬ仇名草、浮氣な風に夜櫻の、船で散りゆく早歸り〽どうで此世で添はれぬならば、長い未來を樂しみに〽あれ、あの唄の心意氣、可愛らしいぢやないかいな〽此方も明日は極樂へ、二世の世帯の宿場入り、お内儀さんと言はれたら、絲道附いたこの指に、仕事覺えてなるたけは、手桶で水も汲み習ひ、地味な暮しがこれまでの、派手に増したる眞實の、女夫ぢやぞえと寄り添へば、〽よしないおれに繋がれて、京大阪の角力へも、連れ立つやうに喜ぶを思ひやる程猶更に、この白藤は人殺し、とても死なでは叶はぬ命、其方は老いの母もあり、殊に幼ないあの兼松。

源太　藁の上より、外人へ預けて、手鹽にかけぬさへあるに、二親が死んだなら、誰がはごくみ、育て

てくれう。

〽こゝの所を汲み分けて、後に殘つて坊主めを、見立てゝ母へも孝行が、死ぬよりこの身の喜びぞや。

源太 お俊、どうぞこの事聞き分けて、おぬしはこゝから歸つてくりやれ。頼んだぞ。

〽お俊はぢつと目に泪。そりや聞えぬぞえ、白藤さん、源太さん、いかに關取りさんぢやとて、力ばかりか心まで、そんなに強いものかいな、ほんに角力の噂にも、手取り〳〵と聞き馴れて、思ひ染めにしその日より、氣に癖ついて忘られず、どうぞお前と取り組んで、百手碎いて一度なと、投げの情けがあるならば、藝者冥利と茶斷ちして、願ひ願うたお庇にや、金輪奈落と言はしやんした、今際にひとり長らへて、女子の道が立つものか、一緒にやいのこれ、申し、拜みまするを取附いて、伏し沈むこそわりなけれ。

源太 アヽ、何とせう。せう事が無い。それ程までに言やる事なら

しゆ そんなら聞き分け、死出三途

源太 連れ立つていなうかえ。

しゆ エヽ、嬉しうござんすわいなア。……そんなら人目にかゝらぬうち

源太　死恥かくな。覺悟はよいか。

しゆ　とうから覺悟は

ト源太思ひ入れ。

源太　アヽまゝよ。

〽後の噂も白髭の、草葉に結ぶ花角力、既にこの世の土俵際、あやふい所へ傳兵衞が

トこの文句のうち、兩人身拵へして宜しくあつて、源太、白刃に手をかける所へ、向うより傳兵衞、尻からげ、一本差にて、短刀と折紙を持ち、走り出て來る。あとより長助附いて出て來る。

傳兵　お俊、白藤、早まるまいぞ。

しゆ　ヤア、傳兵衞さん。

源太　面目ない。

ト又死なうとするを、傳兵衞留めて

傳兵　ヤレ、死ぬにやア及ばぬ。委細は手紙で承知な筈。作之進めが、盜賊の、尻尾を捕へ、ぐる〳〵卷き。お邸へと思ふうち、駕籠を蹴破り何所へか逐電。今來る道の大川端、それと思へど、見遁したは、おぬし達を留めたいばつかり。あの侍ひさへ捕へて出せば、人殺しの科は、土水樣が、よ

しなに計らひ下さる由。そんなら死ぬにやァ及ばぬ白藤。ちつとも早く大川橋へ

源太　そんならお俊は、こなたに預けて

傳兵　オヽ。この二品と共にお俊は

しゆ　すりや、それが眞の

源太　禮はゆるりと、傳兵衞どの。

ト立上がる。この時

長助　白藤、うぬは人殺し。

トかゝるを源太投げ退ける。傳兵衞これを押へて

傳兵　こゝ構はずと

源太　合點だ。

ト禪のツトメになり、尻をからげ、向うへ一散に入る。長助刎ね退けて、ちやつと立廻り

長助　人殺しの白藤を、ふけらした坂間傳兵衞。その替りにやアお俊と一緒に、その二品をおれに渡せ。

傳兵　この野郎めが、いけふざけた。……お俊、おぬしはこれを大切に、あの寺島の立て場まで。

しゆ　心得ました。

長助　彼奴をやつちやア

トかゝるを傳兵衞引附けて

傳兵　早く行きやれ。

しゆ　アイ。

ト禪のツトメにて、お俊下座へ入る。

長助　白藤、お俊は逃がしても、その折紙は。（トかゝる）。

傳兵　何をしやアがる。

ト叩き退ける立廻り、どつこいと見得。これより誂への鳴り物にて、宜しくタテあつて、どつこいとなる。

〽團扇をいれて預りし、この心中の勝負附け、ぱつとその名や立ちぬらん。

トこれにてよろしく立廻つて、兩人見得。勢ひ三重になり、この道具をぶん廻す。

本舞臺、一面の波幕。眞中に屋根船の舳より正面を見せし飾り附け。團子提灯を掛け並べ、爰に源太、肌ぬぎ凜々しき拵へ。伴之進、中幕の形、船頭四人源太を圍み、皆々よろしき見得にて、道具と

まろ。

ト、ちやつと立廻つて

源太　いけ泥坊め。動きやアがるな。

伴之　某が盗賊より、白藤の人殺し。

船一　おいらが仲間へ隠まつた

船二　伴之進どのに指でも附けりやア

船三　人殺しの白藤源太。

船四　關取りでも煎鳥でも

船一　おいらが寄つてふん縛るぞ。

船二　ソレ、白藤を

一同　合點だ。

ト皆々源太へかゝる。好きキツカケに、誂への鳴り物になり、源太、この人數を相手に、大ダテいろいろあつて、トゞ下座より傳兵衛出て來り

傳兵　關取りか。

源太　お金(かね)の盜賊(たうぞく)、伴之進(はんのしん)。

ト伴之進(はんのしん)を引(ひ)きつける。

傳兵　出來(でき)たく。

まづ今日(こんにち)は、これぎり。

幕

大正十四年三月十七日印刷
大正十四年三月二十日發行

『大南北全集第三卷』　非賣品

校訂　坪内逍遙
編纂者　渥美清太郎

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者　上村新輔

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　博文館印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂

